KAIZO

改造

十二月號

創作特輯

特別附錄 文藝家總覽

1930



四十歳前後から五十歳代の保健常用剤として

アニマザ

血管の早老硬化を阻止す

小冊子『血壓の話』進呈す

アニマザは單なる血壓低下劑にあらず、四十—五十歳代の年齢に始まる早發性老衰現像に對し豫防劑として、及び老年期の保健劑として貴重なるものなり。

乃ち精神的並びに肉體的活力の早期減退に原因する症狀、例へば頭重、倦怠、眩暈、胸部の苦悶、動悸、耳鳴、不眠等はその連用により極めて愉快に消失す。

獨逸及び諸外國にかける過去十年の研究により、アニマザが心臟の負擔を輕減し、血管の彈力性を恢復して血液の巡行を円滑ならしむることを確認さる。就中『老衰』の初期症狀に對しては最も良き若返り劑とせらる。

特に肥滿型、多血質、飲酒家、美食家、頭腦過勞者、遺傳的中風素質者、梅毒・糖尿病又は腎臟炎の痼疾あるとき等の保健的常用劑として最も賞用せらる。

三〇錠…二円四十錢
一〇〇錠…六円八十錢
著名藥店にあり

總代理店
東京市日本橋區本町
株式會社 田邊元三郎商店

A 340



改造 十二月號 目次

臺灣蕃地畫報



日月潭 愈々起工に決した日月潭水力電氣工事が利用せんとしつゝある日月潭は、タイヤル蕃境界に近く海拔約二一八米面積約四平方粁水深平均僅か四米の老病孤愁の古潭である。山奥から水を導き水面を現在より約二六米高め此處を水源として二個の發電所を設け十萬キロワツトの電力を得たいといふ計畫だが、完成の日至らば杵舂と蠻歌に平和な水社化蕃の部落は水底に沒する運命となる。最近の反亂の原因が水電工事と關係あるやに傳へられたのもここにあるのであらう。



埔里街 台中市を發して南投に入り更に中央山脈に突入すること約六三粁で四顧濶達、禾雲穰る盆地の底に發達した小都邑であるが、蕃界及び日月潭方面と平野との交通上の要地で内地人の宿屋も二軒ある。氣候清澄、夏でも草露に女郎花が搖れ蟲の音が冴える。タイヤル族反亂に際して討伐隊の根據地、飛行機の着陸場であつた。この街には蕃人は殆んど住居してゐない。主として本島人である。



人止の關 埔里街の東北約二〇粁、霧社高原に入る關門で、斷崖迫る天嶮の要塞を作る。明治四十三年の大討伐にも最近の反亂にも蕃人はこゝを死守した。



パーラン社より霧社を望む 左方近くがパーラン社の蕃屋、前面の密林の中に霧社蕃童公學校がある。この密林の中で反亂の最初の聲が叫ばれたのだ。右方、十余町を隔てゝ霧社警察官駐在所が見える。遠く正面に二六六〇米の守城大山が雨雲に覆はれてゐる。

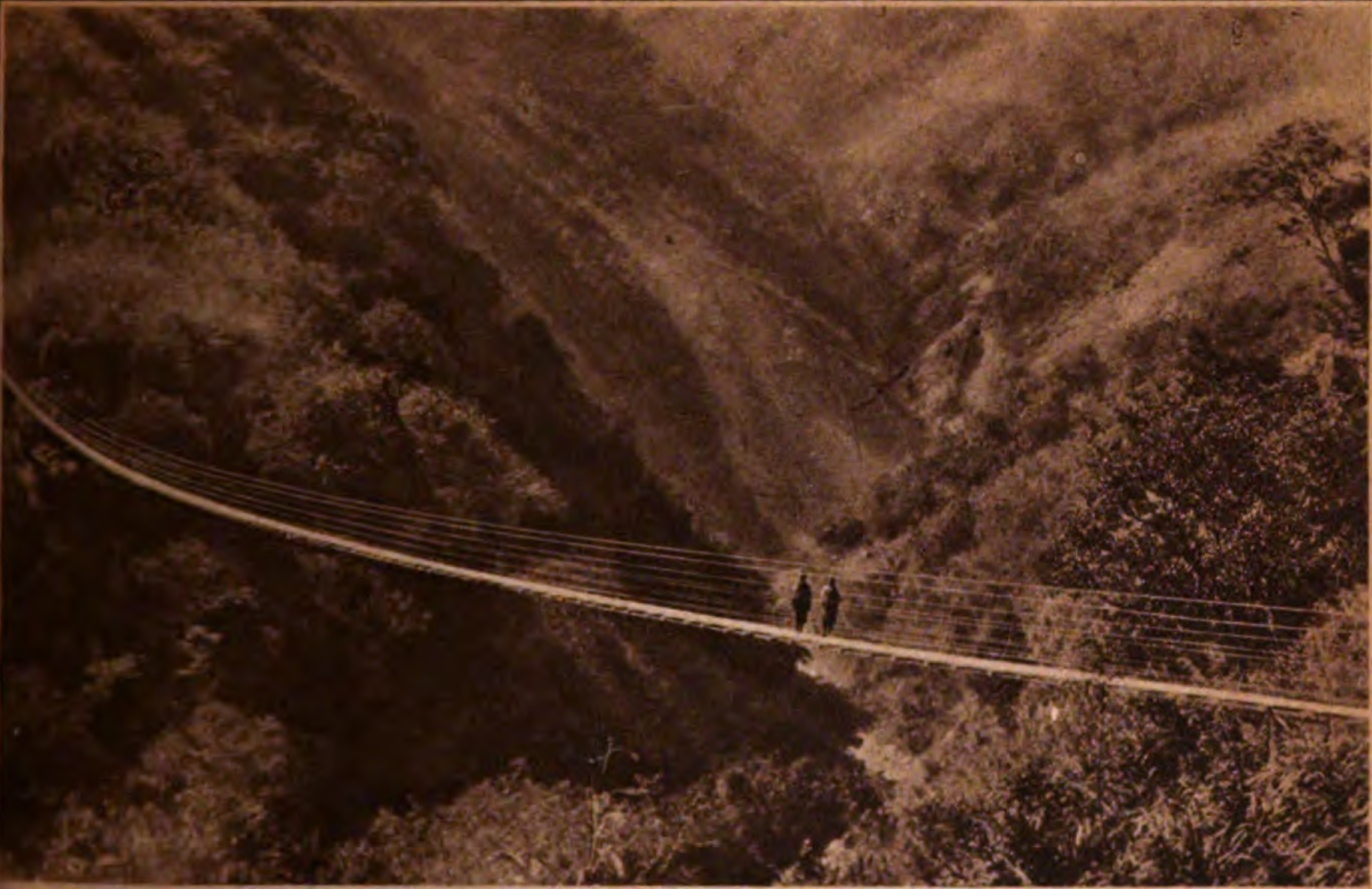
能高越道路 西方より霧社を突く討伐隊の主力と呼應して東方より敵の背後を衝つべく花蓮港警察隊はこの能高越道路の峻坂を急いだ。蕃界を横斷するには北に能高越道路、南に八通關道路あるのみ。右圖は海拔二九〇九米の能高駐在所附近から北に三三三四米の奇萊連山を望んだものである。中圖は同道路上から南に海拔三二五二米の能高山を眺む。





ビアナン鞍部警官駐在所（下圖） 討伐軍の第三隊は中央山脈の山稜及び山腹傳ひにビアナンを經て北方から霧社を突いた。標高一八七九米、駐在所は最も外側に電流を通じた鐵條網、窓下に砲彈よけの丸太を積み重ね蕃人の襲撃に備へてゐる。





ボアルン大鐵線橋　霧社高原から濁水溪に沿うて西へ、ホーゴー蕃社を通過するとやがて行手に虹の如き大釣橋を見る。長さ二一七米、高さ一〇六米、歩く度に上下に搖れる幅の狹い釣橋の上に立つて見下すと魂の縮む思ひがする。討伐隊の追擊を受けつゝ蕃人の一部は寫眞正面の濁水溪に沿うて南方へ退却したらしい。もちろん退却しつゝ彼等はこの橋を破壞したであらうと想像される。



マヘボ社全景　ボアルンを追はれた兇蕃の主力は最後にボアルンの南方なる低地マヘボ社に據つて必死の抵抗を試みた。寫眞はボアルン寄りの山腹から見下したマヘボ社である。周圍は鬱蒼たる大森林地帶で、若し彼等がこの地帶に潜入すれば討伐は不可能となり、持久戰によつて歸順を待つより他はないであらう。







タイヤル族の武器（上三圖）　この度反亂したボアルン及びホーゴー社の壯丁の武裝姿である。弓矢・槍は彼等自ら作るが銃器彈藥はもちろん支那系の本島人から貰ひ受ける。最近は戰鬪銃を以つて威力を示した。この姿で斷崖溪谷を山猿の如く驅驅する。



髑髏　馘首せる首級である。蕃人等はこれを守護神として或は威武を誇る戰利品として保存する。蕃社により保存方法を異にするが、概して獰猛な狩獵蕃族は屋外の樹間に懸けて守護神とし、農牧に從事する蕃族は棚或はかや葺の髑髏倉に保存して他人に對する威力の道具とする。圖はタイヤル族のボアルン蕃の髑髏である。





霧社蕃童公學校（上圖） 數人の警官を教師として日本語・圖畫・算術・書方・遊戲等を習つてゐる。學校から貸し與へられた赤い帽子を冠つて跣足で「牛若丸」を踊つてゐる無心な姿を見よ。彼等は戰亂の渦中に果して幾人生き殘つたであらう。

蕃人青年團（左圖）。能高山腹のタイヤル族の壯丁で、この寫眞は、我が軍隊の行進を驚異の眼を以つて凝視しつゝある場面である。彼等は此の度の反亂に主力部隊を爲し頑強に抵抗したのである。



タイヤル族の家屋 主としてかや葺か或は粘板岩の破片で屋根を作り、穀物倉は家屋と獨立して中央に、床を高くし猛獸の襲害を防いでゐる。柱は凡て丸木のまゝで、甚だ原始的である。共産的部落を爲すものもかなり存在する。寫眞中央の蕃人は談笑しつゝ弓の弦を張つてゐる。弓は武器であり又彼等の樂器でもある。



タイヤル蕃女の機織　蕃女が自ら紡いだ麻絲に交易所から買ひ求めた色とりどりの毛絲や木綿絲を織りこんで原始的な模樣を織出して行く。木をくり拔いた機織器具の胴は滾を打つ度に太鼓のやうに響いて、深山の幽寂を更に深くする。





ホーゴー社頭目の娘（上圖）　右は殺害された霧社駐在佐塚警部の妻の妹で左は同社勢力者の愛娘である。この地方は氣候溫和十月に入れば櫻花の蕾も綻び初め、收穫祭の賑ひを最後として全山白皚々の雪に包まれる。シーロンの唄を歌ひつゝ微笑し合つた彼女等の心に今日の運命が豫期されてゐたらうか。左下圖は赤間警部とボアルン社の婦女達で、赤間氏は發育せる蕃人パワンナウイ等によつて死地から救ひ出された。この社の女子百數十名は自殺したと新聞は報じてゐる。

蕃人の樂器（右圖）

彼等の樂器としては縦笛（寫眞の左）と嘴琴（右）の二種で縦笛は鼻で吹くことも出來る。各蕃社共、歌謠と云ふほどのものはなく部落に普通の會話を節面白く歌ふのである。また杵を石上に上下してその音を樂むこともある。







タイヤル族の食物

主として粟（あわ）を常食とし甘藷、里芋を混ずる。副食物として豆、黍、蜀黍、蔬菜、猪肉を食する。酒、煙草を好む。左上圖は霧社蕃ペアクン社の粟搗、右下圖はタイヤルの蕃方奥鳥蕃の家族の夕食である。

濱口首相の「行財政整理」聲明

濱口首相は十一月十一日豫算編成の結了と共に行政財政整理を聲明した。我々はその聲明中昭和四年度の十七億七千萬を十四億四千八百萬圓で纒め、三億二千萬圓を減額したことについては苦心の痕を認めるが、しかしその減額の内容を研討するとき俄に首肯のできないものがある。即ち十四億五千萬圓のうち國防費として、四億萬の巨額を計上して、何等陸海軍の根本的整理を斷行せず、繰延によつて辛ふじて辻褄を合せてゐる。我財政、經濟の行詰り、農漁村窮乏の現狀を見るとき誰か軍部にあまりに厚いのを難ぜぬものがあらふか。殊に濱口首相の聲明が抽象的にして、言一つも軍部整理に言及するところなきは大衆の失望するところである。我々は行財政整理の目的となるものは軍制の大改革によりて現在の費額の半部内外に輕減する具體案を提ぐるにあらずんば國民の共鳴に克ち得るの至難なるを思ふものである。ただ昭和七年度に於て半額にすることはむづかしいから大體に於て一億圓程度の減額を斷行すべきである。そしてその對象となるものは陸海軍の經常費である。就中陸軍の經常費を目標とするにはどうしてもその組織の斷然たる縮少に俟たねばならぬ。次に學制改革を斷行して文部豫算に一大斧鉞を加ふる餘地あるを信ず。現存の大學でも自然科學以外の諸分科の存置については充分の研究と考慮を拂ふ必要がある。何れにせよ行政制理、財政整理を斷行せんとせば先づ第一の對象となり得る軍防費に手をつけなければならぬことを斷言する。井上藏相は來年度の豫算編成に對して異常なる執着力を以つて、そして募債によらず、借入金によらずして推通した一貫した信念を今度は來々年度の軍防費大削減に向つて勇往すべきである。これ我國大衆の切實なる希望である。且つ濱口内閣が生き得る唯一の殘された道でもある。

自決すべき勞農黨



河上肇

一、まへおき

私は、昨年十一月一日および二日に開かれた勞農黨創立大會に參加することによつて、その一黨員となつたものだが、今年の同じく十一月一日および二日に開かれた勞農黨擴大中央執行委員會は、かねて常任委員會が吾々に向つて下してゐた除名處分を承認することによつて、吾々を黨外に追放した。大會で選出された役員でない私は、これをもつて自分に對するほど決定的な除名と見なしてよからう。かくて私は丁度滿一ケ年の間、勞農黨員としての生活をすごしたことになる。今この一ケ年を回顧するに、それは實に重大なる誤謬と犯罪との一ケ年であつた。勞農黨の結成そのものが既に重大なる誤謬と犯罪であるが

ゆゑに、その黨員としての吾々の活動もまた斯かるもの以外の何物ともなりえなかつたのだ。勞農黨の結成を主張しまた之に參加した人々の意圖は樣々であつたであらう。それらの人々の中には、極めて善良なる意圖のもとに何程か自身の生活を犧牲にせんと決意した人々も、少からずゐたであらう。だが、今の吾々にとつては、個々の個人の意圖・意識が問題なのではない。かゝることは絶對に問題たりえないのだ。たゞ勞農黨の存在――その組織および活動――が、勞働者農民の窮極的解放の見地から見て、客觀的に如何なる役割を演ずべく運命づけられてゐるかが、吾々にとつての問題の全體だ。

私は嘗てあらゆる非難攻撃をおかしつゝ、また友人の懇篤なる諫止をも無視しつゝ、この際爲さねばならぬことを爲さねばならぬとの確信から、勞農黨の結成に贊成したものであるが、今は當時と同じ確信をもつて、勞農黨の即時解體を主張することにおいて、勞農黨第一主義者の憤激と惡罵を浴びつゝ、敢て一歩をも讓らざる決意をもつてゐる。勞農黨員としての過去一ヶ年間の實踐を通じて、またその實踐に對する批判的反省を通じて、吾々は今、嘗ての吾々が完全なる誤謬を犯したのであつたと云ふことを、殘る隈なく確めえたのだ。吾々が今にして漸くかゝる認識に到達したと云ふことは、もちろん吾々にとつての大なる恥辱であるが、その恥辱を自ら曝露することは、當然吾々の蒙るべき制裁を先づ自らの手において加ふる所以ともなるであらう。吾々は今かゝる見地から、昨年十一月勞農黨を結成したことの誤謬および本年十一月勞農黨擴大中央執行委員會が勞農黨を一の純然たる勞農政黨として益々擴大强化するの方針を決定したことの誤謬を、一切の個人的意圖から離れて、客觀的に論證しようと思ふものである。

大山郁夫氏は、吾々に向つて、『彼等は昨日までの同志と昨日まで自ら屬してゐた勞農黨とに向つて、しきりに反動とか有害物とかの惡罵を浴びせかけつつ、自分免許的に、前衞中の前衞、指導者中の指導者の如き氣取方をして、盛んに革命的言辭を弄し、もつて已れ自らを高しとしてゐる』とか、『現實の日常鬪爭の場面からかけ離れた書齋の中から全無產階級に向つて號令しようとする』ものだとか、言つてゐられるが、（本部派の發行した勞働農民新聞第百二十三號十一月一日發行、）もし吾々が惡罵を浴びせかけ又は號令を發してゐるとするなら、それは吾

々が吾々自身に向つて惡罵を浴びせかけ、吾々自身に向つて號令を發してゐるに過ぎないのだ。吾々自身が互に深く反省せねばならぬ危機的瞬間にあたり、勞農黨の委員長たる大山氏が、黨員に向つて特に冷靜なる理論的反省を求めることの代りに、甚しきデマをとばして吾々の主張に對する一部黨員の反感を煽動するが如き態度を取られたることは、吾々の甚だ遺憾とするところだ。吾々は（上村、神道、河上の連署をもつて）勞農黨の戰鬪的解體を主張する一文を、十月二十一日發行の勞働農民新聞第百二十二號に發表するに當り、實際のところは次の如く斷り書きしてゐたのである。『吾々は既に（勞農黨の結成において）重大なる誤謬を――從つてまた重大なる階級的犯罪を――犯して來たものであることを十分に自覺してゐる。かゝる吾々は、理論的にまた實踐的にその誤謬を完全に淸算しをへた後でなければ、おそらく政治問題について發言權を有しえないであらう。たゞ今日まで勞農黨を維持して來たものとして、その後始末を果す責任内の發言を許されるものとすれば、吾々は勞農黨の戰鬪的解體を大衆的に討議に上すための一材料として次の如き提案を爲すであらう、云々。』吾々の斯かる態度が、大山氏によつては、『前衛中の前衛、指導者中の指導者の如き氣取方』をして、『全無産階級に號令しようとする』ものだと傳へられ、また勞農黨本部によつては『身を黨の責任ある地位におきながら、黨規を蹂躙し、何等黨員大衆に諮ることなく、自分の一存をもつて、勝手に、黨を破壞に導かんとするが如き非階級的行動』とされてゐるのである。デマゴーグは勞働者階級にとつて最惡の敵である。吾々はかゝる敵によつて吾々の記述が正當に理解されることから妨害されんことを恐れるがために、已むをえず先づ以上のことを前置としておく。もちろん吾々は今一定の確信に立つて物を言つてゐるのであるから、自然の勢ひ、何程かの客氣を示すことを免れないであらうが、讀者もし吾々の不遜を咎めることなくんば幸甚である。

二、敗北主義的産物としての勞農黨

昨年末における勞農黨の結成は、一昨年の三・一五事件と昨年の四・一六事件とによる前衛鬪士の大衆的逮捕によつて合法的場面にゐた人々の受けたショック――かゝるショックの産んだ一の敗北主義的産物である。（かゝるショックは、ある人々の

心には強き責任感を起したかも知れないし、またある人々の心には避けがたき恐怖の念を起したかも知れないが、そんな個人的意識を吾々がこゝで問題とするのでないと云ふことは、吾々の先きに述べておいたところである。)現に、最近勞農黨本部の決定した『勞農黨の本質の究明云々』と題する議案のうちにも、『なぜ勞農黨を樹立することが絶對に必要であつたか』といふことを説明して、『プロレタリアートの黨が、×の數度の强襲によつて、かなり徹底的に破壞され、指導黨としての任務を殆んど遂行しえないやうな狀態に在つたこと』を、その理由の第一に擧げてゐる。

ところが、今日から考へると、前衞黨が斯かる狀態にあつたればこそ、吾々が勞農黨といふが如き一個の勞農政黨を創立したのは、猶更過失であつたのだ。何故なら、一昨年のコミンテルン大會で決議された『植民地および半植民地における××運動に關するテーゼ』が明瞭に規定してゐる如く、『特別な勞農政黨は、たとひ或る時期には如何に×××性質をもつことがあらうとも、それは餘りにも容易に通常の小ブルヂョア的政黨に轉化するので、かゝる政黨を組織することは勸めるべきでない』からである。同じことを、右大會の席上において、テーゼ草案の起草者たるクーシネンは、次の如く述べた。『勞農政黨は餘りにも容易に小ブルヂョア的政黨に轉化し、××主義者の影響から離れ、××主義者と最も廣汎な勞役大衆とを接觸せしめることに殆んど役に立たぬものとなる。かゝる政黨を本當の×××に代位せしめんとするが如きは、絶對的に誤謬であらう。』勞農政黨といふものは、右の如き性質のものたることを免れえないのだ。すなはちそれは、たとひ×××が確立されてゐる場合でも、やゝもすれば×××の影響から離れ、從つて×××と大衆とを接觸せしめるためには、殆んど何の役にも立たぬのみか、むしろその妨害をなすところの、小ブルヂョア的政黨に轉化してしまふのだ。×××からの絶えざる働き掛けがあつてすら、なほ且つ斯かるものたることを免れないのが、勞農政黨一般の運命である以上、『プロレタリアートの黨が、×の數度の强襲によつて、かなり徹底的に破壞され、指導黨として任務を殆んど遂行しえないやうな狀態』のもとにおいては、それは猶更のことであるべきはずだ。勞農黨が結黨後一瞬間すらも×××性質をもちうることなしに、僅か一年間に完全なる小ブルヂョア的

政黨に固定化したことは、實は怪むに足らぬのだ。

◇

小ブルヂョア的政黨の特徴はどこにあるか？　それは、その活動が大體選擧と演説とに限定されるといふ點にある。勞働者は資本家に對立してをり、農民は地主に對立してをるが、小ブルヂョアは直接にはかゝる對立物に當面してゐない。そこで小ブルヂョアの政治運動は、直接には經濟鬪爭と結び付かないところの純政治鬪爭として現はれる。(從つて小ブルヂョア的見地からすれば、經濟鬪爭は組合で、政治鬪爭は政黨でといふやうに、經濟鬪爭と政治鬪爭とを切り離す形而上學的觀念が、生じる。謂はゆる勤勞階級を包容することによつて早くから小ブルヂョア的政黨に固定化した社民黨の幹部たちは、すでに斯かる觀念を『理論』にまで仕上げてゐる)。そして、直接には經濟鬪爭と結び付かないところの純政治鬪爭の典型的なものは、すなはち選擧（謂はゆる選擧鬪爭）および政治演説（謂はゆる演壇鬪爭）であり、それが合法主義者たちの謂ふところの『血みどろの戰ひ』であり、謂ふところの『大衆的鬪爭』の場面である。勞農黨も、勞農黨としては、結黨以來今日まで、これら二種の鬪爭以外には、殆んどこれぞと云ふほどの鬪爭をなしえてゐない。もしこれを疑ふ者があるならば、例へば勞農黨々首としての大山郁夫氏が、――同氏は他に職業を有せず、勞働組合または農民組合の役員でもなく、百パアセントの勞農黨員であり、その活動は純粹に勞農黨員としての活動を代表するのだが、――結黨以來今日まで、以上二種の鬪爭以外の如何なる鬪爭に時間を費したかを考へて見よ。

最近に開かれた勞農黨擴大中央委員會が可決したと稱する『解消問題に關する件』と題する議案は、徹頭徹尾『河上氏』または『河上氏等』をやつつけた文字から成り立つてゐるが、そのうちの（ト）と題するところは、以上述べた私の意見を『批判』したものである。試みにその一節全文を玆に引用しよう。

「氏は我が黨の黨員によつて展開されてゐる現實の大衆鬪爭にかつて一回も參加したことなく、否各地を廻つて黨の活動狀態を視察したことすらもなく、常に書齋裡にあつて何事かの「研究」に日を費してゐるのであるから、氏に現實の大衆鬪爭の狀態や我黨の戰鬪的精神やが判る筈がないのである。もつとも氏

はかう云つてゐる。——「現在の勞農黨が、勞農黨としては、選擧と演說との外に殆んど何等の活動をなしえざることは、何人も疑はざるところである。それは既に完全にブルヂョア政黨の範疇に入るべき小ブルヂョア政黨になり切つてゐる」と。——氏のこの考へ方こそ、最もよく書齋人の特色を發揮したものである。氏は勞農黨の活動といふものが、いつも常に勞農黨の名によつて展開されなければならないと考へてゐるらしいが、勞農黨の最重要の活動は、勞農黨の黨員が勞働組合、農民組合——もしくは樣々のカンパニア組織——等々の組織內において、黨の精神に從つて統一的に活動することにあるのであつて、決してブル政黨や社會民主主義政黨のやうに黨の名をふりかざして活動することにあるのではない。勿論、河上氏等のやうに、現實の大衆鬪爭から離れ、書齋裡にあつて、世界を表面的に眺めまはしてゐる人々にとつては、わが黨の黨員が組合內において如何に重要なる活動をなしてゐるかは、全く理解しえないことに相違ないのである。河上氏がわが黨の活動を選擧と演說以外にないと見てゐる所にこそ、氏の書齋人としての面目躍如としてゐるのではないか！　かくして我々は斷言する、氏の全議論の前提からしてが一個の全く小ブルヂョア的な頭の中で築き上げられた觀念論的獨斷であると。』

犬神つきの饒舌に似たこの議案は、到るところ、書齋人の故をもつて吾々に對する不信任を煽動してゐるが、そんなことは差當りどうでもよい。玆では、吾々はたゞ、この議案が『勞農黨の最重要の活動』としてゐるところの、『勞農黨の黨員の勞働組合、農民組合、等々の組織內における活動』は、實は組合員としての活動にすぎぬのであり、それらの組合員がたま〳〵勞農黨の黨員となつてゐるがためにのみ、（勞農黨本部の眼識からすれば、『世界を表面的に眺めまはしてゐる人々』に屬しない連中の眼には、）それが勞農黨の活動として映じるだけのことである。勞農黨第一主義者は、勞農黨をなくしてしまふと、これらの活動が同時にみな消えてなくなると心配するでもあらうが、實際のところは心配御無用だ。それらの活動は、勞農黨が存在してもしなくても、これまでに起つてゐたであらうところのものであり、將來もまた起りうるであらうところのものである。それ位のことは、組合で活動してゐる人々には夙くに分つてゐることであり、『書齋人』にすら分つてゐることだが、勞農黨第

一主義者には、どうしてもそれだけのことが理解されえないのであり、かくて自分等だけが『勞農黨の最重要の活動は、ブル政黨や社會民主主義政黨のやうに、黨の名をふりかざして活動することにあるのではない』と得意になつてゐるのである。

◇

なほ小ブルヂョア的政黨は、ブルヂョア的政黨の範疇に屬するものとして、不可避的に××に對立する。そこに小ブルジヨア的政黨に轉化した勞農政黨の今一つの特徴がある。

勞農黨本部の提出議案の一つである『勞農黨の本質の究明云々』と題するものの一節には、現に次の如く述べてある。――

『わが黨とプロレタリアート黨とは、全く對立してゐるやうなカツコウになつてゐる。だが我々は、さうした狀態が必ずしも不變的だとは考へてゐない。双方共に、勞働者農民無產市民の利益のために、眞面目に働いてゐるものとするならば、左翼陣營内にさうした馬鹿々々しい對立が長く續く筈がないのであるから。』

思ひ切つて反動的固定化への第一步を踏み出した勞農黨は、今や臆面もなく、みづから『プロレタリアート黨と全く對立してゐる』と公言して憚らぬやうになつた。公然プロレタリアート黨にかゝる對立を示しながら、なほ自分たちを『左翼陣營』に屬するものの如く言ひ觸らし、かくて『左翼陣營内にかうした馬鹿々々しい對立が長く續く筈がない』などと云ふに至つては、"これを馬鹿々々しいと云ふべきか、づう／＼しいと云ふべきか、殆んど形容に窮する次第である。大山郁夫氏は、吾々が『昨日までの同志と昨日まで自ら屬してゐた勞農黨とに向つて、しきりに反動とか有害物とかの惡罵を浴びせかける』ことに對し、『堪へがたき憤激』を感じるとのことだが、かうなり切つてしまつては、昨日までの同志といへども、吾々は今日以後これを敵とせざるをえない。實際のところクーシネンの言つた通り、『勞農政黨は餘りにも容易に小ブルヂョア的政黨に轉化し、××主義者の影響から離れ、××主義者と最も廣汎な勞役大衆とを接觸せしめることに殆んど役に立たぬものとなる』のだ。

◇

支那における國民黨の歷史は、餘りにもよく知られてゐる。しかしそれと同じやうな勞農政黨の破產は、その他の國々で次

ぎ次ぎに實驗されて來たのだ。ブラジルの經驗によれば、『勞農政黨は決定的な瞬間に×××に對立するものとなり、×××を攻撃する勞農政黨となつた』のだ。『ベンガルにおける勞農政黨の年大會の最近の報告書を見ても、黨は人道主義的な小ブルヂヨアジーの手に引渡された、といふことが分る。××主義者はそこで何等の機能をも有つてゐないのだ。』

かくの如き種類の經驗の集積によつて、××主義者は、——クーシネンの言葉によれば、——大衆獲得の組織形態として、勞農政黨は、勸めるべきものでないと云ふことを、『以前よりもより明瞭に』知つて來たのだ。そこで一昨年のコミンテルン大會では、若干の反對論があつたにも拘らず、勞農政黨の組織否認をそのテーゼのうちに確立したのである。吾々は、國際的プロレタリアートの鬪爭の諸經驗の結晶ともいふべきコミンテルンの決議を、簡單に無視し去るべきでない。そして吾々『書齋人』は、かゝる貴重なる經驗の結晶が坐ながら書籍を通じて知りえられることを、印刷術の發達に向つて感謝せねばならぬであらう。

たゞ吾々にとつて不幸であつたことは、一昨年コミンテルン政治部書記局の名をもつて公けにされた『××××當面の任務』（それには舊勞農黨の再建のためあらゆる努力をなすべしと、云ふ意見が示されてゐたが、吾々はそれを『マルクス主義』八月號で讀んだのであつた）を知つてゐただけで、右の指令が發せられてから間もなく、七月から九月へかけてのコミンテルン大會で、勞農政黨一般の否認に關するテーゼが決議されたことは、全く知らずにゐたことである。もちろん吾々が十分の注意を怠らずにゐたならば、昨年末勞農黨結成の當時には、詳細に以上の消息に通じえたのであるが、實際の事實をいへば、吾々の怠慢にもとづく無智が、吾々を避けうべかりし誤謬に陥れたのである。（一昨年のコミンテルン大會における『勞農政黨に關する討論』の主なる部分は、九月二十一日發行の勞働農民新聞第百十九號に掲載してある。）かくて吾々は、現在の如き段階における勞農政黨は、たとひ如何なる意圖をもつて結成されようとも、餘りにも容易に小ブルヂョア的政黨に轉化するものであることを、吾々自身の經驗を通じて學び取らねばならぬ無駄をしたのであつた。

◇

その上に、新勞農黨の結成に關しては、大なる一つの誤算があつた。それは、舊勞農黨はもはや再建(再生產)さるべきものでなかつたにも拘らず、吾々が新勞農黨を結成することによつて舊勞農黨を再建したかの如く思つたことである。舊勞農黨は、勞農政黨としては、極めて特殊の存在物であつた。この大衆的政黨のなかへ當時の前衛黨が流れ込んでゐたと云つてもよいほどに、それは前衛黨から極めて密接な指導を受けてゐた。それゆゑにそれは或る程度まで××的な性質をもち、到るところで果敢なる鬪爭を展開しえたのである。ところが新勞農黨は、あたかも舊勞農黨から一切の前衛鬪士と前衛黨からの一切の指導とをマイナスしたものに外ならぬのであるから、言はゞ舊勞農黨の殼を繼承したに過ぎない。かくて舊勞農黨に對する新勞農黨の關係は、マルクスの比喩を借れば、大ナポレオンに對する小ナポレオンの如きものである。これを日本に翻譯すれば、伊藤博文に對する伊藤博邦、板垣退助に對する板垣守正の如きものだと云ふことができよう。勞農黨が自負してゐる光輝ある傳統は、實は結黨の當時すでに中斷されてゐたのである。しかし、それにも拘らず、舊勞農黨が遺した精神的影響のおかげで、新勞農黨も創立當時には、主として未組織大衆の間に、淡然たる信用をもつてゐたのであるが、かゝる信用も、今となつては、日を追うて減退しつゝある。たゞ舊勞農黨の夢から醒めぬ人々のみが、燎原の火の如き勢をもつて勞農黨の旗が再び全國になびくに至るであらう日を、いつまでも空しく待ち望むばかりである。――ナポレオン一世は死んだのに、卒伍のみが再擧を計らうとしてゐる。これが今の勞農黨の姿だ!

◇

前衛黨の密接なる指導のもとに立つてゐた舊勞農黨が、その陣營から去り行くものをとらへて、裏切者と罵つた眞似をして、今の勞農黨が、自分を見棄て行く者を裏切者と罵るほど、コッケイなことはない。最近の勞農黨は『プロレタリアートの黨に對して全然對立してゐる』と自ら言つてゐるではないか。かくの如くプロレタリアートの黨に對立するものを、吾々は裏切者といふのだ。その裏切者を裏切ることは、階級的には裏切でも何んでもなく、正に吾々の階級的義務なのだ。

勞農黨はまたその解體を主張するものを敗北主義者と言つて罵つてゐる。大山郁夫氏は、吾々の主張した勞農黨の戰鬪的解

體論を『小ブル的敗北主義的解體論』だと言つてゐる。だが、この敗北主義者なる言葉も、裏切者といふ言葉と同じやうに、たゞプロレタリアート黨の立場からのみ正當に用ひられうるものだ。そして斯かる立場からすれば、元來勞農黨の結成そのものが敗北主義の產物に外ならなかつたのだ。三・一五事件および四・一六事件によつて××が大なる傷手を負うた際、大衆の關心を必要なことに向ける代りに、さしあたり可能なことに向けたのは、何んとしても客觀的には敗北主義の一つの現はれに外ならなかつたのだ。

×××の××××、そんなことは、大山郁夫氏の言葉によると、『公然の場面において現實に鬪爭の實践に從事してゐるものに出來よう筈がないことは當然すぎるほど當然である』かも知れないが、しかし自分が爲しえないからと云つて、自分に好都合な『鬪爭』場面を作るために、××な××に對立して××な××の邪魔をするやうな大衆運動を起すと云ふことは、絕對に誤謬である。もし本當に『血みどろの鬪爭』に沒頭しなければ自ら安んじえないと云ふのなら、文字通り血みどろの鬪爭に赴くがよし。もしそれが駄目だと云ふのなら、本當に血みどろの鬪爭をしてゐる人々の邪魔にならぬ陣地に身を移し、そこで何程かそれらの人々の助けとなるやうな分相應の仕事に全力を獻ぐべきである。第一線に立ちえないものは、輜重兵なり看護卒なりになるがよい。千軍萬馬を叱咤するやうな勢ひで自ら陣頭に立ちつゝ大衆を×のゐない方向に誘ふことは、――それは×に向はないのだから、當然に彈壓のない合法場面を展開しうるが、――その掛け聲が如何に勇ましからうと、客觀的には大衆を眞實の戰野から遠ざけることであり、それこそが立派な敗北主義を陣營内にまき散らすことになるのである。

それゆゑにコミンテルン西歐書記局は、今年總選擧の際、假借なく勞農黨をやつつけろと指令し、また近頃プロフインテルンの公けにした文書には『×の攻擊の前に勞働者をして××解除せしめた大山一派』等の文字を用ひてゐる。しかもなほ自ら反省することをなさず、最近の擴大中央執行委員會は、その聲明書の最後に『今こそお互に固く腕を組み合せて決死的に戰ひ進まうではないか』などと言ひ、大山氏もまた『お互にこの際、當面の難局に處して一歩をも誤ることなく、敢然として勞農黨の旗を現實鬪爭の渦卷の中に押し進めよう、そして將來、

目指された我黨の發展的解消の機運が成熟した曉には、胸も張りさけるまで歡呼の聲をあげて、全無產階級の解放の日への一步前進の完了を祝さう。その時までは、さア同志諸君！一層固く結束してわが勞農黨の擴大强化のためお互に決死的に戰はう！』と言つてゐる。なんとその掛聲の勇壯活潑なることよ。だが、もし許さるれば、失禮ながら吾々は次の如く質問せざるをえない、——諸君の『決死的』と、中學校の野球選手などの『決死的』と、果してどれだけの差異があるかと。

◇

合法的場面において何程か意義ある活動をなさんとする人々は、『無害な』（勞働者農民の窮極的解放といふ見地から見て無害な）方面におもむかねばならない。解放運動の第一線に立つて戰つてゐるかの如く自らも思ひ、他人にも思はせつゝ、しかも完全に合法的場面にとゞまつてゐたいと云ふやうな蟲の善いことを考へながら、如何にしても×××に對立するに至るを免れざる勞農政黨の擴大强化のため『決死的に戰はん』とするもの、かゝる連中こそ、その自惚が强いだけに、まことに始末に困る敗北主義的裏切者である。しかも彼等はしきりに戰鬪的といふ言葉を好む。已むなくば、吾々は彼等を名づけて、戰鬪的敗北主義者または戰鬪的裏切者と言ふであらう。

勞農黨は、吾々がそれを意識したと否とに拘らず、客觀的にはかゝる戰鬪的敗北主義者の集團たることを免れえなかつた。吾々は今深くそのことを反省するに至つたがゆゑに、速にこの集團を解體すべきことを主張するのだ。しかるに勞農黨第一主義者は頑として吾々の言ふところを聽かうともしない。かくて最近に開かれた勞農黨擴大中央委員會は、本部の思ひのまゝに代表の資格審査をなしながら、（例へば横濱では、その二三日前に支部聯合會擴大委員會を開き、十六對三の多數をもつて解消を決議したに拘らず、解消派のものは本部によつて一人も代表權を認められなかつたし、また京都からは、支部聯合會の書記長何部氏等が上京したが、やはり代表權を認められなかつた、そして金澤を除く外の解消贊成の府縣からは、わざ〳〵代表者を派遣するだけの手數を取らなかつたのだ）、また會場の入口で檢束された吾々をインテリの臆病者と嘲りつゝ、大多數をもつて解消反對を決議し、『我が擴大中央執行委員會はそれらの（黨內一部のインテリ諸君の）裏切的敗北主義者を潔く一蹴した』

旨の聲明書を發した。吾々は今、×××に對立することを公言して憚らないこれらの諸君から、『裏切的敗北主義者』として『一蹴』せられたことを名譽となし、それに對し『諸君、ありがたう』とお禮を申さうとする者である。

三、勞農黨存續論者の理論的無力

今、勞農黨は、その獨自の存在を主張すべき何等の理論的根據をもたないものになつてゐる。すでに私が他の二三の論文で說明したやうに、勞農黨は從來自らを『勞働者農民の戰闘的同盟』だと規定して來たのだが、近頃吾々の間における討論の結果として、勞農闘爭同盟の本質ならびにその組織形態が明かにされるや、現在の勞農黨がかゝる勞農闘爭同盟の實體を具へてゐないのは勿論のこと、たとひその組織を如何に改造するも、勞農黨そのものが將來斯かる闘爭同盟へ轉化することは、到底望なきことが明瞭になつた。そこで、この上とも勞農黨を維持して行かうとすれば、これをもつて一の純然たる勞農政黨となすより外に道はなくなつたのだが、しかしさうすると、社民黨や大衆黨との區別がつかなくなり、何故に勞農黨獨自の存在が必要であるかの說明ができなくなる。もちろん前から言ひ來つた通りに、社民黨や大衆黨は社會民主主義の黨であるが、勞農黨だけはさうではない、といふやうなことが言へぬではない。だが、實際には自分自身が社會民主主義者たるべく運命づけられてをりながら、(現に自分自身の口で、×××とは全然對立してゐると言つてゐる、)しかも自分自身を社會民主主義者から區別しようとすることは、本當には不可能である。だから、そこのところは何んとかして善い加減にごまかしておく外はない。そこで最近の擴大中央執行委員會に提出された議案には、『勞農黨の社會民主主義政黨への固定化は、左の諸原因によつて斷じて不可能である』とて、次の如き奇妙なことを列擧せざるをえざるに至つた。『一、大衆の左翼化。二、將來確立されるであらうところのプロレタリアート黨の影響。三、指導者の意識的努力。』ところで言ふまでもないことだが、大衆の左翼化だの、プロレタリアート黨の影響だのいふことは、勞農黨の獨占物とはなりえない。もしそんなことのために勞農黨の社會民主主義的政黨への固定化が斷じて不可能なら、社民黨でも大衆黨でも、それが社會民主主義的政黨へ固定化することは、同じやうに

『斷じて不可能』であらう。それはさうだが、たゞ最後の『指導者の意識的努力』といふものだけは、我が勞農黨の獨占物たらざるをえない、――勞農黨第一主義者は或ひは斯樣に言ふかも知れないが、しかしたとひ勞農黨にどんな偉い指導者がゐるにしても、組織を離れてそれら指導者の意識が貫徹するものでない。社民黨や大衆黨と本質的には同じ組織をもち、勞働者、農民、無產市民といふ雜多な分子を包容しながら、すなはち小ブルジョア的グループの特徵たる斯かる基礎の上に黨の組織を打ち建てながら、それを社會民主主義的なものに轉化せしめないと云ふことは、プロレタリアート黨の强力なる影響が絶えず行はれてゐても不可能なことだし、たとひ有力な××主義者でも斯かる黨の中では何等の機能をも有ちえなくなるのが原則であるのに、どうして勞農黨の『指導者』たちは、かゝる不可能なことを爲し遂げうると云ふのか。そんなことは眞面目になつて論難するほどのことでもあるまい。

◇

勞農黨第一主義者は自ら社會民主主義者たるべく運命づけられながら、しかも社會民主主義者と戰ふと云ふことを看板にしなければならぬために、彼等が如何に理論的に破產してゐるかは、以上の一例が示す如くであるが、さすがに彼等も自分たちの理論的無力を感づかずにはゐられない。だから彼等は何物よりも理論を恐れる。そして、その理論に對する恐怖を、彼等は理論に對する輕蔑の形態で表現する。私は一二の見本を左に示さう。

『解消運動は、決して解消派の諸君がいふやうに戰鬪的勞働者農民大衆の底からモリ〳〵とまき起つたものではなく、一部のインテリ諸君とその雷同者たちとの無責任なる觀念の遊戲の產物として現はれたものである。』（九月十一日發行、勞働農民新聞第百十八號、大山郁夫氏）

『氏等は世界を樣々に解釋する哲學者の態度において、頭のなかであれこれの理論を捏ねあげうる地位にあるがゆゑに、現實の實踐とは沒交涉に、勝手次第に革命家氣取りの熱をふき、云々』（本部派の發行した勞働農民新聞第百二十三號、大山郁夫氏）

最近の勞農黨擴大中央執行委員會が可決した『解消問題に關する件』と題する議案が、如何に吾々を『書齋人』としてこき

おろしてゐるかは、前に掲げたから茲には略さう。

吾々はもちろんインテリの大部分が實際の鬪爭のため役に立たぬことを否認するものではないが、しかしここでの問題は、勞農黨本部が『インテリ』だの、『書齋人』だの、『觀念の遊戲』だのと言つて、できるだけ理論に對する不信用を煽動しなければ、彼等は自身の理論的不安をおさへて行けない狀態にあると云ふことだ。彼等のかゝる態度と比較して、レーニンの『何を爲すべきか』からの次の抄錄を讀め！

『××的理論なくして、何の××的運動ぞや。實際行動とさへ云へば、その最もケチな形態のものに對してすら夢中になるやうな風潮が日和見主義の宣傳と步調を揃へて進んでゐるといふ時代においては、この思想をいくら主張しても、主張しすぎるやうなことはないであらう。』

『××××的意識は、ひとへに外部からのみ勞働者にもたらしうるものである。萬國の歷史は次のことを示してゐる——すなはち勞働者階級は、それ自身の力にのみ委ねられては、單にトレード・ユニオズム的意識にしか到達しえない、換言せば、組合に團結し、雇主に對する鬪爭を行ひ、必要な一定の法律を政府に要求しなければならぬなどいふ確信にしか到達しえない。しかるに、社會主義學說はどうかと云ふに、それは所有階級中のある代表者すなはち智識階級によつて作り上げられた哲學、史學、經濟學等の理論より生れ出でたものである。その社會的地位からいへば、近代の科學的社會主義の創設者たるマルクスおよびエンゲルスはブルジョア智識階級であつた。同樣にロシアにおいても社會民主主義學說（今日の言葉では共產主義學說）は、勞働者運動の自然成長的發育とは、獨立に發生したのであつた。』

『右に述べたところを補足するために、オーストリア社會民主黨の新綱領草案に關する、カウツキーの此の上もなく正しい言葉を引用しよう。——學說としての社會主義は、プロレタリアートの階級鬪爭と同樣に、明かに現代の經濟關係のうちにその根源を有してゐる。プロレタリアートの階級鬪爭と同じやうに、社會主義は資本主義によつて生み出された大衆の貧困に對する鬪爭から發生する。しかしながら、社會主義と階級鬪爭とは平行して現はれるのであり、一方が他方を產み出すのでは決してない。それらはそれ〴〵異つた前提から生れ出づるのであ

る。現代の社會主義的意識は、深遠なる科學の基礎の上に立つてのみ、始めて成立しうる。……科學の所有者はプロレタリアートではなくして、ブルジョア智識階級である。現代社會主義が生れたのは、かゝる範疇に屬する若干の個人の頭腦のうちにおいてである。そして彼等によつてこの社會主義は、智識的に最も進歩せるプロレタリアたちに傳達され、後者は更に之を、條件の許すかぎり、プロレタリアートの階級鬪爭の中へ持ち込んだのである。故に社會主義的意識なるものは、プロレタリアートの階級鬪爭の中へ外部からもたらされた一要素であつて、自然成長的に發生した何物でもないのである』（以上木下半治氏譯本、二八、五四、五五頁より引用）

　大山氏のいふところを見れば、勞農黨解消論は『戰鬪的勞働者農民大衆の底からモリ〳〵とまき起つたもの』でないから駄目だと云ふ風に見えるが、そんな風に大衆の底からモリ〳〵と何事かがまき起つてからでなければ、指導者は動かないと云ふのなら、折角勞農黨本部が大切なものに祭り上げてゐる『指導者の意識的努力』といふものが何處かへ消え去ることになるであらう。大衆の自然成長的意識への無條件的屈服は、『理論的思想の發達に關する無關心』を意味するものに外ならぬ。かゝる傾向をインテリ排斥の名において助長することは、一の罪惡でなければならぬ。況んや實際においては、解消問題は大衆の底から實にモリ〳〵と起つてゐるのであり、勞農黨本部はたゞ厄鬼になつて反動的に之をおさへつけようとしてゐるにおいてをや。

◇

　吾々がすでに期せずして言及したやうに、理論無視の結果は當然に大衆追隨主義となる。しかも大衆追隨主義は大衆の近視眼的な要求におもねることによつて、客觀的にはその窮極の利益を裏切るものとならざるをえないのである。と云ふわけは、大衆の自然成長的な意識は、眼前の小利害の外に出でない。例へば賃銀値下反對、解雇反對、等々が、その要求するところの差し當つての鬪爭であり、これを自然の成行に放任するならば、その鬪爭は謂はゆるゲリラ戰の外に出でない。しかも吾々が斯かるゲリラ戰にのみ沒頭してしまふならば、マルクスがつとに警告しておいた通り、勞働者階級は全般的に失敗するの外はなく、その解放は永久に望みなきものとなるのである。

階級全體の利益、次の世代の利益、そんなことは、日々の生活に追はれてゐる普通の勞働者の問題とはなりえない。また、たとひそれを問題としたところで、勞働者階級全體の解放、農民階級全體の解放のために、如何なる戰ひが不可避的に吾々の上に課せられてゐるかの問題に對する眞實の解答は、單なる常識からは決して生まれて來ないのだ。それは、レーニンの言葉によれば『所有階級中のある代表者すなはち智識階級によつて作り上げられた哲學、史學、經濟學等の理論から生まれ出たものである。』吾々はかゝる理論を吾々の實踐に移すことによつて、始めて××から吾々自身を解放することが出來ると同時に、その××を失ふことによつて全世界を得ることが出來るのだ。

しかも奴隸の××は奴隸の主人の××を意味する。だからブルヂョアジーは、××的な理論がプロレタリア階級の間に持ち込まれることを極度に恐れる。だからまた、レーニンの言葉によれば、どこの國のブルヂョアジーも、『ビタ一錢でも、××主義全體よりは善いものに思ひ込んでゐる勞働者たち』の自然成長的意識をそのまゝに維持し、『遠い未來のゼネレーションのためにではなく、自分自身のために、自分の子供たちのために、「鬪爭」しなければならぬと思ひ込んでゐる勞働者たち』の日常的要求をそのまゝに利用することに、懸命の努力をする。

このことをさへハツキリと意識したならば、大衆の自然成長的な要求をそのまゝに取り上げ、これがために戰ふこと（そしてそれ以上に出でざること）をもつて、大衆の命によつて大衆のために戰ふことだと觀念してゐる人々は、客觀的には、かのブルジョアジーのために戰ふ『社會政策家』――改良主義者、社會民主主義者、反動家――の埒外に出るものでないと云ふことが、始めてハツキリするであらう。これ吾々が、かの徒に理論に對する輕蔑、不信、反感を煽動することによつて、大衆の自然成長的意識に追隨せんとする者を、斷乎として排撃せざるをえざる所以である。

◇

大衆追隨主義者は當然に日常鬪爭主義者となる。そして斯かる日常鬪爭の見地から、多くの人々は勞働者、農民、無産市民を一個の政黨に組織することの必要を主張してゐるのであり、勞農黨第一主義者もまた實はかゝる見地から勞働黨存續の必要を

『確信』しつゝあるのである。

昨年二月、雜誌『勞農』において、山川均氏は次の如く述べた。

『一方においては、勞働者と農民とその他の無產者および準無產者的分子、他方においては、これらの社會層のうちの政治的意識の發展階級を異にする諸要素を、單一な政治勢力として階級的に結合することのできる唯一の基礎は、これらの諸要素が反資本主義的勢力として作用するといふ共通の一性質ないしは一側面を有するといふ事實にある。……階級的な單一無產政黨は、……勞働者と農民とその他の無產者および準無產者分子が反ブルヂョア的勢力として共同戰線に立ち得る限りにおいてのみ可能なものである。そしてこの共同戰線は、現實な政治的利益にもとづく鬪爭の範圍においてのみ可能である。』

吾々の見るところによれば、多かれ少かれ右に類似した見解が、我國では今日廣く行はれてをり、これが謂はゆる『無產政黨』の理論的基礎となつてゐる。この見解にあつては、當面『反資本主義的勢力として作用する』一切の諸要素を、それらが反資本主義的勢力として作用しうる限度と範圍内において、一個の政黨に――しかもその活動は資本主義の埒内に止まり、それゆえにそれは合法性を保ちうるところの、一個の政黨に――組織すると云ふことだけが考へられてをり、そして、これ以上のことが考へられてゐない。それがこの見解の根本的特徵である。

勞農黨存續論者は、今や以上の如き山川イズムの門弟となりつゝあるのである。吾々が斯く言へば、彼等はもちろん否と言ふに相違ない。勞農黨本部の議案の一節には、現に次の如く述べてある。『一部の諸君――特に雜誌勞農一派の諸君――は、「我國においてはプロレタリアート黨の外にそれとは別個の勞農政黨を作ることが絕對に必要だ」と主張してゐるが、我々はさうは考へない。我々は當面の特殊な客觀的情勢の下においてこそ、わが勞農黨の如き特殊の勞農政黨の存在が絕對に必要だと考へてゐるのであるが、しかし如何なる場合にも勞農政黨が絕對に必要だとは、決して考へてはゐない。』いつ來るか分らない遠い將來のことなら、ブルヂョアジーでもプロレタリアートの解放を約束するであらう。雜誌『勞農』も、遠き將來まで勞農政黨が『絕對に必要だ』と言ひ張るわけでもあるまい。こゝ

まで來たら、もはや相當の所で双方とも握手したまへ。勞農黨々首は大衆黨々首と大衆の面前で握手することを、もはや躊躇しないだけの度胸をもつてゐるのであらうから。

以上の如き山川イズムは何故排斥されねばならぬか？　それは外でもない、『勞働者階級の政治的に後れた部分にとつては、日常鬪爭ならびに經濟上の諸衝突に際し提出される個々の具體的諸要求が、資本主義的搾取の束縛からの××な××的な××のための鬪爭を見失ふに至らしめる』危險が絶えず存在するのであるが、從つてまた斯かる危險の防止こそ極めて大切なのであるが、山川イズムによる無産政黨は正にかかる危險を増大するゆゑんのものに外ならぬのであるから。かくの如きは、左翼的小兒病に對立するところの右翼的小兒病としての經濟主義の發現に外ならない。

私は以上の理由を明白にせんがために、最近『有害物としての勞農政黨』と題する單獨の刷物を非賣品として頒たうとしたが、それはその筋から押收された。次いでこれに數多くの伏字をして、それを勞働農民新聞に掲載したが、それもまた發賣禁止となつた。勞農政黨××××を説くことは、××××××××××××『××』だと見える。從つて私は今この雜誌において、それらのことを詳論することが出來ぬ。たゞ最近勞農黨擴大中央委員會が可決した『解消問題に關する件』と題する議案は、その全文を擧げて右の拙稿を攻撃したものであるが、その中には卑見に對する甚しき曲解があるがゆゑに、その點についてだけ一言しておかう。

私の論文は、その副題を『勞農政黨の指導する日常鬪爭は、勞働者農民の×××解放のための妨害物である』としてゐるによつても明かなやうに、大衆の自然發生的な日常鬪爭の中へ勞農政黨が出しや張つて、それを改良主義的に指導することを有害であると斷定したのであつて、大衆の日常鬪爭そのものを排斥したのでないことは、言ふまでもない。大衆の日常鬪爭そのものを排斥すると言ふやうなことは、元來考へうべからざることである。しかるに勞農黨本部は、私がかゝる考へうべからざることを主張してゐるかの如く曲解してゐる。その一二の例を示さう。

『尨大なる大衆の中から卷き起る自然發生的鬪爭は、改良主義的鬪爭である。例へば賃銀の値上げ、小作料の輕減、家賃、ガ

ス、水道料の値下げ、等々の經濟的要求に基づく鬪爭がそれだ。これらの鬪爭は河上氏がそれを要求すると否とに拘らず、否、河上氏がいくらそれを欲しなくとも、隨所に卷き上つて來るのだ。勞働者農民大衆にとつては、鬪爭をやめることは餓死を選ぶことになるのだ。』

『河上氏は、現在我國において全國各地に捲き起つてゐる勞働爭議、小作爭議の殆んど全部を排擊することを、新たに使命とされるに至つたのだ。河上氏のこの勇敢なる意圖に對して先づ第一に手を打つて喜ぶのは、資本家地主であり、その政府だ』

苟くも一個の全國的政黨ともあらうものが、恥氣もなく斯かる議案を中央委員會に提出せざるをえなかつたほどに、勞農黨本部は解消問題に對して氣を顚倒させたのだ。

かくて右の議案はさん〳〵に私をやつつけた後に、正しき見解は次の如くでなければならぬと主張してゐる。

『我々が排擊し極力鬪はなければならないのは、大衆の自然發生的鬪爭に對する社會民主主義者の改良主義的指導であつて、大衆の自然發生的鬪爭そのものでは斷じてないのだ。』

なんだ！　私はかゝることをこそ主張するために、あの一文を草してゐるのだ。相手の主張をさん〳〵に曲解しておいて、——しかも相手の本來の主張を自分のものにして平氣な顏をしてゐる此の珍妙な議案は、その珍妙さの故に永く博物館に保存される價値があらう。そればかりではない、自分自身が立派な社會民主主義者に轉化してをりながら、『我々が排擊し極力鬪はなければならないのは、大衆の自然發生的鬪爭に對する社會民主主義者の改良主義的指導である』などと見得を切つてゐるところも、その珍妙さにおいて正に天下一品だ。コミンテルンからは假借なき排擊を宣告され、プロフインテルンからは『×の攻擊の前に勞働者をして××解除をなさしめた「左翼」社會民主主義者』と刻印づけられ、なほ自分自身も『プロレタリアート黨と全然對立したカツコウになつてゐる』と公言しながら、なほ且つ自らをマルクス主義者であつて社會民主主義者ではないと自惚れてゐるのであらうか？　かうなつては殆んど附ける藥もない。左樣なら、勞農黨。僕は永久にお前と分れる。お前は何處へ行く？　別れに臨んで最後の苦言を呈するが、一日も早く大衆黨へ嫁入したまへ。自殺の機會を失つて野たれ死にすることなくんば幸である。

河上博士の「理論」

所謂『戰鬪的解體論』の正體

大山郁夫

前篇　事件の經過と河上氏等の態度の批判

一　氏等は如何に同志の信賴を裏切つたか？

それは十月二十日の夜のことであつた。私たち數名の勞農黨常任委員の一行は、關西遊說の途上、京都の三條青年會館に於けるわが黨支部主催の演說會を濟ませた後、同市の或る同志の厚意により、その家の一室に泊めて貰ふことになつて、夜半すぎに始めて疲れた體を寢床の上に橫へた。

それから一二時間も眠つたかとおぼしき頃、私達の夢は突如として、某新聞社の通信員の來訪によつて破られた。要件を聞けば、『東京では河上、上村、神道の三氏が勞農黨即時解散の主張を黨の機關紙に發表したとのことだが、それに對する私（大山）の意見はどうか？』といふのであつた。それは私たちには、文字通りに寢耳に水であつた。私たちは餘りにも意外のことに、暫らくは、唯呆然として言ふところを知らず、半信半疑の眼をこすつてゐるより外はなかつたが、やがて私は、『事件の眞相が判明するまでは、私の意見を言ふことが出來ない』と答へて、とにかくその通信員を歸した。

事件の眞相は、——少くともその輪廓だけは、——翌朝の新聞記事で私たちに略々明かになつた。私たちは、ヘンに結ぼれて解けない心を懷いたまゝ、午前中の汽車に乘つて神戶に向つた。

その日午後、神戶で黨員たちの一團に迎へられて私たちには

馴染の深いその地の或る同志の家に腰をおろし、それらの黨員たちと共に打ちくつろいで、互に一別以來の挨拶を述べたり、種々の懇談を交はしたりしてゐたが、問題の中心點は、ともすれば河上氏等の解消意見と氏等の態度との批判の上に移つて行きがちであつた。

　そのうちに、到着したばかりの『勞働農民新聞』――黨機關紙――の一部が私の手に渡された。私は、躍る心を抑へて靜かにそれを受け取り、まづ第一着にその第四面の上に眼をおとした。無論、私の注意の全部は、そこに印刷されてある『勞農黨の發展的解消のために殘された唯一の途としての戰闘的解體』と題する河上、上村、神道、三氏連帶署名の聲明書の上に奪はれて行つた。

　私は絶えず私に向けられる同志たちの言葉に種々に受け應へしながら、私の眼を慌たゞしくその聲明書の各行の上に走らせて、一字一句をも漏らさず通讀した。そして漸く全部讀み終つたとき、私は思はず深い溜息をついて、私の心にかう囁いた。

『我々全黨員は、我々が今が今まで全幅的に信頼し切つてゐたそれらの三人の同志によつて、かくも深刻に裏切られたのか！』

　瞬間に或る限りなき失望感が私の胸に込みあげて來たが、それは次第次第に抑へがたき憤激に變はつて行つた。

　だが、さうした發作に襲はれたのは、私一人ではなかつた。そこに居合はせた同志たちは、皆一齊に毛髪を逆立てた。そればかりでなく、少し後になつてのことだが、その夜の演説會に於て、この問題が多くの同志たちによつて演壇の上に持ち出され、三氏の態度に對する熱烈なる糺弾の叫びが爆發せしめられたとき、滿場の聽衆は急霰の如き共鳴の拍手を送つた。同じ光景は、その翌晩の宇治町および伏見町に於ける演説會場に於ても、再び見られた。

　何がそれらの同志たちおよび大衆をそれほどまでに憤激させたか？

　これを説明するためには、我々は事件のそこまでに發展して行つた經過を一應叙述しなければならない。我々はやがて本文に於てそれを試みるであらう。だが、それを待つまでもなく、河上氏等三氏の態度行動が如何に勞農黨に對して許すべからざる裏切りを意味するものであるかは、三氏の名で發表された右

の聲明書を一讀しただけでも、直ちに解かることである。もとより、我々はそれより以前に、氏等——少くとも、河上、神道の二氏が最近に及んで、それに書かれてあるやうな勞農黨即時解體論を懷くやうになつて來てゐたことを知つてゐたが、マサカ氏等のそれを黨の機關紙を通じて發表しようなどとは、丸切り豫期しなかつたことだ。考へても見よ！　さうした、單に氏等の個人的意見にすぎない主張を、堂々と黨の公器である機關紙に掲載するが如きは、そのことだけで完全に重大なる黨規違反の非行を構成するものである。のみならず、特に河上氏の場合にあつては氏が黨から正式にその機關紙の編輯の全權を委托されてゐたのを奇貨とし、恣まゝにその地位を利用することによつて、一切秘密裡にその事を運んだのは、それこそ百パーセントの背信行爲であり背任行爲である。しかし、よし河上氏がさういふことを無意識的にした場合にもせよ、これは黨として斷じて不問に附することが出來ない一大重大事であるのに、況んや河上氏は、後にもつと詳しくいふであらう通りに、その數日前に、黨の常任委員會に向つて、解消問題に關する氏の個人的意見を黨の機關紙に載せないことを固く約束したのだ。そして常任委員會は、無論ふだんから少くとも『純情の人』として心から尊敬してゐた河上氏の言葉のことだから、毛頭それを疑はうとはしなかつた。それで私たち四名——石原、糸川、山花、大山——の常任委員は、當面緊急の必要に促されて關西遊説に派遣されることになり、そのために東京の黨本部は、ホンの數日間のことだつたが、河上氏等を殘した以外は、殆んどがら空きの姿になつた。ところが、河上氏等の陰謀は機敏にも、恰度その留守の間に急遽遂行されたのである。

しかも、問題はそれだけに止まらないのだ。河上氏等の聲明書の論調は、その態度行爲の陋劣さを餘りにも露骨に行間に躍動させてゐる。わが勞農黨員は、その間の機微を摑む限りに於て、全身の血を沸かさないでゐられないであらう。見よ！　そこに縷々として展開されてゐるものに、『理論』の衣を纒うた的外れの饒舌にすぎない解消意見——それの本質は後に徹底的に批判され暴露されるであらう——を別にしては、惡意に充ちた文字の羅列であり、故意に事實の眞相を半ば蔽うた經過報告を根據としての常任委員會に對する不信任の表白であり、その『一部の人々』——聲明書はかく表現してゐる——に對する個

人攻撃の放送ではないか？ そこに展開されてゐた一聯の毒々しき言葉は、明かに黨攪亂の意圖から出たものでなくて何であるか！ 更らに氏等の聲明書は、尙ほ一歩を進めて、わが勞農黨の鬪爭が改良主義的日常鬪爭の埒内を一歩も出ることが出來ないものだと斷定し、そしてこの點から、わが勞農黨が勞働者農民の窮極の解放の妨害物として固定化する以外に途がないものだと結論し、一轉して傲然全黨員に號令するが如き態度に於て、『吾々は來るべき大會を解黨のための大會となすことを提議する』と怒號してゐるのだ！

以上のことを述べただけでも、氏等のさうした遣り口が、單に勞農黨の立場から見て許すべからざる最大級の裏切り行爲に當るのみならず、更らに一般に階級鬪士の態度として見てもそれが如何に痛烈なる糺彈に値するものであるかは、一目瞭然である。しかも有態にいへば、事實はまだ〳〵それ以上である。少くとも解消問題を中心としての河上氏等の始終の行動の非階級性は、決してたゞそれだけのことでは盡きないのである。我々はその點を明かにするために、次にその前後の事情を今少し明細に敍述するであらう。

二　第一次解消問題の場合に於ける河上氏の態度

去る八月中、大阪で勞農黨解消運動が始めて小岩井淨氏一派の手によつて烽火を擧げ、東京ではわが黨の舊書記長細迫兼光氏が早速それに響應したとき、一時一般の新聞紙上に於ては、河上肇氏および神道寛次氏も細迫氏と行動を共にしようとしてゐるかのやうに傳へられた。だが、それは、少くとも表面上は、たゞ噂だけのことに終つた。そしてその際、神道氏は始終沈默を守つてゐたが、しかし他方、河上氏は、黨本部の正式機關による黨本部の態度の決定を待たずして、逸早く單獨に例の『解消時機尙早』の聲明書を發表し、ともかく細迫氏とは提携して進退する意志のないことを明かにした。

當時我々は、河上氏のさうした勝手氣儘な抜け駈け的行動に對して多少とも驚きの眼を見張らない譯には行かなかつた。我々が『同志河上』の行動に對して、微かながらも或る不快な疑惑を懷いたのは、全くその時が始めてであつたのだ。それにその事は、たしかに或る程度に黨規違反問題を含んでゐるものであつた。だが、直ぐそれに續いて開かれた常任委員會（八月三

十一日）が、即時解消絶對反對の態度を決定し、それに關聯して黨本部の聲明書――いはゆる『發展的解消』の主張を基調としたもの――を採用した際には、河上氏はその聲明書の起草委員の一人としてその討議に參加し、そして出來上つた聲明書に對しては、反復熟讀の上『異議がありません』と明言したので、我々は一同不言不語のうちに、最早氏に關する限りに於ては、その些かばかりの黨規違反問題を取り立てゝ言はないことに決めて、その席上では誰れもそれに觸れるものがなかつた。

だが、その日の常任委員會は、事柄の性質から見て河上氏のそれよりは遙かに重大な意味を帶びてゐた細迫舊書記長の即時解消贊成の單獨聲明だけを問題にして、それを到底不問に附しがたき黨規違反行爲と認め、交涉委員を通じて一應細迫氏に陳謝を促がし、肯かなければ斷然除名すべきことを決議した。そしてその結果が遂に細迫氏の除名處分の實現に終つたことは、一般に知られてゐる通りである。かくて、新聞紙上に於て連袂脫黨を取沙汰されてゐた三人のうち、まづ細迫氏のみが我々の陣營を去り、あとの二人は兎に角黨內に踏み止まることになつたのである。

次いで河上氏は、九月十二日の『勞働農民新聞』紙上に於て、『發展的解消とは何か？』の一文を發表し、氏一流の辯證法的說明樣式の下に、勞農黨が將來『勞農鬪爭同盟』に轉化することこそが、その正しき發展的解消を意味するものであることを解說し、それによつて即時解消論に反對する黨本部の立場を力強く支持した。我々はそれを讀んで、最早『同志河上』を我々の陣營から失ふやうになるかも知れないとの懸念が一掃されて了つたものと考へて久々振りに始めて安堵の胸を撫でおろした。それほども、我々勞農黨員は、彼を厚く信任してゐたのだ。のみならず、我々勞農黨員は、彼が過去一年有餘の月日に亙つて、絕えず黨に對して多大の物質的および精神的援助を與へてゐたその異常な犧牲的盡力を、我々への同志意識の表象として、限りなく尊重してゐたのだ。――序に言ふが、本文の筆者は個人としても、彼との永き交遊の間に互に交換してゐた友情を深き愛着を以て追懷するものであり、今や双方が公然の舞台に於て互に敵として立つに至つてゐても、それはそれとして決して永久に忘れないであらう。――それだけに、彼が間もなく我々を裏切つたとき、我々の失望感は測り知れないほどの深さ

のものであつた。それは恐らく、世上一般の『河上ツァン』が、氏の得意とする辯證法的說明樣式による一大確信の表象が、忽ちの間に氏自からの手によつて一擧に顚覆されたのを見て懷いた失望感の深さ以上のものであつた。だが、氏の得意とする辯證法は畢竟氏一流の辯證法であつて、精確な科學的論證を伴ふところの無產階級の武器としての唯物辯證法とは同一物でない。そして、よし氏一流の辯證法が一夜のうちに跡方もなく崩壞し去つたところで、無產階級の武器としての辯證法は永久に牢乎たる存在を持續するであらうから、その點は決して償ひのつかないものではない。だが、裏切られた我々の失望感と――それに加はる憤激とは、何物を以てしても決して癒やすことのできないものである。

三　黨組織改造に關する『河上試案』の發表

その頃から、黨本部に於ては、わが勞農黨の前途に於ける必然の發展形態として想定されたる『勞農鬪爭同盟』――黨本部の文書ではそれを『勞農政治鬪爭同盟』と呼んでゐる――の本質、役割、組織形態、等々に關する討論が開始された。河上氏はその討論の基礎的材料として、コミンターン第六回大會の『植民地半植民地に於ける×××に關するテーゼ』の中から、『勞農政黨』および『勞農鬪爭同盟』に關する規定と、並にこの問題を中心としての同大會に於ける討論とを譯出して、九月二十一日の『勞働農民新聞』に掲載し、氏自らも熱心に黨本部員と議論を上下した。

越えて十月一日の『勞働農民新聞』に於て、河上氏は『我黨組織の發展的改造へ！』の一文を發表した。氏はそれによつて主として細迫舊書記長の態度を痛擊し、その中で『勞働黨の反動性を見拔いたと稱して、昨日まで共に腕を組んで進みつゝあつた同志を急に見棄て去り、昂然として左翼的言辭を弄し、獨り己れをのみ高しとして、昨日までの同志を救ふべからざる泥沼の中に陷沒しつゝあるが如く罵倒することは、斷じて階級鬪士の態度となすことを得ない。それは實に賴み甲斐なき昨日までの同志であつたことを證明すると同時に、何人にとつても賴み甲斐なき人間であることを證明する』と絕叫してゐる。今や、罵つた人は罵られた人の跡を追うて我々の陣營を去り、再び互に固く握手してゐる。そして皮肉にも、あとに殘つて黨の

旗を死守してゐる我々が、その言葉の彈丸をそのまゝその創造者に投げ附けねばならない立場におかれるやうになつたのだ。何といふ『運命の惡戯』だ！

河上氏は尙は同號の『勞働農民新聞』紙上に、『勞農黨の組織改造』に關する所謂『河上案』なるものを載せた。それは現在の勞農黨を勞農鬪爭同盟へ轉化せしめるための過渡的組織形態を規定するものとして、氏の個人的『思索の途中に於て』――河上氏の發明書の中の表現による――編み出されたものである。これより先き氏は、來るべき黨の第四回擴大中央執行委員會に於ける大衆的討論の一資料として、その『河上試案』を黨機關紙に發表したいとの意志を表示して、そのことを常任委員會に諮つた。我々は無論、――河上氏がその『試案』を劃時代的のものと自信してゐたに違ひないことを、氏の態度口吻から明かに見て取つたにも拘らず、――その提議には快き答へを與へることを躊躇した。常任委員の一人は敢然反對を唱へた。

理由は極めて簡單である。まづ第一に、黨の機關紙は黨の公器として、黨の正式機關の決定した方針に基いて常に宣傳××を行ふことを主たる使命とするものであつて、特に何人でもが、氣まぐれに自己の頭腦の中で捏ね上げたその時まかせの個人的意見を斷じて載せるべきではない。それに、當の河上氏の、隨時にグラ〳〵と意見を豹變することを意としない態度には可なり氣を揉まされた記憶が、まだ我々の腦裡には新しき印象を殘してゐたのだ。そこへ持つて來て、來るべき擴大中央執行委員會に於て當該問題に關する討論が行はれなければならないものとする以上、そのための基礎案として當然――黨の『規約』から見て當然――黨本部から提出されなければならない肝腎の本部案が、その時分にはまだ書記局内に於て胎生の狀態にあつて、一同も常任委員會の審議を經てゐなかつた。だから、それが常任委員會にも提示されないうちに、『河上試案』のみが先づ機關紙の上に公表されるやうなことになると、一般黨員たちの意向の上に一大混亂が惹き起されるであらうことも、無論、大に氣遣はれたのである。

更らに、『河上試案』は一見して甚だ未熟なものであることが明かなものであつた。――それは河上氏も後になつて自白せざるを得なかつた通りに、氏自身の本來の目的にさへも副はないものであつた。――しかも我々のこの印象は、次の事實によつ

て一層深められた。それは、河上氏がその試案の基礎的資料として用ひたコミンターンの第六回大會のテーゼ中の當該部分の河上氏の譯文――さきに氏が機關紙上に發表したもの――には、わづか數行のうちに二三の驚くべく意味の大混亂を伴つた誤譯があつた、といふ事實である。それは氏が、『大會』と譯すべきKongressを『集會』と譯したり、『行動』とか『活動』とか譯すべきVorgehenを『前進分子』と譯したり、また適譯ではないがその場合では『整理統制する』とでも譯すべきko-ordinierenに何ともいひやうのないグロテスクな譯語を當て嵌めたり、等々のことから生じたところの、意味の大混亂――原文の意味を型なしに破壞してしまつたほどの意味の大混亂――である。本文の筆者は、始めてそれに氣附いた時、早速難きを忍んで秘かに氏にその訂正を求めた。我々は氏が全く目茶苦茶な譯文を堂々と我々の機關紙に發表したものを知つたとき、全くハタと當惑して了つたのである。勿論我々は、決して語學上の能力などを基準にして博士河上の議論の價値を決定しようとしたのではないが、當面の實際問題として、氏の譯文の正否は、當然『河上試案』の上に一の重大なる影響を及ぼすべき筈のものであつたから、我々はその案を機關紙に發表しようとする河上氏の意圖にはどうしても贊成する氣になれなかつた。我々は寧ろ、河上氏があくまで自説の正しさを確信するならば、常任委員會に於て本部案の審議の際にそれを主張すべきであり、それでも尚ほ本部案が氏の氣の濟むやうに修正されなかつた曉には、來るべき擴大中央執行委員會に出て來て、大衆的討議の前に、堂々とその正否を問ふべきだと考へた。

しかし我々は、或る他の考慮から遂に讓歩を餘儀なくされた。といふのは、先づ第一に、我々は河上氏が、形式的には一機關紙部員として、そして實質的には機關紙の編輯主任として、過去數個月間に亙つて超凡的な獻身的努力をつゞけ來たことに對して、衷心から無限の感謝と敬意を捧げてゐた。だが、それよりも更らに一層根本的な原因としては、我々は日一日と眼前に迫まり來る擴大中央執行委員會を前にして、まだ一回もの審議を經てゐない多數の議案を控へてゐたので、當面かゝる問題を荒立てて再び黨内に時ならぬ波瀾を卷き起すやうなことをあらせたくなかつた。

で、結局我々は、『河上試案』の發表に反對を唱へた常任を宥

めて、河上氏の意志を通し、他方その代はりに――様々の材料を提供するといふ意味で――當時まだ明かに未成品に屬してゐた黨改造組織に關する書記局案をも同時に機關紙の上に發表することにした。

それは我々に取つては、一の大なる失敗であつた。我々はその後各所で、黨機關紙の、しかも同じ號の上に、同じ議題に關して二つの『競爭案』――しかもその一つは明白に一個人の名を冠した私案――が現はれた不始末に關して、多くの黨員たちからあまりにも當然な難詰を受けた。で、我々はその度毎に、漠然と當時の事情を語つて諒解を求め、殊に二つの試案が決して『競爭案』のつもりで出されたものでないことを明かにしたが、しかし結局は我々の犯した誤謬を自ら認めざるを得なかつた。今や我々は、かゝる誤謬からも貴重なる實踐上の教訓を學び取らなければならないが、同時に他方、全黨員諸君に對しては、そのためにあくまで陳謝する誠意を失はないであらうことを誓つて、肅然として自ら戒めてゐるものである。

四　個人の自己批判と組織の自己批判

我々は今『スピード時代』にゐることを意識してゐる。そしてそれに正しく處して行かなければならないとの氣構へをすら持つてゐる。だが、同時にまた我々は、一つの組織のうちに身を置いてゐる人間として、どこまでもその正式機關を尊重することが我々の一層重大なる義務だと考へてゐるが故に、刻々超スピード的に前後左右へ眼まぐるしく飛び移つて行く河上氏の個人的意見の動きには到底歩調を合はせて行くことが出來なかつたことを告白せねばならぬ。

見よ！　あれほどの確信を以て黨組織改造に關する自己の個人的試案を黨機關紙に公表した河上氏は、見る見るうちに、それに對して深き疑ひを懷き始めた。我々は寧ろ河上氏のその氣持にこそ同情が持てたが、これかといつて、河上氏が再びその純粹に個人的な氣持を又々勝手氣儘に黨の公器である機關紙に公表しようものならば、我々が再び大に當惑しなければならない羽目に陷るべきは解り切つたことであつた。河上氏は口癖のやうに繰り返してゐた、『左翼は常に自己批判をしなければならない』と。まさにその通りである。だが、我々の立場から見れば、河上氏の單獨の自己批判は、よしそれが黨の問題に關聯し

てゐる場合にもせよ、あくまで河上氏の個人的自己批判であつて、黨といふ組織の自己批判ではない。黨の自己批判は、あくまで黨の正式機關によつてなされなければならないものである。如何なる問題に關しても個人的に自己批判をする絶對自由は、河上氏を始め我々のすべてが完全に持つてゐる。我々は斷じて、それを拒否するものではない。のみならず、よし河上氏の個人的自己批判にもせよ、若しそれが一旦黨の正式機關にかけられてその通りに議決された曉には、それはその瞬間から黨の自己批判になるものである、といふことをも、我々は無條件的に承認してゐるのである。だが――否、それ故にこそ――我我は、河上氏が黨機關紙の實質上の編輯主任の地位にあつたのを勿怪の幸ひに、その黨の公器を擅まに私用することによつて、恰かも河上氏の個人的自己批判を黨の自己批判にすり替へたかの如くに見せるやうな結果を招來することを初めから虞れてゐたのだ。そしてこの懸念は、日を追ふに從つて、我々に於て益々濃厚になつて行つた。

さきに言ひかけた通りに、河上氏は氏が十月一日の『勞働農民新聞』に例の『河上試案』を公表してから幾日も經たないうちに、又そろ〱それに對しても深き疑惑を挾みかけた。即ち河上氏は、現在の勞農黨を將來勞農鬪爭同盟に轉化せしめるための過程組織を規定した劃時代的な組織改造案として、一旦それを黨機關紙に公表して見たものの、考へれば考へる程それが危ぶなかしく思へだして來たのである。そこで河上氏は、『河上試案』が發表されてから恰度十日目の、十月十一日の『勞働農民新聞』紙上に於て、『勞働同盟の〇〇的性質』と題する一文を發表して、その中で、氏の頭腦の中に新たに萠さし始めた疑惑を告白した。我々は『またか！』と苦笑した。と同時に、その瞬間から心ひそかに、最後の破綻の日の刻々に迫りつゝあつたことを感知した。それにも拘らず、氏に對する我々の敬意と信任は、我々として斷然氏に對して、その論文の徹回を要請することを躊躇せしめた。それはしかし、我々にとつては、同時にまた、最初の失敗の機縁でもあり、その完成でもあつたのだ。

五　河上氏の脱黨の意志表示

『最後の破綻の日』は、遂に異常の急テンポを以て、ひた押し

に押し進みかけた。

十月十一日の常任委員會は、上村進氏の宅で開かれた。その晩のその委員會開會の直前のことである。まだ常任委員が幾人も集まつてゐなかつたので、私は心靜かにその定數の揃ふのを待つてゐた

すると、既に私よりも先きに來てゐた河上氏が、『ちよつと』と言つて私を別室に呼び入れて、沈痛な調子で語り始めた。それから二、三十分の間に二人の間に交はされた會話の要點をまとめると、大體次の通りになる。

河上氏。――僕は勞農黨の發展的解消を考へ拔きました。そしてその途中で、一旦は黨組織改造の私案までを出して見ました。しかしその後考へれば考へるほど、段々とそれに自信が持てなくなりました。その點は、昨日の日附の『勞働農民新聞』に出しておいた僕の論文〔――『勞農同盟の○○的性質』を指す。――大山〕で、よく諒解されたことと思ひます。ところが、あれを書いてから後、僕は遂に勞農黨は即時自體を解體すべきだといふ結論に到達しました。勞農黨を中心にした立場からいへば、即時解體へ進むか、全合同へ進むか、二つに一つの道しかないと思ひます。しかし僕から見れば、前者こそ絶對に正しい行き方と思はれます。で、僕は先きに發展的解消論を公に主張した關係上、今はどうしても一刻も早く、僕が新たに到達した結論である即時解體論をも公に主張しなければならない責任を感じます。そこで僕は、常任委員會に私のために特例を開いて貰つて、それを機關紙に載せさせて貰ふか、さもなければ僕自身が脱退して、自由な立場からその意見を述べたいと思ひます。勿論、常任委員會としては、たゞ僕のためにのみ特例を開くといふことは、出來かねるでせう。僕はあの『勞農同盟の○○的性質』を機關紙に載せたことすら、僕自身が黨員としての限界を越えたものでないかと惧れてゐる位です。從つて、『黨を即時解體しろ』といふ主張を機關紙に載せる自由は、僕には許されないでせう。だから結局僕には、脱黨より外に道がないと思ひます。どうか、その點を諒解して下さい。

大山。――お話の節は解りました。困つたことになつたものですが、實は私は、あの『勞農同盟の○○的性質』を讀ん

だ時、直覚的にかういふ結果を豫感しました。が、常任委員會が貴下のためにのみ特例を開くやうなことは出來ますまい。無論それは、常任委員會にかけた後でなければ明言出來ないことですが、しかし何れにしても、むづかしいことには違ひありません。といつて、貴下にしても、その確信を飜すことは出來ますまい。さうすると、結局來るべき擴大中央執行委員會を待つて、その席上でその意見を述べて頂かなければならないことになると思ひます。だが、貴下がその時までも待てないと、たつて言はれるなら、脫黨も亦已むを得ないと思ひます。無論、黨としては、貴下の如き重要人物を失ふことは何としても忍び得ないことですが、黨が貴下に確信を飜すことを强要することも出來ないし、貴下も黨のために確信を飜すことが出來ない以上は、結果はそこへ落ち着くより外はないと思ひます。とにかく、常任委員會も數分後に開かれることですから、その席上でこの問題を充分に協議しませう。

實際私は既に多少の豫感を抱いてゐたとはいへ、愈々さう切り出されてみると、今更のやうに驚いた。そして當惑した。だが、最後に深く決心して、漸くのことで以上の答へを與へた。

そこへ行き着くまでには、樣々の考へが私の腦裡を走りすぎた。無論私は、徹頭徹尾、わが勞農黨の立場から、私の考へを進めた。苟しくも我々がわが黨の組織內に身を置く限り、我々が是非ともさうしなければならないのは、あまりにも當然のことである。從つて、たとへ我々が無產階級全體の問題を考へる場合でも、我々は否でも應でも、わが黨の現在の立場を通じて考へなければならないのだ。『黨を擴大强化すべきか？ これとも黨を即時解體すべきか！』といふ問題にしても、矢張りさうである。この點から私は、苟しくも黨が存在して居る限りは、そして河上氏がその一員としての地位を持ち續けてゐる以上は、私はあくまで氏に黨の正式機關の尊重を要求しなければならないし、從つて黨機關紙の私用をやめることをも要求しなければならないと考へた。

更らにまた私は、もつと實際的な見地からも、河上氏が最後に到達したといふ黨即時解消意見は、當然來るべき擴大中央執行委員會での大衆對議の前で主張すべきだと考へた。これに、

その擴大中央執行委員會は、もはや目睫の間に迫つて來てゐるではないか？　河上氏は頻りに、擴大中央執行委員會に於ける大衆的對議の一資料とするために、豫め自説を機關紙で發表しておきたいといふが、しかし考へても見よ！　黨解體といふが如き重大事項を決議することは、擴大中央執行委員會の權限外のことではないか？　いふまでもなく、中央執行委員會は大會から大會までの間に於て、黨の最高機關であるところの大會から委任された事項を協議し執行すること以外の權能を持つてゐないではないか？　それ故に、萬一中央委員會が黨の即時解體を必要と認めたならば、それは次の年次大會を待つなり、或ひは特に臨時大會を召集するなりして、そこでそれを決議する手續を執らなければならないのである。かういふ風に、擴大中央執行委員會が自ら黨の解體を決議することが出來ないものとすると、河上氏が如何に黨の解體を急げばとて、何も黨規を破つてまでその意見を機關紙に公表する必要はない譯である。寧ろ河上氏は、將來の大會に於ける大衆的對議の基礎的材料として、自説を擴大中央執行委員會に持ち出すべきではないか？　さうすれば、別に黨規蹂躙問題が惹き起されるべき虞れがないであらうし、またさうする方が、河上氏の所期の目的のためにも得策であらう。何となれば、若し河上氏の意見が現在の客觀的狀勢の下に階級的に見て正しいものと假定するならば、――無論我々は河上氏の意見を絶對的謬論だと確信してゐるが、――そこで正式に述べられた河上氏の意見は、そこに參列してゐるべき各中央委員を通じて大衆の間に浸透せしめられるであらうから。かくしてそれはやがて大衆のものとなり、黨解體の要求が下の方から廣汎にもり〳〵と盛りあがつて來るようになるであらう。それが待てないといふ指導者は、大衆の要求を離れて自己の意志を押し通さうといふ指導者だ。さういふ指導者は、なまじつか大衆組織の中に身を置くよりは、宜しくサツサとそこを引き揚げて『永遠の自己』といふ自由の天地に立て籠もり、唯我獨尊の境地に安んずべきだ。それ故に、河上氏がどうしても黨規に服從することが出來ないと頑張る以上は、私としては結局、氏の脫黨の意志を肯定するより外はなかつた。

それに私は、河上氏の場合に黨規蹂躙問題――從つて除名問題が起るやうなことを、極力避けたかつた。我々は既に、先き

には京都の奥村甚之助氏の除名によつて、その過去の輝かしき鬪爭歴史を持つ鬪士を失ひ、次に細迫得書記長の除名によつて、多年彈壓の砲火の下に腕を組んで共に戰ひ進んだ僚友を失つたのだ。そこへ今また、我々はじめ全黨員の信頼を一身にあつめてゐる『同志河上』を被除名者のリストの上に一つ加へるといふが如きことは、私としても堪へられないことであるが、しかしそれよりも河上氏のためにも、わが勞農黨のためにも、共に取らないことだ。かくて私は、この際、河上氏の脱黨意志を承認するのが何れの方面から見ても現状の下に於ける萬全の策とすべきではなからうかと考へたが、とにかく何よりも先づそれを常任委員會に諮つてみることを、河上氏に約束したのであつた。

常任委員會はやがて開かれた。河上氏の提議はなされた。常任委員會はそれを正式に議題に上ぼせ、數時間に亙つて討議を重ねた。その結果、『河上氏が即時解消意見を持たれるに至つたことは如何ともしがたいことだが、それを黨機關紙を通じて發表することは、黨規上許すべからざることである。それに擴大中央執行委員會も間近に迫つて來てゐることであるから、この席で各自充分に意見を述べ、全國の同志と共に徹底的に討議をつくした上で黨の意見を決めるやうに事を運ぶのが、この際黨本部の責任だと思ふ。殊に脱黨云々の意見は速かに撤回して貰ひたい』といふ意見が、そこでは壓倒的多數を占めたが、しかし結局最後の決定を見ずに終つた。

六　陰晦なる一週間

慌たゞしき日が、明けては暮れて行つた。擴大中央執行委員會の期日は、揚げ潮の如く押し迫りつゝあつた。黨本部員は毎日、盲目のやうに狂奔した。それでも、山と積もつてゐた準備事務は、早急には片附きかねた。そこへ河上氏に係る新たな難問題が、また持ち上がつて來たのだ。しかも、それは最も丁寧なる取り扱ひ方を必要とするものであつた。我々は、我々の耐忍力が今極度に手きびしく試練されつゝあつたことを痛感した。

長い話を短くしよう。河上氏の黨即時解消意見を機關紙を通じて發表したいとの願望は、日を追うて益々頑強になるばかりであつた。と同時に、これにつれて氏の脱黨意志は何時とな

く、どこかへ吹き飛んでしまつたやうになつて、本人はじめ誰もが最早問題にしなくなつてしまつた。

他方、河上氏の機關紙利用を差し止めようとする常任委員會の意志もまた、全體としては、今度こそ最早動かすべからざるものとなつた。たゞ神道および上村の兩常任だけが、何故か段々と、河上氏に機關紙を通じて黨即時解體論を發表する自由を許すべきだといふ意見に傾いて行つた跡が、明かに見られるやうになつた。そして兩常任は、さうした意見を例の『黨內批判の自由』に結びつけて主張するやうになつた。

だが我々は、『我々が黨內デモクラシーの精神に忠實であればあるほど黨の正式機關を尊重しなければならないものであり、そして嚴格にその立場から、黨內批判の自由はあくまで黨規に即して行使されなければならないものだ』といふ我々の當初からの主張を枉げることは出來なかつた。黨に――そして黨を通じて無產階級に――對する我々の責任感が、その態度を我々に嚴命したのだ。

かうして、僅か二三日の短い期間のうちに、紆餘曲折を極めた交涉折衝が兩側の間に行はれたが、十月十三日の常任委員會に於ては、神道、石原の兩常任の斡旋によつて、河上氏から『次號の機關紙〔十月二十一日發行〕は常任委員會の方針によつて編輯する』との言質を得たので、我々は一應の小康を得たやうに感じた。ところが、翌々十五日の常任委員會――この委員會には河上氏は欠席して、そしてそれ以後ずつと出席しなくなつた――では、またいつもの問題が蒸し返へされさうになつた形勢が見えた。即ちその席上で上村常任が再び『河上氏に機關紙の上で氏の意見を發表させてはどうか？』といふ提議を執拗に持ちかけた。上村氏はそれに理由づけるべく、『實は今日私は河上氏に呼び寄せられて數時間會見をして來たのだが、その際河上氏は、發展的解消論の範圍內で意見を書くと言つてゐたから』との意味のことを述べた。我々は、河上氏の數日來の言說から考へて、『さういふことは絕對にあり得べからざることだ』と考へた。我々は寧ろ河上氏が『即時解體もまた發展的解消の一形態だといつたやうなコジツケ的議論に隱れて過日來のその意見を述べようとして居るのだらう』と直感した。といつて、『上村氏の折角の提議をムゲに撥ね附けるのは餘りにも角が立ちすぎる』と考へたので、結局常任委員會は、『では兎に角、河

上氏があくまで機關紙の上にその意見を發表したいといふ願望を固執するならば、先づその原稿を常任委員會に提出せしめ、そして常任委員會がそれを審議した上で「これなら宜しい」との認定を與へた場合にのみ、河上氏にそれを許すことにしよう』といふことを決議し、更らに石原常任を交渉委員に擧げて、常任委員會のこの意向を河上氏に傳達せしめ、且つ、河上氏のそれに對する回答を齎らし歸らしめることに相談をまとめた。

翌十六日河上氏との會見交渉を遂げた石原常任は、十七日の常任委員會に於て『河上氏は常任委員會の提案に應諾した』と報告した。我々はそれを聞いて、今から思ふと鈍（おぞ）ましくも、再び愁眉を開いた。少くとも我々は、憂鬱なる連日の霖雨が止んで雲間さはやかに天日の微光を眺めた位に感じて喜んだ。我々の河上氏等に對する信任は、かくの如く最後まで失はれなかつたのである。その夜の決議により、我々の四名の常任委員は、數日間黨本部を明けて、關西遊說に出掛けることになつた。

七　最後の破局

我々の關西遊說中に、東京に於て河上氏が如何に常任委員會へのあれほど固い約束を破棄したか、――そして如何に氏が嘗て口を極めて罵倒した細迫書記長が歩んだ道を精密にそのまま追つかけて行つたかは、私が本文の劈頭に於て述べた通りである。

更らにまた、過去數週間以來曖昧極まる態度を持續して來た神道氏が、その際輕業の如く機敏に河上氏の傘下に乘り移つて行つたことは、我々には充分首肯出來たことである。たゞ十五日の常任委員會ではまだ、黨即時解體論には反對だと稱してゐた上村氏が、咄嗟の間に兩氏の道伴れとして引ツ浚つて行かれたことは、多少意外の感がしないでもなかつた。無論、上村氏が最近に至つて頻繁に兩氏と往復するやうになつてゐたことは事實だが、しかし苟しくも階級鬪士を以て任じてゐた人物が、―さほども無雜作至極に他人の蓄音機に變はつてしまへるといふことは、我々には全然唯事のやうにも思はれない節がある。細迫舊書記長は事件の直後、『上村氏は交叉點で電車の乘り換へを間違へたやうなものだ』と冷評したとか傳へられてゐるが、それはしかし、たゞ獨り上村氏の場合のみに限つたことではな

い細迫氏自身はじめ他の諸氏も、恐らく身に沁みて思ひ當ることがあらう。とにかく、柄になく口先に×××言辭を高唱しつつ傲然と我々の陣營を見棄て去つたことにかけては、それらすべての諸氏の誰れ彼れに差別がなかつたのである。

私たちが神戸にゐて河上氏等三氏の裏切り行爲を憤慨してゐる間に、東京の黨本部に於ては、二三の書記たちの怒りがまさに絶頂に達してゐた。それらの書記たちは、機關紙印刷の日、從來の久しき慣行に從つて、その發送に從事すべく、上村氏宅で手ぐすね引いてその刷り上りを待つてゐた。ところへ河上氏の方から電話がかかつて『機關紙の印刷が遲れたから、明朝十時頃上村氏宅に屆ける』と言つて來たので『それでは』と言つて、その夜はそれらの書記たちは同氏宅で安んじて寢に就いた。

ところが翌朝十時になつても新聞は屆かないし、河上氏の方からも何の音沙汰もないので、不思議に思つて印刷處へ出かけて問ひ質したが、『知らぬ存ぜぬ』の返答に益々疑惑を深めた書記たちは、躍起となつて小一時間も押問答を續けた後、結局『萬事は河上氏の口から聽いて下さい』との言葉だけを得て、一早速河上氏および一二の機關紙部員を歷訪したが要領を得ず、且上村氏宅に引き揚げたところ、探しあぐねた機關紙は上村氏宅の中から上村氏自身の手によつて、奔命に疲れた書記の面前に運び出されたのである。それは夕方の四時近くのことであつた。そして上村氏の說明による、機關紙は前晚全部刷りあがつたが、それはいつになく印刷所から即刻自動車で河上氏の宅に運ばれて行き、そこで秘密裡に發送濟みになつてしまつてゐたのである。それらの書記たちは、かくして河上氏等によつて、廿々と一杯喰はされ、眞ッ赤になつて怒つたが追ッつかず、結局次の通りに告白して自らその昂奮を抑へた。曰く、——『一體河上氏や神道氏等は、何のためにかゝる卑劣極まる行動を取らざるを得なかつたのか？ 從來氏等の階級鬪士としての人格を信じ切つてゐた黨本部員は、こと茲に至つて、始めて自分達のお人好しを苦笑するより外なかつたのである。』

神戸にゐた私へは、書記局から『スグカヘレ』との電報が打たれた。だが私は、『萬策つきた上は仕方がない』とも考へたし、それに『大衆への約束は破るべきでない』とも考へたか

ら、所定のプログラムを全部終了して、ひたすら善後處置を思案しながら、二十三日の朝東京に歸りついた。

その夜、常任委員會は黨本部に於て正式會議を開き、河上氏等三氏の黨規蹂躙問題を徹底的に討議した。

同夜の會議は公開のものとして持たれた。そして黨本部は特に、東京府支部聯合會所屬の黨員たち、および折柄地方から上京してゐた二三の黨員たちの傍聽を許し、あくまで大衆の面前に於て問題を討議する方針を採つた。

更らに黨本部は、河上、上村、神道の三氏にも十二分に言論をつくさしめようとする趣旨から、正式に招集狀を發した。だが、三氏は定刻になつても姿を見せなかつた。そこで常任委員會は三氏の來場まで開會時間を延期することにし、特に書記を派して三氏の出席を促したが、三氏は言を左右に托して、いつかな出席を肯んじなかつた。そこで始めて開會が宣せられ、議事が進められた。數時間に亙つて樣々と討論を鬪はした後、同夜出席の常任委員の全部は、河上氏等三氏の黨破壞の陰謀的計畫『許すべからざる黨規紊亂』と認め、滿場一致、全責任を以て三氏の即時除名を決議し、同時にそれに附帶する聲明書を發表した。

かくして、過去數週間に亙り、始終河上氏等の反復常なき態度に惱まされ通しながらも、あくまで隱忍に隱忍を重ね自重に自重を積んで來た黨本部は、今や事件が最高潮に達したこの瞬間に、見事にも快刀一揮、十重に二十重に黨の手足に絡みついて甚だしくその活動を妨げてゐた亂麻を斷ち切り、數日のうちに開かるべき擴大中央執行委員會を待つばかりとなつたのだ。とはいへ、その最後の手術は、極度に緊張した悲壯なシーンを展開したのである。

十一月一日二日に開かれた擴大中央執行委員會に於ては、全國から來り集まつた中央委員および支部代表者たちが、如何に無條件的に黨本部の經過報告を承認したか、如何に熱烈に勞農政治鬪爭同盟への發展轉化を目標とした今後の活動方針を決定した黨本部議案を支持して河上氏等の黨即時解體論を一蹴したか、如何に滿場一致嵐の如き拍手を以てその除名處分に贊意を表したか、また如何に潑剌たる元氣に滿ちつゝ今後の益々激化しゆくべき鬪爭への充分の準備と方針とを懷いて各地に歸つて行つたか、等々々については、今は詳說する必要はあるまい。

たゞ茲で一言附記しておきたいことは、擴大中央執行委員會に於ても、黨本部はあくまで階級的に公明正大な態度を以て臨み、何よりも先づ河上氏等三氏を會議に招集し、大衆の面前に於て査問に對決的討論を行はうとの決意に基き、その日の會議に諮つた上で、特に數名の委員を派して三氏を迎へにやつた。ところが氏等の一行が會場に辿り着いたとき、臨場の警官は、氏等の行動に對する憤激のために醸された會場の空氣が險惡だとの理由の下に、氏等に保護檢束を加へた。そのことが會場に知れたとき、會衆一同に忽ち憤然として責任警官を詰責し、更らに全會の責任を以て三氏の身邊の安全を保證することを特に決議し、且つ數名の委員をあげて所轄警察署に赴き、署長に面會して三氏の釋放を要求せしめた。

交渉委員は即刻その使命を帶びて、警察署に出掛けて署長と交渉し、所要の件につき一札を入れてまで擴大中央執行委員會の要求を强硬に主張した。それで署長もやッとそれに應諾して、直ちに氏等を釋放した。ところが今度は、その場に居た河上氏等三氏の外に細迫舊書記長その他の幾人かが加はつて一團が鳩首協議した末、遂に『擴大中央執行委員會には出席しない』との回答を交渉委員に向つてなした。

交渉委員が會議に歸つて來て、如上の事情の顛末を報告したときには、全會場には、また一ト頻り怒聲が爆發した。河上氏等一派は、口に×××言辭を弄しながら、その行動の上に餘りにも怯懦な本質を暴露し、更らに始終『言論の抑壓』の口實を以て黨本部を攻擊しながら、今や黨本部がかくも公明正大なる態度に出て、大衆の面前に於て氏等に自由に發言する機會を無條件的に與へてゐるのに、氏等は却てそれには見苦しくも尻込みをして極力それを利用することを拒否したのだ！　氏等の階級鬪士の風上に置けないかゝる醜陋なる態度は、つい先き頃まで氏等の上に深き信頼を繋いでゐた全會衆をして、抑へがたき、憤激を感ぜしめたと同時に、一脈幻滅の悲哀をも味はしめないで措かなかつた。

以上我々は、事件の經過、および關係三氏の態度行動、ならびにそれに對する黨本部の處置について、その荒筋だけをなるべく簡單に物語つたつもりではあるが、それでも相當に長いものとなつた。我々は讀者諸君に可なりの倦怠感を與へたことた

賤れ且つ謝する。だがそれは、以下に於て氏等の『理論』を檢討し批判し、その正體を暴露しようとしてゐる我々にとつて、絶對に不可避的のことであつたのだ。何となれば、氏等の理論は、究竟その本質に於て、氏等自身の裏切り的態度行動を合理化するために捏ッち上げた饒舌以外の何物でもないからである。

後篇　河上氏等の振り翳す『理論』とその批判

一　氏等の『理論』の中心點

多年の同志を裏切つて我々の陣營を見棄て去つた河上氏等一派は、その陋劣なる態度行動に最後の仕揚げを施した瞬間から、極力その合理化のための『理論』の雨を降らせた。それはまづその端を十月二十一日の『勞働農民新聞』に掲載された『勞農黨の發展的解消のために殘された唯一の途としての戰鬪的解體』と題する三氏連名の聲明書に發し、次いで河上氏單獨署名の『有害物としての勞農政黨』に及び、尙ほ當分の間はツル〳〵ベツタリに續けられてゆくことであらう。

河上氏等は頻りに、『勞農黨本部は我々に對して理論の相手になることを避ける』と言つてゐる。事實、我々は從來久しく、我々の實踐の上に何等の生命を吹き込んだことのない河上氏の机上の××『理論』には、氏の氣に入るほどの敬意を曾て拂つたことがなかつた。また我々にはさうしてゐる暇もなかつたし、必要もなかつた。だが今や、氏の方から積極的に挑戰して來た以上、我々は一應それに答へておかなければならないことを感じる。一體氏等の聲明書およびその後の發言の上に展開されたる氏等の——といふよりは、寧ろ明かにその執筆者である河上氏の『理論』の中心點は、どういふ所におかれてゐるのであらうか？

氏はその論述に於て、足許も危ぶなかしげに、縷々幾千萬言を列ねて倦むところを知らないやうであるが、その中から特に中心點にされてゐる要點を摘出すれば、大體次の通りの二三の極めて空漠たる抽象原則的テーゼであり、履き違への公式論的規定である。

（一）『勞農政黨』——普通にいふ『無產政黨』——の行ふ日常鬪爭は改良主義日常鬪爭の埒外に止まるものであ

る。

（二）改良主義日常鬪爭は勞働者農民の解放の窮極目的に結び附けられてゐるものではないから、斷然×、×、×の妨害物である。

（三）如上の理由により、改良主義日常鬪爭しか行ひ得ない勞農政黨一般は反動的役割しか演じ得ないものであるから、その何れたるを問はず、絕對に排擊し、破壞すべきもので

（四）勞農黨はさうした勞農政黨の一つであつて、斷じて勞農鬪爭同盟に轉化し得ないものであり、且つ益々反動的政黨として固定化しようとしてゐるものであるから、一刻も早く解消せしめるべきものである。

此等の全『理論』――氏等はそれを『戰鬪的解體論』の名で呼んでゐる――は、實に以上の諸論點を骨子として組み立てられてゐるのであるが、我々は以下、それらを順次に論駁して行くであらう。

二　勞農黨と勞農政治鬪爭同盟

我々はまづ第一に、氏等の理論の出發點を明示し、氏等が今立つてゐる立場を規定しておかねばならぬ。

讀者諸君は、我々が今しがた此等の理論の骨子として擧げた諸論點の最後の項目のうちに、『勞農黨は勞農鬪爭同盟に轉化し得ない』といふ言葉を見出されたであらう。氏等の『戰鬪的解體論』は、實はそこから出發してゐるものである。從つて我々は、本論に入る前に、先づ茲で、その『勞農鬪爭同盟』の概念に對する我々の最近の理解――我々がそれを或る程度まで明確に理解し始めたのは、比較的最近になつてからであるのだ――について一言を附け加へておくことが必要だと思ふ。

我々は先きに『事件の經過』を敍述してゐた際に、數個月前わが勞農黨內に第一次解消問題が現はれた直後から、我々の陣營に於て『勞農鬪爭同盟』の本質、役割、組織形態、等々に對する討論が開始されたことを述べた。そして、それに對する直接の刺激がコミンターン第六回大會の『植民地半植民地に於ける×××に關するテーゼ』中の勞農政黨および勞農同盟に關する規定に對して河上氏が特に我々の注意を喚起した事實によつて與へられたといふ一點は、我々がどこまでも率直に認めな

ければならないことである。黨本部はそれを基礎にして討論を進めたのだが、この方面に於て常に卒先して熱心に研究の歩を進め、絶えず常任委員會にその結果を報告することを怠らなかつた功勞者は、現在の勞農黨の書記長代理田部井健次君である。

到達されたる討論の成果は、黨本部から過日の擴大中央執行委員會に提出された一議案(『第一議案――勞農黨の本質の究明並にその發展方向決定の件』)の一部として、それに收められてゐる。そこでは、『勞農政治鬪爭同盟』――黨本部の該議案は『勞農鬪爭同盟』をかく呼んでゐる――の本質を要約して、次の如く規定してゐる。

(イ) 勞農政治鬪爭同盟は、資本家地主の反動的ブロックに對抗する勞働者農民の鬪爭的ブロックの組織的に實現されたものである。

(ロ) 勞農政治鬪爭同盟は、勞働組合の代表者(先進分子)と農民組合の代表者(先進分子)とによつて構成されたる規律ある政治的鬪爭團である。したがつてそれは、實質上、勞働組合並に農民組合の最も戰鬪的な全國的政治鬪爭委員會の性質を持つたものである。

(ハ) 勞農政治鬪爭同盟の中心的任務は、勞働者階級と農民大衆との協力による日常政治鬪爭を不斷に展開すること、並にそれを通じて勞働者階級と農民大衆との鞏固なる戰鬪的ブロックを確立することにある。

黨本部の議案は、以上の概括的規定から出發して、更らに勞農政治鬪爭同盟が將來その出現の曉には持たなければならない役割、組織形態、等々を、現在の視點から展望し得られる限りに於て明細に規定し、最後にそれと勞農政黨との相異點の解剖にまで及んでゐるが、我々は今茲にそれをこゝに轉載してゐる餘裕を持たないことを遺憾とし、讀者諸君の注意を直接に試案そのものに惹かうとするものである。

尙ほ茲で一言附け加へておきたいことは、我々は、わが勞農黨創立以來引き續き、自黨の本質を些か漠然と『勞働者農民の戰鬪的同盟』として規定して來た。これは無論『わが勞農黨は工場農村に於ける戰鬪的勞働者農民大衆を中心勢力として結集され資本家地主およびその政治的權力に對して鬪爭する一個の政治的ブロックだ』といふ意味に於てゞある。その限りに於

て、右の規定は決して間違つてゐるものではない。だが我々が今や、たとへ如何なる程度に於ても完全とはいへないにもせよ、より明確に規定されたる勞農政治鬪爭同盟の概念への理解に到達した以上、我々は現在の勞農黨に對して與へられた右の規定を放棄することを決議したのである。それは決して、勞農黨の性質が變はつたことを意味するものではない。それはひとえに、概念の混亂を防がうとする用意から來たのである。

かくて現在の勞農黨は、我々の規定によつても、たしかに勞農政黨の一つである。だが、同時にそれは、出來るだけ近き將來に於ける勞農政治鬪爭同盟の樹立を目標として、それへの發展轉化の方向へ全黨の努力を意識的に向けてゐるわが國唯一の勞農政黨である。尙ほこの點に關しては、直ぐ後にもつと多く說明するであらう。

三　河上氏等の立場とわが勞農黨の立場

出來るだけ近き將來に於ける勞農政治鬪爭同盟の樹立を絕對的に必要と見てゐる點に於ては、氏等の立場も我々の立場も一つである。從つて、當面そこが氏等と我々との間の論爭の焦點となつてゐるのではない。

次に、現在の客觀的狀勢の下に於て勞農政治鬪爭同盟樹立のための主體的および客觀的諸條件が成熟するまではまだ相當に距離があると見てゐる點に於ても、氏等と我々との間には決して大なる見解の相異がないやうである。從つて問題の核心は、そこにある譯でもない。

更らにまた、如何なる勞農政黨も――從つて現在の勞農黨も――今の形態の儘では決して勞農政治鬪爭同盟に轉化し得るものではない――何となれば、勞農政黨の本質および組織形態と勞農政治鬪爭同盟の本質および組織形態との間には或る根本的な差異が存してゐるから。勞農黨本部から第四回擴大中央執行委員會へ提出の第一議案參照。――と見てゐる點に於ても、氏等と我々とに全然意見が一致してゐる。從つて、問題の核心はそこにある譯でもない。

氏等と我々とが步む道の分岐點は、實に勞農政治鬪爭同盟に行き着くための手段の上にあるのだ。

とはいふものゝ、河上氏等はたゞ漠然と勞農政治鬪爭同盟への展望を前にしてゐるだけで、何等具體的にそれへ行き着くた

めの道を指し示してゐないのだ。從つて氏等の歩まうとしてゐる道の終點と勞農政治鬪爭同盟との間には、不測の深淵が大きな口を開いて氏等の落ち込むのを待つてゐる。否、たゞそれだけではない。氏等はそれへの途上で徒らに聲を張り上げて、『勞農黨を即時解體しろ!』と怒號し、全勞農黨員をして現在遂行してゐる一切の對支配階級鬪爭を放棄せしめて、氏等の道伴れとならしめようとする意圖をさへ、餘りにも明瞭に示してゐる。

我々の――わが勞農黨の――立場は、全然反對の方向を指し示してゐる。我々は、まづ現在勞農黨の旗の下に遂行されてゐるあらゆる鬪爭を今後益々强烈に不斷に前方に押し進めて行くことによつて、あくまで全力的に勞農政治鬪爭同盟の樹立の諸條件の成熟の促進に貢獻し、そして最後にそれが樹立された曉には、その時こそ斷然潔よく一擧自黨を解體し、勞農の全黨員が一體としてその中に沒入し、わが黨の組織の內部に蓄積されて來た全鬪爭エネルギーをそこで、より有意義に活かして行かうといふのである。これこそが、わが勞農黨が無産階級階級運動全體の上から見て最も有意義になし得る發展轉化の唯一の道である。わが勞農黨が從來用ひ來つた『發展的解消』といふ言葉は、全くかゝる內容を有してゐるものである。從つて、我々は、實は前々からこの言葉にかゝる使用を喜ばないで、唯それの生成の歷史的關係から、いはゞ惰性的に口にして來たのにすぎないものであり、今でもさうしてゐるのであるが、しかし今や我々は、斷然それを揚棄して、その代りに、もつと適切な『發展轉化』といふ慣用語を用ふることにする方がいゝし、また決して晩くはないと考へるのだ。

右の一點を、今少し明細に展開してみよう。

四　勞農黨の進むべき道

我々の立場から見れば、勞農政治鬪爭同盟を出來るだけ近き將來に於て樹立することが、よし如何に必要であるにもせよ、もと〳〵それは天から降つて來るものでもなければ、地から湧いて出るものでもない。それはあくまで、戰鬪的勞働者農民大衆を中心勢力として工場から、農村から、および廣汎なる大衆の深海の中から捲き起る鬪爭の潮の進行過程に於て實現されなければならないものであるのだ。

いふまでもなく、わが勞農黨は、さうした鬪爭の全部を自己の肩上に背負つて立つものではない。さういふことは、現實を正視するものには、まるで夢のやうな話だ。だが、同時にわが勞農黨は、さうした鬪爭の一の相當重要なる部署を擔當しようと決意して立つてゐるものであり、また擔當し得る能力を有してゐることを確信してゐるものである。我々は今實際、よし無力でなくとも、たしかに微力である。だがただ單に無力であり微力であるからといふだけの理由によつて直ちに自己を解體してしまはうといふのは、それこそまさに敗北主義者の行き方だ。わが勞農黨に常住不斷にそれ自體の自己批判によつて、その無力微力の原因を突きとめ抉ぐり出す必要を意識してゐる。そして、その無力微力の一原因は、度々の彈壓の嵐のために我々の陣營から幾多の百戰練磨の優ぐれた鬪士たちが奪はれて行つたといふ事實を別にしては、絶えず内外から押し迫まつて來る黨攪亂者の手によるあらゆる策動であつたことも、掩ふべからざる事實である。我々は、我々の本來の使命である對支配階級の鬪爭を今後一層果敢に遂行する過程に於て、それらの一切の内外の黨攪亂者を殘りなく一掃する必要があることを、この際一層痛切に意識せしめられるのである。

かゝる根本態度を持してゐるわが勞農黨は、勞農政治鬪爭同盟樹立可能の時期を一刻も早く招來する必要を痛切に意識してゐるだけに、それだけ益々全力的にその成立および活動を保證し得べき一切の條件を作り出すことに貢獻しようとしてゐるものである。そのためにわが勞農黨は、勞働組合および農民組合――殊に左翼組合――の再建並に擴大强化に關する從來の鬪爭方針を一層具體的な合理的なものにし、それを一層敏活に效果的に着々今後の實踐に移して行き、更らに大衆鬪爭の激發とその政治的指導とを益々廣汎に益々決死的に遂行し、同時にあくまで戰鬪的な左翼的指導精神による無産階級戰線統一實現の方向に捲土重來の勢を以て驀進し、更らにすべての鬪爭を全被壓迫大衆の政治的自由獲得鬪爭にまですさまじく高潮せしめて行き、かくして資本家地主およびその政治的權力に對するわが黨の突擊力を刻一刻無限に强化して行かうとしてゐるのである。かかることこそが、勞農政治鬪爭同盟への發展轉化の道程に於てわが黨に課せられたる一の歷史的使命であり、また當面の客觀的狀勢の下に於てわが黨が全黨の力を擧げて遂行しなければ

ならない最も實際的な日常任務である。

如上の意味に於てわが勞農黨は、現在の力關係の下では明かに一個の勞農政黨であるに相違ないが、しかしこの大衆の生活と自由とのための日常鬪爭を通じて、出來るだけ近き將來に於てかゝる力關係のバランスを轉換することによつて、より高度な、より强大な、より×××に行動し得るガッシリと確立されてあるべき勞農政治鬪爭同盟に沒入――發展轉化――して行かうとする目的を明かに意識しつゝ自己の今後の一切の活動を律しようと決定して立つてゐるところの現在は一個の勞農政黨である。しかも、かゝる根本方針が、新たに第四回擴大中央執行委員會で滿場一致可決確定された今日、もはや全黨員中、わが勞農黨が未來永劫今日の組織形態のまゝで固定化しようなどと考へてゐるものは唯の一人もなくなつた譯だ。換言すれば全黨員は今や益々明確なる目標の下にわが勞農黨を發展的に把握することができるやうになつて來た譯である。そして、我々の陣營に何等かの形での關係を持ちながら、尙ほこの點を疑ひ得るものは、たゞ、舊勞働農民黨時代以來、互に生死を誓つて彈壓の嵐の下に腕を組んで惡戰苦鬪しつゝ、滿身創痍の姿で今日まで黨の旗の下に結集して來た――または一切の苦難を覺悟で新たに我々の陣營に馳せ加はつて來た――黨内幾多の戰鬪的勞働者農民の本質を理解し信賴することが出來ないやうな、過度にヒステリックな、懷疑的な、從つて非實踐的な、そして今から考へると初めから同志意識を持ち合はせてゐなかつた一聯の高踏派インテリだけである。

五　實踐意思を伴はない河上氏等の立場――方法論上の根本的誤謬

河上氏等は大衆の現實の要求――氏等はいはゆる改良主義的日常鬪爭に對する氏等の獨斷的な過少評價もしくは消極評價によつてそれを卒直に蔑げすんでゐるのだが――から遠く懸け離れた或る高き立場――氏等は傲然とそれを『勞農黨を超越した立場』と呼んでゐる――から、全勞農黨員に『勞農黨を即時解體しろ！』と號令する。しかもたゞそれを號令する切りで、勞農黨全黨員の今後行くべき道を具體的には少しも指し示してゐないのだ。氏等はいふであらう『勞働組合へ！　農民組合へ！更らにそれへ行けないものは、俺達に尾いて、階級鬪爭には有益でなくとも無害な一隅へ引ッ込め！　と叫んでゐるではない

か？』と。

よろしい！　だがその『無上命令』は、既に勞農組合の內部にゐて、しかも氏等の黨解體論にも拘らず、勞農黨の必要を强く意識しつゝ黨の旗を守つてゐるものには、一體何の足しになるのか？　また、氏の蹤を追つ驅けて『階級鬪爭には有益でなくとも無害な』一隅に引ッ込むことを快しとしないものには、それは一體何の慰めになるのか？　結局それは高々、氏等が實質上狙つてゐるらしく見える極少數のインテリ分子を勞働組合に向つて驅り立てる以外に何等の効能もないではないか？

それにしても、まだ難點が殘る。氏等は一方では高聲に、『すべての勞農政黨の行ふ日常鬪爭は『窮極目標と結び附かない』―氏等の意味では明かに『×××の指導下に立たない』――ものであり、從つて改良主義的日常鬪爭の範圍を出ないものであり、×××妨害物だから、それらの一切を擧げて即時××せよ！』と號令してゐるのだ。だから、その前提からの論理の當然の歸結は明かに『少くとも現在の一切の合法組合もまた即時×××の指導下に持ち來すなり、即時××するなりせよ！』といふ結論に導かれることになるのではないか？　で、いやしくも氏等が少しでも大衆に責任を感ずる以上當然續いてさうした號令を發しなければならない筈だから、てッきりさうするのだらうと思つてゐると、これはまた餘りにも案に相違して、氏等は却て『顧みて他を言ふ』態度を文字通りに取つてゐる。即ち氏等は、『吾々はこの〔勞農黨の〕解消を契機として何等かの新たなる組織を造らんとする者でもなく、また解消後に於ける勞働組合および農民組合等々の具體的方針につき……妄りに〔傍點筆者〕指導的意見を述べんとする者でもない』（勞農黨反對派聲明書）といふのだ。無論氏等は、この文句の前後左右中間にいろんな夾雜物をゴタ〳〵と並べて極力その全體の意味を濁ごさうとしてゐるが、それにも拘らず、氏等の眞意はそこに充分に見え透いてゐる。それでも『尙ほ解らない』といふなら、人は氏等に向つて、『では一切の合法組合を××するなり、××××指導下にある非合法組合に變へるなりしようとしてゐるのか？』と反問してみるがいゝ。さうすれば、次の瞬間にそれを明白に確め得るであらう。

氏等が『吾々この解消を契機として何等かの新たなる組織を造らんとするものでない』といひ、それでも尙ほ安心が出來兼

ねると見えて、三方四方に向つて『幸に誤解なきことを請ふ』と言ひ添へてゐるのは、如何にも繊細を極めた注意といふべきである。氏等よ！ 平安なれ！ 何人も氏等を毛頭誤解しないであらう。それは誰れもが初めから、氏等の立場には何等の積極的實踐意志を伴つてゐなかつたことを知り拔いてゐたからである。考へても見よ！ 一の具體的の問題を抽象理論的問題並みに扱つたり、科學的分析を非辯證法的思推——如何にこれが辯證法的討究だと、ゴマカシテみたところで——に摺り替えたり、或る種の行動の實現の可能な條件が全然欠けてゐる時處に於て、それを煽動してみたりするやうな方法論的基礎の上に打ち建てられた主張を現實の世界に向つて放送するもの丶脚下に、どうして積極的實踐意志を伴つた立場などが見られようぞ！人は何時でも『青空に翔け昇るぞ！』と高言することが出來る。だが彼が一台の飛行機をも用意しない限りは、誰れもそれを信じないばかりだ。

何等の實践的意志を伴はない立場——いはゆる勞農黨を超越した立場——そして何等の組織的基礎を持たない立場、さうした立場の上に立つて、氏等は一體どうして勞農黨を即時解體に導かうとしてゐるのか？ 若しくはその他の何等かの手段でか？ 或ひはそれらのすべてのジヤズでか？ 何れでも好きなことを勝手にせよ！ 戰鬪的勞働者農民の鬪爭エネルギーの結晶として、支配階級の幾度の强襲の煉獄の火に鍛へあげられて、小さいながらも肉のしまつてゐる勞農黨の全肢體は微動だもしないであらう。勞農黨を建設したそれらの戰鬪的勞働者農民は、その組織の內部に蓄積されてゐる全鬪爭エネルギーを、より高度な、より强大な、より×××に行動し得る別の鬪爭組織にまで發展せしめようといふやうな事もなしに、たゞ慢然と針尖で突かれた泡のやうに空中に消散せしめるやうな浪費を、一つの階級的犯罪だと考へてゐる。そして、さうしたことを平氣で號令することは、たゞ大衆に何等の責任を持たない高踏的インテリの氣まぐれ沙汰にすぎないことを知り拔いてゐるのだ。

河上氏は口を開けばマルクス主義レーニン主義といはれる。だがマルクス主義レーニン主義は、理論と實践との辯證法的統一の上に築かれてゐるのではないか？ マルクスは實践こそ眞理のテストだとは敎へなかつたか？ レーニン主義は、×××理論を以て裝はれてゐるプロレタリアートの×を創造するため

に、先づ第二インターナショナルの理論上のドグマを、その尤もらしい様々のスローガンと決議とを、『×××大衆鬪爭の火の中で、活きた實踐の火の中で』試錬したのではなかつたか？組織による行動を——行動による大衆の×××××××××を精神としたのではなかつたか？ 等々。我々の膝下の東洋人も昔から『言ふは易く、行ふは難し』といつて後世を戒めた。

我々は河上氏等の『理論』に於て、何よりもまづ第一に方法論上の根本的誤謬を見る。

六　レーニンは如何に河上博士に助け船を出さないか？

河上氏は更らに、勞農政黨は反動的役割をしか演じないものであり、從つて××の妨害物だから、おしなべて一擧に撲滅してしまふべきであると、誰れに向つてか知らないが號令してゐる。蓋し暴論である。

『辯證法學者』河上博士は、勞働黨の具體的特殊的問題の究明が要求されてゐる時に、勞農政黨一般の抽象的普遍的問題を以て答へられる。もつとも、若し氏がこの場合、『後者を知るのは前者を知るための階梯だ』といはれるならば、それはその限りに於て一應は聞こえる。だが、それにしても、氏が勞農政黨一般の問題について論ずるに當つて、その性質および役割を、時と處との聯關を拔きにして、宇宙大の大風呂敷の下に一擧に概括的に定義づけるのは、無雜作に對象の歷史性を無視するものであり、從つて茲でもまたあまりにも方法論的に亂暴である。マルクス主義は、奴隷制度や封建制度や資本主義に對してすらも、そのやうな評價の仕方を我々に命じない。それはたゞ獨り、『辯證法學者』河上博士にして、始めてなし得られることである。尙ほこの點には、もつと先の方で、少くとも部分的には、今一應觸れることがあるだらう。

そこで河上氏は、勞農政黨一般への否認の根據として、次のテーゼを投げ與へる。曰く、『改良主義日常鬪爭——河上氏によれば、勞農政黨が行ふ日常鬪爭は、如何なる時と處を論ぜず、また如何なる客觀的狀勢との聯關あるを問はず、一律にこの改良主義日常鬪爭の埒内を一歩も出ることが出來ないのだ——は勞働者農民の××××のために妨害物であるから、××××日常鬪爭とは峻別して、極力排擊されるべきだ』と。精密にか

ういふ言葉で言はれてゐるのではないが、精密にかういふ意味で言はれてゐる。

このテーゼは、二つの構成部分に別けることが出來る。その第一は、『改良主義日常鬪爭は勞働者農民の×××××——××——のための妨害物となる』といふことである。その第二は、『改良主義日常鬪爭は××主義日常鬪爭と嚴別しなければならない』といふことである。どッちとも、果してさうであらうか？

まづ第一の方から始めよう。

河上氏は自己の『理論』の正しさを論證するために、レーニンの名著『何を爲すべきか？』の中の『大衆の自然成長性と黨の目的意識』に關する部分から長々と引用を試みてゐられる。ところが、玆に悲慘なる滑稽といふべきは、レーニンが切角啓示した眞理も、たゞ河上氏の該博なる知識を證明するに止まつて、氏の助け船には少しもならないばかりでなく、却てその逆になつてゐるのだ。

『何を爲すべきか？』は一九〇二年に書かれたものであるが、現今でも階級鬪爭の中に身を投じてゐるものにとつては、何人にも必讀の書である。それは、ロシアの第一次革命（一九〇五年）直前までノサばつてゐた一聯の經濟主義者の群——河上氏は『經濟主義』といふ言葉はレーニンが「何を爲すべきか？」に於いて用ひてゐる言葉（傍點筆者）だ』といつて居られるが、それはたゞ言葉だけのものではない——の諸主張に向つて巨彈を投じたものである。それらの經濟主義者たちは——といつてそのうちに樣々の部類別けをしなければならないが、まづ大體に於ては——『ロシアに於ける獨立の勞働階級の×××鬪爭に反對し、運動の內部に於ける組合主義的政治行動を傳道し、一般に勞働運動を自由主義的ブルジョアジーの手に引き渡さうとしてゐた』ものである。そしてかゝる立場から、勞働者黨が大衆の自然發生的な、單純に端緒的な要求に根ざす運動を計畫的に指導しつゝそれを意識的行動の水準にまで高めるやうなことをするのを無用有害なお節介だと說いてゐたのである。經濟主義者たちのかゝる自然生長性禮讚論に向つて、レーニンはこの書物を通じて、痛快にも致命的な一撃——河上氏が勞農黨に向つて與へるそれとは大分違つた——を與へたのである。

かうした事實を念頭において、レーニンがその書物の中で極

度に黨の目的意識的指導の必要を强調してゐるところを讀むと、我々は今日でもそこに潑剌たる生命の躍動を感じることが出來る。

だが、一たびそこから眼を轉じて河上氏の方を見ると、氏は現實を無視して勝手氣儘に『日本の現在に於ける勞農政黨の擁護者たち』を一律に『日常鬪爭主義者』に仕立てゝしまつて、更らに一層勝手氣儘にも、それらの『日常鬪爭主義者たち』を『ロシアの經濟主義たち』——そこに少しばかりの部類別けをさへもしないで——の仲間に引き入れてしまつてゐられる。それは横から見ても縱から見ても無理無態な、あまりにも概括的な從つてあまりにも無意味な對比論でなくて何だ！　こんなことだけでも、レーニンは河上氏に助け船を出しようがないではないか！

七　河上博士の『日常鬪爭』とは何か？

更らに一歩を進めていはう。『何を爲すべきか？』のうち、河上氏の引用された部分の前後でレーニンが最も强調してゐるのは、大衆の中から盛り上がつて來る自然發生的な、單純に端緒的な要求に根ざす日常鬪爭は、その儘に放任しておけば、それがいくら高潮しても、必然に改良主義日常鬪爭の範圍を出るものでないから、黨はどこまでもそれをマルクス主義的に指導しなければならぬ、といふ一要點である。それはレーニンの××××言葉で言へば、『大衆の自然生長性は、我々黨員の、多大の目的意識性を必要とする』ものであり、『大衆の自然發生的な昂まりが强ければ强いほど、運動が益々廣汎なものになるであらうし、從つて、黨の理論上の、ならびに政治上および組織上の仕事には、益々多分の目的意識性が必要になつて來るのである。

かういふ風に、レーニンの論旨は、河上氏の論點とは全く背中合はせになつてゐる。レーニンによれば、大衆の自然發生的な——河上氏のいふ意味では改良主義的な——運動が全土の上に廣汎に卷き起る瞬間こそ、まさにマルクス主義的指導が痛切に必要になつて來る時であり、×××××のためには又となき好地盤である。レーニンは、河上氏のやうに、『××××に結び附けられない』——若しくは改良主義的な——日常鬪爭は××のための妨害物となるなどとは、夢にも言はなかつた。さうい

ふことを言ふ指導者は、××が自己の方へ寄つて來るのを待つてゐる指導者であつて、斷じて××の方へ進んで行く指導者ではないのだ。

河上氏はそこでは實に繁雜な物の言ひ方をしてゐられるが、それは結局、『改良主義日常鬪爭は勞働者農民の×××××――××――のための防害物だ』といふ一點に歸着するのだ。過日の勞農黨の第四回擴大中央執行委員會の議場でそれを聞いた多くの人々から一齊に、『では、東洋モスや、大島製網所や、新潟の王番田や大蒲原や、等々の爭議で見られたあの勞働者農民の決死的鬪爭のすばらしいシーンは一體どうなのだ？』と批難の聲があがつた。誰れがそれを當然のことでないと言ひ得よう。

改良主義日常鬪爭を『反×××』なものと一圖に思ひ込んでゐられる河上氏は、揚げ潮に退き潮を嚴命したとかいふ昔の西の國の暴君のひそみに倣つて、自然發生的な――河上氏のいふ意味では改良主義的な――日常鬪爭に向つて、大喝一聲『去れ！』と宣したいであらう。それでも、資本の攻擊の益々狂暴化して行く今日、さうした日常鬪爭は工場に農村に街頭に、至るところ不可抗的に益々多く卷き起るであらう。そして若し河上氏に倣つてそれらの一切が××××のものだとすると、――少くとも別の或る狀勢が急速に加はつて來るのでなければ――×××××は日一日と益々我々の立つてゐる地點から遠ざかつて行くことになるであらう。『辯證法學者』河上博士の『理論』は、それをどう始末してくれるつもりか？　茲へ來て、河上氏の右のテーゼの第二部が第一部と握手する。改良主義日常鬪爭と××××日常鬪爭とは、河上氏の頭腦に於て以外では、到底峻別できないものである。我々は現實の日常鬪爭を見て、『これは改良主義的のものだからいけない』とか、『あれは×××××日常鬪爭だからいゝ』などゝ言つて、一々貼り札がして廻はれるものではないのだ。かう考へると、河上博士の『理論』の混亂は、氏等が自然發生的な日常鬪爭への改良主義的指導――今日の慣用語で、より適切に言へば社會民主々義的指導――と、それへのマルクス主義的指導との區別を、改良主義日常鬪爭と××××日常鬪爭との區別と履き違へられたから生じたものである。成るほどマルクス主義的指導と社會民主主義的指導との間には雲泥萬里の差があるが、しかし改良主義日常鬪爭と××××日常鬪爭とは、現實の場合に於ては峻別出來るものでもなく、また峻別する必要のないものでもある。無論、自然發生的な日常鬪爭に社會民主主義的指導が加へられる切りで、それに少しもマルクス主義的指導が加へられなければ、それは決して××××鬪爭に轉化するものでないといふことは文

字通りに眞であり、それは又レーニンが特に説明してゐることとであるが、それとこれとは、全然別問題なのである。

河上氏はまた、マルクス主義指導とプロレタリアート×の指導とを同一概念としてゐられるが、それは明かに誤謬である。無論一定の客觀的狀勢下に於て最も完全といひ得られるマルクス主義的指導は、ひとり眞のプロレタリアート×の指導下に於てのみ可能だといふのは事實だが、しかし主として或る特殊狀勢の下に於てよしさうした指導が或る他の何物かによつて行はれることがあつても、そしてよしそれが決して完全な意味に於てマルクス主義的とはいへないものであるにしても、とにかくそれが他の何物かであるよりもヨリ多くマルクス主義的なものである限りは、——換言すれば、それがマルクス主義的に見て絶對的條件を具備してゐるとは言へないが、相對的には條件を具備してゐるといへる性質のものである限りは、それをマルクス主義指導だといふに何の差し障りもないのである。それとも、『辯證法學者』河上博士は『完全なマルクス主義的指導でなければ、絶對にマルクス主義的指導だとはいへない』と言はれるのであらうか？

〔以上は讀者諸君が容易に看取されるであらう通りに、河上博士の『理論』に對する私の駁案の前半である。ここへ來て、もう私にはそれを書き續ける時間の餘裕はなくなつた。で、私はそれを他の機會に讓らなければならない。それから先きの豫定は、その前半に多少の補足を加へることゝ、後半を河上氏が勞農政黨一般および特に勞農黨に與へてゐられる規定に對する批判に充てることであり、それに加へて、全篇の結論に於て、勞農黨を反動呼はりしてそれを破壞することによつてその××××××を放棄せしめやうと企圖してゐられる河上氏等の態度、行動、『理論』こそがよし如何に×××言辭を以て裝はるにもせよ、實質上に於て最も反動的なものであることを論證しようとしたのである。そこへまで行きつかないうちに擱筆しなければならなくなつたことは、私に取つては遺憾に堪へないことだ。しかし上掲の分で讀者諸君は、そこに後半の論旨の伏線が既にあらかた張られてゐることを明察されたであらう。最後に我々は、勞農政治鬪爭同盟が全大衆の鬪爭の過程に於て樹立されるまで、益々固く勞農黨の旗の下に結束して、河上博士の『理論』の如きものは脚下に一蹴しつゝ×××××××しつゝ不斷に鬪爭から鬪爭への行進を續けるであらうことを誓ふものである。〕

マルクスの地代理論

向坂逸郎

高田保馬教授は、本年一月、經濟論叢に『マルクス價値論の價値論』なる長論文を發表されてゐる。教授は、この論文に於けるマルクス批判を、『多分、內在的批判といふ名稱が與へられ得ると思』はれてゐる。教授によれば、『マルクス價値論の主張を許してそれに從ふ、而してかゝる立場に立ちてその理論的歸結を求める、此歸結がマルクスに於ける他の主張、又はマルクスの認たる事實と矛盾せざるや否や、之を說明しうるや否を考察する、と云ふのが此行きかたである』。云ふまでもなく、マルクス說の上に立ちてその論理的歸結を求め、それがマルタスの他の主張や、マルタスの認めたる他の事實と矛盾せざるや否やを檢討するためには、何よりも先づ、マルクスの立場そのものに對する正しい理解、更にマルクスの他の主張や、その認めたる事實に對する正しい認識が必要であらう。その何れか一つに對して故意又は過失による誤解があるならば、それは內在的批判とやらではないといふ事になる樣だ。教授は賢明にも『多分、內在的批判と云ふ名稱が與へられ得る』と云はれた。

私は、こゝに私自身マルクス地代理論であると解するところのものを述べる。その際、私は高田教授の前記の論文中から地代論に關する限り、時折り觸れて見るつもりである。多分それは、『內在的批判』とは何かを明にするであらうと思つてゐる。

一

マルクスに於ては、價値は、生產物に共通なる社會的實體の結晶である。かゝる社會的實體は人間勞働である。財產私有と社會的分業の下に社會の總生產が行はれるところの商品生產社會に於ては、總ての生產的勞働は、個別的に、獨立して一つの

私的勞働として行はれる。總ての生産的勞働は、かくの如く互に獨立してこそをれ、而もそれらが一つの勞働の組織體をなさなければならぬ。でなければ社會それ自身の存在が不可能になるからである。私的勞働を一の社會的連繫に作り上げるものは、生産物の交換である。商品生産社會は、獨立的、私的勞働の間に、交換關係によりて結ばれる一の勞働協力體である。さうしてかゝる協力體を構成する要素として見る時、個々の私的勞働はもはや個別的のものではなくして、社會の有する全勞働の一部分となる。かゝる意味に於て、獨立的生産の各勞働は、私的のもの、個別的のものであるのみでなくして、社會的の側面を得る。マルクスはかういふ價値の實體を形成する勞働とは、等一なる人間勞働、換言すれば同一なる人間勞働力の支出を謂ふのである。商品界の價値全體の中に表現される社會の總勞働力は、無數の個別的勞働力から成り立つてゐるが、玆では總て一樣なる人間勞働力と見做される。而してこれらの個別的勞働力の各個は、それが社會の平均勞働力たる性質を有し、また斯くの如き社會的の平均勞働力として作用し、隨つて一商品の生産上に、平均的或は社會的に必要なる勞働時間のみを要する限り、いづれも皆同一なる人間勞働力である。而してその社會的に必要なる勞働時間とは、現在に於ける社會的に標準を成す生産條件と、勞働の熟練及び強度の社會的平均程度とを以つて、何等かの使用價値を生産するに必要なる勞働時間を指すのである」(マルクス、資本論　第一卷改造社版第一冊　九頁)。

併しながら、現實に於ては、同一生産部門の内部に於て生産される總ての同一種類の商品が、その生産上、必ずしも平均的に又は社會的に必要なる勞働時間を要するものではない。それらの總てが、必ずしも社會的に標準をなす勞働の生産力を以つて生産されるものではない。或るものは、平均以上の、或るものは平均以下の生産條件の下に生産され、從つて平均的に必要なる時間以上の勞働時間を以つて、或はそれ以下の勞働時間を以つて生産される。かくて事實上は、同一種類の商品の中にも、社會的に又は平均的に必要なる勞働時間のみを含有するものと、それ以上の勞働時間を含有するものと、それ以下の勞働時間を含むものとある譯である。

マルクスは、價値の本質を論ずるに當りて、當然にこれらの

偏異を無視した。マルタスは先づ、個々の商品を取り來つて、これらの商品が、同一の生產條件の下に生產された事を假定した。即ち、個々の商品が平均的なる生產條件を以つて生產される事を假定した。かくて、『資本論』第一卷に於ける價値論に於ては、未だ『個別的價値』と『社會的價値』との區別は問題とならなかつた。即ち、『商品に含まれる勞働量は社會的に必要な勞働を代表し、隨つて商品の個別的價値は……社會的價値に一致するといふこと』が前提されてゐた。（資本論　第三卷　改造社版第四冊　一五〇頁）。そこで今、個々の商品を單にかゝるものとして取扱はずして、同一種類の生產部門の全體について見る時に、問題は異なれる樣相を呈して來なければならない。

同一生產部門內の個々の商品は、必ずしも同一生產條件を以つて生產されてゐない。從つて各商品は各々異れる個別的價値を有つてゐる。然るに價値は、各私的勞働が社會の全勞働の中に平均的な性質を代表するものとして、包括される時、始めて價値であつた。それは本來かゝるものとして社會的の性質であつたのである。それ故に同一生產部門內の個別的價値は、それが一つの社會的價値として、即ち一の市場價値として現はれる場合に於てのみ、價値の社會的性質を具體的に實現するものである。そこで吾々が先に、商品の個別的價値は社會的價値と一致せるものとして前提されてゐたといつたのは、次の樣に說明してもよいのである。即ち、『先づ一の生產部門から來る商品全量を一の商品と見做し、且つ同じ種類に屬する多數商品の價格總額が一の價格に總計されてゐるものとして考へるならば、事柄は極めて容易に表現される。斯く假定するとき、個々の商品について言つたことは、或る一定の生產部門に依つて供給されるところの、市場に存する商品大量についても遂一當て嵌る。商品の個別的價値が社會的價値に一致すべきだといふことは、今や、商品總量はその生產上に必要な社會的勞働を含み、而してこの商品總量の價値は市場價値に等しいといふ形に、實現され又は更に進んで規定されてゐる』（資本論　第三卷　改造社版第四冊　一五〇頁）と。

そこで市場價値とは如何なるものになるか？　市場價値は、『一方に於ては、一の生產部面に於いて造られる商品の平均價値と見做すべきで』ある。が、他方に於て、生產諸事情の異常な結合が行はれてゐるところでなければ、最も有利な條件又は

最も不利な條件の下に於て生産された諸商品によりて市場價値が規制されるといふ事はないのであるから、極く一般的に云へば、『一の生産部面の平均的諸條件の下に生産されてその部面の大半を成す商品の個別的價値と見做す』事も出來る。

市場價値は、同一種類の全商品に通じて行はれる同一なる市場價格の變動の中心をなすものであるが、需要と供給との均衡を前提とすれば、同一の商品の市場價格は市場價値に一致する。從つて、この平均價値、又は兩極端の間に存して、その生産部門の生産物の大半を形成する商品量の中位的價値、即ち市場價値以下の個別的價値を有する諸商品は、特別剩餘價値、即ち剩餘利潤を實現し、市場價値以上の個別的價値を有する商品は、その含有する剩餘價値の一部を實現し得ないことになる。

マルクスはかゝる市場價値の成立について抽象的に三つの場合を示してゐる。

第一の場合は、市場價値が中位的諸條件の下に生産された諸商品によりて規制されるものである。この生産部門の商品の大半量が、略同一なる標準的の社會的條件の下に生産され、且つこの部門總商品量中の一小部分がかゝる標準的なる社會的諸條件以下の條件を以つて生産され、他の一小部分がそれ以上の條件を以つて生産されるとすれば、前者の個別的價値は、總量の大半をなす諸商品の中位的の價値よりも大であり、後者の個別的價値はこれより小である。今かゝる兩極の個別的價値が相互に均衡に歸して、この生産部門の商品の平均價値が中位的部分に屬する諸商品の價値に等しくなるとすれば、此の場合に於ける市場價値は、中位的諸條件の下に生産された諸價値に依りて規制される事となる。かくてこの生産部門の商品總量の市場價値は、一切の個別的價値總額に等しい。『この場合には、商品總量の市場價値又は社會的價値——商品總量の中に含まれる必要勞働——は、大半を占むる中位的諸商品の價値に依つて決定される』(資本論　第三卷　改造社版　第四冊　一五一頁)。

第二の場合は、不良なる諸條件の下に生産された商品量が市場價値を規制する場合である。こゝに於ては、不良なる條件の下に生産された商品の價値が、ヨリ優良なる條件の下に生産された商品の價値と均衡に歸する事なく、不良なる條件の下に生産された商品量は、優良なる條件の下に生産された商品量、及び中位的な諸商品量よりも相對的に大量を占めてゐるのであ

る。

第三の場合は、最良の諸條件の下に生産された商品量がこの部門の全商品の最大部分を占め、不良なる條件の下に生産された商品量、及び中位的條件の下に生産された商品量よりも比較的に大である場合である。こゝに於ては最も優良なる諸條件の下に生産された部分が市場價値を調節する。

右の第一の場合について云へば、「中位的價値に依つて規制せられるところの、商品總量の市場價値は、個別的價値の總額に等しくなつてゐる。尤も、兩極に於いて生産される諸商品に對しては、この市場價値は平均價値として押しつけられる。即ち、最惡な一極に於いて生産する人々は、個別的價値以下に自已の商品を販賣せねばならず、最良な一極に於いて生産する人々は、個別的價値以上にこれを販賣するのである。

第二の場合に於いては、「兩極の下に生産される個別的商品量は相互均衡に歸することなく、不良な諸條件の下に生産された諸商品が決定を與へる。嚴密に云ふと、各個の商品(又は總量の各可除部分)の平均價格若しくは市場價値は、今や相異れる諸條件の下に生産された諸商品の價値合計に依つて與へられる商品總量の總價値と、この總價値の中から個々の商品に歸屬して行く可除部分とに依つて決定されるであらう。斯くして與へられる市場價値は、單に有利な條件の下に生産されたる諸商品の個別的價値以上たるのみでなく、尚ほまた中位的諸條件の下に生産される諸商品の個別的價値以上ともなつてゐるであらう。が、それは、不利なる諸條件の下に生産される諸商品の個別的價値に比べるならば常にヨリ以下にあるであらう。それが如何なる程度までこの個別的價値に接近し、又は結局に於いてこれと一致するに至るかは、一に不利なる諸條件の下に生産される商品量が當該商品部面に占める範圍の如何に懸ることである。需要が些かでも供給を超過するに至れば、不利なる諸條件の下に生産された諸商品の個別的價値が市場價格を規制することになる。

第三の場合については次の樣になる、「有利なる諸條件の下に生産された商品量が、「單にその反對の一極の諸商品のみでなく、中位的諸條件の下に生産された諸商品に比べてもヨリ大きな範圍を占めるとすれば、市場價値は中位的價値よりも以下となる。兩極と中位部面とに於ける諸價値高の合計に依つて與へ

られる平均價値は、この場合、中位的價値よりも以下となる。それは有利な一極に依つて占められる相對的範圍の如何に從つて中位的價値に近づいたり遠ざかつたりするのである。需要が供給に比して微弱な場合には、有利な位置にある商品部分はその大さの如何に拘らず、自己の價格を個別的價値まで收縮させることに依つて强力的に存在の餘地を占める。供給が需要を遙かに超過した場合を除いては、市場價値は決して最優良條件の下に生産された諸商品の斯かる個別的價値と一致し得るものでない』(資本論、第三卷、改造社版、第四册、一五二――一五三頁)。

かくの如く、抽象的、一般的に市場價値の成立を論ずるならば、それは常に平均價値として價値の社會的性質を實現してゐる。こゝには平均的なるものが支配してゐる。批評家達は、かくて、『マルクスはあくまで、平均原理にたつ』と稱へる。

然らば何故に、市場價値に於て平均的なるものが支配するか? こゝでは競爭が何等の障碍にもぶつつからないからである。商品生産に自然的の制限性がなく、生産者の出來る限り有利に自由に投資し、出來る限り高く賣り、出來る限り多く利得せんとする努力が、無制限に支配し得るからである。總ての商品生産者の、自分自らを優越の地位におかんとする努力が、彼等の間に平均的なるものの支配を作り出すのである。同一種類の商品の生産部門内に於ける生産者の競爭は、先づ當該部門の全商品に對して同一の市場價格を成立せしめる。『同一生産部面内の資本は、この部面内に於て生産されたる商品の價格を同一市場價格に平均せしめる。これら諸商品の價値がこの價値に對して如何なる比を有し樣とも』(K. Marx, Theorien über den Mehrwert Band II 2.Teil s. 14)。かゝる市場價格の旋回の中軸をなすものが、即ち、平均的市場價格が、市場價値と一致する。當該部門内の各々異なれる諸條件を有する各商品量は、その個別的價格を以つて市場に現はれる。需要と供給との均衡が成立する事を前提とすれば、次の樣にして平均的市場價格が成立する。即ち、上記の第一の場合をとつて見れば、不良なる諸條件を以つて生産されたる商品の生産者は、その商品を中位及び優良なる諸條件を以つて生産されたる商品に比して高い價値を以つて賣らんと欲するであらう。之に對して最も優良なる諸條件を有する商品所有者は、出來るだけ低い價格を以つて市場

に廣き範圍を占めやうと力めるであらう。この壓迫は、かゝる商品の生産部門の兩極の平衡化となり、從つて中位的諸條件の商品價格の上に兩極の價格が平均化する。

前記第二の場合に於て、最も不利の諸條件を以つて生産される商品のみにより、市場價格が決定され得る事はない。何故ならば、中位的の及び優良なる諸條件を有する商品の、これに對抗して自己の範圍を擴大せんとする勢が、常に不利な諸條件の商品を脅してゐるからである。かゝる抵抗が、最も不利なる諸條件を有する商品の價格を低下せしめ、ヨリ有利なる二種の商品量の如何によりて、それらの價格に接近せしめ、かくて平均的市場價格を作り上げる。

第三の場合についても同樣の事が云へる。こゝに於てはヨリ不利なる二種の商品量は、出來るだけ高き價格に販賣せんとするであらうが、最も有利なる諸條件を以つて生産される商品の抵抗勢も大であつて、結局この種の商品の價格に接近して行つて、平均價格を成立せしめる。

かくの如くして、個別的の價格が一つの平均的市場價格に均衡化して行くといふ運動を通じて、各商品量の個別的價値は、平均價値なる市場價値を成立せしめる。かくて一般的には市場價値、即ち社會的價値は平均價値である。それは社會が一定の條件の下に作り出すところのものであつて、マルクスの恣意が描出した妄想ではない。從つて又かゝる平均的のものは、一定の條件を欠除せるところに於ては實現され得ないものである。マルクスは『資本論』第一卷に於て、價値を論じ、第三卷に於て市場價値を論ずるに當りても、かゝる條件の存在を前提し、從つて平均的なるものの支配はその當然の歸結である。そこには明瞭なる論證が、見る事を欲する人に對しては與へられてゐる。

然るに吾が『內在的批判』者はかういふ、『私（高田教授）をして云はしむれば、商品の價値に關する平均原理、即ち價値の大さが社會的に必要とされる平均の勞働時間によりて定まると云ふ主張にふくまれたる「平均的のものゝ支配」と云ふ見方が何等の論證を與へられたるものではない。而してそれは到底論證せられ得ざるものである』（經濟論叢　第三十卷　第一號　一一三頁）と。マルクスは何時でも、批評家達によりて『獨斷』家とされる。だが、實は何時もマルクスは『獨斷』をしてゐな

い。『獨斷』家であるのは、かゝるものとして名けられるマルクス自身ではなくして、彼を理解しない、又は理解しやうと欲しないところの批評家達であるのを常とする。彼等はマルクスを獨斷家であると獨斷する。吾が『内在的批判』者によるとこの『内在的批判』は『マルクス價値論の主張を許してそれに從ふ、而してかゝる立場に立ちて（傍點は向坂）その理論的歸結を求める……』事であつた。が、事實はマルクスの理論の誤解の上に立ちて、その理論的歸結が求められてゐる。

二

地代を論ぜんとする吾々は、その前提として必要なる市場價値の理論に、多少ながら居し過ぎた樣である。直に本來の地代に入る可きであるが、しばらく落流によりて運轉せられる工場に足をとゞめなければならぬ。更にこの事は『内在的批判』者の批判ぶりを見るためにも必要なのである。それから今一つ斷つておきたい事は、この論文では、たゞ所謂對差地代のみを論ずるに留り、他の地代形態には論及しない事である。それは一つには限られたる紙面の關係からであるが、むしろ批評家の論難が未だ他の形態に及んでゐないせいでもあるのである。

さて、マルクスは資本論、第三卷に『依つて以つて地代を取扱ふべき諸項目は、左の通りである』として、A、對差地代と云ふ中に、（一）對差地代の概念。水力についての例解。嚴密の意味の農業地代への推轉……云々。（改造社版、第五冊、二六七頁）と書いてゐるところによつても推知し得られる通り、落流による對差地代の例解は極めて重要なる意味を有する。そして私は、この落流による例解によりて對差『地代の一般的性質』を示し、これを『嚴密の意味の地代』から分つてゐる事に留意したく思ふ。

マルクスは先づ『一國の工場の壓倒的多數が蒸氣機關に依つて運轉せられ、その中の或る少數のものだけが自然的の落流に依つて運轉せられると假定』する。更にこの生産部門の平均調節的な生産價格は一一五である。その中には一五パーセントの平均利潤を含むでゐると假定される。即ちこの生産部門の全商品は一一五といふ平均價格で賣られる。水力を以つて運轉される少數の工場に於ては、費用價格は一〇〇でなくして九〇である。當該商品量の市場調節的生産價格は一一五であるから、水

には京都の奥村甚之助氏の除名によつて、その過去の輝かしき鬪爭歷史を持つ鬪士を失ひ、次に細迫傳書記長の除名によつて、多年彈壓の砲火の下に腕を組んで共に戰ひ進んだ僚友を失つたのだ。そこへ今また、我々はじめ全黨員の信賴を一身にあつめてゐる『同志河上』を被除名者のリストの上に一つ加へるといふが如きことは、私としても堪へられないことであるが、しかしそれよりも河上氏のためにも、わが勞農黨のためにも、共に取らないことだ。かくて私は、この際、河上氏の脫黨意志を承認するのが何れの方面から見ても現狀の下に於ける萬全の策とすべきではなからうかと考へたが、とにかく何よりも先づそれを常任委員會に諮つてみることを、河上氏に約束したのであつた。

常任委員會はやがて開かれた。河上氏の提議はなされた。常任委員會はそれを正式に議題に上ぼせ、數時間に亘つて討議を重ねた。その結果、『河上氏が即時解消意見を持たれるに至つたことは如何ともしがたいことだが、それを黨機關紙を通じて發表することは、黨規上許すべからざることである。それに擴大中央執行委員會も間近に迫つて來てゐることであるから、この席で各自充分に意見を述べ、全國の同志と共に徹底的に討議をつくした上で黨の意見を決めるやうに事を運ぶのが、この際黨本部の責任だと思ふ。殊に脫黨云々の意見は速かに撤回して貰ひたい』といふ意見が、そこでは壓倒的多數を占めたが、しかし結局最後の決定を見ずに終つた。

六　陰晦なる一週間

慌たゞしき日が、明けては暮れて行つた。

擴大中央執行委員會の期日は、揚げ潮の如く押し迫りつゝあつた。黨本部員は每日、盲目のやうに狂奔した。それでも、山と積もつてゐた準備事務は、早急には片附きかねた。そこへ河上氏に係る新たな難問題が、また持ち上がつて來たのだ。しかも、それは最も丁寧なる取り扱ひ方を必要とするものであつた。我々は、我々の耐忍力が今極度に手きびしく試練されつゝあつたことを痛感した。

長い話を短くしよう。河上氏の黨即時解消意見を機關紙を通じて發表したいとの願望は、日を追うて益々頑強になるばかりであつた。と同時に、それにつれて氏の脫黨意志は何時とな

く、どこかへ吹き飛んでしまつたやうになつて、本人はじめ誰もが最早問題にしなくなつてしまつた。

他方、河上氏の機關紙利用を差し止めようとする常任委員會の意志もまた、全體としては、今度こそ最早動かすべからざるものとなつた。たゞ神道および上村の兩常任だけが、何故か段々と、河上氏に機關紙を通じて黨即時解體論を發表する自由を許すべきだといふ意見に傾いて行つた跡が、明かに見られるやうになつた。そして兩常任は、さうした意見を例の『黨内批判の自由』に結びつけて主張するやうになつた。

だが我々は、『我々が黨内デモクラシーの精神に忠實であればあるほど黨の正式機關を尊重しなければならないものであり、そして嚴格にその立場から、黨内批判の自由はあくまで黨規に即して行使されなければならないものだ』といふ我々の當初からの主張を枉げることは出來なかつた。黨に――そして黨を通じて無產階級に――對する我々の責任感が、その態度を我々に嚴命したのだ。

かうして、僅か二三日の短い期間のうちに、紆餘曲折を極めた交渉折衝が兩側の間に行はれたが、十月十三日の常任委員會に於ては、神道、石原の兩常任の斡旋によつて、河上氏から『次號の機關紙〔十月二十一日發行〕は常任委員會の方針によつて編輯する』との言質を得たので、我々は一應の小康を得たやうに感じた。ところが、翌々十五日の常任委員會――この委員會には河上氏は欠席して、そしてそれ以後ずつと出席しなくなつた――では、またいつもの問題が蒸し返へされさうになつた形勢が見えた。即ちその席上で上村常任が再び、『河上氏に機關紙の上で氏の意見を發表させてはどうか？』といふ提議を執拗に持ちかけた。上村氏はそれに理由づけるべく、『實は今日私は河上氏に呼び寄せられて數時間會見をして來たのだが、その際河上氏は、發展的解消論の範圍内で意見を書くと言つてゐたから』との意味のことを述べた。我々は、河上氏の數日來の言說から考へて、『さういふことは絕對にあり得べからざることだ』と考へた。我々は寧ろ河上氏が『即時解體もまた發展的解消の一形態だといつたやうなコジツケ的議論に隠れて過日來のその意見を述べようとして居るのだらう』と直感した。といつて、『上村氏の折角の提議をムゲに撥ね附けるのは餘りにも角が立ちすぎる』と考へたので、結局常任委員會は、『では兎に角、河

上氏があくまで機關紙の上にその意見を發表したいといふ願望を固執するならば、先づその原稿を常任委員會に提出せしめ、そして常任委員會がそれを審議した上で、「これなら宜しい」との認定を與へた場合にのみ、河上氏にそれを許すことにしよう』といふことを決議し、更らに石原常任を交渉委員に擧げて、常任委員會のこの意向を河上氏に傳達せしめ、且つ、河上氏のそれに對する回答を齎らし歸らしめることとに相談をまとめた。

翌十六日河上氏との會見交渉を遂げた石原常任は、十七日の常任委員會に於て『河上氏は常任委員會の提案に應諾した』と報告した。我々はそれを聞いて、今から思ふと鈍（おぞ）ましくも、再び愁眉を開いた。少くとも我々は、憂鬱なる連日の霖雨が止んで雲間さはやかに天日の微光を眺めた位に感じて喜んだ。我々の河上氏等に對する信任は、かくの如く最後まで失はれなかつたのである。その夜の決議により、我々の四名の常任委員は、數日間黨本部を明けて、關西遊說に出掛けることになつた。

七　最後の破局

我々の關西遊說中に、東京に於て河上氏が如何に常任委員會へのあれほど固い約束を破棄したか、——そして如何に氏が俗悪デロを極めて罵倒した細迫書記長が歩んだ道を精密にそのまま追つかけて行つたかは、私が本文の劈頭に於て述べた通りである。

更らにまた、過去數週間以來曖昧極まる態度を持續して來た神道氏が、その際輕業の如く機敏に河上氏の傘下に乘り移つて行つたことは、我々には充分首肯出來たことである。たゞ十五日の常任委員會ではまだ、黨即時解體論には反對だと稱してゐた上村氏が、咄嗟の間に兩氏の道伴れとして引ツ浚つて行かれたことは、多少意外の感がしないでもなかつた。無論、上村氏が最近に至つて頻繁に兩氏と往復するやうになつてゐたことは事實だが、しかし苟しくも階級鬪士を以て任じてゐた人物が、さほども無雜作至極に他人の蓄音機に變はつてしまへるといふことは、我々には全然唯事のやうにも思はれない節がある。細迫書記長は事件の直後、『上村氏は交叉點で電車の乘り換へを間違へたやうなものだ』と冷評したとか傳へられてゐるが、それはしかし、たゞ獨り上村氏の場合のみに限つたことではな

い細迫氏自身はじめ他の諸氏も、恐らく身に沁みて思ひ當ることがあらう。とにかく、柄になく口先に×××言辭を高唱しつつ傲然と我々の陣營を見棄て去つたことにかけては、それらすべての諸氏の誰れ彼れに差別がなかつたのである。

私たちが神戸にゐて河上氏等三氏の裏切り行爲を憤慨してゐる間に、東京の黨本部に於ては、二三の書記たちの怒りがまさに絶頂に達してゐた。それらの書記たちは、機關紙印刷の日、從來の久しき慣行に從つて、その發送に從事すべく、上村氏宅で手ぐすね引いてその刷り上りを待つてゐた。ところへ河上氏の方から電話がかゝつて『機關紙の印刷が遲れたから、明朝十時頃上村氏宅に届ける』と言つて來たので『それでは』と言つて、その夜はそれらの書記たちは同氏宅で安んじて寢に就いた。

ところが翌朝十時になつても新聞は届かないし、河上氏の方からも何の音沙汰もないので、不思議に思つて印刷處へ出かけて問ひ質したが、『知らぬ存ぜぬ』の返答に益々疑惑を深めた書記たちは、躍起となつて小一時間も押問答を續けた後、結局『萬事は河上氏の口から聽いて下さい』との言葉だけを得て、早速河上氏および一二の機關紙部員を歴訪したが要領を得ず、且上村氏宅に引き揚げたところ、探しあぐねた機關紙は上村氏宅の中から上村氏自身の手によつて、奔命に疲れた書記の面前に運び出されたのである。それは夕方の四時近くのことであつた。そして上村氏の說明による、機關紙は前晩全部刷りあがつたが、それはいつになく印刷所から即刻自動車で河上氏の宅に運ばれて行き、そこで秘密裡に發送濟みになつてしまつてゐたのである。それらの書記たちは、かくして河上氏等によつて、甘々と一杯喰はされ、眞ツ赤になつて怒つたが追ツつかず、結局次の通りに告白して自らその昂奮を抑へた。曰く、「「『一體河上氏や神道氏等は、何のためにかゝる卑劣極まる行動を取らざるを得なかつたのか？ 從來氏等の階級鬪士としての人格を信じ切つてゐた黨本部員は、こと茲に至つて、始めて自分達のお人好しを苦笑するより外なかつたのである。』

神戸にゐた私へは、書記局から『スグカヘレ』との電報が打たれた。だが私は、『萬策つきた上は仕方がない』とも考へたし、それに『大衆へ の約束は破るべきでない』とも考へたか

ら、所定のプログラムを全部終了して、ひたすら善後處置を思案しながら、二十三日の朝東京に歸りついた。

その夜、常任委員會は黨本部に於て正式會議を開き、河上氏等三氏の黨規蹂躙問題を徹底的に討議した。

同夜の會議は公開のものとして持たれた。そして黨本部は特に、東京府支部聯合會所屬の黨員たち、および折柄地方から上京してゐた二三の黨員たちの傍聽を許し、あくまで大衆の面前に於て問題を討議する方針を採つた。

更らに黨本部は、河上、上村、神道の三氏にも十二分に言論をつくさしめようとする趣旨から、正式に招集狀を發した。だが、三氏は定刻になつても姿を見せなかつた。そこで常任委員會は三氏の來場まで開會時間を延期することにし、特に書記を派して三氏の出席を促したが、三氏は言を左右に托して、いつかな出席を肯んじなかつた。そこで始めて開會が宣せられ、議事が進められた。數時間に亘つて樣々と討論を鬪はした後、同夜出席の常任委員の全部は、河上氏等三氏の黨破壞の陰謀的計畫『許すべからざる黨規紊亂』と認め、滿場一致、全責任を以て三氏の即時除名を決議し、同時にそれに附帶する聲明書を發表した。

かくして、過去數週間に亘り、始終河上氏等の反復常なき態度に惱まされ通しながらも、あくまで隱忍に隱忍を重ね自重に自重を積んで來た黨本部は、今や事件が最高潮に達したこの瞬間に、見事にも快刀一揮、十重に二十重に黨の手足に絡みついて甚だしくその活動を妨げてゐた亂麻を斷ち切り、數日のうちに開かるべき擴大中央執行委員會を待つばかりとなつたのだ。とはいへ、その最後の手術は、極度に緊張した悲壯なシーンを展開したのである。

十一月一日二日に開かれた擴大中央執行委員會に於ては、全國から來り集まつた中央委員および支部代表者たちが、如何に無條件的に黨本部の經過報告を承認したか、如何に熱烈に勞農政治鬪爭同盟への發展轉化を目標とした今後の活動方針を決定した黨本部議案を支持して河上氏等の黨即時解體論を一蹴したか、如何に滿場一致嵐の如き拍手を以てその除名處分に賛意を表したか、また如何に潑剌たる元氣に滿ちつゝ今後の益々激化しゆくべき鬪爭への充分の準備と方針とを懷いて各地に歸つて行つたか、等々については、今は詳說する必要はあるまい。

たゞ茲で一言附記しておきたいことは、擴大中央執行委員會に於ても、黨本部はあくまで階級的に公明正大な態度を以て臨み、何よりも先づ河上氏等三氏を會議に招集し、大衆の面前に於て莅會に對決的討論を行はうとの決意に基き、その日の會議に諮つた上で、特に數名の委員を派して三氏を迎へにやつた。ところが氏等の一行が會場に辿り着いたとき、臨場の警官は、氏等の行動に對する憤激のために醸された會場の空氣が險悪だとの理由の下に、氏等に保護檢束を加へた。そのことが會場に知れたとき、會衆一同に忽ち憤然として責任警官を詰責し、更らに全會の責任を以て三氏の身邊の安全を保證することを特に決議し、且つ數名の委員をあげて所轄警察署に赴き、署長に面會して三氏の釋放を要求せしめた。

交渉委員は即刻その使命を帶びて、警察署に出掛けて署長と交渉し、所要の件につき一札を入れてまで擴大中央執行委員會の要求を頑硬に主張した。それで署長もやツとそれに應諾して、直ちに氏等を釋放した。ところが今度は、その場に居た河上氏等三氏の外に細迫舊書記長その他の幾人かが加はつて一團が鳩首協議した末、遂に『擴大中央執行委員會には出席しない』との回答を交渉委員に向つてなした。

交渉委員が會議に歸つて來て、如上の事情の顛末を報告したときには、全會場には、また一ト頻り怒聲が爆發した。河上氏等一派は、口に×××言辭を弄しながら、その行動の上に餘りにも怯懦な本質を暴露し、更らに始終『言論の抑壓』の口實を以て黨本部を攻撃しながら、今や黨本部がかくも公明正大なる態度に出て、大衆の面前に於て氏等に自由に發言する機會を無條件的に與へてゐるのに、氏等は却てそれには見苦しくも尻込みをして極力それを利用することを拒否したのだ！　氏等の階級鬪士の風上に置けないかゝる醜陋なる態度は、つい先き頃まで氏等の上に深き信頼を繋いでゐた全會衆をして、抑へがたき憤激を感ぜしめたと同時に、一脈幻滅の悲哀をも味はしめないで措かなかつた。

以上我々は、事件の經過、および關係三氏の態度行動、ならびにそれに對する黨本部の處置について、その荒筋だけをなるべく簡單に物語つたつもりではあるが、それでも相當に長いものとなつた。我々は讀者諸君に可なりの倦怠感を與へたことと

賤れ且つ謝する。だがそれは、以下に於て氏等の『理論』を檢討し批判し、その正體を暴露しようとしてゐる我々にとつて、絶對に不可避的のことであつたのだ。何となれば、氏等の理論は、究竟その本質に於て、氏等自身の裏切り的態度行動を合理化するために揑ッち上げた饒舌以外の何物でもないからである。

後篇　河上氏等の振り翳す『理論』とその批判

一　氏等の『理論』の中心點

多年の同志を裏切つて我々の陣營を見棄て去つた河上氏等一派は、その陋劣なる態度行動に最後の仕揚げを施した瞬間から、極力その合理化のための『理論』の雨を降らせた。それはまづその端を十月二十一日の『勞働農民新聞』に掲載された『勞農黨の發展的解消のために殘された唯一の途としての戰鬪的解體』と題する三氏連名の聲明書に發し、次いで河上氏單獨署名の『有害物としての勞農政黨』に及び、尙ほ當分の間はヅルヽヽベッタリに續けられてゆくことであらう。

河上氏等は頻りに、『勞農黨本部は我々に對して理論の相手になることを避ける』と言つてゐる。事實、我々は從來久しく、我々の實踐の上に何等の生命を吹き込んだことのない河上氏の机上の××『理論』には、氏の氣に入るほどの敬意を倂て拂つたことがなかつた。また我々にはさうしてゐる暇もなかつたし、必要もなかつた。だが今や、氏の方から積極的に挑戰して來た以上、我々は一應それに答へておかなければならないことを感じる。一體氏等の聲明書およびその後の發言の上に展開されたる氏等の――といふよりは、寧ろ明かにその執筆者である河上氏の『理論』の中心點は、どういふ所におかれてゐるのであらうか？

氏はその論述に於て、足許も危ぶなかしげに、縷々幾千萬言を列ねて倦むところを知らないやうであるが、その中から特に中心點にされてゐる要點を摘出すれば、大體次の通りの二三の極めて空漠たる抽象原則的テーゼであり、履き違への公式論的規定である。

（一）『勞農政黨』――普通にいふ『無産政黨』――の行ふ日常鬪爭は改良主義日常鬪爭の埒外に止まるものであ

る。

(二) 改良主義日常鬪爭は勞働者農民の解放の窮極目的に結び附けられてゐるものではないから、斷然×××の妨害物である。

(三) 如上の理由により、改良主義日常鬪爭しか行ひ得ない勞農政黨一般は反動的役割しか演じ得ないものであるから、その何れたるを問はず、絶對に排撃し、破壞すべきもので

(四) 勞農黨はさうした勞農政黨の一つであつて、斷じて勞農鬪爭同盟に轉化し得ないものであり、且つ益々反動的政黨として固定化しようとしてゐるものであるから、一刻も早く解消せしめるべきものである。

此等の全『理論』――氏等はそれを『戰鬪的解體論』の名で呼んでゐる――は、實に以上の諸論點を骨子として組み立てられてゐるのであるが、我々は以下、それらを順次に論駁して行くであらう。

二 勞農黨と勞農政治鬪爭同盟

我々はまづ第一に、氏等の理論の出發點を明示し、氏等が今立つてゐる立場を規定しておかねばならぬ。

讀者諸君は、我々が今しがた此等の理論の骨子として擧げた諸論點の最後の項目のうちに、『勞農黨は勞農鬪爭同盟に轉化し得ない』といふ言葉を見出されたであらう。氏等の『戰鬪的解體論』は、實はそこから出發してゐるものである。從つて我々は、本論に入る前に、先づ茲で、その『勞農鬪爭同盟』の概念に對する我々の最近の理解――我々がそれを或る程度まで明確に理解し始めたのは、比較的最近になつてからであるのだ――について一言を附け加へておくことが必要だと思ふ。

我々は先きに『事件の經過』を敍述してゐた際に、數個月前わが勞農黨內に第一次解消問題が現はれた直後から、我々の陣營に於て『勞農鬪爭同盟』の本質、役割、組織形態、等々に對する討論が開始されたことを述べた。そして、それに對する直接の刺激がコミンターン第六回大會の『植民地半植民地に於ける××××に關するテーゼ』中の勞農政黨および勞農同盟に關する規定に對して河上氏が特に我々の注意を喚起した事實によつて與へられたといふ一點は、我々がどこまでも率直に認めな

ければならないことである。黨本部はそれを基礎にして討論を進めたのだが、この方面に於て常に率先して熱心に研究の歩を進め、絶えず常任委員會にその結果を報告することを怠らなかつた功勞者は、現在の勞農黨の書記長代理田部井健次君である。

到達されたる討論の成果は、黨本部から過日の擴大中央執行委員會に提出された一議案（『第一議案――勞農黨の本質の究明並にその發展方向決定の件』）の一部として、それに收められてゐる。そこでは、『勞農政治鬪爭同盟』――黨本部の該議案は『勞農鬪爭同盟』をかく呼んでゐる――の本質を要約して、次の如く規定してゐる。

（イ）勞農政治鬪爭同盟は、資本家地主の反動的ブロックに對抗する勞働者農民の鬪爭的ブロックの組織的に實現されたものである。

（ロ）勞農政治鬪爭同盟は、勞働組合の代表者（先進分子）と農民組合の代表者（先進分子）とによつて構成されたる規律ある政治的鬪爭團である。したがつてそれは、實質上、勞働組合並に農民組合の最も戰鬪的な全國的政治鬪爭委員會の性質を持つたものである。

（ハ）勞農政治鬪爭同盟の中心的任務は、勞働者階級と農民大衆との協力による日常政治鬪爭を不斷に展開すること、並にそれを通じて勞働者階級と農民大衆との鞏固なる戰鬪的ブロックを確立することにある。

黨本部の議案は、以上の概括的規定から出發して、更らに勞農政治鬪爭同盟が將來その出現の曉には持たなければならない役割、組織形態、等々を、現在の視點から展望し得られる限りに於て明細に規定し、最後にそれと勞農政黨との相異點の解剖にまで及んでゐるが、我々は今玆にそれをこゝに轉載してゐる餘裕を持たないことを遺憾とし、讀者諸君の注意を直接に試案そのものに惹かうとするものである。

尙ほ玆で一言附け加へておきたいことは、我々は、わが勞農黨創立以來引き續き、自黨の本質を些か漠然と『勞働者農民の戰鬪的同盟』として規定して來た。これは無論『わが勞農黨は工場農村に於ける戰鬪的勞働者農民大衆を中心勢力として結集され資本家地主およびその政治的權力に對して鬪爭する一個の政治的ブロックだ』といふ意味に於てゞある。その限りに於

て、右の規定は決して間違つてゐるものではない。だが我々が今や、たとへ如何なる程度に於ても完全とはいへないにもせよ、より明確に規定されたる勞農政治鬪爭同盟の概念への理解に到達した以上、我々は現在の勞農黨に對して與へられた右の規定を放棄することを決議したのである。それは決して、勞農黨の性質が變はつたことを意味するものではない。それはひとえに、概念の混亂を防がうとする用意から來たのである。

かくて現在の勞農黨は、我々の規定によつても、たしかに勞農政黨の一つである。だが、同時にそれは、出來るだけ近き將來に於ける勞農政治鬪爭同盟の樹立を目標として、それへの發展轉化の方向へ全黨の努力を意識的に向けてゐるわが國唯一の勞農政黨である。尙ほこの點に關しては、直ぐ後にもつと多く說明するであらう。

三　河上氏等の立場とわが勞農黨の立場

出來るだけ近き將來に於ける勞農政治鬪爭同盟の樹立を絕對的に必要と見てゐる點に於ては、氏等の立場も我々の立場も一つである。從つて、當面そこが氏等と我々との間の論爭の焦點となつてゐるのではない。

次に、現在の客觀的狀勢の下に於て勞農政治鬪爭同盟樹立のための主體的および客觀的諸條件が成熟するまではまだ相當に距離があると見てゐる點に於ても、氏等と我々との間には決して大なる見解の相異がないやうである。從つて問題の核心は、そこにある譯でもない。

更らにまた、如何なる勞農政黨も――從つて現在の勞農黨も――今の形態の儘では決して勞農政治鬪爭同盟に轉化し得るものではない――何となれば、勞農政黨の本質および組織形態と勞農政治鬪爭同盟の本質および組織形態との間には或る根本的な差異が存してゐるから。勞農黨本部から第四回擴大中央執行委員會へ提出の第一議案參照。――と見てゐる點に於ても、氏等と我々とに全然意見が一致してゐる。從つて、問題の核心はそこにある譯でもない。

氏等と我々とが步む道の分岐點は、實に勞農政治鬪爭同盟に行き着くための手段の上にあるのだ。

とはいふものゝ、河上氏等はたゞ漠然と勞農政治鬪爭同盟への展望を前にしてゐるだけで、何等具體的にそれへ行き着くた

めの道を指し示してゐないのだ。從つて氏等の歩まうとしてゐる道の終點と勞農政治鬪爭同盟との間には、不測の深淵が大きな口を開いて氏等の落ち込むのを待つてゐる。否、たゞそれだけではない。氏等はそれへの途上で徒らに聲を張り上げて、『勞農黨を即時解體しろ！』と怒號し、全勞農黨員をして現在遂行してゐる一切の對支配階級鬪爭を放棄せしめて、氏等の道伴れとならしめようとする意圖をさへ、餘りにも明瞭に示してゐる。

我々の――わが勞農黨の――立場は、全然反對の方向を指し示してゐる。我々は、まづ現在勞農黨の旗の下に遂行されてゐるあらゆる鬪爭を今後益々強烈に不斷に前方に押し進めて行くことによつて、あくまで全力的に勞農政治鬪爭同盟の樹立の諸條件の成熟の促進に貢獻し、そして最後にそれが樹立された曉には、その時こそ斷然潔よく一擧自黨を解體し、幾萬の全黨員が一體としてその中に沒入し、わが黨の組織の內部に蓄積されて來た全鬪爭エネルギーをそこで、より有意義に活かして行かうといふのである。これこそが、わが勞農黨が無産階級階級運動全體の上から見て最も有意義になし得る發展轉化の唯一の道である。わが勞農黨が從來用ひ來つた『發展的解消』といふ言葉は、全くかゝる內容を有してゐるものである。從つて、我々は、實は前々からこの言葉にかゝる使用を喜ばないで、唯それの生成の歷史的關係から、いはゞ惰性的に口にして來たのにすぎないものであり、今でもさうしてゐるのであるが、しかし今や我々は、斷然それを揚棄して、その代りに、もつと適切な『發展轉化』といふ慣用語を用ふることにする方がいゝし、また決して晩くはないと考へるのだ。

右の一點を、今少し明細に展開してみよう。

四　勞農黨の進むべき道

我々の立場から見れば、勞農政治鬪爭同盟を出來るだけ近き將來に於て樹立することが、よし如何に必要であるにもせよ、もと〳〵それは天から降つて來るものでもなければ、地から湧いて出るものでもない。それはあくまで、戰鬪的勞働者農民大衆を中心勢力として工場から、農村から、および廣汎なる大衆の深海の中から捲き起る鬪爭の潮の進行過程に於て實現されなければならないものであるのだ。

いふまでもなく、わが勞農黨は、さうした鬪爭の全部を自己の肩上に背負つて立つものではない。さういふことは、現實を正視するものには、まるで夢のやうな話だ。だが、同時にわが勞農黨は、さうした鬪爭の一の相當重要なる部署を擔當しようと決意して立つてゐるものであり、また擔當し得る能力を有してゐることを確信してゐるものである。我々は今實際、よし無力でなくとも、たしかに微力である。だがただ單に無力であり微力であるからといふだけの理由によつて直ちに自己を解體してしまはうといふのは、それこそまさに敗北主義者の行き方だ。わが勞農黨に常住不斷にそれ自體の自己批判によつて、その無力微力の原因を突きとめ抉ぐり出す必要を意識してゐる。そして、その無力微力の一原因は、度々の彈壓の嵐のために我々の陣營から幾多の百戰練磨の優ぐれた鬪士たちが奪はれて行つたといふ事實を別にしては、絶えず内外から押し迫まつて來る黨攪亂者の手によるあらゆる策動であつたことも、掩ふべからざる事實である。我々は、我々の本來の使命である對支配階級の鬪爭を今後一層果敢に遂行する過程に於て、それらの一切の内外の黨攪亂者を殘りなく一掃する必要があることを、この際一層痛切に意識せしめられるのである。

かゝる根本態度を持してゐるわが勞農黨は、勞農政治鬪爭同盟樹立可能の時期を一刻も早く招來する必要を痛切に意識してゐるだけに、それだけ益々全力的にその成立および活動を保證し得べき一切の條件を作り出すことに貢獻しようとしてゐるものである。そのためにわが勞農黨は、勞働組合および農民組合——殊に左翼組合——の再建並に擴大强化に關する從來の鬪爭方針を一層具體的な合理的なものにし、それを一層敏活に效果的に着々今後の實踐に移して行き、更らに大衆鬪爭の激發とその政治的指導とを益々廣汎に益々決死的に遂行し、同時にあくまで戰鬪的な左翼的指導精神による無產階級戰線統一實現の方向に捲土重來の勢を以て驀進し、更らにすべての鬪爭を全被壓迫大衆の政治的自由獲得鬪爭にまですさまじく高潮せしめて行き、かくして資本家地主およびその政治的權力に對するわが黨の突擊力を刻一刻無限に强化して行かうとしてゐるのである。かかることこそが、勞農政治鬪爭同盟への發展轉化の道程に於てわが黨に課せられたる一の歷史的使命であり、また當面の客觀的狀勢の下に於てわが黨が全黨の力を擧げて遂行しなければ

ならない最も實際的な日常任務である。

如上の意味に於てわが勞農黨は、現在の力關係の下では明かに一個の勞農政黨であるに相違ないが、しかしこの大衆の生活と自由とのための日常鬪爭を通じて、出來るだけ近き將來に於てかゝる力關係のバランスを轉換することによつて、より高度な、より強大な、より×××に行動し得るガッシリと確立されてあるべき勞農政治鬪爭同盟に沒入——發展轉化——して行かうとする目的を明かに意識しつゝ自己の今後の一切の活動を律しようと決定して立つてゐるところの現在は一個の勞農政黨である。しかも、かゝる根本方針が、新たに第四回擴大中央執行委員會で滿場一致可決確定された今日、もはや全黨員中、わが勞農黨が未來永劫今日の組織形態のまゝで固定化しようなどと考へてゐるものは唯の一人もなくなつた譯だ。換言すれば全黨員は今や益々明確なる目標の下にわが勞農黨を發展的に把握することができるやうになつて來た譯である。そして、我々の陣營に何等かの形での關係を持ちながら、尚ほこの點を疑ひ得るものは、たゞ、舊勞働農民黨時代以來、互に生死を誓つて彈壓の嵐の下に腕を組んで惡戰苦鬪しつゝ、滿身創痍の姿で今日まで黨の旗の下に結集して來た——または一切の苦難を覺悟で新たに我々の陣營に馳せ加はつて來た——黨内幾多の戰鬪的勞働者農民の本質を理解し信頼することが出來ないやうな、過度にヒステリックな、懷疑的な、從つて非實踐的な、そして今から考へると初めから同志意識を持ち合はせてゐなかつた一聯の高踏派インテリだけである。

五　實踐意思を伴はない河上氏等の立場——方法論上の根本的誤謬

河上氏等は大衆の現實の要求——氏等はいはゆる改良主義的日常鬪爭に對する氏等の獨斷的な過少評價もしくは消極評價によつてそれを卒直に蔑げすんでゐるのだが——から遠く懸け離れた或る高き立場——氏等は傲然とそれを『勞農黨を超越した立場』と呼んでゐる——から、全勞農黨員に『勞農黨を即時解體しろ！』と號令する。しかもたゞそれを號令する切りで、勞農黨全黨員の今後行くべき道を具體的には少しも指し示してゐないのだ。氏等はいふであらう『勞働組合へ！　農民組合へ！　更らにそれへ行けないものは、俺達に尾いて、階級鬪爭には有益でなくとも無害な一隅へ引ッ込め！　と叫んでゐるではない

か?』と。

よろしい! だがその『無上命令』は、既に勞農組合の內部にゐて、しかも氏等の黨解體論にも拘らず、勞農黨の必要を强く意識しつゝ黨の旗を守つてゐるものには、一體何の足しになるのか? また、氏の蹤を追つ驅けて『階級鬪爭には有益でなくとも無害な』一隅に引ツ込むことを快しとしないものには、それは一體何の慰めになるのか? 結局それは高々、氏等が實質上狙つてゐるらしく見える極少數のインテリ分子を勞働組合に向つて驅り立てる以外に何等の効能もないではないか?

それにしても、まだ難點が殘る。氏等は一方では高聲に、『すべての勞農政黨の行ふ日常鬪爭は『窮極目標と結び附かない――氏等の意味では明かに『×××の指導下に立たない』――ものであり、從つて改良主義的日常鬪爭の範圍を出ないものであり、×××妨害物だから、それらの一切を擧げて即時××せよ!』と號令してゐるのだ。だから、その前提からの論理の當然の歸結は明かに、『少くとも現在の一切の合法組合もまた即時×××の指導下に持ち來すなり、即時××するなりせよ!』といふ結論に導かれることになるのではないか? で、いやしくも氏等が少しでも大衆に責任を感ずる以上當然續いてさうした號令を發しなければならない筈だから、てツきりさうするのだらうと思つてゐると、これはまた餘りにも案に相違して、氏等は却て『顧みて他を言ふ』態度を文字通りに取つてゐる。即ち氏等は、『吾々はこの〔勞農黨の〕解消を契機として何等かの新たなる組織を造らんとする者でもなく、また解消後に於ける勞働組合および農民組合等々の具體的方針につき……妄りに〔傍點筆者〕指導的意見を述べんとする者でもない』(勞農黨反對派聲明書)といふのだ。無論氏等は、この文句の前後左右中間にいろんな夾雜物をゴタ〳〵と並べて極力その全體の意味を濁ごさうとしてゐるが、それにも拘らず、氏等の眞意はそこに充分に見え透いてゐる。それでも『尙ほ解らない』といふなら、人は氏等に向つて、『では一切の合法組合を××するなり、××××指導下にある非合法組合に變へるなりしようとしてゐるのか?』と反問してみるがいゝ。さうすれば、次の瞬間にそれを明白に確め得るであらう。

氏等が『吾々この解消を契機として何等かの新たなる組織を造らんとするものでない』といひ、それでも尙ほ安心が出來兼

ねると見えて、三方四方に向つて『幸に誤解なきことを請ふ』と言ひ添へてゐるのは、如何にも纖細を極めた注意といふべきである。氏等よ！　平安なれ！　何人も氏等を毛頭誤解しないであらう。それは誰れもが初めから、氏等の立場には何等の積極的實踐意志を作つてゐなかつたことを知り拔いてゐたからである。考へても見よ！　一の具體的の問題を抽象理論的問題並みに扱つたり、科學的分析を非辯證法的思推――如何にこれが辯證法的討究だと、ゴマカシテみたところで――に摺り替えたり、或る種の行動の實現の可能な條件が全然欠けてゐる時處に於て、それを煽動してみたりするやうな方法論的基礎の上に打ち建てられた主張を現實の世界に向つて放送するものゝ脚下に、どうして積極的實踐意志を作つた立場などが見られようぞ！人は何時でも『青空に翔け昇るぞ！』と高言することが出來る。だが彼が一台の飛行機をも用意しない限りは、誰れもそれを信じないばかりだ。

何等の實踐的意志を作はない立場――いはゆる勞農黨を超越した立場――そして何等の組織的基礎を持たない立場、さうした立場の上に立つて、氏等は一體どうして勞農黨を即時解體に導かうとしてゐるのか？　若しくはその他の何等かの手段でか？　或ひはそれらのすべてのジヤズでか？　何れでも好きなことを勝手にせよ！　戰鬪的勞働者農民の鬪爭エネルギーの結晶として、支配階級の幾度の強襲の煉獄の火に鍛へあげられて、小さいながらも肉のしまつてゐる勞農黨の全肢體は微動だもしないであらう。勞農黨を建設したそれらの戰鬪的勞働者農民は、その組織の内部に蓄積されてゐる全鬪爭エネルギーを、より高度な、より強大な、より×××に行動し得る別の鬪爭組織にまで發展せしめようといふやうな事もなしに、たゞ慢然と針尖で突かれた泡のやうに空中に消散せしめるやうな浪費を、一つの階級的犯罪だと考へてゐる。そして、さうしたことを平氣で號令することは、たゞ大衆に何等の責任を持たない高蹈的インテリの氣まぐれ沙汰にすぎないことを知り拔いてゐるのだ。

河上氏は口を開けばマルクス主義レーニン主義といはれる。だがマルクス主義レーニン主義は、理論と實踐との辯證法的統一の上に築かれてゐるのではないか？　マルクスは實踐こそ眞理のテストだとは敎へなかつたか？　レーニン主義は、×××理論を以て裝はれてゐるプロレタリアートの×を創造するため

に、先づ第二インターナショナルの理論上のドグマを、その尤もらしい様々のスローガンと決議とを『×××大衆鬪爭の火の中で、活きた實踐の火の中で』試錬したのではなかつたか？ 組織による行動を――行動による大衆の××××××××を精神としたのではなかつたか？ 等々。我々の膝下の東洋人も昔から『言ふは易く、行ふは難し』といつて後世を戒めた。

我々は河上氏等の『理論』に於て、何よりもまづ第一に方法論上の根本的誤謬を見る。

六　レーニンは如何に河上博士に助け船を出さないか？

河上氏は更らに、勞農政黨は反動的役割をしか演じないものであり、從つて××の妨害物だから、おしなべて一擧に撲滅してしまふべきであると、誰れに向つてか知らないが號令してゐる。蓋し暴論である。

『辯證法學者』河上博士は、勞働黨の具體的特殊的問題の究明が要求されてゐる時に、勞農政黨一般の抽象的普遍的問題を以て答へられる。もつとも、若し氏がこの場合、『後者を知るのは前者を知るための階梯だ』といはれるならば、それはその限りに於て一應は聞こえる。だが、それにしても、氏が勞農政黨一般の問題について論ずるに當つて、その性質および役割を、時と處との聯關を拔きにして、宇宙大の大風呂敷の下に一擧に概括的に定義づけるのは、無雜作に對象の歷史性を無視するものであり、從つて玆でもまたあまりにも方法論的に亂暴である。マルクス主義は、奴隸制度や封建制度や資本主義に對してすらも、このやうな評價の仕方を我々に命じない。それはたゞ獨り『辯證法學者』河上博士にして、始めてなし得られることである。尙ほこの點には、もつと先の方で、少くとも部分的には、今一應觸れることがあるだらう。

そこで河上氏は、勞農政黨一般への否認の根據として、次のテーゼを投げ與へる。曰く、『改良主義日常鬪爭――河上氏によれば、勞農政黨が行ふ日常鬪爭は、如何なる時と處を論ぜず、また如何なる客觀的狀勢との聯關あるを問はず、一律にこの改良主義日常鬪爭の埒内を一歩も出ることが出來ないのだ――は勞働者農民の×××××のために妨害物であるから、×××日常鬪爭とは峻別して、極力排擊されるべきだ』と。精密にか

ういふ言葉で言はれてゐるのではないが、精密にかういふ意味で言はれてゐる・—

このテーゼは、二つの構成部分に別けることが出來る。その第一は、『改良主義日常鬪爭は勞働者農民の×××××——××——のための妨害物となる』といふことである。その第二は、『改良主義日常鬪爭は××主義日常鬪爭と峻別しなければならない』といふことである。どツちとも、果してさうであらうか？

まづ第一の方から始めよう。

河上氏は自己の『理論』の正しさを論證するために、レーニンの名著『何を爲すべきか？』の中の『大衆の自然成長性と黨の目的意識』に關する部分から長々と引用を試みてゐられる。ところが、玆に悲慘なる滑稽といふべきは、レーニンが切角啓示した眞理も、たゞ河上氏の該博なる知識を證明するに止まつて、氏の助け船には少しもならないばかりでなく、却てその逆になつてゐるのだ。

『何を爲すべきか？』は一九〇二年に書かれたものであるが、現今でも階級鬪爭の中に身を投じてゐるものにとつては、何人にも必讀の書である。それは、ロシアの第一次革命（一九〇五年）直前までノサばつてゐた一聯の經濟主義者の群——河上氏は『經濟主義』といふ言葉はレーニンが「何を爲すべきか？」に於いて用ひてゐる言葉（傍點筆者）だ』といつて居られるが、それはたゞ言葉だけのものではない——の諸主張に向つて巨彈を投じたものである。それらの經濟主義者たちは——といつてそのうちに樣々の部類別けをしなければならないが、まづ大體に於ては——『ロシアに於ける獨立の勞働階級の×××鬪爭に反對し、運動の内部に於ける組合主義的政治行動を傳道し、一般に勞働運動を自由主義的ブルジョアジーの手に引き渡さうとしてゐた』ものである。そしてかゝる立場から、勞働者黨が大衆の自然發生的な、單純に端緒的な要求に根ざす運動を計畫的に指導しつゝそれを意識的行動の水準にまで高めるやうなことをするのを無用有害なお節介だと說いてゐたのである。經濟主義者たちのかゝる自然生長性禮讚論に向つて、レーニンはこの書物を通じて、痛快にも致命的な一擊——河上氏が勞農黨に向つて與へるそれとは大分違つた——を與へたのである。かうした事實を念頭において、レーニンがその書物の中で極

度に黨の目的意識的指導の必要を强調してゐるところを讀むと、我々は今日でもそこに潑剌たる生命の躍動を感じることが出來る。

だが、一たびそこから眼を轉じて河上氏の方を見ると、氏は現實を無視して勝手氣儘に『日本の現在に於ける勞農政黨の擁護者たち』を一律に『日常鬪爭主義者』に仕立てゝしまつて、更らに一層勝手氣儘にも、それらの『日常鬪爭主義者たち』を『ロシアの經濟主義たち』――そこに少しばかりの部類別けをさへもしないで――の仲間に引き入れてしまつてゐられる。それは横から見ても縱から見ても無理無態な、あまりにも概括的な從つてあまりにも無意味な對比論でなくて何だ！　こんなことだけでも、レーニンは河上氏に助け船を出しようがないではないか――

七　河上博士の『日常鬪爭』とは何か？

更らに一步を進めていはう。『何を爲すべきか？』のうち、河上氏の引用された部分の前後でレーニンが最も强調してゐるのは、大衆の中から盛り上がつて來る自然發生的な、單純に端緒的な要求に根ざす日常鬪爭は、その儘に放任しておけば、それがいくら高潮しても、必然に改良主義日常鬪爭の範圍を出るものでないから、黨はどこまでもそれをマルクス主義的に指導しなければならぬ、といふ一要點である。それはレーニンの××××言葉で言へば、『大衆の自然生長性は、我々黨員の、多大の目的意識性を必要とする』ものであり、『大衆の自然發生的な昂まりが强ければ强いほど、運動が益々廣汎なものになるであらうし、從つて、黨の理論上の、ならびに政治上および組織上の仕事には、益々多分の目的意識性が必要になつて來るのである。

かういふ風に、レーニンの論旨は、河上氏の論點とは全く背中合はせになつてゐる。レーニンによれば、大衆の自然發生的な――河上氏のいふ意味では改良主義的な――運動が全土の上に廣汎に卷き起る瞬間こそ、まさにマルクス主義的指導が痛切に必要になつて來る時であり、×××××のためには又となき好地盤である。レーニンは、河上氏のやうに、『×××に結び附けられない』――若しくは改良主義的な――日常鬪爭は××のための妨害物となるなどとは、夢にも言はなかつた。さうい

ふことを言ふ指導者は、××が自己の方へ寄つて來るのを待つてゐる指導者であつて、斷じて××の方へ進んで行く指導者ではないのだ。

　河上氏はそこでは實に繁雜な物の言ひ方をしてゐられるが、それは結局、『改良主義日常鬪爭は勞働者農民の×××××──××──のための防害物だ』といふ一點に歸着するのだ。過日の勞農黨の第四回擴大中央執行委員會の議場でそれを聞いた多くの人々から一齊に、『では、東洋モスや、大島製網所や、新潟の王番田や大蒲原や、等々の爭議で見られたあの勞働者農民の決死的鬪爭のすばらしいシーンは一體どうなのだ？』と批難の聲があがつた。誰れがそれを當然のことでないと言ひ得よう。

　改良主義日常鬪爭を『反×××』なものと一圖に思ひ込んでゐられる河上氏は、揚げ潮に退き潮を厳命したとかいふ昔の西の國の暴君のひそみに倣つて、自然發生的な──河上氏のいふ意味では改良主義的な──日常鬪爭に向つて、大喝一聲『去れ！』と宣したいであらう。それでも、資本の攻擊の益々狂暴化して行く今日、さうした日常鬪爭は工場に農村に街頭に、至るところ不可抗的に益々多く卷き起るであらう。そして若し河上氏に倣つてそれらの一切が××××のものだとすると、──少くとも別の或る狀勢が急速に加はつて來るのでなければ──×××××は日一日と益々我々の立つてゐる地點から遠ざかつて行くことになるであらう。『辯證法學者』河上博士の『理論』は、それをどう始末してくれるつもりか？　玆へ來て、河上氏の右のテーゼの第二部が第一部と握手する。改良主義日常鬪爭と××××日常鬪爭とは、河上氏の頭腦に於て以外では、到底峻別できないものである。我々は現實の日常鬪爭を見て、『これは改良主義的のものだからいけない』とか、『あれは×××××日常鬪爭だからいゝ』などゝ言つて、一々貼り札がして廻はれるものではないのだ。から考へると、河上博士の『理論』の混亂は、氏等が自然發生的な日常鬪爭への改良主義的指導──今日の慣用語で、より適切に言へば社會民主々義的指導──と、それへのマルクス主義的指導との區別を、改良主義日常鬪爭と××××日常鬪爭との區別と履き違へられたから生じたものである。成るほどマルクス主義的指導と社會民主主義的指導との間には雲泥萬里の差があるが、しかし改良主義日常鬪爭と××××日常鬪爭とは、現實の場合に於ては峻別出來るものでもなく、また峻別する必要のないものでもある。無論、自然發生的な日常鬪爭に社會民主主義的指導が加へられる切りで、それに少しもマルクス主義的指導が加へられなければ、それは決して××××鬪爭に轉化するものでないといふことは文

字通りに眞であり、それは又レーニンが特に說明してゐることであるが、それとこれとは、全然別問題なのである。

河上氏はまた、マルスク主義指導とプロレタリアート×の指導とを同一概念としてゐられるが、それは明かに誤謬である。無論一定の客觀的狀勢下に於て最も完全といひ得られるマルクス主義的指導は、ひとり眞のプロレタリアート×の指導下に於てのみ可能だといふのは事實だが、しかし主として或る特殊狀勢の下に於てよしさうした指導が或る他の何物かによつて行はれることがあつても、そしてよしそれが決して完全な意味に於てマルクス主義的とはいへないものであるにしても、とにかくそれが他の何物かであるよりもヨリ多くマルクス主義的なものである限りは、――換言すれば、それがマルクス主義的に見て絕對的條件を具備してゐるとは言へないが、相對的には條件を具備してゐるといへる性質のものである限りは、それをマルクス主義指導だといふに何の差し障りもないのである。それとも、『辯證法學者』河上博士は、『完全なマルクス主義的指導でなければ、絕對にマルクス主義的指導だとはいへない』と言はれるのであらうか？

〔以上は讀者諸君が容易に看取されるであらう通りに、河上博士の『理論』に對する私の腹案の前半である。ここへ來て、もう私にはそれを書き續ける時間の餘裕はなくなつた。で、私はそれを他の機會に讓らなければならない。それから先きの豫定は、その前半に多少の補足を加へることゝ、後半を河上氏が勞農政黨一般および特に勞農黨に與へてゐられる規定に對する批判に充てることであり、それに加へて、全篇の結論に於て、勞農黨を反動呼はりしてそれを破壞することによつてその××××××××を放棄せしめやうと企圖してゐられる河上氏等の態度、行動、『理論』こそがよし如何に×××言辭を以て裝はるにもせよ、實質上に於て最も反動的なものであることを論證しようとしたのである。そこへまで行きつかないうちに擱筆しなければならなくなつたことは、私に取つては遺憾に堪へないことだ。しかし上揭の分で讀者諸君は、そこに後半の論旨の伏線が既にあらかた張られてゐることを明察されたであらう。最後に我々は、勞農政治鬪爭同盟が全大衆の鬪爭の過程に於て樹立されるまで、益々固く勞農黨の旗の下に結束して、河上博士の『理論』の如きものは脚下に一蹴しつゝ×××××××しつゝ不斷に鬪爭から鬪爭への行進を續けるであらうことを誓ふものである。〕

マルクスの地代理論

向坂逸郎

高田保馬教授は、本年一月、經濟論叢に『マルクス價値論の價値論』なる長論文を發表されてゐる。教授は、この論文に於けるマルクス批判を、『多分、內在的批判といふ名稱が與へられ得ると思』はれてゐる。教授によれば、『マルクス價値論の主張を許してそれに從ふ、而してかゝる立場に立ちてその理論的歸結を求める、此歸結がマルクスに於ける他の主張、又はマルクスの認たる事實と矛盾せざるや否や、之を說明しうるや否を考察する、と云ふのが此行きかたである』。云ふまでもなく、マルクス說の上に立ちてその論理的歸結を求め、それがマルクスの他の主張や、マルクスの認めたる他の事實と矛盾せざるや否やを檢討するためには、何よりも先づ、マルクスの立場そのものに對する正しい理解、更にマルクスの他の主張や、その認めたる事實に對する正しい認識が必要であらう。その何れか一つに對して故意又は過失による誤解があるならば、それは內在的批判とやらではないといふ事になる樣だ。教授は賢明にも『多分、內在的批判と云ふ名稱が與へられ得る』と云はれた。

私は、こゝに私自身マルクス地代理論であると解するところのものを述べる。その際、私は高田教授の前記の論文中から地代論に關する限り、時折り觸れて見るつもりである。多分それは『內在的批判』とは何かを明にするであらうと思つてゐる。

一

マルクスに於ては、價値は、生産物に共通なる社會的實體の結晶である。かゝる社會的實體は人間勞働である。財產私有と社會的分業の下に社會の總生産が行はれるところの商品生産社會に於ては、總ての生産的勞働は、個別的に、獨立して一つの

私的勞働として行はれる。總ての生產的勞働は、かくの如く互に獨立してこそあれ、而もそれらが一つの勞働の組織體をなさなければならぬ。でなければ社會それ自身の存在が不可能になるからである。私的勞働を一の社會的連繋に作り上げるものは、生產物の交換である。商品生產社會は、獨立的、私的勞働の間に、交換關係によりて結ばれる一の勞働協力體である。さうしてかゝる協力體を構成する要素として見る時、個々の私的勞働はもはや個別的のものではなくして、社會の有する全勞働の一部分となる。かゝる意味に於て、獨立的生產の各勞働は、私的のもの、個別的のものであるのみでなくして、社會的の側面を得る。マルクスはかういふ。『價値の實體を形成する勞働とは、等一なる人間勞働、換言すれば同一なる人間勞働力の支出を謂ふのである。商品界の價値全體の中に表現される社會の總勞働力は、無數の個別的勞働力から成り立つてゐるが、玆では總て一樣なる人間勞働力と見做される。而してこれらの個別的勞働力の各個は、それが社會の平均勞働力たる性質を有し、また斯くの如き社會的の平均勞働力として作用し、隨つて一商品の生產上に、平均的或は社會的に必要なる勞働時間のみを要する限り、いづれも皆同一なる人間勞働力である。而してその社會的に必要なる勞働時間とは、現在に於ける社會的に標準を成す生產條件と、勞働の熟練及び强度の社會的平均程度とを以つて、何等かの使用價値を生產するに必要なる勞働時間を指すのである』(マルクス、資本論第一卷改造社版第一册 九頁)。

併しながら、現實に於ては、同一生產部門の內部に於て生產される總ての同一種類の商品が、その生產上、必ずしも平均的に又は社會的に必要なる勞働時間を要するものではない。それらの總てが、必ずしも社會的に標準をなす勞働の生產力を以つて生產されるものではない。或るものは、平均以上の、或るものは平均以下の生產條件の下に生產され、從つて平均的に必要なる時間以上の勞働時間を以つて、或はそれ以下の勞働時間を以つて生產される。かくて事實上は、同一種類の商品の中にも、社會的に又は平均的に必要なる勞働時間のみを含有するものと、それ以上の勞働時間を含有するものと、それ以下の勞働時間を含むものとある譯である。

マルクスは、價値の本質を論ずるに當りて、當然にこれらの

偏異を無視した。マルタスは先づ、個々の商品を取り來つて、これらの商品が、同一の生産條件の下に生産された事を假定した。即ち、個々の商品が平均的なる生産條件を以つて生産される事を假定した。かくて、『資本論』第一卷に於ける價値論に於ては、未だ『個別的價値』と『社會的價値』との區別は問題とならなかつた。即ち、『商品に含まれる勞働量は社會的に必要な勞働を代表し、隨つて商品の個別的價値は……社會的價値に一致するといふこと』が前提されてゐた。（資本論　第三卷　改造社版第四冊　一五〇頁）。そこで今、個々の商品を單にかゝるものとして取扱はずして、同一種類の生産部門の全體について見る時に、問題は異なれる樣相を呈して來なければならない。

同一生産部門内の個々の商品は、必ずしも同一生産條件を以つて生産されてゐない。從つて各商品は各々異れる個別的價値を有つてゐる。然るに價値は、各私的勞働が社會の全勞働の中に平均的な性質を代表するものとして、包括される時、始めて價値であつた。それは本來かゝるものとして社會的の性質であつたのである。それ故に同一生産部門内の個別的價値は、それが一つの社會的價値として、即ち一の市場價値として現はれる場合に於てのみ、價値の社會的性質を具體的に實現するものである。そこで吾々が先に、商品の個別的價値は社會的價値と一致せるものとして前提されてゐたといつたのは、次の樣に說明してもよいのである。即ち、『先づ一の生産部門から來る商品全量を一の商品と見做し、且つ同じ種類に屬する多數商品の價格總高が一の價格に總計されてゐるものとして考へるならば、事柄は極めて容易に表現される。斯く假定するとき、個々の商品について言つたことは、或る一定の生産部門に依つて供給されるところの、市場に存する商品大量についても逐一當て嵌る。商品の個別的價値が社會的價値に一致すべきだといふことは、今や、商品總量はその生産上に必要な社會的勞働を含み、而してこの商品總量の價値は市場價値に等しいといふ形に、實現され又は更に進んで規定されてゐる』（資本論　第三卷　改造社版第四冊　一五〇頁）と。

そこで市場價値とは如何なるものになるか？　市場價値は、『一方に於ては、一の生産部面に於いて造られる商品の平均價値と見做すべきで』ある。が、他方に於て、生產諸事情の異常な結合が行はれてゐるところでなければ、最も有利な條件又は

最も不利な條件の下に於て生産された諸商品によりて市場價値が規制されるといふ事はないのであるから、極く一般的に云へば、『一の生産部面の平均的諸條件の下に生産されてその部面の大半を成す商品の個別的價値と見做す』事も出來る。

市場價値は、同一種類の全商品に通じて行はれる同一なる市場價格の變動の中心をなすものであるが、需要と供給との均衡を前提とすれば、同一の商品の市場價格は市場價値に一致する。從つて、この平均價値、又は兩極端の間に存して、その生産部門の生産物の大半を形成する商品量の中位的價値、即ち市場價値以下の個別的價値を有する諸商品は、特別剩餘價値、即ち剩餘利潤を實現し、市場價値以上の個別的價値を有する商品は、その含有する剩餘價値の一部を實現し得ないことになる。

マルクスはかゝる市場價値の成立について抽象的に三つの場合を示してゐる。

第一の場合は、市場價値が中位的諸條件の下に生産された諸商品によりて規制されるものである。この生産部門の商品の大半量が、略同一なる標準的の社會的條件の下に生産され、且つこの部門總商品量中の一小部分がかゝる標準的なる社會的諸條件以下の條件を以つて生産され、他の一小部分がそれ以上の條件を以つて生産されるとすれば、前者の個別的價値は、總量の大半をなす諸商品の中位的の價値よりも大であり、後者の個別的價値はこれより小である。今かゝる兩極の個別的價値が相互に均衡に歸して、この生産部門の商品の平均價値が中位的部分に屬する諸商品の價値に等しくなるとすれば、此の場合に於ける市場價値は、中位的諸條件の下に生産された諸價値に依りて規制される事となる。かくてこの生産部門の商品總量の市場價値は、一切の個別的價値總額に等しい。『この場合には、商品總量の市場價値又は社會的價値――商品總量の中に含まれる必要勞働――は、大半を占むる中位的諸商品の價値に依つて決定される』（資本論　第三卷　改造社版　第四冊　一五一頁）。

第二の場合は、不良なる諸條件の下に生産された商品量が市場價値を規制する場合である。こゝに於ては、不良なる條件の下に生産された商品の價値が、ヨリ優良なる條件の下に生産された商品の價値と均衡に歸する事なく、不良なる條件の下に生産された商品量は、優良なる條件の下に生産された商品量、及び中位的な諸商品量よりも相對的に大量を占めてゐるのであ

る。

第三の場合は、最良の諸條件の下に生產された商品量がこの部門の全商品の最大部分を占め、不良なる條件の下に生產された商品量、及び中位的條件の下に生產された商品量よりも比較的に大である場合である。こゝに於ては最も優良なる諸條件の下に生產された部分が市場價値を調節する。

右の第一の場合について云へば、中位的價値に依つて規制せられるところの、商品總量の市場價値は、個別的價値の總額に等しくなつてゐる。尤も、兩極に於いて生產される諸商品に對しては、この市場價値は平均價値として押しつけられる。即ち、最惡な一極に於いて生產する人々は、個別的價値以下に自己の商品を販賣せねばならず、最良な一極に於いて生產する人々は、個別的價値以上にこれを販賣するのである。

第二の場合に於いては、兩極の下に生產される個別的商品量は相互均衡に歸することなく、不良な諸條件の下に生產された諸商品が決定を與へる。嚴密に云ふと、各個の商品（又は總量の各可除部分）の平均價格若しくは市場價値は、今や相異れる諸條件の下に生產された諸商品の價値合計に依つて與へられる商品總量の總價値と、この總價値の中から個々の商品に歸屬して行く可除部分とに依つて決定されるであらう。斯くして與へられる市場價値は、單に有利な條件の下に生產されたる諸商品の個別的價値以上たるのみでなく、尙ほまた中位的諸條件の下に生產される諸商品の個別的價値以上ともなつてゐるであらう。が、それは、不利なる諸條件の下に生產される諸商品の個別的價値に比べるならば常にヨリ以下にあるであらう。それが如何なる程度までこの個別的價値に接近し、又は終局に於いてこれと一致するに至るかは、一に不利なる諸條件の下に生產される商品量が當該商品部面に占める範圍の如何に懸ることである。需要が些かでも供給を超過するに至れば、不利なる諸條件の下に生產された諸商品の個別的價値が市場價格を規制することになる。

第三の場合については次の樣になる、有利なる諸條件の下に生產された商品量が、單にその反對の一極の諸商品のみでなく、中位的諸條件の下に生產された諸商品に比べてもヨリ大きな範圍を占めるとすれば、市場價値は中位的價値よりも以下となる。兩極と中位部面とに於ける諸價値高の合計に依つて與へ

られる平均價値は、この場合、中位的價値よりも以下となる。それは有利な一極に依つて占められる相對的範圍の如何に從つて中位的價値に近づいたり遠ざかつたりするのである。需要が供給に比して微弱な場合には、有利な位置にある商品部分はその大さの如何に拘らず、自己の價格を個別的價値まで收縮させることに依つて強力的に存在の餘地を占める。供給が需要を遙かに超過した場合を除いては、市場價値は決して最優良條件の下に生産された諸商品の斯かる個別的價値と一致し得るものでない』(資本論、第三卷、改造社版、第四冊、一五二——一五三頁)。

かくの如く、抽象的、一般的に市場價値の成立を論ずるならば、それは常に平均價値として價値の社會的性質を實現してゐる。こゝには平均的なるものが支配してゐる。批評家達は、かくて『マルクスはあくまで、平均原理にたつ』と稱へる。

然らば何故に、市場價値に於て平均的なるものが支配するか?こゝでは競爭が何等の障碍にもぶつつからないからである。商品生産に自然的の制限性がなく、生産者の出來る限り有利に自由に投資し、出來る限り高く賣り、出來る限り多く利得せんとする努力が、無制限に支配し得るからである。總ての商品生産者の、自分自らを優越の地位におかんとする努力が、彼等の間に平均的なるものの支配を作り出すのである。同一種類の商品の生産部門内に於ける生産者の競爭は、先づ當該部門の全商品に對して同一の市場價格を成立せしめる。『同一生産部面内の資本は、この部面内に於て生産されたる商品の價格を同一市場價格に平均せしめる。これら諸商品の價値がこの價値に對して如何なる比を有し樣とも』(K. Marx, Theorien über d.n Mehrwert Band II 2.Teil s. 14)。かゝる市場價格の旋回の中軸をなすものが、即ち、平均的市場價格が、市場價値と一致する。當該部門内の各々異なれる諸條件を有する各商品量は、その個別的價格を以つて市場に現はれる。需要と供給との均衡が成立する事を前提とすれば、次の樣にして平均的市場價格が成立する。即ち、上記の第一の場合をとつて見れば、不良なる諸條件を以つて生産されたる商品の生産者は、その商品を中位及び優良なる諸條件を以つて生産されたる商品に比して高い價値を以つて賣らんと欲するであらう。之に對して最も優良なる諸條件を有する商品所有者は、出來るだけ低い價格を以つて市場

に廣き範圍を占めやうと力めるであらう。この壓迫は、か丶る商品の生産部門の兩極の平衡化となり、從つて中位的諸條件の商品價格の上に兩極の價格が平均化する。

前記第二の場合に於て、最も不利の諸條件を以つて生産される商品のみにより、市場價格が決定され得る事はない。何故ならば、中位的の及び優良なる諸條件を有する商品の、これに對抗して自己の範圍を擴大せんとする勢が、常に不利な諸條件の商品を脅してゐるからである。か丶る抵抗が、最も不利なる諸條件を有する商品の價格を低下せしめ、ヨリ有利なる二種の商品量の如何によりて、それらの價格に接近せしめ。かくて平均的市場價格を作り上げる。

第三の場合についても同樣の事が云へる。こ丶に於てはヨリ不利なる二種の商品量は、出來るだけ高き價格に販賣せんとするであらうが、最も有利なる諸條件を以つて生産される商品の抵抗最も大であつて、結局この種の商品の價格に接近して行つて、平均價格を成立せしめる。

かくの如くして、個別的の價格が一つの平均的市場價格に均衡化して行くといふ運動を通して、各商品量の個別的價値は、平均價値なる市場價値を成立せしめる。かくて一般的には市場價値、即ち社會的價値は平均價値である。それは社會が一定の條件の下に作り出すところのものであつて、マルクスの恣意が描出した妄想ではない。從つて又か丶る平均的のものは、一定の條件を欠除せるところに於ては實現され得ないものである。マルクスは『資本論』第一卷に於て、價値を論じ、第三卷に於て市場價値を論ずるに當りても、か丶る條件の存在を前提し、從つて平均的なるものの支配はその當然の歸結である。そこには明瞭なる論證が、見る事を欲する人に對しては與へられてゐる。

然るに吾が『內在的批判』者はかういふ、『私(高田教授)をして云はしむれば、商品の價値に關する平均原理、即ち價値の大さが社會的に必要とされる平均の勞働時間によりて定まると云ふ主張にふくまれたる「平均的のもの丶支配」と云ふ見方が何等の論證を與へられたるものではない。而してそれは到底論證せられ得ざるものである』(經濟論叢 第三十卷 第一號 一一三頁)と。マルクスは何時でも、批評家達によりて『獨斷』家とされる。だが、實は何時もマルクスは『獨斷』をしてゐな

い。『獨斷』家であるのは、かゝるものとして名けられるマルクス自身ではなくして、彼を理解しない、又は理解しやうと欲しないところの批評家達であるのを常とする。彼等はマルクスを獨斷家であると獨斷する。吾が『內在的批判』者によるとこの『內在的批判』は、『マルクス價値論の主張を許してそれに從ふ、而してかゝる立場に立ちて（傍點は向坂）その理論的歸結を求める……』事であつた。が、事實はマルクスの理論の誤解の上に立ちて、その理論的歸結が求められてゐる。

二

地代を論ぜんとする吾々は、その前提として必要なる市場價値の理論に、多少ながら居し過ぎた樣である。直に本來の地代に入る可きであるが、しばらく落流によりて運轉せられる工場に足をとゞめなければならぬ。更にこの事は『內在的批判』者の批判ぶりを見るためにも必要なのである。それから今一つ斷つておきたい事は、この論文では、たゞ所謂對差地代のみを論ずるに留り、他の地代形態には論及しない事である。それは一つには限られたる紙面の關係からであるが、むしろ批評家の論難が未だ他の形態に及んでゐないせいでもあるのである。

さて、マルクスは資本論、第三卷に『依つて以つて地代を取扱ふべき諸項目は、左の通りである』として、A、對差地代と云ふ中に、『（一）對差地代の概念。水力についての例解。嚴密の意味の農業地代への推轉……』云々。（改造社版、第五冊、二六七頁）と書いてゐるところによりても推知し得られる通り、落流による對差地代の例解は極めて重要なる意味を有する。そして私は、この落流による例解によりて對差『地代の一般的性質』を示し、これを『嚴密の意味の地代』から分つてゐる事に留意したく思ふ。

マルクスは先づ、『一國の工場の壓倒的多數が蒸氣機關に依つて運轉せられ、その中の或る少數のものだけが自然的の落流に依つて運轉せられると假定』する。更にこの生產部門の平均調節的な生產價格は一一五である。その中には一五パーセントの平均利潤を含むでゐると假定される。即ちこの生產部門の全商品は一一五といふ平均價格で賣られる。水力を以つて運轉される少數の工場に於ては、費用價格は一〇〇でなくして九〇である。當該商品量の市場調節的生產價格は一一五であるから、水

力を以つて生産を營む工場も亦、同樣に一一五なる平均價格を以つて商品を販賣する。』斯くして、彼等の利潤は一五パーセントではなく、二五パーセントとなり、調節的の生産價格は彼等の手に一〇パーセントといふ一の剩餘利潤を許す事になるであらう。それは、彼等がその商品を生産價格以上に販賣する結果ではなく、寧ろ生産價格通りに販賣する結果であり、彼等の資本が例外的に有利な諸條件の下に、この生産部面に專ら行はれる平均水準以上の諸條件の下に、機能する結果である』（資本論第三卷　改造社版　第五冊　一八一頁。）

かゝる落流はその所屬せる土地と共に土地所有者の所有にある。從つて他の人々はこの落流の工業的利用から排除されてゐる。所有者の一存は落流の投資利用を許す事も、拒む事も出來る。而して、資本は自己の力で落流を造り出し得るものではなく、落流のかゝる利用から生ずる剩餘利潤は、資本から生ずるものではない。獨占し得べき又は獨占されてゐる自然力を資本が利用することから生ずるのである。かくて、落流の利用によつて生じたる剩餘利潤は、地代に轉化されるのである。

吾が『內在的批判』者、高田教授は次の樣に『理論的歸結』を求められる、

『九〇の費用價格を以つて生産し得る資本家の存する場合に於て、市場調節的生産價格は一一五たり得るか、マルクス本來の立場は之を否認すること前述の如くである。双方の個別的生産價格の平均生産價格が市場價格を決定するものならば、全體として（全體としてである……向坂）何等の超過利潤もないはずである。』（經濟論叢前揭號、一一二頁）。こゝで『內在的批判』者は餘りに『歸結』をいそがれたらしい。マルクスはこゝでは調節的市場價格を與へられたるものとしてゐる。といふ意味は、一一五といふ調節的市場價格は、既にこの生産部門全體の均衡運動によりて作り出されてゐるものとして示してゐる。つまり、この生産部門に壓倒的多數を有する蒸氣機關による商品に接近して、そしてその內で如何なる生産諸條件の區分があるにせよ、兎に角『全生産部面に於ける資本の平均的諸條件の下に、商品の生産上平均的に要費する費用價格に依つて決定される』（資本論、前揭、一八〇頁）。マルクスはこゝでかゝる決定を前提として、一一五を以つて調節的市場價格としたのであつた。從つて九〇の費用價格を有する水力運轉による工場の商品

が一定の剰餘利潤を許す事になるのは當然である。

だから、第一に、『內在的批判』者の如く、蒸氣力による工場の生產價格と水力による工場の生產價格とを平均して何等かの『歸結』を用ひようとするのは、マルクスの誤讀に基く。更に、『双方の個別的生產價格の平均生產價格が市場價格を決定するものならば、全體として何等の超過利潤もないはずである』などゝ云ふのは何のことか一向判らない。全體として超過利潤などあらう筈はあるまい。しばらく全體としてといふ文句で意味を不明にしないために、これを除いて考へれば、各個別的價値が平均價値を成立せしめる事から、直に超過利潤の存在を不可能にする事は出來ない。平均價値が成立するからこそ、ヨリ優良なる諸條件を以つて、從つてヨリ小なる個別的價値を有して、生產される商品には剰餘利潤が許されるのである。『石炭の價が安くなるとすれば、彼の個別的費用價格と一般的費用價格との差額はヨリ小となり、隨つて彼の剰餘利潤も亦減少するであらう。……この差額は、一方に於いては、個別諸價格が競爭のため平均して行くところの價格たる一般的市場價格で商品が販賣されるといふことの結果であると同時に、また他方には、彼れに依つて運轉される勞働のヨリ大きな個別的生產力に勞働者たちの利益とはならず、總ての勞働生產力と同樣に、彼等の雇傭者の利益となり、資本の生產力として表現されるといふことの結果でもある』(資本論、第三卷、改造社版、第五冊、一八二頁)とマルクスは述べてゐる。剰餘利潤が如何なる性質のものであるかについては、『資本論』到る所に、必要に應じて述べられてゐる。たゞ何等かの意圖を以つて見ることを欲しないものには見えないであらう。而し私はこゝで吾が『內在的批判』者、高田教授がかゝるものであると、言はんとするのではない。たゞ時として、教授は餘りに取急がれて『歸結』を求められるらしい。だからマルクスの立場に立たれやうといふ善き意志にも拘らず、その立場を踏みはづされる。『內在的批判』とは、マルクスの立場を、そのまゝ理解して、こゝに立ちてその論理的歸結をを求めるものであつた。だから、この立場に立ち損なつた批判は、他の何かであるであらうが、『內在的批判』ではない樣である。

教授は次に先の論難のために、數式(數學は教授の愛好の科學である。教授に代つて私からも讀者諸君に披露しておく)を

以つて何事かを立證されようとするが、それは先に記した教授の論難それ自身が理由なきものである以上遺憾ながら三文の價値もないものとなり了る。

三

吾々は『嚴密な意味の農業地代』に移る。而してその對差地代に。

今、ABCDなる各々その豐度を異にする同一面積の四種の土地があり、且つそれらの上に同一量の資本、リカードの言葉を借りれば『等量なる資本及び勞働』を充用するものであると假定する。小麥一クオターの價格が六〇志であるとする。

Aが最劣等地である。こゝでは五〇志の投資を以つて一クオターの小麥を産出する。平均利潤を二〇パーセントとすれば、この小麥一クオターは六〇志。この利潤一〇志である。

Bは又等額の投資を以つて二クオター産出する。二クオターの價は一二〇志である。その利潤總額は七〇志であつて、一〇志の平均利潤を差引いて、六〇志の剩餘利潤を生ずる。

Cは等額の投資を以つて、三クオターを産出する。一八〇志の價格である。總利潤は一三〇志であつて、剩餘利潤一二〇志を生む。

Dは四クオターを産出し、その價格は二四〇志であつて、總利潤は一九〇志。平均利潤一〇志を差引いて、一八〇志の剩餘利潤が得られる。

如何なる前提の下にかゝる一切の假定が容認され得るかの問題については吾々は後で觸れなければならぬ。今はたゞ簡單にマルクスの掲げてゐる右の例について話を進めよう。

右を表を以て示せば次の通りである。

土地種類	生産物		前貸資本	利潤		地代	
	クオター	志		クオター	志	クオター	志
A..	1	60	50	1/6	10	—	—
B..	2	120	50	1 1/6	70	1	60
C..	3	180	50	2 1/6	130	2	120
D..	4	240	50	3 1/6	190	3	180
計	10	600				6	360

右の表で明かな樣に、Aなる最劣等の土地に於ては平均利潤

が得られるのみであつて、地代は生じない。ＢＣＤのそれぐ\に於ては、平均利潤を超えた剰餘利潤が得られる。Ｂに於ては70志－10志＝60志　即ち、Ｂの總利潤七〇志と一〇志平均利潤との差額六〇志の剰餘利潤が生ずる。Ｃに於ては130志－10志＝120志の剰餘利潤。Ｄに於ては190志－10志＝180志の剰餘利潤が生じてゐる。それは總て地代に轉化されてゐる。ＢＣＤの地代の總額は六クオター、即ち三六〇志である。

對差地代に於ては無論土地の豐度のみでなくして、土地の地位も問題となるのであるが、事を簡單にするためにこゝでは除外する。そこで對差地代なるものは『その時々に與へられてゐる耕作發達程度を以つて諸種の土地の自然豐度（位置のことは、玆では措いて問はない）の間に生ぜしめられるところの區別から生ずる』（資本論、第三卷、改造社版、第五冊、一九七頁）。

更に右に述べた所に於ては、何等の地代をも齎らさゞる最劣等地の生産價格が常に調節的の市場價格となつてゐる。事實マルクスの對差地代論に於てはさうなつてゐる。そこで批評家達がこの點に向つて蜂起する。つまり、マルクスの價値理論に於ては、平均的のものが支配するものであるとして論述されて來た。マルクスは市場價値を平均的なものとして述べた。同一生産部門の各商品が、優良なる、中位的の、又はヨリ不利なる諸條件を以つて生産され、從つて、その個別的價値を異にするにも拘らず、これら諸商品の市場價値は平均的なるものとして、全商品に押しつけられた。然るに今地代を論ずるに當りて、マルクスは突如として農産物の市場調節的なる價格を、最劣等地の生産價格であるとしてゐる。それはマルクス價値論の放棄でなければならない。そこにマルクス價値論の見紛ふ可からざる矛盾が現はれてゐると。

『内在的批判』者にきかう、『加之、「何等の地代をもたらさゞる最劣等地の生産價格が常に調節的の市場價格となつてゐる」ためには、マルクス的立場に立つかぎり、前述の如く、最劣惡の條件に於て生産せらるゝ商品が數量的に優勢であるを要する。然るに、マルクス自身の差額地代の説明の場合に於ては、此事情すらも與へられてゐない。土地の耕作地積が擴張せらるゝ場合があげられてゐるが、はじめＡＢＣＤの土地ともに等しく一エエカアのもの、二の場合には共に等しく二エエカアとなり、次

の一の場合には劣等地に於て著しく擴張せられてAは四、Bは四、Cは二、Dは二エーカアとなり、他の一の場合には優良地に於て特に擴張せられて、Aは一、Bは二、Cは三、Dは四エーカアとなつてゐる。然るに拘らず、Aにありてのみ常に地代が零であり、Aに於ける生産價格が市場價格を規制すると云ふことになつてゐる。これは前述の市場價格の決定に關する一般的原則と全然相容れざるところである』(經濟論叢、第三十卷第一號、一一〇―一一一頁)。

高田教授の言はれる通り、マルクスは明白に、『何等の地代を齎らさゞる最劣等地の生産價格が、常に調節的の市場價格となつてゐる』(資本論、改造社版第五冊、一九七頁)と述べて居り、實際の問題の取扱ひに於て、この最劣等地に於て生産される商品量が數量的に壓倒的優勢を保持してゐる事を示して居ない。否な、極めてしば〳〵さうでない事を明示してゐる。マルクスは何故に地代を論ずるに當りて『平均的なるものゝ支配』を排除したか。何故に、彼は最劣等地の個別的生産價格を以つて調節的なる市場價格となしたか。

市場價値に平均價値として價値の社會的性質を實現した。ここに於ては何故に市場價値は平均價値であつたか。商品生産者相互の競爭が、何等自然的其他の制限にぶつつからなかつたからである。そこには同一生産部門内に於て優良なる、中位的なる、及び不良なる諸條件の下に生産される商品の各種があつた。そして場合によりて、それぞれそれらの諸條件を以て生産される商品中の何れかゞ優勢な諸條件を有つ商品の個別的價値に接近して、或は中位的諸條件を有つ商品の個別的價値として、社會的價値、即ち市場價値が成立した。商品が必要に應じて何程の量に於ても調達される事が出來る事情の下にあり、何れの商品についても自由なる投資が行はれ得、商品生産者は、出來るだけ高く、出來るだけ有利に、出來るだけ大なる利得を上げることを目標として自由に活動することが出來得る狀態の下におかれてあつた。かくてこそ、與へられたる時、與へられたる所に於ては、需要と供給との均衡を前提とすれば、優良又は不良なる諸條件を以て生産されたる商品の個別的價値が直に市場調節的であり得なかつたのである。かくてこそ、それらの平均化が行はれ得たのであつた。そしてかかる競爭は、生産される商品の諸條件自身を均衡化して行く傾向として貫徹されて行

くのである。だからマルクスはかういつてゐる、『で、同じ生産部面に於ける一切の資本が同じ仕方で放下されるといふことを妨ぐべき何等の原因も、それ自身に於いては存在してをらぬ。寧ろ、諸資本間の競争は、右の諸區別をます／＼均衡に歸せしめんとする。社會的に必要なる勞働時間に依つて價値が決定されるといふ法則は、商品の低廉化と、同じ有利な事情の下に商品を生産せしめるところの強制とを通して行はれるものである』（資本論　第三卷　改造社版　第五冊　一八四頁）と。

一般的、原則的に云ふならば、『競争が先づ一の生産部面に於いてなし遂げることは、諸商品の種々なる個別的價値を均衡化して等一なる市場價値及び市場價格を成立せしめるといふ事である』（マルクス　前掲書　第四冊　一四八頁）。だが、競争は農業の部面に於てもかかる原則通りに自己を貫いて行くか？

土地の豐度（位置は今問題としない）は自然に不等である。そして更に各種の豐度の不等なる土地の耕作は獨占されてゐる。更に地代を論ずるに於て公式的な場合となさる可きものであり、且つマルクスも亦かかるものとして取扱つかつてゐるのはかうだ。即ち、一定の需要を充足せしむるに足る諸豐度の一定系列の土地に於て、最劣等なる豐度の土地の耕作が欠く可からざるものである事。即ち他のヨリ上位の土地を耕作する事によりて需要を充足せしめんとする樣な場合に於いては、その土地に對するこの第二次以上の投資以下の收穫を舉げるものであるといふ事である。若しさうでなくして、ヨリ上位の土地に於けるこの新なる投資が、最劣等地に於ける最初の投資以上の收穫を收め得るものであるならば、この最劣等地は耕作から除外されるであらうからである。最劣等地がこの系列の中に存する限り、この土地は需要を充すに必要なのである。

かくの如き土地の有する自然的性質は、競争に對して一つの抵抗を與へる。かゝる抵抗のために價値法則は、この生産部門に於て、必然的に本質的なる偏異を受けざるを得ない。ここに於ても競争は同一なる市場價格を成立せしめる。だが調節なる市場價格は、最劣等地の個別的生産價格である。何者、土地の制限的なる性質は、需要を充すために最劣等豐度の土地を絶對に必要とし、ヨリ以上の生産物の調達は、ヨリ大なる費用價値を以てするにあらずんば不可能であるからである。この事についてはレーニンも明瞭に解説してゐる、『かかる制限的な性質

は——如何なる土地所有制が存するとしても——一種の獨占を作り出す、即ち、土地の全體は、農業經營者によりて占有されてをるが故に、各地上で、從つて又その中には最劣惡の及び市場から最も隔絶せる地所の上でも生產された、穀物の全體に對して需要は存するが故に、穀物價格は、最劣惡の土地の生產價格によりて（又は最後の最も生產的でない投資に於ける生產價格によりて）決定されるといふ事が明である。ブルガコフの『平均的生產性』といふものは空虛なる算術である、何者、この平均の事實上の形成に對しては、土地の制限的性質が阻止してゐるからである。かゝる『平均的生產性』が形成され、且つ價格を決定するためには、各資本家は、たゞ一般に資本を農業に投じ得る地位にあるのみでなく（その限りに於て、既に述べた樣に農業に於て自由競爭が支配してゐる、）又如何なる時にも、既存の農業的經營を越えて新たなる農業的經營を設立し得なければならぬ。而して若しそうなつてゐるならば、農業と工業との間には何等の區別が存在せず、從つて又何等の地代も成立し得ないであらう。併しながら正に土地の制限的性質が、さうならない樣に作用してゐる」(N. Lenin, Sämtliche Werke Band IV. 1. Halbband S. 237)。

かくの如くして、土地に投ぜられたる資本の競爭は、同一種の生產物に對して同一の市場價格を成立せしむるに至る事は勿論であるが、その旋回の軸をなすところの調節的市場價格をなすものは、最劣等地の生產物の個別的生產價格である。土地の自然的制限性は、かゝる特殊的なる市場價値の決定方法を作り上げる。一般に競爭は、同一の生產部門の內部に於て、諸種の條件を以つて生產される諸商品の個別的價値を平均して、等一なる市場價値及び市場價格を作り上げる。更に異種の生產部門間に於ける資本の競爭は、諸部門間の利潤率を均等ならしめて以つて生產價格を形成せしめる。これらは總て價値の社會的性質の實現される過程に外ならない。資本家的生產方法に於ける勞働協力體の一要素を形造る農業に於ても、かゝる協力が無意識的、且つ無意圖的に行はれるの故を以つて、それは價値の社會的性質の實現の過程として遂行されなければならぬ。たゞ土地の自然的制限性は、競爭によるその遂行に對して偏異を與へる。これは、最劣等地に於ける個別的價値が市場價値として、同一種類の生產部門に於ける全商品に押しつけられると云ふ形

態を以つて實現される。それ故に、この部門に於ては全商品の個別的價値の總計は、市場價値の總計に等しくない。

そこで先の表について見るに、一〇クオターの總生產物が六〇〇志に販賣されるのは、市場價格を決定するものがAに於ける生產價格、即ち一クオター六〇志であるからである。

		現實的生產價格	販賣價格
A	1クオター	60志(一クオター=60志)	60志
B	2 〃	0〃(一クオター=30志)	120志
C	3 〃	60〃(一クオター=20志)	180志
D	4 〃	60〃(一クオター=15志)	240志
	10クオター=240志・一クオター平均=24志		總販賣價格=600志

即ち、現實的の生產價格は一〇クオター、二四〇志であるが、それが六〇〇志、即ち二五〇%だけ高く販賣される。實際の平均價格は一クオター二四志であるが、市場價格は六〇志、即ち二五〇%だけ高い。『これ即ち、資本制生產方法の基礎上に競爭を通じて遂行されるところの、市場價値に依る決定であつて、斯かる決定のため一の虛僞な社會的價値が造り出される。その虛僞な社會的價値は、土地生產物が支配を受けるところの市場價値の法則から生ずる』(資本論、第二卷、改造社版、一九九—二〇〇頁)。

土地生產物に於て何故にかゝる『虛僞の社會的價値』が造り出されるかについて、吾々は既に說いて來た。重複をいとはずこゝにペー・ウイリヤノフの說く所を紹介しておく事は無駄でないと信ずる。『疑ひもなく、各種の地面の自然的なる不等一の豐度といふ要素及び異質の地所の耕作の獨占が存在してをるといふ事は、農業の部面に於ける價値法則の現出に於て本質的の區別を喚起せざるを得ない。市場競爭のために、凡ゆる生產部面に於て、當該部面の全生產物に對して一の一般的市場價値が形成されるといふ事情は、農業的生產の部面に於て、豐度の相異とかゝる相異せる豐度の地面の場所的制限性といふ先に掲げたる諸要素の理由から、次の樣な狀態が現はれる、即ち、農業の部面に於ては市場競爭の諸法則は、農業的生產物の個別的價値の總額がその市場價値の總額に等しくあり得ない樣に立至らしめる。他の總ての生產部面に於ては、市場價値は中位的の並に最優良の及び最劣等の諸條件の下に生產される諸商品によりて、それ〲この部面の全生產の中で何れの商品群が特別に優勢であるかに從つて、規制され得るのであるが、農業の部面に

於ては常に最も不利なる諸條件（自然的土質を意味する）の下に生産される生産物が市場價値を規制する。そして而も、この事は、最も不利なる事情の下で生産される生産物が當該部面の生産の總體の中で如何なる特別の優勢を持してゐるか否かを問はないで行はれる。若し與へられたる瞬間に於て、耕作される地所の中最も不毛なるものに於て生産されたる生産物が與へられたる價値で欲望を充足せしむるために必要であるとするならば、この事だけで、農業の部面に於ける市場價値を最も不利なる地面の生産物の個別的價値によりて規制せしめるためには既に全く充分である。當該生産物の量を顧慮するところなくとも。かゝる事情は、農業的生産部面に於ては、他の總ての生産部面と區別して、個別的價値の總額が常に全生産物の總市場價値以下にあるに至らしめる。この中にこそ、市場價値がよりて以つて形成されるところの競爭が、「一つの虚僞なる社會的價値を作り出す」といふ事に對する説明が求められる」(P. Ujanow, Zur Theorie der Rente.,, Agrar-Problem" Band II Heft 2/3, S. 430—431)。

マルクスは所謂『平均原理』とか云ふものゝ不能を主張した事もなければ、『限界原理』とか云ふものは、何んでもかんでも間違つて居ると考へたわけではない。眞に平均原理が支配する所には無論これを認めたであらうし、又限界原理こそ事の眞實を理解する『原理』であるならば、これを認めるに吝でないであらう。マルクシズムに於て、自然及び社會の理解は抽象的なるものからヨリ具體的なるものへ進む。かくしてのみ、吾々の智識の體系は可能であるのである。資本主義の基本的なる諸要素を抽象的に取り上げて、そこに見出される運動法則は、ヨリ具體的なる現實の社會に近づくに從つて、一定の限定を受ける。かゝる限定は、それが資本主義の支配する社會である限り、この社會を排除し得るものでなく、この社會の體系の中に一定の地位を得る。かゝる特殊性質を以つて資本主義の運動法則に偏異を與ふるといふ意味に於てのみ、一つの限定がある。資本主義の運動法則は、かゝる偏異を受けつゝ、いはゞ外部的なる諸性質を、その法則の支配の下において行く。吾々はかゝる根本法則の理解と共に、その受けて行く偏異を理解する事によりて一歩々々ヨリ具體的なる現實の社會の理解に近づく。同時に吾々は、資本主義の法則が如何なる様相を以つて現實の社

會に支配してゐるかを知るのである。吾々は抽象的なる資本主義の法則が、次第に現實の諸要素が與へられて行くに從つて偏異を示す事、即ち、純粹なるそれ自身の姿を明白に呈示しつつ、而も種々の色どりを加へて行く事を以つて、直にマルクスの矛盾を云々する事は出來ない。マルクスにとりては何よりも眞實を理解する事が重大であつた。馬鹿の一つ覺えの樣にどつちを向いても『平均原理』か『限界原理』かを叫んで歩く事ではなかつた。

然らば『虛僞の社會的價値』とは何か？『若し、資本制的社會形態が止揚され、社會が意識的且つ計畫的な協合體として組織されるに至つたと考へるならば、一〇クオターの小麥は二四〇の表に含まれるところと等量な獨立した勞働時間を代表することになる。それ故に、社會はこの土地生産物をば、それに含まれる現實的勞働時間の二倍半で購買することはないであらう。斯くして、土地所有者といふ一階級の基礎は破壞される。これが作用するところは、恰も、外國からの輸入に依つて生産物の價格が同じ程度の下落を來たすかの如くである。それ故、現在の生産方法を維持しつゝ、對差地代を國家の手に歸せしめたと前提する場合、他の事情に變化なき限り土地生産物の價格が不變たるであらうと説くは、當を得た主張であるとしても、資本制生産に代ふるに協合體を以つてした場合にも、尚、生産物の價値は不變たるであらうとするは失當である』(資本論、前提、二〇〇頁)。

かくて『虛僞の社會的價値は』は、正に個別的價値との間に開きがあるといふ意味に於て一の虛僞の社會的價値である。だが虛僞の社會的價値であるといふ事は、決して地代が剩餘價値でないといふ事ではない、即ち、決して人間勞働の搾取でないと云ふ事ではない。土地所有者は、土地生産物の交換を通じて社會の人間勞働を搾取する。小麥一〇クオターが二四〇志、即ち、一〇〇〇勞働時間を含むものと假定するならば、資本制社會形態が存する限り、その二倍半、即ち、二五〇〇勞働時間を含むものとして、他の二五〇〇勞働時間を含む商品と交換される。土地所有者は一五〇〇勞働時間の價値を無償で取得する。土地生産物に對して、社會の支拂ひ得るものは、結局に於て、人間勞働以外ではない。社會全體の上に於て見る時には、やはり、一つの剩餘價値であり、人間勞働の搾取である。土地生産

物に於ける競爭の特殊性がたゞ剩餘價値の分配を變更したるにすぎない。土地生産物の市場價格が、前述の如き仕方を以つて規制される限り、社會は、これに對して一定の勞働を支拂はなければならぬ。『消費者として見た社會が土地生産物について過分に支拂ふところのもの換言すれば土地生産上社會の勞働時間の實現の一のマイナスを成すものは、今では社會の一部たる土地所有者にとつてはプラスを成してゐる』(資本論　第三卷　改造社版　第五冊　二〇〇頁)。

私自身はなほ未だマルクスの地代理論を理解しつくしたとは思つてゐない。この論文の如き、たゞその理解への努力を示してゐるにすぎない。況やマルクス地代理論の『批判』の如き私の及ぶ所ではない。殊に私の論文の最後の部分の如きミハイロフスキー氏の論述にヒントを得て、述べたものにすぎないのであつて、マルクスの立場からここに考慮す可き多くの點が殘されてゐるものと信ずる。それは他日に讓りたい。

慶大教授 山崎又次郎著

比例代表法と多數本位代表法

四六判二三四頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

新刊

著者は本書に於て廣く近世民主政治の觀念の上に立ち、殊に各國々民の政治的性向竝に其の實際の政治的狀態を考慮し比例代表法と多數本位代表法とを主題として之を取扱つた。然も此等の代表法がそれぞれ觀念上、多數代表法とも、また小數代表法とも異つて居ることを鮮明にした。殊に比例代表法の方は今日我國に於て盛に論議せらて居るのであるが、此の代表法は實に千差萬別であつて、之を一掃的に論斷すべきものでない。從つて之を系統的に說明することは至難の業であるが、而も著者は其の最も主要なるものに就き、選擧人の自由から觀て其の政黨を以て本位とするものより、その選擧人を以て本位とするものに至るまで其の程度の差に應じて之を列擧し、解說し批判する。著者は更に進んで若し今日我國の政治的狀態に鑑みて、比例代表法の研究を必要とするものありとすれば、之とその前提を同うして、而もその結果に於て異なる多數本位代表法の研究も亦、等しく必要なることを提唱して居る。此の代表法に就ては今日の處、未だ我國に於て注意せられて居ない。之れ即ち著者が、本書に於て比例代表法と共に多數本位代表法も亦取扱つた所以である。

山崎又治郎著（菊判三五二頁）

憲法總論

定價二圓五十錢　送料十八錢

憲法を從來のごとく法律學的研究のみに依らずして、政治學的、社會學的研究に依り、之を綜合的に論究せるものである。且つ我國憲法上に於ける純日本的なる一大傳統を宣揚し、飽くまでも之に立脚して、我が憲法政治の由來及び本質を闡明し、夫が如何にして帝國憲法に調和せられて、複雜たる全體的存在を保つて居るかを說明すると同時に、現に吾人の憲法的生活中に蠢動せる、所謂外來思想の變革的思想に對しては、最も嚴正なる批判的態度を以て之に臨まんとす。

發行所 東京日本橋通

丸善株式會社

大阪 神戶 京都 名古屋 横濱 福岡 仙臺 札幌 京城

東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル

學校制度の變化と學生運動の進化

石濱知行

一

ある社會事象に對する認識および批判は、その同一社會事象の存在がながく繼續すればするほど、ある固定的な凝結せる觀念となる。そしてその觀念は、一つの超社會的な、超批判的な神秘的な神聖にして云爲するをゆるさざるがごときものとして社會に認容され、ある社會事象に對しては、かゝる固定的に凝結せる觀念のみが唯一の絶對的なものとみなされる。

しかし同一社會事象と見えるものも、つねに變化をやめない。ときには跳躍的な變革をも經驗する。それにつれてそれに對する認識および批判も變化または變革する。しかし、觀念形態の變化ないし變革は、それがもとづく實體の變化ないし變革につれて同時に、またはそれを追ひかけてすぐ行はれずして、はるかに實體の變化におくれるのを恒とする。したがつて、ある時代には、實體は變化または變革したが、それに對する認識または批判は、變化・變革以前の實體に對してなされたものがそのまゝ殘存する場合がすくなくない。

學校の實體とそれに對する認識ないし批判についても同樣のことが言へる。學校を神聖不可侵のものとする考、學校乃至先生と生徒との關係を絶對服從的なものとする考、さうした學校についての古い觀念は今日もなほ相當力づよいものとして現代社會に存在してゐる。十月十六日に勃發した今度の早稻田大學事件に對しても有力なるある新聞では『三尺去つて師影を踏むな』といふ道徳が今日の學生・生徒に全くないのを慨嘆する評論が出てゐたごときその一例であると考へられる。

封建制度から資本主義初期の學校は、一人乃至數人の少數の先生を中心にし、それらの人達のすぐれた學力、人格の力、主義の力を中心にした寺小屋、私塾、私學校が多かつた。これらの小規模な學校に於

いては、學生は自發的に自らすゝんで入學したもので、學生の數もすくなく先生との關係もすこぶる密でありそこでは學生一人一人が自分の尊敬する先生から教育をほどこされた。そしてこれらの團結力のつよい小規模の學校のうちで時流の尖端に立ち、また時代回轉の重大なる任務を果したものがすくなくなかつた。先生は生徒をおもひ、生徒も先生を思ひ、ともに教育し教育されてゐた。したがつて、かゝる組織と實體とをもつ當時の學校は、生徒からも社會からも教育の聖堂とみなされたことは決して不可思議ではない。また、かゝる雰圍氣のうちから、『三尺去つて師影を踏むな』といふ觀念が生れたことも自然である。

しかし、日本に於ける資本主義の發展は、學校の實體を、今のべたやうな小規模の塾風のものから、まつたく異つたものへ變へてしまつた。今日の學校ことに大學と言はれるものを見よ。學校は、ことに私立大學は、學校經營の企業化のために、大學のみならず、いろいろの專門學校を同じ規模内で營んでゐる。今日問題となつてゐる早稻田學園は、大學各部のほかに、專門部、早稻田專門學校、第一、第二高等學院、早稻田工手學校、早稻田高等工學校等より成り立つてゐる。早稻田と對立する慶應義塾では大學各部のほか幼稚舍、普通部、商業夜學校、商　學校、高等學　、大學豫科等を經營してゐる。今夏問題を惹起した日本大學もおなじく多數の他の學校を經營してゐる。かくして、各大學は、その學校の設備のゆるすかぎり多數の學生を收容してより多くの授業料をあつめやうとしてゐる。だから、學生は各々一萬以上にもおよび、先生も數百人の多數に上つてゐる。そして多數の學生は一定の授業料、校友會費をおさめ、學校の定めた時間だけ教室に出て講義をきゝ、學期末には試驗をうけ、一定年限經てば印刷した卒業證書を手にして學校の門から世間に放り出される。一方先生も大學の經營する各方面に出來るだけ多くの時間を持たされ從つて一つのクラスでは不定の學生群に對して一定時間だけの所謂講義をして時間經ればさつさと退場する。かくして、先生と生徒との關係も一般に言つた教室内部だけで、そこでもしかし個人的の接觸はない。先日早稻大學總長高田氏が臺灣から歸京した時、東京驛頭で多くの學生が牧野内府と高田總長とを間違へて知らなかつたエピソードのごときは今日の大學制度に於いて先生と生徒との關係がいかなるものであるかをもつとも雄辯に物語つてゐるではないか。學校は、かくのごとく今日では全く變化してゐるのである。これを個人または數人のすぐれた學力、人格力を中心にして結成された私塾當時の學校と比すれば、工業に於けるギルド的の組織と今日の大工場組織の經營との間のはなはだしい差に似てゐる。

したがつて、私塾時代の學校に對してなされた學校についての認識批判をそのまゝ、今日の大學にも適用して、もつて學生の態度を非難せんとするがごときは、まつたく一つのアナクロニズムである。それをする前に、先づ、今日の學校制度なるものが如何に、尨大化し、機械化し、企業化したかを見なければならない。

今日の學校は、その制度・組織においてかくのごとく變化してゐるのみならず、教育の實質に於いても變化してゐる。私塾時代に於いては、その私塾の中心をなす人達の主張・主義といふものがあつた。それを中心にして志ある學生が集散したのである。しかして、その私塾の主張は、ときにその時代の支配階級に反抗するものも少くなかつた。教育はしたがつて生きた教育が行はれた。しかし今日の大學はどうであるか。今日の各大學は各々その成立當時の學風の殘りを幾分は保持してゐる。しかしそれは、文部省の支配を間接・直接うけるに至つて漸次減じ、だんだん劃一的なものとなりつつある。そして私塾時代に於けるがごとき自由なる教育をなすことはほとんど不可能となつてゐる。辯論部が廢止され、新聞部が廢止されるやうになつては、各大學が獨自の自由なる教育をほどこすといふことは不可能である。いはんや、時の××××××××私塾時代の空氣などは、今日の大學などにはもとめられない。

そこで、ここで言ひたいことは、學校の制度、教育の本質においてかくのごとく變化し來れる今日の學校を、變化以前と同樣の認識と批判とをもつてのぞむことは時代錯誤であり、かゝる方法では今日の學生事件の性質を把握することも出來ず、したがつてそれに對する方針も立てられ得ない、といふことである。

二

半月以上に及んでいまだに解決せざる學校事件に、女子齒科醫學專門學校事件、早稻田大學事件、目白女子大學事件の三大事件がある。いづれも、對峙する學校當局および學生の腰がつよく、今日（十一月五日）までの情勢によれば、前途逆睹しがたきものがある。

この三個の學校事件は、その勃發の原因、その後の經過に各々別々の特色があるが、一方、またこの三つの事件には共通の問題がある。そしてその共通の問題は、今春以來ことに明白になつた近代學校事件の特色をなしてゐるものである。すなはち、事件が學校制度に對する不滿から發し、その目的とするところは學校制度の改革であるといふ一點である。

女子齒科醫學專門學校事件は、同校の教授を十名ばかり突然馘首し學生をして授業上不安を感ぜしめたるより發したもので、この點は今春の國立音樂學校事件に似てゐる。その後さらに學生對學校の事件以

とどまらず、父兄會對學校の抗爭とも變じ、最近では納入したる校友會費を父兄、學生力を合せて返納することを學校に請求する運動にまで變じてゐる。この女子歯科醫學専門學校事件は、學校が堂々たる校名の看板をかゝげ居るにもかゝわらず、學校の實體はすこぶる薄弱であり、したがつて一度事件が起ると、數百名を算ふる學生を全く路頭に迷はしめる無責任きはまる私立學校の弊害をもつとも露骨にしめしてゐる。

早稻田大學事件は、現象的には早慶戰に於ける切符分配問題より發し、漸次大學校制度そのものに對する不滿その改革に向つてすゝんでゐる。いま學生側の要求するところを見るに、一）全早稻田聯合學生委員會の公認 （二） 體育會を否認し即時解散を命ぜよ （三） 今回の問題につき學校當局の陳謝を求む （四） 去る十八日の臨時休業の理由を明らかにせよ （五） 不當處分絶對反對 （六） 早稻田專門學校を專門部と改稱せよ‥‥の六個の要求に歸着する。しかして、この要求のいづれもが學校制度及びそれより生ずる學校行政そのものに對する改革をめざしてゐること明瞭である。かくして、事件は學生側の結束かたき團結となり、學校盟休事件となり、學校よりの十日間の休校宣言となり、高田總長の歸京となり、都下大學の聯合應援となり、坂本部長の辭職となり、問題の前途は今日（十一月六日）のところ全く豫測をゆるさざるものがある。

女子大學事件は、學校が大學の看板をかけて昇格を裝ひながら、最近に至り經濟上の點からそれが不可能となるにおよび、突如本科および高等部の廢止を宣言して學生をして呆然たらしめたるより發し、盟休となり、八要求（一）高等學部の學生募集中止に關し理由を明確に示すこと （二） 不確實の基礎の上に大學部、高等學部の學生を募集したことについて陳謝せよ （三） 今回の問題に對して學校當局はその手落を認めよ （四） 學校の組織を確實ならしめ今後ふたたびかゝることを繰り返さざること （五） 父兄に對し何等かの釋明をなせよ （六） 學制變更のごとき重大なる問題については學生ならびに教授の意見を聽取せよ （七） 教授會の權限を擴大せよ （八 我々の今後の課程に關しての具體的事項を示せ）の提出となり、その後四教授の仲介により一時解決したかに見えたが、『右調停はあらかじめ學校と打合せた條項を學生側に人情づくめでみとめさせたものであることと、學校側が正式文書回答するといひながら今以て何等の回答をなさぬため』（東京朝日）紛擾が再燃し、つぎのごとき要求の再提出となつた。一、汎女子大學昇格運動聯盟の承認　一、評議員會を即時招集し大學部高等部の廢止決議の撤回　一、高等學部卒業生に中等學校教員資格の即時付與　一、現在學校の明細なる會計報告の明示　一、新制度及び本學部の

豫算の說明　一、女子高等教育の方針徹底のため校長及び教授會の權限擴張　一、學生の學校會計及び學校行政への參加　一、懇親會幹部及び綜合大學高等學校部長大橋ひろ子、大學理科學部長井上秀子兩氏の引責辭職　一、寮舍の自由開放及び通學の自由　一、リーダーの廢止。しかして事件はさらに紛糾して、どこまで發展するか豫測し得ざるに至つてゐる。

以上、三大學校事件の輪廓を示したが、これによつて、今回の學生事件において學生の取り上げた事件が學校制度、學校行政にあることが明らかであらう。このことは、學生事件の傾向が一轉機を示せるものとして注目に價する。

從來の學生事件は、主として思想問題を契機とし、それを取り上げて學校當局と爭つた。社會科學事件、讀書會研究會事件、學生放校事件等がそれである。しかし、これらの事件は、國家および學校當局よりの壓迫、社會の誤解、一般學生の尻込み等をまねいて、學生事件としては結局不成功に終つたものが多かつた。過去におけるこれらの苦しき試煉は、學生事件の方向を漸次轉換せしめて、直接學生生活ともつとも關係の深い學校制度そのもの、學校行政そのものに目をむかしめた。かゝる傾向は昨年ごろから見えたが、今年夏の日本大學事件に於いて明確なる形式をとつた。そして、今回に至つてそれが結實したのである。かゝる學生事件の方向轉換は、學生事件としては、×××××××××。學校制度、學校行政には、ことに私立大學には多くの缺陷がある。國家、學校當局は、かゝる種類の學生事件には干渉の仕方がない。世間も事情を知るかぎりに於いて學校當局の制度行政の缺陷をみとめて學生に同情する。一般學生も思想問題のやうに壓迫や處分を恐れて尻込みする必要がない。そこで團結はすこぶる固く、規模も大きくなる。今回の學生事件がその團結を持續し、當局をして手の下しやうもなくせしめてゐることは、この學生事件の××××變化のためである。

三

今回の學生事件は、直接の契機としては、前にも述べたやうないろいろの事件があるのであるが、それはかゝる學生事件勃發の一契機をなしたものであるが、これがかならずしも眞の動機ではない。今回の學生事件はすでにおこるべくしておこつたのである。學校の事情を知るものには、豫定のものが豫定のごとく勃發したに過ぎない。早稻田大學事件のごとき、ある教授は、すでに今春、かゝる事件が年末におこることを豫言してゐた。學校當局も一ヶ月以前にすでに、かくあるべきを豫測してゐたと言はれる。

しからば、今回の學生事件の眞因とも看做さるべき遠因はどこにあ

るか。次の二つが、そのうち最も重大なるものであると考へられる。

その一は、過去に於いて、學校當局があまりに、學生の自由を壓迫しすぎたことである。社會科學事件、思想問題にからまつて學校當局が文部省の意を受けて無慈悲に學生の大衆を放逐したるごときその例である。今日かくして學校を放逐されたる學生は、東京朝日新聞報ずるところによればすべてで六百名を超過してゐると言はれてゐる。無慈悲に放逐といふのは、事情をもよく調べずして、思想問題に何等かすこしでも關係ありと見るや疾風迅雷的に文句を言はさずして放校したやうな態度である。このことは思想問題だけでなく、例へば試驗の際に於けるカンニング事件に關しても學校が學生を處分する態度は實に慘酷に近いものがある。學校は、自分の責任外に放り出せばそれでよいといつた氣持で、實に慘酷なる處分方法を行ひ過ぎた。それらにつづいて、學校は、讀書會、研究會を彈壓し、雄辯部、新聞部等をも事實上廢止せしめてゐる。かくして、學生の學校に於けるあらゆる自由、事業を奪してゐるのである。たゞ一つ、文部省の尻おしのもとに運動だけを極度に獎勵してゐる。しかしこれも、學校の看板になるのと莫大なる收入の伴ふのと（野球に於いて各學校運動部が年々數萬の金を、この不景氣の際に、受納せる現狀を見よ）よりする學校スポーツ政策の結果である。かゝる學校當局が、過去に於いて學生に與した自由の壓迫については今日の學生は、口にこそ言はぬが、絶大の不滿を持つてゐる。それはいつの日か、何等かの契機を得て爆發すべき性質のものであつた。これが、今回の事件の遠因の一つである。

その二は、學校の企業化の結果である。前にも述べたやうに、資本主義の發展に伴ひ、學校も漸次大規模のものとなり、學校は、一つの規模をもつて出來るだけ多くの學生をあつめ、授業料を徴收するために、いろいろの學校を經營して、設備を極度に利用しようとする。これは私立大學に於いて特にいちじるしい特徴である。このことは學生をして授業上不便をすこぶる多からしめる。また學校の雇用する教員も出來るだけ廉い俸給で、出來るだけ多くの時間を受もたせる。このことは教員をして疲らしめ、教授そのものを粗末にせしむる結果となる。先日、早稻田のある關係者から聞いたことであるが、學校出たてはよく勉强するが大學部の教授となると、あまり各方面の授業をうけもたせられる關係上、學問の上達がとまつてしまうといふことである。かくのごときは教授にとつてのみならず、高い授業料を苦心して支拂ふ學生にとつても迷惑至極である。かくのごとく、學校當局の態度が學生のための教育といふよりも、學校經營の方に重きを置くに至つては學生が不滿に思ふのは當然である。かゝる學校當局が經營に重きを置く結果は、或は幹部間の爭鬪となり、會計の疑惑を生じ、學校が土

地投機を行ふとの噂を生ぜしめることとなるのである。實際の所、今日私立大學當局の重きを置くのは、いかに設備をよくして學生諸君の教育に力をそゝぐかにあらずして、いかにして多くの學生を集めて多くの授業料その他を徴收して學校を經營して行くかにある。これでは學生は主ではなくして一つの手段である。だから、學校が目ろんでゐたことが駄目になると、學生のことなどは犠牲にして濟すといふ態度が見えるのである。女子齒科醫學專門學校の學生にしても、女子大學々生にしても、學校當局の都合によつて授業を中止せしめられたり、學部を廢止せられたりしてゐる。學生が、かゝる學校行政に對して不滿を感ずるのは、無理もないと思はれる。

以上のべた二つの事が、今回の學生事件の遠い原因であつたと思はれる。かゝる不滿が直接の契機を得て、大事件にまで進展し來つたのである。

四

學生に對する學校の態度がかくのごとくであるので、學生は學校を信頼してすべて學校にまかすことに不安を感じはじめる。その結果が今度の早稲田學生の要求である全早稲田學生委員會の公認の要求となり、それによつて學生自治權獲得と學校行政への參與を得やうとするかに見える。今日學校當局のしてゐることを見る時に、學生のこの希望は決して不合理なものではない。

早稲田には從來學校公認の學生委員なるものが各クラスにあつた相である。しかしそれはたゞ學校の意思發表機關に過ぎずして、高々ある教授を忌避する位の程度にとどまつてゐたのであるが、今度はそれを更に組織化して、積極的な學生意思形成の機關たらしめようとするかのごとくである。

學生事件の方向轉換とともに、學生委員會設立の要望はますます盛となるであらう。現に、十月三十日の東京日日新聞によれば、國立音樂學校の後身である帝國音樂學校では、學生が教授とともに學校を管理してゐる事實を報導してゐる。また、駿台新報によれば明治大學の三科大會では、圖書館設備改善之件、學友會費三割値下案、食堂改善の件、市營電車軌道撤廢を期し之が運動をなすの件等を議題として討論してゐる。今日の大學では、辯論部、新聞部等が壓迫せられ、事實上自由なる校友會はなきが有様である。之に代る學生委員會設立の希望が生じ來つたのである。今後の學生事件は、當分この學生委員會設立を中心にして行はれる傾向にある。

社會經濟時評

金輸出再禁止問題批判

――現實化した再禁止問題――沒落資本主義の道化役――

――嵐の前の靜けさ――地方銀行の破綻續出――

猪俣津南雄

一　現實化した再禁止問題

（1）どうしてそれは現實化したか

もう一度金輸出禁止をやれ、そして貨幣價値を切下げて解禁をやり直せ、といふ主張は、かなり前からあるにはあつた。しかし、此の金輸出再禁止の問題は、最近に至つて全く現實化してきた。

吾々は、すくなくとも次の諸理由から、此の問題を取り上げて批判しておく必要がある。第一、再禁止の主張や宣傳や運動は、進展する恐慌過程の一産物であると同時にまた、それ自身、ヨリ重大な經濟危機を激成させる一モメントをなしてゐる。第二、再禁止・新平價解禁の政策をとれば、金融恐慌も回

避することが出來、日本資本主義經濟の「立直し」も可能であるといふ幻影が撒き散らされてゐる。第三、再禁止・新平價解禁は、――今のところまださうではないが――一定の條件の下においては、日本金融資本の政策ともなり得る。しかるに、第四、さうした政策を主張する者の中には、無產階級陣營內に在る者乃至は在るかの如く振舞ふ者（高橋龜吉、赤松克麿氏等）も加はつてゐる。等、等。

金解禁をやつた民政黨政府は、解禁恐慌の深刻化につれて擡頭した再禁止論をひそかに恐れてゐた。しかし、最初は、大きく構へて默殺主義をとつてゐた。けれども、恐慌過程の進展によつてヨリ重大な經濟危機が成熟すればするほど、再禁止論は勢を得た。そして、八月に入り、實業同志會長武藤山治が公然と再禁止論を主張すると同時に、問題は、遂に政治の舞台面に持出されて來た。エコノミストによれば、『井上藏相がわざ〳〵「世界不景氣と我國民の覺悟」なる小冊子を出版した眞意は、世上の新平價論再禁止論者に酬いんがためだといはれる。』かくて、問題は、銀行資本家や工業資本家の多くの會合で論議された。彼等の頭株は最初は默殺せよの態度をとつたが、しかし金融資本のデフレーション政策に手ひどく痛めつけられた弱い產業資本家のます〳〵多くが再禁止論に歸依してくるのをどうすることも出來なかつた。

そしてそれと共に、默殺主義は敗北した。十月九日、大阪の經濟更新會（民政黨系といはれる）は先づ、『金輸出再禁止論並びに新平價解禁論』に對する反對決議をやつて聲明した。續いて十月十五日、日本商工會議所の常議員會が、同樣の反對聲明を發表した。同團體は更に『政府もその旨聲明すべしといつてゐる』（エコノミスト）。一歩口を切れば、もうせきとめる譯には行かぬ。金融資本の直接指導下にある東京手形交換所はまだ、默殺主義を守つてゐるが、民政黨政府はとう〳〵非公式の反對聲明を餘儀なくされた。――即ち十月三十一日民政黨政務調査會における小川大藏次官の、再禁止・平價切下に對する『駁論』といふかたちにおいて。（十一月一日の諸新聞）

他方において、再禁止・新平價論者達はそれ〴〵の新聞經濟欄や經濟雜誌に據つていよ〳〵猛烈に鬪爭を押進めた。彼等は組織的に講演宣傳もやり出した。石橋湛山氏の「東洋經濟新報」や、高橋龜吉氏の「經濟情報」などは最近は殆ど再禁止・新平

價論の宣傳機關と化してゐる。そこで又、今迄は『默殺せよ』の組であつたかに見えた「エコノミスト」の如きも、その最近號を「新平價批判號」として、論爭の中に飛び込んで來た。

傳統的なインフレーショニストたる政友會は、吾々が本誌前號で指摘した通り、明かに強く再禁止主義に傾いてゐる。それはエノコミストのいふやうに、『政友會の一部に再禁止論の贊成者があることはその言動から知られる』だけではない。政友會がその政綱として最近に採用した「新經濟政策」それ自體は、金輸出再禁止を前提とする時にのみ、實行可能性のあるものだ。

金輸出再禁止問題の現實化は、特殊の經濟危機が成熟したことの一表現である。吾々は、十月號及び十一月號の論文において、一方では緊縮・消費節約強行へのあらゆるブルヂョア的努力にも拘らず、滔々たる金流出を見、他方では諸商品市價の暴落にも拘らず、**低物價・低原價による資本家的採算點の改善**及び特に貿易尻改善の夢想は全く裏切られつゝあることを力說した。と同時に吾々は、いかに解禁恐慌の旋風中心が產業部面から金融部面に移行したかを明かにした。そしてそれと共に、いかに救濟の要求・從つてインフレーションの要求が熾烈化したかを指摘した。そしてそれは否應なしにまた、整理、合理化のスローガンを埋葬したのであつた。かくして、金融資本のデフレーション政策の全面的な破綻、そのクライマックスとしての××××爆發の危機、――かゝる恐慌進展の過程こそが、金輸出再禁止問題の現實化を生んだのだ。しかも、問題の尖銳化は、それ自身今や危機の激化の一モメントをなしてゐる。

(2) 再禁止・新平價解禁論の二三の前提

再禁止・平價切下げ論者は、次の諸前提から出發する――

一、舊平價解禁以來の諸商品價格の暴落によつて、商品の市價と原價との矛盾は激成された。即ち、諸商品の市價は暴落したにも拘らず、その生產費を構成する諸要素――勞賃、原料、動力代、地代、金利、等――は、その割合に下らない。この矛盾のために、對外的には、利潤ある商品輸出は非常に困難となつた。從つて貿易バランスの改善もまた至難となり、その達成などは何年かゝるか解らない。そしてその間に正貨は容赦なく流出し、正貨準備はます〳〵涸渇するだらう。

二、諸商品の市價と原價との間の矛盾は、國內的にもまた、すべての產業企業の利潤をひどく切り下げ、多くの企業を積極

的な損失計算に突落してゐる。加ふるに、たゞさへ過大な諸企業の債務は、貨幣價値の騰貴によつて更に幾割か加重され、企業利潤の激減と相俟つて、産業企業の上に絶望的な重壓を加へるに至つた。しかるにまた、前記の理由による正貨流出は、ますます金利を高めて産業企業の利子負擔を加重するだらう。

三、かゝる狀態をもつて舊平價解禁を維持せんとすれば、整理も合理化も出來はしない。

四、更にまた、『財界を、濱口內閣の今日の政策で、このまゝ進行させて行けば、早晩パニックが來ざるを得ない』。(これは、東洋經濟新報の金輸出再禁止問題討論會の第一回會合の出席者達が滿場一致到達したる結論であつた。出席者の中には、數人の再禁止反對論者も加はつてゐた。同誌九月二十七日號二三頁)。即ち言ひかへれば、現在の産業恐慌のクライマックスとしての金融恐慌は不可避である。

五、かゝる恐慌は、産業企業の「整理」と銀行債權の切捨とを努力的に遂行するが、しかしそれは、發達し得る大企業の一部と、中小工業の大多數とを破滅させる。

六、かくして要するに「財界の立直し」は絶望である。

それ故に——と再禁止論者は言ふ——かゝる窮境打開の手段として、彼等の主張する金輸出再禁止・新平價解禁よりも、ヨりよき効果的方策がない限り、彼等の主張に贊成せよ、と。

上記の、彼等の諸前提は、一二の點(例へば、その第五項が持つ特殊の含意の如き)を除けば、全く正しい認識の上に立つてゐる。だが、彼等の右の主張の方は、更に二つの隱れたる假定の上に立つてゐる。その一つは、いま何等かの方策を用ひれば「財界の建直し」——もつと正確にいへば日本資本主義の上向的發展の確保——が可能だといふ假定。もう一つは、日本資本主義經濟の現狀とその『暗澹たる前途』とは、殆んどすべて、濱口內閣の誤まれる金解禁の結果であり、それによる通貨價値激變のためだといふ假定、これを言ひかへれば、現在の全世界及び日本の異常な生産過剩恐慌の否定、乃至はそれの極度の過小評價。

此の二つの假定はむろん間違つてゐる。しかし彼等は、さうした假定の上に立てばこそ、彼等の方策の可能と成功とを主張する。彼等によれば、日本ブルジョアジーは再禁止・新平價解禁の方策によつて當面の金融恐慌を回避し得、建直しへの確乎

たる一歩を踏み出し得るといふのだ。

(3) 再禁止・新平價解禁の方法と「效能」と

彼等はいま頻りに叫んでゐる、――吾々こそは、瓢箪から駒を出して見せる、と。では、どんな風にして？

彼等は言ふ、――先づ可及的急速に、しかも必ず「拔打ち的に」、金の輸出を再禁止する。すると忽ち爲替は暴落する。だが、決して無限に底無しに暴落しはしない。或點まで――例へば四十弗邊まで――下れば、そこに安定せんとする傾向をとる。しかし、人氣作用や投機に基づく爲替の暴落を防ぐために、政府・正金銀行による正貨現送その他の手段をもつて爲替相場を統制しなければならぬ。『さうすれば投機や人氣に基く圓貨は其處で篩ひにかけられる。そのあとで再び爲替を放任すれば、あとは專ら正常的な貿易關係と貿易外收支關係によつて動くことになり、容易に安定點を探ることが出來る』（高橋氏、時事新報十月十二日）。そこで、その點より稍々低位にまで法定平價を切下げて、金融禁をやる。言ひ換へれば、現在では、二十匁の金が百圓で、その百圓は四九弗八五（約五〇弗）に相當するといふ法定比價になつてゐるのを、今度は四十弗が百圓に當るやうな風に法定平價を切下げて、――即ち現在の金二十匁＝百圓＝五十弗をば金十六匁＝百圓＝四十弗といふ風に、即ち現在の一圓＝純金二分をば一圓＝純金一分六厘にまで切下げて、金解禁をやる。さうして此の新しい平價において爲替相場を『實質的に安定させる』。――これが、彼等の再禁止・新平價解禁である。（但し言ふまでもなく、こんな圓貨幣の金純分の低下をやるのには、議會にかけて貨幣法を改正しなくてはならぬ）。

するとどうなるか？　再禁止・平價切下げをやれば――と彼等は言ふ――先づ第一に景氣が立直る。何故なら、爲替相場の下落並びにそれに應ずる法定平價の切下げは、それだけ輸出を有利ならしめる。例へば、爲替が二割下落してそこに安定すれば、日本生糸を買ふ米國商人はほゞ、二割だけ安く買へる。そこで生糸に對する需要が増し、從つて生糸の價格は――圓で數へて――騰貴する。同樣に輸出商品一般の價格が昂騰し、それにつれて利潤も增す。資本家は息を吹き返す。輸出產業に始まる景氣は、他の諸產業にも波及する。この有難い景氣の春風の前に、金融恐慌の不安なんかは淡雪のやうに消え失せる！

むろん新平價の御利益はそれだけではない。現在のやうな替

平價解禁による物價暴落＝通貨價値騰貴の場合とは反對に、新平價景氣による物價騰貴＝通貨價値下落は、自働的に貨幣債務の切捨てを結果する。過大な借金の重壓の下に瀕死狀態にある産業企業は、二割なら二割だけ債務負擔を輕減される。かくして利潤率は、二重の要因によつて昂騰する。そこでまた株價も、それを見越して暴騰する。

もつとも、債權債務關係において産業資本が得するだけ、銀行資本は損するといふ勘定になる。けれども、戰後日本のインフレーション、特に井上の日銀總裁時代の震災手形や特融のインフレーションは、專ら銀行資本家を救濟したものだ。インフレーション時代に「國民」の犧牲において救濟された銀行資本家や貨幣資本家をば、又もやこのデフレーション＝貨幣價騰貴によつて儲けさせるといふ法はない。平價切下げによつて彼等に若干の損失を負擔させるのは、正義に叶ふやり方である。否な、それはむしろ「金融資本の膺懲」だ！　とはいへ、彼等も、——一方で損はしても——他方では得をする。現狀のまゝで進んだ場合を考へて見よ、巨額の貸附は回收不能だし、不可避的なパニックは彼等を沒落に突落す。たゞ、パニックを防止する再禁止・新平價の景氣のみが、産業企業を蘇生させ、從つて貸附の回收をも可能ならしめるのだ。

だが、反對論者は言ふかも知れぬ、——法定平價が切下げられるだけ、即ち通貨價値の下落するだけ、それだけ一般物價が騰貴するとすれば、たとひ輸出商品の價格は騰貴しても、その生産費を構成する諸要素もまた同樣に騰貴するから、利潤はちつとも浮ばない筈だと。しかし、それは杞憂といふものだ。何故なら、國内市場を市場とする諸商品、及び勞銀・動力代・地代等の原價構成要素は、同じく騰貴するにしても、輸出商品が騰貴するのよりもテンポがおそい。從つて常にその開きだけ利潤は浮ぶ。

加ふるに、商品の輸入者は、円で數へて二割なら二割だけ前より高く買ふことになる。それだけ輸入品の國産品に對する競爭力は減殺される。即ち新平價解禁は、保護關税と同樣の働きをする。

かくして輸入は防遏されると同時に輸出は促進される。今尙ほ中小工業の域にある有望な新興輸出諸産業は、自働的に保護されて發達する。それらと共に、發達の見込ある大工業の一部

もまた、當面の金融恐慌による破滅の難を免れる。溺死の日本經濟全體が、新平價の盥水を與へられて蘇へる。この回復に基づいてこそブルヂョアジーは、諸般の根本對策、——整理・合理化・等、等——を遂行することも出來るのだ。見よ、再禁止・新平價解禁の効果は、貿易尻・國際貸借の改善に始まりてしかもその續行を可能ならしめる。日本資本主義は萬々歳だ！

最後に——と彼等は附加へることを忘れない——、吾々の新平價景氣が諸事業の繁榮と擴張とを伴ふ限り、失業は減少し消滅する。そこでプロレタリアの購買力が増大すれば、米價その他の農産物價格も高まつてゆく。繁榮は農村にも波及する。かくして新平價は、「都市・農村の無産階級」をも利益する。

吾々の新平價こそは、産業のみならず銀行にも、資本家のみならず勞働者大衆にも、勞働者大衆のみならず農民大衆にも、否な國民全體の上に黃金を撒き散らす福の神なんだ、と——。

たしかに「魅力」はその邊にある——

二　沒落資本主義の道化役

(1)　恐慌回避のユートピア

新平價論者は、口癖のやうに『そんな子供瞞しの議論では』といつて見えを切る。が、再禁止・新平價解禁によつて金融恐慌を回避し得るといふ彼等自身の議論ほど子供瞞しのものはない。

彼等は自ら、その主張する再禁止・平價切下げの方策を、應急手段、非常手段だといつてゐる。それは彼等が、正當にも、現實の金融危機を認識し、しかもそれは×××××××××××××××××××成熟してゐることを認めるからに外ならぬ。ところで、彼等の方策はどうか？　彼等の方策そのものが、まさに混亂の要因を、多すぎるほど孕んでゐるのだ！

言ふまでもなく、平價切下げのための金輸出再禁止は、通貨價値の激變並びに諸價格の激變を一擧に政策的に實現せんとする。こんな大きな、投機への刺戟はない。こんな一般的な、通貨・債權所有者への脅威はない。そしてそれらは必然的に混亂へと發展する。具體的には、再禁止を見越しての、資本の海外逃避、滔々たる正貨流出、殺到する金兌換要求、若干の商品及びわけても株式・社債・公債・爲替の狂的投機、取付的な預金引

出し、金融梗塞、金利暴騰、——これらのものが、現狀の如き金融市場のこゝかしこに、大小の混亂を起さない筈はない。

むろん彼等も、それはよく知つてゐる。されぱこそ彼等は、さうした逃避・投機・取付の防止手段としていろ〱の取締法を數へ上げてゐる。だが、あひにくこの資本主義社會では、そんなものはみな「暴利取締法」のたぐひに過ぎないのだ。しかも、此の場合の性質上、そんな取締りが物々しければ物々しいほど、不安な者は不安を増し、投機者は投機熱をあふられる。

そこで彼等が思ひついたのは「拔打ち的な再禁止」といふことだ。逃避や投機や取付をやるひまを與へずにズバリと拔打ち式にやればよい、と。——だが、これは單なる言葉の上のゴマ化しだ。そんな出しぬけの、暗打ち的な再禁止を、實際誰がやり得るといふのか？　彼等は、それを、政友會か民政黨の政府にやらせようといふ！

吾々は、こゝでまた、わかり切つた眞理を繰り返さねばならぬ。「資本王國の財産調べ」をやつた高橋氏がよく知つてゐるやうに、日本資本主義の現段階にあつては、二三の金融資本コンツェルンが支配的地位を占めてゐる。民政黨であれ、政友會であれ、およそ重要なブルヂョア的政策は、金融資本の政策とならなければ何一つやれはせぬ。しかも彼等は、さうした政策を國家・國民の名において行ひ得んがために「輿論」をつくらずにはゐられない。過般の金解禁のやうな、ブルヂョアジーにとつては寧ろ當然すぎるほどの政策でさへ、民政黨がそれを政綱化するまでに、更にそれを交換所銀行等の決議化するまでに、ブルヂョア・ヂャーナリズムの合言葉化するまでに、ありとあらゆる宣傳的努力を必要とした。

まことに滑稽極まることは、われらの再禁止論者達が「金融資本膺懲」のために出し拔けにやる筈の再禁止をば、出し拔けどころか、今から仰々しく騒ぎ立てゝ宣傳してゐることだ。新平價論者よ、健鬪せよ！　諸君の政策も、金融資本の政策とならないとは限らない。——諸君の宣傳が奏効し、再禁止政策の支持者が增し、ブル政黨の動きや様々の決議や聲明などによつて、再禁止の確實性が増せば増すほど、資本の逃避は盛んになり、預金は引出され、爲替は暴落し、正貨は流出し、投機市場は殺氣立ち、公債は下落する。そしてそれによつて、諸君のいはゆる瀕死の財界の、こゝかしこに混亂が起れば起るほど、ま

さにその理由によつて金輸出再禁止は不可避となる。そこで支配的金融資本も、これはたまらぬと見てとるならば、それこそ「出し抜け」の再禁止ともなるだらう。——だが、それはもはや恐慌回避策として再禁止ではない。諸君の再禁止は、すでに恐慌拾收策と化したのだ。そしてその再禁止はもはや、諸君の意圖する計畫的な整理・合理化への足場ではなしに、窮餘の救濟インフレーションへの足場をつくるものとなつてゐる。かくしてきた、解禁恐慌過程の一産物である再禁止・新平價運動は、それ自身、ヨリ重大な經濟危機への一モメントをなしてゐる。

だが、吾々は、一つの假定として、再禁止論者達が「天佑」に惠まれたことにしてもよい。破局的な爆發に先立つ再禁止に成功したことにしてもよい。再禁止はやつたとしても、それはちつとも混亂の要因を除去しないから。

爲替相場の暴落、——これは彼等も豫期してをり、むしろ期待してゐることである。彼等はたゞ「購買力平價說」の間違つた理論的根據から、再禁止後爲替の動きを放任すれば、自然な「無理のない」「日本の經濟力に相應した」安定點が見出せるといひ、その點は三十五弗見當だと言つてゐる。滑稽なことには、この三十五弗見當での安定化といふ主張は、(一)此の「第三期」の世界恐慌期における海外物價が今より決して下らないこと、(二)事實上再禁止敢行の立役者たるべき政友會内閣が再禁止後何等のインフレーションも起さぬこと、及び(三)再禁止後の、資本逃避は不可能でないまでも僅少だといふ、揃ひも揃つて阿呆な假定に基くのだ。(一)と(二)に關しては說明も要しない。金輸出禁止中の資本逃避は、不可能どころか、輸出貿易の受取勘定の國外留置その他種々なる方法によつて驚くべき巨額にのぼるのだ。それはフランスその他の經驗が語つてゐる。

かくして、新平價論者の頭の中でつくり上げた三十五弗の安定點などはきれいに蹴飛ばして暴落せんとするところの爲替相場に對し、彼等の謂ゆる「梃入れ」をやり、統制をやるために、政府・正金が正貨現送をやるとしたら、それは飛んでもない巨額の正貨の喪失とならずにはゐない。金解禁をやつたかと思へばすぐ再禁止する日本の國に對しての信用は全く崩壞する。猛烈な圓賣の投機は、紐育にも、ロンドンにも、上海にも起るであらう。日銀の當事者が、この場合、爲替の防衛買ひに

よる損失は二億圓に達するだらうといつたのは、決して誇張ではない。(フランスは四億を要した)。かうした正貨の喪失に加へて更に巨額の資本逃避があるのだ。かゝる事態が、彼等の謂ゆる「瀕死の財界」に混亂を起さずにすむかどうか？

おまけに公債は暴落する。平價切下げのための再禁止は、株を暴騰させるのと同じやうに必然的に公債を暴落させる。そして、この十月初に現はれた公債下落——甲號五分利八十二圓——の程度でさへ、日本の金融の全機構は、その最大支柱の倒壞に脅かされたのだ！

最後に、投機人氣とその反動がある。どんな資本家的賣買でも、投機的要素のないものはない。況んや平價切下げ見越しといふ異常な投機刺戟が與へられるのだ。出しぬけの再禁止と共に、若干の商品や主要株券は、びつくりしたやうに奔騰するだらう。そして暫くは暴騰に暴騰を重ねるだらう。投機的資金の需要は激增する。だが、やがて「惡材料」が現れる。必然的に現れる。何故といつて、日本でも外國でも本當の消費力・購買力はちつとも增してゐないのだ。どころか却つて減つてゐる。おまけに一方、生産設備の幻想的な大過剩こそが現在の世界及び日本の恐慌をもたらしたのに、恐慌はまだ過剩生産設備を大して破壞するに至つてゐない。長期の高率操短に惱みぬいた資本家諸企業が、再禁止景氣に浮き立つて我れ勝ちにやり出す增産は、ぢきに供給過剩をひきおこす。諸價格の投機的な暴騰が現實の利潤關係を無視した空景氣にすぎないことが、何等かの「材料」によつて示唆されるや否や、忽ち反動が來る。さきの騰貴がひどければひどいほど、反動は激烈だ。そして謂ふところの反動とは、どこかに大穴をあけることなのだ。

ついでながら、この再禁止景氣で一番ぼろい儲けをしさうなのは、大きな紡績資本家である。彼等の輸出綿製品が暴騰するだけでない、彼等がウンと買ひ付ける輸入原綿は價格騰貴が遲れるから。だから再禁止・平價切下げ論者の先頭に武藤山治が立つたのは偶然でない。

が、空景氣は長く續きはしない。そして、その後の諸商品の市價は、現實の購買力ある需要——それは減少傾向にある——と、過剩傾向にある供給とによつて支配される。この市價は、再禁止論者の豫想より遙かにひどい爲替の下落にも拘らず、彼等の豫想ほどには決して高まらないであらう。爲替の下落した

率だけ、否なそれよりももつと物價は上る、といふ彼等の假定は、假定にすぎない。それが實現するかどうかは、現實の諸關係が決定する。事實において、吾々が前の論文「沒落への轉向期に立つ日本資本主義」においてはつきりと指摘した通り、金輸出禁止＝インフレーションのために購買力をしぼり盡されて市場の荒廢が現實化してゐたところの、インフレーション末期の昭和二年から昭和四年における爲替の下落——その最低は四四弗——に際しては、一般物價は騰貴どころか却つて下落した。輸出商品さへが騰貴しはしなかつた！（拙著「沒落資本主義の第三期」一三九頁、一五六頁）。

こゝに、新平價論者の拔け出すことの出來ない矛盾が現はれる。——（反動と混亂に轉落する一時の投機的景氣は別として）——、二割や三割の爲替下落では、「瀕死の財界」が蘇生するほどの價格騰貴は不可能だ。從つて、此の蘇生と回復を足場としてやるのだといふ「財界の建直し」の望みも夢となる。國際貸借の改善もおぢやんだ。そこでまた、第二第三の平價切下げが必要になる！　が、さうかといつて、「財界」を蘇へらすほどの價格騰貴を結果するやうにと、四割も五割も爲替を下げてしまはふものなら、混亂は火を見るよりも明かだ。そしてこれは、彼等も十分承認してゐることなのだ！

平價切下げのための再禁止は決して混亂を起さないといふ彼等の辯解が振つてゐる。曰く、再禁止によつて景氣が立直らうといふ時に、パニックが起る筈はない、と。だが、それは景氣にもよらうではないか！それは、購買力ある需要の絶對的增加によつて生ずる景氣ではないのだ。その景氣は、たゞ痙攣的投機熱によつてあふられる。しかもその投機と「景氣」の反面は、居ながらに收奪されんとする預金者や債權者の蒼白な不安と焦燥なのだ。

新平價論者の、その他の辯解も全くたわいがない。曰く、すべての者が買はうとすれば、賣る者がないから大丈夫だ。曰く、預金を引出して買はうとしても價格はすでに上つてゐるから何にもならぬ、だから預金を取付けたりする筈はない、等、等——、どれもこれも、俗流經濟學の幼年時代のかたことを思はせるだけである。

日本資本主義經濟の「建直し」が、金融資本の强化とその統制力の擴大とによつて可能だ（！）と信じ、そして一方の進化

の役を演じてゐるところの、勝田貞次氏は、貨幣資本・銀行資本を痛めつける再禁止・新平價政策を攻撃し、そんな方策は瀕死の病人に腐れ水を呑ませるものだといつた。しかし、——高橋龜吉氏は言つた——、たとひ腐れ水でも、昇汞水を呑ませるよりは増しなんだ（！）と。（時事新報十一月一日）

かくして、恐慌回避のユートピアは自分自身を暴露する。

だが、新平價論に對するブルヂョア的反對論者の論爭もまた、みんな「試驗管の中の論爭」に過ぎない。彼等は、金輸出再禁止が、それ自體として、獨立に、パニックを起すとか、起さないとかいふやうな、「ノルマルな」爭ひをやつてゐる。彼等のブルヂョア的願望は、破局を孕み切つた現狀の特質の、率直な認識を拒むのだ。

問題は、平價切下げのための再禁止の方策に內在する混亂の諸要因が單獨にそれ自身金融恐慌に發展するかどうかといふやうなことではない。また、その混亂要因の現實化が、再禁止の前に起るか、後に起るかが問題なのではない。更にまた、その現實の混亂はそれ自身大きなものである必要もない。たゞ、大なり小なりの混亂は必然的に起ること、そして僅かな混亂でもが、この熟し切つた危機の爆發の立派な導火線となり得ること、從つて爆發の不可避性、——これが吾々のテーマなのだ。

もしも新平價論者が、この現狀の現實のさうした特質を否定するならば、彼等の再禁止・平價切下方策は、彼等自身の論理によつて不要のものとなる。

言ふまでもなく、彼等もまたブルヂョア・イデオローグの一類だ。彼等は何とかして「財界」を建直したい。彼等は何とかして恐慌を回避したい。この熱望と焦燥が幻覺を生む。再禁止・平價切下げのアイデアが救ひの神として現はれる。豫じめ盛んに再禁止の宣傳をやる必要と、出し拔けに再禁止をやる必要、顯著な物價騰貴を起すほどの爲替暴落の必要と、混亂を恐れて爲替下落を阻止する必要、等——これほど明白な矛盾が、彼等には矛盾でなく思はれる。ユートピアにおいてのみ、矛盾は消え失せる。何故ならそれはユートピアだから。

(2)　中小企業保護のユートピア

新平價論者の表看板の一つは、産業資本の利益擁護である。しかし、この「新平價イデオロギー」なるものは、産業資本イデオロギーの假面をかぶつた弱小資本イデオロギーであること

は誰にもわかる。

「弱體」資本家や中小資本家は、インフレーション末期に金融資本が投げた整理・合理化のスローガンについ釣り込まれてゐた。しかし、いよ／＼デフレーションが進行し、整理・合理化がどんな運命を彼等に强ひるかが解るや否や、彼等は悲鳴をあげはじめた。「新平價イデオロギー」は、彼等の悲鳴の「理論的」表現である。

さすがに理論家達は、整理・合理化を眞正面から排撃しやうとはしない。彼等は、それに、「根本的對策」の尊稱を呈して敬遠する。そして、あの頃のインフレーション＝爲替安に惠まれて芽をふいた「新興輸出産業」なるものを前面に押出して來る。それは、中小企業なのだ。彼等によれば、この弱々しい「新興産業」の保護育成こそが、現段階の資本主義日本の國際貸借改善の「鍵鑰」である！（これに關する一聯の議論は、就中、「讀賣」に連載された山崎靖純氏の「新平價イデオロギー」に展開されてある。しかし此の論説は、日本資本主義の現狀の究明としては多くの點で非常に優れたものを持つ。）

一度インフレーションの洗禮をうけた經濟は、いくらデフレーションをやつても、インフレーション前の狀態には決して引戻せない。それは新平價論者の言つてゐる通りだ。しかし、それがさうだと同じやうにまたその逆も正しい。一度デフレーションで荒されたからには、どうもがいても、インフレーションの「ありしよき日」はもう歸らない。消費力・購買力の激減に現れる小市民・勞農大衆の貧困化、集積と集中と獨占化にあらはれる諸資本の力關係の激變。しかるに、われらの理論家達は、ひたすらにインフレーション＝爲替安の昔ばかりを戀ひ惱む。

が、それもよいかも知れぬ。たゞ吾々は、平價切下げ＝爲替安の彼等の樂園が現はれた時でさへ、木の實は大工業にさらはれることを知つてゐる。中小工業でつくれるやうな商品なら、その生産は後進諸國にもすぐ發達する。おまけに、中小工業に固有なる、獨占形成の不可能性、容易な供給過剩への必然性、資本力・信用能力に於ける決定的劣弱！ 沒落するものは、どう踠いても沒落する。今の中小工業による輸出商品が海外において廣大有利な市場を持つ確實性などがあらうものなら、その商品や代用品の生産は忽ち大規模工業に奪はれる。おまけにま

た、新平價＝爲替安の刺戟は長く續かない。フランスでさへ二年とは續かなかつた。もしまた永續きでもしさうなら、對手國はすぐ報復手段をもつて對抗する。

新平價論者は言つてゐる――『我産業にとつて必要なことは、中小工業の合理化が市場の發達と併行して行はれることで、かくすることによつてのみ、合理化が生み出す失業增加を免れ、且つ正貨を維持することが出來るのである』(山崎氏)。

こゝに彼等のユートピアの集中的な一表現がある。現實を見よ。市場が擴大しつゝある狀態の下においては、合理化なんか行はれはしない。市場の行詰りのみが合理化を强制する。だから失業增加は不可避なのだ。

(3) 債務切捨てのユートピア

現在の新平價論が弱小資本イデオロギーであることは、論者等が債務切捨ての「効能」を力說することによつて一層明白になる。

貨幣價値の低下から自働的に結果する借金の切捨ては、弱い產業資本のみならず、弱い銀行資本家をも利益する。一般に銀行資本は、預金・借入金その他の債務と、貸附・手持公社債その他の債權及び手持現金とを比較して、前者の多いものは得をする。貨幣資本家は一般に損をする。公債・社會・定期預金などで食つてゐる利子衣食者は損をする。金融資本の利害は一見複雜だ。一面では產業資本、他方では銀行資本であることがこの資本の特質だから。

が、それにも拘らず、金融資本は全體として集中的債權者である。從つて彼は一般に債權を擁護する。が、むろんそれだけではない。支配的資本としての金融資本は、彼が王者たるまでに發展した資本主義段階にあつては、その全體制の大動脈である債權債務關係そのものの守護神であらねばならぬ。債務の切捨て即ち債權者の收奪を一擧に人爲的にやつてのけるやうな政策は、守護神としての金融資本はうか〳〵とやれはせぬ。おまけに、日本帝國主義の最高指導力としての金融資本は、全世界に對して「日本の富」を代表する。資本家企業の「重役」達が企業破產の脅威に慄へつゝも尙ほ最後まで減資を避けるのと同樣に、日本の「圓」のねうちを自ら引下げるといふことは、日本のマンモンとしては泣いても出來ぬ。

が、それらすべてにも拘らず、吾々は、此の沒落資本主義の

第三期における日本金融資本が――現にフランス金融資本がさうだつたやうに――平價切上げの窮地に追ひ込まれる日のあり得ることを知つてゐる。が、同時にまた、吾々は、現下の債權關係における日本金融資本は、フランスの場合よりもつと新平價に行きにくい特殊の理由をもつことを知つてゐる。

平價切下げ前のフランスでは、公債は廣汎な利子衣食者層の手に分散して所有され、その價格もすでに暴落してをつた。しかるに現下の日本では、公債は金融資本の手に集中的に所有され、しかもその價格は今や必死の努力によつて維持されてゐる。銀行は、――十億の社債の外に――四億の地方債と二十四億の國債を持つてをり、此の總額の少くとも六〇%は十二大銀行の手に、四〇%は五大銀行の手に集中されてゐる。日本の銀行の株券所有は少額で、公債所有が非常な巨額にのぼるのは、日本資本主義の發展の重要特殊性を反映するが、大銀行への公債集中は、昭和二年恐慌によつて更に激成されたのだ。(吾々はその歷史的意義を詳說しておいた――拙著「沒落資本主義の第三期」第四章)。二三の金融資本のコンツエルン及びその直接支配下にある諸資本に屬する公債・社債の總額は、恐らく二十億を超えるであらう。フランスのあの平價切下げは、暴落した公債價格をその水準に「安定化」したものであり、それは廣汎な小ブルヂョア的公債所有者層の收奪を結果した。しかるに現下の日本における平價切下げは、支配的金融資本そのものの收奪を意味し、全金融體制の××を意味する。日本金融資本は、自分自身の收奪と「膺懲」とを決意しでもしない限り、また自分の家に火をつけようとでもしない限り、今のところまだ平價切下げなどは斷然御免を蒙るのだ。

一つにはかうした公債所有關係特殊性こそが、日本金融資本をして、今度の舊平價解禁を選ばせたのだ。金解禁＝デフレーションの政策は、商品價格の犧牲において貨幣價値を引上げつゝ、公債價格を死守することであつたのだ。しかし、吾々はすでに――前號において――そのデフレーション政策の破綻の諸徵候を指摘した。日本金融資本は、第三期恐慌の激浪のために、「新平價」の岩壁に向つて押流されるでもあらう。即ち、商品價格の維持のために貨幣價値を犧牲に供す方向へ――。だが、それに先立つてすでに破綻がなければならぬ。公債價格暴落と破局がなければならぬ。

日本金融資本は、第三期恐慌の激浪を乘り切らうとして必死の努力をするだらう。そしてそれにも拘らず、平價の切下げが退つ引きならなくなるとすれば、彼等は事前に損失轉嫁を企てる。政治の實權を握る彼等こそは、眞先にそれをやり、またそ

の手段にも事をかゝない。支配的金融資本は、自己の損失を轉嫁し得るのでなければ、斷じて圓貨幣の切下げをやりはせぬ。

日本においても、平價切下げはありさうだ。しかし、それが實現されるのは、まさに新平價論者達の來させまいとするものが來てからであり、しかも金融資本の「準備」が出來てからである。そしてその新平價は、たゞ廣汎な小所有者層と、これに、依存する弱小銀行との犧牲において、從つてわれらの新平價論者が保護せんとする中小商工業者の犧牲において、實現されるだけだらう。それが、新平價による「債務切捨て・金融資本膺懲」といふ小ブルヂョア的ユートピアの歷史的運命である。

彼等のユートピアにおいては、再禁止・平價切下げをやつても、即ち貨幣價切下げによる債權收奪をやつても、確定利附債權たる公債が下落しないことになつてゐる！　明らかに、彼等も公債下落を恐れてゐるのだ。そして高橋龜吉氏に至つては、公債が騰貴するとさへ思つてゐる！　そしてそれでも「金融資本の膺懲」だと言つてゐる!!

もう一つのデマは、平價切下げが貧農の負債を輕減するといふ彼等の宣傳である。むろん事實はその反對なのだ。地主にせよ、肥料商人にせよ、抜け目のない彼等は、平價切下げのために彼等の貸金に生ずる計算上の損などは、どんな方法によつてでも埋合はすことを知つてゐる。平價切下げ＝物價騰貴後の貧農大衆は、事實上、ヨリ高い肥料を買はせられ、ヨリ多く借金を脊負つた自分を見出すだけなのだ。

(4)　小ブルヂョアを警戒せよ――平價切下げの眼目は勞賃切下げにある

新平價論者の書いたものを注意して讀む者は、彼等がすでに、新平價の「効能」としての「債務切捨て」と「恐慌回避」の二ケ條は撤回しさうな氣ぶりを示すのを見るだらう。よし恐慌が來てしまつてからやつたにしても、新平價はやはり新平價だ、と彼等が言ひたげなのを見るだらう。と同時に一方、彼等がます〳〵、産業資本家の利潤の增大といふことを、新平價の最大の御利益として力說するのを見るだらう。この利潤の增大は、どうして生ずるか、――吾とはそれをはつきり見究めておく必要がある。

彼等によれば、再禁止＝平價切下げをやると、爲替相場が下落して輸出産業の利潤が增す。しかし、それがために對手國の資本家が損するのでもなく、國内の他の諸産業が損するのでもない。――ところで、平價を切下げても、そのために全體としての社會的消費力は少しだつて增さないことは明かだ。從つてそこから利潤增加の來るわけはない。更にまた銀行資本・金融資

本の犠牲において、産業資本の利潤を増さうといふ彼等の考へが、いかに馬鹿げたユートピアであるかを吾々は見た。——では増加するといふ産業利潤の出處はどうか？　それは、貨幣價値低下＝物價騰貴による實質賃銀の引下げなのだ。それが唯一の出處なのだ。

彼等は言つてゐる、——爲替の下落と共に輸出商品の價格は上るが、國內的要素の價格はそれほど上らない。そして賃銀は水準に近づからとし、それに應じて勞銀も高まらうとはするが、しかし諸物價の騰貴しただけ勞賃を高めることは要らないのだ。だから利潤は浮ぶのだ、と。

見よ、實質賃銀の引下げ！　これが彼等の切札なのだ。新平價論者の一人は、此切札を、婉曲な筆でから書いてゐる——、『（勞賃は）いくら騰貴するといつても、個々資本家が算盤を採つて引上げるのであるからして、算盤の採れぬ點まで引上げる害はない。勞銀を引下げることは資本家にとつてかなりな難事であるが、引上げる場合にはそれを採算の範圍に止めて置くことはいと易しいことである』（山崎氏、讀書九月四日）。

この見え透いた意圖にも拘らず、彼等は、その小ブルヂョアに特徴的なやり方で無産階級を釣らうとする。そして彼等はいふ、——新平價で産業資本家の利潤が增せば、事業の擴張が行はれ、從つて失業はなくなつて來る、だから新平價は勞働者階級をも利益する、と。

勞働者に向つてから叫びかけた彼等は、その舌の乾かぬうちに資本家に向つて說いてゐる——、再禁止・新平價によつておなた方が蘇生すれば、そこに生じたゆとりをもつて整理・合理化をやり、いくらでも失業者を出して「人件費」を減らせるのだ、と。

次に掲げる引用文は、無産階級の陣營の中に入り込んでゐる小ブルヂョア的改良主義者が、どんな風に資本家にお辭儀をし、どんな風にして資本家の手先を勤めるかを示す點で「新平價イデオロギー」の白眉であらう。

赤松克麿——『勿論、現在無産階級の立場からいへば、金融資本家よりは産業資本家の方に利害關係の距離が近い。であるから産業資本家の目下の窮境を打開するといふことに、今の無産階級の生活自體といふものは重大關係があると思ひます』（東洋經濟九月二十七日號）。

赤松克麿——『金解禁の決行と産業の平和とを兩立せしめようとするならば、この平價切下げによる金解禁の方法が最も妥當でなければならぬ。勞働階級の生活利害、勞働運動の現狀か

ら見て、金解禁問題に對しては、この手段を選ぶ外はないと思はれる』（東洋經濟、昭和四年三月十六日號）。

高橋龜吉——『勞働階級に最も密接な關係のある「物價」は、主として、これ等日用生活費の根幹をなすものであるから、新平價解禁出直しに由つて、無産階級の直ちに蒙る物價騰貴の打撃は極めて輕微に過ぎぬ』（時事十月十日）。

もう一度言ふ、實質賃銀の引下げによる資本家利潤の増加——これが新平價政策の本當の「魅力」なのだ。デフレーション政策に轉じた日本金融資本は、失業者をつくり出し、その壓力で勞賃を切下げようとした。ところが、資本家の賣る商品の値が暴落したほどには、勞働者の買ふ物の値は下つてゐない。資本家は、余りに早く、勞賃切下げの限度にぶつかりさうになつてきた。そこで新平價論者が現はれた。彼等は、平價切下げによつて先づ一擧に勞賃を切下げて、それから失業者を出す方が樂でせうと獻策する。そして此の實際の「効能」の故にこそ新平價政策は、一定の條件が備るや否や、小ブルヂョア的ユートピアから金融資本の實際政策に轉化する可能性を持つ。無産階級は、その日のそれが、何を意味するかをはつきりと記憶しておかねばならぬ。

その日は、金輸出再禁止が不可避となり、命令的となるに從つて近づいて來る。しかし、一つの可能性は、再禁止後の日本資本主義が、もうどうしても解禁し得ぬほどに、從つて新平加もくそもないほどに、それほど惡化してゐることだ。それは再禁止が復たインフレーションを惹き起す場合であり、戰爭の危機が更に切迫した場合である。その時こそ圓は、マルクやフランの二の舞をやるだらう。しかも、インフレーションは不可避に見える。永いあひだ、唯だインフレーションによつてのみ彌縫され、潜在化されて來た深大な諸矛盾は、たゞインフレーションによつてのみ致命的爆發を免れようとする。日本資本主義の、インフレーションに對する執着は、阿片中毒者的な強さを持つ。

吾々はさきに、再禁止論者の主張や宣傳や運動は、進展する恐慌過程の一産物であると同時にまた、それ自身、ヨリ重大な經濟危機を激成させる一モメントであることを見た。今や吾々は、そのモメントが、結局において、強大資本に對する弱小資本の闘爭としてそこに現はれてゐることを知る。

この闘爭の理論的表現たる新平價論のユートピアは、吾がすでに暴露したやうに、小ブルヂョア的な恐怖と幻想とずるさと慘めさとをつきまぜた安價たカクテルの一つにすぎない。そし

て結局彼等の陶醉と願望のすべてを裏切つた、金融資本の政策と化す時にのみ、實現され得るものにすぎない。だが、こんな鬪爭や理論でさへも、金輸出再禁止問題を現實化すに役立つたのだ。

かうした挿話の出現は、沒落への轉向期に立つ資本主義日本なればこそ可能であつた。本位貨幣の價値を減らす減らさぬの問題が、今や、現實の問題と化したのだ。

金融危機の成熟に驚いた新平價論者達は、あわてて再禁止をやらうとする。彼等は夢中で竈の火を消してゐる。そして、家の燒けてゐるのに氣づかない。――こゝにも、沒落期資本主義のピエロがゐる。

三　嵐の前の靜けさ

(1)　救濟政策の一時的奏效

では、現實の過程は、どんな風に進展してゐるか？

吾々は、九月末＝十月初の狀勢を特徴づけてかう書いた――

『止まうともしない正貨流出、金利續騰、公債暴落、際限もない商品市場の惡化、――かうした螺線狀展開の過程のうちに、決算期、歲末金融期が迫つて來た。時も時、米價の暴落による農業恐慌の尖銳化が加はつた。人氣は一段と險惡化した――。かうした新狀勢は、「徹底的整理」の金融資本の旗の下に飽くまでも「救濟」を排斥して來た井上藏相等をして、「應急的救濟」への急旋回を餘儀なくさせた』。（本誌前號）

金融資本政府が、こんなにあわてふためいて「救濟」に乘り出したことは、何よりも雄辯に危機の尖銳化を語つてゐる。

救濟のやり方は、例によつて、御用銀行の動員だつた。日本銀行には突拍子もない利下げをやらせ、且つ擔保の制限も緩和させる。破綻にひんした大企業――樺太工業、日本製糖、日本人肥、日本麥酒鑛泉、東武鐵道、淺野セメント、等、等、等――には、興業銀行から金を貸してやる。借りやうにも擔保の無い地方銀行には、重役の私財を擔保として勸業銀行が融通する、等、等。さうして、政府が年末資金や配當資金の面倒を見てやるからといふやうな、非公式聲明をやつたのだ。

この場當りはよく效いた。效き目の程度は、日本の國家資本の傳統的な威力の殘存を示すのに十分だつた。それはもはや單なる殘存で、金融資本成立以後の國家資本は往年の支配力を失つてはゐるのだが――。

救濟政策の一時的奏功は、次ぎの諸點にあらはれた――

一、金利の騰貴が抑へられた。これは危險プレミアムの昂騰が一時停つたことを意味してゐる。

二、圓預金を弗預金に振りかへる者が少くなつた。資本逃避の休息狀態。

三、預金の減少が一時止んだ。

四、しかし、最大の收穫として政府も金融資本もほくそ笑んだであらうのは、公債市價の反騰である。十月三日に八五圓三〇錢にまで落ち込んだ甲號五分利公債が、八月下旬の水準九一圓にまで引き返した。反騰は主として日銀が躍起になつて買つたからである。支配的金融資本も買ひ進んだ。今でもまだ買つてゐる。

五、一時手ひどく賣り叩かれた銀行株やその他も、公債の反騰に伴つて持ち直した。

だが、こんな風にして現はれた若干の改善は、たゞ經濟機構の上皮にちらついた陰影であるに過ぎなかつた。何故といつて、實質的な改善は何一つ生じてゐない。それどころか、基底は却つて、ずつと惡化した。多くのブルヂョア的批評家すらが指摘したやうに、「過大な借金で倒れさうな不良會社」により多く借金をつくらせることが、何等かの改善を齎らさせることが、何等かの改善を齎らさう筈がない。それはたゞ、爆發へのモメントを强めることに終つたのだ。

もし、最近の經濟局面に何等かの靜けさがあるならば、それは「嵐の前の靜けさ」に似る。

(2) 物價續落・貿易尻惡化・正貨流出三億圓・限外發行激增

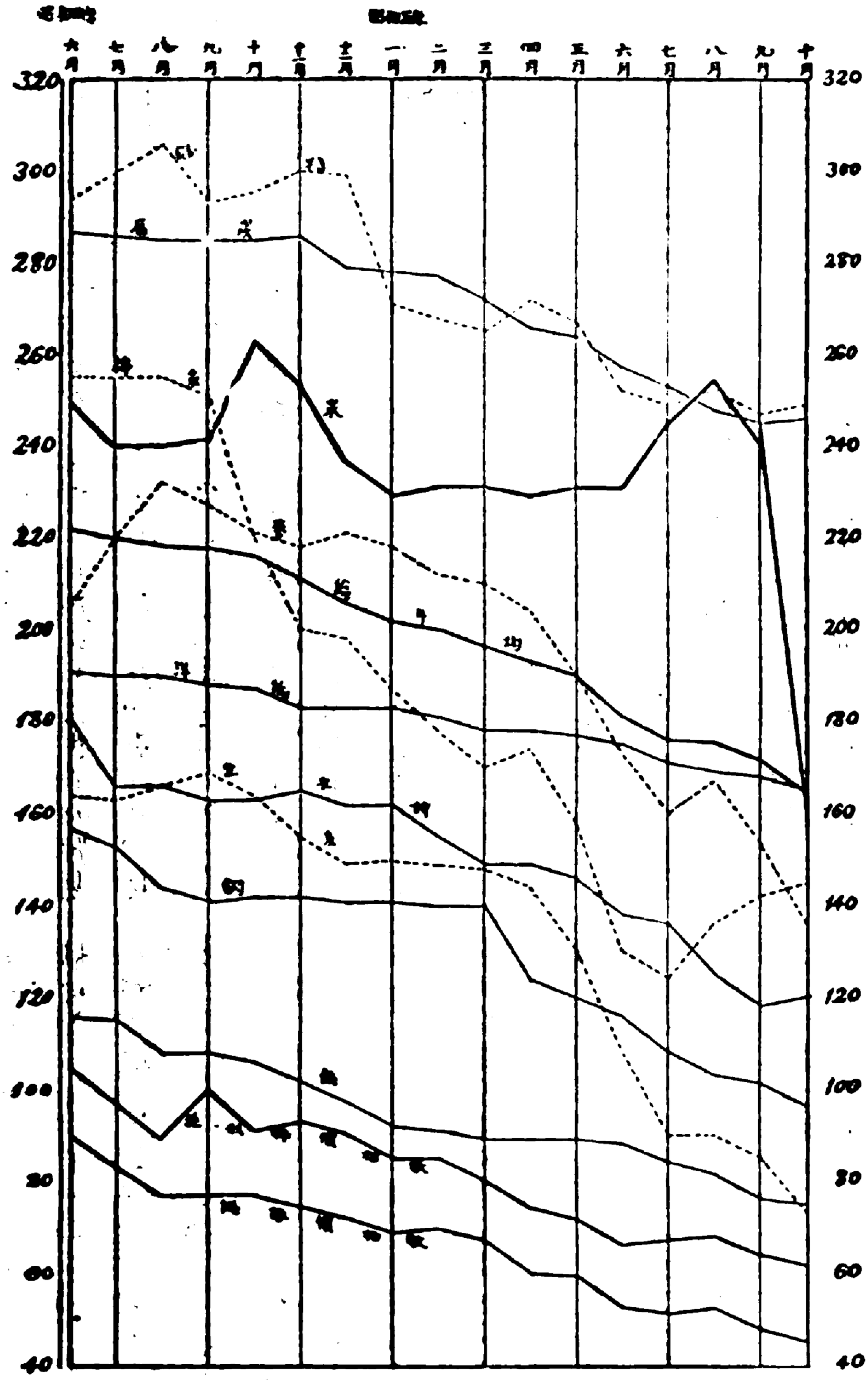
物價下落のテンポは依然として激しい。十月の總物價指數(日銀)は、前月に比して四%といふ大股の落ち方だ。小賣物價總指數も、二・七%低落した。しかし、卸物價と小賣物價の開きはます／＼大きくなつてゐる。九月の開きは一四・七だつたが、十月は一六・〇になつた。資本家の賣る物は暴落を續けてゐるが、勞働者の買ふものは米のほかは殆んど下らなかつた。尤も、卸賣物價總指數の激しい落ち方は、麥と米の、文字通り釣瓶落しの暴落に少なからず負うてゐる。しかし、生糸、銅の下落もひどかつた。綿糸、砂糖、石炭等が多か少れなかれ騰貴したのは、一部分は高率の生產制限により、一部分は季節的需要による――(グラフ參照)。東京市內卸賣物價は、日銀の調品目五十六品のうち、騰貴は十品、低落は三十七品、保合ひ九品であつた。

諸カルテルは、高率の生產制限を續けてゐる。紡績カルテルは、現行の高率操短を來年上半期まで延長することを決議した。

高率の生產制限が、大多數の資本家企業にとつていかに堪え難いかは、諸會社の利益率が、本年上半期においてさへ、前年

下半期に比してひどく低落してゐるのでも明かだ。紡績業は一六・二%から三・〇%に、製麻は七・九%から〇・五%に、製紙は一三・二%から八・七%に、セメントは一一・〇%から三・九%に、銅は一三・八%から六・〇%に、造船造車業は四・八%から二・二%に、等、等。そして銀行業の利益率も、一一・七%から九・一%に低下し、銀行會社全體の利益率は、八・九%から五・四%に低下した。

物價及び株價の下落
（指數による）



備考　(1) 物價指數は日銀調總平均は五十六品の平均
(2) 株價指數は東京株式取引所調
(3) 本誌十月號に於て八月まで示したカーヴを十月まで延長した

カルテルには紛議が絶えない。モスリン操短の不調、産業協定の不調、等。

殆んどすべてのカルテルが、滯貨處分のために猛烈なダンピングをやつてゐる。洋紙、セメント（南洋、南米、）銅（歐洲）綿布（近東、）硫安（マニラ）砂糖（支那、）米（支那、南洋、）等。

米國に於ける「生絲消費高」は著しく增したやうな外觀を呈したが、實際には米國機業會社の手持品の激增を意味し、需給狀態は却つて惡化した。生糸の下落はまだ止みさうもない。

十月中の計畫資本總額は、たつた一千六百萬圓で、前月より

も六千六百萬圓の減少（！）だ。これは、資本の擴張再生産行程が全く停止狀態にあることを、否なむしろ縮少再生産に陷りつつあることを、端的に示す。

鐵道の減收は早くも三千萬圓を突破した。

貿易尻は益々惡化しつつある。本年一月から十月までの貿易總額は、前年同期に比して三〇％の減退になつた。それは、資本主義日本の貿易史上に於ける最大の貿易減退率とされる大正十年の三三％に近づいた。（前號の論文には――十月十一日の「東京朝日」の記事に據つて――十月十日までの貿易減退率を四〇％と書いたがそれは違つてゐた。三〇％が正しい。それから大正十年の減退率も、同記事の三六％は誤りで、三三％が正しい）。

輸入の減退よりも輸出の減退が一層ひどい。從つて輸入超過は、前年よりも二千二百萬圓の增加となつてしまつた。デフレーションによる貿易尻改善の夢は、ますます夢となる。ずつと前から手控へられてゐた棉花の輸入はこれからぐつと增すといふのに、ダンピングによつて諸滯貨が減るのにつれて輸出の方は減少する。おまけに、英・米・獨の商品の支那進出が目立つて來た。

米國政府の機關紙トレード・ジャーナルは日本について斯う書いてゐる――『阪神地方に於ける集金狀態は極端に困難で、多數の小貿易業者は多かれ少なかれ恐るべき金融難に陷り、大商店も不況に直面してゐる。日本に於ける貸金の取立ては、實際上、延期または訴訟なくしては不可能となつてゐるから警戒すべしと言はれ、有名なる大商店を除いては、確認された信用狀に對してのみ出荷されてゐる』。その癖、米國もひどく惡いのだ。紐育取引所は、最近、今年になつてから三度目の大ガラを起してゐる。實際、どこもかしこも惡い。第三期世界恐慌は、到る處にその深度を深めてゐる。カナダ、濠洲、フイリツピン、佛領インドはまた關稅を引き上げた。

海運の不況もひどい。ダムピングがあるので、やつとかすかな息をついてゐるだけだ。九月中旬の繫船二十萬五千噸。十月には太平洋運賃同盟の二度目の危機、社外船同盟の瓦解、等。

かくして國際貸借の惡化はますます甚だしい。

正金銀行が九月末からやり出した正貨現送は、十一月七日までにもう五千二百五十萬圓に達した。これで金解禁以來の正貨流出總額は三億五十五萬圓になる。この十四日には更に五百萬圓の現送される。

正貨準備は、八億三千萬圓に減少した。十月末の兌換券發行高は十一億八千萬圓に過ぎなかつたのに、限外發行は二億三千萬圓に達し、まさに六月末の最高記錄を超えんとする。今や、

保證準備擴張は不可避に見える。

正金銀行による正貨現送開始によつて一時は正貨現送點を超えて騰貴した爲替相場は、吾々の豫想した通り永續きしなかつた。最近には復た半ポイントほど現送點以下にある。傳ふる如く、正金銀行がもはや正貨現送を打切らねばならぬとすれば、爲替は復も低落するだらう。

十月の株價は、「救濟謳歌人氣」にも拘らず、公債の反騰にも拘らず、銀行株その他の持直しにも拘らず、更にまた中旬以來「生保會社」の盛んな買出動にも拘らず、指數においては、九月の四七・四から四四・六に低落した。

(3) 地方銀行の破綻續出！

九月末における全國銀行の預金は、七千萬圓を増した。この増加は、主として富裕預金の増加に基づく點において、明かに變態性を現してゐる。九月末の全國銀行の貸出は、前月に比し三千二百萬圓を減じた。しかるに、十月末の東京交換所銀行の貸出は、先月に比し三千五百萬圓を増加した。それは明かに、大きな銀行の回收不能の激増を示す。

社債や債券は、殆ど全く買ひ手がない。十月以來政府に動員されて二千萬圓近くを「不良」諸會社に融通した興業銀行は、早くも資金に窮して一千五百萬圓の興業債券を賣り出したが、殆ど賣れなかつた。それで大部分を自分の子會社の日興證券に背負ひ込ませてしまつた。

濱口内閣は、銀行の預金を減らさぬために、小預金者大衆の犧牲において郵便貯金の利下げを强行したが、おかげで郵便貯金の減少が始まり、從つて大藏省預金部の資金も激減した。預金部の内地預金は、本年度末にはたつた三千萬圓に減つてしまふ。そしてこの三千萬圓が、郵便貯金・振替貯金約二十四億圓に對する支拂準備金にならうとする。この事態は轉じて、日銀による公債買入政策の繼續を、即ち公債の市場維持を、不可能ならしめるだらう。と同時に一方、これまで有らゆる「救濟」の道具に使はれてきた「低利資金」融通を不可能ならしめるだらう。

そしてこの不可能は更に轉じて、公債募集を餘儀なくさせるだらう。かくて、二重の要因によつて、公債の下落はますます不可避であらう。然るに、九月及び十月においてすでに、公債の賣崩しを目ざす長期取引は未曾有の巨額（七千萬圓以上）に達し、公債が完全に投機の目的物と化したことを示したのだ。—

地方銀行の破綻、——これは上半期にも生じた。しかし、それは、一月に一行、三月に二行、四月に一行、五月に一行といふ風にぼつぼつで、また地方的にも全くかけ離れた現象だつた。所が、十月に入ると様子が違つて來た。四日に郡山合同

銀行が破綻休業した。二十日に富山縣の密川銀行が破綻休業した。六日後の二十六日に同縣の兩越銀行が休業同樣の支拂猶豫請求をやつた。三日後の二十九日には同縣の伏木商業銀行が破綻休業した。中外商業新報（十月三十日）によると。――『その前日東西シンヂケート團の懇談會があつて日銀總裁以下いづれも年末金融に對し樂觀論を述べたといふことも時にとつて極めて皮肉な事柄といへる』。そしてその皮肉なことのあつた一週間後の十一月四日には、大阪の富田林銀行がまた破綻休業した。ごく最近のことはまだ詳らかでない――。

かうした新しい現象の原因としては解禁恐慌の進展といふ一般的原因のほかに、米價暴落による農業恐慌の尖銳化があることは言ふ迄もない。十月の米價（東京卸賣）の指數は、九月の二四〇から一六一に陷落した。僅か一ト月のあひだに實に三割三分の下落！（この農業恐慌については次稿に詳論する）。

かやうに續々と破綻休業した諸銀行は、大藏省の意見として（十一月三十一日）報導されたところによると『おほむね從來からの不動産固定貸その他により內容を云々されて來た銀行で、その休業が他行に波及するおそれは萬々あるまい』といふ（東日）――。更にまた、大藏省の意見としては、本年十一月四日までの休業銀行の數は合計十一行であつて、例年に比して著しく多いわけではないといふ（同上）――。それは、たしかに、昭和二年の、四十二行に比較すればすくないし、「特融」救濟などはやらなかつた米國の本年上半期の休業銀行數四百行に比較すれば、尙更らすくないには違ひない。

ところでまた、中外商業新報（十月三十一日）は、かういふ――『大藏省の誤れる政策が、地方銀行の窮狀を緩和するどころか、反つてこれを助長したる觀あることもまた否み得ない、すなはち現在地方銀行當事者中には休業の決心をしてゐるものが少くないにも拘らず、地方官廳が無理やりにこれを抑壓して、不自然な營業を繼續せしめてゐるといはれてゐる……。』

いづれにもせよ、最近の市中金利はまたも昂騰した。それは明かに危險プレミアムの昂騰を意味してゐる。從つて、――折角下げ渋つてゐた株價が、每日四五十萬圓も生保會社が買つてゐるに拘らず、又も反落しはじめた。『東京日日』の經濟記者はおもむろにいふ――『株式は一應の戾りをすましてまた賣人氣とかはつて來たが、年末を控へて、とやかくの惡材料が出て來るやうでは、安心しても買へぬわけだ』（十一月八日）

いづれにもせよ、ごく最近のことは詳らかでない。が、いづれにもせよ、此地方銀行の破綻の續發は、どうやら、××××××××破り始めたものの如くである――。（一九三〇・一一・二〇）

日本各都市人口要覧

——昭和五年十月一日の國勢調査に據る——

大阪市　二百四十五萬三千六百人

港區	三十六萬二千五百人
東成區	三十三萬八百人
北區	二十一萬七千人
住吉區	十九萬五千二百人
此花區	十八萬二千七百人
東淀川區	十七萬七千百人
西成區	十六萬七千八百人
東區	十六萬六千二百人
西淀川區	十四萬六千六百人
浪花區	十四萬四千六百人
西區	十二萬六千人
南區	十一萬九千七百人
天王寺區	十一萬六千七百人

東京市　二百五萬一千四百人

淺草區	二十四萬四百人
本所區	二十三萬三千四百人
深川區	十七萬四千六百人
下谷區	十七萬三千九百人
芝區	十七萬二千九百人
小石川區	十五萬一千百人
本郷區	十三萬六千七百人
神田區	十二萬九千七百人
京橋區	十二萬九千三百人
牛込區	十二萬四千五百人
日本橋區	十萬六千六百人
麻布區	八萬四千四百人
四谷區	七萬二千人
赤坂區	五萬五千五百人
麴町區	五萬四千三百人

東京府下の五萬以上を有する町

荏原町	十三萬二千人
西巣鴨町	十一萬四千人
澁谷町	十萬二千人
瀧野川町	十萬一千人
王子町	八萬八千人
中野町	八萬五千人
吾嬬町	八萬一千人
三河島町	七萬七千人
杉並町	七萬八千人
尾久町	七萬二千人
世田ケ谷町	七萬二千人
日暮里町	七萬一千人
代々幡町	七萬一千人
大井町	七萬人
千住町	六萬[illegible]千人

龜戸町 六萬八千人
目黒町 六萬七千人
淀橋町 五萬七千人
品川町 五萬六千人
南千住町 五萬五千人
大崎町 五萬四千人
名古屋市 九十萬二千四百人
神戸市 七十八萬七千人（特別調査區域を含む）
京都市 七十六萬四千人
横濱市 六十一萬九千人
廣島市 二十七萬二百人
福岡市 二十二萬五千三十五人
長崎市 二十萬三千二百人（特別調査區域を含む）
函館市 十九萬七千二百人
仙臺市 十八萬五千二百人
八幡市 十六萬八千二百人
札幌市 十六萬八千人
呉市 十六萬六千九四百人
熊本市 十六萬三千八百十八人（特別調査區域四千四百九十六人を含む）
金澤市 十五萬三千二百餘人
小樽市 十四萬四千八百人
岡山市 十三萬八千五百人
鹿兒島市 十三萬六千五百人
靜岡市 十三萬四千四百二十一人
新潟市 十二萬四千人
堺市 十一萬六千百人
和歌山市 十一萬六千人
濱松市 十萬八千四百五十五人
門司市

十萬八千人

下關市
十萬四千三百十九人

川崎市
十萬四千三百人

豊橋市
九萬六千八百人

高知市
九萬六千二百八人
(特別調査區を除く)

大牟田市
九萬五千九百四十人
(特別調査區を除く)

岐阜市
九萬百十二人

徳島市
九萬七十一人

小倉市
八萬七千四百七十二人

前橋市
八萬五千人

横須賀市
八萬四千十三人
(特別調査區を含まず)

宇都宮市
八萬六百人

松山市
八萬二百四十八人

高松市
七萬九千九百人

久留米市
七萬九千四百五人

甲府市
七萬九千二百十四人

青森市
七萬七千七十人

旭川市
七萬六千五百人
(特別調査區を含まず)

長野市
七萬三千九百三十八人

富山市
七萬三千八百三十八人

松本市
七萬二千百四十二人

岡崎市
六萬五千四百人

福井市
六萬四千十八人

山形市
六萬一千九百七人

盛岡市
六萬一千八百人

宇部市

六萬一千二百人

高崎市（聯隊を含む）
五萬九千八百五十一人

姫路市
五萬九千二百六十二人

長岡市
五萬七千八百餘人

若松市（福岡縣）
五萬七千三百二十六人

室蘭市
五萬五千八百五十人
（特別調査區三十名を含む）

清水市
五萬五千六百六十四人

大分市
五萬五千人

津市
五萬五千人

宮崎市
五萬四千百五十人

桐生市
五萬二千九百人

八戸市
五萬二千七百五十人

四日市市
五萬一千七百九十人

高岡市
五萬一千七百五十人

八王子市
五萬一千六百七十二人

戸畑市
五萬一千六百人

奈良市
五萬一千四百人

郡山市
五萬一千三百四十人

秋田市
五萬一千百十四人
（右人口中には特別調査區域の軍隊及び刑務所收容者を含む）

宇治山田市
五萬一千三十六人

水戸市
五萬七十人

釧路市
五萬人

尼崎市
五萬人

千葉市
四萬九千八十人

佐賀市
四萬五千九百人

福島市
四萬五千二百人

米澤市　四萬四千七百人

松江市　四萬四千二十三人

宇和島市　四萬四千百二十人

沼津市　四萬三千九百五十九人

足利市　四萬三千九百人

別府市　四萬三千五百人

弘前市　四萬三千三百三十六人
（特別調査區を含む）

會津若松市　四萬二千四百人

一宮市　四萬二千二百人

西宮市　三萬九千四百三十人三

明石市　三萬八千九百五十六人

大垣市　三萬八千四百九十人

福山市　三萬八千二百五十人

瀬戸市　三萬七千二百八十四人

鳥取市　三萬七千人

上田市　三萬五千九十七人
（特別調査區域を含まず）

岸和田市　三萬五千人

川越市　三萬四千六百人

大津市　三萬四千四百人
（特別調査區を含まず）

鶴岡市　三萬四千三百人

米子市　三萬三千六百二十人

大泊町　三萬三千三百十一人

豐原町　三萬一千六百四十六人

伏見市　三萬一千三百人

倉敷市　三萬一千九人

高田市

二萬九千人
（特別地域を除く）

中津市
二萬九千人

丸龜市
二萬八千八百人

尾道市
二萬八千八百人

浦和町
二萬四千九百人

京城府
三十八萬七千人
（陸軍、李王家、刑務所關係を除く）

新義州府
四萬六千餘人

淸津府
三萬五千五百人

郡山府
二萬四千九百五十三人

臺南市
九萬三千六百人

臺中市
五萬二千八百三十八人

（備考）
右のうち特別調査區域人口につき注意なき市はそのままにした。
佐世保、津山、山口、今治、都城、那覇、首里の七市と、臺灣、朝鮮等の諸市府の一部人口は未發表もしくは未回答のため發表できなかつた。

新刊紹介

◇**ミスター・ニッポン** 群司次郎正著・著者の處女作ミス・ニッポン及びミセス・ニッポンと三部作をなす異色ある長篇小說。（東京神田今川小路二ノ一アルス・價一圓五十錢）

◇**新種族ノラ** 吉行エイスケ著・斷髮女を連れて航空港をご出發ニ紹女百貨店員一外十數篇の創作集。（東京牛込矢來町新潮社・五十錢）

◇**現代短歌正選** 中等學校國語副讀本用の短歌選。（東京神田表神保町修文館・價五十錢）

◇**トーマス・ヒル・グリーンの思想體系**（下卷） 河合榮治郎著・上卷の後を受けてグリーンの道德哲學、宗敎論、社會哲學、社會思想等を究明し、更にグリーン以後の思想界及びグリーンの殘したる課題を展望し、グリーン硏究の權威書を完成す。（東京丸の內昭和ビル日本評論社・定價五圓）

◇**平時國際法論** 立作太郎著・國際法硏究の權威たる著者の半生の硏究成果たる大著、斯學硏究者の必讀書。（東京丸ノ內昭和ビル・日本評論社・價五圓五十錢）

◇**比例代表法と多數本位代表法** 山崎又次郎著・選擧法改正問題喧しき時各國の比例代表法を比較硏究し兼て多數本位代表法の硏究を提唱したもの。（東京日本橋區通三丁目丸善書店・價一圓五十錢）

◇**淺草底流記** 添田啞蟬坊著・二十年來の淺草熱愛者のオール淺草レビュー的敍述、座ながら淺草を樂しみ又淺草學の實習手引だ。（東京芝櫻田久保町一〇櫻田館・近代生活社・價一圓五十錢）

歸るに家なき洋モス女工の決死的闘爭

＝展開された日本最初の×××＝

麻生久

監禁された女工の密書

御一同様

寄宿舍のこと、いろ〳〵御心配下され感謝に堪へません。今夜知らして下さつた外部の情報たしかに拜見いたしました。寄宿舍の様子は、もう御承知の事でしよう。今日〇〇さんが、とう〳〵無理矢理に寄宿舍を追ひ出されました。それから五六名の者も事務所に呼び出されて、一時國に歸れとおどかされてゐます。云ふ事をきかなければ首を切つてしまうと云ふのです。

御一同様

會社も随分横暴ではありませんか。思ふも實に殘念です。會社の奴等は、强い者さへ國に歸してしまへば、あとは弱い者ばかりで、工場に出してストライキ破りをさせるのにも大丈夫だと思つてゐるのです。けれども、私等は、解決がつくまでは、たとへ此場に倒れるとも、決して工場に出勤はせぬ覺悟です。しかし、毎日〳〵××がやつて來ておどかすので、それを怖れて裏切る者が随分出て來る有様になつて來ました。こんなこと申上げるのは血の涙をしぼる程心苦しいことですが、何と云ふ情ない事でしやう。私等はさう云ふ人間こそ眞に恨めしうございます。それで立派な階級的勞働者と云はれましようか。

今は××覺悟です。充分團結と云ふ事を旨にして、一生懸命戰ひます。

されば皆様、何卒此爭議が私等の勝利に解決するよう後援にも御願ひします。

末筆ながら申上げますが、男子の皆様が塀の外を示威運動して通る時、こちらで萬歳をとなへたら處分すると申し渡されたので、私等

萬歳も云ふ事が出來なくなりました。實に情ない有樣です。それでも今夜塀の外で皆樣の勇ましい示威の勞働歌がきこえた時には、思はず皆は寢床からはね起きて萬歳を叫びました。警戒の擔任者連も餘りに不意だつたので、しばらくあつけに取られて見てゐましたが、あとになつてから、口惜がつて亂棒にも頭の毛をつかんだりしてなぐるのです。今は實に血の淚の出る樣な哀れな有樣で、皆は、いつかは仇をとつてやると齒を食ひしばつてゐます。

　一生は旅の山路と思ふべし
　　平地少なく峠たくさん

　　大正九年七月十七日夜　　寄宿舍工女一同より

組合御一同樣

(警戒がはげしいので、その目を忍び〳〵認めました。亂筆は御判讀下さい)

× × × ×

組合御一同樣

一寸申上げます。寄宿舍の中は壓迫が愈々はげしくなつて來ました。今日午後三時に、向島の××が來て、室長と一緒に話がありました。其話には、愈々此二三日中には工場の運轉がつくが、其時に、工場に出勤する者を止めだてする者は、監獄のようしやなく、×××××きせてやるから其覺悟で居れとの事です。×××××だなんて威張つてゐるくせに、會社の用心棒になつて何と云ふ耻知らずでしよう。私等はつばをはきかけてやりたくてしかたがなかつたのです。たとへどんな事にならうと斷じて工場に出勤せぬ覺悟で居りますから皆樣御安心下さい。

昨日あたりから、寄宿舍の内で騷いだり惡口を云つたり歌をうたつたりする者は、かたつぱしから帳場へ呼び出して、保證人の細谷と中村の二人が、有る事無い事を聞きたゞしておどかしてゐるのです。二人はあさましい會社の犬です。

本日の新聞も見る事が出來ず、皆はそれを口惜しがつてゐます。爭議の記事の出てゐる新聞は私等には絕對に見せません。

會社の方では私等が手紙で連絡をとつてゐることを感づいて來たやうです。それで私等を室外に成るべく出さぬやうにし始めました。それが何より苦痛です。帳場から外へは絕對に一人も出しません。私等は監獄と云ふところは未だ知りませんが、此頃は罪人よりひどい取扱ひです。御稻荷樣のまはりは、警官と土方でげんじゆうに警戒をして居ります。

會社は實に情ない惡らつな手段をとつて私等の團結を切りくづし始めました。それは國から何も知らぬ親達を呼び寄せて、親達をお

どかして國に連れて歸らせるのです。今日も無理矢理に三人程幹部を連れて歸らせました。何とひきようなしうちではありませんか。思ふだけでもくやし涙がでます。けれども安心して下さい。たとへどのような壓迫があらうとも、私達はたとへ死んでも勝利の解決のあるまでは決して工場に出ません。

外の事出來るだけ詳しく知らして下さる事を願ひます。今はたゞそれぱかりが生命の綱です。　　ではさようなら

廿日夜　警戒の目をくゞりつゝ　寄宿舍女工一同より

組合御一同様

此陰慘にして可憐な女工の密書は、大正九年七月、東京本所富士瓦斯紡績會社が勞働組合破壞を企てたがために勃發した大爭議の際、寄宿舍に監禁されて外部との連絡を遮斷された女工達が、會社の嚴重な警戒と戰ひながら內部の情勢を組合本部に知らせた密書の一部である。而して此爭議は二週日の激烈なる鬪爭の後に、遂に爭議團の慘敗に終らざるを得なかつた爭議であつた。

紡績爭議に伴ふ一大難關を突破した 今回の洋モス爭議

由來、過去に於ける紡績爭議に對する苦き經驗は、之れに伴ふ二つの難關を明かに敎へてゐる。

その難關の一つは、爭議團の本隊が年若き可弱な女工であると云ふ事である。その結果として、××、×××、會社側の威嚇彈壓に對する抵抗力が薄弱たる事をまぬがれないばかりでなく、會社が何れの紡績爭議に對しても最後の切札として用ふる田舍の親達を呼び出しての切り崩しにあふ弱點を有する事である。

その難關の二は、爭議の本隊たる女工の大部分が、會社の建物である寄宿舍に居住する事である。その結果として、女工達を其儘寄宿に置けば、前の手紙に示された如く、外部との連絡を遮斷されて、爭議は全體的統制を失ふばかりでなく、切り崩しは自由に行はれる破目に陷らざるを得ない。而して又、此遮斷と孤立とを防ぐために、女工を寄宿舍外に連れ出せば、それがためには之れを收容するに足る建物と、之れを養ふ費用とを必要とする。つまり、莫大なる爭議資金なしには不可能である。

今年、鐘紡各工場に卷き起された大爭議に對して、各組合が逢着した一大難關は實に此の爭議資金の缺乏の點に存したのである。鐘紡爭議が、あれ丈けの社會的好條件にありながら、最後までの徹底的鬪爭をなし得ずして、龍頭蛇尾に終らざるを得なかつた原因は、充分なる

争議資金を有せずして、女工達を外部に連れ出したが爲に外ならない。

以上の如き、従來の紡績争議に必然的に伴ひ來つた難關は、やゝもすれば争議をして持久力と闘争力とを失はしめて、勞働者側を不利に導く原因となつたのである。

然るに、今回、東京モスリン東京龜戸、第一、第三、第四工場、二千六百名の全従業員に依つて敢行されつゝある大争議は、今までの難關、如何なる方面に於ても、殆んど完全に此難關を突破したばかりでなく、否寧ろ其弱點が逆に争議團を有利ならしむる原因となつてゐる傾向さへ示すに至つたのである。何故ならば、女工達は、外部との完全な連絡を保ちながら寄宿舍に居て會社の飯を食ひながら激烈な闘争を續けてゐるからである。更に又今日に於ては、相手が年若な女工達であるが故に、流石の××も×××も男工に對する威嚇彈壓程徹底的なるを得ないからである。

何が彼女達をさうさせたか。

それは云ふまでもなく、過去幾度かの闘争の裡にきたへ上げられて來た争議に對する訓練と階級意識の昂揚とが彼女達を其難關を突破せしめたがために外ならない。

彼女達は、××も×××も會社も恐れなくなつたのである。

争議に入つたのが九月廿七日、今日まで既に一ヶ月餘り、争議團は、××建物と食糧とを驅使しながら、一糸亂れざる統制の下に、××の彈壓に抗争し、×××の威嚇を蹴飛ばし、會社側の悪辣なる必死の切り崩しに對抗して、悪戰苦闘しながらも毫も屈する色がない。

そればかりではない。去る廿四日夜には、日本最初に行はれた劃時代的な一大×××を展開して、今回の争議が有する政治的意味を明かにし、支配階級の心膽を寒からしむるに至つた。

普通これまで行はれた在來の争議、殊に紡績争議は、一ヶ月は既に持久戰そのものである。然るに今回の東モス争議は、多くの新聞紙をして、一ヶ月後の今日、漸く氣がついた樣に、「争議漸く持久戰に入る」と報ぜしめた程、此一ヶ月間を瞬間の間に過ごさしめた。それ程、此一ヶ月間は、争議團をして、息をもつかせぬ激闘のうちに過ごさしめたのである。而も、去る廿四日に展開された一大×××に於て、幹部其他の檢束せらるゝ者實に三百六十余名に達したのであるが、争議團は直ちに其陣容を建て直して更に闘争力を強化し、綽々たる餘裕を示しつゝあるのである。

産業合理化の下に企劃された勞働組合破壞の陰謀

此大争議の原因は、會社が、濱口内閣の敢行する産業合理化に從つ

て、事業整理を遂行する必要上、綿紡部休止を名として、そこに働く從業員四百九十名を一擧に馘首せんとした事に端を發したのである。

東洋モスは最近に至るまで甲州財閥たる若尾一族の繫累下にあつたのであるが、若尾一族が最近の深刻なる財界不況のために、かたの如く沒落の悲運に際會するや、これ又、かたの如くより大なる財閥大倉のために併呑せらるゝに至つた。大倉は、東モスを自己の掌中に把握すると共に、內部の大整理を敢行する一方、東モスを中心として日毛會社との合併を行ひ、これに依つて日本に於けるモスリン產業の獨占を企てつゝあるのである。今回の爭議の原因となつた綿紡部廢止は、要するに此意圖を遂行せんがための犧牲に外ならない。

綿紡部廢止に伴ふ四百九十名の馘首に對して、從業員側は、日本紡織勞働組合の名に於て、左の如き二ヶ條の要求を決定して會社と交渉を開始した。

一、退職手當の外日給百日分

一、歸省者を全工場より募集する事

會社側との交渉は、第一ヶ條を解決して、第二ヶ條に入るに及んで行き詰つた。

從業員側が、歸省者（解雇者）を全工場より募集せよと云ふ理由は大略次の如くである。

卽ち、女工の大部分は農村の娘達である。昨年七月二日、濱口內閣が出現して、金解禁政策のために緊縮政策を斷行して以來、農產物の價格は極端に下落し、今や農村は餓死線上に彷徨しつゝある狀態である。農村の疲弊は既に久しい以前からであつて、それがためにこそ、農村は可愛いゝ娘を手離して不健康な工場に働かしめてゐたのである。然るに、今、農村が更に深刻た餓死線に彷徨しつゝある時に、ただに賃銀を失つて國元への送金が出來なくなるばかりでなく、一人の娘が歸り來つて、飯を食ふ者が殖す事は、愈々農村の親達を最後の餓死に追ひ落す悲慘な結果を生むに至るであらう。

若し、綿紡部のみから馘首者を出すとするならば、四百九十人は、好むと好まざると、如何なる事情に拘らず、食なき故鄉の家に歸らなければならない。

併し、洋モスには現在二千六百名の從業員がゐるのである。此多數のうちには、或ひは婚期の迫つてゐる者もあるであらう。年期の迫つてゐる者もあるであらう。家庭の事情で早く故鄉の家に歸つても差し支へない者もあるであらう。全工場から是等の事情にある者を募集して歸國せしめるならば、廢止される綿紡部の職工中、どうしても國に歸れぬ事情にある者を助ける事が出來る。

會社はこれがために別に損害を蒙らないのであるからして、此要求

を容れて貰ひたい。

以上が勞働者側の理由である。

然るに、會社は、此要求に對し、全工場から募集することは、能率に關係すると云ふ理由を以て之れを拒絶し、ために交渉は行き詰るに至つた。

併しながら、冷靜に此事態のみを考ふるならば、如何なる人と雖も、何がために會社が此要求を拒絶して、此大爭議を起さねばならなかつたかの理由を發見するに苦しむであらう。何故ならば、勞働者側の要求は餘りに當然であると共に、會社側の拒絶が餘りに意味をなさないからである。

元來、紡織にしろモスリンにしろ、作業の上に大した熟練を要する者ではない。全然新女工と雖も二三ヶ月を經れば、一通りの熟練工となるは定評のある事である。況んや綿紡からモスリンに代るだけに於てをや。何の能率の低下があるであらう。それどころではない。自ら暇をとつて歸る希望者は、寧ろ賃銀の高給者であるから、目前の經濟的な點から云へば悦んで然るべきである。

更に況んや、これが拒絶のために惹起されるであらう――そして現在惹起された――大爭議に依つて蒙る會社の、積極的消極的大損害の事を思考するならば、能率の低下による損害ばかりにあるとしても。

そんなことは問題にならないのである。

然るに、會社は、此理由とならざる理由を理由として、勞働者の要求を拒絶し、遂に此大爭議を敢行せしむるに至つた。

會社の眞意は那邊に存するか。其目的は何處に存するのであるか。

それは、云ふまでもなく、過去十數年來あらゆる資本家が企て來つた、そして今日に至るもそれを棄てないばかりでなく、より積極的に企圖しつゝある處の、戰鬪的勞働組合破壞の陰謀に外ならぬ。

見よ、最近に至り、更に熾烈に資本家等が勞働組合を蛇蝎視する有樣は、現に政府が企てつゝある、寧ろ資本家擁護に近き勞働組合法案に向つてさへ、血道を擧げて反對しつゝあるに見ても明かではないか。

脆弱にして末期に近づける日本の資本主義は、强力なる勞働組合の存在に堪え能はないのである。而も、自己の腐爛した肉體から湧き出る癒し難い不景氣の痛手に對して、自己を保存する唯一の道は、産業合理化の美名にかくれ、(十一字削除)、より深刻に勞働階級を犧牲にし搾取する事である。

而して、此目的を遂行するための唯一の障害は、より深刻なる搾取に對して勇敢に反抗し鬪爭する戰鬪的な勞働組合の存在である。

斯くて會社は、其解散の動搖と共に、昨年以來、既に、戰鬪的勞働組合の破壞に出會して二度の苦盃をなめさせられてゐる。一度は昨年

の夏、一度は今年の春、會社は×××を驅使し、全力を擧げて組合破壞を企てたが、其度毎に苦盃を滿喫して敗亡の止むなきに至つた。

今や、若尾財閥の沒落に依つて洋モスの支配權を掌握した大倉は、濱口内閣の唱導する産業合理化の政治的掩護の下に、日手會社との合併を敢行し、日本に於けるモスリン産業獨占下に、今日の不況を切り抜け、より大なる利潤に向つて暴威を逞しうせんと企圖してゐるのである。そして、此大目的の遂行のためにこそ、理由とならぬ理由を理由とし、唯一の邪魔者たる日本紡織勞働組合破壞に向つて最後的挑戰を企て來つたのである。

我々は、今回の東モス大爭議の原因をこゝに求むる事に依つてのみ其原因を理解する事が出來る。理由とならぬ理由を理解する事は此深奥なる一大理由が隱されてゐるのである。

されば こそ、此爭議が曾て見ざる勞資の深刻激烈なる鬪爭を演じつつある所以である。

劈頭××××××爭議團の威力特記すべき小市民階級との協同戰線

悽慘にして果敢なる鬪爭の火蓋は、先づ會社の(十一字削除)との正面衝突に血塗られながら切つて落された。

廿六日夜、勞働者側との交渉行き詰りを來すや、會社側に、直ちに(十一字削除)百五十名を各工場内に配置して戰備を整へながら、勞働者側に向つて、最初の×××威嚇を試みた。

併しながら、前二回の爭議に依つて組織と鬪爭力とを充實し、更に階級意識を昂め來つた二千六百の爭議團員は、會社側の×××威嚇を目撃するや、愈々反抗意識をたかめて、廿七日夜、勇敢に之と正面衝突を敢行するに至つた。工場内は之がために(以下三十四字削除)爭議團は決定的に勝利を(十一字削除)得たのである。

而して其翌日夜は二千六百の爭議團員に依つて龜戸各工場を中心とする大示威運動が行はれた結果、町民の之に加はる者刻々に增加し遂に一萬を數ふるに至つて×××との一大衝突を惹起するに至つた。此殺氣立てる一萬の大衆の示威に(廿字削除)爭議團と町民との區別を忘れて(十四字削除)其結果、××と爭議團との衝突は轉じて、町民と××との對抗に導かれた。

過去の爭議は多くの場合に於て小市民階級を爭議團より隔離して資本家側の味方の立場に置いたのであるが、今回の爭議に於ては之と反對的立場に立たしむるに至つた。蓋し、これは爭議團の巧妙なる戰術、無產者による小市民の組織化、××××××××等にも依るであらうが、更に根本的な原因は、資本主義の最後的發展に從つて必然

的に惹起されつゝある小市民階級の經濟的社會的沒落、卽ち無產階級化に存すると見るを至當とするであらう。

此大示威運動の結果として生れ出た爭議團と小市民階級との期せずして成れる協同戰線的情勢は、遂に×××に對しては決定的に止めを刺し、××に對しては一時的躊躇を餘儀なくせしめ、會社に對しては一時施すべき策を失はしめて茫然自失せしむるに至つた。

或ひは鐘紡の爭議に、或ひは洋モスの爭議に、其他至るところの爭議に資本家の（二十五字削除）遂に施すに術なく、長居する事の危險を慮つて、數日ならずして、一片の悲し氣な聲明書を殘して何處にか其姿を消し去つたのである。

鬪爭に輝く爭議團の陣容

斯くの如くにして其劈頭、果敢なる鬪爭に依つて爭議團が贏ち得た賜は、從來の紡織爭議に必然的に伴ひ來つた二つの難關の突破であり其克服である。

今回の爭議に於て、一度爭議團を訪づれて女工軍の勇姿に接した者は、彼女等の可憐な瞳の中に輝く、何ものの威嚇をも恐れぬ鬪爭意志の熾烈なるに對して、涙ぐましい程の感激にうたれずには居られぬであらう。各工場の食堂は、夫れ〴〵赤、白、黄の鉢卷に色どられた女工軍に依つて占領され、演說に勞働歌に爭議團の意氣は天を衝くの慨を示してゐる。今や彼女等は會社の食料を以て、會社の建物を利用して全爭議團の一糸亂れざる統制の下に白熱的な鬪爭を演じつゝある。彼女等は男工に伍して至る處の演說會に、示威運動に、檢束者の奪還に、（十二字削除）勇敢に街頭戰の第一線に進出しつゝあるのである。

曾ては、彼女等を搾取し彈壓する資本家や××や×××に對して、たゞ餓狼に狙はれた小羊の如き恐怖の涙以外には應へる術を知らなかつた彼女等も、今は、鬪爭に輝く瞳の中に、虐ぐる者に對する無限の××と××とをはりつめて毫も屈するなきに至つた。（以下四十九字削除）、そこも亦彼女等にとつては鬪爭の樂園場たらんとしつゝある。

爭議劈頭に於て、爭議團の果敢な鬪爭のために機先を制せられて一時敗亡した會社側は、今月に入つて更に陣容を樹て直して爭議團に肉迫し來つた。

十月四日には、入山炭坑の×××が新しく會社の手に依つて工場に入り込み、男工の追ひ出しを始めた。工場の門の扉は×××××に依つて嚴重に固められた。演說會は片つ端から解散を命ぜられ始めた。檢束者は踵を接して各警察署の留置場に充滿するに至つた。寄宿舍の内部は××××××に依つて監禁し始められた。寄宿舍内の女工と外部との連絡は遮斷され始めた。そして國元から女工達の親が

呼び出されて切り崩しが始められた。關西から罷業破りの女工が入り込んだと言ふ流言が飛ばされ始めた。

工場内に、寄宿舍内に、演說會場に、街頭に、爭議團應援團×××との××は夜に日をついで繰り返され始めた。

斯くの如くして、資本家と×××と××との三位一體の彈壓は、雨の如く嵐の如く、洋モス爭議に向つて注がれ始めたのである。

併しながら、爭議團の鐵の如き統制は一絲亂れず、日本紡織勞働組合龜戶支部の旗は雨下する彈壓の嵐を衝いて、更に深刻なる鬪爭の巨步に向つて進出するに至つたのである。

展開された日本最初の政治的大デモンストレーション

十月廿五日朝の新聞紙は、一齊に最大級の活字を使用し、最大級の昂奮的態度を以て、廿四日夜洋モス爭議團に依つて決行された、政治的意味を含む大デモンストレーションを報道した。

中にも都新聞は、最大級の文字を使用して此大デモンストレーションを左の如く報導した。

× × × ×

洋モス爭議突如暴動化しつひに流血の慘事を惹起

×××決行の指令一下
多數の重輕傷者を出す

經濟鬪爭の埒外に出て政治的色彩を深めつゝ一ヶ月餘にわたつて紛爭中の市外龜戶町洋モス工場爭議は、その後勞資双方共頑強に對峙して讓らず、解決の曙光さへも見えぬ情勢の裡に爭議を繼續しつゝあつたが、爭議團側は既報の如く、經濟鬪爭を政治鬪爭に展開して一大デモを敢行し社會的不安を激發する最後的手段に出づる形勢を示すに至り、不穩險惡なる情報が頻々として傳はつてゐたが、廿三日夜、突如として對策本部より『二十四日夜洋モス女工三千を踊るために×××を決行しろ』の秘密指令が發せられた。斯くして廿四日午後七時を期して爭議團側最後の切札が投せられ、龜戶町一帶は遂に騷擾の巷と化し、隨所に警官隊との×××が演せられて投石、亂鬪、檢束、悲鳴等凄慘な光景のうちに流血の慘事を惹起し、多數の重輕傷者を出すに至つた。(下略)

更に東京日日も亦最大級の昂奮を以て左の如く報道した。

× × × ×

警官隊と争議團亂闘
双方約四十名負傷す
洋モス争議の示威惡化

こぢれにこぢれた東洋モス争議團は廿四日夜に乘じ遂に一大デモを決行した。秋雨降る暗黒街に争議團及び應援團二千余名は警官隊三百數十名と亂闘し、警官隊では日高巡査は投石のため顔面に重傷を負ひ、下田巡査部長は官服をズタ〳〵に裂かれた上負傷したが、この外手足其他に傷を負ふた警官十數名に達し、争議團側でも二十數名の重輕傷者を出し、組合同盟執行委員望月源次氏外百七十余名が檢束された、この間争議團員は民家に消燈を命じ來る電車毎に投石のため城東電車の乘客一名、運轉手一名負傷し、同電車は午後八時五十分運轉休止、騒ぎは午後十時漸く鎭靜した（下略）

斯くの如くにして階級意識に燃え立つ洋モス争議は、（二十字削除）情勢に對する必然の發展として、其争議の戰術を政治的一大デモンストレーションに展開するに至つたのである。

何が洋モス争議團をして政治闘争に進出せしめたか

此疑問に對する答へは極めて簡單である。

即ち、××××のとれる、極めて意識的な而も合理的な露骨極まる資本主義との一體的態度が、勞働争議をして、從來の單純な經濟闘争から政治的闘争に發展せしめたのである。

凡そ、（十一字削除）急角度を以て、極めて意識的に、極めて合理的に、極めて公然と、資本主義との一體的態度を明かにしたものはない。（十一字削除）金解禁政策に見よ、そのうちには、農民、勞働者、小市民の利益の蹂躙の上にのみ贏ち得らるゝ金融擁護政策以外の何ものが存在するか。續いて掲げられた産業合理化政策に見よ。吾々はそのうちに、勞働階級の犠牲の上にのみ贏ち得らるる資本家擁護の政策以外の何ものを發見し得るか。

從來、（十一字削除）は、少なくとも表面的には勞資の上に超越せる公平なる存在たる事を口にして、其本質を民衆の前に糊塗し來つた。（十二字削除）遂に其欺瞞と糊塗とのベールをかなぐり棄てゝ、其資本主義との一體的本質を民衆の前に暴露し來つた。×××××此露骨なる一體的政治の結果、現在日本の社會に展開され來つた社會的情勢は如何であるか。それは農民の餓死的騒動である。勞働者階級の飢の如き失業である。中小商工業者群の算を亂した潰落である。而して、其反面には、是等階級の犠牲の上に其餘命を保つ、金融資本・獨占資本の

醜態である。

何が×××××斯くなさしめたか。

この疑問に對する答へも亦極めて簡單である。それは行き詰つて來た資本主義そのものが斯くなさしめたのである。今日の傾きかけた資本主義は、××××政治的權力の擁護なしには自己の存在を維持し能はなくなつて來たのである。こゝに於て、今日のブルジョア政治權力は、露骨な態度を以て資本主義擁護のための二重役割を演ずるに至つた。卽ち右手に依つて無產階級に對する最後的搾取を遂行し、左手に依つてこの故に生ずる無產階級の反逆を彈壓するのである。

見よ、（二十五字削除）今日、如何に無產階級彈壓に對して凶暴となり來れるかを、彼等こそは、右手に金融資本擁護の政策を行ひ、左手に劔をひつさげて其犧牲となれる無產階級を彈壓する（十三字削除）恐らく今後に於ける大爭議は斯くの如く政治的である以上、爭議團の鬪爭も亦政治的でなければ其目的を貫徹する事は不可能である。洋モス爭議が從來の單なる經濟的鬪爭を脫却して政治的鬪爭に進出した所以も亦玆にある。

爭議勃發以來、其解決に對しては固く沈默を守つて、（十字削除）事とした警視廳も、爭議團の（十一字削除）强力なる政治的一大デモンストレーションの敢行あつて、甚大なる社會的政治的不安を惹起するや、狼狽して爭議の解決を資本家側に慫慂するに至つた。

（百十七字削除）

さてこそ警視總監が解決のための腰を上ぐるに至つた所以である。

（十月廿八日）

痔持ちとヴイタミン

痔が痼疾になつたものは容易に癒りにくいものですが斯樣な人が偶然肝油又はヴイタミンAを飲み始めて永年の痼疾が癒つたといふやうな例を時々聞きます、兎に角痔に對しヴイタミンが良いのは事實です。獨逸から來て居るデシチンといふ軟膏がありますがこれもヴイタミンAを外用にしたもので痔の痼疾に大變よく効きます。肛門のたゞれたのや脫肛等には脫脂綿に塗つてをさへて置けば宜いのですが內痔用には坐藥も出來て居ります、これ迄の痔の藥のやうに痲痺藥でなく、一種の皮膚及粘膜强壯劑とでも云ふべきものです。ヴイタミンAの外用で痔の痼疾が癒るといふことは一つの新しい發見であるに相違ない。

自動車を繞る犯罪

濱尾四郎

現代はスピード時代である。あらゆる事が急テンポに行はれる。アルレグロ・モルトだ。交通機關も無論其の一つである。否一つではない。交通機關のスピードは現代をまさに代表して居る。而して交通機關の一なる自動車はたしかにその主たるものである。

犯罪は常に其の時代の代表的なものにその影をうつして居る。

現代のスピード化された交通機關の主たる役目を演じてゐる自動車と、現代の犯罪の一つの相とはいつも密接な關係を保つてゐる。私はここに自動車と犯罪とがどういふ工合に關係し合つてゐるかを一瞥して見たい。

便宜上私はこの二つのものの關係を次の三つの場合に分けて考へて見よう。即ち第一は自動車が犯罪の主體となる場合、第二は逆にその客體となる場合、第三はそのいづれにも屬せずして而も重大な役割を演じて居る場合である。

第一、自動車が犯罪の主體となる場合。

勿論之は言葉を簡略して云つた表し方である。犯罪の主體は必ず人か法人に限られる。機械である處の自動車が犯罪の主體となる、といふ事はそのまゝでは意味をなさない。之は自動車を運轉してゐる人、即ち運轉手が運轉手の資格に於いて、被告人となる場合をさすのである。之はたしかに近代文明の生んだ犯罪の一つの形である事疑ひがたい。

限られたスペースをもつ一都市に、限りなく自動車が殖えつゝあるのだ。無論自動車ばかりではない、其他の交通機關も亦然りであるがしかし而して、歩行者は決して減少しては居ない。多くの場合、都市の人口は増加しつゝある。此の一事だけを考へても自動車の増加は正に無制限

の增加といふ事はある種の危險を生み出しつゝあるのを示してゐる。歩行者對自動車、自轉車對自動車、而て自動車對自動車。これらの間は餘りに切迫しつゝあるではないか。更に歩行者＝自轉車＝自動車といふ三つのコンビネーションから生ずる危險の程度がどれ位のものであるが、識者は夙に觀察してゐる筈である。

之らに關して私は一つの意見を存してゐるのだが今はその點にはふれぬとして、扨この危險によつて生ずる犯罪は、業務上過失傷害罪及び業務上過失致死罪と名付けられる所のものであらう。

此の犯罪は勿論自動車に限つた事ではない。否、交通機關に限つた事ではない。けれども現代に於いて、もし如上の罪名の件數の統計をとつたら必ず交通事故と稱するものが多い事が判るであらうし、又同時に自動車によるものが甚しく多い事を發見するだらう。

過失傷害、過失傷害致死以外の事故に至つては限りない。

諸君は毎日の新聞紙上に必ず自動車の爲に一ツや二ツ人が怪我をしたり死んだりした記事をよまれるだらう。

現今の如く、歩行者の方も、自動車の方も交通道徳を重んぜず、而て無制限に車の數が增加する限りこの種の犯罪事故は增加すると考へなければなるまい。

この種のものは殆ど全部が過失事件だが、さうでなく故意の事件はどうだらう。例之、自動車を利用し、卽ち凶器として殺人を行ふやうなものは、私の知れる限りさういふ例はまだない。探偵小說にも餘り見當らない。(私自身はかつて一度之を小說に用ひた事がある)けれども、こんな場合が有り得る事、將來起り得る事は考へておいてもいいだらうと思ふ。

結局、第一の場合に屬する犯罪は過失事件であり而て、決して減少しさうもない、といふ事が云へる。

次に第二の場合は如何。

自動車が犯罪の客體となるといふ言葉で私は二ツの場合を意味してゐるのだ。少くも二ツの場合を考へ得る。その一は第一の場合に於けると丁度反對に、運轉手が被害者となるもの、その二は自動車それ自體が犯罪の目的物となるものである。

自動車運轉手が、自動車運轉手としての資格に於いて被害者となる場合！之こそ現代、ことに最近、最も注意すべき現象であると謂はねばなるまい。

「運轉手殺さる」かういふ標題が最近屢々新聞紙上に現れてゐる。

襲はれ方にもいろ／＼ある。

乘客をよそほつて、人通り淋しい場所で車をとめさせ、狙撃するか

もしくは暴力を用ひて醜タクの運轉手を無抵抗狀態に陷らしめ、而してその所持する現金をひつさらふのである。　無論强盜事件だ。

かういふ例が最近頻繁に增加したがその原因を世の深刻な不景氣におく人が多い。たしかにそれは一ツの理由ではあらう、しかし原因の探求は暫くおき、何ゆゑ自動車運轉手が盛に狙はれるかと云ふと、いふまでもなく、運轉手はともかく現金を所持して居ると信ぜられるからである。

流しの醜タクは必ず現金で料金をとる。さうして客の命ずるが儘に動く。云ひかへれば現金を所持して居り且つ犯行に都合のよい場所にいつでも行くのである。此の點が犯人の最も强く誘惑される所だらう。從つて助手をのせてゐない單獨の運轉手はこの種の危險にいつも曝されてゐると云つてよい。

興味あるは、犯人が多くの場合、全く運轉方法を知らないので、車が走つて居る間は、脅迫以上の行動には出られない事である。

卽ちいきなり後から頭を殴りつけて昏倒せしめ、自分が代つて運轉するなり、停車するなりの行動がとれない。從つて多くの場合、不意にピストルをつきつけておどして停車せしめてゐるやうである。

運轉中の運轉手をいきなり殴つて昏倒させた例がない事はない。けれども數は多くない。大抵右述べたやうな順序に出る。さうして停車せしめてからの犯人の行動にはいろ〳〵ある。脅迫して現金をとるといふ程度のものもあるけれども、運轉手が拒むとずゐ分烈しい事をやる人間がある。

今年の夏、神奈川縣で行はれたこの種の事件は可なり烈しいものだつた。

疾走中の運轉手をどうもする事の出來ない例が最近京都にあツた。

先月二十五日（五年十月）の大阪朝日に次のやうな意味の記事が出て居る。

「去る十九日夜九時頃京都西院附近で客待中のタクシー運轉手日方亥之助（三十一）は三人連の客から「橋本遊廓まで六圓で行け」と命ずるまま淀川堤に沿ひ同遊廓に入ツたところ今度は枚方遊廓へ行けといふので更に疾走中、運轉手が何心なく前方の鏡に映る三人を見ると、短刀、尺八、櫻の棒、麻繩など强盜殺人に使ふ兇器を取出しその面上には殺氣が漲つて居るので驚き、途中おろせと命ずるのを素知らぬ風を裝ひ生心地なく疾走し、枚方署前で車を停め遊廓の場所を尋ねますと飛び降りかくと署員に告げたので署員數名が三人を逮捕した。（以下略）

此の記事は嚴格に觀察すると二三の疑問をおこさせる所があるけれども、今之を眞相也と信ずれば可なり興味のある報告だと思ふ。

勿論之だけでは、三人の男が強盗か殺人かをやりに行く途上であッたやうに思はれ、必らずしも運轉手自身を襲はんとしたとは考へられぬけれど、それにしても、停車を命じたにも不拘、素知らぬ風で疾走する以上、三人は何らかの所置をしたかッたに違ひない。三人も男が乘つて居ながら一人の運轉手をどうする事も出來なかつた事になる。いひかへれば、運轉手は、疾走中は絕對に安全だ、といつていゝわけである。犯人に運轉技術があれば別だが。

斯く考へ來ると、現代はまさに「運轉手受難時代」である。而も同時に、はじめに云ッた交通の危險を考へると、「通行人受難時代」でもある。

「通行人受難時代」「運轉手受難時代」！之即ち現代の犯罪の一つの相である。

「運轉手受難」の最も烈しい例が先々月の末、東京で行はれた。一時報道を禁止され約十日後に被疑者捕縛の後に解禁された有名な事件である。此の事件を簡單に記すと次の如し。

本年九月の末の或る日東京市深川區越中島沖台で一つの慘殺死體が發見された。死體は針金でぐる〳〵卷にされおもりとして二つの石がつけられてあつた。檢視により、他殺死體と確定しまづ被害者が誰であるかを取調べた結果、某區某所のガレーヂの運轉手Mといふ男と判明した。Mはそれより二日程前に出たまゝ行方不明になりてゐたものである。

當局は直に犯人の捜索にとりかゝつたが約十日ほどたつて即ち十月四日頃となつて、二人の犯人X及Yを逮捕した。この二人が警察に於いて自白した點を綜合するとかういふ話になる。

XもYも共に運轉手だつたが不景氣のためにうまく行かず困つてゐた所、Xが群馬縣高崎町のあるブローカーと自動車賣買の契約が成立し、シボレー・セダンの新車を一臺賣る事になり既に現物取引のところまで行つた。然るにこの話がだめになつたので、Xは自暴自棄となり、Yと相談の結果手あたり次第に右の條件にかなふやうな車を奪つて賣り飛ばさう、それには大犯罪もあへていとはぬ、といふ事になつたのである。そこでXYの二人は九月下旬の或る日、品川停車場附近まで行つた。これは運轉手を連れ出して沖で殺さうといふ考へがあつたので、あらかじめ殺人を行ふ場所、及び殺人後の死體の始末を現場について調べたわけなのである。二人は海岸の「みはらし」といふ店で小舟をたのみ、釣をするやうなふりで沖台に出かけまもなく又戻りて上陸した。そこで、現場の調査は終つたのでいよ〳〵被害者物色にとりかゝつた。即ち二人は上野廣小路で往來を見ながら、シボレーセダンの新車の流して來るのを待つてゐたの

であつた。世の中に、若し宿命といふものがあるとすれば、この時ここに流して來たM運轉手こそ、測り知るべからざる悪運のもとに生れた人だと云つてよからう。

Mがシボレーセダンの新車を助手なしで流して來るのを見るや、XYはよき獲物とばかりにMをよびとめて、直に時間で料金をとりきめあらかじめさきに訪れた「みはらし」まではしらせた。目的地に着くと直に小船をやとひ、Mに向つて君も釣に行かぬかと云つたのだつた。そこでMは車をそこにおいたまゝ客のいふまゝに舟に乘り込んだのであるが、彼は再び生きては戻り得なかつたのである。XYの自白によれば、二人はすきを見てMを一撃のもとに仆し、かねての手筈通りに、死體におもりをつけて沈めたのであつた。

扨この犯行後、彼らは一寸忠慮深く見える事をやつて居る、といふのは、小舟を出した時は三人が乘つたのだが、歸りにXYと二人だけ上陸すると一人缺けてゐるために怪まれはしまいか、といふので、死體の始末、舟についた血の始末をした後、Yだけは途中で上陸して、X一人が舟を漕いで戻り、「みはらし」にかへし、そこから自動車を運轉して去つたのであつた。

次にYと一所になり二人は其の夜の中に高崎まで走り、高崎附近でかねて用意したナンバー札を出して取かへ、直にブローカーへ賣飛し、現金を二人で山分けして別々に歸京して何くはぬ顔をしてゐた、といふのである。

以上が其の當時の新聞紙の報道の大略であるが、この事件は滿都の運轉手達を戰慄させるのに十分であつた。

事件が豫審に繫屬して居る今、われ／＼は何の新聞の報道を信ずるより外に道がないわけだが、「運轉手受難時代」に於ける、これは最も極端な一例であらう。

目的は自動車一臺を奪ふにあつたとはいへ、運轉手の生命を奪ふといふ事を前提にして居るあたりは實に極端に猛悪な犯罪といはなければならない。犯人達の考へに從へばおそらく運轉手を殺す事はどうしても必要だつたのだらう。若し生きたまゝ還したならば必ず自分達の犯罪が暴露するものと信じたのであらう。それが爲に彼等は此の強盗殺人罪といふ大罪を決行するに至つたのだと見ていゝだらうと思ふ。

しかし、彼らの此の考へ方はどの位まで賢こかつたらうか。われわれは暫く此の事件を最近の大犯罪として檢討して見たい。

此の犯罪の推移を靜かに眺めてゐると、この犯罪がはじめから二つの致命的な缺陥をもつてゐる事を見逃し得ない。

これは此の犯罪がはじめからもつてゐた本質的な致命傷である。

一つは、強盗殺人を敢行して奪つた目的物が自動車であるといふ

點、他の一つは、犯人等自身が自動車を運ばなければならなかつた、といふ點である。

犯人達はあらかじめ殺人及死體遺棄に關して十二分に考へてゐたらしい。(はたして客觀的に見て十分であつたかどうかは別問題である。)それ故彼らの計算に從へば、Mの死體は容易に發見されなかつたはずである。即ちMの死體が浮び上つた事は全く彼等の計算の中になかつた事であつた。

けれども、もし彼らの考へた通りに行つたとして、はたして彼らは無事に逃れたであらうか。

無論Mの消失に家人その他によつて搜査機關の知るところとなるに違ひない。けれども搜査機關はMの消失と同時に彼の操縱してゐた自働車が消失した事をも知るに違ひないのである。

運轉手Mがその自動車と共に消失する。この事實は直に犯罪を聯想させるとは云へない。けれども自動車が完全に消失してしまはない限り、鋭敏な搜査官の嗅覺は何ものか不正をトレースしたであらう。

即ち犯人としてはMを消失せしめたと同じ方法で自動車を消失させれば或は逃れたかも知れぬ。けれどもそれでは彼らの目的は何もとげられぬ事になる。

そこで彼らは高崎へ行つて車を取引したわけなのであつた。

自動車のやうな大きなものを盜んでかくしてしまふといふ事は今の我國では一寸出來ない。無論色をぬりかへたりして一時をごまかす事は出來る。しかし東京から來て取引された車が、犯罪を何も知らぬブローカーに引渡された後、全然、當局にトレースされずにすむといふ事實は考へ難い。

私はこの點を第一の弱點と考へるのである。

次に犯人等は自分等が自ら運轉して行つてゐる。之は犯罪事件に一人でも第三者又は共犯者を引入れる事は發見を早くすると考へた爲であらうが、同時に實際上甚だ不利益な條件の下に行動しなければならなくなつた。Mの死體が出て來ないとしてもさうであるが、況んや犯人の誤算の結果、Mが死體となつて出て來た以上「みはらし」の側からXがドライブしたといふ事は何と云つても大きな不利であつた。

現在の我國の狀態では、自動車を運轉し得るものはまづ自動車運轉手と思はれる。從つて「みはらし」の側から、M運轉手以外のものによつて車が運ばれたとすれば必ず當局はこの人間を運轉手として一應搜索するに違ひない。即ちXを強盜犯人又は殺人犯人と見ないでもとにかく犯人を逮捕するリンクの一つとしてもどうしてもXをトレースするにきまつてゐる。

當局者はまづ東京附近の自動車運轉手をさがしまわればよい。即ち

捜査範圍がはじめから一定してゐるわけである。

私は第二の弱點としてこの點をあげたいのだ。

以上はこのＸＹの犯罪がはじめからもつ弱點だあるが、それを除いてＸＹは果して賢明に行動してゐるだらうか。

彼らがあれだけ考へに考へた犯罪が水も洩らさぬやうに出來てゐるだらうか。

殺人の方法については彼らは成功してゐる。まさに完全に成功してゐると云つていゝ。返した後に舟の血痕などから怪まれなかつた處から見て舟の始末などは可なりうまかつたと見える。

ただ死體の始末については明かに誤算をした。事實死體が浮上つてしまつたのである。この點に關して、われ／＼はかなり興味ある檢討に到達するのであるが、死體の始末について詳述する事はこの際特に避ける。たゞ彼らの失敗は偶然ではなかつたと信ずる旨述べておかう。

殺人前後の有様に至つてはＸＹは大きな失策を演じてゐる。

彼らは同じ日に二度「みはらし」に行つてゐる。はじめて行つたのは犯罪についての豫備知識を得る爲であつた。二度目には勿論犯行の爲に行つたのであつた。これは何と云つても失策と云はねばならぬ。釣で舟の工合を見るならば必ずしも同じ處から出る必要はなかつた譯である。同じ日に二度迄同じ家を訪ねはつきり人相をおぼえられてゐたといふ事は決して悧口なやり方ではない。

ＭＸＹと三人で舟で出て、Ｘだけ戻つて來たといふのも考へたやうで案外つまらぬトリックである。ＸＹ等が警察で述べたといふ所に從ふと三人の中一人だけ減つたのでは怪まれると思つたからＹが途中で上陸したといふのであるが之は一應の考へである。けれどもそこを考へる位の頭があるならば、何とかしてＭを「みはらし」以外の個所から乘せる事は出來なかつただらうか。

次にＸＹは其夜高崎まで行きナンバー札をとりかへてゐる。之は勿論とりかへないよりはたしかに悧口だッた。

以上ざつと考へたゞけでもこの犯罪には可なり缺點が多かつた。犯人の側に之だけのハンディキャップがついてゐる此の事件で、然らば捜査機關はどの程度に活躍したか。

この點に關しては未だ詳細の報道が傳らないのではつきり判らないけれども、おそらく本筋道の推理を運んで行つたものと信ぜられる。

新聞紙の報道によれば、本鄕の警察の交通巡査の觀察が、犯人逮捕に非常な功績を表したといふが之は興味ある事實と云つていゝ。勿論此の巡査の功績は讃へらるべきであるが、もし此の觀察なかりしとするも、犯人は早晩捕まつたゞらう。捕まらなければ警察[illegible]は

むしろ歡迎せらるべきであつたかも知れぬ。

最後に第三の場合を考へて見よう。

即ち自動車が犯罪の主體ともならず客體ともならず、而も犯罪について重大な役目を演ずる場合は如何。

極く簡單に考へても、犯人が逃走に之を利用するやうな事は直ぐに思ひつく。逆に捜査官が之を利用して犯人を追かける事も誰でも、すぐ思ひ出すだらう。

映畫などでは「追かけ」と稱して犯人の自動車と探偵の自動車とを盛んに活躍させてゐる。私が中學生時代に見た「ジゴマ」といふのにはこんな場面がはじめて、非常に有効に利用されて居た。

探偵小說では何といつてもアルセーヌ・リユパンが之を利用してゐる。リユパンはともかく自分で運轉し而も馬鹿に操縱が巧いらしい。シヤロツクホームズは、何分そのデビユーが十九世紀なので中々自動車を用ひる迄にひまがかゝつた。犯人の側も無論さうである。從つて乘物が推理の種を提供してゐるものなどでは自動車では駄目なものがある。例之シヤーロツクホームズの活躍するストーリーに「技師の拇指事件」といふのがあるが、その中で、犯人の乘つて來た馬車の馬のやうすで、ホームズが犯行地點を推理するところが出てゐる。この點などは自動車では用ひられぬところだから自動車には書き換へられないだらう。

晩年になるとホームズも盛に自動車に乘つてゐるやうである。

最近我國で自動車利用の犯罪で目につくのは誘拐事件であらう。

地方から出て來た女を巧みに誘拐して自動車で運ぶのである。この頃、東京から靜岡までつれて行つた事件があつた。東海道を女一人のせ、運轉手を脅迫しながら下つたわけである。

從來は汽車でやつたのだらうが、汽車の中と自動車の中とでは犯人の安全率は比較にならない。

妙な考へで自動車を利用した犯人がある。

本年の春頃の出來事だつたと記憶するが、京都郊外の某驛に自動車が着いて中から人が降り、荷物を驛の赤帽に渡して姿をくらました。その荷物がをかしいのであけて見たら嬰兒の死體だつたといふのである。

運んで來た自動車運轉手は全く善意でたゞ運搬を委託されたに過ぎなかつた。

結局犯人は嬰兒を殺した後その始末に窮して自動車に託し更に之を驛に託した形であつた。此の犯人はまもなく捕へられたやうである。

自動車其の物が窃盜の目的物になる事が屢々ある。即ち自動車それ

自體が犯罪の目的物となる場合である。さきにあげた強盗殺人事件などを惹起せずにたゞぬすむのである。と云つてもポケットから財布をとるやうなわけにはいかぬ。多くの場合ガレーヂに忍びこんだり、とまつてゐるのを運轉手の不在に乘じてぬすむのである。

之は必しも自動車に限らないが第二の種類に入れるべきもので、盜む方法はやはり運轉し去るの一手あるのみである。

たゞ妙な現象として、かういふ犯人がドライヴの途中で巡査に捕まると必ず、使用竊盜を以つて抗辯する事である。例へば、

「決して盜む氣ではなかつたのですが、運轉を此頃おぼえたので、一寸のりまわして見たかつたのです。無論方々まわつたらもとへ返す氣でした」

と來る。

麹町のガレーヂでとつた奴を深川あたりで捕まつても、この辯解をやる。而もよくこの辯解が通る事があるのだ。

私が檢事だつた頃、此の種の事件の公判に立會た事があつた。判決は無罪になつた。その時、あとで裁判長が私にかう私語された。

「君、あの巡査は少し早く捕まへすぎましたよ。もう少し行つてから捕まへるべきでしたね」

然し此の忠實な巡査は何處まで追かけて行くべきだつたらう？

再びいふ、現代はスピード時代である。allegro mo'to である。「通行人受難時代」であり同時に「運轉手受難時代」である。

而てそのいづれに於いても犧牲者がだんだん殖えて來さうな氣がしてならない。之は果して神經衰弱的考へ方であらうか。

—一九三〇 一一 三—

世界女流選手の印象

(第三回世界女子オリムピックにのぞんで)

人見絹枝

四ケ月前、日本の少女等が六名、チエツコ・スロバキヤのフラーグに開かれる第三回世界女子オリムピック目指して美吉野に合宿した頃を思ひ出しながら、今一切の遠征プログラムを終へて、大洋の中を白山丸で歸國の途についてゐるとき、いろ〱とこの過ぎて行つた間のことを思ひめぐらして見ると感慨無量なものが多々あります。第三回世界女子オリムピツクを中心にして、こんな題のもとに原稿をつゞつて行く前に、まづ簡單なオリムピツク大會の解說を加へておきます。

男子を中心とした國際オリムピツク大會の兄姉分のやうな形をもつて、現代の世界スポーツ界の大行事の一つに數へられてゐる世界女子オリムピツク大會は、一九二一年國際女子スポーツ聯盟の創立されると共に、その翌一九二二年第一回の世界女子オリムピツク大會をフランス(パリー)に開き、それ以後四年に一回全く女子スポーツにのみ開放された世界唯一の大會が開かれることになつた。第二回は一九二六年スエーデン(ゲテボルグ)に開催され日本からも私が始めて出かけ、第三回を今年一九三〇年チエツコ・スロバキヤの首都プラーグに開かれたのであるが、第二回は一回より第三回は二回より驚異的進歩をつゞけ本年は參加十八ケ國、選手登數(延千餘名)三百餘名に達した。

第一回パリーに此の大會を開くとき、また世間の女子スポーツに對する理解も今日の如くでなく、あらゆる世評と經濟上の苦しみをくゞつて作り上げたマダム・ミリヤ夫人(フランスの人)は、第三回の大會開會式に涙を兩眼ににじませて「何と云ふ盛會ぞ、何といふ感激ぞ」と狂喜した心中を察するさへ涙ぐましいものがあつた。

夫人の手一つで（勿論その夫人の背後には男子のよき後援はあつたが）こゝまで築き上げた「女子オリムピック大會の殿堂」は、その延びて行く先のいづこか解らない程洋々たるもので、一九三四年には第四回をロンドンで開かれることに決定發表された。



走巾跳優勝者　人見絹枝

かうした世界オリムピック大會に集まつて來る歐米各國のスポーツガール等の體格──今度プラーグに私等日本選手の應援に集まつた日本人の多くが口をそろへて大會の盛大さより、壯觀さより、何よりおどろいたことは選手等の立派な體格であつた。

スポーツをやる日本の多くの少女が皆立派な體格の所有者である如く、歐米のスポーツ選手がいかに立派な體格であるか想像に難くないが、それにしても想像と實地見ることとの非常にことなるは單に筆を以ては傳へられないほどである。

日本のスポーツが（男女共に）かつて十幾年前までは頭より體であつた。そして現在では體より頭になつて來た。それは體格が一般に向上して來たので、體だけでは他に優ることが出來ず、更に明るい機智にたけた頭の好さが必要であるやうになつたのである。今度のオリムピック大會ではそれが更に一歩を進めて、又體格のより立派さが勝利を得る最も必要な鍵になつて來たのである。又之が幾年か先になれば體より頭の問題になつて來るが、頭もあり體もあればより立派な體を持つ人が秀で、又それが一般のレベルとなれば又頭のよさを必要とする時代が來ることははつきり解つてゐる。三年で來るか五年先になるかそれは解らないが、大會前日プラーグに到着した或る日本の女學校の先生が「人見さん、今日グラウンドに外國の選手等が練習してゐるのを見に行きましたが貴女と同じやうな選手ばかりですね」

と云はれた。この先生が貴方と同じと云はれた言葉はきつと「貴女は日本ではゴウイがこゝに來ると貴女と同じのが一杯だ」と云はれたのだと思つてゐる。ところが大會が始まつて予選、決勝と次第々々に各國の選手が選ばれて私が苦戰におちいつてゆくのを見た東京女子體操音樂學校の藤村校長は「かわいさうに貴女がそんな細い體であの立派な體格の選手に對するとき無理だと思ひますよ、體だね、日本人の改革の最も必要なところですね」と云はれた。大會が終つて木下博士(オリムピック選手總監督)は「實に立派なものだ、人見の體が今度優勝した各選手の體格中一番貧弱であつた」

と云はれたが、この三人の人々がオリンピック開始前から開催中、閉會後の歐米三百余名の選手から受けられた印象を話された言葉によつて、私の體をよく知られる日本の人々はきつと「さうかナアー」と思ひになるでせう。

これから、陸上十一種目に渡つて優勝した各選手の體格を書いて見ませう。

ワルソビッチ(ポーランド　六十米、百米、二百米)

第三回世界女子オリムピック大會の驚異的人物であつた。六つの時ポーランドからニューヨークに渡つて十九の今年までアメリカで育ち純粹のヤンキー氣質を持つてゐる。短距離にニューヨークで選手權を持ち、米國競技界の新進として認められた彼女は、故國ポーランドのプラーグに對する熱烈な、苦肉の作戰上招じられて二ヶ月前歸國、ポーランド選手として出場したのであつたが、六十米、百米、二百米、とドイツ、イギリスの强豪がどんな作戰をして、どんなにあたつて來てもビクともせず、スチールのやうな健實さをもつて三つのスプリントに優勝してしまつたのであつた。

勝つても笑はない、メーンマストにポーランドの國旗が揚つて行つても、ポーランドの國歌が吹奏されても彼女はたゞ大きな目を開いてにらんだゞけで全くの無表情である。試合が終れば靴をぬがして貰ひ、トレーニングコートとズボンを着せて貰つて、あとはチューインガムをガチ〳〵かみながら默々として次の競走を待つてゐる。

どこによろこびがあり、どこにかなしみがあるのか、どこの誰にも見える少女選手のやさしいあどけない姿はみぢんも彼女には味ふことは出來ない。

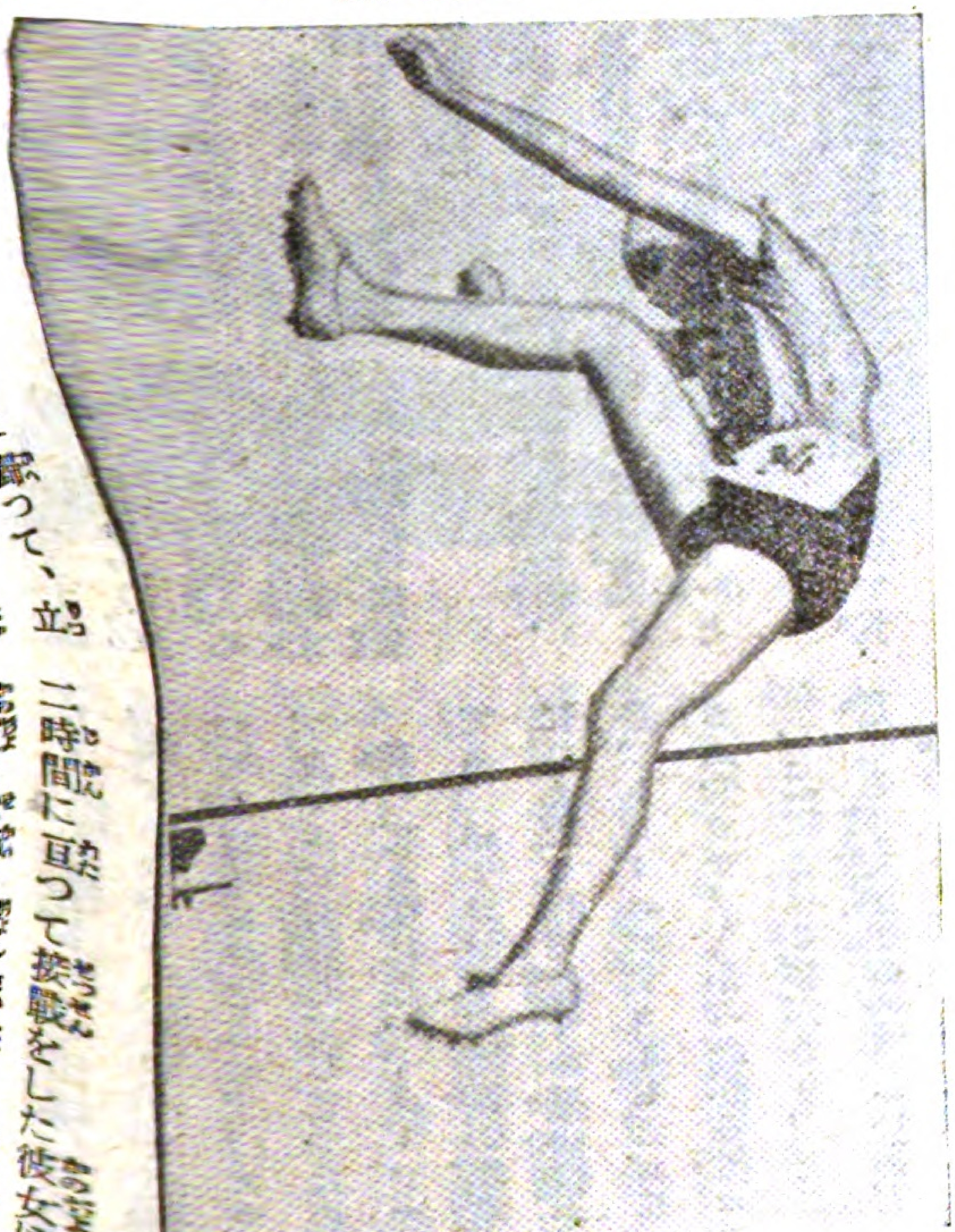
苦りきつてスタートラインの上に立つ姿は一目見たとき相手をして「もう駄目だ!」とすつかりへコたらしてしまふ。

六十米決勝に彼女が優勝、ドイツ二番、私が三等になつて三人ならんでオリンピヤのセレモニーをうけた時彼女は私に「グッド・レー

ス」と云つた、その聲の太く強かつたこと。

日本の選手も、ドイツの選手もどこの選手も彼女となれ〳〵しく話してゐるのを見たことがなかつた。見るからに怖い平たい顏で、太い聲全くその姿にまづ驚き、次に彼女の絶對的に強い、その力に敬服する。五尺六寸の身長に私の横を倍にした位の太い胸、腹、猛烈に強く出來た兩脚、いくら苦るしいレースをしてもビクともしないでゐる彼女の内臓はおどろくべき組織になつてゐるにちがひない。大會前日各選手の心臓をレントゲンにかけて見たが彼女の心臓はきつと特別アツラエに出來てゐたにちがひない。

大會後二週間目にはニューヨークに歸ると云つてゐたから、超人彼女がニューヨークに歸つて、立派にアメリカ流にしこまれた時は、彼女の強さは一寸私等凡人には計ることの出來ないものを作り出すことであらう。二年先のロスアンゼルスは彼女の持つ大きな舞臺であらう。



走高跳優勝者　アイ・ブランミユラー

ギゾフル（オランダ　走高跳）

世界女子スポーツ史上に、アメリカにせよ、英國にせよ、小國チエツコ・スロバキヤにせよ、過去に於て或は現在に於てその歴史を殘してゐるが北歐の（？）小國オランダはその影を見つけることが出來なかつた。二年前第九回萬國オリムピック大會が此の小國アムステルダムの土地に開催されて大いにオランダスポーツ界の前途に氣勢をあげたが、之に煽られて出現したと云つては失禮な云ひ方であるが、此の大會のオープンゲーム女子走高跳にカナダのカザーウッドと雨中二時間に亙つて接戰をした彼女は、遂に二等に甘んじたが、その翌年彼女は世界の女子最高跳の一米六〇を突破して一米六〇五の世界大記録を作り出した。今度のオリムピック大會にも當然彼女の優勝すべきものと思つてゐたが獨の二等、英の二等にさしつて、バーの高さは一

米五五をとつくに突破して英の二人落ち獨の一人落ちギゾルフ對ブランミユラー(獨)の戰になり一米五七にバーは上げられて二人の間に一米六〇五以上の世界新レコードを望んだ。五萬の觀衆はカタツを呑んで靜まり返り二人の白熱戰にすひつけられてゐた。

ブランミユラーはドイツの第一人者一米五三のレコードを一ケ月前作つて一米五五を越したところは最早や力以上の働きを見せて居るのであるからギゾルフの敵ではなかつた。

然し勝負のサイコロはいつの場合も思ふまゝには出るものでなかつた。第一回目の試技が行はれるやブランミユラーまづ落しギゾルフは跳んだと思つたがバーはかすかに震つて砂の上に落ちた。たゞそれだけではなくギゾルフの右脚は立つこと出來ないやうな猛烈なケイレンを起してしまつた。第二回、第三回と後二回の試技を殘しながら遂に彼女は又此の檜舞台で十分自他共に認めた力を持ちながら不幸敗れなければならなかつた。第二回目人にさゝへられながら立上つた彼女はそれでも脚をひきずりながら「私は負けました」と云ふ證據にバーの下をくゞつてしまつた。何といふいたましい姿か、見る者の目にいぢらしい涙をにじませた。實にオリムピツク中の劇的シーンであつた。



圓盤投優勝者　コノパスカ

然し不幸つゞきの彼女も決してヒルむことがあつてはならない。私の心配するまでもなく彼女程の人ならば脚をすつかりいやした後は五尺八寸充分ある、ジヤムプの選手としては持ち過ぎた位の橫幅をもつた縱、橫、揃つた女には珍らしい偉軀から、まだ〳〵新らしい世界記錄を作り出すことであらう。

最後に不振のオランダから彼女の出現はその後輩をして立派なものを産み出した。百米、二百米に二等をとつたシユールマン選手は之又立派なワルソビッチにつぐ體と技術の持主、まだ〳〵此の外に若

い選手が次の世界女子スポーツ界に乗出すべく養成されてゐる、オランダ女子競技界萬歳である。

コノパスカ（ポーランド　圓盤投）

現在の名はコノパスカではない、ポーランド新内閣の大藏大臣マテエフスキー夫人である。しかし彼女は大藏大臣のマテエフスキーの名よりもコノパスカの方をこのんでゐるらしい。オリムピックのプログラムにも私にしてくれたサインにもプレゼントの名刺にもコノパスカの名を好んで書いてくれる。二年前マテエフスキー夫人となつて彼女の雄姿も今度のオリムピックには見られないとうわさされてゐたが、彼女は大臣夫人なんかとスマしておさまつてはゐなく、多くの後輩をつれて堂々出場して來た。

四年前瑞典の大會に卅七米餘を飛ばして世界記錄を作つてから二年前のオランダの大會に卅九米六〇餘の記錄を作り、圓盤投に於ては英にも米にも獨にも一歩も譲らず婦人覇りを獲得したが、今年の大會にプラーグにやつて來た日コノパスカは私に「卅六米七〇行けば外はベストだ」と云つたので、ドイツの選手に四年前の選手權をうばはれるのではないかと案じてゐたが、我の豫想とほり再び往年の名譽を榮冠に飾つて優勝してしまつた。彼女が優勝した時彼女は泣いてゐた。彼女を取卷く多くのポーランド選手は狂喜してポーランドの國歌を高く歌つてゐた。ワルソピッチが優勝した時のやうな冷いものではなかつた。ポーランドの名譽をいふなら、ポーランドの女子スポーツを今日の如く世界に紹介したコノパスカの力や實に大なるものである。故國ポーランドにあつて彼女がマテエフスキー夫人として人氣が上つたのでなく、彼女の力の偉大さによつて得た人氣はすばらしく、彼女の生れた町にコノパスカの名を附した町が出來たとさへ聞く位である。力の偉大さと共に彼女は優しい女性であるにちがひない。いやしくも日本とポーランドの大臣といふものが、内容に於て年に於て異つたにせよ、スポーツ選手としてたゞ名を持つコノパスカが大臣夫人となるのは、その女性としての立派なところが彼女を出世さしたものにちがひない。大臣夫人と云ふからには今度のオリムピック大會にでもお附の一人もつれるし、汽車は一等寢臺で來るには決つてゐると私等日本人には考へられるが、プラーグに來る時は知らないが、ポーランドに國境を越へて歸るとき彼女は多くのポーランド選手と同じやうに、私等三等寢臺車の隣りの三等列車に乘込んでゐた。普通のことのやうでこのやうなことは實地にはなかなか出來ないものである。彼女の偉さもこゝにある。

日本とポーランドの對抗試合の終つた夜、彼女は私にサンペンのコ

ツプをつき出して又二年間のお別れだ、ロスアンゼルスで會ひませうと云つた。この意氣を聞いて私も何か鼓吹されてゐるやうであつた。

コノパスカは今年廿六才と覺えてゐる。ギゾルフ位の身長はあるがギゾルフのやうにブクく太つてゐない。スツキリ延びた見事な體に丸やかた肉がついて見たゞけで氣持のいゝ實に典型的な體軀の持主である。

コノパスカよ老いるな、大臣夫人として優しくおさまらずいつまでも世界の舞臺にその雄姿を、その優しい顔を見せてくれ。



砲丸投優勝者　ユングクンツ

ユウグクンツ（ドイツ　砲丸投）

大會の前夜大毎特派員の永野氏が私等と夕食の最中いつもダマリヤの同氏がニコくしながら「先生一つ體格檢査をねがひます……テナとをオリムピツクの選手に云へないものでせうか」と木下博士に云ひ出した。いつも奇問を發してはよく一行を笑はした永野氏の言葉に皆又笑ひ出した。それは前にも云つたやうに日本で「男か女か」と云はれる私さへ驚くやうな選手が多いのだからどんな凄い選手があるか一寸想像にむづかしいが、髮の切り方、競技中の態度、服裝等でほんとに「まあ男の子そつくりだ！」と思ふことは度々あるが永野氏の問ひは實に私等を笑はすに充分であつた。がその永野氏の奇問の原因

はこの選手にあつたのである。

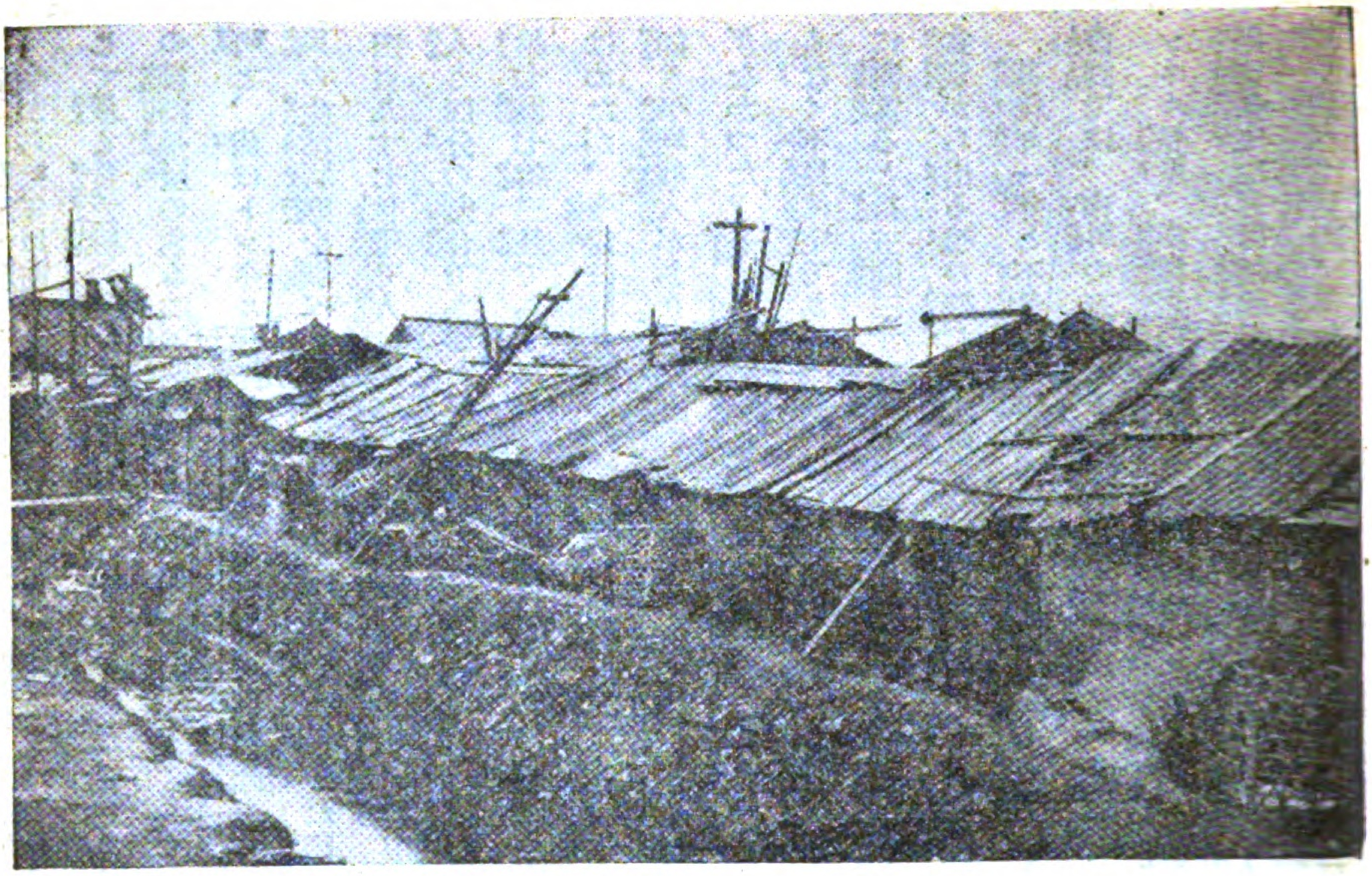
頭の毛をウエーブしてすつかり上にまき上げてゐるが體はギゾルフ以上、選手中一番の長身であつたにちがひない。五尺八寸を超す女であると一寸あとはいくらかわからない。さすがに砲丸投に世界記録を持ち、今度のオリムピヤにも優勝したのであるから大した體であることは勿論であるが、日本人に見せたならば驚嘆の言葉以外に何を語ることも出來ない程女性としては實に珍らしい立派さである。識見によつて知つていたゞくより外に私の書く餘地さへない。しかし實際に於て見るとまだ廿才を越したばかりの處女の顔は美しい細かいキメの赤い皮膚でつゝまれ、優しい聲でいろ〳〵手眞似でドイツ語のわからない私等と笑ひさゞめくのであつた。此の點ワルソビッチの怖しさは少しもない優し味のある選手であつた。



槍投優勝者　シューマン

以上四、五名の外に槍のシューマン（獨）三種競技のEブランミユラー（走高跳のブランミユラーと姉妹）ハードルのヤコブソン（瑞典）八百米のリネス（英）等各優勝者以外に二等三等或は決勝戰に殘つた選手を選んで見たゞけでも之等優勝者以上の體格の所有者は多かつた。小軀なスプリント選手、長身なスローの選手、と競技によつて自ら體格にも幾分の相違は出來てくるが、おしなべて日本選手よりも二ケタも三ケタも先に進んでゐることは誰しも否み得ぬ事實である。日本の選手がプラーグの市民から或は各國の選手から十三か十四かと云はれて「ベビーだ！」ともてはやされたのを見てもいかに小さく可愛らしく見えたかゞわかる。

今度のオリムピック大會でいろ〳〵教へられたことも多かつたが、日本の女子スポーツも大いに改革しなければ前途はつかえてしまつてゐる。私の仕事も當然この改革したければならないところに手をつけることであらう。（白山丸船中にて——一九三〇、九、二八）



日暮里のパタヤ長屋

歳末の細民街

草間八十雄

細民の増加と生活線の低下

細民は定居的のものと、不定居的のものと、二つに分れてゐる。定居的の細民と云ふのは例へば九尺二間の棟割長屋に住むもの、或は四疊半一間の間借りに住んでも、兎にかく住居の定まるもので、不定居的細民と云ふのは木賃宿に泊り翌日は簡易宿泊所に宿るもの、酷いのになると蒲鉾小屋ミノ虫小屋を建てゝ其處を塒にするもの、尙は一層と酷いものでは野宿をする人々である。

處で不景氣風の吹き捲る今日此頃は此貧しい人々の寄合つてゐる巷へ行くと、異口同音にこんな酷い不景氣には未だ曾て出合つたことがない、儲けは少なく働らきたくも仕事がない、此工合では歳の暮の困窮が思ひ遣られると、歳末の生活を悲觀し、嘆息の口吻を洩らすのである。が、此れも無理のないことで、不就業と減收から貧しい人々の收入は年々と其額が減つて來た。茲に細民の生活苦を物語るには怎うしても溯及的に細民生活狀態を說かねばならぬ。

今から拾年以前の大正拾年に、内務省社會局では東京のドン底街として最も貧乏線の低い人々が住まつてゐて木賃宿もあれば狭い三疊間の棟割長屋のある四谷區旭町と、木賃宿が軒を並べてゐる淺草區淺草町と、尙ほトンネル長屋のある深川區猿江裏町、此三ヶ所に於ける細民の生活狀態を調べたのである。此時の調査を受けた細民の世帶數は四百九十七世帶で人口は二千八百六拾九人、一世帶當り平均人口は四人と四分の割合であつたが、其拾一月中の收入は一世帶當り平均額六拾七圓七拾三錢であつた。當時は歐洲大戰後で、財界は惰勢に傾いてはゐたが、今尙ほ好景氣の餘焔は景氣を煽り立てゝゐたので、前述の如き平均收入があり、支出の上からでは屋賃が一世帶當り五圓弱に過ぎなかつた。尤も一世帶當りの疊數は平均四疊半であるから言ふまでもなく不良住宅である。然して月收は前に述べた額であるから、一人に割當ると拾五圓三十九錢で生計を支へるので、軍隊や大デパートの食堂から出る喰ひ殘しの殘飯を買つて飢を凌ぐものは少なかつた。

其後年一年と不景氣が募るので、大正拾五年の眞夏どきに東京府社會課では、市外の三河島千軒長屋、日暮里のバタヤ長屋、南千住のトンネル長屋、板橋岩の坂に在る癈兵長屋、大丸長屋、北海道長屋、太郞吉長屋などは勿論此以外に於ける細民街に臨時貧しい人々の生活狀態を調べて見た。其結果は世帶數五千五百八拾九、此人口は二萬二千〇七十四人で、一世帶當りの人口は四人、さうして一世帶當りの平均月收は五十七圓四十五錢であつた。此れを一人に割當ると拾四圓六十八錢であり、一世帶の平均疊數は六疊と四分、此家賃の平均額は六圓七十九錢であつた。かくの如く五年以前の大正十年の調査と比較すれば、月收に於ては拾圓二十八錢を減じ、家賃は反對に約壹圓八十錢の高値を表はしてゐる。

此調査が行はれてから以後に於て、愈々不景氣は募るばかりであり、失業に惱むもの不就業に悶掻くもの、住むに家なく木賃宿に落込むもの、其木賃宿にさへ泊れないで野宿の憂目に泣くものなど、落伍の群れが多くなつたので、東京府と東京市では昭和四年の春から細民生活に就ての大調査を行ふことになつた。市の社會局では市內の定居的細民につき昭和四年三月に調べて見ると、保護を加へねばならぬ細民の世帶數は一萬六千〇四拾六世帶で此人口は五萬九千七百〇六人、一世帶當りの平均人口は約四人で此世帶當りの平均月收は四十九圓強である。此れを一人に割當ると拾二圓二拾五錢であつて一世帶當りの平均疊數は七疊と七分一厘、此家賃の平均額は拾四圓二十錢である。彼の九年以前に調べたときは月收は六十七圓七拾二錢であつたのに、其れが四拾九圓になつたのであるから、つまり二拾六圓七拾三錢の減收となり、屋賃は約五圓であつたものが拾四圓二拾七錢に上つてゐる

から九圓餘り高値となつたわけである。此れは大震災後に區劃整理が行はれ、棟割長屋だのトンネル長屋は形を消し、何れも普通長屋が建てられたので坪數も多くなり、從つて屋賃が高値となつて月收額の三割五分弱を家賃に費やさねばならなくなつたのである。此れでは家賃を滿足に拂へないのも所以なきにあらずである。

　更に昭和四年の拾二月から今年の春に亘り市內の細民を調べて見ると、所謂要保護者と看做すべき貧しい人々の世帶數は二萬〇六百世帶、此人口は八萬三千人に上り、昨年三月の調べと比較すれば世帶數で四千五百五拾餘を増し、人口では二萬三千三百人から多くなり、しかも月收額は平均四拾七圓五拾錢に當つてゐるから、拾ヶ月ばかりの間に二圓の減收を表はし、家賃は以前より少しく安値となり拾三圓八拾錢強に當る約四拾錢の安値となつた。

　東京市社會局の調査と殆ど同時に行つた府社會課の調査によると、市外に於ける細民で要保護者と認むべき細民の數は、市內の其れに比較すれば遙かに多く、即ち、世帶數は四萬八千百拾七世帶であり、此人口は拾九萬九千四百八拾一人の多きに上る。此保護を要する貧しい人々の生計狀態は未だ知れないが、按ずるに市內の細民より收入額は少ないであらう。かうして今年の春に調べた細民の數を見ると、市內が八萬三千人であり、市外が拾九萬九千四百八拾一人であるから、都市を合せると二拾八萬二千四百餘人の貧しい人々が此大東京の其處彼處で生活苦に悶掻いてゐるのである。

どん底の貧乏線は其輪が大きくなる

　上來述べたのは細民街に居るもの、又は點散的のもの、孰れにするも定居のもの或は其れに等しい細民の數である。彼の木賃宿、簡易宿泊所、更にドン底の酷いものでは野宿者など、斯る不定所的のものは除いてある。では、此等不定居的のものはどの位ゐの數に上るであらうか。

　東京市內には八ヶ所に木賃宿が營まれてゐる。其れは麻布新廣尾町、四谷旭町と永住町、本郷區駒込富士前町、淺草の淺草町、本所小梅森平町と緑町四丁目、深川富川町、この八ヶ所が木賃宿營業の指定地で、此以外の處では營業を許されない。其處で市內八ヶ所で營まれる木賃宿の軒數は四百〇二軒で、此れに泊る一夜の人數は日傭人夫、立ちん坊、下等遊藝人、行商人、屑拾ひ、物貰ひ、下層の私娼、其他等々で八千五百人。市外では品川、世田ヶ谷、中野、板橋、千住、南千住の六ヶ所が指定地で、此處に木賃宿が三拾八軒あつて約九百人のものが泊つてゐる。故に市の內外に於ける此木賃宿に泊るものが合せて九千四百人あり、簡易宿泊所は公設と私設を合せ四拾九ヶ所に一夜

の宿泊者は約三千人あり、いかんと言つて野宿をするものが此度の國勢調査で、市内が一千七百八拾人、市外約四百人、合せて二千二百人の「おかん」が見出された。即ち不定居的細民の數は總てゞ一萬三千六百人に上つてゐる。

怒濤と押し寄せた不景氣の眞唯中で、毎日齷齪として稼ぐプロレタリヤ、その時暮しの貧しい生活者達の描き出す渦卷、此波の渦卷の大小を知るには、(一)宿ナシの野宿と其數の多少、(二)殘飯の賣高と其需要數、此二つの事象を觀察するに如くはない。下層社會の景氣不景氣の情勢は略ぼ、野宿、殘飯、此増減がそのバロメーターといつてよいであらう。

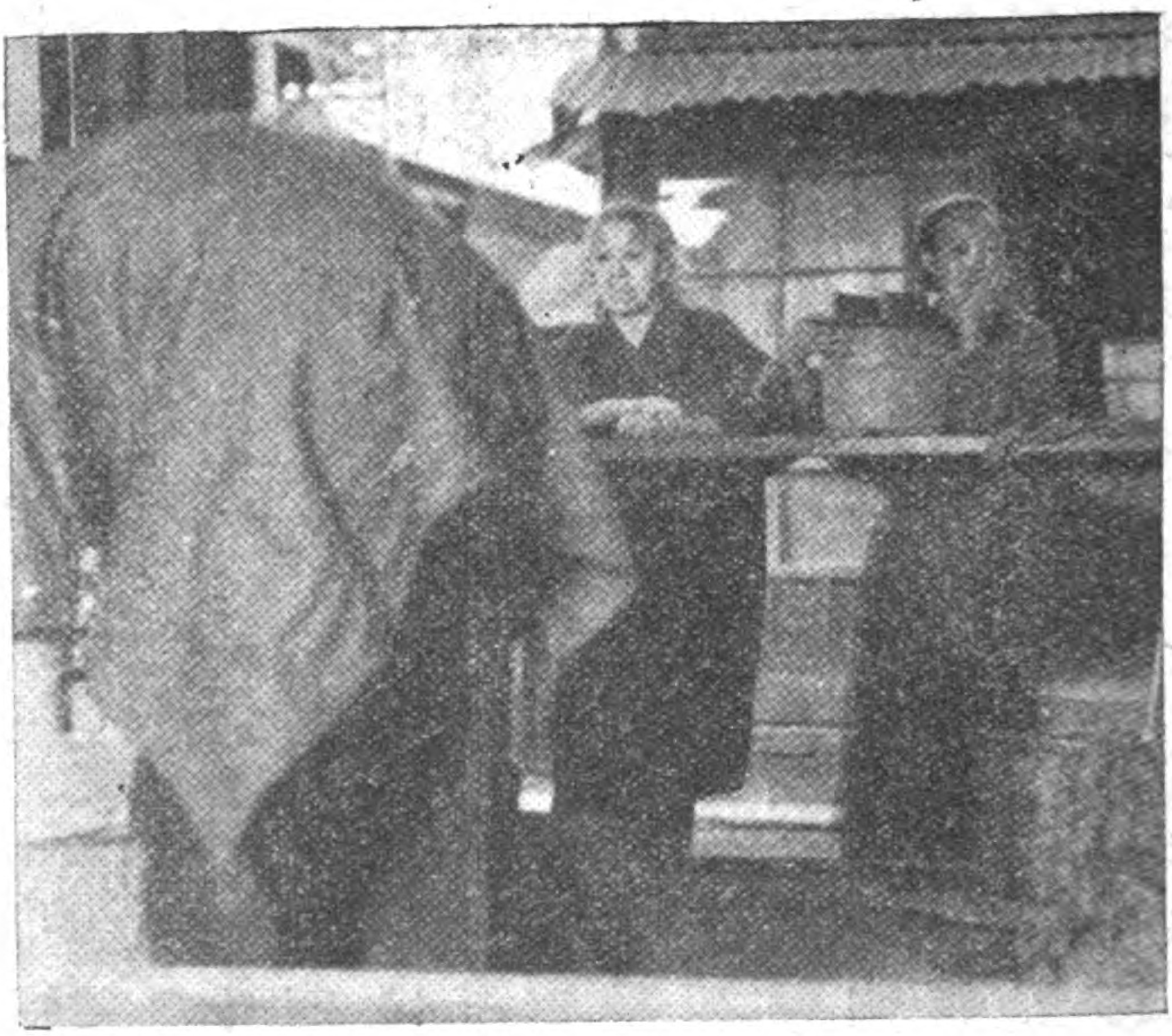
不景氣による野宿者の増加は夥しいもので、此憐れな人々は夏は蚊に襲はれ、冬は菰一枚を褥に寒さに惱まされる、さうして概ねは飢に泣いてゐる。處で、既往の時代と最近に於ける野宿者の數を比較して見ると、如何に宿ナシものが多くなり、犬猫にも似た悲慘な生活をするものが多いか判る。

野宿者につき市內限なく一齊調査の行はれたのは最近まで四回ある。第一回の一齊調査は大正拾一年二月二拾五日の眞夜中で、東京市社會局の行つたものである。此時の野宿者は二百五拾三人であつた。次は大正拾參年拾月一日の市勢調査で二百七拾一人を見出してゐる。第三回大正拾四年拾一月一日の國勢調査では三百四拾四人を見出してゐる。此度の國勢調査では前に述べたやうに一千七百九十人の野宿ものがゐた。尙ほ市外には約四百人の野宿者がゐたなど、年を累ねる毎に野宿者が多くなりつゝあるのを見る。

次に殘飯の需給狀態であるが、貧しい人々が此殘飯を喰ひ始めたのは日淸戰爭以後からである。軍隊から出る殘飯を最初に需め出したのが四谷鮫ヶ橋の細民街で、百匁七厘から一錢位で買求め飢を凌ぐものが少くなかつた。其後芝の新網、下谷萬年町の細民街でも殘飯を喰ふやうになり、當時の三大細民窟と謂はれた鮫ヶ橋、新網、萬年町には何れも數軒の殘飯屋が營まれ、尙ほ何處の木賃街にも其れを營むものが幾軒もあつて、後には軍隊の殘飯ばかりでなく、劇場、三食賄の辨當屋、學校の寄宿舍などからも殘飯と殘菜を仕入れて、細民に鬻いだもので、大正四年頃までは此殘飯は殘飯屋の手から七割までは細民の主食物に購はれ、三割は養豚の飼料と駄菓子の原料に用ゐられた。處が彼の歐洲大戰と我邦の産業伸展は、勞働者にも、その日暮しの貧乏人にも好景氣の潤ひがあつたので、何時とはなく殘飯を喰ふものが減つてきて、殘飯屋へ視察に行くと近頃は貧乏人も贅澤になつて殘飯殘菜などを振り向きもしないと、殘飯屋の主人は愚痴つたもので、その結果殘飯屋は養豚屋へドシ〳〵供給することにした。

かくして好景氣時代に殘飯を豚屋へ供給することに特約して終つたので、殘飯屋は今更それを解約することが出來ない事情にある。私は今年の二月から三月に亘り殘飯屋を調べに廻ると、市内と市外で殘飯屋の軒數は二拾三軒あつて、此中で畜産方面へのみ專ら供給するものが拾軒、細民と畜産方面へ併せて供給するものが九軒、細民のみへ專ら供給するものが四軒であつた。而して、軍隊、學校、辨當屋、百貨店食堂、劇場、病院其他から一日に出る殘飯の量は約六百五拾貫で、殘菜は僅に三拾貫内外である。此内細民の食用に供給される殘飯數量は約百七拾貫で、殘菜は三拾貫位であるから、總數量の約三割が細民の食用に需給され、七割が畜豚の餌になるので、昔とは丁度反對の比例數を示してゐる。

此百七拾貫の殘飯を需めてゐる人數は六百三拾人で、一人當り二百七拾匁の割合である。最も多く殘飯を喰ふ處は深川濟園町に在る市設無料宿泊所で約百五拾人、次が四谷旭町百五拾人、更に次は日暮里が百人餘りで、此以外では牛込、神田、板橋、西巣鴨、長崎町、龜戸、志村等で約二百三拾人である。然し、殘飯を手に入れる細民の數は以上の如くであるが、殘飯屋へ押かけてどうか賣つて貰ひたいと供給を迫るものは、一千二百人に上つてゐて、此中の半數がやつと殘飯を手に入れることが出來るのである。つまり需要と供給が相伴はないのは殘飯の七割は豚屋へ運ばれるからで、かうなると人間より豚の方が勝味を示してゐる。處が、段々と經濟的の慘害は甚だしく、畜産方面も不振となり、殊に此四月頃から不景氣は酷くなつたので、豚屋へ運ばれる殘飯が少なくなり、此頃では細民へ廻はされる量が増してきて、深川の無料宿泊所に泊る約五百人の貧しいも



殘飯賣り

のは半數まで殘飯に有りつくことが出來る。日暮里、板橋のドン底街でも殘飯を手に入れるものが多くなつて今では一千人位のものが殘飯で生きてゐる。

殘飯の値段はと言へば、百匁一錢五厘から二錢位ゐで、中には二錢以上で賣る殘飯屋もあるが、平均百匁二錢と見れば間違ひがない。一人で一日に三百匁を喰へば此價は六錢である。其れから惣菜は中皿に山もり一錢であるから、ドン底のその又どん底で生きて行く人達ちは一日の食費僅に七錢で足る。世の中には一宵の享樂に千金を惜まないもの、晩餐のために百金を擲つものさへあるのに、さりとは餘りに、格段の相違といはねばならない。

大東京で最も酷い細民街

扨て此頃では殘飯を需めるもの、宿ナシの野宿者等が多くなつて來たが、此れは不景氣の深刻化の情勢から推せば、將さに數旬の後ちに迫つて來た歳末には、何處の細民街でも[illegible]の街に[illegible]はり[illegible]るもの寒さに餓へるもの、路頭に迷ふもの等、困窮者が續出するであらう。それは歳末に入るまでもなく今年初秋の頃からドン底に喘ぐものが如何に淺ましい生活振りをなせるか、事例を擧げて說いて見よう。

大東京で最も酷いドン底街は市外板橋町岩の坂と、千住町[illegible]路の北面に渉る西新井町本木である。先づ板橋町岩の坂のドン底街を解剖すると、此岩の坂には憲兵長屋、北海道長屋、大口長屋、糠藤長屋、太郎吉長屋、橋本長屋、三拾軒、お化け、岩本、八軒、大和屋、からした名のつく長屋と尚ほ此外に幾つもの細民住宅が在り、なほ木賃宿が拾一軒ある。此岩の坂で隣保事業を經營せる敬隣園の調査によれば、細民の世帶數は約七百、人口は二千八百人であつて、職業で多いものは日稼人夫と土工、次はおでん、あさり、風船、なつとう等の行商、乞食物貰ひ、屑拾ひ、下駄歯入、下等遊藝人などで、太郎吉長屋に住むものは殆ど乞食であり、岩本長屋は別名を盲ら長屋と呼んで盲目のものが多く住み、按摩、物貰ひの輩らのみである。孰れの長屋に住むものでも生活狀態は哀れなもので悲しい物語りは絕えないが、殊に傷々しく思はれるのは大丸長屋に住む夫婦と、十二になる女兒の三人暮しのヨナゲである。此ヨナゲと云ふのは川や溝に這入り、竹笊で泥をさらへ、其中から金物硝子類、古ゴムなどを拾ふのである。此頃の不景氣は古鐵一貫目五錢内外、硝子も同値、古ゴム六錢位ゐ、稀れには値の高い銅だの眞鍮を拾つても收入は僅かなもので一日に二拾七錢、七錢、二拾一錢、三拾五錢、二拾四錢、四拾一錢、二拾二錢七厘、拾七錢、二拾六錢八厘、二拾七錢、二拾七錢、以上十日間の收入を合せると二圓七拾五錢五厘で、卽ち一日平均二拾七錢六厘弱に過

ぎない。この收入で親子三人が生きて行かねばならぬ。勿論、月に五圓五拾錢の家賃は拂へやうがない。然し、飢は凌いで行かねばならぬ。其處で毎日白米を拾錢買ひ、此れに豆腐ガラを入れて炊き、副食物は其日によると鹽ばかり或ときは味噌汁を拵へることもあるが、全く犬猫でさへ喰はない物で飢を凌いでゐたが、此れでは子供が可哀想であるから敬隣園の谷田部主任が斡旋して拾二の女兒は子守奉公に出して遣つた。

其れから土工を業とする夫婦と子供一人の三人世帶では、主人の就業日數は一ヶ月の間にたつた二日のみ。此れでは生きて行くことが出來ないので、妻は恥を忍んで乞食に出て一日三十錢の貰ひがある。此れで親子三人が殘飯を買つて飢をのがれてゐる。冬季になつても、布團も冬着も共に一枚もない。

屑買で夫婦に子供一人の世帶、一日約四十錢の收入、殘飯を常食にしてゐるが布團は損料を用ひ、自分所有のものは一枚もなく、子供は冬着が一枚もない。

洋傘直し夫婦に小供一人の世帶、收入不定で平均三十錢位ゐ、收入のない日はうどん二把で親子三人が腹を拵へる。此れも布團着物は一枚もない。

掘りや、此れは其處彼處の空地を掘返し金物を拾ふので、夫婦に子供四人の六人世帶、主人の月收五圓位ゐ、妻は乞食に出て一日三十錢平均の貰ひがある。殘飯で生きてゐる。此れも布團冬着は一枚もない。

尺八ふきの藝人、夫婦に子供三人、即ち五人世帶、一日六十錢位の收入、殘飯或はおかゆ、うどんなどを喰つてゐる。所得のない日に困つて蚊帳を五十錢で賣り米を買つた。

とぎや、夫婦に子供三人合せて五人の世帶、日收五拾錢、殘飯で副食物は概ね漬物、布團は一枚ある。けれども冬着は一枚もない。

日傭人夫、不具の妻と子供四人の六人世帶、七月の就業日數僅かに三日、八月も三日、九月五日、殘飯さへ喰へないので畑に行き野菜の落葉を拾つてくる。布團は二枚あるが冬着はない。

羽織紐の内職、夫婦に子供一人、主人は病氣で日收二拾錢位、殘飯を毎日拾五錢買ひ、布團は二枚あるが冬着は一枚もない。

此以外に行詰れる生活に惱んでゐる世帶が五拾九世帶ある。何れも殘飯或はノウチヤブと稱し缺食狀態にある難澁者で、冬着のないものばかりである。

尚ほ板橋警察署では最近に於ける岩の坂の細民生活狀態を調べたのであるが、此岩の坂の細民世帶の中で三百六拾餘世帶のものは生活に行詰り何れも難澁を極めてゐるが、此内で其生活狀態が最も酷く、實に悲慘で見るに忍びざるものが六拾四世帶ある。同署の調査書の中か

ら五六の極貧者を擧げて見る。但し原文の儘ではあるが世帶主の氏名は特に假名とする。

失業 無職兒島文助當三十一年

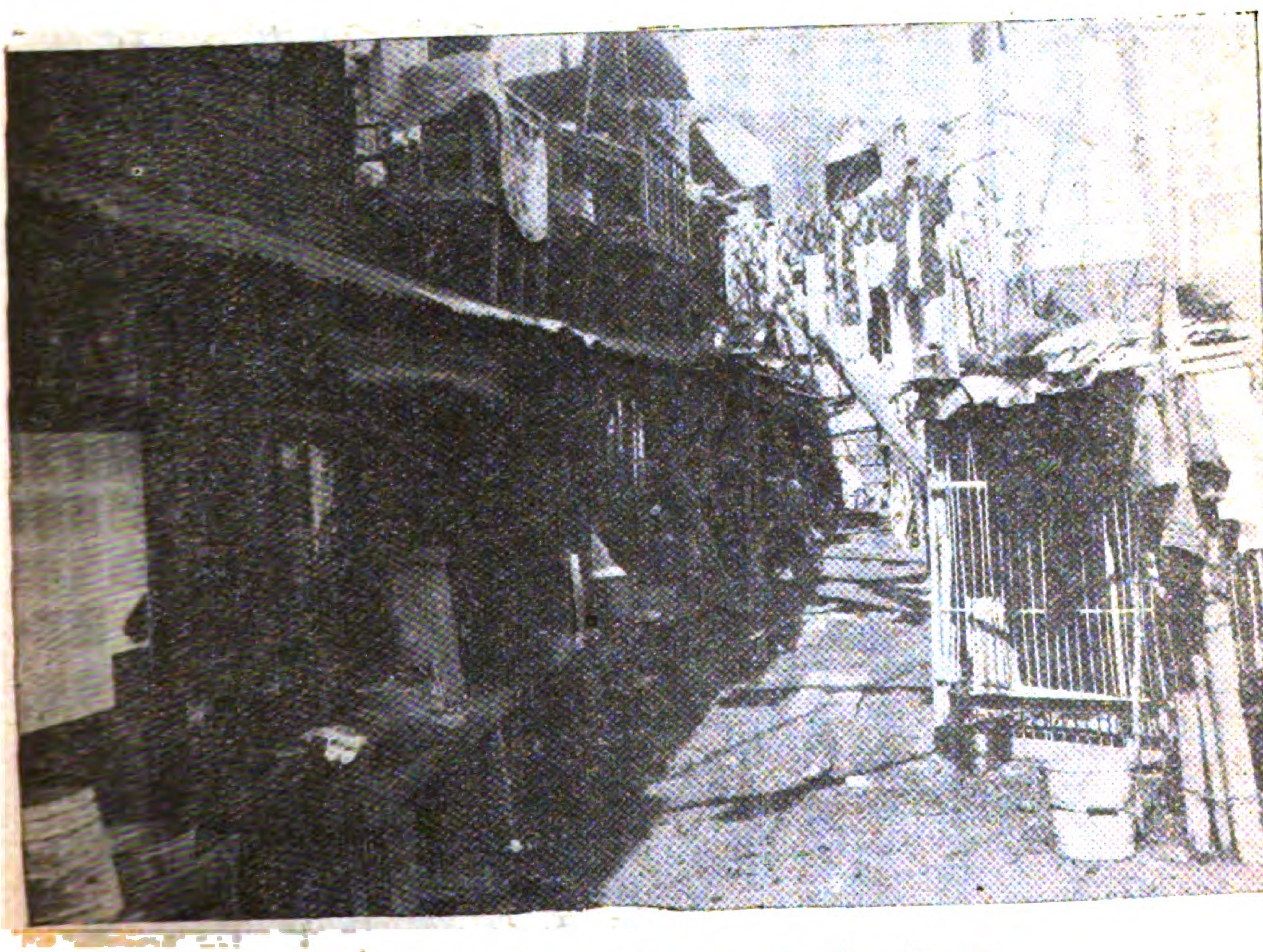
右者當年五才を頭に三人の子供あり、中學卒業後會社員として勤務し居たるも、財界の不況に伴ひ會社の破産となりて失業の止むなきに至れるものにして本月迄約六ヶ月に及ぶも就職の途なく、隨て一錢の收入もなし。失業當時は家財道具等を賣却して生活費に充當し居たるも現在處分すべき一物もなく、親類等より扶助を受け漸く生計を維持し居れるものなり。二三日に亘りて食物を採らざる事あり、殘飯及豆腐殼甘藷等を常食として居れり。元來同人は腺病質にして到底勞働に從事すること能はず實に悲惨なる生活狀態に在り。

飴行商 久保兼太郎當五十三年

右者、家族八名を擁し、先月中の收入は拾六七圓に過ぎず。中略、一日三食は勿論米食をなすこと能はず、豆腐から甘藷を常食となし且つ時々缺食をなすことあり。四疊半一間に家族八名起居し實に悲惨なる生活狀態にして、小兒の如きは極度の榮養不良に陷り居れり。

自轉車修繕職工平井友吉當十九年

右者、僅か拾九才の少年にして先月迄失業し居たるも、本月前記職業に就職一日僅に五拾錢前後の收入あり。本年六拾九才の老母を養ひ



三河島トンネル長屋外觀

居り、母は盲目にして自己の用便をも便ずること能はざる狀態なり。日日の收入中より日掛拾八錢の家賃を支拂ひ殘餘の金を以て甘藷等を求めて生活し、缺食すること再々にして極端に悲慘なる生活をなし居れるものなり。

井戸堀業　近藤松吉　當三十九歳、

右者家族八名を擁し一ヶ月に二拾圓内外の收入に過ぎず。中略。職業に對しては極めて勤勉なるも不景氣の影響を受け昨今殆ど仕事なく、四疊半の一間に家族全部起居し、殘飯又は豆腐殼甘藷等を常食とし、時々缺食なすため小兒の如き甚しく榮養不良に陷り居れり。下略。

下駄齒入職　鈴木松太郎　當四十三年

右者　四名の家族を擁し一日三拾錢乃至四拾錢の收入あり。此内より日掛拾五錢の家賃を支拂ひ、殘餘の金を以て生活す云々下略。

青物行商　川口三郎　當五十九年

右者、家族六名を擁し居り收入は一ヶ月約拾七圓位に過ぎず。妻は目下病床に在りて子供の世話をなす能はず、缺食すること屢々なれば病妻の藥餌を求むるの途なく、中略。常に殘飯及豆腐殼甘藷等を食し僅かに四疊半の一間に病妻及一同起居す。下略。

淚の街で聞く種々なる哀話

七百の世帶と二千八百人の人口を抱擁せる此岩の坂の細民街はまさに淚の巷である。板橋警察署の調査書を見るも、又敬隣園の調べによるも、前掲の如き痛ましい生活狀態にあるものが數拾世帶に上るのであつて、其生活の態は恰も生地獄と言つてよい。月收の最も多いもので二拾圓位ゐ、然し、家族に割當ると一人で月に二圓五拾錢足らずである。一日たつた七錢で飢をまぬかれる殘飯を買ひたくも賣切れとなる日があるので、薩摩芋、豆腐ガラでやつと飢を凌いだり、さもなければ此社會でノウチヤブと云ふ缺食のまゝで泣いてゐる。警察當局の談によれば三百六拾餘世帶のものは、滿目蕭條として秋風の吹く拾月の末に兒は袷を着ても親は單物を纏つてゐる。又親も兒も夏衣のまゝで過ごしてゐる。剩さへ布團のない者があるとのことで、私は拾月二拾八日に横山商工政務次官を案內して、此岩の坂を視察に行くと、四拾前後の貧しい男が敬隣園へ泣き込んできた。此男は練兵長屋に住むバタヤ（屑拾）で拾ひに歩いても一日やつと二拾錢位ゐの所得であるから、妻は詮方なく乞食に出る、三人の兒があつて長男は永い間、病氣に罹つてゐたが二拾七日に夫は拾ひに妻は物貰ひに出ると其不在中に病兒は死んで終つた。臨終に死水さへとれないのは可哀想でたまらない。處で葬儀を出したくも棺代さへないと淚を流して苦衷を告げるのである。谷田部敬隣園主任の斡旋で助葬會に賴み、貧しい野邊送

りをすることにした。大丸長屋では並んで三軒の主人が失業して途方にくれてゐる。此中一軒の家の小さい娘は毎日彼の町村組合で設けてある豊島病院に行き、此處から出る四五百匁の残飯をもらつてきて三軒で分けて、甘藷だの豆腐からを混ぜ雜炊をこしらへ拾一人のものが生きてゐると云ふ。其三軒の家を尋ねて見ると傷ましい思ひが胸を衝く。更に盲人のみで住まつてゐる岩本長屋に行くと、尺八吹き、按摩、物買ひ、等等、めくらの人々が一間四疊半の各長屋にくすぶつてゐる。此哀れな狀態を眺めては心の底から同情の念が湧き出ずには居られない。

慘憺たるバタヤの巣窟と無料宿泊料

千住中組から左に折れ、荒川堤を辿り約二十丁行くと其處が西新井町本木である。昭和二年頃から此處に細民街が形成され、屋賃日掛拾錢の間に六尺奥行き九尺の不良住宅もあれば、古トタンの掘立小屋もある。一曲人生の行路難、まさに敗殘の人々の群がろ環境であつて業態は何れもバタヤである。此數は千人餘りに上り、此頃の不景氣に襲はれ夫婦一緒に拾ひに出ても日收は四五十錢が止りである。此本木には何等の社會施設がなく、病人があつても施療の惠みがうけられない。兒童には無籍者があるので學齡に達しても就學が出來ないで野生的に育てられる。又残飯屋が一軒も營まれないのでツケ（残飯）で飢を凌ぐことも出來ない。米屋に寄つて尋ねて見ると、黄昏になると僅か五錢或は拾錢だけ白米を買ひにくるものがある。乾物屋に就て聞くとうどん粉を三錢五錢と買ひにくるものがある。此本木に住むバタヤの稼ぎ場は東京市内で、殊に日本橋を中心に京橋、神田、淺草、下谷が拾ひ場であるから、往復の里程は四里乃至六里に達し、なか〱怠けものでは出來ない。夜が明けて拾ひに出ては先廻りの奴らに拾はれるので、概ね午前三時には此本木を出て東京市内に乘込まねばならぬ。かうして暗いうちから稼ぎに出てもヤッと四十錢から五拾錢の儲けがあれば良い方である。此本木の細民と生活狀態に就ては具體的の調査が未だ行はれないから、此程度で筆を擱く。

深川の濱園町には市設無料宿泊所があり、尚ほ隣接の處に高橋元右衛門氏の經營せる天幕張りの無料宿泊所があつて、双方を合せると一夜の宿泊人數は五百人である。此無料宿泊所がなければ言ふまでもなく「おかん」野宿をなさねばならない氣の毒な人々である。故に此處はドン底の群が餘ほど深く生活苦の浪は大きく渦巻いている。宿泊者の業態は日傭人夫、立ちん坊、バタヤ、無職の類ひが多く、過半まではバタヤである。續々と襲ひくる不景氣風に惱まされ、残飯さへ碌々に喰へないものが少なくない。

市設無料宿泊所に宿る二百七拾人に對

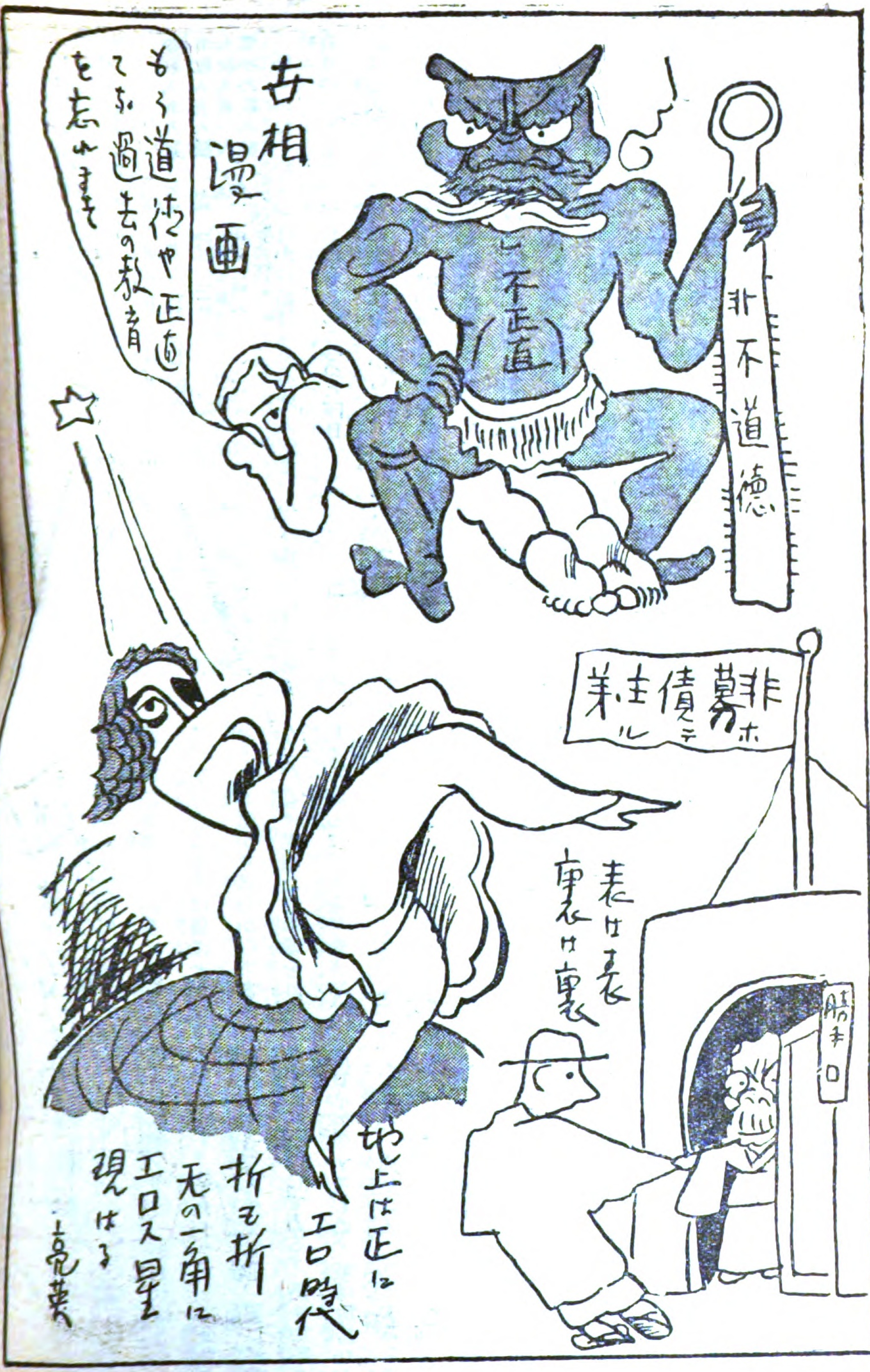
し、去る拾月一日から拾日迄即ち拾日間に亘る日收を調べると次の如き少額なものである。

	一日	二日	三日	四日	五日	六日	七日	八日	九日	十日
無收入者人數	二〇七人	一七八人	一六六人	二八〇人	一六三人	一七〇人	一五六人	一六八人	一七六人	一七三人
有收入者人數	一七五	二〇三	二二四		二二八	二三〇	二三四	二二三	二〇四	二〇八
有收入者一人當平均收入額	一五、一錢	一四、二錢	一四、八錢		一八、六錢	一六、九錢	一七、五錢	一七、二錢	一五、四錢	一六、二錢

かくの如く拾月一日から拾日までの收入狀態、言ひ換へれば仕事に有りつけたものアブレたものを見ると四日は悉くアブレでゐる。此れは雨天のために外に出られないからで、其れから就業の日でも一日は七割四分のアブレで、またアブレの少ない七日でも二割のアブレに上る。要するに雨天を除き九日間に亘るアブレの平均割合は二割五分に當り、即ち四分の一に當るものが不就業と無收入を表はしてゐる。就業に依るもの でも其收入 の極めて 少額なるには 驚かざるを得ぬ。一日の如き一人當り僅に五錢一厘であり、最も多い五日が拾八錢六厘に當つてゐる。隨て此れを九日に平均すると日收拾五錢一厘に過ぎない。斯る少額の收入では人間らしい生活の出來やう筈がなく、殘飯生活で凌ぐより仕方がない。

で、双方の無料宿泊所をあてにして毎日殘飯屋が殘飯と殘菜を運んで、殘飯は百匁一錢五厘、殘菜は一錢から供給するので此れを需めて飢を凌ぐものは二百人餘りに上る。また宿泊所では一杯三錢のすいとん、うどん玉三つ這入つたカケうどん一杯五錢、農林省の拂下米で味噌汁つき一杯五錢の飯を賣つてゐる。然し、收入の少ない彼等は二三錢の殘飯を需めてゐる。然るに無收入者は些少の貯へがあればとにかく、否らざるものは俗にキンチヤプで押通す。キンチヤプとは金魚のやうに水ばかり吞むからである。現在の不景氣と失業狀態、更に減收など、益々深刻なる影響を社會の各方面に現はしてゐる。熟々失業の結果を觀るに、失業勞働者等は、屑買に轉業するもの、或は屑拾ひとなるもの、聊か資力のあるものは、行商人、露店商人に轉業するものがある。殊にドン底街での失業者は、バタヤ、ヨナゲ、ホリヤ等、拾得を目的とする業にかわり、從つて、在來の屑買、行商人の如きは同業者の增加と取引品の暴落、賣れ行き激減のため、自然失業狀態に陷り、內職、女人夫等に從事せる妻女の職も殆ど失はれ、彼の岩の坂三河島邊の妻女は止むを得ず恥を忍びつゝ、世間師或はカリ出しと唱へ、たわしマッチなどを攜へ物貰ひに出るものが多くなり、其れでさへ殘飯か豆腐からで生きて行くに過ぎない狀態である。

今や梭を飛ばすが如く刻々と歲の暮に近づいて行く。貧しさは常のことではあるが年の暮は殊に貧しく、今歲と明年はわづかに歲暮の夜の一刻をもつて隔を絕つとき殷々たる百八の除夜の鐘は貧しき人々の耳にいかに淋しく鳴り響くことであらうか。


世相漫画
もう道徳や正直てな過去の教育を忘れます
不正直
非不道徳
非募債主義
表は表
裏は裏
勝手口
地上は正にエロ時代
折も折
天の一角に
エロス星
現はる
亮英


人は器械を作り器械にて殺される
メカニズム
失業
それからそれへ落ちつきのない現代風景
マルキシズム
尖端の女
スピード文明
野球狂時代
ナンセンス君
テレビ嬢
トーキー
米



臺灣の蕃人とその民族性

並河亮

ワダコ・リモイ・マコパダイ・ルドー・ムネチボ・ケンガルナバハロン!

(我等、皆んな、兄弟、劍を抜け、戰爭だ、首だ!)

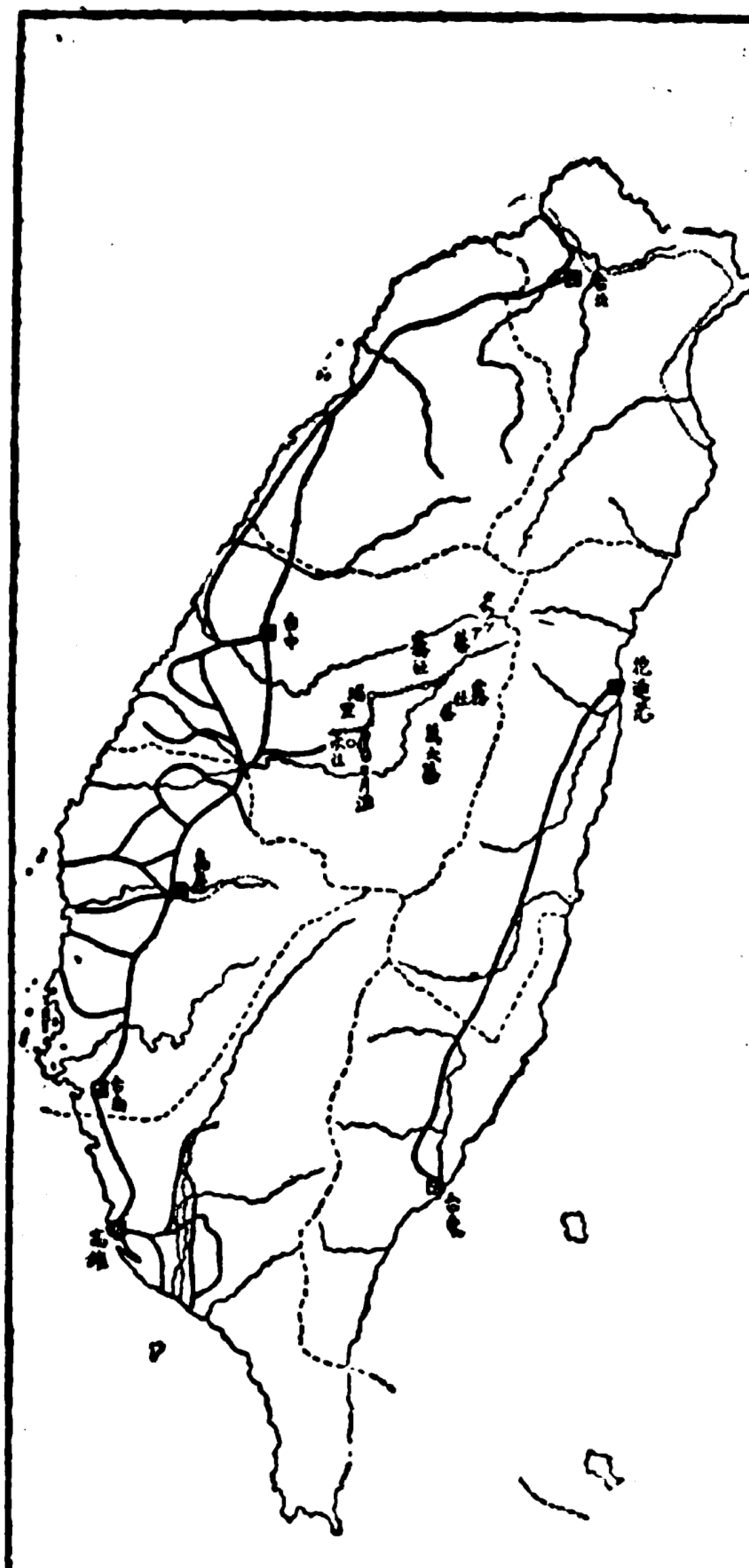
——臺灣の蕃族が反亂した。

去十月廿六日午前九時から臺南市南門小學校に於て臺灣文化三百年記念祭が、全島の各州知事竝に實業家約七百名參列の上盛大に擧行され市内は晝夜有頂天の賑ひを呈したその翌日、突如、霧社一帶のタイヤル族が反亂して全島を極度の驚愕と悲嘆に陥れた。(以下十五行削除)

——兄弟、劍を抜け、戰爭だ、首だ!

總督府の庭から叫ばれるこの喚聲をたゞ、滅び行く民族の果敢ない反抗の聲とのみ聞けないのだ。

北部西部一帶の臺灣平野を除いた東半部の臺灣島は、一萬尺以上の峻峰四十八を數へるほどの高山地帶で、大瀛の水が島を環る如く文化の流は平地には行き渡つてゐるが、山地は取殘されて地形上劃然として蒙昧な別天地を作つてゐる。熱帶植物の繁茂せる山麓から溫帶、暖帶、寒帶の山頂近くに至るまで雨水豐富なため鬱蒼として樹木は密林を作り、新高山の東南にかなり廣大な地理的暗黑地帶を殘す他、未だ斧鉞を入れない處女林が海拔七八千尺より一萬尺近くまで密生し、嶮峻な溪谷に近く僅かな平面に彼方此方蕃社が點在してゐる。蠻族と外民族との鬪爭は、淸の康熙六十年の「蠻俗考」そのまた三十年以前の同書「蠻境補遺」等に記されてあるやうに、南支那より渡臺した本島人との間に久しく鬪はれたものと思はれる。領臺以來、總督府の理蕃事業は苦心慘憺を極めた。明治三十一年に本島人六百二十名、內地人二十九名蕃人の刄に斃れ、大正元年には七百六十一名の內臺人が殺害され、その他蕃害は少らぬものがあつたが、明治四十三年の大討伐、大正三年のタロコ蕃討伐、屏東飛行隊による威嚇飛行等によつて、漸次蕃害は年と共に激減し、彼等が山奥へ逃れ去るに伴ひ蕃界線も短縮された。最近は蕃界內に理蕃巡查駐在所が五百五十。道路政策に基く海拔七千尺より八九千尺に至る蕃地横斷幹線たる能高越道路、八通關道路等も當局の莫大な費用と蕃人の夫役によつて完成し、蕃害は、わが威嚇的警備下に表面は皆無の狀態となつてゐた。蕃族中最も獰猛なタイヤル族も二十五年來平穩無事に官命に從つてゐたのである。



現在臺灣族の總人口は凡そ一四萬人、大體八種の蕃族に分かれて居

り、地理的に云へば、北から南へ、タイヤル族が人口三萬三千、サイシヤツト族一千三百、アミ族四萬一千二百、ピユマ族五千三百、ブヌン族一萬八千五百、ツオウ族二千、ブヌン族三萬六千四百、紅頭嶼のヤミ族一千六百で、各蕃族により幾分風俗習慣を異にし生活維持の方法を異にしてゐる。タイヤル族及びパイワン族は狩獵的種族であるがそれ以外の種族は農耕に依つて居、從つて文化發達の程度も異る。

モルガンは人類發達の歴史に關し、蒙昧、野蠻を各々下期中期及び上期に小分し、蒙昧最下期は人間はなほ樹上生活者で節音ある言語が出來、蒙昧中期は火の發見と武器の製造、即ち隣族の群相互間の戰爭及び狩獵の開始であるとした。さて、臺灣蕃族中、現に中央山脈の中央、新高南山及び關山附近一帶の種族は未だ馘首の後生血を吸ひ肉を食み、われ／＼の近寄ることの出來ない日本に於ける唯一の地理的闇黑地帶であるが（改造社版「日本地理大系」臺灣參照）「食人の風習」を持つ蕃族を蒙昧中期に入れたモルガン等の分類に從へばその地方の蕃族は、明にその中に入ることになる。次の蒙昧上期は弓矢機織の技術と木皮籠の製作で未だ狩獵的生活を脫してゐない。タイヤル族及びその前方なるブヌン族それである。野蠻下期には陶器が出來、やがて農業が發達し始めた「タイヤル族」以外の東部前部の諸蕃族は現に農牧に從事して土着的生活が安定し全く食人の風習に終熄してゐる。更に野蠻時代の上期は鐵の製煉と文字の發明で建築術は漸次進步し神話、詩、舞踊が生れる。タイヤル族に於ても右の發達はあるので特に注目すべきはタイヤルのみならず臺灣の殆んど凡ての蕃族が機織、編物、神話、舞踊、音樂を持つ程のかなり高度の發達をなして居るに拘はらず、遂に文字を持たなかつた點で、何故に彼等は文字を持たなかつたかそれには理由が考へられるが今こゝでは述べない。要するに臺灣蕃人はその分布する種族により地理的影響により各々異つた進化階段にあるのであつて、タイヤル族及びブヌン族は最も原始的で主として狩獵生活を維持し、次に、パイワン、ツオウ、サイシヤツト、アミ、ヤミ等はかなり進步して既に文明期へと移りつゝある。何れにしても未だ蒙昧野蠻時代に低徊しつゝある彼等の社會はわれ／＼文明社會とは甚だしく異つた奇怪な社會制度、──祭祀、男女關係、殺害行爲、──及び個人心理を特徴としてゐるのである。

タイヤル族の各蕃社に共通して次の如き神話が物語られてゐる。──「昔、りぎやかぼつぽト云フ所ニ巨樹アリ鬱蒼タル支葉ハ天地ヲ蔽ヒ日光爲ニ遮ラレテ常闇ノ世ナリキソノ後樹幹ヨリ生レタル男ノ神ヨリ男女二人ノ子生レ彼等成長シテ夫婦トナリ間モナク一子ヲ擧ゲタリシニ逞シク太リタル夫ハ不意ニ死セリ妻ノ悲哀云ハン方ナク今ハ二人ノ嗣モ絶エテ世ハ鳥獸ノミノ荒トナルベシ姉弟セマシト思ヒ姉ト遂ニ一、

衆ヲ案ジ自ラ笑ヲ含ミテ子ニ之ヲ呼ビ諭シテ言フヤウ萬物皆繁殖ノ道ヲ知レリ汝モ早ヤ靑年トナレバ嫁ヲ取リテ一家ヲ組織セヨ我山ニ入リテ汝ノ嫁ヲ探シ來ラント或日一人ニテ深山ニ入リ木ノ液ヲトリテ顏ニ塗リ相ヲ變ジテ再ビ家ニ歸リ子ニ向ヒ御身ノ母ハ妾ノ下ニ來リテ云フヤウ汝行キテ其妻トナレヨト妾ハ母ノ許セシ御身ノ妻ナリト子ハ母ナルコトヲ露知ラネバ(四十字削除)獸類ニマネテ「カントホチ」セシトスルモ如何ニスベキカソノ術ヲ知ラズ(二百字削除)如何ニセンヤト問ヘドモ答フル暇モナク兩人ハ共ニ大聲ヲ揚ゲテ泣キタリソレヨリ子孫繁殖シテ數世ナラザルニ早ヤ所モ狹クナリシカバ「オビン」ナル所ニ移リヌ居ルコト數世此所モ狹隘ナリトテ平地ニ出ヅルヲ望ムモノト高山ニ止ルヲ望ムモノト二隊トナリテ別レヌ二隊各々聲ヲ擧ゲテ強弱ヲ計リシニ一方ハ甚ダ強カリシカ山ニ殘リシモノハ之レ謀ラレタリ我等モ所存アリ今日ヨリ馘首シテ平地ノ者ノ數ヲ減ラサントソレヨリ社ノ者ニハ刺墨シテ平地ノ者ト區別ヲタテ一社協力シテ至ル所ニ平地ノ者ト見レバ馘首セリ「トロック」蕃ハ山ニ殘リシ仲間ニテ今ノ「タロワン」社ノ在ル所ニ來リテ居ルコト數世子孫繁殖シタレバ各々其所ヨリ別レテ現今ノ數多ノ各社ヲ組織セシナリ」(臺灣蕃俗慣習調査會報告書タイヤル篇七頁)

この神話によつても想像されるやうに彼等は元來一個の社會であつたものがそれから長い霜星の歴史を經て、漸次數多の各小社に派成したものであらう。現在八個の蕃族は各々數多の支族に分れ各支族は更に數多の小社に分岐して居る。この度反旗を飜した霧社蕃なるものは、パーラン社・タウガン社・シイパワ社・タロワン社・ホーゴー社・ロードフ社・マヘボ社・ガッツク社・スーク社・ボアルン社・ブカサン社の十一社より成り、かゝる霧社蕃は、他面又多くの小社より成るタウダー蕃、トロック蕃、タウサイ蕃、パトラン蕃、木瓜蕃等と相合してタイヤル蕃族を形成してゐる。

支族には總頭目が一人居て、才能武勇共に卓越して德望ある者で全支族から選擧するのでなく大社のみの選擧である。各小社には頭目が居、その職は名譽職、謝禮報酬は一切受けないが社に酒宴あるときには必ず頭目を招待し婚禮・首祭等には必ず出席する。各社とも合議制で頭目は決議の命令執行の權を有するのみ。彼等の生活狀態は甚だ單純で、特に失態のない限り頭目は殆んど世襲のやうである。頭目の下に頭目の職務を補助する勢力者が居る。社の壯丁は各敬慕する勢力者を求めて部下となりその指導命令を遵奉する。このやうに彼等の社會にも階級は儼として存する。

右の神話にあるやうに、彼等は刺墨の風習がある。男は前額と下頤、女は前額と兩頰及び股間に刺墨をした。それは他部落の者との區別を立てる爲であつたのが次第に慣習となり慣習がいつしか彼等の美

の概念を形造り刺墨のない女は美人でないとか、刺墨をしなければ男は嫁を貰ふことは出來ぬとか云ふことになつた。然し近頃わが駐在警官の諭言に從ひその風を廢して來たやうで霧社あたりの未婚の少女は殆んど刺墨をして居ない。何故刺墨が惡いか、と云ふ疑問は、何故人の首を取つて惡いかと云ふ疑問と共に彼等には未だ解し得ない謎なのである。美と信じ善と信じて來たことが一朝にして覆される筈はない。社會的必要と習慣が道德や美を生み出す好個の例證である。

ところが霧社とはどんなところか。臺灣全島の小公學校で運動會などの年中行事が盛大に行はれる度毎に兒童が樂隊に合せ先生の音頭に依つて高唱する「大國民」と云ふ歌がある。作者は田中智學だつたか伊藤痴遊だつたか忘れたが、曰く

新高山は高けれど
國の御威光はなほ高し
濁水溪は廣けれど
君の御恵はなほひろし
敢て他國を犯さねど
ひらくる御代の誇らしき
領土の民を愛するは
異國の民と異ならじ……

これは内地人の子供や本島人・平地の生蕃人の子供で知らぬ者は殆んどない程彼等の口に膾炙した歌であるが、この歌の中にある濁水溪は臺灣一の長大河で水源を能高山の奥深く發し蜒々蕃界の高地を縫うて日月潭の南方から西へ臺灣平野に注ぐ。富士山が日本の一種のトーテムであるやうに濁水溪は臺灣島民のトーテムだ。その水源地帶なる四五千尺から八九千尺、濁水溪上流の數多の水源流域と一萬尺級の能高山及び奇萊山系の山腹をなす高山地域に點々として綴在して居る十一部落が霧社蕃なのである。平地から凡そ三十里の山奥で地形甚だ嶮峻、霧社駐在所附近からの四顧の風光は雄大絶佳、深山の氣測々として迫るを覺える。白雲は濁水溪の谷底から湧いて高山の冷い氣流に乘つて上昇しこの霧社高地に崩れかゝつて來る。北西に一萬尺級の守城大山、東方に能高奇萊の連峰、中央山脈は蜒々長蛇の如く南走し煙雲の彼方に新高第一峰に連る。一山の紫紺を照らす炬火の樣に粘板岩の數百尺の斷崖がキラ〱光つてゐる。蕃屋がところどころ、狹隘な山腹を伐り開いて植ゑた粟畑の實つた穗の中を野良に急ぐ蕃婦の姿がシーロンの唄に交つて平和に聞ゑて來る。草叢に虫の音が冴え、女郎花が搖れ、身熱帶に在るを忘れしめる。彼等の家屋は茅葺か或は粘板岩の破片で屋根を作り、竹・百日紅或は欅を丸木のまゝ組立てた極めて原始的なもので、欞子に窗枚に窪みをつけたものである。入口

は唯一つ、窓がないから廣い土間は晝も暗く土間の中央に爐を切り其處で猿や猪を燒いて居る。土間の四隅に寢床を設け寒い時は夜中とろ〳〵と火が燃えて居る。一家族の者で首狩に出て居る者があれば晝夜共火を絶やさない。外庭に床を高くした立派な穀倉を建て、共產的部落に於ては一個の大きな穀倉を中央にして周圍を各家屋が取り卷いて居る。各小社には一基の高い櫓があるがこれは獨身者の宿泊所、外敵への監視所である。女人禁制と云ふ事になつて居るが、私が見聞したところでは、掠奪婚、或は外部落の婦女子を一時掠し來つて意を通ずる場所に使用されることが往々ある。私は偶然にもこの櫓で兄妹××の事實を見たことがある。

彼等は輪耕法に依つて耕作してゐるが、土地が嶮岨であるのみならず鬱蒼たる大密林地帶が多いためにさう樂ではないらしい。未だ灰の肥料である事を知らず、粟、甘藷等を植ゑるに過ぎない。それも七月頃から十月の初旬までのことでそれ以外の季節は周圍の連山白皚々の雪に包まれ、この地特有の大暴風雨は長き期間に亘つて彼等をして殆んど屋外に耕作するを不可能ならしめる。收粟祭の賑ひを最後として蕃社は火が消えた樣にさびしくなる。元來タイヤル族は全島の蕃族中最も高地に住み主として狩獵によつて生活して來た殺伐な種族、總督府の理蕃政策はなるべく彼等をして農牧に從事する樣仕向けるけれど彼等傳來の血脈の中には狩獵民族の野性が潜んで居て農牧を厭ふ傾きがある。十月頃から來年の六月下旬頃まで彼等の生活は殆んど狩獵によつて維持されるのである。男子と云ふ男子は七八才の少年に至るまで弓矢銃器を携へて斷崖溪谷を山猿の如く駈け廻る。その間婦女子は家に在つて機織等に日を送る。彼等の狙ふ餌物は年と共に七八千尺の奥地に逃げ去りその數も次第に減少するために彼等の生活は益々窮地に陷つて行く。海拔四千尺以上の高地から彼等の祖先の使用したと思はれる石器が屢々發見されるところより見れば彼等はかなり永い星霜に亘つて山間の僻地に狩獵生活を續けて來たものと思はれる。平地からは本島人及び內地人の絶えざる壓迫に苦しめられつゝ次第次第に高地へと追ひ込まれて行く彼等の氣持には常に不安と寂寥とが巢食うて居る樣に感ぜられる。彼等は飽くまでも狩獵の蠻族であつて農牧の民ではない。此の度の反亂の動機が日月潭水源流域地帶の森林伐採の禁止からではないかとの疑問は彼等の日常生活の眞相を知るならば、肯定し得ない理由である。

蕃人の生產する物資は貨幣と交換されて平地に持ち去られる。たゞでさへ生活物資の缺乏を來しつゝある彼等から合法的××が行はれる。代價として拂はれた貨幣が彼等の手に多からんよりもむしろ彼等は物資の彼等の手から奪ひ去られることを恐れるのだ。蕃人間に於て

も一種の貨幣の如きものは存在したが貨幣の觀念は未だ甚だ幼稚であつた。彼等の平和な物々交換を破壞したものは（十八字削除）貨幣經濟の外部からの侵入であつた。霧社・ボアルン其他の警察官駐在所には交易所が設置せられ、其處で强制的に貨幣との交換が行はれた。彼等は交易所を目して日本內地人及び本島人が彼等の墳墓の地の產み出す物資を掠奪する場所であるとの觀念を多分に抱いて居る。私の親友である蕃人P——は幾度かそれについて手紙で訴へてゐる。事實、未開人と征服者たる文明人の接觸地點に合法的××の行はれることは世界何處の土地も同じであらう。（百十八字削除）私は、霧社公學校近くの林の中で焚火をし乍らP——や彼の姉と話し合つた夜の事を思ひ出す。P——は今何處に追はれて居るであらう、それとも既にあえない最後を遂げてゐるかも知れない。

タイヤル族に於ては小社の風習により幾分例外があるが、土地は凡て共有とされ、社の合議による協定に從つて土地の一部の私有が許されてゐる。他の共有地の一部を私用しようと思へば、社人と協議し許可を得れば豚一頭を屠つてその肉を各戶に分配して占有權を取得する。又他人の土地を使用する場合に地主に相當の物品を納付することになつて居る。かく一見土地の私有が嚴である如く見えるが根底に於て土地の私有は社の合議による許可によつて效力を取得するものである限り、土地共有とみて差支へあるまい。殊に穀倉の共有を實行し來つた二三の小社に於ては土地共有は甚だ明確に觀察される。たゞ他人の家屋への無斷の侵入が許されないのみである。（八十六字削除）然ては我等の土地は凡て外來者の有と歸すであらう。この不安の焦燥が常に彼等の胸中に釀されてゐるからこそ、たとへ彼等が總督府の理蕃政策によつてなるべく平地へ出向くやうに仕向けられても直ぐ逃げ歸ることになるのだ。當局者が彼等に平地の諸々の文化施設を見せてやることによつて彼等を平地に同化させようとする計略は常に無意味に終つてゐる。（三十一字削除）

この度の反亂の原因が男女關係ではないかとの說も行はれてゐるが、それは肯けない。從來、駐在警察官或は內地商人等と蕃女との間の色情關係から彼等の怒りを買ひ、彼等の襲擊を受けたことは二三に止まらない。然しかゝる色情問題から二十里四方に亙る廣汎な地域の蕃族が組織的に反亂を捲き起した如きことはかつてあり得なかつた事で、內地人から捨てられた女の近親者のみが武器を執つたのである。彼等は元來、他人の色情紛爭に關しては甚だ無關心であつて、殊に若い青年等は、內地人と通ずる如き女子に對しては輕蔑こそすれ、それが棄てられたからと云つて、武器を執るほどの同情心は持たぬのである。蕃人の女達は日本人、殊に警官達が、お上から給金を貰つて安樂

と暮して居るのを見て、その妻となれたらさぞ辛い仕事もせずに樂に暮せるだらうと考へてゐる。從つて彼女達は日本人の妻となることを喜ぶが、日本人の妻となつた蕃女は他の婦女子の羨望の的となり、又そのために反感をもつて見られる苦しい結果となる。部落の青年達も決して彼女に好意を寄せることはない、どうせ我等の手から逃げた女だ、その樣に心の腐つた女は日本人から棄てられたところで今更我等は同情はしないぞ、とから考へてゐる。この度殺害された佐塚警部の妻はボーゴー社頭目の娘であつたが、彼女は我總督府から×××××結婚させられたにも拘らず、反亂起るや本島人の姿に變裝してやうやく平地に難を免れた有樣である。內地人から棄てられた蕃女は部落の青年等からは白眼視されるために、平地に近い街の本島人の妻や妾になるか、春を賣る女になり下るか、するのである。倘タイヤル族にも花柳病は七八千尺の高地にまで行きわたつてゐるが、×××は殆んどその救濟はやらなかつた樣である。花柳病は平地からの外來者が蕃女に移し植ゑたと信じてゐる彼等の間で花柳病に冒された蕃女の運命こそ洵に慘めなものである。さて、甚だ露骨なことを云ふ樣であるが、タイヤル族の蕃人の男は成年者と雖も殆んど凡て、その××は××であつて、これが往々蕃女を中心として蕃丁及び內地人の間に悲喜劇を捲き起すのである。內地人と通じたる蕃女が蕃丁に對して甚だ侮蔑的言辭を弄し、その爲に殺害された事實もある。序ながら言ふが、蕃人は男女共鬚、髭、髯をはじめ腋毛及び陰毛を拔き取る風習があるが、それは毛虱の發生を防ぐ爲であつたものが多年の習慣となつたのである。彼等はいつも顏をキラ〱光らせてゐる。彼等の言葉に從へば內地人は鼻の下にチョビ髯を生やしてゐるから醜男なんださうである。

タイヤル蕃人のかゝる×××の特徵が如何なる原因に據るものであるか私は知らない。平地に近く農牧を恒業としてゐるアミ族ツオウ族の男子の×××はタイヤル族のそれの如き特徵は持たぬ。ストラッツであつたかと思ふが、一般に高山及び寒帶に居住する民族に××が多く南國の文明人程それが少ない。卽ち×××の發達如何が文化發達のバロメーターであると云ふ意味の文章を讀んだことを記憶してゐる。マリノウスキーは、氣候と男女關係に就き氣溫低き高山地帶の民族は性慾弱く、從つて一夫一婦が多いが、低地の文化民族には多婚の現象が多い、と述べてゐるが、一應尤もであるけれども臺灣蕃族では必ずしもさうではなく私はむしろその反對であることを知る。狩獵的生活を行つてゐるタイヤル族では、現在は母權の強き一夫一婦制が行はれてゐるが、男女關係は甚だ自由であつて決して嚴格なる一夫一婦ではないに反し、平地に近くかなり高度の生活程度を保つてゐるアミ族ツオウ族等に於ては、經濟的能力の必然的現象として嚴格な一夫一婦制

が行はれてゐるのである。――タイヤル蕃族の間に現今まで傳へられて來た（先にも述べた如く彼等は文字を持たないから凡て口傳による）神話口碑は彼等の祖先が亂婚及び血族群婚を行つてゐたことを物語つてゐる。タウサイ蕃には母子相姦、トロツク蕃にも母子相姦、霧社蕃には兄妹相姦、其他、合歡蕃、北勢蕃、馬利古灣蕃、大嵙崁蕃、南勢蕃、白狗蕃、シカヤブ蕃、萬大蕃等に何れも似通つた骨肉婚、及び團體婚の物語が傳へられてゐる。同時に彼等は、骨肉婚は生兒育たず、天罰を受く、と考へ、骨肉婚が悲慘なる結果を招くことに關する神話を傳へてゐる。他方、母權中心の部落の存在を物語る傳說は全社を通じ五六十にも上る。またロープゴー社、及び白毛社には「女人部落」の物語がある。その中の一つに曰く、白毛社の男、狩獵に出た際、犬を失つたのでその後を追つて行つたところ、ギルバオガンなる場所に着いた。數多の女子が集り來つて男を捕へ己が家に伴ひ、××「■×××、怒つて鉈を持つて××を裁斷した。白毛社の社人は之が復讐をなさんとしたが、女人社は他の蕃社に援助を求めたので戰ふを得ず、また後日女人社に入つた者は一人として歸つて來なかつたので、誰一人征伐しようとする者無きに至つた、云々（臺灣舊慣調査會報告書タイヤル篇三三〇頁）……もちろん私は神話口碑に歷史的意味を盛るの愚を一應承認する然し神話口碑は甚た正確な程度にまで其民族の個性、或は雰圍氣を傳へるもので、民族理想乃至社會道德の精神が、たとへ文化の光の中に次第に消滅して來たとは謂へ、その內包する道德律によつて支持された過日の習慣及び風俗を保持してゐるものだ。神話を通じて想像される過去の彼等の生活感情と、神話を傳承した幾百代の世代に亘る蕃族の生活感情と、――これらが肯定し且理想視したものは、同時にそれが實行されてゐたことを暗示しないであらうか――この二つの資材を神話によつて知り得る限り、神話になほ歷史的證理由を附する理由は在ると思ふ。のみならず、現在事實に於て、タイヤル族の過半數の部落に於て女尊男卑であり、婿は女家に入り、生兒は母方の名を稱し、母が子女の婚姻の許可を爲し、妻が私有財產の處分權を有する等より見れば、母權中心の社會の存した事は事實であつたらうし、かゝる狩獵的民族の間に女人部落の存在したことも强ち之を否定し得ない樣に思ふのだ。かく見來れば、タイヤル蕃族たりとも、世界人類の經來つた、或は經つゝある起伏纏綿せる男女鬪爭戰線――母權、父權、女子解放、男女同權――の經過を踏襲しつゝあると謂へるであらう。周圍の一萬尺以上の連山が白い衣を脫いで、紫らしい色を大空にうねらせる、栗の三番除草の五月の頃から、微風に乘つて彼等の婚禮の祝の歌が聞えて來る。彼等の結婚式は頭目・勢力者を招いて一社を擧げて盛大に行はれるが、婚禮期は五月頃から九十月頃

までで、冬に入つた狩獵期には行はれない。式前、男は毎夜娘の家に赴いて遊び戯れ、意氣投合すれば仲媒人を立てゝ、衣服、飾物、土地の如き聘物を女家に贈り、女家の兩親や親戚はそれを檢閲して後結婚を許す。蕃語の「バリマカイデル」(結婚)とは買女の意で、やはり女子が勞働力として取扱はれてゐる。然し式後多く婿は女家に在つて仕事に從事し、女家の許可あれば嫁を伴つて男家に歸るのである。二人の男が一人の女に懸想する場合には二人は出草して持ち歸つた首級の多寡を爭ひ、多く獲來つた者に嫁さねばならない。親が許さぬ當人同志は耕作地に隱れて示威をやる、その間友人等が竊に食物を運ぶ。子が生れゝば親は大抵結婚を許す、と云ふよりも子が生れた後に結婚する者がかなり多い。彼等の一夫一婦は一見嚴であるやうに見えるが、事實はそうではなく、社に豚等を提供して一應謝罪しさへすれば離婚も姦通も強姦も許される。それでも物議を醸す時は、社の外に出草して首級を持ち歸り社人に示せば、紛爭は大抵片がつくのである。子の養育は父に依る場合もあるが、婿か女家に止る時は女方の叔父が扶養の義務を負つてゐる。蕃童公學校の兒童は最近まで父の知れないものが多かつたと蕃族報告書は報じてゐる。男女關係は他種族に對しては嚴であるが社内に於てはむしろ自由で、彼等が祭の夜に踊るメツケテレゴンの舞踏は、隨分露骨を極めたものである。

さて人間は一個の「オツトフ」(靈)を有してゐる。夢は靈魂の遊離に依るもので死は永久の夢、夢は一時の死である。このオツトフが肉體を離れ現實界以外に隱れて潜んでゐる時これを神と云ふ。……彼等は各自凡ての自然現象の威力を制御し得る絶大なる「力」を有して居るのだと信じてゐる。生前に善行を爲したものが善神で邪を行つたものが惡神になるとは限らない、善神も須臾にして惡神と化すのでこの變化の力はわれ等の神の力である。己の行爲を禁止するものが惡神であり、然らざるものが善神であると信ずる彼等は自己の威力を絶對的に峻嚴なものとして我に障害を與へ我に反抗する者あればそは惡神の戯むるゝものであると信ずる。日月星辰は神ではない、豚其他には靈はないが故人に愛された犬には「オツトフ」が居ると云ふ。このやうに自己の神を信じて居る彼等はその日常生活に於て己が意の儘に振舞はん爲には、自己の絶大な「力」を有する神に依つて他の惡神を克服せねばならぬ。こゝに彼等の日常の道德規準があつた。彼等の馘首の風習は實にこの宗教的正義感の下に行はれたもので、それが部落間の紛爭解決のために行はれるやうな事があつても憎惡感は殆んど見られなかつた事は日頃親密な同志が首切られることが往々にしてあつた事實によつて解る。のみならず彼等がわれ〳〵に出草の原因と

して告げる（一）盜賊、姦通、殺人等の嫌疑で社人から冷眼視された場合（二）紛爭の相手方に謝罪せしめるため（三）惡疫流行の爲（四）刺墨の權利を得て想ふ女と結婚する場合（五）掠奪婚を正當化する爲（六）人望を得るため等々によつても窺ひ得る。かゝる場合馘首される者は該紛爭事件とは何等關係のない者である場合が多いのだ。こゝに宗教と首狩の密接な關係を見るのである。

もちろん他部落との境界爭ひ、勢力爭ひ等によつて鬪爭が勃發されることがあるけれども、それは部落としての團體的戰爭であつて、性質は全く「首狩」とは異る。即ち總指揮者の命令の下に秩序的に行はれる斯る戰爭行爲は宗教的背景を持たず、生存の危急を救ふための純社會的鬪爭の必然的現象である。又單に個人的な紛爭の結果が暴力的殺人に終つた時は、社人から甚だ不道德視され、社罰を受けるか、或は弓矢農具獸皮等を提供して謝罪せねばならぬ事になつてゐるから、これも「首狩」とは全く異る。

この度のタイヤル族の反亂は、恐らく、戰爭行爲と宗教的首狩とが結合して行はれたものであらう。從つてその直接動因が、如何に考へ得られようとも彼等の心理に巣喰ふ宗教的なるものゝ働きを度外視してはその全き理解は不可能である。（六十四字削除）原始的な宗教的正義觀に驅られ、彼等の全社會を擧げて、「兄弟よ、鞘を拔け」の喚聲を爆發せしめたものであらう。私は今にして想ひ出す。あのマヘボ社首祭の夜に、彼等が發した奇怪な叫び聲を。……それは、はかり知れない太古から傳へられて、數限りない時代の洄瀾から、その起源を神祕のうちに封じてゐるこの民族の特性から、空漠たる寂莫のさなかで野人の吼えた咆き聲を。私は赤間警部と共にボアルン溪に近い森林を走りながら聞き入つたのだ。……それは妖怪のやうなトウハンの森から聞える。もの凄く、嚇かすやうな叫聲で女の如き疳高い調子であるが、何ものか、嗄れた力強さをともなつた。野生の牡馬を思はせる。また獸の咬みつくやうな聲でもあり、それから氣狂の樣な不吉な、をかしい一種の笑の中に消えてゆく。……あの聲はもう再び私は聞くことは出來ないであらう。本日の東朝の夕刊は左の如く報じてゐる。「……山砲と歩兵の砲擊と飛行機の新兵器による爆彈投下は敵に多大の損害を與へつゝあり、着彈と同時に森林内に起る敵のうめき聲は手にとるやうに聞えた」……然し死に瀕しつゝ恐らく彼等の胸中には彼等獨自の宗教的信念が絶える筈はなからう。

（一九三〇・一一・七・夜）

蕃人の慣習と土俗

小泉鐵

一

大正九年花蓮港廳下ヴヌン族ダーフン事件、同年臺中州サラマオ蕃の駐在所燒討事件以來蕃地は概して平穩無事であり、臺東廳下に於けるライフンロクに對する鐵條網の封鎖も解かれ、ターフン事件の殘黨なるアリマン・シケン、ラホアレの一黨がライフンロクの奧深く逃れ、彼等が間々屏東方面及び八通關方面に現はれ、不穩の態度を示すだけにすぎず、蕃地には到るところ道路の開鑿が成り、鐵線橋は架けられ、駐在所も完備し、諸般の設備は整ひ、蕃地開發、蕃人誘導保護の事業は漸くにして緒についたかのやうに思はれたのであつた。

而して最近に於ける蕃地の事件として問題を起したのは一昨年十月に於ける臺中州下ヴヌン族郡大蕃の前記アリマン・シケン、ラホアレの一黨に參加せんとする脱出事件であつたが、そして彼等は八通關道路に張れる警察官の警戒線を夜陰に乘じて苦もなく突破し、合流に成功したのであるが、騷擾はなく、事件は平穩に終つた。然るにこの度は全く疾風の如くに突如として霧社蕃の蜂起を見たのであつた。恐らくそれには理蕃統治者も非常の意外に驚いたであらう。霧社蕃は明治四十二三年の同地方の討伐以來、全く歸順し、蕃地の中にても特に撫育の行はれ、當事者の其の功を誇つてゐたところであり、其處の蕃人兒童の公學校の如きは御自慢であつて來訪者を觀察に來るものがあれば誰彼を問はず、參觀の具に供して得意の色濃かつたものなのである。然かもそれがその運動會の當日を眼掛けて暴動を起されるとは餘りにも皮肉であらねばならない。

私はいふ、蕃地の開發、蕃人の保護誘導は飽く迄大事である。然しそれには彼等の生活を先づ理解することが根本でなければならない。彼等の信仰、慣習、制度に對して充分なる理解を有ち、彼等の文化形態及び生産組織に基準を置くものでなければ、百の施設も決して生あつて益なく、それは蕃人自身を不幸に陷れるばかりでなく、統治自

身の破綻を招來するものである。今日迄の理蕃政策が決して惡意に出で、彼等を滅却するが如き目的から出發せるものではなく、寧ろ其の反對に善意に彼等を誘導開發し、保護愛撫するに出でたるものであることは私の信ぜんとするところであるが、然しそれは餘りにも彼等の生活を理解せず、信仰、慣習、制度に就いて全く彼等の傳統を無視し、敎育に於て又授產に於て彼等の生活形態及び組織に餘りにも無頓着であつたといふことは私の又敢然としていはんと欲するところである。そのことに關しては私の蕃人との接觸の始つた最初の日から繰返し繰返して當事者及び當局に反省を求めたのであつたが、遂に彼等の容るゝところとならなかつたのであつた。

全く或る人々にとつては蕃人の問題の如きは意に介するに足らない事柄であらう。然しさうはゆかない。私が初め臺灣に行き、蕃族の調査を爲したいと決心したのは全く私の學術的目的からであつたが、足一度彼等の間に入り、彼等と生活を共にし、彼等と交はるに及んで、私は人間として此の儘に放置することの絶對にゆるせないことを感じ、蕃人のことを思ふと私の血は異樣に高鳴りするのである。それ故今度の如き事件が起ると、私は全く他人事とは思へないのである。それがこの機會に自分でも呆然とするほど、澤山の臆測を諸方の依頼に應じて書く氣になつた所以なのである。

然し私は理蕃統治を如何にすべきかに就いては此處に書かない。それは他に讓り、今は蕃人の生活について書くのであるが、然し臺灣の蕃族は普通の分類でも七種族であり、その個々にふれることは困難であるから、此處には今度の暴動を起した霧社蕃の屬するタイヤール族についてのみ記述することにする。

二

私は先づ彼等の傳說から始めよう。

大昔、ハブンブーロックの地に一つの大きな石があつた。一日その周りに諸種の鳥が集り來つて、其の石を動かさんと試みたが、何の鳥もがそれを能くすることは出來なかつた。そこへ偶々シッシリ鳥がやつて來て、其の石を動かしたところが、石は轉つて遥かに斷崖の下に落ちた。其時石は二つに割れたが、その中から二人の男女の人間が生れた。其等の二人が成長して後にお互に夫婦の交りを結び、其の子孫の繁榮せるものがタイヤール族であり、其の二人は彼等の祖先である。その石の割れたる地をピンスブッカンと呼ぶのであるが、「自ら割れた處」との意味であるとのことである。

これは普通タイヤール族といはれるものの中で自分達を呼ぶのにタイヤールと稱する蕃族につたはる說話傳說であるが、タイヤール族の

中で、自分達を呼ぶにセーデッカと稱する所謂セーデッカ族にこれと同じ發祥傳説をつたへてゐるかどうかを私は知らない。

斯く普通タイヤール族と稱せられるものの中には二種類あつて一を純タイヤール族とすれば、彼等は北港溪の上流より西及び北に住み、他をセーデッカ族とすれば、彼等はその東及び南に住んでゐるのである。それは今度の暴動の起つた霧社附近を南の境として北方に蟠居してゐる種族であつて、霧社は略々北緯二十四度に當るから臺灣の殆んど中央から北部全體の中央山脈を住息地としてゐる譯である。その人口は約三萬三千であつて、年々多少の増加を示し、人口からすれば蕃族中第三位にあるのである。

三

彼等は鯨面に入墨をしてゐるので知られてゐるが、それ故に鯨面蕃などともいはれてゐる。其の入墨に就いては次のやうな傳説がつたはつてゐる。

ピンスブッカンにて生れた二人の男女の人間は日中でもなほ暗いやうな大木の繁つた山の森の中に洞窟に住み、鳥や獸を友として住んでゐた、そして二人は共に喜び、共に悲しみ、相倚り相助けて暮してゐたが、年數をふるに及んで、二人は青春の域に達した。彼等には戀情の動くものがあつたが、親身の骨肉たるの故に交情を遂ぐることを恐れ憚つた。其の時彼女は一策を思ひつき、

『此處から山の後を更に山又山を越え、溪河を渡つて某々の地に行くと、其處には大きな檞樹がある。その下の處に洞穴があるが、其處に一人の女がゐる。そしてお前の來るのを待つてゐるから、今度の滿月の夜、其處に行つて嫁にするがよい。私は私で別に夫を探す爲めに他所にゆかう』

とまことしやかに其の男の方に語つた。

そこで男は其の女にいはれた滿月の時に其の場所に行つて見た。女はそれより先きに出でて先づ其の教へた場所にゆき、煤を以て顔を塗り、其の姿を變じて洞穴の中に隱れてゐた。斯くして男は骨肉とは知らずに親身の女と交はり、二人は夫婦となつたのであつた。

斯くして彼等は顔を煤を以て塗ることを習慣としてゐたが、遂にそれが入墨となり、なほすゝんで今日のやうた形式になつたのであるといはれる。

それは男にあつては額と顎とに、女にあつては額と頬とにするのであるが、其の額のそれは男女共に先づ自分がタイヤール族であることを示す種族的表號であつて、それは既に幼少の時に刺墨するのである。次に男の顎のは彼が成人たるの資格を表はす象徴であり、普通結婚

蕃を馘首することに依つて始めて刺墨するものである。又女の頬のは彼女が最早一人前の處女となれることを語る表象であり、彼女の通經後に於て刺墨されるのである。然しそれは彼女の未だ異性を知らぬ以前に施されるのであつて、それは處女たることを示し、施術前に男との交情を結ぶが如きことは其の絶對に忌むところであり、勿論頬への刺墨のすまぬ間には是認せられたる婚姻は行はれないのであるが、間間刺墨前に男との私通を行ふものがないではない。斯かる場合には施術に際して膿をもつといつて非常に恐れられてゐる。

それ故に入墨は先づそれに依つて種族的表號として、種族の血の純潔を保ち――タイヤール族は純粹に多種族との通婚を忌む――女のそれは處女の貞操を確守し、男のそれは若者の勇氣を鼓舞することによつて種族的生存の役目を演じたものである。勿論入墨には粧飾的意味のないことはないし、そして其の起原發生には呪術宗教的意味のあることは明かであるが、それが現實的の役目は種族保存の達成である。

入墨の施術は誰にでも出来るものではなくつて矢張り其の技術の専門家があり、それは女性に限られてゐる。彼女等は一定の謝禮を受けることによつて施術を行ふのである。その用具としては、鐵線の針數本又は數十本を[illegible]子の如くに突き刺せるものと木槌であつて、なほ顔に染色料として松煙を小鍋に貯へたるものとを有つてゐる。施して額のもの及び男の顎のそれは割合に簡單であるが、女の頬の入墨は可成りに大袈裟である。

先づ頬に刺墨をせんとする女は施術の前夜は其の施術者と同床に寢るのを常とする。そして翌朝未明に屋外の適當の場所に小舍を作り、其の周りに蕃布を以て囲をし、その中には蕃布を地面に敷き、其の上に女を横にさせ、技術者は針を突き刺せる方の道具を頬に當て、其の上を木槌を以て輕く幾度も叩き、煤をとつてそこに塗り込み、それを幾度か繰返して全體に及ぼすのであるが、其の際女の顔は血にまみれ、彼女は苦痛に堪へず、腕を動かして施術の出來ないものがある。それで前以て腕を縛つて置くこともある。そしてこの施術の間は女の母親は其の傍にあつて斷えず血を洗つてやり、終はると彼女を蕃布に包んで脊負つて自家に連れ歸り、機織に用ゆる胴丸を床の上に置き、それに倚りかけて坐はらして置くのである。施術は未明に始つて大概午後の二三時頃までかゝるものである。

かうされて後は彼女は斷えず手に鳥の羽毛を有つて、それに水を浸しては其の跡を拭き、發熱を防ぎ、又刺墨の美しく色濃く現はれるやうにするのである。又、其の間の食事としては粟、甘藷等の硬いものを避けて粟粥の如き軟いものをとり、夜になつて寢る時はその頭を籠の中に入れて寢る。かうして施術後一週間位たつて漸く外出出來るや

うになるのであるが、その面部を蕃布を以て包み、人に見らるゝを避けてゐる。だが最早三四日にしてそれを去る。而してこの間は彼女及び其の家の者達は一切赤色の入つた着物を用ひず、又他人もそれをつけて其の家に入ることをば遠慮する。

四

次に男の顋の入墨のことであるが、それは昔は自ら敵蕃を馘首することによつて始めてゆるされたのであるが、この頃では自分でそれをしなくとも其の出草の團體に加入してゐるか、又は馘首して持運ばれたる首を借りて脊負ふことによつてもそれをゆるされるやうになつてゐたのである。然し男の顋の入墨が馘首と結びついてはなれなかつたことには變りはない。私はこゝで馘首のことを記さう。

それについては又次の如き傳説を彼等は有つてゐる。

ピンスブッカンで石の間から生れた二人が夫婦となつて其の子孫は繁榮したが、然し彼等は一つ土地に集つて住んでゐた。だが、年經るに從つて人數は殖え、土地は狹くなつて來たので、彼等は別れて住むことの必要を感じて來た。そこで相談の結果、半分は平地に降つてゆき、半分はそのまゝ山地に留まることになつた。然し人數が餘りに多かつたので、其の數を検することの煩を省き、先づ平地にゆくものと山地にとゞまるものとに分ち、其の聲の大きさによつて人數を比較し、多寡を定めようといふことに衆議が纏つた。そこで平地に降るものと、山地にとゞまるものとは二つに別れて、溪を隔てゝ双方が喊聲をあげることになつたのであるが、平地に行くもの達の首領は非常に老獪な人物であつたので奸策を思ひつき、先づ其の仲間の半分を山蔭に隱し置き、そして後彼等は聲をあげたので、其の聲量は遙に山地にとゞまる者達の聲より小さかつた。そこで山地の方では又更に自分達の仲間を割いて平地に行くものの群に加らしめた。斯して再び喊聲をあげた時には平地にゆくものの聲は山地のものの聲を壓して、全山に響き、その爲めに草木も搖れるばかりであつた。

それを見た山地群の首領達は始めてその欺かれたことを知つて大に怒り、平地群の首領に其の不誠意を詰つたところが、彼は冷然として「今後若し山地群の間に紛爭が出來て事の正邪をオットフ（オットフとは祖先の靈であつて彼の神と稱するものである）の審判に委ねんとして出草の要ある時は、來たつて我等の首をはねよ、決して懸念するな」と答へて大衆を率ゐて平地に下り去つた。

これより山地の蕃人は平地の人間の不信を憎み、彼等を見ればそれを襲つて首をはね、其の復讐をなすのであつて、それは又彼等にとつては祖先の遺訓に從ふのであると信じてゐる。然し又オットフは不正不

蕃を犯せるものに對しては決して首を與へぬと信じてゐるので、事件の黒白を爭はんとする時は、彼等は出でゝ先づ首を得んとするのである。倘此平地に赴ける者が今の臺灣人であり若しくは他蕃であるとなし、山地にとどまれる者が、即ち自分達であると稱してゐるのである。

馘首は敵蕃との紛爭によつて戰をなす場合には必ずその殺せるものの首を馘るのであるが、彼等には戰によらず、出草と稱して他蕃を途上に要撃して其の首を馘ることもあるのである。それは第一に復讐の爲めであり、次ぎに事の正邪善悪をたゞさん爲めであり、又自己の勇氣を示さん爲めである。然しそれはすべて首が有つ呪術宗教的な力を信ずるに出でた頭顱崇拜であることは明かである。

私は彼等の首祭りについて書いて置かう。

出草團が首を馘ねて自分の蕃社近くに達すると、彼等は喊聲をあげて自分達の凱旋を報ずるのであるが、其の時蕃社中のものは皆誰も彼も出迎へに出てゆくのである。そして彼等が双方より出會はすと、首を取つて來た者は出迎への者達に自分の唾を彼等の口にぬりつけてやるのである。若し此の時に[illegible]つて貰はなければ自分達が出草に出た時失敗するか又は自分の首を取られるといはれてゐる。そして彼等は社中のものに圍まれ／＼社に歸るのであるが、其處で取つた首の頭髮を摑んで社中の者の頭の周りを躍り廻すのである。然し女子と、曾つて一度も病氣をしたことのないものとにはしたいのであるが、病人はこれをして貰ふと病氣が輕くなると信じられてゐる。

斯くして首は最初は馘首した當人の家の中に安置され、豚や雞を殺して其の血を頭上より流し、顏一面に血を塗りつけ、口の中には酒、肉、其他の御馳走を滿喫させてやるのである。そして其の首に向つて

『お前は今度此處へ來た。今からして豚や雞や澤山の御馳走をしてやり、酒ものませてあげる。それ故お前の親兄弟は勿論のこと、社中のものを皆連れて來い』

と呪言を唱ひ、そして社中のものは集つて酒宴を催すのである。

そして其の翌日は首棚を社の中央に作り、新しき首を中央にして其の兩側に古い首を列べ、又前日同樣に食物を口の中に入れ、興應し、一人の年寄りがたつて『お前達の親兄弟及び社中のものを皆連れて來い』といふ意味の歌を唄ひ出して、すべてはそれに和して合唱しながら踊り、喊聲をあげるのである。

其後も引續き一二月の間は食物が與へられ、其の場所に据置かれるのであるが、其後三回首取りの祭りが行はれる迄で、それから後はその棚から降らして籠の中に入れ、首を馘ねたものの穀倉の扉に吊して置き、首祭りのある度毎に新しき首と列べて飾られるのである。

これらは彼等の首祭りに關する大要であるが、詳細はこれを彼等の習

暴性とのみは見ないのである。そのことに就いては他に述べたからよすことにする。

五

次に彼等の信仰についてであるが、彼等は人間にはオットフが宿つてゐると信じてゐる。そしてそのオットフなるものは人間が死ぬと、その肉體をはなれるものであると考へてゐる。その肉體をはなれたオットフが彼等の神に相當するものなのである。彼等には神の存在はオットフ以外にはないのである。そしてそのオットフには善惡二種の種類がある。

死によつて人間の肉體をはなれたオットフはアトハンに赴くのであるが、アトハンとはいはゞ彼等の淨土である。それはシロン（海又は池の意）の彼方にあつて、其處には橋がかゝつてゐる。虹はハマゴオットフといはれてゐるが、それがシロンに架せられたる橋なのである。ハマゴは橋である。オットフは其の虹の橋を渡つてアトハンに赴くのであるが、男なれば生前馘首をしたことのないもの、女なれば機織をよくしなかつたもののオットフは其の橋を渡つてアトハンに入ることが出來ない。さうしたオットフは途中から引返して來て、人界にさ迷つてゐる。それが卽ち惡いオットフであつて、無事にアトハンに入ることの出來たオットフは善きオットフなのである。

善きオットフは時々アトハンからやつて來て、其の遺族や族衆に幸福を授けるが、惡るいオットフは自分の死んだ家や自分の部落の地域內にとゞまつてゐて、或る時は人家を襲ひ、又或る時は野原や山中に彷徨し、往來に立ちふさがつて人を驚かし、又禍を加へる。人が若しそれを見たり、又はそれに出會つたりすれば、其の人は必ず病氣になるといはれてゐる。

アトハンにゆくことの出來ないオットフは馘首したことのないもの、機織をよくしなかつたもののオットフばかりでなく、生前邪念を抱いて惡業のあつたもののオットフ、自殺せるもののオットフ――蕃人には自殺は割合に多く、其の原因は多くは厭世に出づるといはれてゐる、そして自殺は殆んど縊死である――變死せるもののオットフ――普通の横死をなせる場合は勿論變死であるが、其の他病氣にて死んだ場合でも若し看護人が其の傍にゐない間に息がたえたやうな死方をしたものもそれを變死と見做し、又看護人がゐても病人の息をひきとることを知らずにゐた時には矢張り變死と見做されるのである。それ故彼等は病人が危篤になると必ず手の脈を抑へてゐてその絶えるのを見守つてゐるのである。彼等は脈のことをも亦オットフといつてゐる――はアトハンに赴くことは出來ずに、惡いオットフとしてとゞまる

のである。

次ぎにオットフについての彼等の信仰を記るすと

(1) オットフの姿は埋葬せられた時の姿をしてゐる。

(2) 人間の運命はすべてオットフの支配するところである。

(3) 夢はオットフの來り現はれるのであつてそれによつて運命を告知する。

(4) 善きオットフは人間を訓戒するやうな夢を見せるが、人を苦しめることはしない。それは必ず生命を守り、決して人を殺すことをしない。然し善きオットフは馘首しないもの、機織をよくしないものの庇護はしない。人間の善惡によつて禍福を分ち與へるのである。

(5) 惡るいオットフは人間に毒藥をのませたり、人間を殺したりするやうな夢を見せる。又夜半に來て咽喉をしめて息苦しくさせたりする。そしてそれは人間に怒りを抱く。其の怒りにふれると人間は死ぬか、怪我をする。

(6) オットフは不滅である。

(7) 風のないのに木の葉が動くのはオットフの仕業である。晝でも夜でも深い森や林の中にゆくと、時折大聲の話聲がすることがある。それはオットフが集つて話してゐるのである。オットフは人間に呼びかけはするが、人間の問ひには答へない。

(8) オットフは其の遺訓である傳統の慣習を破ることを憎む。殊に男女の私通姦通を怒る。オットフはそれに必ず懲罰を與へる。

(9) オットフを見ると病氣になつて死ぬ。夜半に人の影を見るのは、それはオットフを見るのである。然し常にオットフに供物をするものは恐れることを要しない。若し道の途中にてオットフに出會つた時には急ぎ自家に引返して豚を殺し、それを供へてスマッポ(祓)をする。夜みだりに歩るくとオットフに出會ふ。然し篝を持つて歩るけばよい。夜中に草叢や森の中からオットフが嚇かすことがあるが、其時には石を投げて追ひやるがよい。

(10) 夜間に火が見えて間もなく消えることがある。それはオットフの火である。それを見れば病氣になる。

(11) つむじ風の起るのはオットフの仕業である。それに會うと病氣になる。

(12) 死骸の傍には必ずオットフがゐる。それ故それに近寄ることを忌み恐れる。殊に變死者の場合には非常に恐れて、彼等はよう近寄ることをしない。そして其の變死せる場所をも恐れて決して近寄らず、無論通り抜けたり、耕作したりすることはない。

(13) 虹を指差すことを忌む。若しもそれをすれば指が曲るか、手が落ちるとされてゐる。

(14) 家財又は道具等にも惡いオットフは憑いてゐることがある。若しさうしたものを他人に賣つたり、與れたりすると、それは突返へされる。若しもその爲めに買つたり、貰つたりしたものが禍をうければ賠償を支拂はせられる。

六

かうした信仰を有つてゐる彼等は又次のやうな禁忌を有つてゐる。それを彼等はプサネックと稱してゐるが、然しプサネックは或る行爲を指してプサネックであるといふばかりでなく、行爲の對象となる場合もプサネックでありうるのである。

死は勿論プサネックであるが、人の死んだ當時は他のガガァのものが其の死んだ人の家に入ることを忌む（ガガァとは本來の語義は掟といふことであるが、其の掟を共同に維持遵奉してゐる集團をも亦ガガァといふのである。そして此の場合のガガァは勿論後者の意味である）

又ガガァの中に死人のある場合は同じガガァにては其の月の間は祭事を行はない。又出草、出獵することをせず、又計畫中であつたらそれを中止する。そして其の一日は穀倉に手を觸れることをしない。

變死體にふれることはプサネックであつてそれをすれば自分も何時かは同樣の非命を遂げて倒れると信じてゐる。すべて變死の場合は死骸を其の儘に放棄するのであるが、先きに記したやうに病死でありながら看護の手ぬかりから屋内にて變死するもののあつた時には彼等はその死骸を屋内に埋める――病死の場合は同樣に屋内の其の病人の寢床の下を掘つて埋めるのである――のであるが、彼等は着物を屋外にて脫ぎ去つて屋内に入り、それを葬り、其の家及び家財道具はすべて其の儘に放棄するのである。然し其の家を破壞することはしない。それは其の死せる人間のオットフの怒るところとなるのである。又然し普通の病死の場合は其の家を去らずに、其の家族はその儘生活をつゞけるのである。そして死骸を埋めた所、死者の遺物を棄てた處は決して掘り返したり、汚したりすることは出來ない。若しそれを敢てするものがあれば、死者の遺族子孫、又は同じガガァから贖罪させられる。そして死者の遺産は若し彼がその處分を遺言せずに死んだ場合は其の物の何たるを問はず、それは永久に死者に屬するのであつて誰もが手を著け又は自分のものにすることは出來ない。霧社蕃では其の場合の品物をドーノックといひ、所有者が相續・分配・讓渡等の處分を遺言せずに死んだ土地をプナデシと稱し、永久の廢地となるのである。

次に病氣の場合に關しては、病人が全快する迄看護人は決して自分の髮を洗つてはならない。又病人のある家ではそれが全快するまでは

酒を造つてはならないし、呑んでもならない。そして酒氣を帶びたものも病人のある家には入つてはならない。他人は病人のある家では火を用ゐない。若し已むを得ず火を使ふ時には屋外に出てする。然し他人は初めから屋内には入らずに、用事あつて行けば屋外にて用を便ずるやうにする。

惡るい病氣の流行してゐる地方から來たもの、其の病氣を有つてゐるもの、及び其等の家族とは決して爐の火及び一切の火を共にしない。さうした人達に住居家財道具等にふれられることを忌む。

なほ死亡ばかりでなく、同じガガァの中に私通、姦通、離婚を爲したもののある時には其の月中は祭事を行はない。それから祭事については、其の祭りの前夜までにそのガガァに屬するものはすべて自分のガガァの領域内に歸らなければならない。そして他のガガァのものはすべてガガァの領域外に去らなければならない。又入ることは出來ない。祭事、出草、出獵の間は其の家族及びガガァのものは爐の火をたやしてはならない、又其の火を他の家及びガガァのものに與へてはならない。そして其の間は生麻及び機織の道具にふれてはならず、又其の家に緣談を持込んではならない。

七

彼等は性的戒律に關して絕對に嚴格である。そして其の戒律に對する違犯が彼等の唯一の犯罪であるが如くにさへも思はれるのである。私通、姦通は勿論さうであるが、離婚も亦斯く考へられてゐる。其等は最も多くオットフを怒らすところの行爲なのである。それ故に出草に於て其の目的を達せず、出獵に於て全く獲物がなく、又其の一行の誰かが怪我をしたとか、橫死をとげたとかすることがあれば、彼等は、それは同じガガァの中に其等のプサネックを行つてゐるものがあるからだと解し、それをオットフの彼等への懲罰であると信じてゐるのである。又此等の犯行は旱魃の原因となるとも考へられてゐる。

斯くして彼等の男女の關係は嚴格に監視せられ、彼等自身も亦忠實にそれを嚴守してゐるが、間々不心得なるものがあつてそれを犯すものがないではない。それが姦通であつた場合には昔はそれらを殺したり、簀捲きにして溪川に流したりしたこともあるが、今は私通と同樣に豚をガガァに納めて其の罪をあがなうことによつて淨められるのである。離婚の時も亦同樣である。

彼等は異種族との通婚を忌むばかりでなく、血族近親の結婚を禁じてゐる。近親の血族にあつては其の關係にあるものをノッコン又はハルマダンと稱するのであるが、此の關係にあるものは絕對に結婚が出來ないばかりでなく、他人が誤つてこの關係にある男女の二人を「お

前達は夫婦か』とか、『夫婦のやうだ』とかいつただけでも、それは大したブサネックであつて彼等の怒りを買ひ、必ず罪のあがないを求められるのである。

又此の關係にある女性がその交互の關係にあるハルマダンの男性の前で不行儀なること、少しにても性及び性器に關係ある所作をなし、それを露はし、卑猥なる言語、動作をなせる場合は、彼女は男より毆打され、又罪をあがなはされるし、此の場合彼女と同様のことを應答したものも亦同罪に服さなければならないのである。そして又彼等ハルマダンの關係にある男女の前にて他人が其の何れかの情事に關することを口にすることも禁じられてゐる。

男は自分のハルマダンの關係にある女性の夫なる男性と、又自分の妻のハルマダンの關係にある男性とはヤナイ又はアナイの關係に立つのであるが、夫である男性は自分の妻のハルマダンであるヤナイの前にては情事を口にし、又卑猥なる言語動作をなすことが出來ず、其等の男性の同宿する屋内に於ては自分の妻と同衾することも避けねばならないのである。

八

次に私は彼等の食物のことに移る。

彼等は自から耕すことによつて其の主要なる食物を得てゐるのである。現在では水田を耕すことを奬勵してゐるので、彼等のある地方のものはそれを學び、水稻を植ゑて米を主食物としてゐる處がないではないが、それは極めて限られた一部であつて、大部分はまだ粟を栽培して粟を最も大事な食料としてゐるのである。

彼等の住地は大部分山地であるので仲々に水田を作るやうな平地が得られないばかりか、又そんな平地があつたとしても千メートルも高いところでは寒冽の暑さでも光線と濕度とが足らず、水稻の收穫は出來ないといはれてゐる。そして彼等の住んでゐるところは多く千メートル内外から千五百メートル内外の處なのであるから、水田を耕すことは先づ不可能としなければならない。從つて彼等は依然として粟をいまだに主食物としてゐるのである。然し間々陸稻を植えてゐるものは見受けられるが、それも主食物とするには足らないのである。

然し粟を主食物とし、それに缺乏することなく一年中の需要をみたすことの出來る地方は幸福なところであつて、粟すらも充分に栽培することが出來ない地方が又少なくないのである。さうした地方に於ては里芋や甘藷を栽培することによつて、それらを毎日の食物としてゐるのである。然し里芋や甘藷ばかり喰べてゐたのでは胸がやけてかなはないと彼等はいつてゐる。さうした地方のものは何かの手工品や土

産品を金に換ゆるか、時偶雇はれる勞役によつて現金を得るかして米を買つて食つてゐる。

彼等の調理法は鍋の中に水と共に入れて、爐にかけて火をたき、煮え立つと共にかきまはして粥として食するのを普通とする。又粟は祭りや婚禮の時の酒として醸し、必要缺くべからざるものになつてゐる。又餅をつくることもする。

酒を醸すには先づ麹を粟飯に混ぜて少量の水を入れ、これを瓶の中に貯へて爐傍に置き火氣を與へてその醗酵するのをまつのである。そして數日の後再びこれに粟飯を加へるのであるが、それは一度だけではなく幾度も繰返して新しく粟飯を加へるのである。この粟飯を後から入れる度數が多いほど酒はうまくなるといはれる。斯くすること幾日かで酒が出來るのである。

醗母にする麹は今では他から買つて使つてゐるが、然し前に造つた酒の糟から自分でつくりもするし、又若しそれがないやうな時には、彼等の昔の方法であつた粟飯を口に入れて嚼み、唾液とよく混ぜてそれを吐き出し、箕に入れて爐の上の棚に載せて置き、火氣を與へて醗母を製することをする。

里芋、甘藷は粟の澤山とれるやうな處でも必ず栽培してゐる。そして主食物の代用食として使うばかりでなく、畑や山に稼ぎにゆく時、獵に出かける時、旅行する時等には辨當として必ず携へられて常に彼等の糧食となつてゐる。生でも喰べるが、多くは水でゆでて喰べてゐる。又甘藷は熱灰の中で蒸焼きにもする。

其の他茸が出來る。これは煮て食する。

豆類は割合に種類が多く、矢張り煮て食する。殊に落花生は彼等の好物であつてからごと煮たり燒いたりして食するが、たまには生でも食する。又大根、栗の類、蜀黍、甘蔗、山芋等を食用に供してゐる。然し是等は副食物の類であつてあれば喰べるが、其の副食物なるものは必ずしも何時もあるとは限らず、唯粟や甘藷だけを食してゐることが多いのである。

動物では蜂蜜をとることを知つてゐて、それを食用し、又餅や酒の中に入れても使つてゐる。なほ彼等は非常に狩獵を好み、暇さへあれば獵に出て、鐵砲若しくはわなによつて獸をとるのであるが、又非常に上手である。殊に鐵砲をうつことは巧みで、彼等がねらひを定めてうつたら殆んど百發百中である。そして彼等の最も好んで撃つところのものは鹿であり、又山豚である。殊に鹿は彼等の祭りの時の御馳走に缺くべからざるので、最も珍重されるのであるが、それは煮て食するばかりでなく、燒いても食し、又燻製にしたり、酒のしぼり粕と鹽とで水に漬けて置き、食しもするが、此の最後のものは祭りの時の肴

も大事なものなのである。

鹽は唯一の彼等の大事な味付けで、無くてならぬものであるが、彼等の間にはそれが出來ず、他から仰いでゐたので仲々に手に入らず、昔は非常に珍重がられたものである。然し現在では配給があるので割合に樂に使かうことが出來るやうになつて彼等はよろこんでゐる。又砂糖は用ゐはするが、それはまだ非常なる御馳走の部類であつてまだ常用に用ゐられる程にはなつてゐない。

酒も亦非常に好むところであつて、彼等は自製の他に今では酒を買つてのんでゐる。煙草も亦彼等の嗜好品であるが、土地の故で澤山にはとれない。野生のものもあるが、庭先きなどに數本を植えて置くのがよく見られる。そして其の大きくなつた葉を取つて乾燥させ、其儘保存して置いて煙草をのむときに、いちいちそれを手の掌でもんで蕃人パイプにつめてのむのである。この種族では葉卷きや紙卷きにしてのむことはまだ知られてゐない。又こゝに注意すべきは、臺灣の他の多くの種族が檳榔樹の實を嚙むのに、この種族にその風習のないことである。

なほ調味料として彼等は唐辛し、生薑、山胡椒等を用ゆるが、先きの二つは栽培してゐる。

次に飲料水であるが、彼等は井戸を掘ることを知らない。そして湧水や谷川の水を用ゐるのであるが、それも仲々適當な場處に求めることが出來ないので、多くは遠くから竹や蛇木等にて樋を造つて引水をしてゐる。又それを汲み取り、運ぶには今ではバケツを用ひてゐるところもあるが、瓢簞又は竹筒を用ひ、又貯藏するにはかめの中に入れ又は竹筒に栓をして壁側に立てかけて置くのが見られる。

九

食物に次いで彼等の保健狀態を考へてみるに決して良好といふことは出來ない。殊に小供の死亡數は非常に多く、其の原因は榮養不良と感冒である。然しこの幼兒時代を無事にすごしたものは割りに强健であつて青年期、成年期の死亡は病氣によるものは餘りない。然し過勞と榮養不足との爲めに老衰期に入ること早く、五十歲以上に達するものは其の數に乏しい。

彼等は粗食の上に着物とては寒中にても四五千尺の山上にあつて一數枚の蕃衣をまとうにすぎないのであるから、感冒におかさるることが多いやうである。一寸念のためかき添へて置くが、彼等は履物といふものなく、年中裸足であることである。なほ綿の入つたものを用ゆることを知らない。

病氣として彼等の最も恐れるものはマラリヤであつて、低地及び低

地附近の淡畔には殊に猖獗であつて其の爲めに全滅に瀕した蕃社も少なくないのである。なほ甲狀腺腫症が可成りに見受けられもする。なほ現在にては最早結核が彼等の間に入つたことは彼等の種族將來の爲めに甚だ危險なることである。

かうした病氣に對する固有の治療法といふものは全く幼稚であつて見るべきものがない。殊に藥物に對する知識は皆無といつてよく、服藥によつて治療するが如きは僅に二三の野生の草を消化劑として用ふるにすぎない。又外用藥としても野生の草の汁をしぼつて、これを以て患部を摩擦し、若しくは溫めるにすぎない。そして其の治療の本質はハマゴツプと稱する厭勝によるのである。又は地方によつてはそれをスマツポともいつてゐる。然し領臺後の今日では彼等の間に醫術による治療を奬勵してゐるので、彼等はそれに信賴し、病氣になれば必ず治療の設備のある警察官駐在所に來つて藥を求め、服藥又は外用藥を塗佈することをよろこんでゐるが、然し全然には厭勝することをすてず、矢張りそれを併せ行つてゐる。

厭勝の方法に就いては餘り[redacted]なるからよすことにする。

一〇

[illegible]は家[illegible]術として[illegible]の事[illegible]の[illegible]來[illegible]これによつて

見ると、如何にも彼等の文化の價値は低い。又彼等の信仰の幼稚であり、知識の狹いことも否定することは出來ない。然し人間の價値は決して文化的價値によつてのみ定まるものではない。文化價値も一つの價値ではある。然しそれは價値の全體ではない。果して人間はその文化價値によつてのみ各々の生活を營むことが出來るか、殊に集團の生活を營むことが出來るであらうか。寧ろ文化價値のみが餘りに高く評價され、それに依據することの害毒が今日の社會生活の不愉快の原因ではないだらうか。全く彼等には文化は求むべくもない。然し彼等には訓練せられたる集團的意識があり、社會性がある。彼等の生活の規準は常に一個ではない。それは全體である。彼等は一人ではないのである。常に彼等はガガアなのである。一人の行爲の結果はよきにあれ、あしきにあれ、それが共同の生活に直接影響を有つとの觀念に生きてゐるのである。

私は彼等との接觸に於て、如何に彼等が然諾を輕々にせず、然かも受合つた然諾に對して如何に忠實であるか。又彼等が嘘を吐くことに如何に臆病であるかを知らされてゐる。私は寧ろ彼等の純情にして無垢の性情の前に頭を下げさせられてゐる。「蕃人位可愛いゝものはない。あんな純良素朴な人間を見たことはない」「あんなに辛抱強い我慢なる人間を知らない」といふやうな言葉は親しく蕃人に接した人達の

常に語るところである。

私は彼等の美しい純情に幾度泣かされたか知らない。私が正直であり、美しくある限り、彼等は常に私より以上に正直であり、美しくあつたのである。彼等の最も怒るところは欺瞞であり、不信である。彼等が純情であり、無垢であるだけ其の怒りは發しやすい、又烈しい。(三十九字削除)。彼等は決して吾々の忠實を裏切るものではない。其の原因が必ずしも吾々の不誠實や欺瞞でなかつたとしても、又吾吾が彼等の信仰に餘りにも無頓着であり、若しくはそれを故意に無視することの結果も同樣である。彼等はそれによつて生活の安心を得、又彼等が彼等の制度によつて生活の連帶を維持してゐるものをそれを無理解に破壞し、改廢するやうなことが、彼等をして怒らしめないとは又誰しも保證することは出來ないだらう。

私は今次の事件の眞相を見究め、其の成行を看守したいと思つてゐる。

(追記。私は割合に多い紙數をこゝに與へられたのであるが、充分に事實を盡し、意を致してゐない心殘りを感ずる。改めて何かに『蕃人生活の理解と統治』の一篇を發表するつもりである。更にそれを讀んでいたゞきたく願つて置く。校正を終つて)

スポーツの政治化と運動選手の行方

菊川忠雄

一

今日は何れの國にも國民的スポーツがある。我國でも最近に於ける野球熱の流行は、恐らく、從來の封建的日本の國技に替つて、新なる資本主義の國民的スポーツの生誕を物語るものであらう。就中、早慶野球戰の前景氣的記事が朝刊諸新聞の社會面に進出して來る日の午後は、まさに野球狂亂時代の一日である。早慶戰を放送するラヂオに群るファン大衆、そこには勞働者、職人、サラリーマン、店員、學生、紳士等々の凡ゆる階級層の人々がゐる。彼等は何れも、選手の一擧手一投足に關する放送に、彼等の凡ゆる感覺と想像の活動力を傾注して、その日の午後を過すのである。華やかなるものよ、その名は國民的スポーツである。そして、この選手達はまさに華やかなるものの中の華やかなるものである。

だが、こゝに人あつて、彼等ファン大衆の只中に於て、『スポーツは民衆の阿片だ。早慶何方が勝たうと民衆の生活は向上しないのだ』と叫んだとしたら何うなるだらう。早慶野球戰と民衆の生活問題！　スポーツと阿片！　これは、恐らく、ファン大衆を不快に導く以外には効果のない對語として終るに違ひない。不快を感ずるものはファン大衆許りではない。華やかなるものの中の華やかなるものであるべき運動選手達は、彼等の光榮の地位から顚落しなければならないことゝなる。

所が、かうした情景を我々に想像させるに充分な事件が、現實に展開されてゐる。過日（十月十八日）の早慶野球戰を前にして、例の入場券問題から突如として展開せられた早稻田大學盟休事件がこれである。この事件は、當初は、單なる早大學生の入場券不買同盟の運動として觀測せられ、都下諸新聞の如きも、恰も、早慶野球戰のプロローグかジャズバンドであるかの如く報導した。早慶兩大學が入場券を獨占した結果として『締め出しを食つたファン大衆の不平』――十月十七日東京朝日新聞朝刊の四段拔き見出し――と早大學生の入場券不買同盟は、何といふ意味なしに、ニュース・バリュー一〇〇パーセントであつた。然るに、學生中の各種運動選手乃至は運動部員から成る體育會がこの不買同盟に對して別個の行動をとつたことを契機として、當初の入場不買同盟の運動は、一轉して『體育會不承認』の方向をとり、再轉して

『全早稻田聯合學生委員會の公認』の方向をとり、早大學生は十八、十九兩日の早慶野球戰には無關心に、ひたすら學生自治獲得に突進した。かくて、この運動は十月二十二日以來同盟休校化し、その規模と統制に於て、未曾有の學生ストライキとして進行しつゝある。入場券問題から端を發して半ケ月、また盟休に入つてから十日に垂んとする十月三十一日に至り、高田總長に提出すべき學生の最後的要求條項なるものは『全早稻田聯合學生委員會公認』『警察權の學內侵入絕對反對』『試驗及びレポート提出の無期延期』『今回の問題による學生の處分反對』『選手制度及び部員制度本位の全體育會の否認とスポーツの自主化』『理事會の正式陳謝』の六項目と決定され、この運動自體がもつ學生自治獲得運動としての本質を明瞭にしたのである。

早慶野球戰の入場券分配問題から體育會なる運動選手制度の排擊、そして更に學生自治機關として全早稻田聯合學生委員會の獲得へ。折角の早慶野球ファン大衆の期待を裏切り、かくも短時日の間に於ける急テンポの轉化は、果して何に原因するものであらうか。スポーツと普選のジャーナリズムを牽ずる東京朝日新聞は十月二十二日の社說中に於て、早大事件の急速なる轉化の過程に對して『外部から見ただけでは單に切符位の問題が何故にかくも險惡な結果を招來したか、ほとんど諒解に苦しまざるを得ぬ所である』と述べてゐるが、當初の入場券不買同盟を單に早慶野球戰のプロローグとして觀察し來つた者にとつてはまさに意外の發展であつたに違ひない。

二

今回の早大盟休事件の經過を分析することは、本稿の目的ではないが、こゝに序に一應觸れなければならないのは、今回の事件の急テンポの展開に應じて展開せられた學校當局の對策である。

學校當局は當初この運動を單なる入場券問題と限局して觀測したらしく、十月十六日の東京朝日新聞は、入場券の一部分行先不明の問題に關し、難波早大幹事の談として『いろいろ學生の知らない苦心もある云々』と傳へその分配先が學校經營乃至は卒業生の就職運動の關係者方面であることを暗示してゐる。然るに、學生の運動が、全早稻田聯合學生委員會の公認問題を中心とする學生自治運動に轉化せんとする傾向を見るや（十月十七日）『危險思想系統に屬する一部の徒は內外呼應して盛んに流言飛語を放ちて學生をせん動し不法にも校庭に集合し云々』の聲明書を發表して、この運動の行手を阻止せんとした。これに對して、聯合學生委員會は『當局の聲明書にあるが如き一部左傾團體の策動に基けるものにあらず云々』の聲明をなして學校側に對抗してゐる。勿論、今日××××日本の各大學、專門學校、高等學校等に於ては、××

×××××××××××××××××××××××××××、そこに所謂『危險思想系統に屬する一部の徒』が潛在し、また絶えず再生産されてゐることは否定出來ない。早稻田に於ても、例外なく、かゝる分子は潛在するに違ひない。また彼等は今回の問題の發端を捉へて、これに點火し、學校資本主義化の正體を暴露し、更に全學生大衆の進出を契機として、學生自治權の擴大强化を計り、×××××××××××××するために精力的に戰ふことも××出來ない。

しかし、今假りに、所謂『危險思想系統に屬する一部の徒』の策應とせん動が行はれたことを認めても、今回の問題をかくも急テンポに轉化せしめる原動力をなしたものは、全早稻田學生大衆の中に生長しつゝあつた、學校資本主義化反對及び學生自治權獲得の鬪爭であり、之が偶々入場券問題から體育會との對立となり更に再轉して學生自治運動となつたもので、問題の進展は極めて必然的であつたといはねばならない。その證據には、全早稻田聯合學生委員會が左傾團體と無關係なることを强調した上記の聲明書は、表裏共に從來の學生社會運動團體とは別個にこの運動が進められたことを物語るものであらうが、それにも拘はらずこの運動の到達せる結果に於ては、その要求項目が從來の學生社會運動のスローガンと一致して居ることを擧げることが出來るのである。從つて、今回の問題は、全早稻田聯合學生委員會指導部の見透しが那邊に存するかといふ問題とは無關係に、必然的に進むべき軌道を進み來つたものと見られなければならない。

兎に角、今日早稻田の盟休事件は、一つの軌道の上を走りつゝある。早慶野球戰のファン大衆は、野球戰のジャズバンドの中から、突如として發せられた『選手制度を止めろ!』『學生に自治權を與へよ!』といふ叫びを聞いたのである。この叫びは次の瞬間には、スポーツと阿片、早慶戰と民衆の生活に關する叫び聲に轉化しなければならないのである。

三

しかし、こゝに注意を要するのは、今回の早大盟休事件がたどり來つた轉化の過程が、既に屢々高等學校其他に於て學生自治權獲得運動の一過程として戰はれ來つた點である。

××××××××、學生思想善導の一手段としてスポーツを意識的に利用し始めたのは、昭和三年の所謂三・一五事件以後である。同年五月水野文相の下に招集せられたる帝大學生監會議は、三・一五事件連坐學生の對策並に學生思想取締を協議し、その有力なる手段の一つとして、『學生の體育スポーツに特に力を入れ、學生の熱を運動方面に向けさして、惡思想の注入を防止することを申合せた。この會議以前に於ても、支配階級及び學校當局が、運動部員を利用して、學生社會科學運動に對

立せしめた事實は數多あつた。例へば、大正十二年五月の早大軍事研究團事件に於ける一部體育部員の反動化の如き、また、昭和三年三月東京帝大學友會——學生自治を目標とする校內統一機關で、當時帝大社會科學研究會と新人會によつて支配せられてゐた——を解散に導く前提として、學友會加盟の運動部各部が「思想的暗鬪の煩に堪へず云々」を口實として脫退し、一旦學友會を解散せしめた後、同年十一月には運動部各部のみが學校當局の公認を得たる機關を再組織したるが如きは、その顯著なるものであらう。しかし、それらの經驗を綜合して、積極的にスポーツによる學生の反動化を企圖したのは前記の學生監會議に出發するものである。

然るに、この企圖は、その發表と相前後して、各高等學校學生の反抗に遭つた。各高校に於いては、既に三・一五事件以前より、社會科學研究の自由は個人的にも禁止せられ、この反面には、スポーツ奬勵の一手段として對校試合を强制せられてゐた。若人の感激と愛校の犧牲の名の下に黙々として競技に耽る選手は、かくて、意識的又は無意識的に反動的役割を演じつゝあつたのである。學生の大衆的批判は必然的にこの反動的選手制度に集中せられた。

昭和三年五月、一高の向陵刷新會は、對校競技絕對反對、應援費强制徵收絕對反對等のスローガンの下に全校的運動を開始し、一高對三高野球戰も廢止を見んとするまでに至つた。同年六月には、四高に於て、對八高對校試合の應援團廢止が決議され、學校當局の壓迫に抗して一週間のストライキを敢行して、その要求を貫徹した。同月相手校の八高は對校戰廢止、選手制撤廢を決議した。また、水戶高校對二高の對校試合も廢止決議に會うた。かくの如くして、學生監會議の申合せによるスポーツ阿片化政策は、高等學校學生の全國的反對に遭遇したのである。

それ以來、各高等學校並に專門學校に於ては、學生自治運動の一過程として、スポーツ阿片化に反對する鬪爭は、機會ある每に捲き起されてゐる。昭和四年度に於ても、五月に、三高、姬路高校の應援團廢止決議があり、六月に新潟高校の選手制度撤廢、校友會費値下げの實施せられるあり、十月には、弘前高校に同樣の運動起り、十二月には靜岡高校に於て、三日間の盟休を通じて選手制度撤廢の實現を見て居る。

對校競技の廢止、應援團の廢止、選手制度撤廢、或は校友會費値下げ等の問題は、たゞ個々の問題に限局して觀れば、學生生活に於ける枝葉の問題に過ぎない。しかし、之を支配階級の思想善導政策の一手段として觀るとき、そこにはじめて、ストライキに訴へても戰はれるべき所以を見出すのである。

四

それでは、スポーツは今日の學校生活の内部に於てのみ、思想善導の反動的役割を果してゐるものであらうか。

こゝで問題をしばらく我々の周圍に持ち出して見よう。そこでは勞働民衆が資本の直接的搾取と政治的支配の下に苦難の生活を戰つてゐる。この民衆の間に、或はラヂオにより、或は新聞により、そしてまた職場の休憩時間には資本家によつて、スポーツが宣傳される。新しい時代に目覺めようとする程の勞働民衆は、何れも爭うて、スポーツを談ずる資格を獲得するのである。かくして、彼等は職場に於てチームを組織し、工場には選手チームを設けて、社長杯、重役杯等の爭奪戰に夢中になるのである。かゝるスポーツの民衆化を通じて儲けものをするのは勿論ブルジョアヂーである。彼等は、第一には、このスポーツ熱によつて民衆から自己反省の機會と精力を分散させる。スポーツ心理は自己陶酔を特徴とするからである。第二には、スポーツは産業合理化による勞働强度化を可能ならしめる。産業合理化の一項としての勞働者餘暇利用の對策にはスポーツはまさに欽り役である。第三には、ブルジョアヂーはスポーツを通じて勞働民衆を組織し自己の政治的影響下に置くのである。スポーツ組織程多數の勞働民衆を動員し組織し得るものは少ない。

この故に今日ブルジョアヂーは、何れの國に於ても、國民的スポーツを設定して、凡ゆる階級層に亘り、スポーツ組織の普及を計つてゐる。從來我國では、學生の間にのみ限局せられてゐたスポーツを、今日特に、工場、鑛山等に普及しつゝあるのは、産業合理化政策の一手段として利用すると同時に、この合理化遂行の結果より來る勞働大衆の窮乏化とそれに伴ふ階級的自覺を欺瞞し去らんとする意圖から出發するものである。我々は、我國の大工場、鑛山等には既に相當完備した野球チーム、其他の競技團體の組織せられてゐるのを見るが、彼等は何れも、從業員を勞働組合運動から隔離するために利用せられてゐる。私は曾て、日立鑛山地帶に於ける勞働組合宣傳演說會が、會社の對抗競技と運動會によつて妨害せられた經驗をもつてゐる。今日東京府下の二三の工場に於ては、野球熱流行の氣運に乘じて、資本家より意識的に野球を奬勵して、組合熱を冷却せしめんとしつゝある。××製作所では野球試合の應援に出ない職工はブラックリストに載せられるのである。かゝる實例は枚擧にいとまがないのである。

我々がこゝに於て注意すべきは、かゝるスポーツの指導者は、各大學運動部によつて提供せられる點である。曾ての運動選手は所謂學業の上に精力を傾注し得ない關係、卒業後の就職運動では相當のハンディキャップを負はされたのであるが、今日に於ては、一般就

職難の増大と反比例してその就職率を高めて行くの觀さへある。これは恐らく、就職難の増大を現出する資本主義社會は、階級鬪爭の尖鋭化に備へる必要上、スポーツを通じてのブルジョアヂーの影響力の擴大を必要とするによるものであらう。少くともかゝる傾向のあることは否み難い。

五

それでは運動選手は何所へ行くものであらうか。

この問題の解答は、第一にはスポーツの階級性の見地からなされなければならない。

我々は運動選手の個人的純眞さに對して疑惑を挾む者でない。勿論、運動選手の不純性について噂を聞かんでもない。また現に見ないわけでもない。しかし、これら傳へられる不純の如きは、何も運動選手のサークルに限られたものではない。それにも拘らず今日の運動選手は、結局、學生生活に於ては、學校資本主義の一機構としてマネキン的役割を演ずると共に、ブルジョア・イデオロギーの一支柱としての反動化役割を受持たざるを得ない運命にある。また一般社會に於ては、彼は支配階級の補助的代辯者である。何となれば、『體育及びスポーツの組織は斷じて政治的中立の組織ではないし、またあり得もしない。それらは、ブルジョアジーにとつても、またプロレタリアートにとつても、各自の政治的影響を強化するための手段であり、階級鬪爭に於て一定の任務を遂行するための補助手段である』からだ。××××××第五回世界大會の綱領よりからだ。

次に解答の第二は、運動選手制度を現存資本主義社會制度の反映として批判することによつて。

今日の選手制度は、何れも殆ど例外なく、大多數者の負擔乃至は犧牲の上に成立を期し得るものである。之を部員制度の如きにして、その範圍を擴大するとしても、單に程度の差に止まり、その成立の基礎に變りはないのである。かゝる少數者に獨占されるスポーツの大衆化が數々叫ばれるにしても、之亦眞に社會的に普く大衆化されることは望み得ない。

今日の資本主義社會に於ては、選手は英雄であり、英雄は大衆の犧牲によつて生れるものである。この原則は、現存社會組織の反映としての選手制度をも規定する。從つて、かゝる選手制度下に於ける運動選手には、選手の個人的技術の發展を期待し得ても、大衆のスポーツを實質的に向上せしめることを期待し得ない。大衆は只彼等運動選手を觀賞する以上に出で得ないのである。この點に就いて、前掲の青年××××××綱領はいふ。

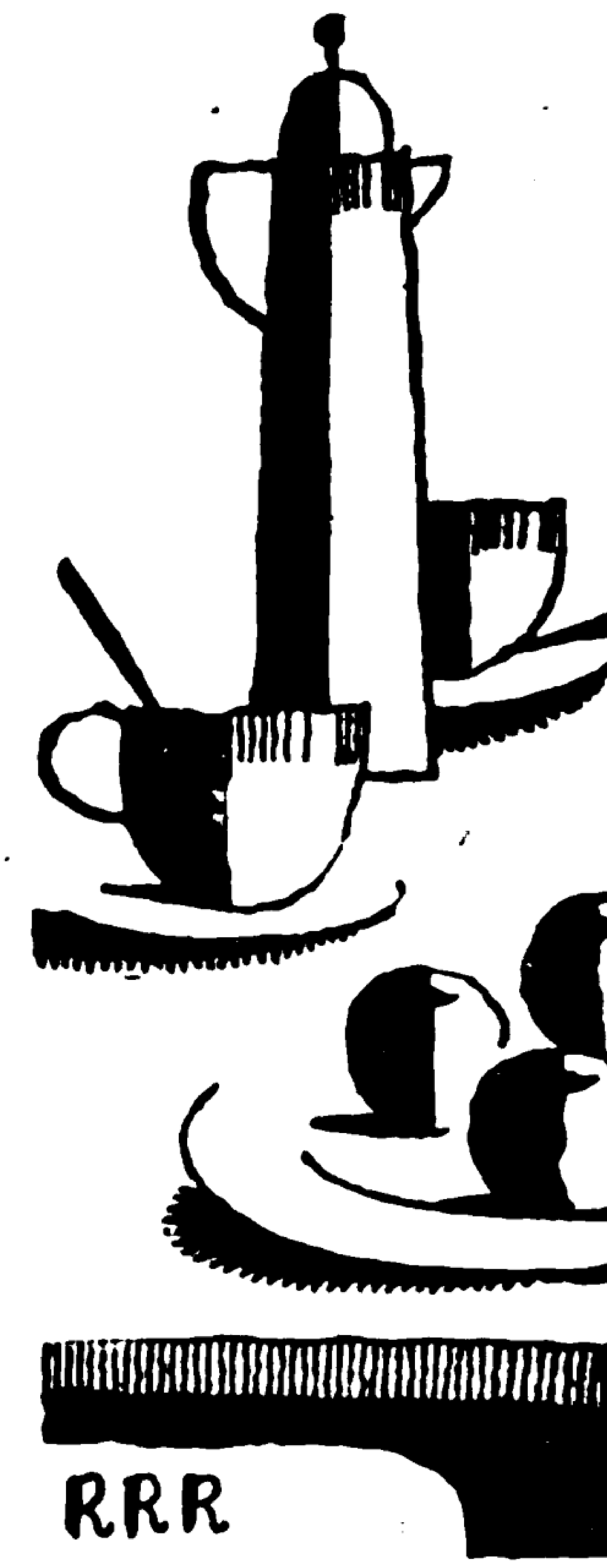
『資本主義下では、スポーツや體操は、ブルジョアジーにとつて、彼等の政治的影響を擴大する手段であり、××××××と營利的事業の幹部の養成機關である。勤勞青

年の廣汎な大衆は、資本主義下では眞に體育やスポーツをやる手段と可能性とを奪はれてゐる。プロレタリアートの××、青年勞働者の勞働時間を短縮し、彼の健康を保護し、向上し、その生産的活動を教育的見地から統制し始め、スポーツを團體精神を以て貫き、そしてそれにプロレタリヤ××の強力な手段を與へるところのプロレタリアートの××のみが初めて、このことを可能ならしめるのである。この一番よい證據は、サヴエート同盟に於ける體育の輝しき發展である。』

要するに、現在行はれる運動選手制度は、勞働民衆の生活から遊離したものであり、ブルジョア支配の一機構として完成せられる傾向を持つのである。この制度を中軸として、國民的スポーツが、支配體系を展開するのである。運動選手は、かゝるブルジョアジーのメカニズムの中に投ぜられて、その純眞と無性と獻身的熱情と凡ゆる青春的美をブルジョアジーの祭壇に捧げるのである。いけにへは純眞なる程を貴しとする。從つて、リーグ野球戰を興業物扱せんとする如き見解は、このいけにへの純眞なることを理由として一蹴せられた。しかし、いけにへの純眞なるが故にこそ、階級支配の社會に於ける興業價値は一〇〇パーセントに發揮せられ、純眞なるスポーツを通じて、ブルジョアジーの政治的影響を強化するのである。純眞なるスポーツこそは、まさに一〇〇パーセントの階級的興業物である。

濱口雄幸と伊東巳代治と犬養毅の取組む政治に對しては、スポーツ的感興以外の何物をも見出さないことを誇りとするのが、現代人の政治的常識となつて居る。かくして、日比谷の議會に對する國民的關心は、明治神宮外苑に移動しつゝある。ブルジョアジーは、この移動の傾向に即して、スポーツを通じて政治的影響を強化しやうとするのである。今日では、尚、スポーツの中に織込まれた政治的からくりを見逃してゐるのが現代人の政治的常識である。或は換言すれば、濱口、犬養、伊東等の支配階級の政治的選手の妙技をスポーツ化して味ふことを知る現代人は、早慶野球戰に於ける幾多の運動選手の妙技を政治化して味ふ訓練を缺いてゐるのだ。かゝる訓練は今後に殘された問題である。

だが、この訓練に身を以て當り得るものは、プロレタリヤ青年である。その組織はブルジョアジーの政治的影響から獨立した××スポーツ團の組織である。スポーツの政治化に反對して惹起されてゐる學生の運動は、かゝる××スポーツ團の組織下に統制せられ、ブルジョア、スポーツ××のために戰ふときに始めて一個の階級的見透しを與へられるのである。かゝる客觀的諸條件は我國にも、急速に生長しつゝあるものと見てよい。（一九三〇、一一、五）



大阪カフェの東京侵略

石濱金作

一

侵略といふのも大きいけれど、兎に角今年になつて大阪の大カフェが、續々として東京に相當な資本を以つて進出してきた事は事實である。曰く美人座、曰く日輪、曰く赤玉、それに矢張り大阪系のサロン春も、最近は又相當な客を入れて繁盛してゐる。これが不景氣であへいでゐる銀座に一時に現はれたのだから、相當センセイションを起こすのも當然である。

美人座が初め新橋際のエビスビールの倉庫の所に現はれたのは、確かまだ今年の夏前であつた。それで今の銀座一丁目の所に移つてからは、夏枯れと不景氣でどのカフェもバーも弱つてゐる最中、ゴンドラと並んで何時行つても客が充滿してゐるといふ盛況振りだつた。内部はテーブルが所狹きまでにゴタ／＼と並んで、またあまり綺麗でもないが、それで五十人餘りの女給が皆忙しく賑やかに客を持つてゐるのであつた。

日輪は、まだつい此間（十月二十一日）京橋々畔のビルディングの地下室に開店したばかりであるが、ビルディング全體に及ぶ花々しい電飾と、日輪、ニチリンと書いた大巾赤白の引幕とで賑々しくスタートを切つた。大阪から五十人の女給群をつれて來たといふ噂でもある。初日、二日目はまだ中の客より外で眺めてゐる人の方が多かつたが、二十五日過ぎはサラリマンの月給日の關係であらうが最早や相當な客があつた。まだ開店早々で店や女給の特色も目立たずどれだけの客がつくかそれは未定だが、これから年末のドサクサまぎれを迎へて相當な客を引くであらうから、あゝいふ大きい店の開店時期としてはいい時であつた。

赤玉はまだ現在（十月末日）店を開いて居ないけれど、元のクロネコの跡を買收して、資本金五十萬圓と稱し、矢張り年末のドサクサを目掛けて開店しようとしてゐる。募集女給三百人、月收二百圓と、景氣のいい前振れで改築工事を急いでゐる。これで赤玉が開店すると、銀

座一丁目附近は、美人座、日輪、赤玉と、大阪大カフェの支店が三つ鉢合せする光景になる。尾張町から京橋までの間は、同じ銀座でも今迄余り銀座マンの注意を引かなかつたが、これからこれら三つの大阪流大カフェのお蔭で特殊な銀座文化の空氣を作り出すかも知れない。

サロン春も今年の夏頃は、一時經營困難が傳へられたりしたが、近頃はまた仲々どうして相當な客が入つてゐる。矢張りこれから年末をひかへて、この所大阪カフェの全盛である。さう云つても差支へない。

これらのカフェは、皆相當な大資本を以つて、女給數も五十人以上を擁し、それらの女給がズラリと入口の所に並んで、誰彼の差別なく愛相よく客を迎へ、店内の賑つてゐる光景は壯大なものである。中に入ると店の構造も廣々と一望のうちに全體が見渡され、陰欝なバーや、前のタイガーなどのへんにブルジョア的な金權主義に比べて、たしかに大衆的で現代的で明るい。大阪流に入口の所で、誰々さーんと女給の番の名を呼ぶのも、客にとつてはかへつて氣易く、のんきで近づき易いのかも知れない。

これ等大阪カフェの東京進出は、今の所また銀座だけであるが、やがては新宿淺草ときつと模様によつては支店を擴いてゆくに違ひない。今この大阪流カフェの東京進出をいろ／＼の方面から考へてみると、相當理由づけられないこともないのである。

二

この大阪カフェの銀座進出について、對照的に考へられるのは、銀座のバーである。さしも流行を極めたあの銀行裏バーも、この不景氣で客の足が減つてきてゐる所へ、大資本を以つて大勢の女給を擁し、その上比較的のんきで明るく、云はゞ百貨店式の大カフェがかう三つも四つも現れては、確かに打撃に違ひない。

バーとはいつたいどういふ性質のものであるかと云へば、あれは決してこの資本主義尖鋭時代の先端を行つてゐるものではないのである。むしろ一時的な變態的なものと云つてよい。バーは云ひ代へれば、女給と客との自由會合所だ。六七人、八九人の女給が皆それ／＼自分の客を持つてゐて、女給と客との個人的な興味、或はいろ／＼の交渉が根本になつてゐて、酒はその餘滴として飲まれるといふ有様なのである。だから客は、酒も酒だがそれよりもむしろ女給との交渉の上に基點を置いてゐるのであつて、從つて女給とのさういふ個人的な交渉や興味を持たうとしない客は、決してもはやそのバーには來ないのである。個人としての女給が根本で、店はその餘滴として酒を賣つてゐるのである。だから常連客のついてゐる女給は、随分自由もきくし、我儘だし、その上收入もよくし、また風俗も

くのである。何にしても女給が主で、店はまるでそこに寄生してゐるやうなものだ。だからバーは、その色彩が戀愛的であり、それでなければ色情的であつて、從つてその空氣は個人主義的、秘密主義的で、照明の工合と云ひ、座席の工合と云ひ、皆ちやんとさういふ傾向に適合して作られてゐる。

　大カフェの女給が寄宿舍に居たり、それでなくても客との個人的な交渉については隨分やかましく嚴格であるのに反して、バーの女給は、むしろその方が主なのである。客との個人的な交渉が多い女給程、店は客が多いので、元々バーはその上に營業してゐるのだから、バーの女給は正に女給天下である。客とは毎日でも遊びにゆけるし、客に物も多く買つて貰ふ機會も多いし、それで店に出ればちやんと又チップはチップで貰へるのである。その上店からはやかましい壓制を受ける事はなく、かへつてさういふ女給は大事にされる位である。バーの女給は、だから客さへ來てくれれば、天下にこんなうまいゼイタクな職業はない位、ウマイ職業である。

　所が客の方から云へば、またこんな面倒な所はないのである。元々女給との個人的な興味或は交渉が主で行くのであるから、どうしても無駄な金を澤山使ふ。彼は戀愛、或はそれに類したものをし乍ら、一方また酒も飲まなければならぬのである。つまりバーの客は女給と店と兩方へ、異状に高價な金を拂はなければ、バーの客として面白い目は見られないのである。その上本統に面白い目を見るのは、元來が女給目當てであるから、結局一人か二人の客である。他の者は、無駄に女給と店へ高い金を捨てるやうなものだ。

　元來バーへ、只酒だけを飲みに行く客は絶無だと云つて差支へない。またあるにしても、そんな客は不愉快な目に會ふから、二度とそこへは足踏みしない事になる。だからバーは、徹底的に女給と客との個人的な交渉の上にだけ成立つてゐる。

　そこへ來ると大阪式大カフェは、確かに大衆的で氣易くのんきでパッとしてゐる。女給も客との個人的な交渉などより、店としてかひがひしく働いてゐるので、客の方から云つても常連でなくてもさう不愉快な目に會はない。バーのやうに、女給の個人的な天下でなく、店が女給をちやんと使用してゐる。美人座などでは、客との個人的な交渉を作らせないやうに、半月毎に女給を大阪と東京と交代させたりして、所謂馴染客とふりの客との區別を作らせないやうにしてゐる。

　女給の立場から云へば、大カフェはバーに比べて面白味が少い。自由もきかない。女給氣質より職業人氣質が勝つてくる。しかしそこが客の方から云へば氣易くのんきなのである。

　大カフェの場合では、資本ばかりでなく、女給と店の關係が、バー

なぞと違つて根本的に資本主義的である。バーの女給は被使用人といふより、むしろ店の王者のやうであるが、大カフェの女給は正に資本主義的被使用人である。

それは兎に角、客の方から云へば、のんきで明るく、パッとしてそれに體裁を作る必要もなく、澤山の女給を一望のうちに眺め乍ら割合大衆的な、非合理的でない、安く酒が飲めるので、バーに比べて遙かに一般人向きである。

またバーは三四人、或は四五人で客がゆくと、さういふ客は元來バーの基調である女給對客の個人的交渉にそぐはない客であるから、客も行つても互に面白くなく、女給の方でもまたそれはよい客ではないのである。大阪式大カフェはその點何よりも都合がいい。五六人で行つても、またたとへその勘定を割り勘で拂つてゐても、バーの場合程さら恥しくもなければ可笑しくもない。

バーは何にしても尖端的であるより、むしろ有閑的な存在だ。例へば酒を飲むにしても酒が主でなく、女給に興味を持つにしても、（削除）一種のなまぬるいもどかしい存在である。景氣のいい時ならいざ知らず、かう不景氣不景氣で人が皆恐慌的に金にピリ〳〵してゐる世の中では、バーはだん〳〵と客が減つてゆくであらう。

それからバーは、大抵一軒のバーに來る客が限定されてゐる。元々女給と客との興味でだけ成立つてゐるのだから、來る客も毎日殆ど一定し、ふりの客は來ても仲々その店の客になる迄のは少いし、そこへ來ると大阪式カフェは、客が誰でも行き易く、數が限定されるといふ理由はない。バーは常連が來なくなると一大事だが、大カフェはその心配よりは新しい客でもふりの客でもどん〳〵呼ぶ方が主である。

また客の年齢から云つても階級から云つても、バーは非常に範圍が限定されるが、大カフェはその心配がない。

以上は、大カフェと從來の銀座バーとの比較みたやうなものであるが、要するに根本はやはり社會の狀勢である。バーで毎日女給と戀をしたり遊んでゐたりする氣風が、だん〳〵と人々の間に出來なくなつてきたのである。さういふ面倒な事より廣い賑やかな明るい所で、パッと騒いでサッと引上げる方がのんきで便利なのである。バーは常連にならなければ面白くないが、大カフェはさうでなくとも充分樂しめる。さういふ世の中になつて來、なつて行くのである。

三

銀座にもタイガー、ライオンと、大カフェがないではなかつた。それがしかし大阪流カフェのやうに榮えないで、だん〳〵と昔日の面影がなくなつてきた。

それは大阪式のやうな、のんきな明るい大衆性がないからである。元來東京の人間は、大阪の人間に比べて大衆性の少ないものだが、タイガーにしてもライオンにしても、へんにブルジョア臭く金權的で物物しく、のんきで明るく氣易い氣風が少かつた。店の樣子もさうだし、女給の氣位もまたさうだつたのだ。なんとなく封建的な臭ひさへしてゐたものだ。それが新時代の大衆性に受け入れられないのは當然で、タイガーもタイガータイガーと威張つてゐるうちに、いつの間にか身賣りして了つた。

ゴンドラは或る意味ではやはり大阪式な所が多分にある。そして矢張り結局は資本の問題である。日輪にしても、赤玉にしても、美人座にしても、大資本の活躍の前には、群小バーは仲々競爭が不可能なのである。

百貨店へ、鮭の一切まで人は買ひに行きたがるのと同じく、狹いバーで女給の御氣嫌をとり乍ら法外に高い酒を飲まされるよりは賑やかた高聲蓄音機の下で、五十人以上の美々しい女給の動くのを眺めながら、のんきに明るく氣輕るに割合安い酒を飲み物の食へる方が、大衆的であるのは當然だ。大阪資本の東京進出！タイガーも本鄕バーが買收したといふから營業方針も一變するであらう。さうすると、タイガー、ゴンドラ、日輪、赤玉、美人座、サロン春と、此の所大阪資本と東京資本との攻め合ひだ。その間に挾つて、小資本のバーが倒れてゆくのも資本主義社會の常道である。

その代りそれらの大カフェは、云はゞまア高級スダ町食堂みたやうなものだ。しかし、それでもよいのである。その方が人が行くのである。すると女給も、だん／＼と客の減つてくるバーを止して、結局はかういふ大カフェの方へ行く。氣分がどうのと云つてゐた客までが、結局引きづられて行くやうにもなる。

女給の心理から云つても、狹いバーに勤めてゐると、客に對してどうしても氣持が偏頗的になる。賑やかな廣い店に勤めてゐるとさうでなくなる。そして客も女給も一樣に單純化されて、或る人々にとつては懷しいバー氣分が昔の物語りとなる。

これからの年末をひかへて、銀座はこれら大阪カフェの進出によつて一ト賑ひするだらう。それらの間にあつて、餘りに多すぎるいろいろのバーが、どういふ成績を上げてゆくかは興味ある見ものである。

獨身婦人の氣焔

市川房枝

獨身者の氣焔！　といつた題目は、私には少々不似合な感じがする。強ひて書けば氣焔ではなくて負惜しみをいふ事になりさうだ。然し眞實のところ、今の私には、氣焔を上げたり、負惜しみをいつたりする程の元氣もないし、餘裕もない。

そこで、唯單に私自身の感想をかいてみる事にする。

□

私自身の獨身生活は、何も獨身主義といつたものを奉じて來た爲めでもなければ、誰れに操を立てゝゐる譯でもない。

強ひて理由をつければ、結婚生活に這入らしめる程の強い戀愛がなかつた爲めともいへやうし、自分の仕事を捨てなければならぬやうな生活に這入ることを望まなかつた結果であるかも知れない。然しこれも正直なところは、仕事にかまけてずる〳〵と今日に及んだといふのがあたつてゐよう。

全く魂を打ちこんだ仕事、やめたいにもやめられない仕事を背負つてゐると、淋しさの這入り込む隙もないし、戀にも盲目にはなり得ないものである。

□

私の此頃の一日のプログラムは、來訪者への面接と、會合への出席とで殆ど埋められてゐる。

婦人運動は机上での議論とは違ふ。頭の他に口も手も脚も使はなければならない。貧乏世帶のやり繰りをする爲めには、頭もよけいに下げねばならないし、心にもない世辭の一つ二つもいはなければならない。婦人團體の常としてうるさい陰口が内にも外にもついてまはる。

三千萬の婦人のためだとがん張つてはみるが疲れるのも事實だし、不愉快な事が始終絶えない。

こんな時の私の逃げ込み場所は、獨りで、だまつて、じつとしてゐることである。外での生活が激しければ激しい程、うるさければうるさい程、内では孤獨な、靜寂な生活が欲求される。

私は此の意味で、何等の係累を持つてゐない、今の境遇をむしろ感謝してゐる。

□

とはいへ私の心から全然戀心が失せた譯でもないらしい。映畫などの強烈なラブシーン

等には、思はず胸をとゞろかすこともなくもない。

或は、今に素晴らしい戀愛をして、世間をアッといはせることがあるかも知れないが、然し今更、煩雜な、結婚生活、家庭生活には這入れさうもない。美しい夢を描いて、乃至は一つのビジネスとして送り込まれて行く若い男女をみると、むしろ氣の毒な感じがして仕方がない。ジエラシーではなく、正直にさう思はれる。

も少し結婚生活といふものが何とかならぬものであらうか。――お互が相手に犧牲を拂はせる事のないやうに、夫婦としての共同生活以外に各自の生活も持つことが出來るやうに。

□

私の近くに、十一になる男の子を持つてゐる親しい友人がゐる。子供自身が普通以上にいゝれいりなせゐもあらうが、非常に可愛いゝ。殊に友人である母親と其の子供との生活は全くうらやましい程である。

異性の間に於ける愛と、親子の間に於ける愛とは、勿論本質的に相違があるのは當然だが、私の眼には、親子――特に母子のそれが最も美しいものに思はれる。

どんなに不機嫌な時でも無心に笑つてゐる幼子を見ると、自然に心が柔らいで來る。私の心の中にも矢張母性としての本能が動いてゐるのであらう。

□

心持はまだ二十代の積りでゐるが、今年になつてから急に殖えて來た白髮をみると少々氣になる。

獨身で親戚縁者から厄介者扱ひされない迄も結局世話を焼かれて死んでゆく人のことも眼につき始めた。

二十年先きの自分の姿を考へてみないこともないが、それはなるやうに任せるより他あるまい。

まあ、あんまり長生きはしたくないが、然ししやるだけの事は仕終はせなければならない。

書いてゐると段々愚痴になりさうだからこの邊で擱筆することにする。

（北陸婦選大會に出發の夜）

新刊紹介

◇**霧と銀貨**　尾崎士郎著・アトラス・セリー短篇小說集。（東京市外西大久保二六五・アトラス社・價五十錢）

◇**七月の健康美**　鈴木彦次郎著・同前短篇小說集。（發行所同前・價五十錢）

◇**破れたルパシカ**　杉本捷雄著・同前短篇小說集。（發行所同前・價五十錢）

◇**激流を渡る**　坪田譲治著・同前短篇小說集。（發行所同前・價五十錢）

◇**村の倫理**　逸見廣著・同前短篇小說集。（發行所同前・價五十錢）

獨身婦人の瘠光榮

北村兼子

『山海經』に獨山には金玉美石多しとある。『爾雅』に虫の孤獨なるものを獨といひ山の孤獨なものを又た名づけて蜀山といふ。蜀と獨とは同じ意味で、楊子江を遡つて巴峽を越すと山に圍まれて他國から孤立した蜀といふ國がある。爾雅では虫の名になつてゐるが『韓非子』では龍をさへ虫の部に入れてゐる。『康熙字典』『說文』などに據ると「獨は獸で大蜀山小蜀山の奥に棲んでゐる」とある。

文字メーカーであつた蒼頡がけもの扁に蜀と書いて象形をつくつたものであらう。『佩文韻府』には獨一たび叫んで猿散じ鼉一たび鳴いて獸伏すとあるから獨は獸王で或はゴリラかも知れない。『埤雅』に鼉は夜に鳴き獨は曉に叫ぶとある。

人は集團生活を好む。文明人ほど集團する。鳥獸でも群をつくるから Sheept や Deer には複數がない。列を離れた孤雁は聲が悲しいといふ。『詩經小雅』に此の惸獨を哀れめと歌ひ、魏の文帝は傷ましい薄命の寡獨、内に惆悵して自ら憐れむと詠嘆してゐる。しかるに獨居を樂むものに獨の牝がある。一穴一匹で斷じて結婚しないから『獨』といふ名をつけられた。

獨は偶（配偶などの）の反對の意を現はして Solitude と同じく孤獨、僻地、荒野を現はす、麒麟の四靈である麟鳳龜龍にはどれもけもの扁がない、虫へんやけもの扁の附くものにろくなものはなく、蚊、蠅、猿、獺。人にあてゝ使ふ文字では蠻、蛇蝎、狂、犯、猥など、獨を略してけもの扁に虫と書いたらいよいよ詰らない字になる。ぜんたい獨の本體は何であるか。

猿の本場である三峽を經て蜀に入ると崖いよいよ高く水いよいよ激して猿の哀聲腸を斷つことは唐の大詩人杜甫の「入蜀記」に美しい文字で綴られてある。唐時代に長安の都から流刑になつた白樂天でも蘇東坡でも洞庭湖を通つて岳陽樓に登つた。この夏、私も南支那へ行つて「獨」を研究したことがある。もつと上流へ遡つて、四川省の天馬山に行つた北人が獨をみて猿と誤認した。顏從は猴が猿に似て角がないといつてゐる。楚語では蜀と獨と猿とは同じ發音である。

蜀山に穴居する獨は無智大食で顏は人間に似て醜い。猜疑心が深く牝と牡とは別居して

獸に牝は穴から滅多に出ない。雄が歡心を買ふために餌をもつてきて穴の口に置いてもそれを食べない。ぶしやうものであるから穴から出て食を探すこと少く常に飢ゑてゐる。飢ゑに堪へないで穴を出た時を見つけられ雄から暴行凌辱を加へられた時にのみ懷胎することはある。自發的に雄に接しないから種族はだん／＼減少して南宋時代に絶えて今では穴居の跡があるばかりである。

『正字通』に終獨といふ熟字がある。女の給仕を女給と話るやうに終生獨身の意味である。終獨婦人が多いと國が弱くなるから軍國多兵主義國家は結婚を獎勵した『後漢書安帝紀』にも獨を憐んだ詔はあるが産兒獎勵は婦人の爲ではなく男性侵略のためである。その證據としては『宋書周朗傳』にも各人に配偶を與へて終獨婦人と子のない老人とを無くして十年養育し十年訓練したら二十年目には勝兵が倍になると軍國主義の馬脚を露してゐる。

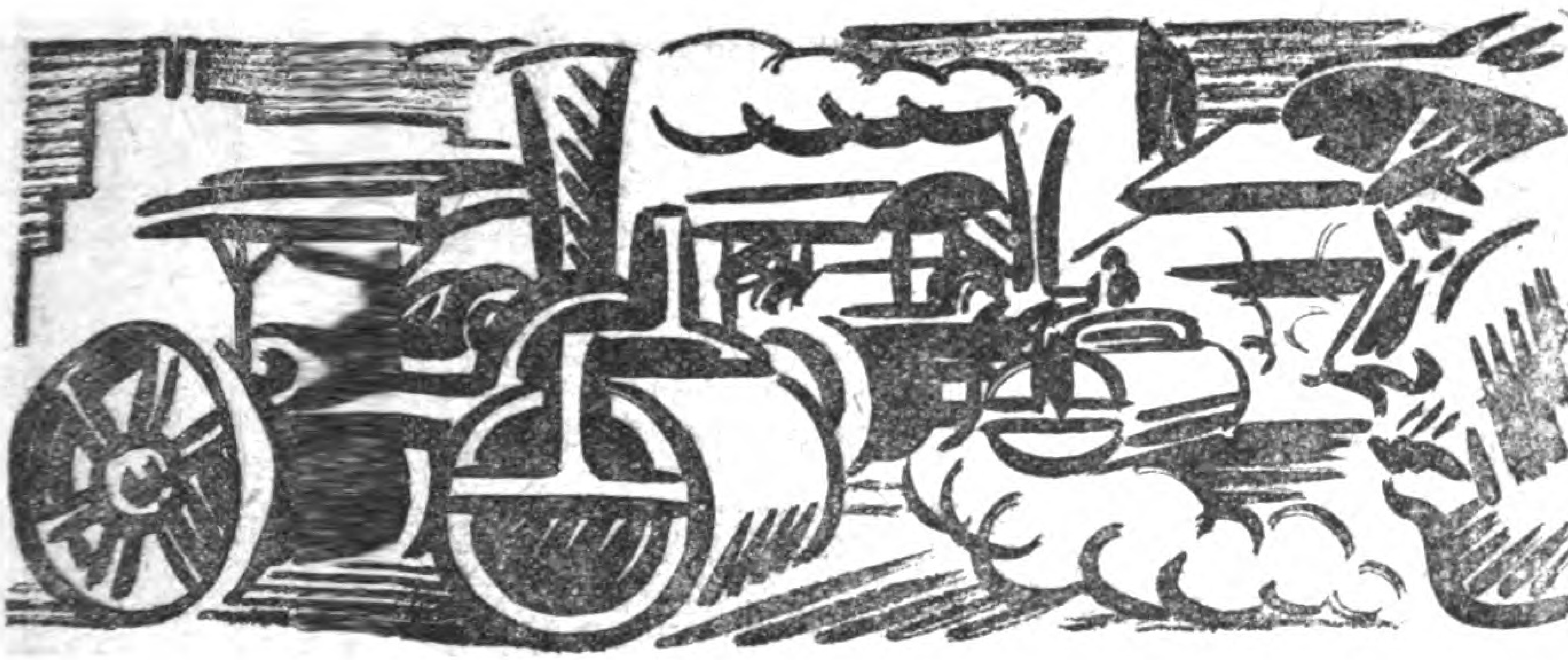
孟子は『老いて子なきを獨といふ』と獨の定義を下してゐる。政治の善い時には獨身婦人は少く惡政の下には獨がふえる。

獨身婦人は世の同情を受けてきたものであるが今日ではゴシップの流れ矢に滿身創痍で社會の理解に飢ゑてゐる。穴にゐた獸の獨は絶えてアパート住ゐの人の獨が激增して淋しい荒野のやうなペットに眠る。政治の缺陷が獨身婦人といふ符合によつて示されてゐる。

何と辯解しても獨身婦人は性失業者であることは否認するが、どんな醜い婦人でも廿七八までには三つや四つの緣談もあり非公式の緣談――直接交際――を受ける光榮にも接するが、結婚の儀禮に馬鹿らしさを感じたり、戸籍の登錄に、家庭の生活樣式に、法律の不平等に、そんなものを一括した差別待遇に反抗する婦人生活の合理化は『獨』で突つぱるより仕方がない。女學校を出た良妻術の習得者が媚態をつくつて花々しく行進する列から離れた孤雁は意地を張つて悲鳴しない。

わが身をわが物として存在せしめるには獨身の外はない。結婚して重い岩石を背負つて世を渡ることは恐ろしい。家族制度關係から切離して雄の運んでくる餌を食らはないで餓ゑるよりは、街頭に進出して、ゴリラのやうな婦人運動家も虫のやうな閑な婦人も薄給に餓ゑる女事務員も攻守を共にして人間の自由を縛り制限してゐる制度に挑戰するもの丶、けもの偏の虫であり、或るものは終獨である。人口增加の結末もつけない男性專制の下でも、好戰國多兵主義を拋棄させ、[illegible]豫備軍の濫穫に手を燒かせたら兒を產まない終獨でも××とはいへまい。

女浪人が結婚したといふ噂さで外交時報の半澤玉城氏から祝辭を贈られ村松梢風氏から問合せがあり經濟往來には結婚を報せられたが、不幸にして事實無根で私の『獨』身は異狀なし。



世界情報

内容

小麥騷動

——アメリカ市場に於けるサウエート・ロシヤのダムピング問題——

最近の新聞紙はサウェート・ロシヤが各地においてダムピングを試みて、世界經濟の攪亂を企てゝゐるといふことをいくたびか傳へた。はたしてさうか。その眞相はどうか。我々はこゝにそれらのうちで最も問題になつたもの、アメリカ小麥市場に起つたものについて、書かうと思ふ。

……………………

九月、シカゴ取引所を中心に『小麥騒動』が起つた。それは悲劇『農業恐怖』の中の、フーヴァー演ずる所の一齣の劇中喜劇であつた。

……………

農業恐慌克服の、あらゆる國のあらゆる資本的努力はすでにコーヒーにおいて、ゴムにおいて、棉花において順次に失敗に歸した。いままた同じ失敗が米において、小麥において繰りかへされつゝある。小麥の價格（シカゴ取引所における赤色第二號の相場をとる。これは小麥相場の世界的標準である）は次表に示すごとく本年九月に入つて、鋭く下落した。

合衆國における小麥價格の騰落

期近物一ブッシェル當り仙以下切捨

年	月	日	弗
1911—1920			1.37
1921—1927			1.14
1928			1.28
1929			1.24
1930	3	2	1.08
〃	4	1	1.09
〃	5	1	1.10
〃	6	10	1.05
〃	7	1	89
〃	8	1	85
〃	〃	16	89
〃	〃	29	85
〃	9	2	83
〃	〃		
〃	〃	8	83
〃	〃	9	82
〃	〃	10	82
〃	〃	11	81
〃	〃	13	80
〃	〃	15	79
〃	〃	18	81
〃	〃	19	82
〃	〃	20	80
〃	〃	22	80
〃	〃	23	77
〃	〃	24	76
〃	〃	25	78
〃	〃	26	76
〃	〃	27	74
〃	〃	29	72
〃	〃	30	74

小麥のシカゴ定期相場が八〇セント臺割れなどといふのは一九一四年七月以來の最低値である。

かうした小麥價格の暴落は、まづ、近年その獨占的力によつて、或はアメリカ聯邦農務局と呼應することによつて、小麥價格の人爲的釣上げを企圖し、これをもつて潜在的農業恐慌の表面に現はれることを阻止するに成功したカナダ小麥プールの全くの失敗を意味する。次には『農民生活の安定』をその農業政策の第一のスローガンとし、このために、聯邦農務局をして一ドル二〇セント乃至一ドル三〇セントの高價格で約五〇〇〇萬ブッシェルの小麥を買上げしめ小麥價格の維持を計らうとしたフーヴァー大統領の農業政策の完全なる破綻を意味する。

フーヴァーは周章した。彼はこの小麥價格の暴落の原因を政府の農業政策の失敗以外に見出さうと懸命になつた。そしてそこに彼は『赤色の幽靈』を探し出した。フーヴァー大統領は最近における小麥相場低落の一因をシカゴ取引所における『アムトルグ』（駐米サウェート同盟通商部）の賣叩きにありとし、農相ハイドと凝議の上ハイドをして九月一九日、シカゴ取引所長ジョン・バンネル宛電報をもつて、サウエート側の右の如き投機によつて生ずる米國農民の損害に對し取引所は農民を保護するためいかなる方法を講じたか、また、講ぜんとするかについて問合せた。なほハイドは聲明した。ロシヤは數ケ月來小麥の先物投資を行ひ、不振の相場を一層壓迫しつゝある。ロシヤは一ブ

ッシエル四二セントの關稅を拂つて、小麥をロシヤからアメリカに輸入しては手取り何物も殘らないのだから、この先物賣は全く市場攪亂の目的である。と。

アメリカ政府のかゝる聲明に對し、シカゴにおいて先物小麥の賣却を行つた全ロシヤ纖維シンデイケートは次長ベルッキイーの名をもつて、『我々の賣却は九月九・一〇・一一日の三日間に行へるもので、賣却總額僅か七七六萬ブッシエルにすぎず、一日五〇〇〇萬乃至六〇〇〇萬ブッシエルの取引を行ふシカゴ取引所においてかゝる小額の取引は相場を左右するに足らず、我々は單に保險繋ぎを行へるなり。』と釋明し、あはせて、ハイドの數ヶ月來私かにシカゴにおいて計劃的に賣却を行ひ來つたといふ說を反駁した。

九月二一日、農相ハイドは自身この問題の調査を行ふためワシントンをたつてシカゴに赴いた。翌二二日にはシカゴ取引所に對し『すべての取引員をして、取引の數量、顧客の氏名、各顧客の日々の賣建、買建の玉の殘高を申告』せしむべしとの命令を發して、いよいよ政府がサウェート同盟の小麥ダンピングにつき徹底的調査を行はうとする決心を公けにした。引續き二四日からは、全ロシヤ纖維シンディケートの註文でロシヤのために小麥の賣却をなせる取引仲買商三軒を取調べようとした。

この政府の發令に接し、取引所當事者は再び本問題に對する對策を愼重審議し、二六日取引所理事會の名で次の決議を發表した。――『シカゴ取引所管內においてその何國たるを問はず外國政府が穀類の先物賣りを行ふことは不都合にして是非廢止せしめなければならぬ。取引管理委員會は弱氣の賣叩きと價格攪亂を防止するため斷乎たる處置に出づべきであり、當を得ざる大量の弱氣賣りは單なる賣繋ぎと區別し、不當なる賣崩しの證據と看なすべきである。』この決議は取引所所長パンネルから農務大臣ハイド宛に打電されたが、その際パンネルは『シカゴ取引所は一般人の利益を擁護し聯邦政府の主義を維持するため政府とできる限り協力する熱望を抱くものである。』旨付言した。

いまや喜劇の登場者は俄かに繁くなる。米國下院サウェート・ロシヤ宣傳調査委員會が活動を開始し、委員長ハミルトン・フイッシュは本問題の調査着手を發表した。徹底せる勞資協調主義者總同盟副會長マッシュウオールは、アメリカ勞働者の名において、サウェート・ロシヤの小麥排擊の聲明書を公けにした。彼はすでに本年八月ロシヤ木材・パルプのアメリカ輸入禁止のために狂奔したが、再びその本質をこの機會に明かにしたわけである。海のかなたオランダ、ドイツ、フランス、イギリスでもロシヤ小麥の投賣を續々と報道した。ブリアンのヨーロッパ聯盟の案が急に前景に押し出された。最後に『國際聯盟』も

登場した。すなはちそれは各國に對し、いまさらしく小麥價格の安定策を調査、攻究することを提案した。

かうしたサウェート・ロシヤの小麥ダムピングの宣傳、それに對してなされたアメリカ農務省の取引所取引の技術的性質――何人が賣り、何人が買ふか全く秘密にされ、大量の賣と大量の買が市場に競合することによつて、取引所取引は可能となる――を無視せる調査命令、更にそれに迎合して徹底的取締りをなし、市場の攪亂防止を企圖した取引所の態度、これらは全く豫期しない正反對の結果を生じた。

第一、ロシアの小麥ダムピングを大規模に宣傳することによつて、シカゴはじめ全米の、否全歐、否、南米、濠洲、カナダを含む全世界の小麥市場に大なる恐怖を與へ、小麥相場の强氣材料を一擧に吹き消して、取引を一時中絶させるにいたつた。さらに、シカゴ取引所内においては、あらゆる取引員はこの調査による取引秘密の公開暴露を恐れ、申告を逃れるために、取引を清算し、市場より脫退しようとして一齊に賣向つたのである。その結果相場は七九セントから七六セントに、さらに二七日には未曾有の七四セントまで下落した。これは直ちにイギリスにも波及した。リヴアープール市場は二四日には十日限十二月限ともに二ペンスの暴落を見た。引續き低下を續け二九日までには合計七ペンスの下落をした。その上、かゝる小麥價格の急激なる崩落は、それでなくとも窮狀に陷つてゐたカナダ・プールを愈ゝ崩壞にまで押し進めた。大量の小麥ストツクを抱くプールの切迫せる危機は直ちに、市場への大量投賣を意味し、世界市場の大なる脅威となつた。かくして九月二九日シカゴ取引所においては七二セント四分の三といふ、一九〇七年一月以來の、二十三年來の最低値を出現した。

アメリカ政府は好んで招いたこの窮境からなんとか血路を見出さなくてはならない。こゝで喜劇『小麥騷動』は高潮に達する。九月二九日はシカゴ取引所長ジョン・バンネルをサウェート・ロシア宣傳調査委員會に立たせた。其處では彼は小麥價格安定のため、從來の主張とはまたフーヴアー政府の見込とは、全く相反する證言を試みて道化役者をつとめなければならなかつた。彼は云つた。――『ロシア筋では七五〇萬ブッシェルの小麥を賣つたが、右は單なる賣繋ぎであつて特に市場の攪亂を目的とする賣叩きではない。』

彼個人の證言をもつてなほ未だしとして、フーヴアー政府はさらにシカゴ取引所監理委員會長ジョセス・バーデノッホをも立たせ、バンネルの言を管理委員會の名において裏書せしめた。彼は云つた。――『委員會はサウェート・ロシア側の遣り口をもつて普通の賣繋ぎ以外の何ものでもないと信ずる。』

九月二九日シカゴ發の電報通信は全世界に『農相ハイドのサウェー

ト・ロシア攻撃が根據薄弱なる所以を明かにしたのでサウェート・ロシアはこゝにひとまづ無罪放免の形となつた。』と報道した。

これに對しプラウダ紙は二九日次のやうな記事をのせた。『現在サウェート・ロシアの小麥輸出は世界における總取引高の二%にも當らないのである。いかなる奇蹟をもつてすればこの二%が世界の市場を攪亂することになるのであらう。現在サウェート・ロシアが穀物の投賣りを行ふことにより世界經濟界の安定を脅かすといふ說はなんらの根據もない。世界の經濟的危機がますます增大するのは帝國主義の本質から發生する矛盾に因由するものである。』

九月三〇日、シカゴ相場は二セントを、リヴアープール相場は十月限、十二月限おのおのにおいて二ペンスを騰貴さして『小麥騷動』の幕は下りた。

それにしても、この騷動は何を敎へるか。資本家的方法による農業恐慌克服の困難。アメリカ政府の對サウェート關係における一切の問題の立てかたに見られる極度の混亂と曖昧と愚劣。これである。

(一一月五日)

國際鐵鋼カルテルの崩壞

『國際鐵鋼カルテル』は一九二六年九月末に成立して、最も基礎の強固な國際カルテルのひとつに數へられて居た。このカルテルにはドイツ、フランス、ルクセンブルグ、ベルギー等が加入してゐた。そして、このカルテルは、壓延製品の重要原料である粗鋼の生產を國際的に制限することによつて間接に壓延製品の世界價格を安定せしめることを目的としたものである。この目的は一九三〇年の初めにカルテルの協定の修正が議せられるにいたるまでは、ほゞ完全に遂行せられてゐた。

一九三〇年の初頭、世界恐慌が次第にその深刻さを增し來つたとき、『國際鐵鋼カルテル』はその組織の變更を行つた。すなはち從來の生產制限に違反した場合の罰金制度を廢止して、各加盟國の輸出額の統制及び輸出價格の決定をもつてこれに代へた。そしてこのやうな統制を受ける商品は從來の粗鋼ではなく、壓延製品たる半製品、型鐵、桿鐵および鈑鐵としたのである。かうした組織の變更に應じて、加盟各國は二月一五日右の壓延諸商品の輸出格價を一齊に二・二%乃至三・八%引上げるにいたつた。

世界的不景氣は一九三〇年の月が進むと共にますますその深度を加へた。不景氣の深刻化は市場における競爭を激化する。鐵市場がこの例外をなさなかつたことはもとよりである。ところで、自國の生產の一〇乃至一五%のみを國內で消費し、從つて世界市場に依存するこ

と著く大たるベルギーおよびルクセンブルグは輸出價格を高く保つことによつて非常な損失を蒙らねばならぬ。なぜなら、輸出價格を高くするとき、ベルギーはイギリス、ポーランド等の競爭のために外國からの注文を奪はれること大だからである。そこで、遂に七月にいたりベルギー最大の製鐵會社クラベクは向後カルテル價格に束縛されざる旨を宣言した。かくて、クラベク製鐵會社は鐵鋼カルテルを事實上脫退したわけである。のみならず、事實を云へば、その他の國々も從來カルテルの價格を正確には遵守してゐなかつた。この情勢に面して、『國際鐵鋼カルテル』は七月八日棒鐵、箍鐵および厚板の價格を自由競爭に委すことを決定するほかなかつた。しかし、半製品および型鐵に關しては各國の協定は比較的確實に結ばれ、高率の罰金制度も成立したのである。だが、それも僅かの間であつた。ベルギーならびにルクセンブルグの製鐵會社は八月に入るやこの協定をも破つて、カルテル價格以下で競爭を試み始めた。そこで八月二八日『國際鐵鋼カルテル』は、やむなく、この兩種の壓延製品をも自由競爭に委すべきことに決定した。

こゝにおいて、最も強固な國際カルテルと稱された『國際鐵鋼カルテル』は、實質的に崩壞するにいたつたのである。まさにカルテルの存在を最も必要とすべき筈の恐慌時においてゞある。これは、國際カルテルの締結によつて世界恐慌を[illegible]と信じてゐた人達の夢のあまりにもはかないものであることを最も有力に語る事實ではないか。

南米の革命運動と英米資本の對立

ラテンアメリカは最近引ききりなしに革命に襲はれてゐる。まづボリヴィア、ペルーを襲つた革命は遂にアルゼンチンを、ブラジルを席捲するにいたつた。これらのことはすでに一般の新聞紙にも傳へられて、讀者諸君もよく知つてをられよう。

いま、ブラジル等々における革命はこれまでも始終あることで大して重要性をもたないやうに考へられよう。が、アルゼンチンは二十年來クーデターを知らなかつた國、この國も侵されたことは今次の南米の革命運動の特殊の意義を思はせる。そこで、いつたい南米において特に一九三〇年に、こんなにも革命運動が昂まつた、その理由は何であるか。

元來、戰前のラテンアメリカはイギリスの經濟領域であつたが、その覇權は戰後アメリカ合衆國によつて次第に奪はれて行つた。アメリカ合衆國投下資本および貿易額の著しい增大、パンアメリカニズムの

浸透、顧問官制度の實施等々はイギリスの地位に代るヤンキー帝國主義を確立したのである。イギリスは默つてはゐなかつた。これに對して猛烈に反抗した。そして、兩帝國主義の葛籐は、一九三〇年に入つてラテンアメリカが激烈な恐慌に襲はれて資本、ならびに商品兩市場が狹められて來るや、從つてお互に相手をこの狹い市場から追ひ出すことが絶對に必要となつてくるや、次第に深刻の度を加へて遂に窮迫せる農民、勞働者、小ブルジョア層をも動員するにいたつた。兩帝國主義は、大衆の組織なき狀態の利用と改良主義者の力を借りることによつて、アメリカ合衆國にとつてはその覇權の確立、イギリスにとつてはその覇權のために戰つてゐるのである。しかしこの戰ひはアメリカ合衆國の勝利となりつゝあるものゝごとくである。

我々はもう少し詳しく見よう。元來アルゼンチンはイギリスの勢力圏内にあつた。戰前のイギリスの投資額は一八億六〇〇〇萬ドルであつたのに對してアメリカ合衆國は僅かに四〇〇〇萬ドルにすぎぬ。しかしこの狀態は戰後一變した。一九二九年にはアメリカ合衆國が一四二九%を增大して六億一一〇〇萬ドルとなつたのに對して、イギリスは僅かに一五%を增して二一億四〇〇〇萬ドルとなつたにとゞまる。このうちで、アメリカ合衆國は保守的ブルジョアジーと大地主とに直接關係をもつ加工工業と鑛山業とを支配し、イギリスは運輸業、市街電車、瓦斯、動力等を支配した。しかるに一九二八年に入つては、アメリカ合衆國はそれまでイギリスの勢力範圍にあつた電氣工業を侵略し、この工業に對して一九二九年には四二〇〇萬ドルに及ぶ投資を行ひ、さらに鐵道にもその手を伸さうと試みたが、これは失敗に歸した。アメリカ合衆國のこの勢を見てイギリスはあわてた。イギリスの利益を代表する大統領とポリトー・イリゴイエン博士は――彼れは曾つてワシントンへ領事を置くことを拒否し、ハバナの汎アメリカ會議でフーヴァーを憤激せしめた男だ――イギリスへ忠義立てのためにペノスアイレスでフヴァーの一行を冷遇し、他方イギリスの經濟使節ダ・バーノン卿一行を好遇し、アメリカ合衆國を犧牲とする年八〇〇〇萬ドルの取引を秘密に締結した。――それは兩國で互に四〇〇〇萬ドルの商品を購入し合はうと云ふのだ。この協定はアメリカ合衆國のホーレー・スムート關稅の實施を口實にして公表せられるにいたつた。いふまでもなくアメリカ合衆國はこの處置に對してひどく憤慨した。この間の消息を傳へるマックス・ウインクラー博士の次の聲明の言葉は非常に面白い。――『大ブリテンがアルゼンチン共和國との貿易における指導的地位を再び確保せんと努力せる際に當つて、アメリカ合衆國たるもの何として拱手傍觀し得ようか？我々は尖鋭化した鬪爭がこゝに展開せねばならぬことを信じて疑はない』

我々は不幸にして、アメリカ合衆國が具體的にどんな報復手段に訴へたかは明かにしえない。しかし革命の結果を觀察することによつて充分この間の事情を推測しうると思ふ。帝國主義諸國による搾取と世界恐慌の結果極度に貧窮化した勞働者と農民は、政府の政策を攻撃する反英帝國主義のブルジョアジーと和した。アルゼンチンは穀物と羊毛との價格の激しい崩落の結果として國際貸借關係の危機に陷り、爲替の惡化と幣制の混亂は金輸出の再禁止を餘儀なくせしめられた。加ふるに、イギリス帝國内自由貿易の提唱はアルゼンチンのブルジョアジーの神經を昂ぶらせた。實際それはアルゼンチンの海外貿易にとつて大打撃となる筈であるから。かくて、これらのいろいろな反政府分子を率ふるところの、アメリカ合衆國利益の代表者ウリブル將軍——彼れは保守的ブルジョアジーと大地主の指導者だ——は遂にイリゴイエン政府に代つた。しかし、、、、、をほんとうと思ひ込んだ勞働者農民はウリブルのアメリカ合衆國帝國主義の確立の運動が判然すると憤慨した。そこでブエノスアイレスで、勞働者、學生によつて、『ウリブルを倒せ』『イリゴイエンを倒せ』『、、、、、、、、をつくれ』のスローガンがいたるところに掲げられたのである。だが、これらの眞の事情は外部にはあまり知られなかつた。ウリブルの猛烈な言論の抑壓は、これらの事件をば、單に「誤つて」ブエノスアイレスで兵火が交へられたと傳へしめるにとどめることに成功した。

なほ我々は、ボリヴィア、ペルーの新政府(これはイギリスの地盤の確立を意味するものであるが)を決して承認しなかつたアメリカ合衆國が、これはまたどうしたことか、ウリブルの新政府は即刻承認したことを附加へておく必要があらう。同時に次の二つの契約が交された。

一、アルゼンチンはワシントンへ領事を任命すること。

二、アルゼンチンは汎アメリカ同盟(アメリカ帝國主義確立の道具である!)へ加入すること。

かくて一〇月四日の『フィナンシャル・クロニクル』誌は五〇〇〇萬弗のアルゼンチン政府の短期外債が合衆國で締結せられたことを報道してゐる。

ブラジルの革命も同樣な結果に到達してゐる。

舊ブラジル政府を構成する保守的共和黨は主として大地主から成りなかでもコーヒー栽培園の經營者が多數を占めてゐた。そして、この國でイギリスはコーヒーの獨占權を收めてゐたのである。ところで、アメリカ合衆國はこのイギリスの獨占を覆へさうとした。そのためにアメリカ合衆國は二つの手段に訴へた。ひとつは北米および中央アメリカにおけるコーヒーの新規栽培であり、いまひとつはコーヒー獨占のための資金の貸付けをばアメリカ側でボイコットすることであつ

た。この二つは世界恐慌に當面してたちまち功を奏した。コーヒーの滞貨はたちまち二三〇〇萬俵に及び、加ふるにアメリカ合衆國のブラジルへの金融の拒絶はコーヒーの獨占價格を維持することを不可能ならしめた。生産制限も功を奏せず、價格の崩落は一九二九年の四八ー四九ミライから一九三〇年の七ー八ミライに及んだ。さらに、ブラジルの危機を深めたものは獸肉生産、(リオグランド、サンパウロ)砂糖生産(北部)、纖維工業、財政における破綻であつて、失業の増大と賃銀の切り下げとが相ついだ。農業勞働者の賃銀は四〇%から五〇%にわたつて切り下げられ、四〇〇〇萬人の人口中一〇〇〇萬人が野生の食物を求めて放浪生活を送ることになつたと云はれる。ストライキはいたるところに勃發し、農民の一揆が各所に蜂起した。

これらの事情を前にして、いまブラジルにおける政治團體の性質を見ると『コルムナ・プレステス』は帝國主義反對の鬪爭のための小ブルジョーア層を指導する有力な組織である。『カルロス・プレステス』は農業革命と反帝國主義鬪爭をスローガンに掲げてをり、都市ならびに農村勞働者、小ブルジョア層の支持を得てゐる。『ブラジル共産黨』はこれらの鬪爭と共に別に半封建的大地主に對する鬪爭を展開してゐる。これに對して、アメリカ合衆國の支持する最も有力な黨派たる『アリアンサ・リベラル』は帝國主義的、反動的勢力を代表し、農業革命を否認し、現存秩序の維持のもとにヤンキー帝國主義を確立せんと努めてゐる。これを支援するものは『コルムナ・プレステス』と關係を持つ『コルムナ・タヴェラ』である。しかも、ブラジルにをける政治の方向を最も有力に決定してゐるものはこの後者である。

そこで我々は次のことを知ることができる。今次の革命は進歩的工業ブルジョアジーの農業的、封建的ブルジョアジーに對する鬪爭ではなくて、現在政權を獲得してゐるブルジョーア團體とは敵對的利害にある國民的ブルジョアジーの鬪爭である。その意味において、今次の革命は、また、イギリス帝國主義をヤンキー帝國主義によつて打破せんとする試みであると云ひえよう。かうしてヤンキーは遂にブラジルをも自己の掌中に收めたのである。

かくていまやヤンキー帝國主義はほとんど全米を征服せんとしてゐる。このアメリカ合衆國の覇權確立に對して、イギリスはもとより必死の抵抗を試みつゝある。南米における英米の對立は刻々に尖鋭化してゆく。それは頂大な危機をはらんでゐる。しかも大衆は、英米の對立から起るこれら革命運動を通じて醒めて行きつゝある。これまで顧みられること少なかつた南米の天地は世界史の發展に對して大きな意義をもつかもしれないであらう。

ストライキの波に洗はれんとするドイツ

ベルリンを中心として、いまや、ドイツ各地にはストライキの波が昂まらんとしつゝある。この口火となつたものは金屬工業における賃銀値下げ問題である。

『ベルリン金屬工業家協會』(VBMI)に屬する工場就業勞働者一四〇、〇〇〇人に對する賃率契約は來る一〇月五日で終了する。そこで、これを機會として協會側は、組合代表との商議に際して、賃率の一五％の引下げを要求した。席上、協會の領袖クレメナアは揚言した。ベルリン金屬工業における賃銀引下げは單に言はゞ皮切りに過ぎないので、勞働者の賃銀、使用人および官吏の俸給は實に全線にわたつて低下されるであらうと。

ヨーロッパ最大の金屬工業都市ベルリンにおけるかゝる要求と聲明とが齎らす反撥はおのづから明かであらう。勞働者の間には大きな動搖が起つた。

この間にあつて、ドイツ勞働組合總同盟(ADGB)のベルリン地區委員會長ブレードゥはベルリンのすべての金屬工に對して、賃銀水準を動かすことなしに、一週四十時間勞働制を採ることを提案した。しかしこれは賃銀の六分の一の巧妙なる削減である。さらにまたドイツ金屬組合(DMV)の領袖ウーリッヒは、仲裁々判を求めてゐる。けれども仲裁々判が賃銀引下げを肯定することは疑のないところであり、しかも判決は拘束力をもつのである。多くの勞働者はこれら提案に誠實な期待を繋かないのは當然である。

パウル・マイア會社、ルードヴィッヒ・レーヴェ商會、ノイケルンの北ドイツ電線會社、シェーネベルグの無線電信會社等々の勞働者は、戰鬪的な組合的反對派(RGO)の要求を支持して、一〇月五日に催さるべき金屬工代表者を派遣すべき決議をなしてゐる。この反對派の要求といふのは、賃銀値下げ絶對反對、七時間勞働制と賃銀水準の充當、二〇プフェーニッヒの賃銀値上げ、同一勞働に對する同一賃銀等である。そして反對派は鬪爭を通じてこれを獲得することを主張する。

一〇月五日を前にして、組合反對派、共產黨工場細胞の活躍は續けられ、かくして金屬工代表者會議の當日は來た。

この會議は、リヒトルブルク温泉において催された。出席者は、工場會議や職場會議選出の四七名の代表者と、他に招待者、組合反對派役員、赤色工場委員の一三〇名である。代表者中、三五七名は工場選出、五〇名は印刷職場選出であり、さらに二六六名は組合員であり、三五

名は組合脱退者であり、一〇六名は未組織勞働者である。なほ代表者中には、五二名の女工と三四名の青年勞働者とが見出された。

會議はまづベシュケが組合反對派のストライキ戰略について報告した後、ゲンチがベルリンにおける金屬工業の組織について述べ、次いで討論に入つた。

會議は終つた。それと共に、いまや組合反對派の指導のもとに一切の罷業準備は整へられた。一プフエーニッヒの賃銀値下が行はれても、直ちにストライキの火蓋は切つて落されるであらう。

我々は各所の形勢をみやう。

フローア會社ヴゥテナウ工場、――こゝでは勞働者は金屬工代表者會議出席代表の報告を勞働時間中に聽くことになによりの期待をもつてゐると云ふ。一〇月九日勞働者は失業者ともにデモンストレーションを行つて、ボルジッヒヴァルドのすべての工場を見舞つた。鬪爭委員會は、ストライキに用意するために、約一五〇〇部の新聞と小冊子とを具へてゐる。

アー・エー・ゲーのツレプトウ工場、――こゝでは、最近の工場會議に三〇〇名乃至四〇〇名の勞働者が出席し、その中には多くの社會民主黨支持者が含まれてゐたが、その會議は、ベルリン金屬工會議の決議に據ることに決し、二十名の委員から成る鬪爭委員會が選ばれた。勞働者はストライキ贊成である。

ベルグマン會社のローゼンタール工場、こゝでは一部の社會民主黨崇拜者を除いて、勞働者の大部分は賃銀値下げにはストライキをもつて報ゐる準備をしてゐる。數日前會社首腦部は、一〇%の賃銀値下げを行はうと試みたが、勞働者は組合反對派の指導のもとにそれを撤回せしめた。

ベルリン電話製造會社――金屬工會議の報告は、感激を以つて迎へられた。社會民主黨側の勞働者も賃銀値下げに對する鬪爭を決意して、仲裁々判の判決を待つてゐる。

ルードヴィヒ・ロェーヴェ商會、アー・エー・ゲーのタービン工場、アー・エー・ゲーのヘッニングスドルフ工場の勞働者は何れも仲裁々判の判決を待つてストライキに入らうとしてゐる。

かうした勞働者側の形勢と共に一方では、ベルリン金屬工業家協會の聲明に示唆されて、ドイツ各地の資本家はいまや擧げて協會の例に倣はうとしてゐる。例へば、九月二七日、ライン航運企業家聯盟は現在の賃銀および俸給協定を來る一〇月三一日限りとする旨を發表して、急激な賃銀値下げを企てゝゐる。また、アイゼンタールの褐炭坑大衆的解雇と賃銀値下げを企てゝゐる。全鑛山に亘つて採掘作業は休止され鑛夫は現在賃銀の五〇%減ぜられる筈である。等々。

かくて、全ドイツにおいて勞資の、正面衝突は避け難いものとなつてゐる。やがてそれは猛烈なストライキ運動の波となつて現はれるであらう。それについては我々は後報に待たう。（十月九日迄）

ファシストイタリーの國定教科書

小學校の教科書が『國定』であるのは、西洋では異聞に屬するであらうか。イタリーの小學校は今後、唯一無二の『國定教科書』を使用するであらうと報じられてゐる。

この、ファシストイタリーの國定教科書は文部大臣の監督のもとに編纂され、各年に一卷づゝ都合五卷から成つてゐる。卷一、卷二はそれぞれ二種の版本があり、一は都市の小學校、一は田舍の小學校で用ゐられる。卷三、卷四、卷五は一種の版本しかない。

この國定教科書の組み立てから、興味ある點を摘記するならば、――都市の小學校用卷二の中には、宗教について、および舊約聖書の物語についての講述がある。同じく田舍の小學校用の卷二では、出生、勞働、祖國といふやうなことが說かれてゐる。卷三は、グラチア・デレダ夫人の編であるが、讀み物、宗教、歷史、地理、算術に分れ、讀み物の中には、ムッソリニ伯の邸宅、バリラ、和解、大戰に關する章が織り込まれてゐる。第二の宗教の部では、宗教問答、『主の禱』、イエスの生涯、第三の歷史の部では、ムッソリニ伯、ファシスト革命、イタリー法王との和解等が目を惹く。卷四は全く歷史＝文學の作文集であつて、コントやアネクドート、例へば、大戰勇士の犧牲、ツェザーレ・バッチスチやナザリオ・サウロのことなど、伊墺戰爭、その他、ファシスト黨およびファシスト軍の組織、ムッソリニ伯の傳記、ローマ征服のことなどが、大詩人および現代詩人の作品と共に載せられてゐる。――そこには、愛國の熱情が充ち溢れ、『危險思想』は一分子だと含まれてゐない、と喧傳されてゐる。新しきイタリーの心理を一〇〇％に表現するものであらう。

ローマ『入城』九年の祝祭を壽ぎつゝ、ムッソリニとファシストは、いまや得意の絕頂にある。議會の祖國イギリスにおいてさへ、下院の權限縮少を劃しつゝ、遙かに彼に款を通せんとする者がある。ドイツの國粹社會黨ヒットラーの一派は、公然と、ムッソリニを禮讚し、オーストリー製の『ヒットラー』ヴォーゴイン將軍は內閣を組織せんとしてゐる。かくてムッソリニは世界政治運動の一方の旗頭である。

そのムッソリニが國民教育の源に歸つて、『國定教科書』を制定した。彼は、この『制定』の何年祭までを祝ひうるであらうか？

最近の軍事費と無産階級

久保寺三郎

濱口内閣は昭和六年度豫算を十四億圓臺でこね上げた。未曾有の大緊縮豫算——さうブルジョア新聞が吹き立てゝゐる。就中、陸海軍豫算に對して行つた既定經費の大節減は大方の好評を博したものゝ如くである。無論、此の拍手を送つた大方の何ものであるかは濱口內閣の持つ政治的性質を見れば明白だ。おしなべて資本家・地主の利益、就中金融ブルヂョアジーの利益の擁護に日もこれ足らぬ一連の政治的番頭共が軍部豫算の節減に骨を折つたといふ事實は、たゞ次のことを意味するに過ぎぬ。卽ち、軍備そのものが當面必要とするだけのもの以下とならぬ範圍に於いて産業合理化策の結果として現はれた租稅收入の異常な惡化から（削除）餘儀なくされるかも知れぬ經費の增大を食ひ止めんとしたのだ。すでに、本年の半ばに於いて租稅收入の異常な減收は一連のブヨヂョア財政技師共の顏を曇らせるに十分なものとなつてゐる。昭和五年五・六月末國庫現計の前年度比較に見れば左の如くだ。（單位千圓）

	種目	昭和五年五月末	昭和四年五月末	前年同月比較	昭和五年六月末	昭和四年六月末	前年同月比較
所有課税	所得税	二、〇〇八	二、〇〇八	△二八	七、五一五	八、二七八	△七六五
	地租	二	一	一	一、一四四	一、一九九	△五五
	營業收益税	八二	九四	△一二	一、二五六	二、一六二	△九〇六
	資本利子税	一、三六〇	一、四〇七	△四六	二、三一四	二、四〇〇	△八六
	相續税	七八〇	八五二	△七一	二、三一一	二、一四五	一六六
	鑛業税	一一八	二四	九四	四三一	三一五	八四
大衆課税	酒税	二、九一六	二、六九八	二一八	六、五三四	六、四五五	△一二一
	清涼飲料税	三五三	四八三	△一三〇	九五九	一、〇五九	△一三六
	砂糖消費税	五六三	一、〇九五	△五三一	六、三六五	六、五二六	△一六三
	織物消費税	一、五三四	二、〇二九	△四九五	四、二九二	四、九三一	△六三九
	取引所税	六七二	六三六	三六	一、二八九	一、四三〇	△一四一
	關税	一〇、四八二	一一、五七五	△一、〇九二	二一、三九九	二五、六三九	△四、二四〇
	噸税	二〇九	一九七	一二	四二五	四二三	二
	營業税	五	二	一	八	六	二

どうだ、此の軒並みの減收は！　而も此の減收は今後その度を強めないではおかぬ性質を持つてゐる。租税收入を歳入の支柱とする豫算がブルヂョアジーに依つて節減を要求されたとしても無理もないであらう。そして、節減の對象となつたものが主として各省の人件費、補助金、調査費、軍部關係費等々、直接(削除)に『金』を生み出さぬ費目であつたこともべつに不思議ではない。濱口内閣は、豫算の編成といふ一つの財政奇術によつて、こゝでもブルヂョアジーの政治的代理人として、軍事行政に對す合理化策を強行したのだ。

むろん、無産階級(削除)の租税に依つて(削除)對外政策を強行せんとする陸海軍省豫算など、いくら節減されたとてかなしむがものはない。むしろ、此の際、此の『×××豫算』の廢絶こそは無産階級の手によつてのみおこなはれるものだといふことが注意されねばならない。ブルヂョア國家の財政に王座を占める軍事費こそ、無産階級に對する租税の重課によつて維持されて來たのだ。××××××××の鬪爭(削除)であるごとく、軍事豫算にたいする鬪ひも大きく評價されていゝ。ブルヂョアジーの財政計畫に對する無産階級の獨自の反對が(削除)十分には行はれてゐない今日では、昭和六年度豫算編成に濱口内閣が『國民負擔の輕減』と呼稱した最高の××××案、即ち軍縮餘剰財源による×××救濟の減税案の如きがあれほどに×××××大效果をあげたのも無理はない。政府はその爲めに『軍部當局は國民負擔の輕減を無視してゐる』とて總歳出中に占める『軍事費』なるものゝ歴史的變遷を公表し、一つ穴のが二つの姿をして無産階級の前に現はれ、芝居を打つて見せた。

	歳出總額	軍事費	割合
明治卅年	二二三、六七八	一一〇、五四二	五〇%
同四十年	六〇二、四〇〇	一九八、三一六	三三%
大正元年	五九三、五九六	一九九、六一〇	三四%
同　十　年	一、四八九、八五五	七三〇、五六八	四九%
同十一年	一、四二九、六八九	六〇四、八〇一	四二%
同十二年	一、五二一、〇五〇	四九九、〇七一	三三%
同十三年	一、六二五、〇二四	四五五、一九二	二八%
同十四年	一、五二四、九八八	四三三、八〇八	二九%
同十五年	一、五七八、八二六	四三四、二四八	二七%
昭和二年	一、七六五、七二三	四九一、六三九	二八%
同　三　年	一、八一四、八五五	五一七、二三七	二九%
同　四　年	一、七三六、三一七	四九四、九二〇	二九%
同　五　年	一、六〇六、七一六	四七三、二八〇	二九%

備考　昭和三年度迄は決算、四年度は國庫現計、五年度は實行豫算による。

右の表は何を語るか。政府は軍事費が年々低下の趨勢にあると云ひたかつたのだ。だが、×××××。此の表では一般會計中の陸海軍省

費合計が軍事費の全部となつてゐる。然るに、事實は陸海軍兩省費の絶對額の漸增と同時に他省所管中に巧妙に織り込まれた軍事費は近年に到つて非常な增加率を示して來た。海軍に於ける製艦費、艦艇維持費、陸軍に於ける衣糧費、兵器馬匹費等以外に、最近の×××規模・樣式・性質の變化に應ずる軍事關係支出はますます陸海軍省以外に於いて增大するばかりだ。之を昭和五年度實行豫算の一般會計内に見ても次の如くだ。(單位圓)

外務省	
國際聯盟常設軍事委員會費	一六〇、九五六
講和條約實施費	三八九、一八六
內務省	
廢兵院費	一一一、八二四
徵兵費	一、三六五、四五七
軍事救護費	一、一四六、一七七
大藏省	
憲兵司令部其他新營費(營繕費中)	三九四、六九〇
海軍々法會議及學校其他新營費(同)	七四、七三〇
支那事件行賞諸費	七四、〇四一
文部省	
航空評議會費(本省費中)	八、六九四
青年訓練費補助(普通教育費中)	一、五〇〇、〇〇〇
短期現役服役教員俸給支出金(同)	六六五、二三二
青年團及少年團事業(補助費中)	三〇、〇〇〇
第三回少年團國際大會派遣費補助	四〇、〇〇〇
農林省	
馬匹改良增殖獎勵費(本省費中)	一五四、五〇六
種馬所及種馬牧場費	一、七九二、八二二
商工省	
戰時海上保險補償金	一一、〇三七
遞信省	
航空獎勵金(補助費)	三五六、八〇〇
航空輸送補助(同)	二、七五〇、〇〇〇
船舶試驗渠設置費	六二、九五一
航空路設置費	一、二八〇、八四六
無線電信施設費	三八、〇三四
支那事件費	二、六二六

此の他に同年度內に追加豫算として計上された分には次の如き費用がある。(單位圓)

陸軍省	
青年訓練者及檢定不合格者の在營に要する經費	三八一、四六〇
無線電信施設に要する經費	二四一、六六六
軍馬の傳染性貧血防遏に要する經費	五〇、〇〇〇
海軍省	

既定計畫に基く新艦船の維持費　一、三六四、七六一
既定計畫に基く新規航空隊の維持費　五六四、七五七
航空母艦加賀飛行機維持費の增加　一九六、三八五
通信學校獨立に要する經費　一六、六六七
横須賀工廠發動機研究部設置に要する經費　一八、五七三
大演習に要する經費　四、〇〇〇、〇〇〇

農林省

肥料配給改善事業に關する經費　三〇、五五六

商工省

人造藍製造奬勵金の增加　二九七、八九四

之等の一般豫算中の軍事關係費總額四億八千五百六十九萬一千圓が一般會計總歳出中に占める割合は三割四分だ。この外に陸海軍兩省所管の造兵廠、製絨所、火藥廠、燃料廠等の特別會計がある。これ等はすべて直接の軍事費だ。そしてその總歳出に對する割合が低下の情勢にあるといふ事實はたゞ次のことを意味するに過ぎない。卽ち、國內に於ける『階級××』の（削除）がブルジョア財政の歳出費用中に「（削除）××費」に屬する行政費を躍進的に增加すべく餘儀なくしたからだ。中央地方を通じて警察費のみが一億五千萬圓に上るといふ事實は國內無產階級の政治的擡頭に對する（削除）であるかの證左となるだらう。その他如何に外くの硬軟併せた反動政策費が增大したことか！　すでに今日では、軍事費として（削除）維持しつゝある軍備費を數へ得るばかりでなく、國內（削除）の諸支出をも數へていゝ。ブルヂョア國家（削除）の財政は全く××を中心として組立てられてゐる。そして、無產階級の血稅——たしかに肉體をも含めた——がその支柱だ——とするならば無產階級は此の事實に反對し自ら（削除）に立ち上らなければなるまい。昭和六年度豫算にはかゝる二樣の意味に於ける『××中心の組立』が最も鋭く現はれてゐる。其はその儘に『軍事豫算』だ。

（十一月十日）

年末と小賣商

檜六郎

1

ブルジョア新聞は、いはゆる大川財閥系の樺太工業會社とか大日本人肥會社のごとき若干の札付會社が、政府および日本銀行の心配で、どうやら年末の金融がつくことになつた結果、『わが財界』は年末無事經過するだらうと報じてゐる。産業資本閥の一たるすでに沒落した若尾財閥の後を承けて、沒落の有難くもない白羽の矢をたてられてゐた大川財閥も、大金融資本閥ひいては濱口内閣のお情けによつて、餘命を幾分取り止められたわけである。が、お情けはあくまでお情けであつて、かうした『穩便な』態度をとつた大金融資本閥およびブルジョア政府の眞意は、むろん、これによつて財界整理過程を絶對的に固定しようといふのではなくて、むしろ最も有効且つ巧妙に『整理』を強行するために、年末といふ最も社會的・經濟的に混亂し易い時期における整理強行を一時回避したまでである。すなはち、この下半期における資本攻勢の増大は、何人も否定出來ぬやうに、勞働階級の抵抗をかつて見ないほど深刻化し、加ふるに農村窮乏の刻々の激化はこの出來秋を待つていかなる事態をひきおこすやも計り難いといふ・全國勞働者および農民大衆の息づまるやうな、雰圍氣は、皮肉にも、危機に瀕する産業資本閥に對する一種のカンフル注射たる副作用をなしたのである。だが、勞働者、農民はむろんのこと、わが小賣商にとつても、年末を控へて、一體どんな『カンフル注射』があるといふのか。

2

全體としての小賣商が、すでに沒落の道を急ぎつゝあることには、今日何人も異存あるまい。尤も、三越、白木屋とかいふ百貨店も一種の小賣商ではないかといふ『物識り』には、筆者はまた何をか云はんやである。

全體としての小賣商沒落の最大原因の一つは、小賣商の數が、絶對的にも相對的にも過剩になつたことである。

小賣商過剩の原因は、(イ)サラリーマンの内職、主人歿後の遺族や、退職・解雇等による失業者の方向轉換策としての商店開業の増加および商人志望者の自然増加等の絶對的過剩原因と(ロ)百貨店、連鎖店、通信販賣、消費組合、購買組合、公私設市場等の發達による相對的過剩原因に二大別し得るであらう。

まづ、絶對的過剩原因を見てみよう。

今日、サラリーマンの多くは、俸給以外の

何等かの形の副業ないし内職によつて辛うじて生活を維持してゐる。試みに、大都市の郊外における小商店を調べてみるがいい。いかにサラリーマンの内職ないし副業としての小商店が多いことか。

また、退職・解雇等による諸々の失業者がなけなしの退職手當ないし解雇手當等をはたいて、いかに多くのちつぽけな『店』を張つてゐることか。（尤も最近では、素人商人に早變りするものは大概露店開業である。彼等の退職・解雇手當をもつて一軒の店を張ることは、今日大多數の場合不可能だからだ。）

さらに、既存小賣商の子弟ないし店員の増加は、必然に、商人志望者の自然増加をもたらす。（これまた、最近では、彼等の商人志望は單なる志望に止まつていはゆる『のれん』を店主から分けて貰ふやうな習慣は、事實上僅かしか行はれてゐない。すでに店主そのものに分けてやるべき『のれん』がなくなつてゐるからだ。）

3

が、以上の絶對的過剰原因は實は今日では、小賣商沒落の大した要因をなしては居らぬ。なぜなら、かうした原因による小賣商の『増加』は、今日ほとんど不可能だからである。

ところが、右にあげた小賣商の相對的過剰性は、小賣商沒落の大きな要因をなしてゐる。

例へば、小賣商問題といふと、吾々は直ちに百貨店の姿を思ひ出す。小賣商にとつては、今日、それほど、百貨店の存在が死活の問題になつてゐるのである。私は、ここで、百貨店對小賣商の問題を詳しく取扱つてゐるいとまはないが、最近における大百貨店の巨歩的發展振りを見るものは、理窟なしに、小賣商の沒落促進を直感するはずである。例へば、最近成功した三越の新宿大分店をみるがいい。新宿附近の小賣商の一部は、新宿名物が新に一つふえた結果、むしろ客足をひいて各小賣商の賣上げも増加したと悦んでゐるさうだが、これは一時的現象にすぎなからう。結局は、三越分店に喰はれる運命にあることは否定出來ぬ。もしそれ、中央線沿線に於ける小賣商に至つては、すでに三越新宿新分店の開業は大脅威となつてゐる。

たま／＼三越に言及した序でに、さらに一言すれば、最近三越は『不景氣を逆に當てこんで』三越大百貨店網を、横濱、京都、名古屋、仙臺、札幌、福岡、廣島、金澤、基隆、臺北等全國主要都市四十八ヶ所に張るべく、劃策中と傳へられ、各都市の小賣商は大恐慌を來してゐるといふ。

全國的百貨店網組織は、今さら說明するまでもなく（イ）商品切手の全國的活用による資金融通（ロ）投下資本の運轉速度促進（ハ）商品の地理的ないし季節的塩梅による無駄排除（ニ）大・中都市における分店開設からさらに小都市分店開設への發展による文字通り

の全國的販賣機關の統制可能（ホ）大規模宣傳費の節約等々の利益によつて、益々利潤率を增大し得るのである。

その他、連鎖店制度（東京で云へば資生堂、森永キャンデイーストア、明治製菓賣店、甘栗太郎、三河野、マルタ號パン等々）のごとく、同一資本系統によつて分散された小賣店舖の連鎖、大雜誌出版所の代理部制度のごとき通信販賣、諸種の公私設市場、消費組合制度等の發達は、獨立小賣店の相對的過剩の原因をなし、これらの陷落を早めつゝあることは、多言を要しないであらう。

4

かやうに、小賣商は、今日、いろ／＼な競爭者のために、だん／＼隅へ押しつめられつつある。なにしろ、例へば東京市內では、米屋や酒屋のごときは二十軒位の常顧客によつて生活してゐるさうである。フリのお客もないではないが、多くの小賣店にとつては、かうしたお客はあまり當てにはならぬ。（東京市における小賣商全體の統計によれば世帶數約八戶につき一軒の小賣商を有するといふ。）

この場合、小賣商はどうして店を張つて行けるかといふと、普通の考へでは、結局『薄利多賣』で行くか、『高利少賣』で行くよりほかはないといふことにならう。

ところが、『多賣』するとすれば、よほど『薄利』でなければならぬ。しかし、元々競爭者が多いのだから『多賣』は見込みがない。『薄利』にも限度がある。と云つて、あまり『高利』にしては『少賣』どころか、少しも賣れないかもしれぬ。これは、わかりきつた話である。

だが、今日の小賣商にとつては、すでに、かうした薄利多賣とか、その逆とかを商賣政策として考慮する餘地がなくなつてしまつたのである。それは、なぜであらうか。一言で云へば、特殊的には金解禁、一般的には世界經濟恐慌の深大化は、容赦なくわが小賣商の咽喉を絞めつけつゝあるからである。

すでに、小賣商は、難かしく云へば、資本主義經濟の高度發展による中間存在たる『商業』機能の衰頽（獨占化した產業部門はもちろんのこと、獨占化せざる產業部門といへども生產者から直接消費者へのスローガンが漸次現實化しつゝある資本主義の發展に伴ふ大資本、大經營による販賣組織の發達等々によつて本質的に沒落の運命に置かれてゐるところへ、金解禁、世界經濟恐慌の深大化は、最後的な打擊を小賣商の頭上に加へつゝあるのである。

手取り早く云へば、物が極端に賣れなくなつたのである。すなはち、ほとんどあらゆる商品生產につき驚くべき高率生產制限が行はれてゐるにかゝはらず、社會的消費――購買力――がこれに伴はないのである。

物價は止め度なく下落する。が、需要はこれに伴はない。從つて、さらにストックは增

大し、物價は低落する。商品を手持ちしてゐるものは、極端に云ふと、刻々値下りで損をして行く。小賣商に商品を卸す問屋業者は、卸賣物價の低落率が小賣物價の低落率より甚しく、且つ値下りを食ふ手持商品の量が小賣商のそれよりも多量であるがために、勢ひ、損失の度がはげしい。從つて、最近における問屋の沒落は、その程度においては、むしろ小賣商のそれよりも激甚であると云ひ得る。

5

ここで、問屋と小賣商との關係について、一言するのも、あながち無駄ではあるまい。

問屋業者は、資本主義獨占化の發達と共に、小賣商よりもさらに直接沒落のテムポを早め各種産業部門を通じて、極く少數の特殊的なものを除いては、概して氣息えん／＼たる有樣である。特に昭和二年の金融恐慌以後周知のごとく中・小銀行沒落による金融難の激化で、大半は再起不能とまで云はれてゐる。從つて、問屋業者が當面の難關切拔け策として考へ得ることは、生産者に對する代金の支拂延期、小賣商に對する賣掛代金回收の督促である。他方、小賣商は、出來るだけ消費者に下落一方の價格の維持ないし吊上げその他によつて負擔を轉嫁すると共に、當の問屋に對しては極力仕入品の不拂ひを實行しようとする。これは自然の勢ひである。

さらに、一方、消費者の大部分を占める一般無産大衆は、加速度を加へる生活條件の惡化（失業續出、賃銀・俸給の引下げ、その他諸種の原因による收入の減退）によつて、購買力が遞減する結果、今まで通り小賣商から物を買ふとすれば、勢ひ掛けを利用して拂ひを惡くする。從つて小賣商の貸仆れが増加する。從つてまた、前に述べたやうに小賣商は不拂ひによつて問屋に負擔をはね返へす。問屋は、また、生産者へ負擔を轉嫁する。不景氣が深刻化すれば深刻化するほど、このいたちごつこが深刻化するのである。

商人間の貸仆れは、むろん昔からある現象である。だが、普通の商人間にあつては、貸仆れは、大概商賣の思惑違ひから起つたものであつた。例へば、呉服商ならば流行新柄をあまり大量に仕入れたところ思惑通り賣れなかつたとかいふ場合であつた。

ところが、今日では、かうした思惑違ひによる貸仆れとか不拂ひとかといふことよりも大概の小賣商は、純然たる生活費のために、問屋に不拂ひするものが、極めて多くなつたことは顯著な事實である。

6

例年の歳末ならば、各小賣商店は、歳末大賣出しに狂奔するところであるが――むろん本年とても歳末聯合大賣出しがなくなるわけではないが――本年の場合はよほど趣きを異にするだらうといふ豫想は、專門家筋のほとんど一致した見解のやうである。

このことは何を意味するだらうか。

例年の小賣商店の歳末大賣出しは、大局的に觀察すれば、これによつて賣上げの增加從つて利潤の增大を計り問屋に對する大節季の決濟をなし、さらに明春の商賣發展の基礎を築かうといふ商賣上極めて大事な年中行事の一つであつた。各商店はこの歳末大賣出しと中元大賣出しによつて、來るべき商賣發展の基礎たらしめんと欲し、且つある程度まで實現されたのである。

ところが、本年末の事情は、ほとんど一變してゐる。

親しく東京市內外の年末を控へた各商店街を觀察・調査した某專門家が、筆者に語つたところによると、大多數の小賣店主は、歳末大賣出しの空景氣だけでは、明春の發展の基礎はおろか、家族の純生活費さへ捻出出來ぬと見て、例年のやうに大賣出しそのものの技術的工夫に浮身をやつすものはないといふ。

換言すれば、本年末の大賣出しは、大晦日に支拂ふべき生活上の諸支拂ひさへ保證して與れさうもないといふのが、大多數の小賣商の考へだといふ。

從つて、大多數の小賣店主の腹は、滯りに滯こつた問屋への決濟はむろん出來るだけ明年まで延期し、せめて歳末大賣出しによる賣上げ金を以て、年の瀨を越すに必要な生活資金(商賣資金ではない)を得ようといふのである。

大部分の小賣商にとつて、今日焦眉の最大問題は、いかにして商賣を發展させようかといふことよりも、むしろ、いかにして毎日食はうかといふ問題でゐる。彼等は、いまこそ、文字通りセミ・プロレタリア化してきたのである。彼等は、全く賣喰ひの狀態にあると云つていい。賣喰ひと云つても、自己の私有財産の賣喰ひではなくて、他人の(問屋の)商品の賣喰ひである。かういふと、さも小賣商は、すべて法律上横領罪を構成してゐるやうだが、幾分かは問屋側の追及で支拂つて居り、且つ甚しき惡意の小賣商に非るかぎり支拂ふ意思は持つてゐるのだから、もとより法律上横領罪とかなんとか難かしく云ふべき筋合ではない。今日、いかに不渡手形が激增したことか、いな不渡でもなんでも手形を債權者に押しつけ得るものは、羨望の的となつてゐると云つても過言ではない。

7

結局、年末にあたつて、大多數の小賣商のなし得、またなさんとしてゐることは、問屋に對する支拂延期・諸生活費の節減、小活諸拂ひの減額ないし延期、××の××と云つたやうなごく消極的な對策に止まるだらう。

尤も、なかには日歩五十錢、ないし一圓位で高利貸から借金してまでも、年の瀨を越さうと焦慮してゐるものもゐようが、これは生活費の捻出策とか問屋への支拂策といふより

も他の高利貸からの借金の借替策が大部分を占めるものと考へられる。問屋への支拂ひは、『善意』の小賣商さへも、本年末は他の小賣商の例に倣つて延期する窮餘の策に出るだらう。從つて、高利貸のばつこは案外本年來は少いやうな奇現象を呈するかもしれない。

かやうに、大多數の小賣商は今やほとんど窮乏のどん底に陷つてゐる。（農村における小賣商も農産物價格の大慘落に遭つては、これまた農民から貸金の取立ては大部分不可能と見られるから、勢ひ問屋への支拂ひも延期されるであらう。）

しかしながら、小賣店主のイデオロギーは今日なほ、大部分は封建的、奴隷的、保守的性質のもので、彼等の善意にかゝはらずかやうな生活窮乏のどん底に叩きのめされながらも、出來るだけ自己の運命をあきらめることによつて、その日暮しに甘んじようとしてゐるが、彼等の頭の中には追つても〳〵拂ひのけられないたゞ一つの疑惑の種子が生長しつゝあることは、見逃されない事實である。それは何であるか。

今日まで、彼等は、漫然景氣循環説を信じて居つた。ナーニもう少し我慢すれば、また景氣がくるといふことが、從來不況時における彼等の考へ方であつた。ところが、今日つひに彼等は、今日の不景氣が昔のそれとなんとなく違ふことを漠然ながら感じてきたのである。どうしても飛び越えることの出來ない深淵が、彼等の前に立ちはだかつてゐることを感じてきたのである。彼等の多數は、理論を知らない。たゞしかし、彼等は、容易ならぬ時勢が目前に迫りつゝあることを感じてきたのである。

彼等のこの漠然たる恐怖、焦燥、不平、覺醒の芽を、一つの明確な旗印の下に再整理し成長させることが、今日共同戰線黨としての無産政黨に與へられた重大な任務の一つではなからうか。（三〇・一一・一記）

新刊紹介

◇生は闘ひの上にあり　麻生久著・著者十年の闘爭血戰錄で足尾血戰記、日立鑛山事件入獄記其の他隨筆等どの篇も興が深い。（東京神田今川小路一ノ一大鐙閣・價八十錢）

◇英國經濟組織の史的考察　アッシュレー著・徳增榮太郎譯・（東京神田小川町ビル三〇六區森山書店・價二圓五十錢）

◇日本經濟の實體　高木友三郎著・著者は日本經濟界の前途を悲觀せず日本的基調に立つて根本政策を樹つるにあるといつてゐる。（東京京橋第一相互館千倉書房・價一圓）

◇販賣革命　中村第三著・新販賣術に對する研究。（發行所同前千倉書房・價一圓廿錢）

◇農村を語る　丸山義二著・柔かい筆で描いた農村スケッチ集。（東京神田小川町四一泰文館・價一圓二十錢）

◇廿一大先驅記者傳　福地源一郎福澤諭吉西村天囚黒岩涙香田口卯吉等二十一人の評傳。（大阪每日新聞社編・並製一圓上製一圓廿錢）

恩給亡國

前田繁一

一

財界の不況は益々深刻である。事業界は云ふ迄もなく一般國民の收入激減して至る所に事業經營難の聲を聞き、失業者徒らに増加して國民生活の苦難いよ〱其の度を加へる。一般國民所得の激減と之れに伴ふ購買力の減退が、國庫收入の激減を招來すべきは云ふ迄もない。政府は此の國庫收入の激減に對應すべく既に昭和四、五兩年度に於て大節約を斷行した財政に對して、更に昭和六年度も一大緊縮を決行し、人件費も物件費も、既定經費に對して五分乃至一割、一割五分乃至二割と云つた樣に、各種の費用に對して天引的大削減を加へたのである。此の難局に處しての政府の苦心就中井上藏相の苦心と努力は大いに買つてやるべきであり、其の額に於て意に滿たざるものがあるが、兎も角も多少の減税を行ひ得る事になつた事は、國民の多年要望して止まなかつた所であるだけに其の勞を多とすべきであらう。が、吾人は昭和六年度豫算案を一べつし、且つ其の成案を見るまでの政府の態度、就中陸海軍當局の態度を瞥見して吾人がひそかに期待せる事の實現せざりしものあるに大なる失望を禁じ得ないばかりか其の將來に大なる憂ひを殘さんとするのを甚だ遺憾とする。何となれば現内閣が其の重大政綱の一として必ず實行すべきを公約し、組閣以來特に機關を設けて調査立案しつゝある筈の軍制改革案及び、行政審議會で調査立案せる筈の恩給法改正が遲くも、昭和六年度には實現するであらう事を期待されたにも拘らず、共に實現の運びに至らなかつたが爲である。

二

軍制改革の問題は暫く措き恩給法の改正は多年の懸案なのである。

恩給そのものが支給さるゝ者の間に大なる不公平があるばかりか、若くして貰ひ得る此の恩給が、若者をして精神的に老衰せしめ勤務をいとはしめ、國民を怠惰に導き、國庫は年々激增して止まない恩給の支拂ひに依つて他の緊急缺くべからざる各種の施設に多大の支障を來たさしめ、國の財政をして益々困難、苦境に導くのである。それが爲に歷代內閣は常に此の恩給法改正の必要を痛感し、輿論又恩給亡國すら力說して其の改善を政府に要望して止まないのである。今試みに我が國庫の支拂ひつゝある恩給及び年金額を示すと左の通りになつて居る。（單位千圓）

恩給年金累年增加表

年　次	恩　給	年　金	合　計	
明治二十五年度	八六八、八七〇円	一三〇、三〇七円	九九九、一七七円	明治四十三年內閣印刷局刊行の明治財政史所載の恩給支拂額に依る
同　三十五年度	四、一〇八、五四二	九〇四、六四〇	五、〇一三、一八二	
大正元年度	二〇、二四六、六五四	九、九二二、九五三	三〇、一六九、六〇七	決算書の支拂命令又は支出濟額に依る
同　十年度	六三、一〇五、八五六	一〇、一一九、六七二	七三、二二五、五二八	
昭和元年度	一二五、八七五、七一四	八、九二一、九三二	一三四、七九七、六四六	
同　二年度	一三七、二二一、一九三	一一、八四四、六一〇	一四九、〇六五、八〇三	
同　三年度	一三〇、二二四、四六三	一一、八三三、六〇一	一四二、〇四七、〇六四	
同　四年度	一三三、八三三、九九九	一一、五三八、五八五	一四五、三七二、五八四	
同　五年度	一三四、一五一、二五一	一一、四五七、七四七	一四五、六〇八、九九八	實行豫算額に依る
昭和六年度	一三六、二〇三、四〇三	一一、一八八、一一三	一四七、三九一、五一六	大藏省豫定額に依る

即ち最近の增加振りのみを見ても、大正十年度から昭和元年度の五ケ年に於て、恩給の支給額は六千三百萬圓から約倍額の一億二千四百萬圓近くに激增し、其後の五ケ年に於ても一千二三百萬圓を增加して一億三千六百萬圓となり、年金を合算すれば昭和六年度豫算に於ては實に一億四千七百餘萬圓の巨額を示し、一般會計の總豫算額の一割以上と云ふものが此の恩給年金の爲に消えて無くなる狀態なのである。更に各年別に之れを見ると、每年二百萬圓乃至四百萬圓づゝ增加して行くと云ふ狀態であつて、財界の不況深刻化して國庫の收入激減して止まない近年の如きも、恩給の支給額は逆に增加し、歲入が前年度に比して一億七八千萬圓も激減すると云ふ昭和六年度に於て、恩給の支給額は前年度より二百餘萬圓も逆に增加すると云ふ有樣なのである。從つて心ある者が現行恩給制度を以て我が財政上の一大癌なりとし、之れに對する一大手術の必要を力說するのは寧ろ當然過ぎる程當然である。

三

殊に現行の恩給制度に於ては、恩給を給與すべき在職年限が文官及び教育職員並に待遇職員に於て十五年以上となつて居るのに對して、

軍人及準軍人が十一年以上であり、警察監獄職員が十年以上と云ふ事になつて居り、國務大臣に至つては國務大臣としての在職年限が五ヶ年以上なれば事足ると云ふ事になつて居るのである。其間非常に不公平がある。或ひは此の在職年限なるものが、其の勤務の危險なると否とに依つて此の差を設けたりと云はんも、此の勤務上の危險を償はんが爲には、別に優遇規定が設けられて居るのである。即ち恩給法の第三十二條に於て、公務員が其の職務を以て從軍した時には、それが戰地の從軍であればその期間一月に付き三月を加算し、戰地以外の職務に服した時には一月に付き一月半を加算する事になつて居る。又第三十三條乃至三十九條に於て、公務員が外國の交戰又は擾亂地域内に於て危險を顧みず勤務した時には在勤期間一月に付二月を加算し、戒嚴地境内の勤務に就いては一月に付き二月を、それが内地であれば一月に付き一月を加算する。さうして又公務員が外國鎭戍に服した時には一月に付き一月半、航空機乘務員が航空勤務に服した時は其の期間一月に付き二月以内を、潛水艦乘員に對してはその乘艦期間一月に付き一月を夫々加算するのである。更に又不健康地の勤務又は不健康なる業務に一年以上勤務する時には、其の期間の一月に付き一月以内を、海上勤務員の遠洋航海勤務に對しては一月に付き半月をそれぞれ加算する事になつて居るのである。即ち軍人が戰地に從軍した期間は一月を四ヶ月とし、戰地外の從軍でも一月を二月半として計算するのであり、不健康地の勤務は一月を二月として計算すると云ふ風に、その危險性に應じて優遇法が講じて在るのである。從つて平常勤務に置ける前述の在職年限の差異は、徒らに軍人偏重の遺物としてのみ意味付けられやうが他に全くその必要を認め得ないのである。

斯くの如く既に其の在職年限に多大の不公平を存する結果は、萬一不幸にして公務の爲に不具癈疾者となりし場合に於ける在職年限の繰り上げに於ても、必然的に一大不公平をもたらして居るのであり、更に又勤續十五年以上にして始めて恩給を受け得る文官が、四十年以上何程勤續しても在職四十年としてより恩給を給與されないのに對し、在職十一年にして恩給を受け得る軍人は五十年まで其の勤續年數に應じて恩給が貰ひ得るのである。然うして文官は在職十五年以上に始めて在職年限十五年以上十六年未滿の者に對して退職當時の俸給年額の百五十分の五十、十五年以上一年を増す毎に其の一年に對して百五十分の一に相當する金額を加へた金額を給與されるのに對して、軍人及準軍人は在職十一年以上にして退職すれば、其退職當時の階級及其の在職年數に應じて恩給金額を其の在職年數に應じて恩給が給與されるのである。今軍人の給與される恩給金額を其の在職年別に就き、兩種を抜き書きして見ると左の通りになつて居る。

軍人の恩給

在職	將官及相當官―佐尉官及相當官（高等官）親任	一等	二等	三等	五等	八等	准士官下士（判任官）一等	二等
十一年	二、五〇〇円	二、一六七円	一、八六七円	一、五三四円	一、〇八四円	四六七円	四〇〇円	二八〇円
十五年	二、七〇〇	二、三四一	二、〇一七	一、六五六	一、一七〇	五〇五	四三二	三一五
二十年	二、九五〇	二、五五八	二、二〇四	一、八〇八	一、二七七	五五二	四七二	三四八
二十五年	三、二〇〇	二、七七六	二、三九二	一、九六二	一、三八五	六〇〇	五一二	三八五
三十年	三、四五〇	二、九九三	二、五七九	二、一一三	一、四九二	六四七	五五二	四一八
三十五年	三、七〇〇	三、二一一	二、七六七	二、二六六	一、六〇〇	六九五	五九二	四五五
四十年	三、九五〇	三、四二八	二、九五四	二、四一八	一、七〇七	七四二	六三二	四八八
五十年	四、五四〇	三、八六三	三、三二九	二、七二三	一、九二三	八三七	七一二	五五八

四

國務大臣なるが故に在職五ヶ年にして國務大臣として受けたる俸給を基礎としての恩給が貰へ、軍人なるが故に在職十一ヶ年にして既に恩給にあり付ける。然るに文官なるが故に十五ヶ年以上勤續しなければ恩給を受け得ないと云ふ狀態であるのを始め、現行制度が高官と軍人に厚く、下級官吏と文官に薄い。非常に不公平極まると云ふ點が恩給を改正すべしと爲す一大重要なる理由たるは云ふ迄もない事であり、少しく恩給制度に通ずるもの丶等しく其の必要を痛感する所であらう。然しながら現行制度を是非共改正しなければならない重要なる理由は、尙他にも二三にして盡きないのである。即ち其の重なるもの丶一つは財政上の見地からであり、今一つは經濟上の見地からである。さうして他の一つは若くして精神的に老衰せしめ、怠惰に導く事を防ぎ、加ふるに恩給の二重取り三重取りの不當不合理を防止せんとする見地からである。更に他の一つは軍人なるが爲に特に優遇する事が、軍人をして獨り軍人のみが國防に任じ得るかの如き態度に出でしめ、國防々々を專賣特許の如く心得させ、國民の負擔に依つて國防を充實し得る事も、國民の負擔に依つて自己が衣食し、恩給にも在りつき得る事も更に又國の財政狀態の如何をも顧みる所なくして常に我が財政上の負擔を重からしめ、國民の負擔を加重するが如き行動を敢てせしむる點である。

財政上及び經濟上の見地からする恩給法改正の必要なる所以は、前述した恩給の激増振りと財政の緊縮等と對照して一考しさへすれば、敢て說明せずとも諒解し得る所であらう。即ち財界が今日の如く極端なる不景氣に沈衰し、一般國民の收入激減して物價激落し財政極度の減收を來たし、政府は豫算の大緊

縮を行ふの外なき時代に於て、恩給のみ年々激増して止まない事は財政をして益々窮迫に導くのである。のみならず一般人件費を五分も一割も減じたに拘らず、恩給のみ舊態を維持する事は、それだけ恩給を增額されたと同樣の結果を招來し、其處に多大の矛盾、大なる不合理を生ずるのである。

次ぎは現在の制度に於ては文官でも十五年勤めれば恩給がつくのであり、假りに二十五歳にして公務員たらんか、四十歳にして既に恩給を受け得るのであり、二十一歳より軍人たらんか三十二三歳にして早くも恩給に在り付き得るのである。のみならず軍人に於ては其の在職中滿州及び朝鮮等に勤務し、又は海上勤務をすれば其の在職年を重複計算せられ、勤續年限が十一年であつても或は二十二年若くは三十年も以上にも勤續したものとして年々多額の恩給を受け得るのである。斯くの如く若く、働き盛にして恩給を受け得ると云ふことは、其の年限に達すれば「自分はもう恩給がつくのであるから何時止めさせられても良い」とて、其の勤務上の熱の薄らぐ虞れがあり、一般をして徒らに精神的老衰に導く虞れがある。若し又狡猾に立ち廻つて恩給の二重取り三重取りを爲さんとすれば、恩給年限の到達と同時に三十五乃至四十歳にして東京市又は横濱市等の地方公共團體に奉職し、其處に十年なり十五年勤續すれば其の公共團體の規定に基く恩給が得られ、更に他の公共團體の公吏たれば其處でも恩給を貰ひ得る。即ち二重にも三重にも恩給を受け得るのである。然も眞面目に一生を捧げて同一勤務に服したものは、如何に其の勤續年限が長くとも其の勤務せる經濟より受くる恩給のみと云ふ事になるのである。

最後に軍人偏重の恩給法改正を必要とする所以は、之れ又多くを語らずとも昭和六年度豫算編成時に於ける軍部當局の態度、殊に海軍縮小に伴ふ留保財源の處分、即ち減税と補充計畫費の割當に對する海軍當局の態度、陸海軍が經費節約に反對して財政當局をテコずらせた事等に鑑みれば、自ら判然するのである。

之を要するに恩給法改正の必要なる所以は到底枚擧に遑なきのみならず、多年の懸案であり財界の現狀、財政の現狀を以てして其の改正の緊急を要する事たる、又駄辯を要せざる所なのである。然も政府は之れを改正すべく公約しながら、軍部の思惑のみに氣兼ねして未だ實現の運びに至らず。軍部又常に自己に不利なれば結束して立ち、內閣の倒壞は勿論財政の窮迫も國民の負擔の加重も顧みざるが如き態度を持續し、國民の要望達成を妨ぐるの大なるものあるは遺憾千萬である。

五

然らば現行制度を改正するとして如何なる點を如何樣に改正すべきで

あらうか。少く共恩給を給與すべき最低在職年限の統一及び延長、恩給を給與すべき在職最高年限の統一及び恩給法納金の増額並に軍人その他にも同樣に納付せしむべき事、然うして恩給の二重取り三重取りの弊を防止する事などは是非斷行すべきであらう。即ち現在に於ては國務大臣なるが故を以て在職五ヶ年で事足る事になつたり、軍人なるが故に在職年限は文官より四ヶ年も短くて良い上に、更に戰地、戰地以外の從軍及び航空、海上勤務その他に對して一ヶ月を二ヶ月半乃至四ヶ月にも計算するが如き、其の職務上の危險を償ふ爲に二重にも三重にも優遇する事になつて居るのを改めて、在職年限は文官同樣に十五ヶ年以上とし、其の職務上の危險に對する優遇は從軍又は危險な勤務の爲にする服務期間の重複計上のみとすべきである。然も其の重複計上に關しても、其の危險性に應じて改善すべきは勿論である。現在文官は四十ヶ年以上の勤續は四十ヶ年として計算し、軍人は五十ヶ年以上の勤續を五十ヶ年として計上する事になつて居るのを統一して、何れも三十五年若くは四十年以下とすべきであらうし、若くして恩給年限到達と共に他の經濟に轉職するものに對しては、其の勤續し得る間、働きつゝある間は恩給の給與を停止すべきであり、更に出來得べくんば其の勤務する經濟の如何を問はず、其の通算したる在職年限に應じて恩給金額を決定すべきである。然うして現在文官及び教育職員並に待遇職員に納付せしめつゝある「毎日其の俸給の百分の一に相當する金額を國庫に納付すべし」と云ふ恩給法納金制度を軍人等にも適用し、且つその納付金額を今少し増額すべきであらう。若し前述した點のみに就いて改正を加へるとしても、國庫の負擔は相當減じ得るばかりでなく、恩給制度そのものゝ不公平から來る不平不滿を大いに減じ得るのであつて、財政上及び思想上益する所は少くないのである。

要するに問題は懸つて政府の力量如何に在る。常に軍部に氣兼し、「軍部の機嫌を損せんか、内閣の壽命危し」とて政府が恐れおのゝく間は、軍部をして何時迄も無反省、無自覺な現狀に置き、到底其の實現は期して得難いのである。若しそれ政府が國民全體の利益を念じ「一朝有事の際は國民皆兵、増税又辭せず」の我が國民性を十分に理解し、國民全體を背景として國民多年の熱望であり不況深刻化して愈々益々急務なりとする此恩給制度の改正や、國民負擔の輕減を背負つて立ち、其の實現に全力を盡すに於ては、萬一軍部が之れに反對して其實現を阻止せんとしても一般國民は斷固として軍部の非を排擊すべく、如何に軍部と雖も國民である以上、一般國民が擧つて政府を應援するのに對して反對し得るものではない。若し強いて反對せんか、國民の軍部に對する尊敬信賴の念を傷け、それこそ由々しき一大事の惹起せんも計り難いからである。故に故人は重ねて云ふ恩給法の改正は刻下の一大急務であり、之れが改善の實現は懸つて政府の誠意の有無と力の如何にあると云ふ事を……。

老中の眼鏡

佐々木味津三



ゆらりとひと揺れ大きく灯さしが揺れたかと見るまに、突然パッと灯りが消えた。奇怪な消え方である。

「……………？」

對馬守は、突嗟にキッとなつて居住ひを直すと、書院のうちの隅から隅へ眼を放ち乍ら、靜かに闇の中の氣配を窺つた。

――オランダ公使から贈られた短銃も、愛用の助廣もすぐと手の屆く座右にあつたが、取らうとしなかつた。刺客だつたら、とうに覺悟がついてゐるのである。

だが音はない。

吸呼のはづみも殺氣の動きも、窺ひ寄つてゐるらしい人の氣配も何一つきこえなかつた。

しかし油断はしなかつた。――少くも覺悟しておかねばならない敵は三つあるのだ。自分が井伊大老の開港政策を是認し踏襲しやうとしてゐるために、國賊と罵り、神州を穢す賣國奴と憤つて、折あらばとひそかに狙つてゐる攘夷派の志士達は勿論その第一の敵である。開港政策を是認し踏襲しようとしてをり乍ら、倒れかゝつた江戸大公儀を今一度支へ直さんために、不可能と知りつゝ攘夷の實行を約して、和宮の御降嫁を願ひ奉つた自分の公武合體の苦肉の策を憤激してゐる尊王派の面々も、無論忘れてはならぬ第二の敵だつた。第三は頻々として起る外人襲撃を憤つて、先日自分が聲明したあの言質に對する敵だつた。

「公使館を燒き拂ひ、外人を害めて、國難を招くがごとき狼藉を働くとは何ごとかッ。幕政に不滿があらばこの安藤を斬れ

ッ。この對馬を屠れッ。それにてもなほ憤りが納らずば將軍家を弑し奉ればよいのぢや。さるを故なき感情に激して、國家を危うきに導くごとき妄動するとは何事かッ。閣老安藤對馬守、かやうに申したと天下に聲明せい。」

さう言つて言明した以上は、激徒が必ずや機を狙つてゐるに違ひないのだ。——刺客としたら言ふまでもなくそのいづれかが忍び入つたに相違ないのである。

對馬守は、端然として正座したまゝ、潔ぎよい最期を待つかのやうに、ぢいッと今一度闇になつた書院の中の氣配を窺つた。

だがやはり音はない。

「誰ぞあるか。」

失望したやうな、ほッとなつたやうな氣持で對馬守は、短銃と一緒にオランダ公使が贈つたギヤマン玉の眼鏡をかけ直すと、靜かに呼んで言つた。

「道彌はをらぬか。灯りが消えたぞ。」

「はつ。只今持參致しまするところで厶ります。」

應じて時を移さずに新らしい燭臺を捧げ持ちながら、いんぎんにそこへ姿を見せたのは、お氣に入りの近侍道彌ならで、茶坊主の大無である。

「あれは、道彌はをらぬと見えるな。もう何刻頃であらう喃？」

「只今四ツを打ちまして厶ります。」

「もうそのやうな夜更けか。不思議な消え方を致しをつた。よく調べてみい。」

「………？」

「首をひねつてをるが、何としてぢや。」

「ちといぶかしう厶ります。油も糸芯も充分厶りますのに——。」

「喃！……充分あるのに消えると申すは不思議よ喃。もし滅火の術を用ひたと致さば——。」

「忍びの術に達した者めの仕業で厶ります。」

「さうかも知れぬ。伊賀流のうちにあつた筈ぢや。さう致すと少し——。」

「氣味のわるいことで厶ります。御油斷はなりませぬぞ。」

「………。」

「およろしくば？」

「何ぢや？」

「さそくに宿居の方々へ御注進致しまして、取急ぎ御燈臺間の數を増やすやう申し傳へまするで厶りますゆゑ、殿、御意は？」

「……………。」

「いかゞで厶ります。およろしくば？」

「騷ぐまい。行けい。」

「でも――。」

「國政多難の昨今、廟堂に立つものにその位の敵あるは當り前ぢや。行けい。」

秋霜烈日とした聲だつた。

斥けて對馬守は眼鏡をかけ直すと、靜かに再び書見に向つた。――讀みかけてゐた一書は蕃書取調所に命じて譯述させた海外事情通覽である。

しかしその半頁までも讀まない時だつた。ぢいぢいと怪しく灯さしが鳴いたかと見るまに、またパツと灯りが消えた。

同時に對馬守は再びきツとなつて居住ひを直すと、騷がすに氣配を窺つた。

だがやはり音はない。足音らしい物音も、刺客の迫つて來たらしい氣配は何一つきこゑないのである。

「大無！ 大無！ また消えをつたぞ。」

「はつ。只今！ 只今！ 只今新らしいお灯り持ちまするで厶ります。――重ね々々奇態で厶りまするな。」

「ちと腑におちぬ。油壺予に見せい。」

覗いた對馬守の面は、まもなく明るい笑顔に變つた。消えた理由も、燃えない仔細も忽ちすべての謎が解けたからである。

「粗忽者共よ喃。みい。油ではないまるで水ぢや。納戸の者共が粗相致して水を差したであらう。取り替へさせい。」

「いかさま、油と水とを間違へでもしたげに厶ります。不調法、恐れ入りました。すぐさま取替へまするで厶ります。」

「しかし乍ら――。」

「はつ。」

「叱るでないぞ。いづれも近頃は氣が張り切つてゐる容子ぢや。僅かな粗相をも深く耻ぢて割腹する者が出ぬとも限らぬからな。よいか。決して強く咎めるでないぞ。」

「はつ。心得まして厶ります。御詫仕へましたらいづれも隱謐致しますることで厶りませう。取替へまする際、おそらくこれを

持ちまするで厶ります。」
「うむ……。」
大きくうむと言ひ乍ら對馬守は、突然何か胸のうちがすうと開けたやうに感じて、知らぬまにぢわりと一雫が目がしらに湧き上つた。
安心！――いや安心ではない。不斷に武裝をつゞけて、多端な政務に張り切つてゐた心が、ふと家臣を勞はつてやつたことから、計らずも人の心に立ちかへつて思はぬまに湧き上つた涙だつたに違ひないのである。
銀臺に華やかしく瞬いてゐるおろうそくが、そのまに文机の左右に並べられた。
靜かに端座して再び書見に向はうとしたとき、――不意だつた。事なし、と思はれたお廊下先に、突然慌たゞしい足音が傳はると、油を取替へにいつた茶坊主大無がうろたへ乍らそこに膝を折つて言つた。
「御油斷なりませぬぞ！　殿！　ゆめ御油斷はなりませぬぞ！」
「來をつたか。」
「はつ。怪しの影をお庭先で認めました由にて宿居の方々只今追うて參りまして厶ります！」
さツと立ち上ると、だがお廣緣先まで出ていつたその足取りは實に靜かだつた。
同時に庭先の向うで、バタバタと駈け違ふ足音が傳はつた。と思はれた刹那――。
「お見のがし下されませ！　お許しなされませ！　後生で厶ります。お見のがし下されませ！」
必死に叫んだ聲は女！――まさしく女の聲である。
對馬守の身體は、思はず御緣端から暗い庭先へ泳ぎ出した。
同時のやうにそこへ引ツ立てられて來た姿は、女ばかりだと思はれたのに、若侍らしい者も一緒の二人だつた。
「御、御座ります。ここに御灯りが厶ります。」
「…………?!」
差し出した紙燭の光りでちらりとその二人を見眺めた對馬守の聲は、おどろきと意外に躍つて飛んだ。
「よツ。そち達は、その方共は、道彌とお登代ぢやな！」
見られまいとして懸命に面を伏せてゐた二人は、まさしく侍に

女のお登代と、さうして誰よりも信任の厚かつた近侍の道彌だつたのである。

　不義！

　いや戀！——この頭巾から、ちらりほらりと入れるともなく耳に入れてゐる二人のその戀の噂を思ひ出して、若く美しい者同志の當然な成行に、對馬守の口邊には思はずもふいつと心よい微笑がほころびた。

　だがそれは刹那の微笑だつた。情に負けずに、不斷に張り切つてゐなければならぬ爲政者としての冷嚴な心を取り返へして、荒々しく叱りつけた。

「不埒者たちめがッ。引ッ立てい！」

「いえあの、そのやうな蔑み心からではムりませぬ！　二人とも、……二人ともに……。」

　必死に道彌が言ひわけしやうとしたのを、

「聞きたうない！　言ひわけ聞く耳も持たぬ！　みなの者をみい！　夜の目も眠らず予の身を思うてをるのに、不氣らしう不義の戯れに遊びほうけてをるとは何のことか！　見苦しい姿見たうもない！　早々に兩名共退散せい！」

　や﹅もすれば湧き立たうとする人の情と人の心を、荒々しい言葉で抑へつけるやうに手きびしく叱つておくと、傍を顧みて對馬守はふいつと言つた。

「そろそろその時刻じや。微行の用意せい。」

——九重の筑紫の眞綿輕く入れた風よけの眞深頭巾にすつぽり面をつゝむと、やがて對馬守は何ごともなかつたやうに、靜かに深夜の表へ出ていつた。

二

警固の從者はたつた二人。

　しかし、居捕りと小太刀の技に錬り鍛えられた二人だつた。

——危險な身であるのを知つてゐるのに、かうした對馬守の微行は雨でない限り毎夜の例なのである。

　赤坂御門を拔けると三つの影は、四ツを廻つた冬の深夜の闇を縫つて、風の冷たい濠ばた沿ひを四谷見付の方へ曲つていつた。しかも探して歩いてゐるものは、まさしく屋臺店なのである。

「やはり今宵も同じところに出てをるぞ。」氣取られぬやうに默

せよ。」

見付前の通りに、夜なきそばと出てゐるわびしい灯り行燈を見つけると、三人の足は忍びやかに近づいていつた。近づいて這入りでもするかと思はれたのに、三人はそこの小陰に佇むと、遠くから客の在否を窺つた。

しかし居ない。

刻限も丁度頃なら、場所も目抜の場所であるのに、客の姿はひとりも見えないのである。暫く佇んで見守つてゐたが、屋臺のあるじが夜寒むの不景氣を歎くやうに、悲しく細ぼそと夜啼きそばの叫び聲を呼びつゞけてゐるばかりで、ついにひとりも客は這入らなかつた。

「爺！」

「はつ。」

「ゆうべはかしこに何人をつたか存じてをるか。」

「をりまする。たしかに兩名の姿を見かけました。」

「その前はどうであつた。」

「三人でムりました。」

「夜ごとに目立つて客足が減るやう喃。——歎かはしいことぢや。考へねばならぬ。——参らうぞ。」

忍びやかに、さうして重たげな足どりだつた。

牛込御門の前通りにやはり一軒屋臺の灯が見える。

三つの影は同じやうに物陰へ立ち止まつて、遠くから客の容子を窺つた。

「どうぢや。ゐるか。」

『はつ。をりまするが——。」

「何人ぢや。」

「たつたひとりでムります。」

「僅かに喃。酒はどうか。用ひてをるか。」

「をりませぬ。寒げにしよんぼりとして、うどんだけ食してゐる容子にムります。」

「やはりこゝも次第に寂れが見ゆるな。ひと月前あたりは、毎晩のやうに七八人もの客が混み合つてゐたやうぢや。のう。山村。さうであつたな。」

「はつ。御意にムります。年前は大分酒もはづんで歌なぞも唄うてをりましたが、明けてからこちら、めつきり寂れがひどうなつたやうにムります。ゆうべもやはりひとりきりでムりまし

た。」
「さう喃。――胸が詰つて參つた。もう迷はずにやはり決斷せねばなるまいぞ。先へ行け。」
淺ばた沿ひに飯田町へ出て、小石川御門の方へ曲らうとするところに、煮込みおでんと、鮨の屋臺が二軒見えた。――しかしどちらの屋臺もしいんと靜まり返つて、まことに寥々、客らしい客の姿もないのである。
「爺!」
「はつ。」
「そち今日、淺草へ參つた筈よ喃。」
「はつ。事の序でにと存じまして、かへり道に兩國河岸の模樣もひと渡り見て參りましてムります。」
「見世物なぞの容子はどんなであつた。」
「天保の饑饉の年ですらも、これ程のさびれ方ではなかつたと、いち樣に申してをりましてムります。」
「不平の聲は耳にせさつたか。」
「致しました。どこに惡いところがあるやら、こんなに人氣の沈んだことはない、まるで生殺しに會うてゐるやうぢや。死ぬものなら死ぬやうに、立直るものならそのやうに、早うどちらかへ片がつかねばやり切れぬ、とこのやうに申してをりましてムります。」
――まさにそれは地の聲だつた。尊王攘夷と開港佐幕と、昨是今非の紛々たる聲に交つて、黒船來の恐怖心が加はつた、地に鬱積してゐる不安動搖の聲なのである。
對馬守は默然として、靜かに歩いていつた。
右は水を隔てて高い土手。左は御三家筆頭水戸徳川のお上屋敷である。――その水一つ隔てた高い土手のかなたの大江戸城を永劫に護らせんために、副將軍定府の權限と三十五萬石を與へてここに葵柱石の屋敷をも構へさせたのに、今はその水一つが敵と味方との分れ目となつて、護らねばならぬ筈の徳川御連枝たる水藩が、率先勤王倒幕の大旗をふりかざし乍ら、葵宗家に弓を引かうとしてゐるのだ。
「爺!」
對馬守は、いかめしい築地塀を打ち睨むやうにし乍ら卒然として言つた。
「のう爺!」

「はつ。」
「人はな。」
「はつ。」
「首の座に直つてをる覺悟を以つて、事に當らうとする時ほど、すがすがしい心持の致すことはまたとないな。のう。どう思ふか。」
「御諚よく分りかねまする。不意にまた何を仰せられまするのでムります。」
「大丈夫の覺悟を申してをるのぢや。國運を背負ふて立つ者が、國難に當つて事を處するには第一に果斷、二にも果斷、終始果斷を以つて貫ぬきたいものぢや。命は惜しみたくないものよ喃。」
「…………。」
「泣いてをるな。泣くにはまだ早からうぞ。それにつけても大老は、井伊殿は、立派な御最期だつた。よかれあしかれ國策をひツ提げて、政道の一線に立つものはあゝいふ最期を遂げたいものぢや。羨やましい事よ喃。」
「申、申しやうもムりませぬ……。」

「泣くでない。そち程の男が何のことぞ。——天の川が澄んでをるな。風も冷たうなつた。少し急ぐか。」
足を早めてお茶の水の土手にさしかゝらうとしたとき、突如バラバラと三つ四つ、黒い影が殺到して來たかと見えるや、行手さへ切つてきびしく言つた。
「まてツ。何者ぢやツ。」
「まてとは何のことぢや！　高貴のお方でムるぞ。控へさツしやい！」
叱つて、館、山村の從者兩名がさツと身楯になつて身構へたのを、
「騷ぐでない。」
しいんと身の引きしまるやうな對馬守の聲だつた。
「姿の容子、浪士取締り見廻り隊の者共であらうな。」
「…………？」
「のう、さうであらうな。予は安藤ぢや。對馬ぢや。」
「あツ。左樣でムりましたか！　それとも存ぜず不調法恐れ入りまして厶ります。相州浪士取締り早瀬助三郎組下の五名にムります。」

「早瀬が組下とあらば腕利きの者共よな。夜中役目御苦労ぢや。充分に警備致せよ。」

「御念までもムりませぬ。御老中様もお氣をつけ遊ばしますやう――。」

人形のやうに固くなつて、勤王浪士取締りの隊士達が見送つてゐるのを、對馬守の足どりは實に靜かだつた。――聖堂裏から昌平橋を渡つて、筋違ひ御門を拔けた土手沿ひに、求める屋臺の灯がまた六つ見えた。闇に咲く淫靡な女達が、不思議な繁昌を見せてゐるあの柳原土手である。それゆゑにこそ、くぐり屋臺の六つ七つは當り前だつた。

しかし客足は反對にここも淋れに淋れて、六軒に僅か三名きりである。

對馬守は沈痛にもう押し默つたまゝだつた。――これ以上檢分する必要はない。盛り場の柳原にしてこれだつたら、他は推して知るべしなのだ。目擊したとていたづらに心が沈むばかりである。

足を早めて屋敷に歸りついたのは、八ツをすぎた深夜だつた。

寢もやらず待ちうけてゐた老職多井格之進が、逸早く氣配を知つて、爽げに老ひた姿を見せ乍ら手をつくと、愁ひ顏の主君をぢいッと仰ぎ見守り乍ら、丹田に力の潛んだ聲で言つた。

「さぞかし御疲れに厶りませう。御無事の御歸館、何よりに厶ります。今宵の容子は？」

「ききたいか。」

「殿の御心勞は手前の心勞、きゝたうなうて何と致しませうぞ。どのやうな模樣で厶ります。」

「言ひやうはない。火の消えたやうな淋れ方ぢや。」

「ではやはり――。」

「さうぞ。もはや迷ふてはをられまい。斷乎として決斷を急ぐばかりぢや。」

「…………。」

「不服か。默つてゐるのは不服ぢやと申すか。」

「いえ不服では厶りませぬ。殿が御深慮を持ちまして、それ以外に途はないと仰せられますならば、いかやうな御決斷遊はしませうと、格之進何の不服も厶りませぬが――。」

「不服はないがどうしたと申すのぢや。」

「手前愚考致しまするに屋臺店の夜毎に寂れまするは、必ずしも町民共の懐中衰微の徴しとばかりは思はれませぬ。一つは志士召捕り、浪士取締りなぞと血醒い殺傷沙汰がつゞきますゆゑ、それを脅えての事かとも思はれまするので厶ります。」

「一理ある。だがそちも常人よ喃。今の言葉は誰しも申すことぢや。予は左樣に思ひたうない。も少し世の底の流れを觀たいのぢや。よしや殺傷沙汰が頻發致さうと、町民共の懐中が豐ならば自づと活氣が漲る筈ぢや。屋臺店はそれら町民共のうちでも一番下積の者共の集るところぢや。集る筈のそれら屋臺に寂れの見えるは下積の者共に活氣のない證據ぢや。國政を預る身としてこの安藤對馬は、第一にそれら下積の懐中を考へたい。活氣のあるなしを考へて行きたい。民は依らしむべし、知らしむべからず、貧しい者には攘夷もなにも馬の耳に念佛であらうぞ。小判、小粒、鳥目、いかやうな世にならうと懐中が豐であらばつねにあの者共は樂しいのぢや。なれども悲しいかな國は今、その小判に缺けてをる。これを救ふは異人共との交易があるのみぢや。交易致さば國に小判が流れ入るは必定、小判が流れ入らば水ぢや。低きを潤す水ぢや。下積の者共にも自づと潤ひが參らうわ。ましてやポルトガル國はもう二百年來、われらにその交易を求めてぢや。海外事情通覧にも書いてある。ポルトガル國はオランダ、メリケン國に優るとも劣らぬ繁昌の國小判の國と詳しく書いてぢや。對馬はつねに只、貧しい者達の懐中を思うてやりたい。決斷致すぞ。予は決斷致してあすにも交易を差し許して遣はすぞ。のう。多井。對馬の考へは誤つてをるか。」

「さり乍ら、それではまたまた――。」

「井伊大老の轍を踏むと申すか!」

「はつ。臣下と致しましては、只もう、只々もう殿の御身が……。」

「死は前からの覺悟ぞ! たとへ逆徒の刃に斃れやうとも、百年の大計のためには、安藤對馬の命ごとき一毛ぢや。攘夷を唱ふる者共の言もまた對馬には片腹痛い。一にも二にも異人を擯れて、外船と交易致さば神州を危うくするものぢやと愚かも甚しい妄語を吐きをるが、國が危いと思はゞ內亂がましい內輪の爭ひ、控へたらよからうぞ。のう、多井! 予の考へは誤りか。」

「いえ、それを申すのでは厶りませぬ。京都との御約束は何と召さるので厶ります。」

「あれか。約束と申すは攘夷實行の口約か。」

「はつ。恐れ乍ら和宮様御降嫁と引替へに、十年を出でずして必ず共に攘夷實行遊ばさるとの御誓約をお交はしなさりました筈、さるを、御降嫁願ひ奉つて二月と出ぬたつた今、進んでお自らお破り遊ばしますは、二枚舌の、いえ、その御約束御反古の罪は何と遊ばしまする御所存で厶ります。」

「そちも近頃、急に年とつて參つたよ喃――。」

言下に冴え〲とした微笑をのせると、凛として言つた。

「それもこれもみな國策ぢや！　二枚舌ではない、國運の危うきを救ふ大策ぢや！　内爭を防ぐことこそ第一の急、京都と江戸との御仲睦じく渡らせられなば、國の喜びこれに過ぎたるものはなからうが。御降嫁願ひ奉つたも忠節の第一、國を思ふがゆゑに交易するも忠節の第一であらうぞ。――大儀！　心氣を澄ましたい。筆を持てッ。」

――冬の深夜の星に對つて、端然とし乍ら正座すると、對馬守は藹々として[illegible]む墨を磨らした。

三

その同じ夜更け――。

牛込柳町の奥まつた一軒である。その一軒では、長いこともうすゝり泣きの聲がつゞいてやまなかつた。泣いてゐるのは誰逹でもない。秘めかくした戀を見咎められて、身緣りのこの家に、追放された當座の身を潜めてゐるあの道彌とお登代の二人だつた。――いとしみ愛する心が強ければ強いだけに、美しく若い二人にとつてはその戀を叱られたことが、限りなくも悲しかつたに違ひないのである。

お登代が泣き濡れた睫毛に雫をためて、思ひ出したやうにまた言つた。

「それにしてもあんまりで厶ります……。殿様もあんまりで厶ります……。」

「ならぬ！　言ふでない！　なりませぬ！」

勃然として道彌がうなだれてゐた面をあげると、きびしく制して叱つた。

「殿様をお恨みに思ふ筋は毫もない。お目を掠め奉つた二人

にこの罪があるのぢや。直前にこれこれと、も少し早うお打ちあけ申し上げておいたら、屹度御許しもあつたものを、今までお隠し申し上げておいたのが悪かつたのぢや。なりませぬ！殿樣にお恨み申し上げてはなりませぬ！」

「いいえ申します。申します。隠した戀ではムりませうと、あれほどもおきびしうお叱りを受けるやうな淫らな戯むれではムりませぬ。それを、それを、只のひと言もお調べは下さりませいで、御追放遊ばしますとはあんまりでムります。あんまりでムります。」

「ならぬと言ふたらなぜ止めませぬ！　どのやうな御仕置きうけませうとも、御恩うけた殿樣の陰口利いてはなりませぬ。御手討ちにならぬが倖はせな位ぢや。もう言うてはなりませぬ！」

「でも、でも……。」

「まだ申しますか！」

「あい、申します！　晴れて添ひとげたいゆゑに申します。わたくしはともかく、あなた樣は八つからお身近く仕へて、人一倍御寵愛うけたお氣に入りでムります。親とも思うて我まゝせい、とまでお殿樣が仰せあつた程のそなた樣でムります。それを、それを、只の御近侍衆のやうに、不義はお家の法度、手討ちぢやと言はぬばかりな血も涙もないお仕打ちは、憎らしうムります。殿樣乍らお憎らしうムります。」

——道彌も、ふいとそのことが思ひのうちに湧き上つた。思ひ出せばなる程さうだつた。八つの年初めてお目見得に上つて、お茶との御所望があつたとき、過つてお膝の上にこぼしたら、ほゝう水撒きが上手よ喃、と仰せられた程の殿である。それからまた十の年に若君のお對手となつて、お書院で戯むれてゐたら、二人して予の頭を叩き合ひせい、とまで仰せられた程も人としての一面に於て、情味豐な對馬守である。

それだのに、なるほど厳しすぎると言へば厳しすぎるお仕打ちだつた。——道彌は、悲しげに面をあげて、ぢつとお登代の目を見守つた。目から、さうして乳房を通つて、道彌のふたつの眼は怪しくおのゝき輝き乍ら、乳房の下のほのかなふくらみにそゝがれた。

四月！——そこには四月の愛の結晶がすでにもう宿されてゐるのである。

これまでになつてゐることをお氣づきだつたら、あゝまで強くお叱りにならなかつたかも知れぬ。よしや一度はお叱りになつたにしても、昔ほどの御懇な情味をお持ちになつてゐたら、——だが、そのとき道彌の心に浮び上つて來たものは、日夜の御心勞におやつれ遊ばしてゐる殿のいたいたしいお姿だつた。

あのお顔に刻まれてゐる皺の一つ一つの暗い影は、とりもなほさず國難の暗い影なのである。

殿の一動は、江戸の運命を左右するのだ。

さうしてまた殿の一擧は、國の運命をも左右するのだ。おいたはしいことである。心に一刻半刻のゆるみをも持つことの出來ない殿の日夜は、只々、おいたはしい限りである。——いや、それゆゑにこそ、自分等ごとき取るに足らぬものの戀なぞは、心にも止めてゐられないのだ。

カチカチと、オランダ渡りの置土圭が、靜かな時の刻みをつづけていつた。——勿論殿から拜領の品だつた。追放の身にはなつても、せめてこれればかりは御形見にと思つて持つて來たのであつた。

怨んではならぬ！　ゝ護り申さねばならぬ！

「登代どの！」

ほつとよみ返つたやうに面をあげると、道彌は不意にきいた。

「あすは十五日で厶つたな。」

「あい。月次お登城の日で厶ります。」

きくや矢庭に立ち上ると、敢然として言つた。

「行つて參る！　並々ならぬ身體ぢや。大切に致されよ。」

「ま！　不意にどこへお越し遊ばすので厶ります。このやうな夜中、何しに參るので厶ります。」

「せめてもお詫びのしるしに——、いや、道彌がせねばならぬことを致しに參るのぢや。健固でお暮し召されよ……。」

「ま！　お待ちなされませ！　お待ちなされませ！」

しかし道彌の姿は、もう表の闇に消えていつた。——同時のやうに、チイチイと置土圭が四時を告げた。

大書院の置土圭もまたその時四時だつた。

だが和泉守は、あれから今まで死像のやうにぢつと端坐した

まゝだつた。――老職多井がそれを氣遣つて言つた。

「夜明けのせゐか、めつきり冷えが増して參つたやうに厶ります。お微行のあとのお疲れも厶りませうゆゑ、御寢遊ばしましてはいかゞで厶ります。」

「………。」

「な！ 殿！」

「………。」

「殿！」

「………。」

「きこえませぬか。殿！ もう夜あけに間も厶りませぬ。暫しの間なりとお横になり遊ばしましてはいかゞで厶ります。」

「………。」

「た！ 殿！」

「………。」

「殿！」

そのとき、死像のやうに聲のなかつた對馬守が、ふいつと面をあげると突然言つた。

「あすは十五日であつたな。」

「はつ。月次總登城の御當日で厶ります。それゆゑ暫しの間なりとも御寢遊ばしましてはと、先程から申し上げてゐるので厶ります。いかゞで厶ります。」

「それよりも予の目のうちには、あれがちらついてをる……。夜鷹共の寂れがちらついてをる……。たしかに十五日ぢやな。」

「しかと間違ひあるまいな。」

「相違厶りませぬ。」

「お諄う厶ります。」

「諄うなうてどうせうぞ。月次總登城とあらば、諸侯に對馬の動かぬ決心告げるに丁度よい都合ぢや。――硯を持てい。」

「はつ？」

「紙料の品を持參せいと申してゐるのぢや。」

いぶかり乍ら格之進が取り揃へた奉書を手にすると、對馬守はきりツと唇を決斷そのもののやうに引き締めて、さらさらと書きしたゝめた。

「ポルトガル國トノ交易通商ハ、最早ヤ斷乎トシテ之ヲ貫ク以外ニ途ハナシ。早々ニ條約締結ノ運ビ致スヤウ、諸事抜リナク御手配可然候。人ノ命ニ明日ハナシ。ソノ心シテ諸準備

御急ギ召サルベク、安藤對馬シカと命ジ置キ候。」

筆をおくと凛として言つた。

「予が遺言に――、いや、夜がいか程更けてをらうと火急の用ぢや。すぐさま外國奉行の役宅へ持参させい。」

「ではもうやはり――。」

「聞くがまではない。ちらつく……、ちらつく、予の目には只あれがちらつくばかりぢや……。」

聲をおとして、他を顧みるやうに言ふと、對馬守は靜かにきいた。

「湯浴の支度は整ふてをるであらうな。」

「をりまするで厶ります。」

――入念な入浴だつた。

さうして夜が白々と明けかゝつた。素れも見えぬ足取りでお湯殿から歸つて來ると、對馬守は愈々靜かに言つた。

「香を焚け。」

いかにも落ちついた聲なのである。焚いてそのお膝の前に格之進が捧げ持つていつたのを、ズバリと言つた。

「聽くのでない。予が髻に焚きこめい。」

はツとなつて老職は、打ちひしがれたやうに面を伏せた。死を覺悟されてゐるのである。齋戒沐浴して髪に香を焚きこめる、――刺客の手にかゝることがあらうとも、見苦しい首級を曝したくないとの床しい御覺悟からなのだ。

格之進の老眼からは、瀧のやうにハラハラと雫が散つた。香爐を捧げ持つ手がわなわなとふるえた。

聲もカスレ乍らふるえた。

「お潔ぎよいことで厶ります。只もう、只もうお潔ぎよいと申すよりほかは厶りませぬ。」

「長い主從であつたよな。」

「……………。」

「不吉ぢや。涙を見するは見苦しからうぞ。大老も、井伊殿の御最期もさうであつた。登城を要して討つは、刺客共にとつて一番目的を遂げ易い機である。十五日であるかどうかを諄うきいたのもそのためぢや。決斷を急いだのもそれゆゑぢや。予を狙ふ刺客共もあすの來るのを、いや、今日の來るのを待ちうけてをるであらう。多井！」

「はつ……………。」

「すがすがしい朝よな。」

――カラリと晴れて陽があがつた。

登城は坂下門からである。對馬守は颯爽として言つた。

「供揃ひさせい。」

「整へおきまして厶ります。」

「人數增やしたのではあるまいな。」

「いえ、萬ケ一、いや、いづれに致せ多いがよろしからうと存じまして、屈強の者選りすぐり、二十名程增やしまして厶ります。」

「要らぬ。減らせ！」

言下に斥ぞけると、さらに颯爽として言つた。

「首の座に直るには供は要らぬ。七八名で澤山ぞ。館に山村、それから道彌、――道彌はをらなんだな。あれがをらばひとりでも澤山であらうのに、いづれにしても半分にせい。」

命ぜられた供人達が平伏してゐるお駕籠へ、對馬守は紊れた足音もなく進んでいつた。しかもその刹那である。

一閃！　キラリ、朝陽に短く光りの尾が曳いたかと見るまに、どこからか飛んで來て、プツリ、お駕籠の棒先に突きさゝつたのは手裏劍だつた。

ぎよッとなつて色めき立つたのを、静かに制して對馬守は見守つた。火急に何か知らせねばならぬことでもあるのか、まさしく手裏劍文なのである。

「見せい。」

押し開いた目に讀まれたのは次の一文だつた。

「新らしき敵現はれ候間、御油斷召さる間敷候。堀織部正殿恩顧の者共に候。

殿に筋違ひの御恨み抱き、寄り々々密謀中のところを突き止め候間、取急ぎおしらせ仕候。」

ふいつと對馬守の面には微笑が湧いた。

「誰ぞ陰乍ら予の身邊を護つてゐる者があると見ゆるな。」

だが一瞬にその微笑が消えて、怒りの聲が地に散つた。

「愚か者達めがッ。私怨ぢや。いいや、安藤對馬、堀織部正恩顧の者共なぞに恨みをうける覺えはないわッ。人が嗤はうぞ。

――行けッ。」

前驅と共に、姿は駕籠に消えた。――織部正は先の外國奉行である。二月前の去年十一月八日、疑問の憤死を遂げたために、流布憶説まちまちだつた。對馬守の進取的な開港主義が度

を越えてゐるとなして憤死したと言ふ說、外國奉行であり乍ら實際は攘夷論者であつたがゆゑに、任を負ひかねて屠腹したと言ふ說、それらのいろいろの臆說の中にあつて、最も廣く流布されたものは、品川御殿山八萬坪を無用の地との見地から、對馬守がこれを外國公使館の敷地に當てやうとしたところ、織部正が江戸要害說を固執して肯んじなかつたために、怒つて幽閉したのを憤つて自刃したと言ふ臆測だつた。もしも堀家恩顧の家臣が恨みを抱いてゐるとするなら、その幽閉に對する逆恨みに違ひないのである。

「馬鹿なッ。大義も通らぬ奸徒達に、むざむざこの首渡してなるものかッ。やらねばならぬ者がまだ澤山あらうぞ。早う行け、ッ。」

お駕籠は揺れらしい揺れも見せないで、しづしづと坂下門にさしかゝつていつた。供揃ひはたつた十人。一面の洗ひ砂礫を敷きつめたその坂下御門前に行きついたのは、冬の陽の冷たい朝まだきの五ッ前である。

と見えた刹那――、轟然として銃音が耳をつんさいた。一緒に羽ばたきのやうな足音が殺到したかと思はれるや、突如叫んで言つた。

「國賊安藤對馬、斬奸ぢやッ。覺悟せい！」

チヤリンと言ふ刃音が同時に傳はつた。

刺客だ！

七八名らしい劒氣である。

「來をつたな。」

對馬守は、待ちうけてゐた者に肯ふやうな、ゆとりのある態度で、從容と駕籠を降りた。――途端、目についたのは脫兎のごとくに迫つて來る若侍の姿だつた。それも十八九。

三島！――對馬守は突嗟に思ひ當つた。刄をふりかぶつて惡鬼のごとくに襲撃して來たそのいち人こそは、まさしく見覺えの堀織部正家臣三島三郎兵衞である。間をおかずに大喝が飛んでいつた。

「うろたへ者めが。退りをらうぞッ。私怨の刄に討たれる首持つてゐぬわッ。退れッ。退れッ。退りをれッ。」

叫んで、さッと身をすさッたが、三島が必死の刄は、跌する殺氣と共に、對馬守の肩先に襲ひかゝつた。しかしその一刹那である。彈丸のやうに黑い影が橫合ひから飛びつけると、間一髮のうちに三島三郎兵衞の[illegible]を[illegible]つてのけて、[illegible]

ダッと一閃のまにそこへ斬つてすてた。――頭巾姿の顔も誰か分らぬ救ひ手である。

黒いその影は、つゞいて右に走るに、さらにいち人見事に刺客を斬つてすてた。そのまに籠がひとり、山村がいち人、あとの四人を殘りの近侍達が斬りすてゝ、廣場の砂礫は凄慘として血の海だつた。

對馬守は自若として打ち見守つたまゝである。その目は、救ひ手の黒い姿に注がれて動かなかつた。しかしやがて肯づいた。

「道彌よな」

呟いたとき、頭巾を拂つて救ひ手が砂礫に手をついた。――やはりそれはあの道彌だつた。崩れるやうにうッ伏すと、道彌の聲が悦びに潤つて言つた。

「御無事で何よりに厶ります……。」

ふいつと對馬守の面に微笑が湧いた。だが一瞬である。打つて變つた荒々しい聲が飛んでいつた。

「見苦しい！　退れッ。緣なき者の守護打けたうないわッ。行けッ。」

「では、では、これ程までにお詫び致しましても、――手裏劍文放つて急をお知らせ致しましたのも手前で厶りました。陰乍らと存じまして御護り申し上げましたのに、では、では、どうあつても――。」

「知らぬ！　行けッ。」

「やむをえませぬ！……。」

サッと脇差し抜くと、道彌のその手は腹にいつた。途端である。

對馬守の大喝がさらに下つた。

「たわけ者めがッ。言外の情分らぬか。死んでならぬ者と、死なねばならぬ者がある――。」

ふいつと聲をおとすと言つた。

「嬰兒が父なし兒にならうぞ。早う行けッ。」

「左樣で厶りましたか！　左樣で厶りましたか！」

血の匂ふ砂礫の上に道彌の涙が時雨のやうにおち散つた。

見眺めて對馬守は、ほころびかゝつた微笑を慌てて殺すと、急いで眼鏡をかけた。

はつと平伏し乍ら、並居る侍臣達は、そのとき新らしい發見をした。殿の眼鏡は、時代の底の流れと、海の外を視る御用にのみ役立つと思つてゐたのに、人の情の涙をもおしかくす御役に立つことを初めて知つたのである。

その時何侯か登城した大名があつたとみえて、城内遙かの彼方から、ドドンと高く登城しらせのお城太鼓が鳴り傳はつた。

(完)



十二月の記憶

(或る男の話)

岩藤雪夫

1 着物

工場の歸りにながめる北方の空が怒りを含んでいやに黒光る頃になると、

『チエツ！　また今年もオーバアが買へねえや』

と私はおきまりのやうに嚴冬の寒さを毒づく。

幾年の間私はオーバーにあこがれただらう、そして一枚も買へなかつた。

女房を持ち、貧乏人の義務ででもあるかのやうに次々に年子が生れてからと云ふものは私のこの愚痴もとうとう女房の笑ひ種にまでなつてしまつた。

私たち貧乏人の誰でもがさうであるやうに、私も冬の寒さの前に立つて一度はおぢけずにはゐられない。生きてゆく元手である身體が心配になるからだ。その恐れが私たちの爪先を質屋の門に向はせる。洗ひざらしの單衣と垢じみた袷とが交換される。そこで初めて私たちは無慈悲な冬を忍び通す準備が出來るのだ。

私の十二月についての記憶も着物から始まる。

若し私の腦みそに刻まれた皺に間違ひがなければ、小學校二年生の時だつたと思ふ。

親爺がその年の秋から職を失つてフランテンでゐたので家は言葉通り「赤貧洗ふがやう」な有様であつた。夜店で買つた二枚ののし餅、それを母が八十幾切れに刻んだやうに覺えてゐる。

大晦日の晩は親子三人が汗臭い足を炬燵につつ込んで年越しをし

た。

『えんげつない正月ぢや、鴉の子ぢや鴉の子ぢや』

と親爺は關西辯をまる出しに醉つぱらつた赫つ鼻をしやくつて盃を重ねてゐた。

『年が改まればのう』

と母は新年と幸福が一諸にやつてくるとでも信じてゐるらしく喋つてゐた。

が私にはただ新しい年のくるといふ事だけが大きく樂しみであつた。何事も考へずに母親の丸まつちい膝を枕に寢りこけてゐた。

しかし次の朝、くはしくは正月元旦の雜煮を食つてから三十分、私は大聲で泣き出してしまつた。母は鼻みづをすすり乍らガサガサの脣を幾度となく私の頰に押しつけた。

『やだい、イヤだい。』

と私は泣きつゞけた。

『いやなら止せ!』

と親爺は怒鳴りつけた。

何故、元日さうさうから泣き喚めかたければならなかつたか、私には學校の新年の式に着て行く晴着がなかつたからだ。普段着では恥づかしくて厭だつた。それに私は一人つ子で育つて來たのでどんな我儘でも押し通せる自信があつた。

地段駄を踏んで私はこれ通した。

『ねえ、おまへさん!』

と母は父の垢だらけの耳に口を寄せた。

『うん、』

と父は一言うなづいた。

母は急ぎ足に表へ出て行つた。父は屠蘇代りの安酒を盃につぎ注ぎ「この馬鹿野郎」とか何とか口ごもつては私を睨みつけた。

間もなく歸つた母の兩手には新しい飛白の着物と袴がのつてゐた。母は大急ぎでその着物に揚げをして私に着せた。少し長めな袴は折つてはいた。

その時の母の目と針を運ぶさゝくれ立つた指の動きを今だに忘れることが出來ない。

『さあもういゝだらう、泣かずに行つておいで。』

と母は私の頭を撫ぜて吳れた。

私は大喜びで新年の式に出かけた。だが校門をくゞるやいなや仲間の子供たちにさんざんにいぢめつけられて泣いて歸つた。

母は三軒先の月給取りの妻君に賴んでこの子供の着物と袴を借りて來たのであつた。私をいぢめたのはその子供を廻る金持ちや地主や

差配の子供たちであつた。

2　子供の唄

子供は次の時代の歴史を創くる萌芽だと私は思ふ。

だから子供の新しい、しかし小さな要求や發見を拒んではならない。

子供は野人に育てねばならない。

十一歳か十二歳の生意氣盛りの年頃の事だつた。

私たちの仲間に、

……知つてるよう………

と言ふ言葉が流行つてゐた。

多分、だれか他人の秘密をでも發きだした時の快感を表現したものだらう。

十二月の寒つ風の中を私たちは走つて家に歸つた。その時の足調子の口調か、

……知つてるよう……

……知つてるよう……

私は大聲で叫びながら家の中へ飛び込んだ。珍らしく父か早く歸つてゐた。

私は日頃教へられてゐた「お歸りなさい」も言はずにいきなり

『おつ母さん、なんかよう』

とやつつけたものだ。そして袴をぬぎぬぎ又……知つてるよう……知つてるよう、を歌ひ出した。

すると父が、

『野郎！　何を知つてるんだっ』

と怒鳴りつけた。

……知つてるよう……

…知つてるよう……

と私は執こくくり返した。

父はおびえたやうに目玉をむいて立ち上つた。

『何を知つてるんだ。』

…知つてるよう……だ……

父の態度には不自然なものがあつた。私は笑つた。私は又歌つた。

……知つてるよう……

『何を知つてゐやがるんだ！　この餓鬼奴、』

遂に父の首よりも太い腕が私の頭を撲つた。私は泣いた。しかし撲られても「何を知つてゐる」んだか私にも解らなかつた。

その唄過ぐまで、

『いつたい何を知つてゐるんだ？』
と父は私をいぢめ通した。
大人には子供の唄が解らない。

3　父と子

弟が生れて四年目に母が死んだ。
朝晩の食事の度に、御膳の一方に坐る人が足りなくなることは淋しいものだ。長年の同作者を失つた父もだんだんと氣力が衰へてゆくやうに見え初めた。私はもう母のない家に窮屈を感じ出してゐた。そして私の野望は東京へ動いてゐた。高等小學を終へた十六才の時だつた。
『お前もそろそろ働いてくれんかのう。』
と或時父が言ひ出した。
『ああ。』
と私は氣のない返事をした。
その日から私の不孝が始まつた。私は單に親の爲に自分の生活を犠牲にさせられることは堪らないと思つた。私は私の生活を見つけ出さうとしてゐた。
私の不孝が始まつた。私は家出をした。
私は父の貯金を半分引き出して東京へ出た。
金のなくなりかけた頃私は工場に入つた。そして私たち貧乏人仲間が何處へ行つたつてどれ程方法を變へてみた所で、私たちの描いてゐる野望、幻想が實現できるものではないといふことが目の前に現はれ初めた。
そこには田舍の地主や小工場主などよりもつと巧妙な且つ複雜したカラクリが動いてゐた。
私は失望を感じた。失望を感じると默つて生活に食ひさがることを考へた。散髪屋に行く度に、自分の目が底光りがし始めたのを發見したのもその頃だ。方向の無い反抗心が目の光と一緒に私の中に生長しつつあつた。
その年の暮に父からの手紙が屆いた。

オ前ガイナーナツテカラ家ノウチガサムシウテナラヌ、マエ日、
エロリニソダヲモヤシテオ前ノコトバカリカンガエテオル。

とまづい字で書いてあつた。
私は簡單な返事を書いた。そして私の生活の踏台にされないで、愚痴つてばかりゐる老いた父を氣の毒に思つた。

4　汽罐車

私が初めて月給を貰つた工場は鐵道省大井工場であつた。

どんな人でも生れて初めて貰つた月給袋を懷にして歸る時の喜びを知つてゐるだらう。言はば希望ある輝やかしい門出に似た歡喜である。

私も「俺だつて生きて行けるんだ！」といふ喜びに燃えながらその初めての月給袋を捧げて下宿に辿りついたものだ。

とは言へ二年三年と經つうちに「俺だつて生きて行かれるんだ！」といふ喜びが何時の間にか「誰も生きて行かれなくなるんぢやあないかしら？」といふ疑惑に變つて來た。

それは鐵道省の御用勞働組合の中に何處からともなく持ち込まれる印刷物や祕密出版らしい新聞を讀むことによつて敎へ込まれた私の最初の知識であつた。

(四十七字削除)

恰度その頃の事だつた。

私の働いてゐた汽罐車修繕工場の組長が突然行方不明になつた。組長はその名前の大岡權次郎にふさはしく肩幅と頸の長さの等しいつまり正方形の體格に肥きつた手足を持つた大男であつた。

汽罐庫に入つた汽罐車の下にもぐつて顏といはず首といはずマシン油だらけになつて働いてゐる土人にさへ似た職工たちでさへ、彼大岡の姿を見ると首を縮めて恐ろしがつた。

「ピイツ！　この青二才デレッキでも食ひたいのか。」

と彼は怠けてゐる職工さへ見つけるとがみついた。そして脂のにぢみ出さうな猪首を振りふり巡視するのであつた。

(五十六字削除)

その男は先づ私たちの記憶によれば、言葉を何處かへ忘れて來たやうな無愛想な人間であつた。小菅といふ姓で汽罐車の故障を起させる事は東部監理局に及ぶ者がなかつた。それ程に機械の取扱ひ方が亂暴であつた。

從つて修繕工場組長大岡は始終小菅の惡態ばかり叩いてゐたし省内の高官吏につげ口する事を忘れなかつた。

『おい水デブさん！　砂溜のバルブがこはれたよ。』

と小菅は組長に呼びかけるのであつた。

もし大岡が

『水デブとは何んだ！　この罐タキ虫！』

とでも言はふものなら

『水デブと言はれて口惜しければあやつと勞働者なみに行てやおれ！』

とやり返されるのであつた。

そんな時は修繕職工たちは、唇をひん曲げるほど喜ぶのであつた。

ところがその年の十一月末の賞與の問題で小菅と大岡の大喧嘩があつた。それは小菅が汽關車を亂暴に取り扱ふといふことを修繕課長に大岡がつげ口したことに原因してゐた。

ついでに言ふが大岡が職工たちに恐れられてゐるのはさういふ陰險な性格の爲でもあつた。

ここまで話が進めば大岡權次郎の行方不明事件の結果も想像がつくかも知れない。しかしこの結末は生優しい事柄ではなかつた。私は小菅汽關士自身に成り變つて話を進めよう。

喧嘩があつた日の夕刻、即ち後の法廷に於ける豫審調書によれば正に四時五十分、もう職工たちが入浴を濟まして脱衣所で歸り仕度をしてゐる眞最中であつた。

修繕中の自分の汽關車にかくれてゐた小菅は、修繕中の工具ストックの鎚を下ろしに來た水デブ權次郎の後頭部に、長さ三呎の吋パイプで恨みの一擊を加へた。

頭蓋骨の割れた屍は汽關車の爐口に投げ込まれた。そして翌朝午前七時小菅はその No. 02581 機關車を運轉し貨物列車二十八輛を引いて名古屋に向けて出發した。勿論彼は助手である火夫には石炭投入をさせなかつた。何故なら一度び爐蓋を明ければすぐ目の前に水デブ權次郎の割れた頭蓋骨が石炭と一緒に燃えてゐることが發見されるからだ。

汽關車は國府津までは無事に進行したが御殿場にかかつた時勾配が切れなかつた。後押し汽關車の汽關士の立會ひによつて檢査が行はれた。次に骨だけになりさうになつた得體の知れない死體が發見され小菅は自分を潔く法律の手にゆだねた。

十二月一日の夕暮であつた。

5　仲間を殺す

××××××の戰爭で多くの兵卒が死ぬやうに、私たちの要塞である工場に於ても多くの仲間が肉體を亡してしまふ。直接に私たちを殺すものは機械である。

しかしその裏面には××××の魔の手がうごめいてゐることを誰だつて知つてゐる。

或る鐵工場に私は働いてゐた。

次の年の春の需要の爲に、會社は盛んに生産に急いでゐた。夜業がぶつ通しに續けられた。

たとへ私たちがすり減らした勞働力に對して正しい量の賃銀が支拂はれてゐないとは云へ、さし迫つた年末に二十日間も夜業が續くといふことは決して有難くないことはない。

あと五日間で三百六十五日が終らうとする頃であつた。

睡眠不足と過勞とに痛めつけられた職工たちは金と機械とに追ひまはされて魂の拔けたもののやうに動いてゐた。

五十馬力モータアの唸り、空氣を斫る二呎巾のベルト、旋盤に削られる鋼鐵の悲鳴、ハンマアと鐵のガチ合ひ、火花、マシン油の匂。溶鑛爐に沸る四千度の溶鐵、それらの單純で强い響と色と匂が私たちを失心狀態にまで追ひやることがある。

氣がつけばいい、氣がつかなければその次は死の中へ飛び込まなければならない。

午後二時、どんな工場でも一番能率の挙る時刻である。と同時に私たちが全く機械のメカニズムと溶け合つてしまふ時でもある。

ユニバーサル・ミーリングといふ八十個の齒車と二十本近い竪横のアツクスルそして十本のベルトとを持つ長さ十呎巾四呎高さ八呎の大きな機械があつた。

その機械は他のミーリング三四臺分の作業を一行程でなし遂げる能力を持つてゐた。だから熟練工ばかりによつて使用された。

その日ユニバーサルミーリングは、フランシスタービンの齒車のミーリングをやつてゐた。ミーリングされるボルトの穴は五六百あつたらう。それを一度に二十個位づつ形付けて行く。從つて職工の二つの目は二十の力に分散されなければならなかつた。

そこに原因があつた。その係りのミーリング職工は一寸右手を伸ばした調子に齒締にナツパの袖を卷かれた。一分間五百回の廻轉數と三十馬力モーター直結のチヤツクは忽ち彼の右腕を卷き込んでしまつた。彼の身體は右腕を中心にして約四五十回唸りを立てて振り廻された。

私たちが馳せつけてモータアのスヰツチを切つたのと彼の右腕を捥がれた身體が傍らの鐵敷に叩きつけられたのとは殆ど同時であつた。チヤツクを中心にして血のしぶきが圓形を描いて床に散つてゐた。

『痛いよう、痛いよう、』

と彼は子供のやうに喚き立てた。

事務所にこの事件が報告された。人々が八方に起つた。お祭り騷ぎのやうな又葬式のやうな氣分が私たちの頭を流れた。

彼の……痛いよう、といふ悲鳴と機械の音とが氣味惡い拍子を打つて絡まつた。

傍に馳せつけた一人の友人の顏を見ると「殺し――くれ殺してくれ

ィ――と血糊の中を轉がつて泣き叫んだ。友人たちは彼の血まみれの身體を抱いたり額を押さへて見たり傷口にボロをあててみたりしてゐた。

間もなく御用醫院の擔架が來て彼の身體を運び去らうとした。彼は一人の友人の足に縋りついて「殺してくれ、こんなに苦しいなら死んだ方がいい！」と涙を流して賴んだ。

誰も答へる者はゐなかつた。

と、一人の男が鍛冶場の方へ走つた。（十八字削除）

『どけどけ！』

と怒鳴つて人々に道を開かせた。

『おい〇〇！　××××××、』

とその男は（十二字削除）

『おお……』

と彼は血の氣のなくなつた頬でかすかに笑つた。

そつぽを向いたまま（三十九字削除）

周圍にゐた人々は血を見ると初めて氣がついた樣に騷ぎ始めた。

事務所から役人が來て警察へ通知された。

私たちが機械を征服（管理）する日は何時だらう。

6 眞犯人？

七人は夜の街を眞直に逃げた。

靴の音と佩劍の響と呶る聲が後から迫つて來た。暫らく行くと道が二つに分れてゐた。七人は三人と四人づつ分れて別々に逃げた。

私たちは捕るのは厭だつた。恐れてゐるのではない。窮地に陷つて人員が減りつつある爭議團が心配になるからだ。

暗を縫つて私たちは走つた。ふと氣がつくと知らない街にまぎれこんでゐた。官憲に追はれた場合に未知の街に逃げ込む程不用意なことはない、と云ふことを私たちはよく知つてゐた。

『だらしがない』

と一人が言つた。

『かういふ場合は』と他の一人が言つた『飛躍しなければならない、つまり塀を越えるとか何んとかするのさ』

『よし、あすこに飛躍しよう』

と他のが横手の黒塀を指示した。佩劍の音は尚も後から續いた。私たち四人は黒塀によぢ登つた。黒塀の向うは廣大な屋敷の庭先で街燈が明るく灯つてゐた。

『駄目だ。』

「屋根へ登れ屋根へ！」

私たちは野良猫のやうに塀を爬つて塀續きの屋根へ登つた。もうその時は四五名の首魁が塀の下に集つて喚いてゐた。私たちは逃げる方向を知られてはならなかつた。

『××！』

（八十五字削除）

私たちはその隙を見逃さう筈はなかつた。

『……』

無言の合圖を交しながら屋根の分水嶺を越えて反對の側に滑り下りた。私たちはどんな方法で屋根から地上に飛び下りたか覺えてゐない。ただ身體中が傷だらけになつてゐたことだけが後で解つた。

（三十八字削除）

巡査も飯を食ふ爲の月給四十八圓家族手當十四圓の職業である。

（十六字削除）

7 希望

娑婆の希望は少しづつ行き詰つて行くやうだ。失業者は總數正に三百萬人だ。

私たちは決して絶望してはゐない。あとただ一つのものがあれば私たちが強くなれる。

それは失業大衆の組織である。それには失業保險法の獲得である。

（二十五字削除）

然し私たちは絶望しない。プロレタリアの科學を持つてゐる。

（七十七字削除）

然し私達は絶望しない。プロレタリアは獨自の科學を戰ひ獲つた。

私たちは新しい歷史を創る基礎工事の一本のボルトである。私たちには絶望がない。私たちは規則正しく一つの規範の下に生活を續ける。又次の時代の爲に、子供たちを強健に率直に育て上げる。

十二月といふ一つの古い暦がめぐつて來る度に私は、私たちの時代が一歩一歩近づいて來るのを意識して胸のふくれる喜びを感じる。

美術界展望

谷川徹三

一

私の知つてゐる美術家には不思議に澄んだ美しい眼と朗らかな開けつぱなしの性質をもつた人が多い。藝術家といふ概念が如何にもぴつたりあてはまる、といふと少少嫌味になるかも知れないが、結局さういふよりほかに言ひやうのない、たかば浮世の外の人のやうな、さういふ人柄である。

かういふ人柄は私の知つてゐる文藝の士には數少い。彼等は一般にもつと暗い。神經質である。澄んだ美しい眼を滅多にもつてゐない。彼等が常凡である場合にも常凡でない場合にも、藝術家といふ概念は美術家の場合ほどぴつたりしない。そしてこれは、二三の人に質して見たところでは、必ずしも私一人の感じでなく、他の人の感ずるところでもあるらしい。

ところでこの事實は、私には、一方では藝術としての美術と文藝との性質の相異を、他方では、特にこの國の一般社會生活に於ける美術と文藝との環境並びに地位の相異を（それは兩者の傳統の相異を背景にしてゐる）、一つの直感的な形で示したもののやうに思はれる。

二

一定の藝術形式としての美術と文藝とがどう相異するかはそれ自身大きな問題である。私はそれをここで論じようとは思はない。更に、美術も文藝もその藝術としての本質上、最も奥深いところでは手を取り合つてゐるのであるが、（淺いところで手を取り合ふと單なるジャンルの混同になる）、さういふ問題、並びにその問題と前の問題との關係についてもここでは觸れられない。しかし極めて大雜把に言つて、美術は文藝に比して特に「見る」ことの上に立ち、文藝は美術に比して特に言葉による觀念の自由な表白に、その特色をもつと言ふことはできるであらう。

『屋根へ登れ屋根へ。』

私たちは野良猫のやうに塀を爬つて塀續きの屋根へ登つた。もうその時は四五名の巡査が塀の下に集つて喚いてゐた。私たちは逃げる方向を知られてはならなかつた。

『××！』

(八十五字削除)

私たちはその隙を見逃さう筈はなかつた。

『……』

無言の合圖を交しながら屋根の分水嶺を越えて反對の側に滑り下りた。私たちはどんな方法で屋根から地上に飛び下りたか覺えてゐない。ただ身體中が傷だらけになつてゐたことだけが後で解つた。

(三十八字削除)

巡査も飯を食ふ爲の月給四十八圓家族手當十四圓の職業である。

(十六字削除)

7　希望

娑婆の有様は少しづつ行き詰つて行くやうだ。失業者は總數正に三百萬人。

私たちは決して絶望してはゐない。あとただ一つのものがあれば力が強くなれる。

それは失業大衆の組織である。それには失業保險法の獲得である。

(二十五字削除)

然し私たちは絶望しない。プロレタリアの科學を持つてゐる。

(七十七字削除)

然し私達は絶望しない。プロレタリアは獨自の科學を戰ひ獲つた。

私たちは新しい歴史を創る基礎工事の一本のボルトである。私たちには絶望がない。私たちは規則正しく一つの規範の下に生活を續ける。又次の時代の爲に、子供たちを強健に率直に育て上げる。

十二月といふ一つの古い暦がめぐつて來る度に私は、私たちの時代が一歩一歩近づいて來るのを意識して胸のふくれる喜びを感じる。

美術界展望

谷川徹三

一

私の知つてゐる美術家には不思議に澄んだ美しい眼と朗らかな開けつぱなしの性質をもつた人が多い。藝術家といふ概念が如何にもぴつたりあてはまる、といふと少少嫌味になるかも知れないが、結局さういふよりほかに言ひやうのない、なかば浮世の外の人のやうな、さういふ人柄である。

かういふ人柄は私の知つてゐる文藝の士には較少い。彼等は一般にもつと暗い。神經質である。澄んだ美しい眼を滅多にもつてゐない。彼等が常凡である場合にも常凡でない場合にも、藝術家といふ概念は美術家の場合ほどぴつたりしない。そしてこれは、二三の人に質して見たところでは、必ずしも私一人の感じでなく、他の人の感ずるところでもあるらしい。

ところでこの事實は、私には、一方では藝術としての美術と文藝との性質の相異を、他方では、特にこの國の一般社會生活に於ける美術と文藝との環境並びに地位の相異を（それは兩者の傳統の相異を背景にしてゐる）、一つの直感的な形で示したもののやうに思はれる。

二

一定の藝術形式としての美術と文藝とがどう相異するかはそれ自身大きな問題である。私はそれをここで論じようとは思はない。更に、美術も文藝もその藝術としての本質上、最も奥深いところでは手を取り合つてゐるのであるが、淺いところで手を取り合ふと單なるジャンルの混同になる、さういふ問題、並びにその問題と前の問題との關係についてもここでは觸れられない。しかし極めて大雑把に言つて、美術は文藝に比して特に「見る」ことの上に立ち、文藝は美術に比して特に言葉による觀念の自由な表白に、その特色をもつと言ふことはできるであらう。

ここに美術家と文藝の士との、さきに擧げたやうな相異が主としてもとづくと言つたら、人はそれをあまりに大膽な概括と言ふだらうか。

小說家は畫家のやうに「見」ない。或る畫家は鯉を描くために、自分の庭に池を掘つて數ヶ月毎日のやうに鯉を眺めて暮してゐた。或る花鳥畫家はその家を鳥屋のやうにし、その庭を花園のやうにして、毎日、その鳥や花を見てゐる。繪を描くときには畫家は全身眼である。畫家のたましひは眼にある。さうして畫家が常に美しい風景を見、美しい花を見てゐるならば、その眼が澄むのに不思議はない筈である。

小說家はさういふ風には「見」ない。畫家は言はば見るだけでいい。しかし小說家は見るだけでは駄目だ。畫家は一つの風景、一つの樹木、一つの花に見ることを集中できる。しかし小說家は畫家のやうには集中できないし、また畫家のやうに集中してはならない。畫家にあつては眼の奧にある觀念はしばしば邪魔にさへなる。見ることに純粹になれば、何はなくとも立派な畫家でありうる。しかし小說家にとつては眼の奧にある觀念がむしろ大切で、見ることは常にその觀念に結びつき、觀念の關聯のなかに見る作用は組入れられる。觀念の過重と見る作用の過少とは小說をしばしば具象性のないものとするが、しかし觀念の關聯の稀薄と雜駁とは、しばしば小說の構成を歪ませるに至るであらう。小說家にとつて見ることはかういふ意味である。その上、彼の見るものが、美しい風景や花ではなくて、人と人との爭ひであり、氣持のもつれであり、街上の出來事であるとすれば、その眼が、畫家のやうに澄まないのに不思議はない筈である。

三

しかし理由はこれだけではないやうである。畫家にしても美しい風景や美しい花許りを見てゐるわけではあるまいし、小說家にしてもさういふものを見ないわけでもあるまい。その見るといふのが、すでに言つたやうに畫家と小說家とでは多少とも異つてゐるにしても。

第二の理由として私は特に、この二つの藝術の傳統の相異、ひいてそのそれぞれに從事するもの達の一般社會生活に於ける環境乃至地位の相異を數へたい。（勿論私は現在のこの國のみを問題にしてゐるのであるが。）一言でいへば美術特に繪畫は文藝に比して傳統が根深く殘つてゐるのである。傳統が今日により多く生きてゐるのである。

日本の文化のあらゆる分野に見られる二元性——歐米から移入した文化の系統とそれ以前の系統との——に、ここにも見られる。そのためにわれわれは日本畫と洋畫といふ、考へると妙な區別をさへもつてゐる。これは今日では主として材料の相違にもとづくもので、「日本

畫」に全く油繪的な構圖や手法を採り油繪的な效果をねらつてゐるものもあれば、油繪で全く東洋的な味を出してゐるものもあり、更に洋畫家であつて秀れた墨繪を描く人もあるが、さういふことは更に後の問題として、とにかく日本畫と洋畫といふ區別をもつてゐる。

しかしこの區別もこの場合には、たまたま却つて美術に於ける傳統が文藝に於けるよりも根深いことを語つてゐる。

文藝に於いて舊文化系統の精神なり作風なりが今日生きてゐるより、美術に於いてそれの生きてゐるのは遙かに根深く力強い。これは單に、たとへば岸田劉生氏がかつて或は宋元の花鳥畫の或は初期肉筆浮世繪の美を新しく生かした、といふやうな事實を指すのみでない。今日の文藝の士で本氣に源氏や近松を讀む人が果して幾人あるかと思はしめるのに、美術家で博物館や古寺に古畫を見て巡らない人はおそらくない、といふさういふ事實一般を指すのである。秀れた畫家がどこかで何かの仕方で古畫を或は古畫の精神を生かしてゐるといふ事實を指すのである。この事情は洋畫についても當てはまる。洋畫人の大部分は歐羅巴で修業し、その地で美術の傳統を受けて來てゐる。

この事實が何に基づくにせよ（恐らく、日本畫の場合には過去の日本畫或は東洋の繪が特に秀れたものであつた事情も考へられるであらうし、特に洋畫の場合には言葉の國民性に對して、色の國際性といふことも考へられるであらう。更に一緒に、見ることが體驗のやうには時代の制約を甚だしく受けないといふことも考へられるであらう）事實は事實であり、そしてこの事實は、更に次のやうな意味を——即ち美術家の一般社會生活に於ける環境乃至地位を文藝の士と異ならしめるといふ意味をもつて來る。

現在でもまだその風は完全には拔けてゐないが、かつては一際隔だしかつたことがある。良家の子弟が文藝の世界に立たうとすることをその親達が非常に嫌ひ、それをもつて多くは子弟の墮落とした事實である。しかも彼等はその子弟が美術家になることにはそれほど反對しなかつたのである。

この相違は同時に、美術家には文藝の士に比して遙かに良家の子弟が多いことと並行し、更に美術品が年老いた貴族やブルジョア達の重要な鑑賞物であり裝飾品（勿論裝身具の意味ではない）であるのに對して、文藝が（少くとも「文壇」のそれが）主としてインテリゲンチア青年子女に喜ばれるものである事實を背景にしてゐる。これは美術品が高價で一般人の手に入らないのに、文藝の作品が印刷物として容易に手にはひることを示すにとどまり、藝術品の性情を見れば、文藝の作品の讀者はまた同時に美術品の鑑賞者であるとも言へるが、しかし美術品が高價で一般人の手に入らないといふ事情こそ、それが貴族や

ブルジョア達と結びつく所以であり、更に、それが美術家を文藝の士とは異つた環境、地位に置く所以でもあるのだ。

少くとも今迄のところ美術家の生活は一般に文藝の士に比して呑氣なやうである。多くの美術家は「パトロン」をもつてゐる。さういふものは文藝の士にはない。あつても稀有の場合である。美術家の或ものの達の富はしばしば大ブルジョアにも匹敵する。

しかもこれは全く、この國の美術が傳統の背景をもつてゐるのに、文藝が特に傳統の背景をもたないことに因由してゐるので、文藝が一層廣く深い傳統の背景をもつ西歐の他の國に於いては、文藝の士も十分美術家に匹敵し、或はそれ以上なのである。日本語が特にこの國にのみ限られ歐米の各國語が廣大な國際性を有することにもこれは因らうが、しかし、この國の文藝に於いても、一層傳統の根強いもの、和歌俳句の領域に於ける特殊事情——一人の或は數人の歌人、俳人を中心とした幾つかの團體が、他に見られない根強い確實な地盤の上に立つてゐる事情——を顧れば、一般に傳統の大きな意味を理解するに困難はないであらう。

四

この國の美術のかやうな背景が、美術に於いて特に帝國美術院をつくらせ、その會員に高い官府的地位を與へ、その展覽會を縁日のやうに雜沓させてゐる。かういふものは文藝の分野にはない。かつて一度文藝院なるものが出來たが、直ぐ潰れた。美術のもつやうな背景がないから潰れたのである。そして爾來「文壇」は全く官府と關係のないものとして存在してゐる。今日、文科大學は決して文壇に對するアカデミーではない。

この事情は同時に、文壇を常に青年の世界とし、若々しく新鮮に、しかし重く大きいもののない、常に浮動した場所としてゐるに反し、美術界を、特に帝展を、新鮮な若々しさのない、因襲と情實との絡んだ、しかしどこかに大きいもののゐる場所としてゐる。

全くわれわれは美術の「大家」の二三の名に比することのできるやうな「大家」を「文壇」に於いてはもつてゐない。と同時に文壇は常に青年の天下であり、動きゆく時代をいち早く敏感に反映してゐる。なるほど若い畫家達はいち早くフランスの新運動や新傾向を受入れてゐるが、それは畫壇の全體からいへば誠に微々たるものである。多くの（最も秀れた人をも含んだ）美術家にとつてマルキシズムは全く問題でない。彼等はその畫境に安住し、どつしりと腰をすゑて制作に專念してゐる。しかし「文壇」の人達はそれを受入れると受入れないとにかかはらず、ほとんどことごとくが多少ともにこれを問題にしてゐ

る。多くの美術家のやうに腰をすゑてゐたものは結局幾何もなかつたと言へる。美術界にもやがて文藝の世界に起つたと同じ動亂が起るかも知れない。現にプロレタリア美術展覧會なるものがあり、最近一部にはこの問題が相當論議されてゐる。しかし恐らく文藝の世界でのやうにはこの世界では一般的問題にならないであらう。（ここでも文藝と美術との性質の相違及びこの國のそれぞれの分野の傳統の根系の相異が背景をなしてゐる。）

たゞ最近の美術界に於いて、機械美の問題のみが、文藝より先に取上げられ、美術界の問題から轉じて文藝の問題ともなつてゐるが、しかしそれは機械美そのものの特に造形的な性質によるので、美術が特にこの點で進歩的であつたのではないし、またこの問題が美術界に取上げられたについては、特に建築や映畫の影響をも見遁してはならないであらう。

五

日本の美術界はまだまだ太平である。世界不況でパトロンを失つた美術家が續出したと言つても、展覧會での賣上げが著しく減少したと言つても、まだまだ天下太平である。純粹に「見る」ことに安んじてゐられるからである。「プロレタリア美術」はまだここでは極めて力弱い。技術の優劣がここでは文藝に於けるよりも一層決定的に見られるからである。「イデオロギー」を出す餘地が文藝に比して遙かに少いからである。文藝に比して傳統が遙かに根強いからである。

最近二科が分裂した。二科を出た人の中には二三の秀れた新人がゐる。或人はそれを二科にとつて致命的な痛手だと言ひ、或人は何らの痛手でもないと言ふ。しかしそれが痛手であつても痛手でなくても、問題は「眼」の相違でなければ一層私的な事情にあるであらう。それは「イデオロギー」の根本的相異ではないであらう。

巷間傳ふるところによれば最近津田青楓氏はプロレタリア美術展の矢部友衞氏等と共同して新しいリアリズムの運動を起さうとしてゐると言ふ。私はその眞偽を知らないが、しかし津田氏はその場合にも問題を全く「眼」の問題としてゐるらしい。

問題が「眼」にあり、「見る」ことにある限り、如何に諸團體に分裂があらうとも、美術界は太平である。彼等は昔ながらに朗かで、澄んだ美しい眼をもちつゞけることが出來るであらう。

六

そこで最後にこの天下太平の美術界をそれぞれの美術團體に即して一應鳥瞰して見よう。

I、帝展。帝展の日本畫は、如何に大きな努力が如何に無駄なことに費されてゐるかのよい例によつて滿たされてゐる。しかしここでも、今年の福田平八郎氏の「緋鯉」や鏑木清方氏の「圓朝像」のやうな立派な作品も見られ、なほ四五の秀れた人を見ることが出來るとすれば、われ〳〵は一應滿足すべきであらうか。

洋畫は槐樹社一派が潮をとなへてから多少ともよくなつた。牧野虎雄氏、片多德郎氏、和田三造氏、そのほか數へればまだ好きな人は相當ある。

II 院展。われわれにとつてしばしば直ぐ前の時代は、百年前より一層古く、百年前は千年前より一層古い。かつてこの國の繪畫にとつても江戸の、或は江戸を通した傳統はそれ以前のものより一層古く見えた。そこでその以前のものを更に支那印度の古畫の畫風を生かすことによつて、帝展より新らしく見えたのが院展である。その生き生きした新らしさは今はもう失はれたとはいへ。しかしここは偉大な小林古徑氏がゐる。横山大觀氏がある。そのほかにも安田靫彦氏、前田靑邨氏、小川芋錢氏がゐる。

III 二科。印象派がまだ新しかつたころ、新らしい一派として帝展から分離したここの會員達の繪も、今では、帝展の中堅審査員達の繪より古めかしくなつてゐる。しかし新しい傾向を眞先に受入れるのは今でもここである。ここには安井曾太郎氏がゐる。

IV 春陽會。中川一政氏、石井鶴三氏、小杉未醒氏もう一人數へれば森田恒友氏。

V 國展。今はなくなつたここの日本畫部に私は尊敬すべき人を見出してゐた。榊原紫峰氏、村上華岳氏、土田麥僊氏など。村上氏は久しく沈默し、榊原氏もしばらく作品を見せないし、土田氏の今年の帝展の「明粧」も私にはどこか物足りない。今では洋畫に梅原龍三郎氏一人が光つてゐる。

VI プロレタリア美術展。この派の人達は美術を「眼」の問題としない。あからさまに美術を宣傳煽動の具と見てゐる。そこでヒロイックな題材をリアリスティックに描くこととなる。(この考へがもつと巾を利かせたら美術界も天下太平でなくなる)

しかし美術は文藝とはちがつてゐる。その本質も、この國に於けるその傳統も……。

新鋭文 第二次

絶對廉價 新四六判 装幀荘重 各冊 三十錢 送料各六錢

- 歩きつゞける男 片岡鐵兵著
- 約束手形三千八百圓也 徳永直著
- 夜明けのさよなら 中野重治著
- 勞働市場 橋本英吉著
- 鐵の規律 明石鉄也著
- 勞働日記と靴 鹿地亘著
- 暴露讀本 貴司山治著

學叢書

最新刊

海と飛魚の子と 林房雄著

辻馬車時代 藤澤桓夫著

十九の夏 龍膽寺雄著

續放浪記 林芙美子著

題未定 小林多喜二著

第一次既刊

黒島傳治著 浮動する地價
平林たい子著 耕地
林芙美子著 放浪記
岡田禎子著 正子とその職業
芹澤光治良著 ブルジョア
藤澤桓夫著 傷だらけの歌
井伏鱒二著 なつかしき現實
中村正常著 隕石の寢床
久野豊彦著 ボール紙の皇帝萬歳
龍膽寺雄著 放浪時代
武田麟太郎著 反逆の呂律
中本たか子著 闘ひ
岩藤雪夫著 屍の海
窪川いね子著 研究會挿話
堀辰雄著 不器用な天使
立野信之著 情報

振替東京八四〇二番
東京市芝區愛宕下町
改造社

文藝時評

大森義太郎

平林初之輔氏の科學的批評排斥論

平林初之輔氏は科學的批評を排斥するために一文を草された。『所謂科學的批評の限界』(『新潮』、一一月號)がそれである。から書くと、私はすぐ平林氏の抗議に會ふと思ふ。平林氏は云はれるに違ひない、『私は疑問ばかり提出して』ゐるので、『一向それに答へない』でゐるのだ、と。しかし、平林氏は論文の終りで結論として次のやうに述べられる。『科學的批評が若し可能であるとしても——それが可能であることさへも疑問だ——それには限界があつて作品の評價には、嚴密な科學的評價なんてものは、現在のところでは絶無(『絶無』であれば未來への望みもまづないわけであらう—— 大森)であるといふことだ。作品の評價の最終の決定者は主觀だといふことだ。』(傍點—大森)これは明かに積極的な主張である。平林氏は最初は謙遜なる疑問の提出者であるが、次には傲然たる理論の主張者である。後に述べるやうに氏は、科學的批評を唱道する者達の間における社會學的分析の部分の科學性と作品評價の部分の非科學性との、その矛盾を指摘して、彼等の『頭と尻尾とが一致してゐない』ことを嘲笑してをられる。いまわれわれが氏の顰みに倣ふとすれば、平林氏自身の論文について頭と尻尾とを區別できるやうである。が、平林氏の頭と尻尾を突き合せて吟味してみることは、私にとつて興味ある仕事でもないし、またあまり有益でもない。

そこでそれはそのままにして、『所謂科學的批評の限界』の云ふところは、いまの氏の結論から明かなやうに、藝術批評は要するにみんなが自分の思ひつきを勝手に云ひ會ふんで又それでいゝんだといふことである。これはひどく平凡である。昔から十人十色、"de gustibus non est disputandum" といふことは云ひ古されてきてゐる。いまさらこれを云ひ出すことは、文藝批評家平林初之輔氏の『ペンによりも』市井の俗人の『口にふさはしい』とさへ思はれよう。けれども、平凡だ

といふことはその議論を無視していゝ――さうした場合はもちろん多いが――といふ理由にはならない。で、われわれは『所謂科學的批評の限界』をもう少し仔細に見てみなければならぬ。

いままで私は平林氏が藝術批評の科學性を全的に否定してをられるやうに云ひなした傾きがあつたかもしれない。まづこの點を訂正しなければならぬ。平林氏はさうではない。氏は藝術批評について二つの部分を區別される。ひとつは藝術に對する『社會學的分析』、『沒價値的分析』であり、いまひとつは藝術に對する『評價』。

この區別はまことに當然である。藝術といつたところでひとつの存在物であること、詳しくいへば社會的な存在物であることは說明するまでもない。そこで、この藝術を科學の對象として、それの性質を支配する法則を發見樹立するといふ路がある筈である。しかし、藝術についてはこれに對していゝ惡いの判斷を下すことを要求されるからして、この存在物の性質そのものでなくこの存在物に對する價値づけを科學の對象にし、それの體系化を企てる路がまたなければならぬ。すなはち、いまもしひろく藝術を對象とする科學をひつくるめて假りに藝術學と呼ぶとすれば、藝術學は二つに別れて、――特に平林氏のいひいためにカント派ふうの表現を選ぶとすれば、――存在科學としての藝術學と規範科學としての藝術學とになるであらう。平林氏もこのことを述べてゐられる。

ところで、第一の路の、存在科學としての藝術學の科學的可能性については、社會科學一般の可能性が認められてゐる今日、多くの言葉を費す必要はない。われわれは社會そのものを、經濟を、政治を社會科學の對象としうると同じく、藝術を社會科學の對象としうる。藝術に關するこの意味の科學は經濟や政治に關する科學と同じく可能である。少し餘計だが云ひ添へれば、これには歷史的な研究と理論的な研究とがさらに區別されるであらう。かういふ意味の藝術學が可能であることは、逆にいへば、藝術に關するかういふ意味の『科學的批評』が可能であることを示す。

この點については私は平林氏に對して多くの議論をする必要がない。なぜなら氏自身この種の科學的批評には充分の承認を與へられてゐる。平林氏は右の論文のうちでテーヌの見解を紹介してゐられるが、そのテーヌの、藝術の存在に關する科學に自然科學的方法（！）をそのまゝに導入しようとする意見に對してすら、『少くも理論的には、この態度は可能である』と受納せられる。それからして、私が最初に引用した氏の結論の言葉をとつても、このことは明かである。なるほど、そこでは氏は多少の疑問を呈されてゐるかのやうであるが、疑問の根據は論文のどこにもないので、むしろそれは言葉の綾であらう。

大に、さきの第二の路、規範科學としての藝術學の問題になると話は非常に入りくんでくる。そして藝術に關するこの科學こそ平林氏が極力否定されるところである。(もちろん平林氏はかういふ云ひ方をしてをられない。藝術の評價に關する『科學的批評』を否定してをられるだけである。が、もし上の規範科學が可能になれば、藝術に對するこの意味の『科學的批評』が可能になるわけで、平林氏の所說は規範科學としての藝術學の否定と精密に同じことを意味する。) ところで、規範科學としての藝術學といふのは、從來美學と呼ばれてゐたものが大體これであつて、例へば倫理學と同じ學的性質のものである。平林氏はこれの可能性を否定されるのだ。

こゝで、多少橫路にそれるが云ふならば、ブルジョア哲學においてかゝる種類の科學は、もとよりいろいろの意見があるが、多く成立可能とされてゐたものである。それに平林氏は反對の見解をもつてゐられる。いつたい平林氏はどんな哲學的立場に立つてゐられるのであらうか。問題は明かに科學論に、哲學に關してゐる。マルクシストは辨證法的唯物論の上に、史的唯物論の上に立脚してゐる。平林氏がマルクシストでないことは私の云ふまでもないが、平林氏の哲學的立場は何か。明白な哲學的立場なくしてかうした問題を論じられた義理のもんでないんだから、平林氏にも哲學的立場があるに違ひない。私はそれを讀者諸君と共に是非聞かせていたゞきたく思ふ。

元へ戾るとして。平林氏が藝術の評價の科學性を否定される理由はなんであるか。それはおよそ二つあるやうに見える。『百人の批評家に、それを(『一つの作品を』――大森)評價さして見たまへ、百人が百人ともちがつた評價をすることは確實といつてよい』。つまり評價が多岐で『歸一』するところを知らないといふのが氏の第一の理由である。それから、評價が整理されても『徹底印象主義者を改宗させるわけにはゆくまい』とも云つてゐられる。つまり、だから評價が多岐にわたることは今日だけの偶然ではなく實に必然だとの意味である。

第二のことは少々――失禮だが――馬鹿げてゐる。どんな人をも『改宗させる』なんて責任をしよはされたんぢや、科學でなくて坊主だつて堪るまい。いくら云つて聞かせても地球は平べつたいと頑張るホッテントットを地球は圓いといふ學說にまで『改宗させ』えないといつて、近代の天文學は學的正しさを失ひやしない。それどころか、私は今日夥だしいブルジョア經濟學者を勞働價値學說に『改宗させ』えないでゐるといふことで、マルクス經濟學の科學性を、平林氏と共に疑ふ氣には不幸にしてなれない。

そこで氏の第一の理由だが、平林氏は『歸一』といふことをもつて科學性の表徵と考へられてゐる、――氏はこれで科學の普遍妥當性よ

いふことを頭に置かれてゐるのであらう。しかしこの理由もあまり多くの人を『改宗させ』えないやうである。その科學性を疑はれてゐない科學は、現實にみなたゞ一つであらうか、現實に一に歸してゐるであらうか。例へば、上で引合ひに出した哲學はギリシヤ以來實に多くの體系をもつてゐる、少し誇張していへばおのおのの哲學者がおのおのの哲學體系をもつてゐると云ふことができる。經濟學についても同じである。今日だけについても經濟學體系の種類を擧げつくすことはさう容易でない。なるほどマルクシズムにおいては一に歸してゐるやうに考へられよう。しかしこゝでも陣營內における種々の意見の差、大きく云つて社會民主々義者と共產主義者との間におけるやうな差を考察に入れてくれば、全く『歸一』してゐないし、その見込みもない。平林氏はこの事實だけで哲學一般の、經濟學一般の科學性を――氏のお好みに從つて『現在のところ』と限つてもいゝ――否定されるといふのである。もし平林氏があくまでさう考へてゐられるなら、われわれは平林氏を『改宗させる』ことを斷念するほかない。

それから、これは云はなくてもいゝことだが、平林氏は藝術に對する評價について、しきりに、十人十色に輪をかけて『百人百色』だと書き記してをられるが、これなど寧ろ 例へば氏はダヴインチのモナ・リザとラファエルのマドンナを出してゐられるが、このよし惡しについて決して『百人百色』ではない。いはんや、これも氏の例のダヴインチのモナ・リザと銀座の夜店に出てゐる複製の例とについて百人百色は少々誇張がひどい。

かうして、平林氏の科學的批評排斥論はどうも根據が極めて薄弱である。科學的批評に對するきまつた疑問の解答をなしてゐない。

最後に。平林氏が『科學的批評の限界』においてこれと取つ組み合ひ、無暗とやつつけられてゐる『科學的批評』といふことの意味が私には非常に變に思はれる。平林氏は評價の場合の科學的批評の、批評の科學性の主張をもつて、評價の標準の歸一性、平面的な普遍妥當性の主張だと考へられてゐる。さういふ意味の主張をするものがあるのかもしれない、私は知らないが。われわれは『科學的批評』といふ言葉をもつてそんなことを主張しない。われわれが求めるのは評價の標準の歸一性ではなく、評價の方法の科學性である。これだけ云つたんではもちろん問題にならない。その科學性がはたして得られるか、どこから得られるかを明かにしなければならない。私はそれを二つの方面から得られると考へる。

第一は、藝術とはいかなるものかゞ明かにされることによつてゞある。藝術はひとつの人間の精神活動としてどのやうな要素によつて形づくられるか、藝術の效果は何に基くか、藝術は理論（科學）とどう

いふやうに違ふか、また、藝術行動は政治行動とどの點で關係し、どの點で相違するか、藝術は社會においていかなる役割をもつかを明かにする。さらに藝術の種々なる形式について研究される。ひと口にいへば、藝術の成立・構造・機能が明かにされるならば、われわれはこの基準に照し合はせてある藝術作品を評價することができる。こゝで平林氏の所論にふたたび觸れゝば、氏が引用されてゐるプレハノフが「青服を着た女」を描かうとする畫家の出來あがつた繪が青服を着た女になつてゐないでたゞ立體的幾何學的な形體になつてゐるんではその繪は駄目だといふことを云つて、『實際の製作』と『その意圖』との『適合』を藝術評價のひとつの『客觀的尺度』として擧げてゐるのはこの例である。『平林氏はこゝで、プレハノフの言葉をもつてたゞ『繪が、描かうとするものに似てをればよいといふのだ』と解され、『これはマルクス主義の碩學プレハノフのペンよりもたしかに小學校の圖畫の先生の口にふさはしい言葉である』とプレハノフ先生を大いに皮肉つてゐられる。しかしこの皮肉はちよつと贈り物である。プレハノフは決して對象に似てをるかどうかをもつて客觀的尺度にはしてゐない。平林氏自身引用されるプレハノフの文章だけをとつても、プレハノフは『製作』と『意圖』——この場合に畫家は『立體的幾何學的な形體』をでなく、實に、『青服を着た女』を描くことを『意圖』してゐる——との『藝術作品の形式』と『その思想』との『適合』を客觀的尺度にしてゐるのだ。平林氏は御自分で書きつけられたプレハノフからの引用をもう一度お讀み直しになつていたゞきたい。』

第二に、評價の科學性は藝術が進むべき方向の認識から獲られる。われわれは今日の資本主義社會の分析からその將來への、社會主義社會への展望をもつことができると同じやうに、今日の藝術の分析から將來の藝術を想見することができる。われわれはこの觀點から今日續々出てくる藝術作品を『評價』することができる。

われわれが評價における科學的批評を云ふのはかうした考察、方法のもとに批評を行ふことが科學的であるといふ意味にほかならぬ。しかしなほ問題が殘るであらう。これらの考察の基礎になつてゐる、第一の場合には藝術とはいかなるものかの考究、第二の場合には、今日の藝術の分析ならびに將來の藝術の認識が、どうして科學的でありうるか。私はこれにはすでに答へた。二つ共に存在物としての藝術に關する科學、さきの言葉を用ゐれば存在科學としての藝術學の任務に屬する、そしてこれの可能はわれわれの認めたところである。なにより平林氏自身がこの可能性を認めてをられる！

このやうにして『科學的批評』は可能である。

けれども讀者諸君は私に抗議的に訊ねられるだらう。科學的批評は

可能だとして、君等の批評の現狀はさういふ科學的水準に達してはゐないぢやないかと。この非難は甘受しなくてはなるまい。しかし、これはまた當然ではなからうか。上で私が明かにしたやうに、評價の科學性はひとへに、藝術の歷史＝理論的な研究の完全に俟つ。ところが、この藝術の歷史＝理論的な研究は辨證法的唯物論、史的唯物論をもつマルクシズムによつて——これによつて社會科學一般が學として基礎確立された——始めて正しい方法の上に据ゑられたのである。その意味で、藝術の研究は端緒についてまだいくばくもない。はなはだ不完全である。藝術の歷史＝理論的な研究すらがそのやうに不完全である今日、評價の科學性の現狀があやしいのは當然である。だからといつてわれわれは科學的批評を全く棄て去つて、『作品の評價の最終の決定者は主觀だ』なんかといふ氣持に見得を切つてゐてはならぬのである。錬金術と同じものにしかすぎなかつた中世期の物理學化學の現狀は今日の藝術學よりももつと科學性から遠ざかつてゐたかもしれぬ。そのとき、これをもつて科學としての物理學化學を拋棄してゐたら、今日の物理學化學のもつ科學性は得られなかつたであらう。

なんだか結論はすこぶる平凡になつてしまつた。しかし平凡なことに答へるとまづ平凡になるのが常道だ。

『アジアの嵐』と『西部戰線異常なし』

いつもいまごろは映畫シーズンの絕頂なのだが、とりわけて今秋は二つの映畫が競映されてゐることでわれわれの興味をそゝる。『アジアの嵐』は說明するまでもなくサヴエート・ロシヤの代表的映畫のひとつである。『西部戰線異常なし』は、私が後に明かにするやうに、アメリカ映畫のひとつの最高峰である。ロシアとアメリカと、映畫を語るとき問題になるたゞ二つの國の代表的作品を前にして何事かを云ふことは映畫研究者の義務——と云つては少し大袈裟だが——ですらあるやうに思へる。

荒寞たる蒙古の自然が表はされる。から書き出して、私は映畫論としてはひどく月並に『アジヤの嵐』のストーリをまづ述べるのだが、それはこの映畫のストーリが檢閱によつてはなはだしく歪められてゐるからである。正しいストーリを讀者諸君に傳へる手段ともなるであらう。嶮しい山地でひとりの若者が、百年に一度も獲られぬといふ銀狐（黑狐？）を擊つてその毛皮を手に入れる。その蒙古人の家。父が臥てゐる。それを見舞ひに仲間の蒙古人達がやつてくる。蒙古人の家內の生活が我々の前に展かれる。そして喇嘛僧が病氣を癒すといふんで祈禱をしてゐる。さつきの毛皮が誇らしげに見舞のお客達に示され

る。それを蹂み見た喇嘛僧は神に捧ぐべきものだと云つて奪ひ取らうとする、——これは宗教の常習的手段ではないか！ しかし息子ティムールはこれを奪ひ返す。毛皮が高く買はれて、一家が救はれることを夢みて、ティムールは毛皮市場へ急ぐ。

蒙古の毛皮市場。方々から集つた群集。市場の雑踏が巧みに映し出される。此處には土民をごまかして巨利を攫まうとする外國の毛皮商人が乘り込んできてゐる、そのさまざまな外國商人をカツトして出してくる。毛皮の市場。毛皮商人は土民達のさし出す毛皮を自分等の勝手な値段で奪ふやうに買ふ、——殖民地、半殖民地のどこでゝも見られることだ！ その毛皮商人を守るべく外國の軍隊が行進してゐる。ティムールの毛皮に眼をつけて彼を拉れてこさせた毛皮商人は折角の銀狐をもやはり僅かな金で奪はうとする。しかしティムールは聽かないで取り返さうと爭つて、毛皮商人の一人を刺したまゝ逃げ出してしまふ。

ティムールは山地に逃げこむ。其處では蒙古の赤色パルチザン（このことを讀者諸君は注意されたい）が外國の駐屯白軍と戰つてゐる。ティムールはパルチザンのひとりを助けてこの團隊に加はる。

このとき壯麗な喇嘛寺院では盛大な儀式が行はれることになつて駐屯軍の司令官大將達も招かれる、司令官等は威儀を正して泥濘をおかして參詣する、——宗教はどこででも世俗的な權力と結びついてゐる！ こゝから數場面、いまゝで映畫に撮られるどころかあまり人眼に觸れさせられたことすらないといふ怪奇な喇嘛教の寺院の內部、儀式、また宗教的な踊りが見事に寫し出される。その一方、駐屯白軍は命じられて土民の家畜を掠奪に赴く。土民達は家畜を隱し、遂に助けをパルチザンに乞ふ。喇嘛教の儀式は進められる、駐屯白軍は破れる。急を聞いた司令官達はそつと式場から出る。しかし援軍がきた。

ティムールは捕へられてしまふ。司令部は無雜作に銃殺を命じる。ティムールは引き出されてぬかるみに射倒される。その後でティムールの遺留品を調べてゐた司令官等はそのお守りから彼がジンギスカンの後裔であることを發見する。そこで司令官はひとつの奸計を思ひつく。ジンギスカンの名が蒙古人の間に奇蹟的な力をもつてゐるところから、ティムールを蒙古王に仕立てゝ、その帝國主義的利益を維持し進めようといふのである。いつたん撃たれたティムールはまた救はれて治療を施される、——こゝでプドフキンはその最初の傑作「腦髓」の構造で示したと同じ精緻さを見せるといふことであるが、それはわれわれの見る映畫にはない。ティムールはいまや立派な椅子に据ゑられる。彼を蒙古王に仕立てる陰謀は進んでゆく。しかし、ティムールは司令官の娘の頸に自分の銀狐の毛皮を發見する。それを彼から奪

つた毛皮商人は娘の約婚者なんである。そこへ、またひとり捕はれた蒙古人が銃殺されようとして、逃げて、室の中へ駈け込んでくる。人々はこれをティムールの前で射殺する。これを見てティムールは我に歸る。彼等のからくりを知つて、劍を拔くと其處を切り排つて外へ出る。赤色パルテイザンを率いる。それを追ふ司令官の一隊。砂を噛み樹を倒す蒙古の强風。司令官の一隊は次第に風に吹き退けられてゆく。

私はかなり詳しくこの映畫の筋を紹介したが、またこれによつて、『アジアの嵐』が××××における××××政策の暴露を意圖した、それに對する××××の擡頭を描いた映畫作品としていかにすぐれたものであるを不充分ながら傳へえたかと思ふ。それはかうした目標をもちながら決して平板でなく無味乾燥でなく、よき構成をもつて充分に藝術的に効果を擧げてゐる。なかんづく、變つた自然風俗の寫實的な興味と縫ひ合せた巧さなど、われわれの期待に背かない。技術的にもまた非常にすぐれた點をもつてゐる。毛皮市場の群集シーンの數場面のうまさは、これだけでも、われわれをしてプドフキンが卓越した監督であることを認識せしめるに足りよう。特に私の感心したのは最後の嵐のところのフラッシュ・バックのもつスピードである。次第に激つてゆくテムポの正確さ、最後に出すスピードの猛烈さ力强さは他に比類がないであらう。われわれはフラッシュ・バックのすぐれたものをアーベル・ガンスの『ラ・ルー』に見たが、プドフキンのこれはあれに遙かにまさつてゐる。この意味で、監督プドフキンは、技術的にいつても、世界における最もすぐれた一人であると云ふことができる。

しかし『アジアの嵐』は缺點がないではない。第一、私は構成のよさを云つたが、こゝにだつて缺陷を指摘できる。例のイギリスの批評家プライアーはこの映畫が、ティムールの山地に逃げこむところを境として、二つに分れてゐるといふ意味のことを述べてゐるが、たしかにさうである。そしてそれはこの映畫作品の構成の一貫性を傷けてゐる。それからお守りからジンギスカンの後裔であることが知られるといふあたりも、この作品で叙べられてゐるかぎりでは、荒唐無稽に近かい（この點われわれ東洋人の受ける印象とヨーロッパ人の受けるそれとは違ふと思ふが）。最後のティムールが奮然起ちあがつて赤色パルテイザンの陣頭に立つところにいたつてはなはだしく説明不足である。

技術的な點になるとかなり多くの缺點が眼につく。まづ問題にすべきものはいはゆるプドフキンのモンタージュであらうが、大體においてはアメリカ映畫で見慣れたカット・バックのうまさに盡きるやうで

ある、――このうまさで少しも差支へないが。丘の樹を一本出してきたりするところなどは感心しない。殊に、各國の毛皮商人を一人一人カットして出してくるなどひどくまづい。一般に監督技術が古いやうである。オーバラップの多いこと――これは一時流行を極めて日本でも牛原虚彥氏あたり盛んに用ゐられたやうだが、いまではいつたいにこの手法は、當然に、擯されてゐる――、その反對に、効果の多い移動撮影が適切に用ゐられてゐないことなど。私のいちばん氣になつたのは、われわれが古いアメリカの西部物で記憶する、風景をいきなり出しておいて其處へ人物を（多く右から）切らせるなどゝいふ場面の撮り方が見られることである。もちろん古いこと必ずしも惡くない。しかしプドフキンは意識してこれらの手法を用ゐてゐるとは思へない。最もよくないのは撮影である。これはプリントのせいもあるやうに考へられるが、ある場面を除けば、アメリカ映畫の水準から大分落ちる。いつたいに技巧的な點で、大陸の、殊にフランス映畫の影響が見られる。

さて『西部戰線異狀なし』である。プドフキンと並ぶロシヤの監督エイゼンスタインは彼の尊敬するアメリカ映畫監督のひとりにマイルストンの名を擧げてゐるのを見たが、それはもちろんこの『西部戰線異狀なし』のゆゑをもつてであらう。たしかにこれは傑作である。單に戰爭物としてばかりでなく、われわれが長らく見てきたアメリカの映畫のうちの記憶されるべき少數のひとつである。

『アジヤの嵐』と比較してなによりも先きに擧げられるべきは、この映畫における撮影の見事さである。殊に室内撮影のうまさはほとんど驚嘆に値する。キヤメラマン、アーサ・エデイスンはすでに『ロビン・フツド』や『バグダッドの盜賊』などのダグラス作品、『ロスト・ワールド』、『ステラ・ダラス』などによつて秀でた腕前を示してゐたが、それらにもまして、この撮影はいゝ。

マイルストンのダイレクテイングのよさは最初の數シーンにすでに現はれる。出征の兵士の行進、それを背にした學校の教室、先生に煽動されて一齊に出征を決意して『リーブ・フッータラント』を合唱しながら教室を雪崩れ出る學生。これらのところのカメラの位置の取り方、場面轉換のよさに私は驚嘆した。この映畫のやまであるところの全戰攻擊のところも立派である。充分なるスピードをもつてゐるし、カメラを下にして上を切らせる技巧もよく効果を擧げてゐる。最後のボールが撃たれるところもいゝ。さらに『西部戰線異狀なし』では移動撮影がいたるところ効果的に用ゐられてゐる。一例を擧げれば、終りに近くカチンスキーが負傷したのをボールが背負つて話しながらくるところがある。こゝの移動撮影など實にうまいものである。

音響効果を適切に利用してゐることも忘れてはならない。話聲が砲聲にとだえる。これなど小さいことながらどんなカットよりも戰爭をリーアルに描き出してゐる。この映畫から音響を取つてしまふなら、『西部戰線異狀なし』は半分も價値がなくなるであらうと考へられるが、そのことはマイルストンがどのやうによく音響を使用してゐるかを物語るであらう。

かうして『西部戰線異狀なし』は、技術的には——ライテイングに關する二三の缺陷などはあるが——現在の水準から見てほとんど間然するところないに近いが、それにもかゝはらず、この映畫作品が與へる印象、感銘は散漫であることを誰しも感じるであらう。これにはこの映畫が検閲官によつて縦横に鋏を入れられ、ために全體の有機的な聯關を傷けられ、印象を盛りあげるべき箇所を取り除かれてゐることが大きな原因とはなつてゐる。けれども、それを差引いて考へてみても、上の不滿が『西部戰線異常なし』には感じられるであらう。それはなぜか。この映畫ではたゞ戰爭の災禍といふやうなものが表はされるだけで、なぜさうであるか、戰爭の必然性が少しも描き述べられてゐないからである。それに應じて、描寫が平面的であり羅列的であるからである。一言で云ふなら『西部戰線異常なし』には戰爭に對する把握の確乎さが缺けてゐるのだ。これはマイルストンの、或はアダプテイションならびにシェナーリオの作者の責任ではなくて、原作者の罪だといふかもしれない。しかし映畫作者が原作者のための忠實な飜譯者だといふことは映畫作者のこの上もない恥辱なのだから、やはり映畫作者が右のやうな缺陷、もつてゐるものと考へなければならない。この『西部戰線異常なし』の缺陷はこゝにマイルストンの、アメリカ映畫の超えがたい限界がある。そして、こゝでわれわれはプドフキンに、ロシヤ映畫に赴かなければならない。

今月の作品から

實は今月は、ちようど健康の具合が惡くて臥てゐるのを幸ひ、およそ眼に觸れた作品を片つぱしから讀んぢまはうといふ、大分阿呆らしい計畫を樹てたんだが、『改造』『中央公論』と讀み、『文藝春秋』『新潮』をあげて、『新早稻田文學』を終つたら、どうにも嫌になつちまつた。まるで乾いた口へパンを突つ込まれるやうな氣がする。これも健康のせゐでこのごろは毎日三度三度パンを食べることを命じられてうんざりしきつてゐたが、そのパンと小説がダブりさうになつたんで、とうとう讀むことをやめちまつた。それでも數へてみたら一九の作品を讀んでゐた。折角讀んだんだから、その批評を書きつけよう。まあ總の感想をすうつといつて印象ともつかず批評ともつかず書きつける

といつた形である。なかには幾分その前に立ち停まつたのもある代りには、歩きながら横眼で睨んだだけのもある。この邊のところは批評される作家方に御了解願ひたい。さて。

『記念碑』。貴司山治氏の作。どこか滋賀縣の山の中の村で、死んだ××氏によつて農民組合が使られ、發展して三、一五事件には幾人もの犠牲をも出すことになるが、××氏の殺された後その村の××に殘された年寄りや小供達が××××××氏の記念碑を建てるといふ話。事件そのものは非常にパセテイツクで讀者を打つものがある。しかし筆がから上はずつてゐては……たゞ年代順に書いたといふ藝のない構成も困る。所々方々で黨の見解を作者は書いて××意圖に忠實たらんとしてゐるが、すこぶる生硬で、これぢやあきり××になるまいと讀んでゐて心配になる。

『聖家族』。とまれほんとうに藝術派と呼ばれる一群の間で最も注目される堀辰雄氏の作。さすが讀み堪へがある。よくも惡くも堀氏は詩人だなと思ふ。全體に沁みてゐる縹渺たる味はひは、なるほど藝術派である。しかしいかにも弱々しい、たどたどしい、終りまでもつてゆくのが苦しさうである。心理描寫なども鋭さを缺いてゐる、その上——ではなく、從つて、であるが——コンヴェンショナルだ。かのラディゲはもつと強い筆力をもつてゐるやうである、それからこの一群の領袖横光利一氏も。堀氏はやはり短いもの〻方がよささうだ。これは作品の批評ではないが、『聖家族』のモティーフたるラファエルはどうも藝術派に似合しくないですな。いつかのアンリ・ルソーの方がよろしい。

『生計の道』。菊池寛氏しきりに推賞するところの岡田禎子氏の作。なかなかうまい、實に達者だ。隙間のない撰び方は菊池氏の推賞の所以もわかる。しかしこの作者は何を意圖してゐるのか。常に多かれ少かれ社會的な問題を取りあげてくるが、作者の立場はちつともはつきりしない、といふより何もない。たゞニヒリステイクに、いやヒステリツクに嘲笑してゐるだけである。作品のなんとなくピンボケなのはこ〻からくる。それに、『今、六月末、猫の夜歩きに、徹宵トタン屋根の鳴る、あの頃。』なんていふ邊に惡達者な書き方がなくなると、もつと氣持よく讀める。

『國法の裏』。吉田絃二郎氏の作。これは何も云はないことにする。

これで『改造』を終つて『中央公論』。

『夏季實習』。始め讀みながらこれは保險會社の爆露だな、『眞理の春』の眞似にしてはまづいなと思つて、前を引つくり返したらブルジョア文壇の驍將水上瀧太郎と作者の名が出てゐたんで、ヘイとばかり呆れ返つた。かういふ連中が——水上氏自身はさういふことを云はれたことはないやうだが——やれプロレタリア派の呪詛文壇は無味乾燥だ

の、やれ徒らに露骨な說明が多すぎるのといふんだから人間の口は重寶なもんさ。ちなみにこの小說は保險學の試驗問題『保險ニ於ル相互組織ト株式組織ノ優劣ヲ論ゼヨ』といふやうなのに非常に參考になる。試驗もそろそろ近づく折柄、經濟學部學生諸君に御推薦する。

『一つの性格』。久しぶりに片岡鐵兵氏の作である。わりに氣持よく讀めた。前衛をではなくて、ブルジョアの生活、マルクシズムに興味を持つ金持の學生の氣持を描いてゐるので作者の足が地についてゐる。讀者も安心して讀めるといふところである。組立ても氣が利いてゐてうまい。しかし、大體が平板な記述であつて描寫になつてゐないといふやうな技術上の缺陷を指摘することはやめて、のらくらしてゐる金持の息子『垂吾』――主人公――が、父から寄こされた辯護士の提言を却ぞけて喜んで『地下室の檻房へ』歸つてゆくといふ、さういふ毅然たるところをもつてゐるといふ、不思議な性格の說明はすこぶる不充分である。讀者には納得できない。

『妻の死と百合公』。岡田三郎氏。これは、結核かなんかで死にかゝつてゐる妻君をおいてきぼりにして女給を躍ませてゐる男の話。それだけである。なに、藝術作品としての批評をたつて？　作者はまさかそんなものを要求してゐまい。

『女の職業』。細田源吉氏の作である。紡織工場における組合の指導、ストライキ、その敗北を扱つたものである。一體に手堅く達者に描けてゐる。しかしなにぶんにも生彩がない。それに作者の政治的觀點がはつきりしないので最後のところなどひどくぼやけてゐるやうにおもふ。

第三室は『文藝春秋』である。掲げられた順序に從つてまづ瀧井孝作氏の、

『八王子にて』を讀む。この作者はいつも典型的な小市民層の生活――こゝでは輕蔑の意味でこれを云つてるのではない――を丹念にそしてなかなか巧みに描いて見せてくれる。其處を私は面白く讀んでゐる。『八王子にて』もまたさうしたもの。しかし、これは小說といふよりむしろ隨筆である。

その次には『改造』の『生計の道』と同じ作者の『頸を絞める分數』がある。作品としてこの方がまさつてゐる。それだけにこの作者について廻る嫌なところが一層眼につくとも云へる。例へばこの作者には全くうるほひがないこと。これは、二人の子供を抱へて生活のために金持の小さい娘の子の家庭教師をしてゐる未亡人が主人公である。その『娘子』が子供を待たせてきたある日、早く歸して貰らうとするあまり、居眠りをして課業を進めさせない女の子を無理に起さうとして、娘を咎めるといふ動作だが、最後のところで、甚しく家庭教師を

してゐる若い女が出てくる。作者はこの『朋子』に一生懸命にやるのなぞは馬鹿げてゐる、いゝ加減にして金を取りさへすればいゝのだといふやうな大いに穿つたことを云はせて『栄子』を嘲笑させる。これなど作者の悪い趣味である。ない方がよつぽどいゝ。

『混凝土重奏』。この作者木木京太氏のものは私はあまり讀んでゐない。そのせゐかもしれないが、この戯曲は何を覘つたのかどうもわからないものである。どんな男とも朗かに性的な交渉をもつてゆく女を『コンクリのアパアト』に見立てるところがこの戯曲のみそなんだらうが、これで新女性を描いたつもりになられては、讀者は面喰らふ。

最後に室生犀星氏の『針と命令』がある。題だけは新しいが、これまたひどく古風な戀愛小説だ。これ以上になんとも申しあげやうなし。

『新潮』に移つて、尾崎士郎氏の『忘れられた時代』は私はちよつと興味をもつて讀んだ。といふのは、これは堺利彦氏の『賣文社』時代の社會運動家を描いてゐるからである。高畠素之が出てきたり、大杉榮が出てきたりする。しかし、そんな知識をもたない一般の讀者にはこの小説はひどくつまらないものに違ひない。さういふ題材以外にこの作品はなんら魅力を具へてゐないんだから。日本の社會運動の古いところの、殊に裏面の話は小説の題材としてかなりいゝものであらうと思ふ。尾崎氏は前にも『新潮』にかうした種類のものを書いてゐられたが、もう少し正面から、骨惜しみせずに、やつて見たらよささうなもんだ。

『あれも私。』ささきふさ氏としては大分白粉の色を變へられた地味づくりのものである。しかし、持つて廻つた云ひ方で、それに饒舌口調で、やはりいつもの方がよろしい。最後にいたつて『中間階級没落』について自省めいた感懐が漏らされてゐるが、この人からはウビガンだとかコテイだとかの白粉の種類の話でも聞く方が讀者は氣が樂だ。

『秋立つまで。』嘉村礒多氏、作者の真面目な生活記錄なんで讀んでゐて厭な氣はしないし、ある個所では心を惹かれもするが、葛西善藏氏に似てゐるにせよなんにせよ、この文章にはちとかなはない。

最後に『新早稲田文學』である。

いちばん先きに載つてゐる中島直人氏の『ハワイの二少年とキャムンプ』はよくできてゐる。ハワイのパイナップル畑の生活を、夏稼ぎにくる學生達やなどを中心に、物語ふうに書いたもの。牧歌的な味をもつてゐる。淡々と書いてゐるが筆致がいかにもフレッシュである。そして健やかである。變にあくどいの〻多いなかにかうしたのは氣持がいゝ。しかし少し物足りない。

『アスファルトに立つ奇術師。』松谷與二治。覆面巡査といふ變つたもの

を題材にしてゐるので興味をひかれたが、たゞ、最初自分の起した事故で良心的になつてゐるのが、途中から生活を考へてその氣持をごまかしてしまふといふだけの、すこぶるありふれたものである。これは交通巡査であることを必要としない。

その次は小松原雋氏の『**秋期演習挿話**』軍隊物。軍隊物はこれまでプロレタリア作家によつて充分に書かれてゐて、今日さういふものを拔き出ることはよほど困難である。この作などもたゞこのことを示すにすぎない。

もうひとつは梅田寛氏の『**納屋の第八夜、第九夜**』。いくぶんプロレタリア的な農村小說だが、農村スケッチとしてはむしろよく書けてゐると云へる。しかしプロレタリア的な部分は駄目。

…………

これでやうやく終つた。正直のところ、私はこゝで手をあげて大きく伸びをした。

改造編輯部編纂

現代文藝家總覽

（五十音順）

編纂について

□本欄の編纂は、文藝家の氏名、生地、生年月日、學歷、經歷、現在住所等を明にするを目的とし、最近著書、最近發表の作品、併びに文學的活動等をも記載した。

□大體文藝の各方面に亘つて調査したが、何分最初の試みであり、其他種々の事情で調査が行屆かず、收錄洩れの人々も少くないことゝ思ふ。それは次の機會により完璧を期するつもりである。

青木月斗（本名。新護）

明治十二年十一月廿日、大阪市船場に生る。大阪藥學校出身。最近著書に「同人俳句集」あり。（大阪市櫻の宮）

青木壯一郎

明治三十二年六月、京都市に生る。京都府立師範學校半途退學。大正七年上京、書生、自由勞働、雜誌記者、出版社員廣告文案係等々數種の職業につく。現在に及ぶ。著書なし。『文藝戰線』に時々評論を發表。（東京市外杉並町高圓寺八二九今西方）

青野季吉

明治二十三年二月四日、新潟縣佐渡ヶ島に生る。早稻田大學卒業。讀賣新聞記者、國際通信記者として働く。現在『文藝戰線』『勞農』の同人。最近著書に「マルクス主義文學鬪爭」「社會は何故に惱むか」等あり。（東京市外代々木上原九三七）

明石鉄也

明治三十八年、鳥取縣に生る。三高を經て東京帝大佛文科三年で退學。一九二八年二月日本勞働組合同盟に加入。藝術運動では、昭和三年三月工場勞働者を構成員として「イスクラ劇場」を組織す。曾てコミュニスト文藝雜誌『速力派』『左翼藝術』を發刊、現在『戰旗』に據る。『改造』に小說「故鄉」を發表し、創作集『失業者の歌』『鐵の規律』の著あり。

秋田雨雀（本名。德三）

明治十六年一月三十日、青森縣南津輕郡黑石前町二〇に生る。明治四十年早稻田大學英文科卒業以來文筆生活に入る。島村抱月の藝術座の幹事たりしことがあつた。また澤田正二郎なぞと新時代劇を組織し、苦い經驗をした。後先驅座を創立。昭和二年より三年にかけてソウエート・ロシヤに遊んだ。目下『プロレタリア科學』研究所員。著書に「幻影と夜曲」「埋れ春」「三つの魂」「國境の夜」「佛陀と幼兒の死」「骸骨の舞跳」「東の子供へ」「太陽と花園」「若きソウエート・ロシヤ」「ソウエート・ロシヤの宗教問題」其他あり。（東京市外高田町雜司ヶ谷二一二）

秋庭俊彦

明治十八年四月五日、東京神田に生る。同二十七年品川東海寺の弟子となる。同三十三年京都に赴き紫野中學校に入り三十六年卒業。後短歌に志し新詩社同人となる。同三十八年早稻田大學英文科に入學四十三年卒業。チエホフ飜譯數卷あり。大正十五年以來、等々力農園を設け蔬菜草花等の栽培を爲す。（東京市外玉川村等々力六六五）

淺原六朗

明治卅八年二月廿二日、長野縣北安曇郡池田町に生る。早稻田大學英文科卒業。最近著書に評論隨筆集「都會の點描派」創作集「或る自殺階級者」「女群行進」「ピルデキングと小便」「霧の夜の客間」あり。（東京府北多摩郡三鷹村下連雀四八）

阿部次郎

明治十六年七月廿七日、山形縣飽海郡上鄕村大字山寺に生る。明治四十年東京帝國大學文科大學哲學科卒業。大正十二年十月以降東北帝國大學教授、法文學部勤務。「游歐雜記序論」を近刊豫定。（仙臺市土樋二四五）

阿部知二

明治三十六年六月二十六日、岡山縣勝田郡湯鄕村に生る。姬路中學、八高を經て東京帝大英文科卒業。現在日本大學に奉職す。最近著書に小說集「戀とアフリカ」「海の愛撫」あり。（東京市小石川區竹早町八二）

安倍能成

明治十六年十二月、松山市小唐人町に生る。一高を經、明治四十二年東大文科大學哲學科卒業。西洋哲學を專攻し、歐洲を遊

遊し大正十五年歸朝、現京城帝大法文學部教授。「西洋古代中世哲學史」「西洋近世哲學史」オイケンの「大思想家の人生觀」カントの「道德哲學原論」「山中雜記」の著譯のほか評論多し。（京城府倭城臺三號官舍）

網野菊（現在。相原菊）
明治卅三年一月十六日、東京に出生。大正九年日本女子大學校英文科卒業。早稻田大學獨文科に聽講生として二ケ年餘在學。母校女大英語科に在職せしことあり。短篇集「光子」あり。（奉天春日町三、相原方）

有島生馬（本名。壬生馬）
明治十五年十一月二十六日、横濱市月岡町稅關官舍に生る。同三十七年外國語學校伊語科卒業。直ちに藤島武二氏の門に入り洋畫を學び、三十八年伊太利に留學多く巴里にて繪畫彫刻その他を學び同四十三年歸朝。昭和三年再び渡歐、南佛、伊太利に滯在、同四年歸朝。最近著作集に現代日本文學全集第二十七篇「有島武郎、有島生馬集」「海村」等があり、大正三年以來毎年二科美術展覽會に洋畫を出品す。（東京麴町區下六番町一〇）

飯島正
明治三十五年三月五日、東京に生る。東京帝國大學文學部佛蘭西文學科卒業。「新思潮」「靑空」「文藝時代」などの同人だつた。現在「近代生活」「詩・現實」「キネマ旬報」の同人。最近著書に「映畫の研究」その他、飜譯「世界選手」（ポオル・モオラン）その他あり。（東京市外世田谷町下北澤九七五）

飯田蛇笏（本名。武治）
明治十八年四月二十六日、山梨縣東八代郡境川村一八六に生る。京北中學を經て早稻田大學文科に學び後鄉里甲斐の山中に籠る。明治三十七八年頃より高濱虛子のホトヽギス同人として日本派俳句を修め今日に至る。現在俳誌「雲母」を主宰す。最近著書に「續雲母句集」及「成島一齋句集」等あり。（山梨縣東八代郡境川村一八六）

生田葵（本名。盈五郎）
明治九年四月十四日、京都市に生る。京都東洋英學塾出身。廿一歲上京、巖谷小波氏に師事す。大正二年から三年間英獨へ留學。最近著書に「罪の扉」あり。（東京市外世田谷町代田三九）

生田長江（本名。弘治）
明治十五年三月、鳥取縣日野郡根雨町に生る。東京靑山學院、一高を經て明治三十九年東京帝大文科卒業。脚本集、小說集、評論集の外、ニイチェ全集の翻譯あり。最近長篇小說「釋尊傳」續稿執筆中。（東京府下代々木山谷三一四）

生田花世
明治二十一年十月十五日、德島縣板野郡松島村に生る。德島縣立高等女學校卒業。德島縣及び東京府にて小學校敎員の經驗あり又新聞雜誌の婦人記者たりしことあり。本姓西崎。故生田春月の妻。詩、歌、小說等の作品あり。最近著書に小說集「燃ゆる頭」評論集「女流作家群像」あり。（東京市牛込區天神町五三）

井汲清治
明治二十五年十月、岡山縣苫田郡津山町に生る。津山中學、慶應義塾大學文科卒業。現に同大學文學部敎授たり。佛蘭西文學に關する研究紹介の外に評論多し、昭和四年四月以來佛國に留學中。（留守宅。東京市外東調布町下沼部八四三）

池田大伍（本名。銀次郎）
明治十八年九月、東京銀座に生る。明治四十年早大英文科卒業。多くの戲曲著作あり。「瀧口時賴」「茨木屋幸齋」「名月八幡祭」等は上演されて好評を博した。劇評と研究も多い。銀座「天金」の主人。（東京市京橋

築地三ノ一五）

池谷信三郎（イケノヤ）

明治卅三年十月十五日、東京市京橋區に生る。一高、帝大を半ばにして伯林大學に遊ぶ。最近著書に「有閑夫人」「憂愁夫人」（譯）「新進池谷信三郎集」あり。（東京市外東大久保一四）

石川欣一

明治廿八年三月十七日、東京市麴町區紀尾井町六に生る。東京高等師範學校附屬小、中學校、第二高等學校、帝國大學（東大英文科途中やめ）米國プリンストン大學（一九一九年卒業）に學び、大正九年大阪毎日新聞社入社。昭和二年東京日日新聞社に轉任。最近著書に「山に入る日」あり。（東京市四谷區大番町一九）

石榑千亦（本名。辻五郎）

明治二年八月二十六日、愛媛縣新居郡橋村に生る。明治二十一年七月香川縣琴平皇典學會、明道學校卒業。明治二十二年十月帝[illegible]命、現今理事勤務。明治二十六年佐佐木信綱の門に入る。雜誌「心の花」編輯に從事。（東京市日本橋區本石町一ノ一）

石濱金作

明治三十二年二月二十八日、東京京橋區木挽町に生る。第一高等學校より東京帝國大學英文科卒業。大正十四年より今年まで文化學院教授。只今は止めてゐる。最近著書に「新進傑作小説全集」あり。當分放浪の由。文書は文藝春秋社氣付。

石原純

明治十四年一月十五日、東京本鄉に生る。明治三十九年東京帝國大學理科大學卒業、四十四年東北帝大助教授、翌年三月外國留學の途に上り、獨逸、瑞西、英國等に滯在、大正二年六月歸朝、教授となる。大正五年理學博士の學位授與、同八年帝國學士院恩賜賞授與、十年辭職、昭和四年迄房州保田に居住。最近著書に「自然科學概論」、現代短歌全集中「石原純集」あり。（東京市外杉並町馬橋三六四）

石丸梧平

明治十九年四月五日、大阪府豐野郡熊野田村に生る。早稻田大學史學科卒業後、京阪地方に教師生活七年。大正六年上京、小説「人間親鸞」等を發表し目下「人生創造」主幹。日本大學講師（千葉市寒川新宿一三一六）

市川又彥

明治十九年十二月十三日、東京市牛込區北町に生る。明治四十二年早稻田大學英文科卒業。翌年英文學、特にイギリス劇研究の爲めロンドンに赴く。大正元年歸朝。博文館雜誌記者時代を經て目下立正大學英文學部講師、早大高等學院講師。ショウを中心としてイギリス社會劇を專攻す。最近著書に「鰥の家」「運命の人」等（いづれもショウの脚本飜譯）あり。（東京市外高井戸町中高井戸一〇）

泉鏡花（本名。鏡太郎）

明治六年十一月四日、金澤市下新町に生る。北陸英和學校に學び、明治二十三年上京。同二十四年十月、尾崎紅葉の門に入り同家に寄寓す。二十六年、小説「冠彌左衞門」を發表して以來四十年創作生活を續け、著作頗る多く、「鏡花全集」及び現代日本文學全集「泉鏡花集」に殆んど收容さる。（東京市麴町區下六番町一三）

伊藤永之介

明治三十六年十一月二十一日、秋田市に生る。十六のとき日本銀行秋田支店の給仕となり、三年目にやめて同じ土地の新聞社に入る。足かけ四年勤めて大正十二年の春上京[illegible]した。現在[illegible]同人。[illegible]

短篇集「恐怖」長篇「暴動」がある。(東京府下杉並町阿佐ケ谷六〇二)

井東憲（本姓。伊藤）

明治二十八年八月二十七日、東京に生る。質屋小僧を振り出しに略十五六種の職業に從事。正則英語學校を經て大正八年明治大學法科卒業。その後、辯護士の卵、雜誌記者、精神醫學者を經て、大正十年頃よりプロ小說家。最初アナ。三年前よりナップに入る。最近著書、長篇小說「赤い魔窟と血の旗」「街のタワリシチ」「女奴隷街」その他。(靜岡市五番町七)

稲垣足穂（タルホ）

明治卅三年十二月廿六日、大阪市船場に生る。私立關西學院中學部卒業。千九百廿一年秋未來派美術展覽會、千九百廿二年秋三科インデペンデント展覽會にそれ〴〵「月の散文詩」「カイネ博士によつて語られしもの」といふ繪を出品したことがある。最近著書に「天體嗜好症」あり。(東京府下西巢鴨町新田八一七池内方)

犬養健

明治二十九年七月、東京牛込に生る。學習院高等科卒業、東京帝大哲學科中途退學。最近著書に「南京六月祭」新進傑作集の一「犬養健集」あり。昭和五年二月東京府第一區より衆議院議員に當選。(東京市四谷區南町八八)

犬田卯（シゲル）

明治二十四年八月二十三日、茨城縣稻敷郡牛久村大字城中に生る。鄉里の小學校卒業後、家業(農)を扶く、水戸工兵第十四大隊に三年間勤務、大正四年末上京、博文館編輯部に入る。約三年にして辭し、以後文筆勞働。大正十二年農民文藝會を發起し、解散後、全國農民藝術聯盟の結成に參加、現在、聯盟機關誌「農民」の編輯員。最近著書、長篇小說「土に生れて」「土にあえぐ」「村に闘ふ」評論集「農民文藝の研究」「土の藝術と土の生活」其他、翻譯「ある百姓の生涯」(キヨオマン)「大地」(ゾラ)等々。(東京府杉並町成宗一一三)

井上剣花坊（本名。幸一）

明治三年六月三日、山口縣長門國萩町に生る。獨學。小學校も卒業せず、小學校の代用教員より新聞記者と爲り、大正二年より原稿生活、今日に至る。明治三十六年七月三日「日本新聞」にて新川柳を興隆し、二十八年間只管向上革新を事とす。最近著書に「江戸時代の川柳」あり。(東京市外杉並町馬橋五四七)

井上康文

明治三十年六月二十日、神奈川縣小田原町幸町に生る。東京藥學校卒業後、中野の東洋製藥工場の職工となり東京市役所の化學分析技手となり、「新小說」の記者となる。その他出版、雜誌編輯などに從事したが大正十二年頃から專ら詩作に從ひ、詩雜誌を自ら發行し現在詩誌「詩集」を刊行。最近著書に感想集「戀愛、生活、藝術」詩集「光」詩集「愛子詩集」その他「詩の作り方」等。(東京市外杉並町高圓寺七二三トランスミッション社内詩集社)

伊原敏郎（トシロウ）（號。青々園）

明治三年四月廿四日、松江市雜賀に生る。松江中學より第一高等中學に入り、中途退學。「二六新報」に劇評を書き、「早稲田文學」記者となり「都新聞」に入りてより卅四年を經、目下その理事である。最近著書「歌舞伎通」あり。(東京市赤坂區青山南町五の三七)

伊福部隆輝

明治三十一年五月十二日、鳥取縣智頭町に生る。最近著書に「現代藝術の破産」あり。(東京市外瀧野川町字瀧野川大原七五一)

井伏鱒二

明治三十一年、福山市外加茂村に生る。早稲田佛文科及び日本美術學校を中途退學。出版所に勤めた。最近著書に「夜ふけと梅の花」「なつかしき現實」がある。（東京市外井荻町下井草一八一〇）

今井邦子

明治二十三年五月三十一日、德島市に生れ信州下諏訪町に育つ。十七歳『女子文壇』に詩を投じ、二十歳河井醉茗の門に入る。四十三年中央新聞記者。大正二年島木赤彦に師事、『アララギ』同人となる。多くの歌集、少女小説集等がある。舊姓、山田。（東京市外千駄ケ谷六三八）

今野賢三

明治二十六年八月二十六日、秋田縣土崎港町に生る。秋田縣土崎小學校卒業。呉服店小僧、新聞配達、鐵工場、職工見習。瓦斯會社定夫。郵便集配人。映畫説明者。雜誌『種蒔く人』同人として初期よりプロ文學運動に參加。つゞいて『文藝戰線』同人。政治研究會創立に參加。現在勞農藝術家聯盟員。最近著書に「プロレタリヤ戀愛觀」長篇小説「女工」あり。（東京市外井荻町上荻窪一四八）

岩崎昶

明治三十六年十月、東京市京橋區新肴町に生る。東大獨文科出身、但し、夙くより、獨乙文學に見切りをつけ、映畫を研究し、一時映畫會社に勤務。目下、日本プロレタリア映畫同盟に所屬し、プロレタリア科學研究所員たり。最近著書に「映畫藝術史」あり。（東京市外雜司ケ谷六七七）

岩田豐雄

明治二十六年七月一日、横濱市に生る。幼時より大學時代まで慶應義塾、一九二二年より四年間フランス滯在、歸朝後演出、翻譯、雜文を業とす。近代劇全集中數卷の譯あり。目下渡佛中。（留守宅東京市外中野一七六六小瀧邸内）

岩藤雪夫

明治卅七年四月一日、神奈川縣横濱縣立病院施療室第七號室にて生る。原籍地、岡山縣津山市西新町。東京府下千駄ケ谷尋常小學校卒業。鐵道省錦糸堀工場の見習工をしつつ早稲田工手學校機械科を修業。機械工になつてから、芝浦鐵工所、東京蓄音器工場等々の工場を轉々とす。蓄音器爭議の後北海道東海汽船の火夫となる。下船後、新聞配達をした。現在『文藝戰線』同人、勞農藝術家聯盟員。最近著書「鐵」「賃銀奴隸宣言」「血」「工場勞働者」「屍の海」等の短篇集。（東京市外杉並町高圓寺二三、原和樹方）

巖谷小波（本名。季雄）

明治三年六月六日、東京麹町に生る。獨逸協會學校出身。京都日出新聞記者の後、博文館編輯局に入り『少年世界』主筆、編輯局主幹等に歴任し、目下顧問。伯林大學東洋語科講師、早大文學部講師等の經歴もある。日本のお伽噺の開拓者功勞者で、「世界お伽噺」「日本お伽噺」「小說お伽百話」等非常に多く最近「小波お伽全集十二卷」がある。（東京市芝區高輪南町五三）

上野壯夫

明治卅八年六月二日、茨城縣筑波郡作岡村に生る。茨城縣下妻中學から早稲田の露文科へ行つたが、中途退學。一九二七年勞農藝術家聯盟に加入し、分裂して前衛藝術家同盟を結成し、その後ナップの結成に參加して現在に至る。その間、詩を書いたり、新勞農黨の仕事をしたり、『前衛』『戰旗』の編輯をしたり、兵隊に行つて追放されたりした。詩、評論、小説等を書き散らして來てまだ著書はない。（東京市外上落合六六七）

臼田亞浪

明治十二年二月一日、長野縣北佐久郡小諸町に生る。法政大學卒業。雜誌『向上主義』電報新聞、毎日電報、横濱貿易新報、やまと新聞等に記者たること十餘年間。大正四年俳句雜誌『石楠』を創刊しその主盟として今日に至る。最近著書「句集黎明」がある。(東京市外中野新町三七九〇)

内山賢次

明治二十二年九月二十三日、新潟縣柏崎町に生る。尋常小學三年修業、勤勞生活に入り、傍ら正則英語學校に通ひ三年間英語を修學、大正九年、多年の勤勞生活を脱し、俸給生活者の組合結成を劃し、時期尚早失敗す。最近の飜譯にカルヴートン「結婚の破産」リンジ「近代青年の叛逆」バーカリー「新裸體哲學」あり。(東京府下北多摩郡三鷹村深大寺三九一四)

宇都野研

明治十年十一月十四日、愛知縣額田郡本宿村に生る。一高を經て東大醫科に學び、明治四十一年卒業。直に同學小兒科學教室に入り、小兒科學專攻。大正元年本郷區に開業、今日に至る。歌は獨學にて十七歳頃より詠みしも、始めて世間に發表せしは大正七年なり。同九年窪田空穗の門に入り『朝の光』『國歌』『しがらみ』を順次に編輯す。昭和三年末空穗門を辭し、四年二月獨力「勁草」を刊行し、今日に至る。歌集「木群」は最近著である。(東京市本郷區駒込東片町二二)

宇野千代

明治三十年十一月二十八日、山口縣玖珂郡岩國町川西に生る。岩國高等女學校卒業。最近著書に「新選宇野千代集」長篇小説「罌粟はなぜ紅い」がある。(東京市外世田ケ谷町山崎一四〇五)

生方敏郎（ウブカタトシラウ）

明治十五年八月二十四日、群馬縣利根郡沼田町に生る。明治學院普通部卒業の後、早稻田大學英文科卒業。「東京朝日」「やまと」「大正日日」の記者となり、後早稻田文學社員たりしこともあれど、何れも年限短かく俸給生活通計四年三ケ月、浪人生活滿二十年に及ぶ。最近著書に現代ユウモア全集の中「東京初上り」「食後談笑」「身の毛の竦立つ話」等あり。(東京府下野方町上沼袋三一六)

浦野敬

明治二十六年十一月十五日、栃木縣佐野町に生る。東京[illegible]七。年京阪、京濱に放浪生活をなし、目下教員、歌作多し。(長野市立町九二)

江口渙（キヨシ）

明治二十年七月二十日、東京麹町區富士見町に生る。三重四中、五高、東京帝大英文科中途退學。東京日日新聞記者、『帝國文學』編輯に從事したることあり。現『戰旗』同人。武藏野町會議員。小説「性格破産者」「赤い矢帆」「戀と牢獄」「勞働者誘拐」のほか評論飜譯多し。(東京市外吉祥寺六一五)

悦田喜和雄

明治二十九年八月二十一日 徳島縣海部郡三岐田町に生る。小學校の外に學歷なし。武者小路實篤氏につき農村小説を發表した。(徳島縣海部郡三岐田町)

越中谷利一

明治卅四年七月十四日、秋田市下香町に生る。種々なる學校に籍を置き、職業を替ふること數度。最近住友社員を辭す。他に軍隊生活一年餘。その間、一九二〇年に社會主義同盟に加盟、一九二六年に日本無産派文藝聯盟に加盟。一九二八年にナップに加盟して今日に至る。現所屬日本プロレタリア作家同盟。(東京府下荏原郡荏原町中延九

一八)

江戸川亂步（本名。平井太郎）

明治二十七年十月二十一日、三重縣名張町に生る。(原籍は津市)大正五年早大政經科卒業。職業は新聞記者、會社員、公吏、貿易商、書店自營、雜誌記者等六年間に十數種轉々す。大正十二年初めて探偵小說を書く。最近著書に「陰獸」「孤島の鬼」「明智小五郎」「蜘蛛男」各種大衆及探偵全集中の「江戸川亂步集」等あり。(東京市外戸塚町源兵衞一七九平井方)

江原小彌太

明治十四年十月、新潟縣柏崎町に生る。數員、新聞記者、會社員、海員、商人等の經歷あり。長篇「新約」「舊約」その他の小說多く、「人生學」「心靈學」等の著もある。

江馬修

明治二十三年十二月十二日、飛驒高山町に生る。鄕里の中學を五年まで行つて退學、出京後曉星學校の夜學でフランス語を學んだ外、學歷なし。最近著書に「阿片戰爭」(創作集)「血の九月」(長篇小說)あり。(東京市外代々木初臺六〇九)

江見水蔭

明治二年八月十二日、備前岡山一番町に生る。杉浦重剛先生の稱好塾に入り、東京英語學校に通學。硯友社員。新聞記者及雜誌記者。文士相撲大關。ラヂオ放送。探檢及講演行脚。最近著書「自己中心明治文壇史」「硯友社と紅葉」「佐渡脫獄鬼」(東京市外品川町南品川二五二)

圓地文子（原姓。上田）

明治三十八年十月二日、東京市淺草に生る。上田萬年博士の令孃。日本女子大學附屬高女半途退學。今年結婚す。「晚春騷夜」「母」その他の戲曲創作あり。(神奈川縣鎌倉町材木座二七五)

大泉黑石

明治二十六年十月二十一日、長崎市八幡町八に生る。第三高等學校工科、第一高等學校理科に學ぶ。東京石川島造船所鑄造部勤務。日活脚本部顧問等。最近著書に「眼を搜して步く男」「燈を消すな」「峽谷を探る」「讀心術」あり。(東京市外高田町雜司ヶ谷)

大江賢次

明治三十八年九年二十日、鳥取縣日野郡溝口村に生る。學校は尋常小學のみ。小作人生活その他轉々。シベリヤに放浪せしことあり。「[illegible]と搾取の下に育つてきた」「シベリヤ」[illegible]の作を發表す。(東京市外下落合一六五八)

大木篤夫

明治二十八年四月十八日、廣島市大滿町に生る。廣島商業學校を出たゞけで、特に學歷なし。三十四銀行廣島支店に三年、博文館編輯局に四年ゐたことがある。『近代風景』の編輯に當つた。最近まで、「千夜一夜」十二卷中にある二千篇二萬行の譯詩を擔當した。最近著書詩集に「風・光・木の葉」「秋に見る夢」「近代佛蘭西詩集」「危險信號」飜譯に「基督の生涯」(パピニ)「本能の秘密」(ファブル)「戀愛無政府」「赤襯衣物語外二篇」「双頭の鷲より赤旗へ」外數種。(東京市外吉祥寺四三一)

大下宇陀兒（本名。龍夫）

明治廿九年十一月十五日、長野縣上伊那郡中箕輪村に生る。一高を經て帝大應用化學科を卒業一時商工省臨時窒素研究所に勤めたるも同所を辭職後、專ら文筆を以て業とす。最近著書に「蛭川博士」あり。(東京市外西巣鴨町宮仲一九〇二)

大關格郎（本名。太一郎）

明治卅三年十二月十日、茨城縣筑波郡北條町に生る。東京外國語學校獨逸語科及ポスト[illegible]大學文科に學ぶ。大正[illegible]年七[illegible]

年末まで演劇研究のため歐米諸國を歴遊。東京日日新聞記者、寶塚少女歌劇の作者兼教師たりしことあり。最近著書に戯曲集「嵐」及び「現代佛蘭西戯曲傑作叢書」の翻譯その他「常陸山谷右衛門」「原敬」等の長篇戯曲と一幕物喜劇二十種程あり。(東京市麹町區元園町一ノ七)

大谷繞石 (本名。正信)

明治八年三月二十二日、島根縣松江市に生る。明治三十二年東京帝國大學英文學科卒業、第四高等學校教授に赴任の翌明治四十二年秋英國へ留學、四十五年春歸朝。大正十三年廣島高等學校へ轉任。多くの句作あり。(廣島市千田町二ノ六五七)

太田水穂 (本名。貞一)

明治九年十二月九日、長野縣東筑摩郡廣丘村に生る。明治三十一年長野縣師範學校卒業。長野縣教育に從事。同四十一年上京。日本齒科醫學專門學校教授に從ふ。大正四年雜誌「潮音」發行現在に至る。最近著書「短歌立言」「記紀歌集講義」「芭蕉俳諧の根本問題」「芭蕉連句の根本解說」歌集「雲鳥」「冬菜」。(東京市外瀧野川町田端二八三)

大槻憲二

明治二十四年十一月二日、淡路國洲本町に生る。東京美術學校洋畫科中途退學。早稻田大學英文科大正七年卒業。最近著書、クローチェ「美學及び美學史」フロイド「日常生活の精神分析」あり。(東京市外阿佐ケ谷六〇九)

大宅壯一

明治三十三年九月十三日、大阪府三島郡富田町に生る。大阪府立茨木中學校半途退學檢定試驗、第三高等學校を經て、東京帝國大學文學部社會學科半途退學。岩倉鐵道學校講師、日本フエビアン協會主事、新潮社編輯部囑託たりしことあり。現在は專ら文筆的放浪。最近著書に「文學的戰術論」「モダン相とモダン層」、ゴルキー原作「四十年」の飜譯あり。(東京市外吉祥寺五六九)

岡澤秀虎

明治三十五年五月十三日、下關市に生る。山口縣立長府中學より早稻田大學ロシヤ文學科卒業、直ちに同文學科講師兼早稻田高等學院教授となり今日に至る。最近著書に「ソウエートロシヤ文學理論」あり。(東京市外戸塚町諏訪八四)

岡田三郎

明治二十三年二月四日、北海道松前郡福山町に生る。大正七年早稻田大學英文科卒業。博文館編輯に入て、「文章世界」編輯。大正十年より同十二年までフランスに遊學。「近代生活」同人『十三人倶樂部』同人。最近著書、短篇小說集「物質の彈道」「誰が一番馬鹿か?」長篇小說「黄金草」あり。(神奈川縣茅ケ崎町雲雀ケ岡)

岡田禎子

明治卅五年三月六日、愛媛縣溫泉郡石井村に生る。村の小學校城下の女學校、東京女子大學卒業。多くの戯曲を發表し著書に「正子とその職業」がある。(東京牛込區田町三ノ一九)

岡麓(フモト) (本名。三郎)

明治十年三月三日、東京市本郷區湯島に生る。尋常中學校を中途退學して寶田通文の精神塾に入れり。和歌を正岡子規に學ぶ。「アララギ」同人。最近著書に歌集「庭苔」現代短歌全集「岡麓集」「代々木雜筆」あり。(東京市外代々木山谷一八五)

岡本かの子

明治二十六年三月、東京赤坂青山南町に生る。生家は大貫氏、幼時、帝大文科生なりし兄品川氏に日本古文學、西洋文學、語學等を學び、跡見女學校、櫻井英學塾等に學ぶ。歌集數種、本年春「わが最終歌集」一

卷を殘して一平氏と共に渡歐す。

岡本綺堂（本名。敬二）

明治五年十月十五日、東京芝區高輪に生る。若いとき新聞記者たりしことあり、最近著書、綺堂戲曲集十四卷あり。（東京市麴町區元園町一ノ二七）

岡鬼太郎（本名。嘉太郎）

明治五年八月一日、東京芝區芝山内に生る（今の芝公園内）慶應義塾卒業、新聞記者生活十五年の後、劇界の事にたづさはる。戲曲の作及び演劇の批評研究が多い。（東京府荏原郡東調布町田園都市一七〇）

小川未明（本名。健作）

明治十五年四月七日、越後、高田に生る。早稻田大學英文科卒業。新聞記者、雜誌記者各一年程なす。文壇に立て、新ロマンチシズムのために戰ひ、ナロードニーキの思想を信じ、社會主義文藝の興起につとむ。日本社會主義同盟に參加し、日本著作家協會、日本フエビアン協會會員等々たりしことあり、後年、マルクス主義思想の隆盛なるに及んで、勞働運動をはなる。大正十五年「小川未明選集」成り、以後小說に筆を絕ち、專ら、文學としての童話を書く。現在「童話の社會」をその機關とする。自由藝術家聯盟員たり、また、日本童話作家協會々員に屬す。最近著書に、現代日本文學全集二十三編、「小川未明集」明治大正文學全集三十編、「小川未明集」新興文學全集一編、「小川未明集」「未明童話集四卷」あり。（東京市外杉並町高圓寺五一一）

翁（オキナ）**久允**（キユウイン）

明治二十一年二月八日、富山縣中新川郡東谷村字六郎谷に生る。明治四十一年渡米、學僕生活八年。太平洋沿岸にて日本人會幹事新聞記者等の生活をなす。最近著書に長篇小說「道なき道」隨筆集「鵜のアメリカ」あり。（東京市外目黑町駒場九〇五）

沖野岩三郎

明治九年、和歌山縣日高郡寒川村に生る。明治二十八年和歌山縣師範學校講習科に八ケ月學び、明治二十九年より三十六年まで小學校教師を奉職。明治三十七年東京明治學院神學部別科に入學、四十年六月卒業大正九年まで牧師をなす。大正九年以後專ら文筆勞働に從事。最近著書に「ユートピヤ物語」「娼妓解放哀話」あり。（東京市外落合町下落合一五一〇）

萩原井泉水（セイセンスイ）（本名。藤吉）

明治十七年六月十六日、東京芝區神明町一一に生る。帝國大學文學部（言語學科）を明治四十一年卒業。當時俳壇に新傾向運動の起るとともに其宣揚に努む。四十四年春、俳句雜誌「層雲」を創刊し、其後それを主宰すること二十年。新しき俳句及び芭蕉、一茶に關する著書多し。最近著書に「山川行住」「旅のまた旅」「京洛小品」「觀音順禮」「芭蕉風景」「奧の細道を尋ねて」（以上隨筆紀行）「井泉水句集」「短律時代」（以上俳句集）「此一筋を行く」「俳壇傾向論」（以上俳論集）あり。（神奈川縣鎌倉材木座光明寺及び東京麻布區新堀町三）

尾崎士郞

明治三十一年二月五日、愛知縣幡豆郡橫須賀村に生る。大正六年、早大政經科中途退學（學校騷動に坐して除籍さる）爾來十年間、生活の流轉數ふべからず。最近著書に「新進傑作全集第十卷」「悲劇を探す男」「戀と銀貨」（短篇集）「チヤツプリン」「世紀の夜」（長篇）等。（東京市外大森山王二六五八）

大佛次郎（オサラギジロウ）（本名。野尻清彥）

明治三十年十月、橫濱に生る。東京帝大法科卒業。外務省に勤めたこともある。「赤穗浪士」でこころつき始めからす說「その他大衆文藝の作篇も多く、最近の著書に「由比正雪」

「ドレフュス事件」「日蓮」等がある。（神奈川縣鎌倉町雪の下）

小澤碧童（本名。忠兵衛）

明治十四年十一月十四日、東京市日本橋區本船町七に生る。十八歳の頃碧梧桐に師事し、二十二歳碧梧桐に隨伴して關西に遊び「西行百句」の吟あり。二十七歳『層雲』の運動に參加し、のち『海紅』『三昧』の同人なり。（東京市下谷區上根岸町一一七）

尾上柴舟（本名。八郎）

明治九年八月二十日、岡山縣津山市に生る。東京帝國大學卒業。東京女高師教授。最近著書に「行きつゝ歌ひつゝ」「間歩集」あり。（東京小石川區白山御殿町一二七）

尾山篤二郎

明治廿二年十二月十五日、金澤市に生る。金澤英學院に學び、詩を『新聲』『文庫』等に投ず。二十二歳上京、前田夕暮、富田碎花、若山牧水等と知る。「草綿」その他歌集多し。大正八年、自然詩社を起し『自然』を發行して現在に及ぶ。（名古屋東區城番町三〇）

折口（ヲリクチ）信夫（シノブ）（別名。釋迢空）

明治二十年二月十一日、大阪市浪速區鴎町に生る。國學院大學國文科卒業（明治四十三年）自明治四十四年至大正三年中學校教員。自大正三年至大正七年編輯及著述に從事。大正八年國學院大學講師、大正十一年同教授となる。昭和三年慶應義塾大學教授となり、現在に至る。最近著書に「古代研究」一部三冊。歌集「春のことぶれ」一冊あり。（東京府大井町五〇五二）

賀川豐彦

明治二十一年七月十日、神戶市兵庫島上町一〇八に生る。德島中學卒業、明治學院高等科二年修業、神戶神學校卒業、後米國プリンストン大學神學部卒業。明治四十二年より神戶新川貧民窟の救濟に從事し、大正七年より勞働運動、農民組合運動、消費組合運動、無產政黨運動、宗教運動、隣保事業等に從事す。東京市社會局囑託たりしことあり。著書に「貧民心理の研究」「死線を越えて」「星より星への通路」「雲水遍路」をはじめ四十種、最近著に「偶像の支配するところ」及宗教書類數種あり。（東京府松澤村上北澤六〇三）

片岡鐵兵

明治二十七年二月三日、岡山縣苫田郡芳野村に生る。慶應義塾其他中途退學。山陽新報、大阪朝日新聞記者等を經て今日に至る。現在ナップ加盟、日本プロレタリア作家同盟員。プロレタリア科學研究所員。「新選片岡鐵兵集」「太刀打ち」「歩きつゞける男」「綾里村快擧錄」「女性讃」「彼女らと語る時」の近著あり。（西宮市外夙川甲南莊）

鹿地亘（本名。瀨口貢）

明治三十六年五月一日、大分縣西國東郡三浦村に生る。少年時代、父（教員）の移動につれて、關西、九州各地を流轉する。鹿兒島七高を經、東京帝大國文學科卒業。プロレタリア文藝聯盟最初の分裂と前後して、藝術運動に關係する。後プロ藝を經て、現在ナップ所屬日本プロレタリア作家同盟の一員である。創作集「勞働日記と靴」あり。（東京市外寺島町寺島六一一）

勝本清一郎

明治三十二年五月東京日本橋區茅場町に生る。大正十二年慶應義塾大學文科卒業、其の後二年間同大學院に在學す。大正十五年四月『三田文學』復活に際し編輯に當り、昭和二年十月辭任。主として評論を發表し小說も作る。評論集『前衛の文學』あり。「近代生活」同人。目下獨逸遊學中。

加藤一夫

明治二十年二月二十八日、和歌山縣西牟婁

郡大都河村に生る。明治學院神學部卒業。二年ほど傳道に從ふ。後ち文筆生活に入り『科學と文藝』を創刊し、トルストイの感化によつて田園生活をなしその後また、社會主義思想に共鳴し、社會運動に參加したが、現在『大地に立つ』を主宰してゐる。長篇「無明」「幻滅の彼方へ」「村に襲ふ波」論文集「民衆藝術論」「本然生活」其他多くの著書、飜譯あり。（神奈川縣都筑郡新治村中山大六天）

加藤武雄

明治二十一年五月三日神奈川縣津久井郡川尻村に生る。小學教師、後に雜誌記者。現在、新潮社にあり、『文學時代』を編輯す。多くの長篇と短篇あり。長篇三人全集の中三卷「沈默の塔」「銀の鞭」「無憂樹」「明暗」は最近の代表作なり。（東京市外砧村成城學園前）

河東碧梧桐（カハヒガシ）（本名、秉五郎）

明治六年二月二十六日松山市千舟町七二に生る。明治二十六年京都三高入學、二十七年九月仙臺二高に移り、同十一月退學。二十八年日本新聞社入社、三十九年社員一同と共に退社す。大正二年同人俳句雜誌「海紅」發刊。大正八年大正日日新聞社入社、翌九年同社解散の後歐米漫遊一年。大正十二年個人雜誌『碧』發刊。大正十三年同人雜誌「三昧」發刊、現在に至る。俳句その他著書約十數種あり。（東京市牛込區加賀町一ノ九）

金子光晴

明治二十八年十月、愛知縣津島町に生る。美術學校、早稻田、慶應文科半途退學。歐洲に一度、支那に數度遊歷。尙又昭和三年九月出發、上海、武昌、香港、シンガポール、ジャバ、マレー、スマトラ、印度等に滯在後フランスに渡り、在巴里「鮫沈む」が最近のもの。（巴里、日佛銀行氣付、留守宅は東京牛込區富久町一〇五、大鹿氣付）

金子薰園（本名。雄太郎）

明治九年十一月三十日、東京神田に生る。落合直文に師事した外に、學歷といふほどのものなし。今新潮社調査部長。短歌研究會主宰。多くの歌作あり。（東京市外高田町一三七一）

金子洋文（本名。吉太郎）

明治二十七年四月八日、秋田縣土崎港町に生る。小學卒業後上京電氣屋小僧となる、一年餘で歸鄉秋田縣立工業學校機械科卒業代用教員三年後再び上京、雜誌、新聞記者を經て文筆生活に入る。現在勞農藝術家聯盟員「飛ぶ唄」「天井裏の善公」「赤い湖」「一部落と企解禁」「新選金子洋文集」「新進作家傑作集金子洋文集」「魚河岸」の近著あり。（東京市外上荻窪六四八）

加能作次郎

明治十九年一月十日、石川縣羽咋郡西海村風戸に生る。明治四十四年早稻田大學英文科卒業。十三歲より十七歲まで京都に丁稚生活をなし、十八歲より二十歲まで鄉里にて小學校教員奉職。早大卒業後一時同大學出版部に入り『早稻田講演』編輯に從事大正二年博文館に入り、同十年迄滿八年間『文章世界』の編輯に從事す。「世の中へ」「若き日」「小夜子」「幸福へ」等の長編小說及び「厄年」「處女時代」「誘惑」「弱過ぎる」等數種の創作集あり。（東京牛込區藥王寺町八三）

神近市子

明治二十四年六月、長崎縣北松浦郡佐々村佐々に生る。長崎市活水女學校、東京女子英學塾卒業。女學校教師、新聞記者の經驗あり。飜譯「神と資本家」「勞働婦人アンナ」論文集「現代婦人讀本」の著あり。（東京市外落合町上落合四六九）

上司小劍（本名。延貴）

明治七年十二月十五日、奈良市に生る。大

阪發備學校に學ぶ　その他學歴無し。明治四十三年讀賣新聞文藝部長兼社會部長となる。大正四年讀賣新聞編輯長、兼文藝部長婦人部長となる。大正五年讀賣新聞相談役となり、主に自宅にあつて創作に從ふ。「現代日本文學全集」「明治大正文學全集」のほか、多くの著書あり。（東京市外馬込町洗足三八三七）

加宮貴一

明治三十四年二月、岡山市中之町に生る。鳥取一中、岡山一中を經て大正十二年慶應義塾大學文科卒業。舊『文藝時代』同人。「一片のパン」「屏風物語」の短篇集あり。（東京市本郷區千駄木町五九）

嘉村礒多

明治三十年十二月十五日山口縣周防國仁保村に生る。かつて『不同調』の記者たりしことあり。『崖の下』（短篇集）の著あり。（東京牛込區矢來町四六中村武羅夫方）

河井醉茗（本名。又平）

明治七年五月七日大阪府堺市に生る。早稻田專門學校文學科に在學せしことあり。詩作を明治二十四五年頃より初め三十年より四十年まで約十三年間『文庫』の詩を選評す。四十年『詩人』刊行。その前より『女子文壇』主筆となり十年間ほどつゞく。後婦人之友社編輯部、アルス編輯部等に入りしことあり。現在は獨立して『女性時代』を主宰す。（東京市外中目黒一四八〇）

川口浩

明治卅八年一月廿九日、横濱に生る。浦和高校を經て、東大獨文科を卒業。大學在學當時新人會にあつて活動するかたはらプロレタリア藝術運動にも關係してゐた。前衞藝術家同盟」結成と共に、正式にこれに參加し、後「前藝」と「プロ藝」との合同によつて「日本無産者藝術聯盟協議會（ナップ）が成立するに及び、引き續きその成員となる。現在はナップ中央協議會書記長、日本プロレタリア作家同盟中央委員、プロレタリア科學研究所員。「プロレタリア文藝辭典」（山田清三郎共編）の著あり。（東京市外杉並町高圓寺三）

川口松太郎

明治三十二年十月一日東京淺草區今戸町に生る。久保田万太郎、故小山内薫氏等に師事した。雜誌『苦樂』の編輯に從事せしことあり。戯曲の作多し。

河竹繁俊（本姓。吉村）

明治二十二年六月九日、長野縣下伊那郡山本村に生る。早大英文科、文藝協會附屬研究所第一期卒業。目下早大講師にして坪内博士記念演劇博物館館長を兼ぬ。「默阿彌全集」の校訂編纂を完成せり。（東京市外澁谷町松濤五六）

川田順

明治十五年一月十五日、東京市下谷區三味線堀に生る。根岸小學校、愛日小學校、城北中學、第一高等學校文科を經て東京帝大英文學科に入り、中途法科に轉學して、明治四十年夏卒業。大阪の住友に入社し、現在住友合資會社理事。十六歳にして竹柏園に入門し、今日に到る。中途一時「日光」同人たりし事あり。此間に歌集「陽炎」「伎藝天」「山海經」の著あり。尚、昭和五年夏既刊の歌集「青淵」及び近刊豫定の歌集「鵲」あり。（兵庫縣御影町字掛田）

川路柳虹（本名。誠）

明治廿一年七月九日東京芝區三田臺町三に生る。淡路洲本中學、京都美術工藝學校を經て東京美術學校日本畫科卒業、美術商、雜誌記者、雜誌經營等の經歷あり。曙光詩社を起し詩壇の後進を誘掖、昭和二年外遊三年歸朝、日佛文化聯絡協會理事、國譜會評議員、新興大和繪會顧問「新著 マチス以

後」のほか、多くの繪畫及び詩に關する述作多し。(東京市外上落合五八一)

川端康成

明治三十二年六月十一日、大阪市天滿此花町に生る。東京帝大國文學科卒業。『新思潮』『文藝春秋』『文藝時代』『文學』等の同人たりしことあり。現在は『近代生活』同人文化學院教師。最近著書に『僕の標本室』「花ある寫眞」「淺草紅團」等あり。(東京市下谷區上野櫻木町四九)

蒲原有明(本名。隼雄)

明治九年三月十五日、東京市に生る。明治二十五年東京府立中學を卒業の後暫時國民英學會に學ぶ。「草わかば」「獨絃哀歌」「春鳥集」「有明集」「有明詩集」「有明詩抄」等の著書あり。最近「蒲原有明集」(現代詩人全集)を出す。(靜岡市鷹匠町二ノ四)

菊池寛

明治二十一年十二月二十六日高松市七番町に生る。高松中學卒業、東京高等師範學校一高等に在學し、大正五年京都帝大英文科を卒業す。時事新報記者、大阪每日新聞社員たりしことあり。第三次『新思潮』同人。大正十二年一月より雜誌『文藝春秋』を創刊主宰し今日に至る。小說戲曲の著多く、最近の菊池寛全著作集十九卷(改造文庫)に網羅さる。(東京市外高田町雜司谷金山三三九)

菊池幽芳(本名。清)

明治三年十一月水戶市に生る。永く大阪每日新聞社員たり。「己が罪」「乳兄弟」「お夏文代」「彼女の運命」「白蓮紅蓮」等多くの小說あり。(兵庫縣武庫郡蘆屋)

岸田國士

明治廿三年十一月二日東京四谷に生る。陸軍幼年學校及士官學校を經て步兵少尉に任官、久留米聯隊附となり、大正四年感ずるところあつて軍職を退く。翌年東京帝大文科選科に入學、大正八年文學演劇研究の爲渡佛、大正十二年歸朝後、創作戲曲及飜譯の筆を執る。最近戲曲集「牛山ホテル」長編小說「由利旗江」を著す。(東京市外杉並町天沼山下四二六)

貴司山治

明治卅二年十二月廿二日、德島縣板野郡鳴門村に生る。小學校を卒へたゞけ、大正九年から滿四年間大阪時事新報の記者をせしことあり。昭和元年より小說家となり、現在日本プロレタリア作家同盟に屬す。小說「ゴー・ストップ」小說「[illegible]の娘」小說集「同志愛」小說雜文集「暴露讀本」を著す。(東京市外吉祥寺五三四)

北川冬彥(本名。田畔忠彥)

明治三十三年六月三日、滋賀縣大津市に生る。旅順中學、第三高等學校を經て東京帝國大學佛蘭西法科を卒業。同佛蘭西文科に一寸籍を置いたことがある。その後數年日本に於ける新しい詩の開拓に盡瘁す。これから、小說家としての經歷をも創らうと努力してゐる由。冊子『詩・現實』の編輯同人である。詩集「戰爭」譯著マックス・ジャコブの散文詩集「骰子筒」あり。(東京市外荏原町下蛇窪三五五)

北原白秋(本名。隆吉)

明治十八年一月福岡縣柳河町に生る。早大英文科中途退學。詩、短歌、民謠童謠、隨筆、小說、論文等著書大小八十數卷。明治四十二年處女詩集「邪宗門」を刊行以來、「思ひ出」「東京景物詩」「雲母集」等の詩集を出し、「篁」「海豹と雲」「白秋の觸角」「花樫」などを最近の代表著作となす。曾て『近代風景』を主宰した。目下白秋全集十八卷刊行中。(東京市外世田ケ谷若林二三七)

北村喜八

明治三十一年十一月石川縣に生る。金澤第

四高等學校を經て、大正十三年東京帝大英文科を卒業。築地小劇場創立と同時に文藝部に入り、演出の仕事にも携り、最近は、同劇團を主宰して來たが、この秋から實際的な演劇活動から遠ざかり、文筆の仕事に入る。演劇活動の傍ら、演劇に關する多くの評論紹介、飜譯、創作等あり。(東京市本郷區千駄木町四八)

北村小松

明治三十四年一月四日、青森縣八戸市長横町に生る。土地の小、中學卒業後、慶應義塾大學英文科に入學、故小山内薫氏の松竹キネマ研究所に入り映畫脚本、戯曲を勉強し、卒業後松竹キネマ蒲田撮影所に入所、現在に到る。最近「北村小松シナリオ集」を著す。(東京府下矢口町蓮沼一二七)

北村壽夫　(本名。壽雄)

明治二十八年一月八日、東京市麹町區中六番町に生る。早稲田大學英文科中途退學。大正十三年處女作「幻の部屋」を改造社より上梓以來小説戯曲の創作を續く。最近小説集「淡彩の處女」あり。(東京市外砧村成城學園前)

木下杢太郎　(本名。太田正雄)

明治十八年八月伊豆伊東に生る。一高を經て東京帝大醫科卒業。東京帝大醫科助手南滿醫學堂教授、大正十三年獨逸留學より歸朝して愛知醫科大學教授に任じ、現に東北帝大醫學部教授。醫學博士。「和泉屋染物店」「南蠻寺門前」「唐草表紙」「印象派以後」「支那南北記」「えすぱにあ、ぽるつがる記」「木下杢太郎詩集」等の著あり。(仙臺市光禪寺通四)

木村毅

明治二十七年岡山縣勝田郡勝間田村岡に生る。生地の小學校卒業後二三の私立學校を轉々し、大正六年早稲田大學英文科卒業。文學的な著作をする傍ら震災前後から社會運動へ入り、現在全國大衆黨員たり。昭和三年外遊、五年歸朝。最近サンデエ毎日に「星旗權秘聞」を連載中。(東京市外西大久保四七)

木村庄三郎

明治三十五年八月東京本所に生る。東京府立一中を經て慶應義塾大學國文科卒業。「目に見えざる敵」「殘酷夫人」等の作あり。舊「山繭」同人。(東京市芝區高輪南町三〇)

楠山正雄

明治十七年十一月四日、東京銀座七丁目に生る。早大英文學科卒業(明治三十九年)。早稲田文學社、讀賣新聞社、「新日本」の記者をしたることあり。「近代劇十二講」の他劇文、學兒童文學、歴史に關する著作飜譯多し。現在冨山房の百科辭典事業を主宰。一時早大講師をした。(東京市麻布區霞町一九ノ三)

邦枝完二

明治二十六年一月一日、東京市麹町區平河町に生る。慶應義塾の文科、東京外語の伊語專修科等に通つたが、いづれも業を卒るに到らずして止む。時事新報文藝記者、帝劇技藝學校主事等を勤めたことがある。元祿の俳人大江丸の末裔に當る。長篇小説「東洲齋寫樂」「大空に描く」「接吻市場」等あり。(東京市麹町區平河町四ノ七)

國枝史郎

明治廿一年十月十日長野縣諏訪郡宮川村に生る。東京郁文館中學卒業、早稲田大學英文科に學び中途退學。大阪朝日新聞記者として三年間勤務、松竹會社脚本部員として六ケ月勤務、その後は一切創作を以つて生活す。最近「生死卍巴」「大衆文學全集第三冊目」「曉の鐘は西北より」などの著あり。(名古屋市外新舞子)

久野豐彦

明治三十一年九月十四日名古屋に生る。慶應義塾經濟學部卒業。在學中より文學を嗜み、ために文筆生活を志願爾來今日に至る。「ボオル紙の皇帝萬歲」「新藝術とダグラスイズム」「聯想の暴風」等の著あり。（東京市外阿佐ケ谷五四七）

窪川いね子

明治三十七年六月一日長崎市に生る。學歷無し、雜業種々經驗せり。現在ナップ所屬プロレタリヤ作家同盟員。「キャラメル工場から」「研究會挿話」の著あり。（東京市外王子町下十條原町一五〇〇）

窪田空穗（本名。通治）

明治十年六月長野縣東筑摩郡和田村に生る。松本中學を經、明治三十七年早稻田大學の前身なる東京專門學校を卒業。新聞記者、雜誌記者をなし、現在早稻田大學文學部教授。「自選歌集槻の木」「青朽集」は最近歌集なり。その他歌集、文集、註釋書多し。（東京市小石川區雜司ケ谷町八八）

久保田万太郎

明治二十二年十一月七日東京淺草區田原町に生る。淺草小學校、慶應義塾普通部を經て同大學部文科を卒業。戲曲、小說、俳句などの作多く、「新選久保田万太郎集」一兩後」「うみほゝづき」等は近著なり。（東京市外日暮里一〇八九）

久米正雄

明治二十四年十一月二十三日長野縣上田市に生る。福島縣安積中學、一高を經て、大正五年東京帝大英文科卒業。神田錦城中學に勤めたることあり。中學時代より俳句をよくし、小說戲曲の作頗る多し。第三次「新思潮」同人。昭和三年十一月歐米漫遊に出發し、同四年十一月歸朝した。最近久米正雄全集十二卷を刊行し、「モン・アミ」「虹の色」を近作とす。（神奈川縣鎌倉町塔の辻）

倉田百三

明治二十四年二月二十三日廣島縣比婆郡庄原町に生る。第一高等學校在學中病ひを得て、中途退學す。大正六年「出家と其の弟子」を著して以來「歌はぬ人」「愛と認識との出發」「靜思」「轉身」「父の心配」「ギリシャ主義とキリスト教主義との調和の道」「處女の死」「標立つ道」「赤い靈魂」等を著はす。最近に戲曲「恥以上」論文集「絕對的生活」を著はす。（東京市牛込區榊町二二）

栗林一石路（本名。農夫）

明治二十七年十月十四日長野縣小縣郡青木村に生る。少年時代より俳句に親しみ明治四十四年荻原井泉水の「層雲」發刊と同時に之に據り、現在は俳句雜誌「旗」を主宰す。大正十二年より「女性改造」「改造」等の編輯に從事せしが、昭和二年より新聞聯合社に在り。句集「シャツと雜草」の著あり。（東京市外荏原町小山八四）

藏原惟人

明治卅五年一月二十六日東京市麻布區に生る。東京府立第一中學校東京外國語學校露西亞語科を卒業し、後渡露、歸朝後は飜譯評論を發表し現在「戰旗」同人。評論集「藝術と無產階級」飜譯「壞滅」の著あり。（東京市芝區芝公園十二號の四）

黑島傳治

明治三十一年十二月十二日香川縣小豆郡苗羽村に生る。取立てゝ云ふべき學歷なし。百姓、漁夫、醬油工場の勞働、建築會社の事務員をしたことがある。元「文藝戰線」同人たりしが最近脫退。長篇「武裝せる市街」短篇集「浮動する地價」「氷河」「橇」等の著あり。（東京市外中野町五五二）

黑田辰男

明治三十五年七月二十日大阪市に生る。早稻田大學文學部露西亞文學專攻科を卒業。爾後飜譯、評論に從事。全日本無產者藝術

聯盟（ナップ）員、プロレタリア科學研究所々員。譯書、「樣式と時代」（ギンズブルグ）「コミザール」（リベヂンスキイ）、「ソヴエート文學の展望」（コーガン）「マトヴエイ・コゼミヤーキンの生涯」（ゴーリキイ）其他。著書「ソヴエート・プロレタリア文學史」（近刊）「現代ソヴエート文學概觀」（近刊）あり。（東京市外世田ケ谷町若林五十二）

群司次郎正

明治三十八年十一月二十五日群馬縣伊勢崎町に生る。水戸中學、日本映畫俳優學校中途退學。舞臺俳優、自由勞働者、魚河岸の小僧、地方映畫巡業劇、農民などさまざまな生活體驗の後、「ミス・ニッポン」「マダム・ニッポン」「ミスター・ニッポン」を連續刊行す。（伊豆湯ケ原溫泉遠州屋ホテル內）

甲賀三郎（本名。春田能爲）

明治二十六年十月五日滋賀縣に生る。京華中學、第一高等學校を經て大正七年東京帝大應用化學科卒業。約一年間和歌山市由良染料株式會社技師、大正九年より昭和三年まで商工省技師奉職。大正十二年探偵小說處女創作を試み爾今專業となる。最近著書「神木の空洞」「電話を掛ける女」あり。（東京市外澁谷町來通一ノ四三）

幸田露伴（本名。成行）

慶應三年七月東京に生る。小學校の業を終へ菊池松軒に就いて學ぶ。曾て京都帝大講師たりしことあり。小說、史傳、論文その他著作の數多く、「幽祕記」「蒲生氏郷・平將門」「名和長年」「賴朝爲朝」などの近著のほか、最近露伴全集の刊行ありたり。（東京市小石川區表町七九）

小島勗

明治三十三年六月十一日、松本市北深志に生る。大正十三年四月、早稻田大學文學部哲學科卒業。昭和三年四月、勞農藝術家聯盟に加入し、現在に至る。最近著書「ケルンの鏡」あり。（東京市本鄕區弓町一ノ二六大成館）

小島政二郎

明治二十七年一月三十一日東京市下谷區下谷町に生る。下谷小學校、京華中學校、慶應義塾大學文學部卒業。短篇小說集「含羞」「新居」長篇小說「綠の騎士」「心の青空」「木がくれの巢」「花咲く樹」「濡れた珊瑚」隨筆集「場末風流」あり。（神奈川縣鎌倉町塔の辻一五六）

小杉天外（本名。爲藏）

慶應元年九月十九日秋田縣仙北郡六鄕町に生る。國民英學會に學んだ。「魔風戀風」をはじめ多くの長篇小說あり。昭和四年史劇「筑前守義興」「ちんば念佛」を發表す。（神奈川縣逗子町櫻山）

小寺融吉

明治二十八年十二月八日東京に生る。早大英文科出身。民俗藝術の會幹事。劇作數篇また兒童劇、舞踊の研究を爲し、「鄕土舞踊と民謠の會」を第一回より手傳ふ。最近主として「民俗藝術」に長篇の研究を執筆中。「舞踊の美學的研究」「藝術としての神樂の研究」「をどり通」の近著あり。（東京市外中野町上ノ原七六〇）

小林多喜二

明治三十六年舊八月二十六日秋田縣北秋田郡下川沿村に生る。同三十九年家族と共に北海道に移住。小樽高商を卒業し、同地の銀行に勤務せしことあり。現在「戰旗」同人。「蟹工船」「工場細胞」等の著作あり。（小樽市若竹町一八）

小林秀雄

明治卅五年四月十一日東京市神田區猿樂町に生る。東京帝國大學佛文科卒業。「樣々なる意匠」「志賀直哉」等の評論あり。本年四月より「文藝春秋」に文藝時評を執筆中。

譯「地獄の一季節」（ランボオ）の近著あり。（東京府下瀧ノ川町田端一五五）

小堀甚二

明治三十四年八月二十一日福岡市に生る。福岡市立大濱尋常小學校卒業。多くの勞働經驗を經、プロレタリア文藝運動に參加し『文藝戰線』同人。小說、論文を發表す。（東京市外杉並町高圓寺六六七）

小牧近江（本名。近江谷駒）

明治廿七年五月十一日秋田縣土崎港に生る。曉星中學中途退學、渡佛パリ法科大學卒業。外務省情報部囑託國民新聞記者たりしことあり。『文藝戰線』同人。フイリップの飜譯、長篇「異國の戰爭」等の著あり。（神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎）

小宮豐隆

明治十七年三月七日福岡縣京都郡犀川村に生る。明治四十一年東京帝國大學獨文科卒業。現在東北帝大法文學部教授。多くの文藝評論あり。（仙臺市北二番丁六八）

小宮山明敏

明治三十五年一月二十五日岡山縣金川町草生に生る。岡山縣私立金川中學校、第一早高を經て、大正十五年早稻田大學文學部露西亞文學專攻科卒業。在學中、「建設者同盟」（後に「文化同盟」）員、雜誌『主潮』同人。早大卒業と同時に早稻田高等學院講師となつたが、病後靜養のため昭和四年辭職した。評論集「文學革命の前哨」あり。（東京市外世田ケ谷町若林二八）

近藤東

明治三十七年六月二十四日東京市に生る。明治大學英法學部卒業。多くの詩作を發表し、詩集「珊瑚島附近」を準備中なり。（東京市外中野町打越二〇二三）

近藤經一

明治三十年四月二十八日東京市に生る。曉星小學、京華中學、第二高等學校を經て東京帝國大學文學部卒業。小說戲曲の作多く「愛慾變相圖」を最近出したり。（東京市麻布區笄町二六）

今東光

明治三十一年三月二十六日東京市本鄉區西片町に生る。中學三年後ち獨學す。第六次新思潮同人より文藝春秋、文藝時代、不同調の同人を經、文黨を主宰し廢刊の後、ナップに所屬して戰旗同人となり更に脫退し、感ずる所あつて出家得道し天台宗延暦寺派の僧侶となり、法名を東晃と言ふ。「愛染地獄」「奥州流血錄」等の近著あり。（東京市本鄉區西片町拾番地ろノ六號）

西條八十

明治二十五年一月十五日、東京牛込區拂方町に生る。十八歲早稻田中學卒業。在學中英語教諭たりし吉江喬松氏を識り、師事して今日に到る。十八歲早大英文科に入學、三箇月にして退學、關西を放浪す。二十一歲再度早大英文科に入學、大正四年卒業。この間帝國大學文科選科に學べることあり。大正元年日夏耿之介氏等と雜誌『假面』を刊行。因緣淺からざる雜誌に『未來』『詩王』『白孔雀』等あり。現在『蠟人形』を主宰す。大正十三年渡佛、十五年歸朝、早大佛文科の教職にあり。詩集「砂金」「見知らぬ愛人」「美しき喪失」「西條八十詩集」「新選西條八十集」の著あり。（東京市外淀橋町柏木四三三）

齋藤茂吉

明治十五年七月二十七日、山形縣南村山郡堀田村字金瓶に生る。明治四十三年東京帝國大學醫科大學を卒業す。東京帝國大學醫科大學助手、東京府巢鴨病院醫員、長崎醫學專門學校教授を經て文部省在外研究員として獨墺に留學す。現在青山腦病院長。醫學博士。和歌を伊藤左千夫に學ぶ。雜誌ア

ラヽギ同人。最近著書に「短歌寫生の說」「念珠集」改造社版「現代短歌全集」あり。（東京市赤坂區靑山南町五ノ八一靑山腦病院内）

酒井眞人

明治三十一年七月十日、金澤市に生る。東京高師附屬中學、第一高等學校を經て大正十二年東京帝大英文科卒業。最近著書に「映寫幕上の獨裁者」あり。（東京市小石川區關口町二〇四）

櫻井忠溫

明治十二年六月十一日、松山市に生る。伊豫松山中學校卒業、明治三十三年士官學校入校。三十五年少尉。昭和五年少將。永く陸軍省新聞班長たりしことあり。最近著書に「土の上・水の上」（歐米隨筆紀行）「櫻井忠溫全集」あり。（東京府下北多摩郡砧村）

佐近益榮

明治二十三年八月七日、鳥取縣境港に生る。學歷殆んどなし。大正九年まで小學校教員、同年報知新聞記者となり、現在は同新聞學藝部主任、小說十數篇、コント約五百篇。最近著書にコント集「談話室」「談話室漫談篇」「ナンセンス・ジヤパン」あり。（東京市外池袋一、四八〇）

笹川臨風（本名。種郎）

明治三年八月七日、東京神田末廣町に生る。愛知縣中學校、第三高等中學校を經て明治二十九年七月、帝國大學文科大學國史學科卒業。公爵毛利家防長回天史編纂、栃木縣立宇都宮中學校長、三省堂日本百科大辭典編纂、明治大學商學部教授兼高等豫科長、法政大學、專修大學講師、日本美術院幹理、內務省囑託（大震火災史編纂）神奈川縣囑託（同上）私立千葉縣成田中學校長、同高等女學校長を經て、（以下現在）東洋大學教授、駒澤大學教授、私立京北中學校長同實業學校長、同幼稚園長。大正十三年九月文學博士を授與せらる。江戸文藝志（印刷中）日本繪畫史下卷（著述中）（東京市本鄕區西片町一〇ほ三八號）

佐々木邦

明治十六年五月四日、靜岡縣駿東郡清水村に生る。明治學院高等學部卒業。釜山商業學校教諭、第六高等學校教授、慶應大學豫科教授たりしが三年前辭して今日は著述專門。最近著書に「佐々木邦全集」あり。（東京市外澁谷町豐分一一）

佐々木孝丸（別名。落合三郎）

明治三十一年一月三十日、北海道釧路國川上郡屯田村に生る。小學校卒業以來獨學、郵便局、書店員等を經て演劇運動及び文藝運動に携はり現在に及ぶ。「戰旗」同人たり。最近著書に「筑波秘錄」「平安太平記」後日譚（以上落合三郎）「夜」「クラルテ」「赤と黑」（以上翻譯）あり。（東京市麴町區下二番町三六）

佐左木俊郎

明治三十三年四月十四日、宮城縣玉造郡上野目天王寺に生る。鄕里の小學校を卒へてから間もなく、北海道に走り、機關車乘務員などをし、十八の歲に上京して國民英學塾、工科學校、日本大學等を轉々したが何れも中途にて退學。震災後、加藤武雄氏の助手として「文章俱樂部」の編輯を助け、目下、新潮社社員「文學時代」編輯。最近著書に、短篇集「熊の出る開墾地」「黑い地帶」「都會地圖の膨脹」あり。（東京府下千歲村下祖師ヶ谷）

佐佐木信綱

明治五年六月三日、三重縣鈴鹿郡石藥師村に生る。幼くして父佐々木弘綱に歌を學ぶ。明治二十一年東京大學古典科を卒業し、專ら著作に從事す。明治卅八年東京帝國大學文學部講師を囑せられ和歌史を講じて今

日に至る。明治四十四年文學博士の學位を受く。明治天皇御集昭憲皇太后御集編纂委員、御物管理委員會委員たりき。最近著書に、「春日本萬葉集殘簡解說」「白文萬葉集」「分類萬葉集」あり。（東京市本鄕區西片町一〇）

ささきふさ（本名。佐佐木房子）
明治三十年十二月六日、東京市芝公園に生る。青山學院女學部卒業。大正十二年佛蘭西に遊ぶ。最近著書に「或る斷層」「豹の部屋」あり。（東京麴町區紀尾井町三）

佐々木味津三（本名。光三）
明治二十九日三月十八日、愛知縣北設樂郡下津具村に生る。愛知一中を經て明治大學政治科卒業。新聞記者一ヶ月、雜誌記者一ヶ月。最近著書に「右門捕物帖」「風雲天満双紙」「戀を吹くラッパ」「惱める太陽」あり。（東京市外杉並町高圓寺六五九）

佐佐木茂索
明治二十七年十一月十一日、京都市上京區に生る。「中央美術」編輯、時事新報文藝部主任たりしことあり。現在「文藝春秋」編輯員。「南京の皿」「新選佐佐木茂索集」の近著の外、長篇「困つた人達」の作あり。（東京市麴町區紀尾井町三）

佐藤紅綠（本名。洽六）
明治七年七月六日、弘前市に生る。法學院を出る、新聞記者、政黨の陣笠、等々、後內務省の囑託として佛國に遊學。最近著書に「麗人」「富士に題す」戲曲「キリスト」等。（兵庫縣武庫郡鳴尾村西畑）

佐藤惣之助
明治二十三年十二月三日、神奈川縣川崎町（今の川崎市）に生る。小學を了へて、二三の學校を經しかど一つも業を了へず。年少俳句を志し、後劇を研究。詩及び隨筆各四五あり。現に詩誌「詩之家」を主宰す。最近著書に、詩集「トランシツト」「釣と魚」隨筆「蝶夢千年」等あり。（川崎市砂子一ノ二六）

佐藤春夫
明治二十五年四月九日、和歌山縣新宮町に生る。新宮中學を卒業した。明治四十三年四月上京、慶應義塾文學部に入學したが大正三年退學。初期には散文、小品、詩を專らにし、「田園の憂鬱」の作後小說の作頗る多し。最新著に「新選佐藤春夫集」「卿々の戲れ」「警笛」「心驕れる女」「更生記」「支那選詩集」「車塵集」等がある。（東京小石川區關口町二〇七）

里見弴（本名。山內英夫）
明治二十一年七月十四日、橫濱市月岡町に生る。學習院中等科高等科卒業。明治四十二年東京帝大文科英文科に入學したが直ちに退學。同四十三年、「白樺」の創刊に與り短篇「お民さん」を同誌に發表したのが處女作。大正八年より十年まで同志と『人間』を發行した。「多情佛心」「大道無門」の外長短篇多く、「新選里見弴集」の新著及び長篇「安城家の兄弟」續篇執筆中。（神奈川縣鎌倉町西御門六五）

里村欣三
明治三十六年八月一日、東京市に生る。學歷なく、少年時代より種々の勞働に從事する。現在『文藝戰線』同人、勞農藝術家聯盟に所屬する。最近著書に、「苦力頭の表情」「兵亂」あり。（東京市神田區今川小路九段下ビル文藝戰線社氣付）

寒川鼠骨（本名。陽光）
明治八年十一月三日、伊豫松山藩城下に生る。第三高等學校出身。大阪朝日社、日本新聞社、日本及日本人社、等に勤めた。子規の門に出入して俳句及び寫生文を試み「寒川鼠骨集」の近著あり。（東京下谷區上根岸八二）

十一谷 義三郎

明治三十年十月二十日、神戸市に生る。東京帝國大學英文科卒業。東京府立一中、文化學院等にて教職にありしことあり。最近著書に「唐人お吉」(三冊)「あの道この道」「キャベツの倫理」その他あり。(東京市本郷區千駄木町五〇)

志賀 直哉

明治十六年二月二十日、陸前國石巻町に生る。同十八年上京、學習院卒業。同三十九年東京帝大文科に入り同四十一年中途退學。明治四十三年四月創刊の『白樺』同人となる。大正二年一月「留女」の作發表後小説の作多く、未完結の長篇「暗夜行路」を初め、大部分は「志賀直哉集」(現代日本文學全集の第二十四篇)に收錄されてゐる。「山科の記憶」は近著である。(奈良市上高畑)

柴田 勝衞

明治二十一年六月四日、仙臺市に生る。宮城縣立第一中學校分校を第三學年まで秋田縣立大館中學校を卒へ、明治四十二年青山學院高等學部を卒業、大正二年時事新報に入り同六年まで文藝記者として活躍。後讀賣新聞社に轉じ文藝部長、社會部次長、社會部長、ラヂオ部長を歴任、現在編輯局長の椅子を占む。譯書に「パピーニの「きりすと傳」あり。(東京市外澁谷町金王三七)

島崎 藤村 (本名。春樹)

明治五年二月十七日、長野縣西筑摩郡神坂村に生る。少年の頃より東京に遊學。泰明小學、三田英學校、共立學校を經て明治學院卒業。雜誌『文學界』の創刊にあづかり文學生活に入る。小説「破戒」を出せし頃より著作者として獨立し爾來文筆に從事して今日に到る。最近著書に感想集「市井にありて」あり、長篇「夜明け前」執筆中。(東京市麻布區飯倉片町三三)

島田 青峰 (本名。賢平)

明治十五年三月八日、三重縣志摩郡的矢村に生る。早稻田大學文科出身、國民新聞在勤二十年昭和三年學藝部長を辭す。最近著書に「俳句讀本」あり。(東京市牛込區若松町八二)

下村 悅夫

明治二十七年二月十六日、和歌山縣新宮町に生る。高等小學校を卒業せし外、學歴殆んど無し。三四年間、町の銀行で給仕をした事がある。五六年間、父にしたがつて熊野の山間部で勞働をやつた事がある。二十六歳より大衆文藝執筆を專らにして今日に到る。最近著書に「人語鳥大秘記」(第一卷)「朱面組傳奇」(近刊)がある。(和歌山縣新宮町矢倉町)

下村 千秋

明治二十六年九月四日茨城縣稻敷郡朝日村に生る。早大英文科卒業、大正八年十月より十二月まで讀賣新聞記者。以後文筆生活。最近著書に「月夜の女」「明るい暗黒街」「しかも彼等は行く」(東京市外杉並町阿佐ヶ谷八四二)

白井 喬二 (本名。井上義道)

明治二十二年九月一日、橫濱市に生る。某私大に於て政治經濟を專攻す。「富士に立つ影」の外歴史小説、大衆文藝の作多く、最近著書に「國史挿話全集(十卷)があり、長篇「祖國は何處へ」執筆中。(東京府下中野町朝日ヶ丘)

白石 實三

明治十九年十一月十一日、群馬縣安中町に生る。早大英文科及び東京外國語學校露語專修科卒業。雜誌『學生』記者、東京府立第三中學校教師、博文館編輯第三部長を經て、現在早大出版部編輯部次長。著書に長篇小説「返らぬ過去」短篇集「曠野」紀行

文集「武藏野巡禮」傳奇小說「流夜叉姬」等あり。(東京市外代々木初臺五三四)

白須孝輔

明治三十八年二月十二日、東京日本橋に生る。一九二七年前衞藝術家同盟に加入、一九二八年前藝、プロ藝その他三團體合同によつて成るナップに加入し現在に及ぶ。その間、檢閱制度改正期成同盟書記長『戰旗』編輯委員等になる。詩集「ストライキ宣言」あり。(東京市麹町區五番町六)

白鳥省吾

明治廿三年二月廿七日、宮城縣栗原郡築館町に生る。縣立築館中學校を經て、早稻田大學英文科卒業。最近著書に詩集「野茨の道」「二行詩集」民謠集「白鳥省吾民謠集」「直江津音頭その他」あり。(東京市外高田町雜司ヶ谷龜原六一)

新村出（シンムライヅル）

明治九年十月九日、周防國山口町に生る。明治三十二年七月東京帝國大學文科大學言語學科卒業。同三十五年二月東京高等師範學校教授、同三十七年八月東大文科大學助教授兼任、同四十年三月京都帝國大學助教授、同年同月獨逸伯林大學留學、同四十二年四月歸朝、五月京大文科大學教授、同四十三年七月文學博士、同四十四年十月京大圖書館長、昭和三年一月帝國學士院會員。最近著書に「琅玕記」「南國巡禮」「東亞語源志」(京都市上京區小山中溝町一九)

菅忠雄

明治三十二年二月五日、小石川區竹早町に生る。逗子開成中學卒業、上智大學獨文科出身。最近著書に「菅忠雄集」(新進傑作小說全集)がある。(東京市麹町區內幸町大阪ビル文藝春秋社氣付)

杉浦翠子

明治二十四年五月、埼玉縣に生る。大正五年より短歌を齋藤茂吉氏に學び、十年以後獨行精進す。また國文學を折口信夫氏に學ぶ。「朝の呼吸」その他歌集のほか、長篇創作「愛しき歌人の群」等あり。『香蘭』同人。(東京市外澁谷町伊達一七)

杉村楚人冠（本名。廣太郎）

明治五年七月二十五日、和歌山市に生る。明治三十六年十二月東京朝日新聞社に入り今日まで在職、その間數回歐米に特派せらる。最近著書に、小說「うるさき人々」「湖畔吟」その他「朝日常識講座中の「新聞の話」がある。(千葉縣東葛飾郡我孫子町我孫子二二一)

鈴木善太郎

明治十七年一月、福島縣郡山市に生る。早大に學ぶ。新聞記者生活十餘年の後セール・フレーザー株式會社に勤務、歐米諸國を遊歷、後に松竹に關係す。最近著書に、モルナアルの飜譯「開かれぬ手紙」「お互に愛したら」「芝居は誂向き」「町のをんな」「男の流行」その他あり。(東京市外北品川一本木三四五)

薄田泣菫（本名。淳介）

明治十年五月十九日、岡山縣淺口郡連島町に生る。獨學。明治三十四、五、六年頃大阪にて文藝雜誌『小天地』を主宰發行。大正元年大阪每日新聞社に入り最近病のために退き、囑託となる。最近著書に、隨筆集「艸木蟲魚」「大地讃頌」あり。(兵庫縣西宮市分銅町二三)

鈴木彥次郎

明治三十一年十二月二十七日、東京市深川區島田町九に生る。盛岡中學、一高を經て東大國文科卒業。曾つて『文藝春秋』『文藝時代』の同人であつた。小說、戲曲、大衆讀物等、執筆今日に至る。最近著書に、小說集「七月の健康美」戲曲集「蛇」がある。(東京府下大森山王二、五五八)

鈴木三重吉

明治十五年九月二十九日、廣島市猿樂町に生る。東京帝國大學英文學科出身。夏目漱石門下。大正七年六月、童話童謠雜誌『赤い鳥』を創刊。昭和四年三月以後休刊。五年十一月復刊。昭和三年五月、日本騎道少年團を創設、理事となり現在に至る。「黑い騎士」童話集「湖水の女」「をどりのたき火」「かるたの王さま」「十二の星」「少年王」あり。（東京市外西大久保四六一赤い鳥社內）

諏訪三郎（本名。半澤成二）

明治二十九年十二月三日、福島縣安積郡赤津村に生る。中央公論社員、並に中外商業新報記者をしたことがある。目下は一週に一日、金星堂編輯部の相談役として出社してゐる。最近著書に「ビルヂング棲息者」「就職戰線をめがけて」「嵐の花」がある。（千葉縣市川町平田二一七）

關口次郎

明治二十六年六月十六日、福井縣敦賀町に生る。京都一中、一高を經て、東大獨文科卒業。大阪朝日に二年、東京朝日に三年記者をせしことあり。辭職後專ら劇作に努めたが、最近小說も發表してゐる。「母親」「鴉」の二戲曲集以後、或る全集の一部として、小說集を出す。（東京市外西大久保二〇〇）

芹澤光治良

明治卅年五月四日、靜岡縣沼津市我入道に生る。沼津中學校、第一高等學校を經て、東京帝國大學經濟學部を大正十一年卒業。大正十四年より昭和四年に亘り歐洲に滯在、主として巴里に社會經濟學を學び、其間、フランス文壇人と交友す。農商務省事務官たりしも辭職。現に、中央大學に貨幣論を講ず。「ブルジョア」の近著の他「我入道」の近作發表。（東京市外上落合二〇六）

千家元麿

明治二十一年六月八日、東京麴町に生る。慶應義塾幼稚舍に入學。普通部二年にて、府立第四中學へ轉校、後慶應義塾大學に學ぶ。最近出版詩集に「千家元麿詩集」「芽ぐめる枝」あり。（東京市外長崎町西原三、七三五）

相馬御風（本名。昌治）

明治十六年七月十日、新潟縣糸魚川町に生る。明治三十九年早稻田大學文學科卒業。早稻田文學社々員、早稻田大學文學科講師等をつとめたりしが大正五年感ずる所あり鄉里に歸住し今日に至る。最近著書に「良寬坊物語」「義人生田萬の生涯と和歌」「千代と貞心と蓮月」「訓譯良寬詩集」「良寬さま」がある。（新潟縣糸魚川町）

相馬泰三

明治十八年十二月二十九日、新潟縣中蒲原郡庄瀨村に生る。早稻田大學中途退學。友人等と雜誌『奇蹟』を經營。萬朝報社、大正日日新聞東京支社に勤めてゐたことがある。最近著書に「新選相馬泰三集」あり。（東京市牛込區馬場下町二一東光館方）

外村史郎

明治三十四年六月十二日、靜岡縣濱松市に生る。外語の夜學にてロシヤ語を學ぶ。プレハーノフの「藝術論」及び「文學論」の飜譯、ルナチャールスキイの「藝術の社會的基礎」の飜譯。エム・ポクロフスキイの「ロシヤ史概要」の飜譯などの近著がある。（東京市外高井戶町大宮前五〇九松本方）

高垣松雄

明治二十三年十二月十三日、神奈川縣橫須賀に生る。大阪桃山中學校卒業、早稻田大學高等豫科文科に入學せしも退學。其後約四年間事務員、小學校代用教員等を勤め、大正八年三月立教大學卒業、同八月より三ケ年ホノルル、シカゴ（シカゴ大學）に留

學。十一年四月より立教大學に出講。「アメリカ文學」の著あり。（神奈川縣逗子町櫻山一七〇七）

高倉輝

明治二十四年四月十四日、高知縣幡多郡七鄕村に生る。京大英文科卒業、以後四年間同大學囑託勤務。小說戲曲の作多く、最近「百姓の唄」あり。（信州別所溫泉）

高須芳次郎（號。梅溪）

明治十三年四月十四日．大阪船場に生る。早稻田大學英文科を明治三十八年に卒業。『新潮』の前身『新聲』記者を振出しに『世界的青年』『東西南北』等の主幹となり、次いで明治三十九年『國民新聞』に入り、『東京每日』『二六』等の社會部長、文藝部長となりし事あり、最近著書に「古代中世日本文學十二講」あり。（東京市外松澤村上北澤五一〇）

高田保

明治廿八年三月廿八日、茨城縣土浦町に生る。早稻田大學文學部卒業、雜誌記者生活放浪生活、劇場員生活を經て今日に至る。劇作自著集「人魂黃表紙」その他ゴルキイの「母」ルマルクの「西部戰線異狀なし」等の脚色多し。（東京赤坂臺町七七）

鷹野つぎ

明治二十三年八月十五日、濱松市に生る。濱松高等女學校卒業。小說集「悲しき配分」同「ある道化役」感想集「眞實の鞭」等の著あり。（東京市外世田谷町太子堂三一三）

高橋邦太郎

明治三十一年九月五日、東京市淺草區に生る。京華中學、東京外國語學校、東京帝國大學佛文科卒業。前築地小劇場文藝部員、兼宣傳部長。隨筆集「三等列車中の唄」飜譯「ラ・バタイユ」「パリのどん底」「肥った男」「愛・見知らぬ土地」等あり。（東京市下谷區上野花園町一四）

高橋丈雄（本名。武雄）

明治三十九年十一月一日、東京市麴町區永田町に生る。北野中學。早稻田第一高等學院を途中で止す。內的の經驗思索を除いてはこれといった外的の經歷なし。昨年「改造」に入選。「一端社」洋畫會同人。「死なす」「散らばつてゐる眼」等の作品あり。（東京市牛込區天神町二五青木方）

高濱虛子（本名。淸）

明治七年二月二十二日、松山市に生る。伊豫尋常中學より京都三高に入り、二高に轉じ中途退學。正岡子規に就いて俳句を學び、明治三十一年『ホトトギス』を創刊し今日に及ぶ。「俳諧師」をはじめ多くの小說寫生文、俳句の述作あり。最近「句集虛子」隨筆集「一二片」の著あり。（神奈川縣鎌倉町材木座上向原一、二七八）

高村光太郎

明治十六年三月、東京市下谷區西町に生る。東京美術學校彫刻科卒業（明治三十五年）後、紐育、倫敦、巴里等を遍歷。明治四十三年歸國、爾來東京に在り。最近著書に「ロダン」小傳、現代詩人全集中「高村光太郎集」あり。（東京市本鄕區駒込林町二五）

高群逸枝

明治二十七年一月十八日熊本縣豐川村に生る。熊本女子師範、熊本女學校中途退學。現在無產婦人藝術聯盟所屬。最近「戀愛創生」（戀愛論）「黑い女」（小說集）の著あり。（東京市外上荻窪二一六九）

高安月郊（本名。三郎）

明治二年二月十六日、大阪に生る。獨學、十三から鄕を出て東京、京都に轉住幾度、十二年歸鄕、また蘆屋に移り、十五年歸東。二十一から創作、今に止めず。最近著書に

「日本文藝近代史」あり。（東京市本鄉區駒込西片町一〇にノ二）

瀧井孝作

明治二十七年四月四日、飛騨國高山町に生る。學歴と云ふ程のものなし。大正四年より七年まで『海紅』の編輯を助く。その後『時事新報』『改造』等に記者をした事あり。「無限抱擁」「妹の問題」「良人の貞操」「瀧井孝作集」等の創作集あり。（八王子市子安町四七）

武田麟太郎

明治三十七年五月九日、大阪市南區に生る。大阪府今宮中學―京都第三高等學校―東大中途退學。現在日本プロレタリア作家同盟所屬。短篇集「暴力」「反逆の呂律」の著あり。（東京市麹町區內幸町南興ビル映畫往來社氣付）

武野藤介（本名。眞藤太）

明治三十二年四月、岡山市萬成町に生る。岡山一中、早大露文科中途退學。中央新聞記者たりしことあり。著書「文士の裏面側面」あり。（東京市外杉並町阿佐ケ谷天沼四六九）

武林無想庵（本名。盛一）

明治十三年二月北海道札幌に生る。東京帝大文科卒業。フランスに渡ること數度。多くの翻譯、小說、隨筆あり。最近「飢渴通信」「耶蘇」（バルビュス）等の著あり。

太宰施門

明治二十二年四月一日岡山縣兒島郡小田村柳田に生る。大正二年七月東京帝國大學文科大學卒業佛文學專修。大正七年四月任第一高等學校教授、大年八年佛國及瑞西國へ留學、大正十年十月任京都帝國大學助教授大正十二年二月歸朝。「ロマンチック時代」「伊太利紀行」等の著あり。（京都市上京區竹屋町通大宮西入ル）

辰野隆（ユタカ）

明治二十一年三月東京赤坂に生る。東京帝大佛文科並に佛法科卒業。慶應、早稻田、法政に講師たりしことあり。現在東京帝大佛文科助教授。「ボオドレエル研究序論」等の著あり。（東京市外上目黑駒場九二八）

立野信之

明治三十六年十月十七日、千葉縣五井町に生る。東京中學に學びたるも中途退學、鄉里に歸り鍬を持つ傍ら文學に親しむ。「軍隊病」「情報」等の著あり。（東京市外杉並町成宗五四）

田中貢太郎

明治十三年三月二日、高知縣長岡郡三里村仁井田に生る。鄉里の高等小學校を中途にて退學したる後は獨學、船大工となり、小學教員となり、田舍新聞の記者となり、明治三十六年上京してより大町桂月の門に遊ぶ。「怪談全集」二册、「奇談全集」二册、「旋風時代」（初編上卷）はその近業なり。（東京府荏原郡碑衾町碑文谷一、三六七）

田邊耕一郎

明治三十六年十一月三日、廣島縣甲立町に生る。中學中途退學、上京後『若草』の編輯四年。その間『イスクラ』のグループに入り、一九二九年三月以來日本プロレタリア作家同盟に加盟す。また雜誌『プロレタリア文學』を編輯したが、今は機關誌『ナップ』の編輯に携つてゐる。「シベリヤ」「飼馴らされた狼」「飢餓」等の小說の外多くの評論がある。（東京府下中野町千光前二九五（塙發方））

谷川徹三

明治二十八年五月二十六日、愛知縣常滑町に生る。一高を經て京都帝大哲學科卒業。法政大學文學部教授「感傷と反省」「生活・哲學・藝術」「享受と批評」の論文集の他譯書二三あり。（東京市外阿佐ケ谷小山六〇）

谷崎潤一郎

明治十九年七月二十四日、東京日本橋區蠣殻町に生る。府立一中、一高、東京帝大國文科半途退學。大正活映株式會社の脚本部顧問たりしことあり。支那に遊ぶこと兩度。最近長篇小說「卍（まんじ）」「蓼喰ふ蟲」「亂菊物語」隨筆集「饒舌錄」等を著し、又「谷崎潤一郎全集」刊行中。（兵庫縣武庫郡本山村岡本）

谷崎精二

明治廿三年十二月十九日、東京日本橋區蠣殻町に生る。早稻田大學英文科卒業。現に同大學助教授。最近著書に現代長篇小說全集中の「谷崎精二篇」あり。（東京市牛込區喜久井町二一）

谷讓次（本名。長谷川海太郎）

林不忘、牧逸馬の別名あり。曾てアメリカに遊び最近再び、歐洲を巡歷して歸る。「テキサス無宿」をはじめアメリカに材を取れるもの多く、「大岡政談」「踊る地平線」「浴槽の花嫁」「この太陽」等多くの著作あり。（神奈川縣鎌倉町塔の辻）

中條百合子

明治三十二年二月十三日東京市小石川區原町に生る。本鄉誠之小學校、御茶の水高等女學校卒業。曾て米國に遊學せしことあり、昭和三年より露西亞をはじめ歐洲諸國に遊び、同五年十一月歸朝「伸子」の他「モスクヷ印象記」「赤い貨車」「ロンドン一九二九年」「子供・子供・子供のモスクヷ」等は滯歐中の作。（東京市本鄉區駒込林町二一）

近松秋江（本名。德田浩司）

明治九年五月五日、岡山縣和氣郡藤野村に生る。岡山縣立中學、慶應義塾、國民英學會、二松學舍等に學び、のち早大の前身東京專門學校英文科卒業。「中學世界」「早稻田文學」を編輯したることあり。四十三年小說「別れた妻に送る手紙」を發表して以來「疑惑」「舞鶴心中」「黑髮」等多くの創作、及び隨筆評論がある。「近松秋江集」（現代日本文學全集）「新選近松秋江集」「カチユウシヤ」（飜譯）等の近著がある。（東京府下中野町上の原九五四）

茅野蕭々（本名。儀太郎）

明治十六年三月、長野縣上諏訪町に生る。東京帝大獨文科卒業。第三高等學校教授、後慶應義塾大學教授となり今日に及ぶ。歐洲に留學。飜譯紹介、詩歌の作多し。（東京市芝區三田綱町一）

茅野雅子

明治二十三年大阪に生る。日本女子大學卒業。四十年茅野蕭々氏に嫁す。歌集「戀衣」「金砂集」のほか、短篇小說童話等の作あり、曾て歐洲に遊んだ。（東京市芝區三田綱町一）

千葉龜雄

明治十一年九月廿四日、山形縣酒田に生る。（原籍宮城縣遠田郡不動堂村）仙臺第一中學半途退學、早稻田大學地歷科に半年在學、國民英學會卒業。「文庫」「日本及日本人」記者「日本」「國民」「時事」「讀賣」の各社會部長「讀賣」編輯長より「大阪每日」編輯顧問東京在任として今日に至る。文部省臨時國語調査委員、立教大學講師。飜譯、紹介、評論多し。（東京府下大井町かのえ塚四八四二）

塚原健二郎

明治廿八年二月十六日、長野縣埴科郡東條村に生る。學歷特記するほどのもの無し。幼にして放浪す。後、新聞雜誌等の記者たりしことあり、中央公論に處女作を發表す。（東京市外吉祥寺町野田北七五八）

辻潤

明治十八年十月四日東京淺草御藏前片町に生る。東京神田私立國民英學會出身。教師

をしたことがある。フランスに遊び昭和四年歸る。最近著書「絶望の書」（東京市外荏原町中延一〇八九）

土井晩翠（本名。林吉）

明治四年十月二十三日、仙臺に生る。立町小學校より仙臺英學塾（故齋藤秀三郎校長）を經て第二高等學校、東京帝大英文科卒業。續いて英佛獨伊を周遊すること三ケ年半。最近著書に「グラーフ、ツエッペリン讃」「野口英世詩傳」あり。（仙臺市本荒町二二）

土田耕平

明治二十八年六月一日、長野縣上諏訪町大和に生る。四十五年より歌を故島木赤彦に學ぶ。爾來『アララギ』の一員。歌集「青杉」あり。（奈良縣郡山町上箕山）

土田杏村（本名。茂）

明治二十四年一月十五日新潟縣佐渡に生る。大正四年東京高師博物學部卒業、同七年京都帝大文學部哲學科卒業。最近著書「國文學の哲學的研究」第一、第二、第三卷「文學論」「戀愛論」「マルキシズム批判」「文明は何處へ行く」『思想問題』「人生論」等あり。（京都市上京區新町頭）

土屋文明

明治廿四年一月廿一日、群馬縣群馬郡上郊村に生る。東京帝國大學文科卒業、高等女學校教員校長等を勤めしことあり、現在は法政大學豫科教師。歌を伊藤左千夫に學び雜誌『アララギ』編輯同人たり。（東京市赤坂區青山南町六ノ三三）

雅川滉（ツネカワヒロシ）

明治卅九年二月廿五日東京に生る。一高を經て帝大國文科卒業、『新思潮』『文藝都市』の同人たりしことあり。「藝術派宣言」其他若干の文藝評論及び小說あり。（東京市麴町區下六番町一七成瀨方）

壺井繁治

明治卅一年十月香川縣小豆島に生る。早大文科途中退學。『赤と黑』『文藝解放』『左翼藝術』を經て目下日本プロレタリア作家同盟員及び戰旗社員（東京府下代々木初臺六一八）

坪内雄藏（號。逍遙）

安政六年五月廿二日岐阜縣加茂郡太田町（當時尾張藩代官所々在地）明治十六年東京大學政治經濟科（文學部）卒業、同年より早稻田大學教師（當時私立專門學校）同三十二年文學博士に推薦さる。同三十五年早稻田中學校長となる。同三十八年文藝協會を起す、大正三年同會を解散す。同四年早大教授を辭す。以上の年間始終傍ら著述に從事す。最近「良寬と子守其他」の著あり。（本宅、東京市牛込區余丁町一一四。別宅、伊豆熱海）

坪田讓治

明治二十三年岡山縣御津郡に生る。大正四年早大英文科卒業。早大圖書館に一寸勤め、大正八年より十三年迄兄の經營せる島田製織所大阪支店支配人、その後文筆生活。「激流を渡る」（長篇）の新著あり。（東京市外高田町狐塚八六六）

津村京村（本名。京太郎）

明治二十六年、兵庫縣明石町に生る。鄕里の小學校を出た。雜誌『文壇』及び『人と藝術』の編輯に從事せし事あり。最近著書長篇「結婚地獄」及び戲曲集「死の接吻」「戰國異風心中」の三冊あり。（東京市外代々木初臺六〇三）

鶴田知也

明治卅五年二月十九日、小倉市大阪町に生る。豐津中學卒業、東京神學社神學校中途退學。現在『文藝戰線』同人。（東京市外杉並町天沼一七四）

土居光知

明治十九年八月二十九日、高知縣長岡郡十

市村に生る。高知海南學校、第三高等學校東大英文科卒業。大正十一年米、英、佛に留學、大正十三年歸朝。東北帝國大學教授に任ぜられ英文學科擔任。「文學序說」の著あり。（仙臺市北一番丁二八）

戸川秋骨（本名。明三）
明治三年十二月十八日、熊本縣玉名郡岩崎村に生る。明治學院、東京帝國大學英文科選科出身。「文鳥」「凡人崇拜」小泉八雲全集中の「神國日本」の著あり。（東京市外井荻町下荻窪三七一）

戸川貞雄
明治廿七年十二月廿五日、東京市に生る。早稻田大學英文科卒業後雜誌記者三年を經て現在に及ぶ。最近著書に長篇小說「女性の復讐」あり。（神奈川縣平塚町新宿一、五〇四）

土岐善麿（號。哀果）
明治十八年六月八日東京淺草區松淸町に生る。早稻田大學英文學科卒業。讀賣新聞記者を經て、現在、東京朝日新聞調査部に勤む。最近著書に歌集「土岐善麿集」隨筆集「外遊心境」「柚子の種」等あり。（東京市外下目黑八〇四）

徳田秋聲（本名。末雄）
明治四年十二月、金澤市横山町に生る。四高を中途退學して上京、故尾崎紅葉の門に入る。小說の作多く「黴」「爛」「あらくれ」をはじめとして、最近では現代日本文學全集中の「徳田秋聲集」及び「新選徳田秋聲集」の著あり。（東京市本郷區森川町一）

徳富猪一郎（號。蘇峰）
文久三年一月廿五日熊本縣上益城郡杉堂村矢島直方（母堂實家）方に生る。幼時家學を受く、兼坂止水の塾に學ぶ。熊本洋學校に學ぶ、同志社に學ぶ、大江義塾を創設す。明治二十年『國民之友』を發刊、二十三年『國民新聞』を發刊し、社長兼主筆として昭和四年一月に至る。四月より大每東日の社賓として兩紙に執筆、現に民友社長貴族院議員、帝國學士院會員たり。明治二十年來の著書、眞に等身以上、近世日本國民史は既刊三十四册、以下續刊、「國民小訓」「昭和一新論」「蘇峰叢書」十二册、其他近著頗る多し。（東京府荏原郡入新井町新井宿二、八三二）

徳永直
明治卅二年一月廿日熊本市に生る。尋常小學卒、印刷工、電氣工、新聞記者等――大正八年より勞働運動に入り、大正十三年博文館爭議、同十五年共印爭議關係――出版從業員組合、關東出版勞働組合其他の創立に關係、關東消費組合聯盟博文館共働社、生產組合共働印刷所の創立等――現在ナップ所屬。長編第一部（太陽のない街）同第二部（失業都市東京）短篇集（能率委員會）同（小資本家）同（約束手形三千八百圓也）等あり。（東京市外西巣鴨町宮仲二五〇〇）

富田碎花（本名。戒治郎）
明治二十三年十一月岩手縣盛岡市に生る。日本大學植民科出身。支那本部及滿蒙を旅すること前後數回。詩集「末日頌」「地の子」「時代の手」「登高行」「手招く者」譯詩集カアペンタア「民主々義の方へ」ホヰットマン「草の葉」その他愛蘭土文學に類するモノグラフ。（兵庫縣武庫郡茶屋鷹屋）

外山卯三郎
明治三十六年一月二十五日和歌山縣南部町に生る。北海道帝大豫科農學部、京都帝大哲學科出身。「詩學概論」「現代美術論集」「造型美術概論」「二十世紀繪畫大觀」。尙「藝術學研究」と「新洋畫研究」を主宰す。（東京市外井荻町下井草一一〇一）

豐島與志雄

明治二十三年十一月二十七日福岡縣朝倉郡福田村に生る。東京帝國大學佛文學科卒業。法政大學敎授兼東京帝國大學文學部講師たり。小說飜譯など多く、最近の著書に「新選豐島與志雄集」あり。（東京市本郷區千駄木町五七）

內藤濯

明治十六年七月七日、熊本市に生る。第一高等學校を經て、明治四十三年東京帝國大學佛蘭西文學科卒業。陸軍中央幼年學校に奉職十年、大正九年第一高等學校敎授、同十一年より十三年まで佛蘭西に留學。昭和三年春、東京商科大學に轉じ同時に一高講師を兼ぬ。嘗つて『六合雜誌』『帝國文學』、等の編輯を分擔せる事あり。最近ヴィルドラック「ミシェル・オオクレエル」「ベリアル夫人」モリエール「人間ぎらひ」「女學者の群」「氣で病む男」ブランデス「佛蘭西浪漫派」等の譯書あり。（東京市外大森不入斗二六七）

內藤辰雄（本名。惠吉）

明治二十六年二月岡山縣淺口郡河內村に生る。岡山商業學校中途退學、小說家たらんとして沖人夫其他の勞働の經驗あり。五六十の短篇小說と文學評論を發表。長篇小說「空に指して語る」「新興文學全集」に集めた五つの短篇あり。（東京府下西巢鴨町宮仲二六七一）

直木三十五（本名。植村宗一）

明治二十四年二月十二日、大阪市に生る。早大文科中途退學、藥劑師會書記、美術記者、出版屋、雜誌『人間』『苦樂』編輯者なりしことあり。大衆文藝の作多く、最近著書に「風流殺法陣」「荒木又右衞門」「南國太平記」（執筆中）あり。（東京京橋區木挽町八ノ一）

永井荷風（本名。壯吉）

明治十二年十二月三日、東京小石川金富町に生る。東京英語學校、高師附屬中學を經て外國語學校支那語科に學ぶ。明治三十六年渡米同四十一年歸朝まで米、佛各地に遊び、其間公使館員、銀行員をしたことがある。同四十三年慶應義塾文科敎員となり『三田文學』に力を注ぎ大正五年敎授を退き『三田文學』編輯からも退く。あめりか物語「ふらんす物語」「すみだ川」「おかめ笹」等を始め小說の作頗る多く、「荷風全集」「永井荷風集」「新選永井荷風集」等に收めらる。（東京市麻布區市兵衞町一ノ六）

永井龍男

明治卅七年五月十日、東京市神田區猿樂町に生る。『文學』同人。（東京市麴町區內幸町虎ノ門アパート六ノ六七）

中河與一

明治三十年二月二十八日、香川縣坂出町に生る。早稻田大學中途退學。京都の小學にて數學の敎授をせし事あり。最近著書に「恐ろしき私」「形式主義藝術論」「R汽船の壯圖」あり。（東京市外千歲村下祖師谷）

中勘助

明治十八年五月二十二日、東京神田に生る。東大文科卒業。最近著書「銀の匙」（神奈川縣平塚）

仲木貞一

明治十九年九月十一日、宮城縣仙臺市に生る。（事實は同年二月十一日石川縣金澤市生れ）早稻田大學英文科卒業。讀賣新聞、中央新聞記者、『新家庭』編輯主任。新國劇座附作者。松竹合名社作者、撮影監督、文部省社會敎育調査委員。女學校敎師等。現在日本大學文學部講師、東京中央放送局社會敎育課長。最近著書「ナポレオン傳」（東京府北豐島郡岩淵町大字稻付一、二〇三）

長田秀雄

明治十八年五月十三日、東京市神田區表神

保町に生る。獨逸協會中學卒業後獨學。戲曲集多く、最近著書に、戲曲集「石山開城記」現代日本文學全集、現代戲曲全集その他。(東京牛込區横寺町五九)

長田幹彥

明治二十年三月一日、東京市麹町區九段坂上に生る。麹町區富士見小學校、東京高等師範附屬中學校、早稻田大學英文學科卒業。最近著書に「現代日本文學全集長田幹彥集」「女優部屋」「明治大正文學全集長田幹彥篇」「長篇小說全集」「新選長田幹彥集」「緣の處女」あり。(東京市牛込區中町二八)

中戸川吉二

明治二十九年五月二十日、北海道釧路市に生る。東京市立誠之小學校卒業、開成中學校をへて明治大學半途退學。雜誌『隨筆』を經營せしことあり。「イボタの蟲」「反射する心」「緣なき衆生」「友情」「青春」「北村十吉」「中戸川吉二選集」の七著あり。(東京市麹町區富士見町二ノ二九)

中塚一碧樓 (本名。直三)

明治二十年秋、備中玉島港に生る。早大に遊び、後、俳誌『海紅』編輯、發行、現在に至る。最近著書に、句集「多摩川」あり。(東京市外駒澤町新町九〇)

中西伊之助

明治二十六年二月七日、京都府宇治に生る。小學校卒業後學歷なく諸種の筋肉運動に從事す。東京交通勞働組合理事長當時電車罷業の主謀者として入獄せしことあり。現在はそれらより離れ小說執筆中。最近著作に「國と人民」「春扉は叩く」「旗幟を行く」等々其他數種あり。(東京府下淀橋町柏木六五六)

中西悟堂

明治二十八年十一月十六日。金澤市長町に生る。京橋區文海小學校、天台宗中學、曹洞宗學林、並びに二三の專門大學修了後、住職及び新聞記者を勤め、また比叡山天台宗宗務廳に在ったこともある。嘗て一二の同人雜誌を刊行し、現に雜誌『闊葉樹』を自ら經營してゐる。數卷の詩集のほか「啄木傳」「芭蕉傳」武藏野隨筆集「藁家と花」等の著がある。(東京市外井荻町上井草一、二六七)

中野重治

明治三十五年一月、福井縣坂井郡高椋村一本田に生る。東京帝國大學獨文科卒業日本プロレタリア藝術聯盟を經て現在日本プロレタリア作家同盟員。最近著書に、論文集「藝術に關する走り書的覺え書」小說集「鐵の話」「夜明け前のさよなら」あり。(東京市外瀧野川町田端四四五)

中原綾子

明治三十一年二月十六日、長崎市に生る。作歌多く、「眞珠貝」等の歌集がある。(東京市外下澁谷七一七)

中村吉藏

明治十年五月十五日、石見國津和野町に生る。早大英文、哲學科卒業、米國プリンストン大學、コロンビヤ大學修業、新劇運動に從ひ藝術座に關係後、劇作に從事す。早大文學部に古典劇、近代劇等擔任。最近著書に、戲曲集「豫言者日蓮」改造文庫「イブセン全集」あり。(東京市外西巢鴨町宮仲一九六九)

中村憲吉

明治二十二年一月二十五日、廣島縣雙三郡布野村上布野に生る。大正四年、東京帝國大學法科大學經濟學科を卒業し、一時大阪每日新聞社經濟部記者たりし事あり。後歸鄉して農林業に從ひ、鐵道會社に關係す。歌を伊藤左千夫に學び、アララギ同人たり。歌集「馬鈴薯の花」「林泉集」「しがらみ」等あり。最近著書、改造社版現代短歌

全集第十五卷「中村憲吉集」(廣島縣双三郡布野村上布野)

中村星湖（本名。將雄）

明治十七年二月、山梨縣南都留郡河口村に生る。同四十年早大文科卒業。小説「少年行」を發表して以來多くの創作集と、「ボヷリイ夫人」その他の飜譯がある。昭和三年五月渡佛、四年六月歸朝。(東京府下井荻町上井草一四五六)

中村白葉（本名。長三郎）

明治二十三年十一月二十三日、名古屋市に生る。東京外國語學校露語科卒業。『露西亞文學』『中央文學』の編輯、鐵道官吏、オムスク政府通報局囑託などをした。「罪と罰」「アンナカレニナ」等を初め、ロシヤ文學の飜譯紹介多し。現在日本電報通信社員。(東京市外駒澤新町四三一)

中村正常

明治三十四年十一月六日、現住所に生る。本郷區誠之小學校。同京北中學校。第七高等學校。爾來岸田國士氏につきて學ぶ。最近著書に、戯曲集「隕石の寢床」戯曲集「ボア吉の求婚」あり。(東京市小石川區指ケ谷町五七)

中村武羅夫

明治十九年十月四日、北海道空知郡岩見澤町に生る。獨學。上京以前三ケ年ばかり小學校教員の職を務めたることあり。明治四十年頃より新潮社編輯部に勤務、今日に至る。最近著書に、三人長篇小説全集「地靈」「青春」「靜かなる曙」評論集「誰だ？花園を荒す者は！」あり。(相州藤澤町辻堂海岸)

中本たか子

明治三十六年十一月十九日、山口縣豐浦郡角島村に生る。山口高女を卒業して下關、山口で四年間小學教師。昭和二年上京。「新聞紙が作つた海峽」の小説を發表して認めらる。著作集に「朝の無禮」「恐慌」「鬪ひ」がある。

長與善郎

明治廿一年八月六日、東京麻布宮村町六七に生る。麻布南山小學校から學習院に轉じ中等高等科を卒業帝大英文科に入り明治四十五年中途退學。曾て『白樺』同人たり。小説、戯曲の作多く、最近著書に、「一人旅する者」(感想隨筆集)あり。(東京市麻布區飯倉三ノ一五)

楢崎勤

明治三十四年十一月七日、山口縣萩に生る。新潮社々員、『新潮』の編輯に從ふ。最近著作に、「神聖な裸婦」「相川マユミといふ女」あり。(東京市赤坂區表町二ノ一〇)

成瀬無極（本名。清）

明治十七年一月一日、東京に生る。第一高等學校東大獨文科卒業。文學博士。慶應大學豫科講師、第三高等學校教授、京大教授。大正十年渡歐留學し十二年末歸朝。戯曲、小説の他、獨逸文學研究論評あり。「疾風怒濤時代と現代獨逸文學」はその最近著。(京都市中京區室町丸太町下る)

南部修太郎

明治二十五年十月十二日、仙臺市に生る。長崎市にて小學校課程の大半を過し、明治四十四年三月芝中學校卒業、大正六年三月慶應義塾大學文科卒業、同年四月より九年三月まで『三田文學』の編輯に從ふ。十一年八月より十月にかけて滿洲より南北支那を巡遊す。最近著書に「南部修太郎集」あり。(東京麻布區新龍土町一二)

新居格

明治廿一年三月、德島縣撫養町に生る。大正四年東大政治科を卒へて讀賣、大阪每日東京朝日等の新聞記者たりしが、これをやめて以來ずつと著述に從ふ。月夜の喫煙

「季節の登場者」「近代心の解剖」その他の小說集、隨筆集評論集あり。最近譯書にアンドン・マルロウの「熱風」がある。（東京市外杉並町高圓寺八一一）

西宮藤朝

明治二十四年十二月七日、秋田縣仙北郡角館町に生る。早稻田大學英文科卒業。後美學及哲學の研究に入り、早稻田大學及び立正大學講師となりて美學及哲學を講じて今日に到る。ブウトルウの「自然法の偶然性」の譯ギュヨオの「義務と制裁無き道德」の譯クロオチエの「史的唯物論とマルクス經濟學」の譯、等がある。（東京市外池袋本村二七三）

西村陽吉（本名。辰五郎）

明治二十年四月九日、東京に生る。小學校以外定まりたる學歷なし。文學書肆としての東雲堂を經營し、現在も出版業に從事す短歌雜誌『藝術と自由』主宰。最近著書に「歌と人石川啄木」あり。（橫濱市鶴見區鶴見町一四二一）

西脇順三郎

明治二十七年一月二十日、新潟縣小千谷町に生る。慶應義塾大學、オックスフォード大學等に學ぶ。「超現實主義詩論」「Spectrum」の近著あり。慶大文學部敎授。（東京麻布區富士見町四五）

額田六福

明治廿三年十月二日、岡山縣勝田郡勝間田町に生る。大正九年早大英文科卒業。職業的經歷なし。多くの戲曲と、大衆文藝がある。演劇雜誌『舞臺』編輯。（東京市外杉並町阿佐ケ谷二八九）

野上豐一郎（號。臼川）

明治十六年九月十四日、大分縣臼杵町に生る。東京帝國大學文科大學英文科出身。法政大學敎授。最近著書に「能、研究と發見」「聖ヂョウン」（翻譯）あり。（東京市外日暮里渡邊町一、〇四〇）

野上彌生子

明治十八年五月六日、大分縣臼杵町に生る。明治女學校卒業。「新しき生命」のほか小說、戲曲等多し。最近著書に「人間創造」「小さき生きもの」及び長篇「眞知子」あり。（東京市外日暮里渡邊町一、〇四〇）

野口雨情（本名。英吉）

明治十五年十二月、茨城縣磯原町に生る。東京專門學校出身。曾ては、東京日日新聞社、日本ビクター蓄音器會社等の囑託となる。民謠の作多く、最近著書に、民謠集「波浮の港」あり。（東京府下、武藏野町吉祥寺七八七）

野口米次郎

明治八年十二月八日、愛知縣津島町に生る。明治二十六年秋渡米前に於ける學歷は慶應義塾に學べるのみ。渡米後彼地の學窓を覗く。詩人ミラーと相知るに至つて、詩の道自然に開け、遂に文筆を以て世に立つに至る。在米十三年にして歸朝し、母校慶應大學に敎授となる。その後二度英國米國を訪れ、最近著書に「ブラウニング譯詩集」「鈴木春信」「葛飾北齋」あり。（東京市外中野町字上原八六五）

昇曙夢（本名。直隆）

明治十一年七月十七日、鹿兒島縣大島郡實久村に生る。鄉里の小學校を卒へ、明治二十八年上京、正敎傳道學校に學び、翌年正敎神學校に入學、三十六年卒業、直ちに同校講師となり、大正元年陸軍中央幼年學校講師、同四年早大講師、同五年陸軍敎授に任命、陸軍士官學校附に補せられた。同六年外國語高等試驗委員拜命、同十一年日大講師となり今日に及んでゐる。昭和三年秋トルストイ誕生百年祭に招待されたのを併せて露國に遊ぶこと前後四回、多くの飜譯

及び著書がある。最近著書（昭和四年以後の主なる飜譯）小説「トラストD・E」「フオマ・ゴルデーエフ」戯曲「人の一生」「毆られる彼奴」「森の秘密」「熊の結婚」「ミステリヤ・ブッフ」「リユボーウイ・ヤロリーヤ」「宣告」「反響」評論「マルクス主義藝術論」「マルクス主義批評論」「藝術社會學」等。（神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎五二七）

灰野庄平

明治二十年四月十四日、新潟縣刈羽郡吉井村に生る。明治四十四年東京帝國大學文科大學哲學科（美學專攻）卒業。其後五箇年間大學院に在學。現在日本大學にて日本演劇史講座擔任。昭和五年五月近代劇全集第二十六卷愛蘭土篇中四篇飜譯、同十月近代劇全集第四十二卷英國篇中二篇飜譯。（東京市小石川區大塚坂下町七九）

萩原朔太郎

明治二十一年、前橋市北曲輪町に生る。第六高等學校中途退學。詩集「月に吠える」「萩原朔太郎詩集」の外、最近著に「詩の原理」「虚妄の正義」あり。（前橋市北曲輪町七ノ一）

萩原蘿月（本名。芳之助）

明治十七年五月五日、横濱に生る。初め鳴雪、虚子につきて俳句を學び「ホトトギス」に寄稿。獨逸協會中學を卒へて帝大國文科に入り卒業後中學教師として各地を轉々。大正九年帝大文學部副手となり俳諧の創作に專念今日に至る。女子大學、慶應義塾、二松學舍等の講師たり。（東京小石川區大塚坂下町七二）

土師（ハジ）清二（本名。赤松靜太）

明治二十六年九月十四日、岡山縣邑久郡國府村福里に生る。十一歳より十九歳まで吳服店、荒物店、活版用具商、一膳飯屋等に雇はれ、十九歳上京、石川半山に師事。二十一歳岡山市中國民報社に入り、大阪時事を經て大阪朝日記者となり「週刊朝日」の創刊ありて編輯を擔當。三十四歳の夏退社して作家生活に入る。最近著書に、土師清二集二冊（現代大衆文學全集）「血けむり伊吹颪」「旅烏國定忠治」「水野十郎左衛門」等あり。（東京市小石川區水道端二ノ六四）

橋田東聲（本名。丑吾（ウシゴ））

明治十九年十二月二十日、高知縣幡多郡中筋村有岡に生る。第七高等學校をへて大正二年東京帝大法科經濟學科を卒業。かつて東京日日新聞記者、農商務省囑託、法政大學講師たりしことあり。現在日本大學、明治大學、智山專門學校講師を兼ぬ。歌集「地懷」論文集「自然と韻律」「正岡子規全傳」「土の人長塚節」「子規と節と左千夫」「萬葉集傑作選」「靜夜歌話」「現代名歌選」「萬葉女人歌集」「農業倉庫論」「農村讀本」譯本「君主論」等の著あり。（東京府下大森八景坂二二九四）

橋本英吉

明治三十一年十一月一日、福岡縣井田町に生る。小學校卒業後十七歳の時、九州三井田川鑛業所に入る。そこに約八年間坑夫。大正九年上京、共同印刷職工となり、爭議で馘首され、後に文藝春秋社に入り、そこを止めて、目下文筆稼業。現在「ナップ」の作家同盟員。著書に「炭坑」「市街戰」「勞働市場」あり。（東京本所區猿江裏町九五）

長谷川かな女

明治二十年十月、東京日本橋區本石町に生る。明治四十一二年頃より俳句を作り始め、大正二年夫君零餘子が「枯野」を發行してより同誌に句を寄す。零餘子歿後、同誌が「ぬかご」と改題、零餘子雜詠選の後を繼ぐ。句集「龍膽」あり。（埼玉縣浦和町岸區東町）

長谷川時雨（本名。康子）

明治十二年、東京市日本橋に生る。三上於菟吉氏夫人。坪内逍遙氏に師事した。曾て尾上菊五郎と共に狂言座を創設し、また舞踊研究會を起したことがある。戯曲集「櫻ふぶき」「情熱の女」「時雨脚本集」(第一卷)のほかに長篇小說「處女時代」「美人傳」(二部)などの著作がある。現に雜誌『女人藝術』を主宰す。(東京市牛込區市ケ谷左内町三一)

長谷川伸　(本名。伸二郎)

明治十七年三月十五日、横濱市に生る。小學校中途退學。數種の職業を經て現在都新聞記者。最近著書に戯曲集「掛商倉」「關の彌太ッペ」及び「紅蝙蝠」あり。(東京市外大崎町桐ケ谷八二九)

長谷川誠也　(號。天溪)

明治九年十二月三日、新潟縣刈羽郡高濱町に生る。早稻田大學前身の東京專門學校文學科卒業(明治三十年)それ以來昭和二年末迄博文館編輯部員。目下著述業。臨時國語調査會委員、曾て早大文科の教授であつたこともある。最近著書に「文藝思潮論」「文藝と心理分析」あり。(東京府下大崎町七八九)

長谷川　如是閑　(本名。萬次郎)

明治八年十一月、東京市深川に生る。明治三十一年東京法學院(中央大學)卒業。大阪朝日に入り、大正七年退社。雜誌『我等』を創刊主宰し、本年同誌を『批判』と改題引續き主幹たり。論文、社會評論、隨筆等極めて多く、外に創作集數篇あり。最近著作に「歷史を捻ぢる」「現代日本文學全集の「長谷川如是閑集」あり。(東京市外中野町上ノ原九三七)

畑　耕一

明治廿五年五月、廣島市堀川町に生る。大阪高商豫科卒業、八高工科中途退學、一高文科より東京帝大英文科を大正八年卒業。東京日日新聞學藝部へ勤務。大正十三年六月退社後松竹キネマ蒲田撮影所研究所長企畫部長。明大、日大講師。最近著書に「一幀の樂園」「陽氣な喇叭卒」「戀人の祭壇」等あり。(東京本郷元町、文化アパートメント内)

秦　豐吉　(別名。丸木砂土)

明治廿五年一月十四日、東京日本橋に生る。一高を經て、帝大法科卒業、直ちに三菱商事株式會社に入り現在に至る。多くの隨筆があり、最近著書に、「西部戰線異狀なし」の翻譯、「トンネル」の翻譯の他最近創作「東京の女王」を發表。(東京市外大森山王二七八一)

花田比露志

明治十五年三月十一日、福岡縣朝倉郡安川村に生る。五高を卒へ一年間桑港、アラスカに遊び、歸つて京都帝大法科に入る。卒業後大阪朝日、大正日日、讀賣等に勤め、目下大阪商科大學學生監兼教授たり。歌は正岡子規の遺風を慕ひ、歌集「さんげ」の外『あけび』主宰。

馬場勝彌　(號。孤蝶)

明治二年十一月九日、高知縣高知市に生る。明治二十四年明治學院卒業。自明治二十八年至明治三十年中學教師。自三十年至三十九年日本銀行員。自三十九年至昭和五年四月慶應義塾大學部講師。現今勤先なし。最近譯書に「オリヴア・ツイスト」あり。(東京市小石川區水道端二の一八)

濱尾四郎

明治二十九年四月廿四日、東京に生る。東京高師附中、第一高等學校獨法科を經、東大法科を卒業。(大正十二年)同年司法官試補となり同十四年檢事となる。昭和三年まで東京地方裁判所、並に區裁判所檢事、同年退職、辯護士となる。最近著書に「殺人小說集」あり。(東京市四谷區左門町三〇)

濱田廣介

明治二十六年五月二十五日、山形縣東置賜郡屋代村に生る。縣立米澤中學を經て早稻田大學英文科卒業。在學中より兒童文學に志し、爾來專ら童話童謠の作家として今日に及ぶ。最近著書に「キリスト物語」あり。（東京府東調布町下沼部六六三）

早坂二郎

明治三十年九月三十日、宮城縣仙臺市に生る。大正十年東京帝大法學部政治學科卒業。東京朝日、國民、東京毎夕記者たりしことあり。最近著書に、ユーゴー「九十三年」シンクレーア「眞鍮の貞操切符」「現代人の生活戰術」「百%愛國者」の飜譯、「歷史を創る人々」「庶民金融」あり。（東京府下吉祥寺綠ヶ丘五二四）

林久男（號。鷗南）

長野縣埴科郡坂城町に生る。第一高等學校東京帝國大學獨逸文學科卒業（明治四十一年）第七高等學校、第二高等學校教授を經て第三高等學校教授。大正十一年より獨逸文學研究の爲獨逸に留學、佛蘭西、英吉利等に轉學、同十三年歸朝。劇文學を研究し、外國劇の紹介につとめ又戲曲の創作數篇あり。ゲーテ、シルレルを始め獨逸文學の飜譯多く、隨筆、小品、評論等の著書數種あり。最近著書に「藝術より生活へ」現代劇集「狼火」「ギルヘルムマイスター」（譯）「藝術國巡禮」「ゲーテの面影」あり。（京都市下鴨下川原町四六）

林房雄（本名。後藤壽夫）

明治三十六年五月三十日、大分縣大分町に生る。東京帝大法科中途退學。全日本無産者藝術團體協議會作家同盟員。本年七月より學生事件にて二ケ年受刑中。最近著書に創作集「都會双曲線」「鐵窓の花」「新選林房雄集」新銳文學叢書「海と飛魚の子と」評論隨筆集「都會の論理」あり。（東京市外杉並町高圓寺四一二）

林芙美子

明治三十七年十二月卅一日、山口縣下關市にて生る。廣島縣尾道市高等女學校卒業の外學歷なし。株屋の店員・牛屋の女中・事務員、集金掛り・女給・轉々無數の職業につく。著書に、「蒼馬を見たり」「放浪記」「續放浪記」あり。（東京市外上落合八五〇）

林和（ヤワラ）

明治二十年八月二十八日、千葉縣小見川町大利根の沿岸に生る。早稻田大學文科出身。坪内博士を會長とする舊文藝協會演劇研究所第一回卒業。後ち守田勘彌、市川猿之助等と文藝座を創立し舞臺監督並びに主事となつて新劇運動に力を致す。大正十三年帝國劇場に招聘され專ら劇化及び演出監督等に當り、文藝顧問として帝劇より更に松竹に移り今日に至る。東京朝日新聞掲載の小說「遊俠男一代」を最も最近の著作とす。（東京市外和田堀町和田五八）

葉山嘉樹

明治二十七年三月十二日、福岡縣豐津村に生る。鄕里にて中學卒業後、マドロス其他多くの勞働者としての生活を送り、治警に二度觸れた。「文藝戰線」同人。「海に生くる人々」「誰が殺したか」「稚き鬪士」等の著作集がある。（東京市外高圓寺三三九）

原久一郎（號。白光）

明治二十三年四月十日、新潟縣水原町に生る。大正三年早稻田大學英文科卒業。大正六年三月東京外國語學校露語專修科卒業。最近著書に、トルストイの「懺悔」同「兒童の爲めに說かれた基督の教」同「惡に抗しないといふ事について」同「妻に與へた全書簡集、附初戀の手紙」「大トルストイ傳第四卷」「結婚の悲劇」あり。（東京府下長崎町三八八五）

春山行夫

明治三十五年七月一日、名古屋市に生る。正規の學校教育を受けず。陶器工(四年)株式取引所員(四年)出版社編輯部員(三年)たりしことあり。「詩と詩論」(季刊)現代の藝術と批評叢書『世界文學評論』(月刊)を創刊し、引つづきその編輯に從ふ。最近著書に、「檢のパイプを口にして」「詩論集」「植物の斷面」(詩集)あり。(東京市外中野町上ノ原七七一、篠原方)

番匠谷英一

明治二十八年八月十四日、大阪府佐野町に生る。京都大學獨文科卒業。立敎大學敎授。戯曲集「楊貴妃」他に戯曲數篇飜譯數篇あり。(東京市外目白上り屋敷一一一九)

半田良平

明治二十年九月十日、栃木縣上都賀郡北、大嶋村深津に生る。同四十五年東京帝大英文科卒業、爾來私立東京中學校語學敎師『國民文學』同人。歌集「野づかさ」の外數種の著あり。(東京市外上落合四二七)

日夏耿之介(本名。樋口國登)

明治二十三年二月二十二日、長野縣下伊那町飯田町に生る。早稻田大學文學部英文學科卒業(大正三年)雜誌「假面」「詩人」「ハンテオン」「サバト」「游牧記」に關係す。大正十一年來早稻田大學文學部に敎鞭をとる。最近著書に「明治大正詩史」「日夏耿之介全詩集」あり。(東京市外阿佐ケ谷八七三)

久板榮二郎

明治三十一年七月三日、宮城縣岩沼町に生る。宮城縣立工業學校機械科、二高を經て東大文科卒業。現在は日本プロレタリア作家同盟員、同劇場同盟東京左翼劇場員。戯曲、小說、評論等あり。(東京市外上落合四八〇日本プロレタリア作家同盟事務所氣附)

日高只一

明治十二年三月廿三日、廣島縣山縣郡新庄に生る。早稻田大學英文科卒業。英米兩國に二ケ年留學。早大文學部敎授。(東京市外杉並町阿佐ケ谷一)

平田禿木(本名。喜一)

明治六年二月十日、東京日本橋區伊勢町に生る。明治十七年十一月公立學校(現開成中學校)に入學、同二十三年第一高等學校に進み、途中退學、後オックスフォード大學に英文學、並に言語學を專攻す。歸朝後東京高等師範學校學習院明治大學等に敎鞭を執る。明治四十五年以後は、敎職をやめて全く著作に沒頭す。最近著書に「評釋ハアデイ小曲集」「グランド・バビロン・ホテル」等がある。(東京市本郷區駒込曙町二二)

平林たい子

明治三十八年十月三日、長野縣諏訪郡中洲村に生る。諏訪高等女學校卒業後上京、店員事務員等をなす。最近著書に、小說集「毆る」「敗殘列車」「石油工場の同志」「耕地」がある。(東京市外杉並町高圓寺六六七)

平林初之輔

明治二十五年十一月八日、京都府竹野郡深田村に生る。大正六年早大卒業。やまと新聞、國際通信記者をした後、大正十五年より昭和三年二月『太陽』休刊まで同誌の主幹。多くの文藝評論、飜譯及び探偵小說全集中の「平林初之輔集」及び、「文學理論の諸問題」(評論集)等がある。現早大講師。(東京市小石川區水道端町一ノ一二)

平山蘆江(本名。壯太郎)

明治十五年十一月十五日、兵庫港川に生る。幼少長崎に送られそこに育つ。長崎商業學校と東京府立五四中學を各々二年づつ在學途中退校。滿洲に渡り放浪、二十五歲に歸り、都新聞社記者となり大震災後創作の筆を持ち始め、昭和五年九月、退社、作家として專念する傍ら昭和六年正月より著

誌「大衆文藝」を創刊す。最近著書に「唐人船」二卷、「五月雨日記」「西南戰爭」等あり。(東京市牛込區富久町一一三)

廣瀨哲士

明治十六年九月二十二日、岡山縣津山市外に生る。東大佛文科出身。慶大文學部教授。最近著書「新フランス文學」(東京府井荻町上荻窪四二七)

廣津和郎

明治二十四年十二月、東京牛込矢來町に生る。故柳浪氏の息。大正二年早大文科卒業。「二人の不幸者」の外、多くの小說集と、隨雜文藝評論、飜譯がある。最近著に、「新選廣津和郎集」「薄暮の都會」等がある。(東京府下小田急沿線豪德寺前)

深尾須磨子

明治三十一年丹波の山間に生る。高等女學校卒業。九年前官吏にして詩人たりし夫深尾贇之丞の歿後文筆生活に入る。曾て三年間歐洲に滯在。最近著書に「侯爵の眼」(プチタブロオ集)「牝鷄の視野」(詩集)「犬猫の會話」七つ(飜譯小說)あり。(東京麴町區三番町七六)

福士幸次郎

明治二十二年十一月、弘前市に生る。青森中學、開成中學何れも中途退學。國民英學會に學ぶ。明治四十二年初めて詩を發表し後傳統主義地方主義を主張し今日に至る。詩集「太陽の子」その他あり。(東京市外野方町上高田三三六)

福田正夫

明治二十六年三月二十六日、神奈川縣小田原町に生る。東京高等師範中途退學。六年間小學校教員以後文筆生活を續く。最近著書に「自由詩講座」「炎の門」(東京市外世田ケ谷下北澤八〇九)

福永恭助

明治二十二年三月十七日、東京市牛込區矢來町に生る。明治四十一年江田島海軍兵學校を卒業。大正三年秋青島攻城戰に參加し、大正六七年地中海に出征した。大正十三年國際平和のため海軍少佐で現役を退いてからは洋畫修業の傍、隨筆文藝に從ふ。最近著書に「軍艦物語」「海軍物語」「ほまれの十字章」あり。(神奈川縣鎌倉町扇ケ谷三三九)

藤井眞澄

明治二十二年二月五日、岡山縣御津郡馬屋下村芳賀に生る。關西中學、早大政經科を出て、中央公論社——雜誌「黑煙」「演劇及映畫講義錄」編輯——日本映畫俳優學校理事講師、大衆日本社組織——等を經て、現在雜誌「祖國」編輯。最近著書に「日本民族主義の宣言」「常住の日本民族總動員」あり。(東京府北多摩郡狛江村九三〇)

藤澤清造

明治二十二年十月二十八日、能登の七尾に生る。尋常小學校卒業。足袋屋の小僧や新聞配達になる。其の中、脚に骨髓炎を患つて、ずつと病床の人となる。上京後、活版屋の雇人、辯護士の書生、自由勞働者、雜誌記者等になり、後ち賣文業を始む。(東京市下谷區谷中初音町四ノ五四天野方)

藤澤桓夫

明治三十七年七月十二日、大阪市に生る。今宮中學、大阪高校、東大文學部卒業。最近著書に「生活の旗」「傷だらけの歌」「辻馬車時代」あり。(東京市外澁谷町神泉八、小野勇氏氣付)

藤澤衛彥

明治十八年八月二十日、埼玉縣浦和町に生る。明治四十二年明治大學文學科卒業、明治四十三年一月國學院大學出版部に入り「兄弟姉妹」を主宰し、明治大學「學叢」編輯主任を兼ね、傍ら「閣老安藤對馬守」

傳を執筆し、大正三年傳說研究に志して日本傳說學會を設立、爾來多くの傳說叢書を編む。大正十二年震災後、臨時震災救護事務局に招聘せられ、大震火災志修史の業に從事す。同十五年復興局に轉じ、復興局修史編纂囑託として今に至る。最近著に、『世界神話傳說大系』『日本神話傳說集』『明治流行歌史』『明治風俗史』『俗謠末摘花』『妖怪獵談全集』『孝子裴晴』（東京市小石川區小日向臺町一ノ二八）

藤森成吉

明治二十五年八月二十五日、長野縣上諏訪町に生る。一高を經て東大獨文科卒業。一年間六高の講師をした。『若き日の惱み』發表後小說戯曲の作多し。新著に「山戀記」『新選藤森成吉集』『光と闇』等がある。『戰旗』同人。目下伯林滯在中。

舟橋聖一

明治三十七年十二月二十五日、東京本所區橫網町に生る。高千穗中學校・水戸高等學校・東京帝國大學國文科を經て、現在、明治大學在勤。大學時代、雜誌『朱門』の編輯同人。『心座』同人。『文藝都市』同人等を經て、現在、劇團「蝙蝠座」同人及新興藝術俱樂部員である。最新著に、新興藝術派叢書「愛慾の一匙」「蝙蝠座」同人と共著「ルル子」あり。（東京市外下落合四三五）

逸見廣

明治三十三年一月十九日、山形縣に生る。早稻田大學獨逸文學科卒業。最近著書に、創作集「村の倫理」がある。（東京市牛込區若松町五八）

保篠龍緒（本名。星野辰男）

明治二十五年十一月六日、長野縣に生る。東京外國語學校佛語科卒業。文部省商事會社、東京高等學校等を經て東京朝日新聞社に入社、グラフ部長。近著に、『ルパン全集』十四卷「保篠龍緒集」一冊『七妖星』一冊あり（東京市小石川區大塚窪町二七）

細田源吉

明治二十四年六月一日、川越市に生る。川越市（當時は町）立小學校卒業後上京、商店員、下宿屋の下男、外人牧師のボーイ、苦學生等々。後早大英文科へ入學、大正四年卒業、春陽堂書店に入り『新小說』及び『中央文學』の編輯に從ふ。大正九年、初めて創作を發表。大正十五年『文藝行動』を發刊。八月廢刊。昭和二年十月、勞農藝術家聯盟に加入。最近著書に、長篇「罪に立つ」『こゝろさけぶ』『大風』『陰謀』『市街』『存生』短篇集「死を恃む女」『はたち前』『未亡人』『本心』『巷路過程』あり。（東京市外西荻窪六五五）

細田民樹

明治二十五年一月二十七日、東京府下南葛飾郡瑞江村今井に生る。廣島中學を經て大正四年早大英文科卒業。同年十二月より滿三ヶ年廣島騎兵第五聯隊に一兵卒として服役。現在『文藝戰線』同人。最近著書に、『赤い曙』『黃色い窓』『黑の死刑女囚』『眞理の春』『地獄』がある。（東京市外吉祥寺旭小路二六五八）

堀木克三

明治二十五年七月、三重縣飯南郡肘和村に生る。早大英文科卒業。中學教師をしたことあり。小說、文藝評論、隨筆などあり。

堀口大學

明治二十五年一月八日、東京市に生る。慶應義塾文學部を中途退學。外遊十餘年。大正十四年春歸朝。最近著書に、譯詩集『青白赤』アンドレ・ジイド作小說『パリュウド』ポオル・ヴアレリイ詩論『文學』あり。（東京市小石川區小日向水道町一〇八）

堀辰雄

明治三十七年十二月、東京に生る。第一高

等學校を經て東京帝國大學國文科卒業。最近著作に「不器用な天使」「コクトオ抄」「聖家族」がある。（東京本所區新小梅町二ノ一）

本間久雄

明治十九年十月十一日、山形縣米澤市に生る。山形縣立米澤中學校卒業後早稻田大學文學部に入り明治四十二年卒業。大正七年同大學文學部講師となり兼ねて雜誌「早稻田文學」を主宰す。昭和二年十二月同雜誌主幹を辭し、早稻田大學文學部留學生として昭和三年三月渡歐、同四年三月歸朝。現に早大文學部並びに女子英學塾高等科講師。最近著書に「文學概論」「歐洲近代文藝思潮概論」「生活の藝術化」「婦人問題十講」「滯歐印象記」あり。（東京市小石川區雜司ケ谷町一四四）

前田河廣一郎

明治二十一年十一月十三日、仙臺市に生る。宮城縣立第一中學校五ケ年迄にて學校らしいものには關係なし。德富蘆花に師事せることあり。十九歳の時渡米す、體驗——ボーイ、西洋人の下僕、荷馬車馭者、船員、厨司長、菓子製造職工、書記など種々あり。大正九年歸朝。最近著書「新選前田河廣一郎集」及びその續篇「支那」「十年間」「セムガ」戯曲集「晩餐」その他戯曲評論等あり。（東京市外高圓寺六二〇）

前田夕暮（本名。洋造）

明治十六年七月、神奈川縣中郡大根村南矢名に生る。明治三十九年白日社創立、雜誌「向日葵」發行、次いで明治四十四年四月雜誌「詩歌」を發行して今日に到る。最近自由律短歌を提唱す。歌集「收穫」「陰影」「生くる日に」「深林」「前田夕暮集」「原生林」「虹」改造社現代短歌全集第十一篇「前田夕暮集」「詩文集」「緑草心理」「烟れる田園」「雲と野菜」（東京市外西大久保一二八）

牧野信一

明治二十九年十一月十二日相州小田原町に生る。大正八年早稻田大學英文科卒業同年より約一年餘り時事新報社に務めたり。著書に「西部劇通信」あり。（東京市外大森新井宿山王二六八五）

正木不如丘（本名。俊二）

明治二十年二月二十六日、長野市に生る。大正二年東大醫學部卒業大正九年より大正十一年迄歐米留學、同十三年醫學博士。大正十一年夏東朝紙に隨筆「診療簿餘白」を發表、爾來診療の餘暇文筆をとる。現在、富士見高原日光療養所長、慶應大學講師最近著書、譯「洒落の精神分析」隨筆「女ごゝろ」創作「診療室隨筆」（長野縣富士見村富士見高原日光療養所）

正富汪洋（本名。由太郎）

明治十四年四月十五日、岡山縣邑久郡本庄村大字本庄に生る。東洋大學國漢文科卒業尾上柴舟、前田夕暮、三木露風、若山牧水等と歌の團體「車前草社」を結んだ頃から漸く世に出た。東洋大學講師、名教中學校教諭 久しく詩誌「新進詩人」を刊行し若き詩人養成に努めた。著書「詩人スウインバーン」（東京市外代々木富ケ谷一四五五）

正宗白鳥（本名。忠夫）

明治十二年三月三日、岡山縣和氣郡伊里村穗浪に生る。早稻田專門學校文學科卒業後讀賣新聞に七年間記者生活を送る。昭和三年十一月外遊、歐米を巡遊して同四年十月歸朝す。初期には專ら小說、近時は戯曲、評論多く、文藝時評を針り發表しつゝあり。最近著書に「正宗白鳥集」（現代日本文集全集）評論集「現代文藝評論」等あり。（神奈川縣大磯町東町）

松居松翁（本名。眞玄）

明治五年二月十八日仙臺市に生る。國民英學會出身。報知新聞、萬朝報記者をした後

文集「武藏野巡禮」傳奇小說「瀧夜叉姫」等あり。(東京市外代々木初臺五三四)

白須孝輔

明治三十八年二月十二日、東京日本橋に生る。一九二七年前衛藝術家同盟に加入、一九二八年前藝、プロ藝その他三團體合同によつて成るナップに加入し現在に及ぶ。その間、檢閲制度改正期成同盟書記長『戰旗』編輯委員等になる。詩集「ストライキ宣言」あり。(東京市麴町區五番町六)

白鳥省吾

明治廿三年二月廿七日、宮城縣栗原郡築館町に生る。縣立築館中學校を經て、早稻田大學英文科卒業。最近著書に詩集「野茨の道」『二行聯詩集』民謠集「白鳥省吾民謠集」『直江津音頭その他』あり。(東京市外高田町雜司ヶ谷龜原六一)

新村出(シンムライヅル)

明治九年十月九日、周防國山口町に生る。明治三十二年七月東京帝國大學文科大學言語學科卒業。同三十五年二月東京高等師範學校教授、同三十七年八月東大文科大學助教授兼任、同四十年三月京都帝國大學助教授、同年同月獨逸伯林大學留學、同四十二年四月歸朝、五月京大文科大學教授、同四十三年七月文學博士、同四十四年十月京大圖書館長、昭和三年一月帝國學士員會員。最近著書に「琅玕記」「南國巡禮」「東亞語源志」(京都市上京區小山中溝町一九)

菅忠雄

明治三十二年二月五日、小石川區竹早町に生る。逗子開成中學卒業、上智大學獨文科出身。最近著書に「菅忠雄集」(新進傑作小說全集)がある。(東京市麴町區內幸町大阪ビル文藝春秋社氣付)

杉浦翠子

明治二十四年五月、埼玉縣に生る。大正五年より短歌を齋藤茂吉氏に學び、十年以後獨行精進す。また國文學を折口信夫氏に學ぶ。『朝の呼吸』その他歌集のほか、長篇創作「愛しき歌人の群」等あり。『香蘭』同人。(東京市外澁谷町伊達一七)

杉村楚人冠(本名。廣太郎)

明治五年七月二十五日、和歌山市に生る。明治三十六年十二月東京朝日新聞社に入り今日まで在職、その間數回歐米に特派せらる。最近著書に、小說「うるさき人々」『湖畔吟』『その他』朝日常識講座中の「新聞の話」がある。(千葉縣東葛飾郡我孫子町我孫子二二一)

鈴木善太郎

明治十七年一月、福島縣郡山市に生る。早大に學ぶ。新聞記者生活十餘年の後セール・フレーザー株式會社に勤務、歐米諸國を遊歷、後に松竹に關係す。最近著書に、モルナアルの飜譯「開かれぬ手紙」『お互に愛したら』『芝居は誂向き』『町のをんな』『男の流行』その他あり。(東京市外北品川一本木三四五)

薄田泣菫(本名。淳介)

明治十年五月十九日、岡山縣淺口郡連島町に生る。獨學。明治三十四、五、六年頃大阪にて文藝雜誌『小天地』を主宰發行。大正元年大阪每日新聞社に入り最近病のために退き、囑託となる。最近著書に、隨筆集『艸木蟲魚』『大地讃頌』あり。(兵庫縣西宮市分銅町二三)

鈴木彥次郎

明治三十一年十二月二十七日、東京市深川區島田町九に生る。盛岡中學、一高を經て東大國文科卒業。曾つて『文藝春秋』『文藝時代』の同人であつた。小說、戲曲、大衆讀物等、執筆今日に至る。最近著書に、小說集「七月の健康美」戲曲集「蛇」がある。(東京府下大森山王二、五五八)

鈴木三重吉

明治十五年九月二十九日、廣島市猿樂町に生る。東京帝國大學英文學科出身。夏目漱石門下。大正七年六月、童話童謠雜誌『赤い鳥』を創刊。昭和四年三月以後休刊。五年十一月復刊。昭和三年五月、日本騎道少年團を創設、理事となり現在に至る。「黑い騎士」童話集「湖水の女」「をどりのたき火」「かるたの王さま」「十二の星」「少年王」あり。（東京市外西大久保四六一赤い鳥社内）

諏訪三郎（本名。半澤成二）

明治二十九年十二月三日、福島縣安積郡赤津村に生る。中央公論社員、並に中外商業新報記者をしたことがある。目下は一週に一日、金星堂編輯部の相談役として出社してゐる。最近著書に「ビルヂング棲息者」「就職戰線をめがけて」「嵐の花」がある。（千葉縣市川町平田二一七）

關口次郎

明治二十六年六月十六日、福井縣敦賀町に生る。京都一中、一高を經て、東大獨文科卒業。大阪朝日に二年、東京朝日に三年記者をせしことあり。辭職後專ら劇作に努めたが、最近小說も發表してゐる。「母親」「鴉」の二戲曲集以後、或る全集の一部として、小說集を出す。（東京市外西大久保二〇）

芹澤光治良

明治卅年五月四日、靜岡縣沼津市我入道に生る。沼津中學校、第一高等學校を經て、東京帝國大學經濟學部を大正十一年卒業。大正十四年より昭和四年に亘り歐洲に滯在、主として巴里に社會經濟學を學び、其間、フランス文壇人と交友す。農商務省事務官たりしも辭職。現に、中央大學に貨幣論を講ず。「ブルジョア」の近著の他「我入道」の近作發表。（東京市外上落合二〇六）

千家元麿

明治二十一年六月八日、東京麴町に生る。慶應義塾幼稚舍に入學。普通部二年にて、府立第四中學へ轉校、後慶應義塾大學に學ぶ。最近出版詩集に「千家元麿詩集」「芽ぐめる枝」あり。（東京市外長崎町西原三、七三五）

相馬御風（本名。昌治）

明治十六年七月十日、新潟縣糸魚川町に生る。明治三十九年早稻田大學文學科卒業。早稻田文學社々員、早稻田大學文學科講師等をつとめたりしが大正五年感ずる所あり鄕里に歸住し今日に至る。最近著書に、「良寛坊物語」「義人生田萬の生涯と和歌」「千代と貞心と蓮月」「訓譯良寛詩集」「良寛さま」がある。（新潟縣糸魚川町）

相馬泰三

明治十八年十二月二十九日、新潟縣中蒲原郡庄瀨村に生る。早稻田大學中途退學。友人等と雜誌『奇蹟』を經營。萬朝報社、大正日日新聞東京支社に勤めてゐたことがある。最近著書に「新選相馬泰三集」あり。（東京市牛込區馬場下町一一市光館方）

外村史郎

明治三十四年六月十二日、靜岡縣濱松市に生る。外語の夜學にてロシヤ語を學ぶ。プレハーノフの「藝術論」及び「文學論」の飜譯、ルナチャールスキイの「藝術の社會的基礎」の飜譯。エム・ポクロフスキイの「ロシヤ史概要」の飜譯などの近著がある。（東京市外高井戶町大宮前五〇九松本方）

高垣松雄

明治二十三年十二月十三日、神奈川縣橫須賀に生る。大阪桃山中學校卒業、早稻田大學高等豫科文科に入學せしも退學。其後約四年間事務員、小學校代用教員等を勤め、大正八年三月立教大學卒業、同八月より二ケ年ホノルル、シカゴ（シカゴ大學）に留

學。十一年四月より立教大學に出講。「アメリカ文學」の著あり。(神奈川縣逗子町櫻山一七〇七)

高倉輝

明治二十四年四月十四日、高知縣幡多郡七郷村に生る。京大英文科卒業、以後四年間同大學囑託勤務。小説戯曲の作多く、最近「百姓の唄」あり。(信州別所温泉)

高須芳次郎 (號。梅溪)

明治十三年四月十四日、大阪船場に生る。早稲田大學英文科を明治三十八年に卒業。『新潮』の前身『新聲』記者を振出しに『世界的青年』『東西南北』等の主幹となり、次いで明治三十九年『國民新聞』に入り、『東京毎日』『二六』等の社會部長、文藝部長となりし事あり、最近著書に「古代中世日本文學十二講」あり。(東京市外松澤村上北澤五一〇)

高田保

明治廿八年三月廿八日、茨城縣土浦町に生る。早稲田大學文學部卒業、雑誌記者生活放浪生活、劇場員生活を經て今日に至る。劇作自著集「人魂黄表紙」その他ゴルキイの「母」ルマルクの「西部戰線異狀なし」等の脚色多し。(東京赤坂臺町七七)

鷹野つぎ

明治二十三年八月十五日、濱松市に生る。濱松高等女學校卒業。小説集「悲しき配分」同「ある道化役」感想集「眞實の鞭」等の著あり。(東京市外世田谷町太子堂三一三)

高橋邦太郎

明治三十一年九月五日、東京市淺草區に生る。京華中學、東京外國語學校、東京帝國大學佛文科卒業。前築地小劇場文藝部員、兼宣傳部長。隨筆集「三等列車中の唄」飜譯「ラ・バタイユ」「パリのどん底」「肥った男」「愛・見知らぬ土地」等あり。(東京市下谷區上野花園町一四)

高橋文雄 (本名。武雄)

明治三十九年十一月一日、東京市麹町區永田町に生る。北野中學。早稲田第一高等學院を途中で止す。内的の經驗思索を除いてはこれといった外的の經歷なし。昨年「改造」に入選。「一端社」洋畫會同人。「死なす」「散らばつてゐる眼」等の作品あり。(東京市牛込區天神町二五青木方)

高濱虚子 (本名。淸)

明治七年二月二十二日、松山市に生る。伊豫尋常中學より京都三高に入り、二高に轉じ中途退學。正岡子規に就いて俳句を學び、明治三十一年「ホトトギス」を創刊し今日に及ぶ。「俳諧師」をはじめ多くの小説寫生文、俳句の述作あり。最近「句集虚子」隨筆集「一二片」の著あり。(神奈川縣鎌倉町材木座上向原一、二七八)

高村光太郎

明治十六年三月、東京市下谷區西町に生る。東京美術學校彫刻科卒業(明治三十五年)後、紐育、倫敦、巴里等を遍歷。明治四十三年歸國、爾來東京に在り。最近著書に「ロダン」小傳、現代詩人全集中「高村光太郎集」あり。(東京市本郷區駒込林町二五)

高群逸枝

明治二十七年一月十八日熊本縣豐川村に生る。熊本女子師範、熊本女學校中途退學。現在無産婦人藝術聯盟所屬。最近「戀愛創生」(戀愛論)「黒い女」(小説集)の著あり。(東京市外上荻窪二六九)

高安月郊 (本名。三郎)

明治二年二月十六日、大阪に生る。獨學、十三から郷を出て東京、京都に轉住幾度、十二年歸郷、また大阪に移り、十五年歸東。二十一から創作、今に止めず。最近著書に

「日本文藝近代史」あり。(東京市本鄕區駒込西片町一〇ノ二)

瀧井孝作

明治二十七年四月四日、飛驒國高山町に生る。學歷と云ふ程のものなし。大正四年より七年まで「海紅」の編輯を助く。その後『時事新報』『改造』等に記者をした事あり。「無限抱擁」「妹の問題」「良人の貞操」、「瀧井孝作集」等の創作集あり。(八王子市子安町四七)

武田麟太郎

明治三十七年五月九日、大阪市南區に生る。大阪府今宮中學―京都第三高等學校―東大中途退學。現在日本プロレタリア作家同盟所屬。短篇集「暴力」「反逆の呂律」の著あり。(東京市麴町區內幸町商興ビル映畫往來社氣付)

武野藤介 (本名、武藤太)

明治三十二年四月、岡山市萬成町に生る。岡山一中、早大露文科中途退學。中央新聞記者たりしことあり。著書「文士の裏面側面」あり。(東京市外杉並町阿佐ケ谷大沼四六九)

武林無想庵 (本名、盛一)

明治十三年二月北海道札幌に生る。東京帝大文科卒業。フランスに渡ること數度。多くの飜譯、小說、隨筆あり。最近「飢渴通信」「耶蘇」(バルビュス)等の著あり。

太宰施門

明治二十二年四月一日岡山縣兒島郡小田村柳田に生る。大正二年七月東京帝國大學文科大學卒業佛文學專修。大正七年四月任第一高等學校教授、大正八年佛國及瑞西國へ留學、大正十年十月任京都帝國大學助教授大正十二年二月歸朝。「ロマンチック時代」「伊太利紀行」等の著あり。(京都市上京區竹屋町通大宮西入ル)

辰野隆(ユタカ)

明治二十一年三月東京赤坂に生る。東京帝大佛文科並に佛法科卒業。慶應、早稻田、法政に講師たりしことあり。現在東京帝大佛文科助教授。「ボオドレエル研究序論」等の著あり。(東京市外上目黑駒場九二八)

立野信之

明治三十六年十月十七日、千葉縣五井町に生る。東京中學に學びたるも中途退學、鄕里に歸り鍬を持つ傍ら文學に親しむ。「軍隊病」「情報」等の著あり。(東京市外杉並町成宗五四)

田中貢太郎

明治十三年三月二日、高知縣長岡郡三里村仁井田に生る。鄕里の高等小學校を中途にて退學したる後は獨學、船大工となり、小學教員となり、田舍新聞の記者となり、明治三十六年上京してより大町桂月の門に遊ぶ。「怪談全集」二冊、「奇談全集」二冊、「旋風時代」(初編上卷)はその近業なり。(東京府荏原郡碑衾町碑文谷一、三六七)

田邊耕一郎

明治三十六年十一月三日、廣島縣甲立町に生る。中學中途退學、上京後「若草」の編輯四年。その間「イスクラ」のグループに入り、一九二九年三月以來日本プロレタリア作家同盟に加盟す。また雜誌「プロレタリア文學」を編輯したが、今は機關誌「ナップ」の編輯に携つてゐる。「シベリヤ」「飼馴らされた狼」「飢餓」等の小說の外多くの評論がある。(東京府下中野町千光前二九五() 塙方)

谷川徹三

明治二十八年五月二十六日、愛知縣常滑町に生る。一高を經て京都帝大哲學科卒業。法政大學文學部教授。「感傷と反省」「生活・哲學・藝術」「享受と批評」の論文集の他譯書二三あり。(東京市外阿佐ケ谷小山六〇一)

谷崎潤一郎

明治十九年七月二十四日、東京日本橋區蠣殼町に生る。府立一中、一高、東京帝大國文科半途退學。大正活映株式會社の脚本部顧問たりしことあり。支那に遊ぶこと兩度。最近長篇小説「卍（まんじ）」「蓼喰ふ蟲」「亂菊物語」隨筆集「饒舌錄」等を著し、又「谷崎潤一郎全集」刊行中。（兵庫縣武庫郡本山村岡本）

谷崎精二

明治廿三年十二月十九日、東京日本橋區蠣殼町に生る。早稲田大學英文科卒業。現に同大學助教授。最近著書に現代長篇小説全集中の「谷崎精二篇」あり。（東京市牛込區喜久井町二一）

谷讓次（本名。長谷川海太郎）

林不忘、牧逸馬の別名あり。曾てアメリカに遊び最近再び、歐洲を巡歴して歸る。「テキサス無宿」をはじめアメリカに材を取れるもの多く、「大岡政談」「踊る地平線」「浴槽の花嫁」「この太陽」等多くの著作あり。（神奈川縣鎌倉町塔の辻）

中條百合子

明治三十二年二月十三日東京市小石川區原町に生る。本郷誠之小學校、御茶の水高等女學校卒業。曾て米國に遊學せしことあり、昭和三年より露西亞をはじめ歐洲諸國に遊び、同五年十一月歸朝「伸子」の他、「モスクワ印象記」「赤い貨車」「ロンドン一九二九年」「子供・子供・子供のモスクワ」等は滯歐中の作。（東京市本郷區駒込林町二一）

近松秋江（本名。徳田浩司）

明治九年五月五日、岡山縣和氣郡藤野村に生る。岡山縣立中學。慶應義塾、國民英學會、二松學舍等に學び、のち早大の前身東京專門學校英文科卒業。「中學世界」「早稲田文學」を編輯したることあり。四十三年小説「別れた妻に送る手紙」を發表して以來「疑惑」「舞鶴心中」「黒髪」等多くの創作、及び隨筆評論がある。「近松秋江集」（現代日本文學全集）「新選近松秋江集」「カチユウシヤ」（飜譯）等の近著がある。（東京府下中野町上の原九五四）

茅野蕭々（本名。儀太郎）

明治十六年三月、長野縣上諏訪町に生る。東京帝大獨文科卒業。第三高等學校教授、後慶應義塾大學教授となり今日に及ぶ。歐洲に留學。飜譯紹介、詩歌の作多し。（東京市芝區三田綱町一）

茅野雅子

明治三十三年大阪に生る、日本女子大學卒業。四十年茅野蕭々氏に嫁す。歌集「戀衣」「金砂集」のほか、短篇小説童謠等の作あり、曾て歐洲に遊んだ。（東京市芝區三田綱町一）

千葉龜雄

明治十一年九月廿四日、山形縣酒田に生る。（原籍宮城縣遠田郡不動堂村）仙臺第一中學半途退學、早稲田大學地歴科に半年在學、國民英學會卒業。「文庫」「日本及日本人」記者、「日本」「國民」「時事」「讀賣」の各社會部長、「讀賣」編輯長より「大阪毎日」編輯顧問東京在任として今日に至る。文部省臨時國語調査委員、立教大學講師。飜譯、紹介、評論多し。（東京府下大井町かのえ塚四八四二）

塚原健二郎

明治廿八年二月十六日、長野縣埴科郡東條村に生る。學歴特記するほどのもの無し。幼にして放浪す。後、新聞雑誌等の記者たりしことあり、中央公論に處女作を發表す。（東京市外吉祥寺町野田北七五八）

辻潤

明治十八年十月四日東京淺草御藏前片町に生る。東京神田私立國民英學會出身。教師

をしたことがある。フランスに遊び昭和四年歸る。最近著書「絶望の書」(東京市外荏原町中延一〇八九)

土井晩翠（本名。林吉）

明治四年十月二十三日、仙臺に生る。立町小學校より仙臺英學塾(故齋藤秀三郎校長)を經て第二高等學校、東京帝大英文科卒業。續いて英佛獨伊を周遊すること三ケ年半。最近著書に「グラーフ、ツェッペリン讃」「野口英世詩傳」あり。(仙臺市本荒町二二)

土田耕平

明治二十八年六月一日、長野縣上諏訪町大和に生る。四十五年より歌を故島木赤彥に學ぶ。爾來『アララギ』の一員。歌集「青杉」あり。(奈良縣郡山町上箕山)

土田杏村（本名。茂）

明治二十四年一月十五日新潟縣佐渡に生る。大正四年東京高師博物學部卒業、同七年京都帝大文學部哲學科卒業。最近著書「國文學の哲學的研究」第一、第二、第三卷「文學論」「戀愛論」「マルキシズム批判」「文明は何處へ行く」『思想問題「人生論」等あり。(京都市上京區新町頭)

土屋文明

明治廿四年一月廿一日、群馬縣群馬郡上郊村に生る。東京帝國大學文科卒業、高等女學校教員校長等を勤めしことあり、現在は法政大學豫科教師。歌を伊藤左千夫に學び雜誌『アララギ』編輯同人たり。(東京市赤坂區青山南町六ノ三三)

雅川滉（ツネカワヒロシ）

明治卅九年二月廿五日東京に生る。一高を經て帝大國文科卒業。『新思潮』『文藝都市』の同人たりしことあり。「藝術派宣言」其他若干の文藝評論及び小說あり。(東京市麴町區下六番町一七成瀨方)

壺井繁治

明治卅一年十月香川縣小豆島に生る。早大文科途中退學。『赤と黑』『文藝解放』『左翼藝術』を經て目下日本プロレタリア作家同盟員及び戰旗社員(東京府下代々木初臺六一八)

坪內雄藏（號。逍遙）

安政六年五月廿二日岐阜縣加茂郡太田町(當時尾張藩代官所々在地)明治十六年東京大學政治經濟科(文學部)卒業、同年より早稻田大學教師(當時私立專門學校)同三十二年文學博士に推薦さる。同三十五年早稻田中學校長となる。同三十八年文藝協會を起す、大正三年同會を解散す。同四年早大教授を辭す。以上の年間始終傍ら著述に從事す。最近「良寛と子守其他」の著あり。(本宅、東京市牛込區余丁町一一四。別宅、伊豆熱海)

坪田讓治

明治二十三年岡山縣御津郡に生る。大正四年早大英文科卒業。早大圖書館に一寸勤め、大正八年より十三年迄兄の經營せる島田製織所大阪支店支配人、その後文筆生活。「激流を渡る」(長篇)の新著あり。(東京市外高田町狐塚八六六)

津村京村（本名。京太郎）

明治二十六年、兵庫縣明石町に生る。鄕里の小學校を出た。雜誌『文壇』及び『人と藝術』の編輯に從事せし事あり。最近著書長篇「結婚地獄」及び戲曲集「死の接吻」「戰國異風心中」の三冊あり。(東京市外代々木初臺六〇三)

鶴田知也

明治卅五年二月十九日、小倉市大阪町に生る。豐津中學卒業、東京神學社神學校中途退學。現在『文藝戰線』同人。(東京市外杉並町天沼一七四)

土居光知

明治十九年八月二十九日、高知縣長岡郡十

市村に生る。高知海南學校、第三高等學校東大英文科卒業。大正十一年米、英、佛に留學、大正十三年歸朝。東北帝國大學教授に任ぜられ英文學科擔任。「文學序說」の著あり。（仙臺市北一番丁二八）

戸川秋骨（本名。明三）
明治三年十二月十八日、熊本縣玉名郡岩崎村に生る。明治學院、東京帝國大學英文科選科出身。「文鳥」「凡人崇拜」小泉八雲全集中の「神國日本」の著あり。（東京市外井荻町下荻窪三七一）

戸川貞雄
明治廿七年十二月廿五日、東京市に生る。早稻田大學英文科卒業後雜誌記者三年を經て現在に及ぶ。最近著書に長篇小說「女性の復讐」あり。（神奈川縣平塚町新宿一、五〇四）

土岐善麿（トキゼンマロ）（號。哀果）
明治十八年六月八日東京淺草區松淸町に生る。早稻田大學英文學科卒業。讀賣新聞記者を經て、現在、東京朝日新聞調査部に勤む。最近著書に歌集「土岐善麿集」隨筆集「外遊心境」「柚子の種」等あり。（東京市外下目黑八〇四）

德田秋聲（本名。末雄）
明治四年十二月、金澤市横山町に生る。四高を中途退學して上京、故尾崎紅葉の門に入る。小說の作多く「黴」「爛」「あらくれ」をはじめとして、最近では現代日本文學全集中の「德田秋聲集」及び「新選德田秋聲集」の著あり。（東京市本郷區森川町一）

德富猪一郎（號。蘇峰）
文久三年一月廿五日熊本縣上益城郡杉堂村矢島直方（母堂實家）方に生る。幼時家學を受く、兼坂止水の塾に學ぶ。熊本洋學校に學ぶ、同志社に學ぶ、大江義塾を創設す。明治二十年「國民之友」を發刊、二十三年「國民新聞」を發刊し、社長兼主筆として昭和四年一月に至る。四月より大每東日の社賓として兩紙に執筆、現に民友社長貴族院議員、帝國學士院會員たり。明治二十年來の著書、眞に等身以上、近世日本國民史は既刊三十四册、以下續刊、「國民小訓」「昭和一新論」「蘇峰叢書」十二册、其他近著頗る多し。（東京府荏原郡入新井町新井宿二、八三二）

德永直
明治卅二年一月廿日熊本市に生る。黑髮尋常小學卒、印刷工、電氣工、新聞記者等——大正八年より勞働運動に入り、大正十三年博文館爭議、同十五年共印爭議關係——出版從業員組合、關東出版勞働組合其他の創立に關係、關東消費組合聯盟博文館共働社、生產組合共働印刷所の創立等——現在ナップ所屬。長編第一部（太陽のない街）同第二部（失業都市東京）短篇集（能率委員會）同（小資本家）同（約束手形三千八百圓也）等あり。（東京市外西巢鴨町宮仲二五〇〇）

富田碎花（本名。戒治郎）
明治二十三年十一月岩手縣盛岡市に生る。日本大學植民科出身。支那本部及滿蒙を旅すること前後數回。詩集「末日頌」「地の子」「時代の手」「登高行」「手招く者」譯詩集カアペンタア「民主々義の方へ」ホヰットマン「草の葉」その他愛蘭土文學に類するモノグラフ。（兵庫縣武庫郡茶屋蘆屋）

外山卯三郎
明治三十六年一月二十五日和歌山縣南部町に生る。北海道帝大豫科農學部、京都帝大哲學科出身。「詩學概論」「現代美術論集」「造型美術概論」「二十世紀繪畫大觀」。尙「藝術學研究」と「新洋畫研究」を主宰す。（東京市外井荻町下井草一一〇〇）

豐島與志雄

明治二十三年十二月二十七日福岡縣朝倉郡福田村に生る。東京帝國大學佛文學科卒業。法政大學教授兼東京帝國大學文學部講師たり。小說飜譯など多く、最近の著書に「新選豐島與志雄集」あり。（東京市本郷區千駄木町五七）

内藤濯

明治十六年七月七日、熊本市に生る。第一高等學校を經て、明治四十三年東京帝國大學佛蘭西文學科卒業。陸軍中央幼年學校に奉職十年、大正九年第一高等學校教授、同十一年より十三年まで佛蘭西に留學。昭和三年春、東京商科大學に轉じ同時に一高講師を兼ぬ。嘗つて『六合雜誌』『帝國文學』等の編輯を分擔せる事あり。最近ヴィルドラック「ミシェル・オオクレエル」「ペリアル夫人」モリエール「人間ぎらひ」「女學者の群」「氣で病む男」ブランデス「佛蘭西浪漫派」等の譯書あり。（東京市外大森不入斗二六七）

内藤辰雄（本名。惠吉）

明治二十六年二月岡山縣淺口郡河內村に生る。岡山商業學校中途退學、小說家たらんとして沖人夫其他の勞働の經驗あり。五六十の短篇小說と文學評論を發表。長篇小說「空に指して語る」「新興文學全集」に集めた五つの短篇あり。（東京府下西巣鴨町宮仲二六七一）

直木三十五（本名。植村宗一）

明治二十四年二月十二日、大阪市に生る。早大文科中途退學、藥劑師會書記、美術記者、出版屋、雜誌『人間』『苦樂』編輯者なりしことあり。大衆文藝の作多く、最近著書に「風流殺法陣」「荒木又右衛門」「南國太平記」（執筆中）あり。（東京京橋區木挽町八ノ一）

永井荷風（本名。壯吉）

明治十二年十二月三日、東京小石川金富町に生る。東京英語學校、高師附屬中學を經て外國語學校支那語科に學ぶ。明治三十六年渡米同四十一年歸朝まで米、佛各地に遊び、其間公使館員、銀行員をしたことがある。同四十三年慶應義塾文科教員となり『三田文學』に力を注ぎ大正五年教授を退き『三田文學』編輯からも退く。あめりか物語「ふらんす物語」「すみだ川」「おかめ笹」等を始め小說の作頗る多く、「荷風全集」「永井荷風集」「新選永井荷風集」等に收めらる。（東京市麻布區市兵衛町一ノ六）

永井龍男

明治卅七年五月十日、東京市神田區猿樂町に生る。『文學』同人。（東京市麹町區內幸町虎ノ門アパート六ノ六七）

中河與一

明治三十年二月二十八日、香川縣坂出町に生る。早稻田大學中途退學。京都の小學にて數學の教授をせし事あり。最近著書に「恐ろしき私」「形式主義藝術論」「氷汽船の壯圖」あり。（東京市外千歲村下祖師谷）

中勘助

明治十八年五月二十二日、東京神田に生る。東大文科卒業。最近著書「銀の匙」（神奈川縣平塚）

仲木貞一

明治十九年九月十一日、宮城縣仙臺市に生る。（事實は同年二月十一日石川縣金澤市生れ）早稻田大學英文科卒業。讀賣新聞、中央新聞記者、「新家庭」編輯主任。新國劇座附作者。松竹合名社作者、撮影監督、文部省社會教育調查委員。女學校教師等。現在日本大學文學部講師、東京中央放送局社會教育課長。最近著書「ナポレオン傳」（東京府北豐島郡岩淵町大字稻付一、二〇三）

長田秀雄

明治十八年五月十三日、東京市神田區表神

保町に生る。獨逸協會中學卒業後獨學。戯曲集多く、最近著書に、戯曲集「石山開城記」現代日本文學全集、現代戯曲全集その他。（東京牛込區横寺町五九）

長田幹彦

明治二十年三月一日、東京市麹町區九段坂上に生る。麹町區富士見小學校、東京高等師範附屬中學校、早稻田大學英文學科卒業。最近著書に「現代日本文學全集長田幹彦集」「女優部屋」「明治大正文學全集長田幹彦篇」「長篇小説全集」「新選長田幹彦集」「緣の處女」あり。（東京市牛込區中町二八）

中戸川吉二

明治二十九年五月二十日、北海道釧路市に生る。東京市立誠之小學校卒業、開成中學校をへて明治大學半途退學。雜誌「隨筆」を經營せしことあり。「イボタの蟲」「反射する心」「緣なき衆生」「友情」「青春」「北村十吉」「中戸川吉二選集」の七著あり。（東京市麹町區富士見町二ノ二九）

中塚一碧樓（本名。直三）

明治二十年秋、備中玉島港に生る。早大に遊び、後、俳誌「海紅」編輯、發行、現在に至る。最近著書に、句集「多摩川」あり。（東京市外駒澤町新町九〇）

中西伊之助

明治二十六年二月七日、京都府宇治に生る。小學校卒業後學歴なく諸種の筋肉運動に從事す。東京交通勞働組合理事長當時電車罷業の主謀者として入獄せしことあり。現在はそれらより離れ小説執筆中。最近著作に「國と人民」「春扉は叩く」「旗揚を行く」等々其他數種あり。（東京府下淀橋町柏木六五六）

中西悟堂

明治二十八年十一月十六日。金澤市長町に生る。京橋區文海小學校、天台宗中學、曹洞宗學林、並びに二三の專門大學修了後、住職及び新聞記者を勤め、また比叡山天台宗宗務廳に在つたこともある。嘗て一二の同人雜誌を刊行し、現に雜誌「潮葉樹」を自ら經營してゐる。數卷の詩集のほか「啄木傳」「芭蕉傳」武藏野隨筆集「蘆家と花」等の著がある。（東京市外井荻町上井草一、二六七）

中野重治

明治三十五年一月、福井縣坂井郡高椋村一本田に生る。東京帝國大學獨文科卒業日本プロレタリア藝術聯盟を經て現在日本プロレタリア作家同盟員。最近著書に、論文集「藝術に關する走り書的覺え書」小說集「鐵の話」「夜明け前のさよなら」あり。（東京市外瀧野川町田端四四五）

中原綾子

明治三十一年二月十六日、長崎市に生る。作歌多く、「眞珠貝」等の歌集がある。（東京市外下澁谷七一七）

中村吉藏

明治十年五月十五日、石見國津和野町に生る。早大英文、哲學科卒業、米國プリンストン大學、コロンビヤ大學修業、新劇運動に從ひ藝術座に關係後、劇作に從事す。早大文學部に古典劇、近代劇等擔任。最近著書に、戯曲集「豫言者日蓮」改造文庫「イプセン全集」あり。（東京市外西巢鴨町宮仲一九六九）

中村憲吉

明治二十二年一月二十五日、廣島縣雙三郡布野村上布野に生る。大正四年、東京帝國大學法科大學經濟學科を卒業し、一時大阪每日新聞社經濟部記者たりし事あり。後歸鄕して農林業に從ひ、鐵道會社に關係す。歌を伊藤左千夫に學び、アララギ同人たり。歌集「馬鈴薯の花」「林泉集」「しがらみ」等あり。最近著書、改造社版現代短歌

全集第十五卷「中村憲吉集」(廣島縣双三郡布野村上布野)

中村星湖(本名。將爲)

明治十七年二月、山梨縣南都留郡河口村に生る。同四十年早大文科卒業。小說「少年行」を發表して以來多くの創作集と、「ボヷリイ夫人」その他の飜譯がある。昭和三年五月渡佛、四年六月歸朝。(東京府下井荻町上井草一四五六)

中村白葉(本名。長三郞)

明治二十三年十一月二十三日、名古屋市に生る。東京外國語學校露語科卒業。『露西亞文學』『中央文學』の編輯、鐵道官吏、オムスク政府通報局囑託などをした。「罪と罰」「アンナカレニナ」等を初め、ロシヤ文學の飜譯紹介多し。現在日本電報通信社員。(東京市外駒澤新町四三一)

中村正常

明治三十四年十一月六日、現住所に生る。本鄕區誠之小學校。同京北中學校。第七高等學校。爾來岸田國士氏につきて學ぶ。最近著書に、戲曲集「隕石の寢床」戲曲集「ボア吉の求婚」あり。(東京市小石川區指ケ谷町五七)

中村武羅夫

明治十九年十月四日、北海道空知郡岩見澤町に生る。獨學。上京以前三ケ年ばかり小學校敎員の職を務めたることあり。明治四十年頃より新潮社編輯部に勤務、今日に至る。最近著書に、三人長篇小說全集「地靈「靑春」「靜かなる曙」評論集「誰だ？花園を荒す者は！」あり。(相州藤澤町辻堂海岸)

中本たか子

明治三十六年十一月十九日、山口縣豐浦郡角島村に生る。山口高女を卒業して下關、山口で四年間小學敎師。昭和二年上京。『新聞紙が作つた海峽』の小說を發表して認めらる。著作集に「朝の無禮」「恐慌」「鬪ひ」がある。

長與善郞

明治廿一年八月六日、東京麻布宮村町六七に生る。麻布南山小學校から學習院に轉じ中等高等科を卒業帝大英文科に入り明治四十五年中途退學。曾て『白樺』同人たり。小說、戲曲の作多く、最近著書に、「一人旅する者」(感想隨筆集)あり。(東京市麻布區飯倉三ノ一五)

楢崎勤

明治三十四年十一月七日、山口縣萩に生る。新潮社々員、『新潮』の編輯に從ふ。最近著作に、「神聖な裸婦」「相川マユミといふ女」あり。(東京市赤坂區表町二ノ一〇)

成瀨無極(本名。淸)

明治十七年一月一日、東京に生る。第一高等學校東大獨文科卒業。文學博士。慶應大學豫科講師、第三高等學校教授、京大教授。大正十年渡歐留學し十二年末歸朝。戲曲、小說の他、獨逸文學研究論評あり。「疾風怒濤時代と現代獨逸文學」はその最近著。(京都市中京區室町丸太町下る)

南部修太郞

明治二十五年十月十二日、仙臺市に生る。長崎市にて小學校課程の大半を過し、明治四十四年三月芝中學校卒業、大正六年三月慶應義塾大學文科卒業、同年四月より九年三月まで『三田文學』の編輯に從ふ。十一年八月より十月にかけて滿洲より南北支那を巡遊す。最近著書に「南部修太郞集」あり。(東京麻布區新龍土町一二)

新居格

明治廿一年三月、德島縣撫養町に生る。大正四年東大政治科を卒へて讀賣、大阪每日東京朝日等の新聞記者たりしが、これをやめて以來ずつと著述に從ふ。「月夜の喫煙

「季節の登場者」、近代心の解剖」その他の小說集、隨筆集評論集あり。最近譯書にアンドン・マルロウの「熱風」がある。(東京市外杉並町高圓寺八一一)

西宮藤朝

明治二十四年十二月七日、秋田縣仙北郡角館町に生る。早稻田大學英文科卒業。後美學及哲學の研究に入り、早稻田大學及び立正大學講師となりて美學及哲學を講じて今日に到る。ブウトルウの「自然法の偶然性」の譯ギユヨオの「義務と制裁無き道徳」の譯クロオチエの「史的唯物論とマルクス經濟學」の譯、等がある。(東京市外池袋本村二七三)

西村陽吉（本名。辰五郎）

明治二十年四月九日、東京に生る。小學校以外定まりたる學歷なし。文學書肆としての東雲堂を經營し、現在も出版業に從事す短歌雜誌『藝術と自由』主宰。最近著書に「歌と人石川啄木」あり。(横濱市鶴見區鶴見町一四二)

西脇順三郎

明治二十七年一月二十日、新潟縣小千谷町に生る。慶應義塾大學、オックスフォード大學等に學ぶ。超現實主義詩論「Spectrum」の近著あり。慶大文學部教授。(東京麻布區富士見町四五)

額田六福

明治廿三年十月二日、岡山縣勝田郡勝間田町に生る。大正九年早大英文科卒業。職業的經歷なし。多くの戲曲と、大衆文藝がある。演劇雜誌『舞臺』編輯。(東京市外杉並町阿佐ケ谷二八九)

野上豐一郎（號。臼川）

明治十六年九月十四日、大分縣臼杵町に生る。東京帝國大學文科大學英文科出身。法政大學教授。最近著書に「能、研究と發見」「聖ヂヨウン」(翻譯)あり。(東京市外日暮里渡邊町一、〇四〇)

野上彌生子

明治十八年五月六日、大分縣臼杵町に生る。明治女學校卒業。「新しき生命」のほか小說、戲曲等多し。最近著書に「人間創造」「小さき生きもの」及び長篇「眞知子」あり。(東京市外日暮里渡邊町一、〇四〇)

野口雨情（本名。英吉）

明治十五年十二月、茨城縣磯原町に生る。東京專門學校出身。曾ては、東京日日新聞社、日本ビクター蓄音器會社等の囑託となる。民謠の作多く、最近著書に、民謠集「波浮の港」あり。(東京府下、武藏野町吉祥寺七八七)

野口米次郎

明治八年十二月八日、愛知縣津島町に生る。明治二十六年秋渡米前に於ける學歷は慶應義塾に學べるのみ。渡米後彼地の學窓を覗く。詩人ミラーと相知るに至つて、詩の道自然に開け、遂に文筆を以て世に立つに至る。在米十三年にして歸朝し、母校慶應大學に教授となる。その後二度英國米國を訪れ、最近著書に「ブラウニング譯詩集」「鈴木春信」「葛飾北齋」あり。(東京市外中野町字上原八六五)

昇曙夢（本名。直隆）

明治十一年七月十七日、鹿兒島縣大島郡實久村に生る。鄉里の小學校を卒へ、明治二十八年上京、正教傳道學校に學び、翌年正教神學校に入學、三十六年卒業、直ちに同校講師となり、大正元年陸軍中央幼年學校講師、同四年早大講師、同五年陸軍教授に任命、陸軍士官學校附に補せられた。同六年外國語高等試驗委員拜命、同十一年日大講師となり今日に及んでゐる。昭和三年秋トルストイ誕生百年祭に招待されたのを併せて露國に遊ぶこと前後四回、多くの著譯

及び著書がある。最近著書(昭和四年以後の主なる飜譯)小說「トラストD・E」「フオマ・ゴルデーエフ」戯曲「人の一生」「殴られる彼奴」「森の秘密」「熊の結婚」「ミステリヤ・ブッフ」「リユボーウイ・ヤロリーヤ」「宣告」「反響」評論「マルクス主義藝術論」「マルクス主義批評論」「藝術社會學」等。(神奈川縣鎌倉町稲村ヶ崎五二七)

灰野庄平

明治二十年四月十四日、新潟縣刈取郡吉井村に生る。明治四十四年東京帝國大學文科大學哲學科(美學專攻)卒業。其後五箇年間大學院に在學。現在日本大學にて日本演劇史講座擔任。昭和五年五月近代劇全集第二十六卷愛蘭土篇中四篇飜譯、同十月近代劇全集第四十二卷英國篇中二篇飜譯。(東京市小石川區大塚坂下町七九)

萩原朔太郎

明治二十一年、前橋市北曲輪町に生る。第六高等學校中途退學。詩集「月に吠える」「萩原朔太郎詩集」の外、最近著に「詩の原理」「虚妄の正義」あり。(前橋市北曲輪町七ノ一)

萩原蘿月(本名。英之助)

明治十七年五月五日、横濱に生る。初め鳴雪、虚子につきて俳句を學び「ホトトギス」に寄稿。獨逸協會中學を卒へて帝大國文科に入り卒業後中學教師として各地を轉々。大正九年帝大文學部副手となり俳諧の創作に專念今日に至る。女子大學、慶應義塾、二松學舍等の講師たり。(東京小石川區大塚坂下町七二)

土師清二(本名。赤松靜太)

明治二十六年九月十四日、岡山縣邑久郡國府村福里に生る。十一歳より十九歳まで呉服店、荒物店、活版用具商、一膳飯屋等に雇はれ、十九歳上京、石川半山に師事。二十一歳岡山市中國民報社に入り、大阪時事を經て大阪朝日記者となり「週刊朝日」の創刊ありて編輯を擔當。三十四歳の夏退社して作家生活に入る。最近著書に、土師清二集二冊(現代大衆文學全集)「血けむり伊吹颪」「旅鳥國定忠治」「水野十郎左衛門」等あり。(東京市小石川區水道端二ノ六四)

橋田東聲(本名。丑吾)

明治十九年十二月二十日、高知縣幡多郡中筋村有岡に生る。第七高等學校をへて大正二年東京帝大法科經濟學科を卒業。かつて東京日日新聞記者、農商務省囑託、法政大學講師たりしことあり。現在日本大學、明治大學、智山專門學校講師を兼ね「歌と地懐」論文集「自然と韻律」「正岡子規全傳」「土の人長塚節」「子規と節と左千夫」「萬葉集傑作選」「靜夜歌話」「現代名歌選」「萬葉女人歌集」「農業倉庫論」「農村讀本」「譯本」「君主論」等の著あり。(東京府下大森八景坂二二九四)

橋本英吉

明治三十一年十一月一日、福岡縣井田町に生る。小學校卒業後十七歳の時、九州三井田川鑛業所に入る。そこに約八年間坑夫。大正九年上京、共同印刷職工となり、爭議で馘首され、後に文藝春秋社に入り、そこを止めて、目下文筆稼業。現在「ナップ」の作家同盟員。著書に「炭坑」「市街戰」「勞働市場」あり。(東京本所區猿江裏町九五)

長谷川かな女

明治二十年十月、東京日本橋區本石町に生る。明治四十二年頃より俳句を作り始め、大正二年夫君零餘子が「枯野」を發行してより同誌に句を寄す。零餘子歿後、同誌が「ぬかご」と改題、零餘子雑詠選の後を繼ぐ。句集「龍膽」あり。(埼玉縣浦和町岸區東町)

長谷川時雨(本名。康子)

明治十二年、東京市日本橋に生る。三上於菟吉氏夫人。坪内逍遙氏に師事した。曾て尾上菊五郎と共に狂言座を創設し、また舞踊研究會を起したことがある。戯曲集「櫻ふぶき」「情熱の女」「時雨脚本集」(第一卷)のほかに長篇小說「處女時代」「美人傳」(二部)などの著作がある。現に雜誌『女人藝術』を主宰す。(東京市牛込區市ケ谷左內町三一)

長谷川伸（本名。伸二郎）

明治十七年三月十五日、横濱市に生る。小學校中途退學。數種の職業を經て現在都新聞記者。最近著書に戯曲集「疵高倉」「關の彌太ッペ」及び「紅蝙蝠」あり。(東京市外大崎町桐ケ谷八二九)

長谷川誠也（號。天渓）

明治九年十二月三日、新潟縣刈羽郡高濱町に生る。早稻田大學前身の東京專門學校文學科卒業(明治三十年)それ以來昭和二年末迄博文館編輯部員。目下著述業。臨時國語調査會委員、曾て早大文科の教授であったこともある。最近著書に「文藝思潮論」「文藝と心理分析」あり。(東京府下大崎町七八九)

長谷川如是閑（本名。萬次郎）

明治八年十一月、東京市深川に生る。明治三十一年東京法學院(中央大學)卒業。大阪朝日に入り、大正七年退社。雜誌『我等』を創刊主宰し、本年同誌を『批判』と改題引續き主幹たり。論文、社會評論、隨筆等極めて多く、外に創作集數篇あり。最近著作に「歴史を捻ぢる」現代日本文學全集の「長谷川如是閑集」あり。(東京市外中野町上ノ原九三七)

畑耕一

明治廿五年五月、廣島市堀川町に生る。大阪高商豫科卒業、八高工科中途退學、一高文科より東京帝大英文科を大正八年卒業。東京日日新聞學藝部へ勤務。大正十三年六月退社後松竹キネマ蒲田撮影所研究所長企畫部長。明大、日大講師。最近著書に「蝶の樂園」「陽氣な喇叭卒」「惡人の祭壇」等あり。(東京本郷元町、文化アパートメント內)

秦豐吉（別名。丸木砂土）

明治廿五年一月十四日、東京日本橋に生る。一高を經て、帝大法科卒業、直ちに三菱商事株式會社に入り現在に至る。多くの隨筆があり、最近著書に「西部戰線異狀なし」の翻譯、「トンネル」の翻譯の他最近創作「東京の女王」を發表。(東京市外大森山王二七八一)

花田比露志

明治十五年三月十一日、福岡縣朝倉郡安川村に生る。五高を卒へ一年間桑港、アラスカに遊び、歸って京都帝大法科に入る。卒業後大阪朝日、大正日日、讀賣等に勤め、目下大阪商科大學學生監兼教授たり。歌は正岡子規の遺風を慕ひ、歌集「さんげ」の外『あけび』主宰。

馬場勝彌（號。孤蝶）

明治三年十一月九日、高知縣高知市に生る。明治二十四年明治學院卒業。自明治二十八年至明治三十年中學教師。自三十年至三十九年日本銀行員。自三十九年至昭和五年四月慶應義塾大學部講師。現今勤先なし。最近譯書に「オリヴア・ツイスト」あり。(東京市小石川區水道端二の一八)

濱尾四郎

明治二十九年四月廿四日、東京に生る。東京高師附中、第一高等學校獨法科を經、東大法科を卒業。(大正十二年)同年司法官試補となり同十四年檢事となる。昭和三年まで東京地方裁判所、並に區裁判所檢事、同年退職、辯護士となる。最近著書に「殺人小說集」あり。(東京市四谷區左門町三二)

濱田廣介

明治二十六年五月二十五日、山形縣東置賜郡屋代村に生る。縣立米澤中學を經て早稻田大學英文科卒業。在學中より兒童文學に志し、爾來專ら童話童謠の作家として今日に及ぶ。最近著書に「キリスト物語」あり。（東京府東調布町下沼部六六三）

早坂二郎

明治三十年九月三十日、宮城縣仙臺市に生る。大正十年東京帝大法學部政治學科卒業。東京朝日、國民、東京每夕記者たりしことあり。最近著書に、ユーゴー「九十三年」シンクレーア「眞鍮の貞操切符」「現代人の生活戰術」「百%愛國者」の飜譯、「歷史を創る人々」「庶民金融」あり。（東京府下吉祥寺綠ケ丘五二四）

林久男（號。鴎南）

長野縣埴科郡坂城町に生る。第一高等學校東京帝國大學獨逸文學科卒業（明治四十一年）第七高等學校、第二高等學校教授を經て第三高等學校教授。大正十一年より獨逸文學研究の爲獨逸に留學、佛蘭西、英吉利等に轉學、同十三年歸朝。劇文學を研究し、外國劇の紹介につとめ又戲曲の創作數篇あり。ゲーテ、シルレルを始め獨逸文學の飜譯多く、隨筆、小品、評論等の著書數種あり。最近著書に「藝術より生活へ」「現代劇集」「狼火」「ギルヘルムマイスター」（譯）「藝術國巡禮」「ゲーテの面影」あり。（京都市下鴨下川原町四六）

林房雄（本名。後藤壽夫）

明治三十六年五月三十日、大分縣大分町に生る。東京帝大法科中途退學。全日本無產者藝術團體協議會作家同盟員。本年七月より學生事件にて二ケ年受刑中。最近著書に創作集「都會双曲線」「鐵窓の花」「新選林房雄集」新鋭文學叢書「海と飛魚の子と」評論隨筆集「都會の論理」あり。（東京市外杉並町高圓寺四一一）

林芙美子

明治三十七年十二月卅一日、山口縣下關市にて生る。廣島縣尾道市高等女學校卒業の外學歷なし。株屋の店員・牛屋の女中・事務員、集金掛り・女給・轉々無數の職業につく。著書に「蒼馬を見たり」「放浪記」「續放浪記」あり。（東京市外上落合八五〇）

林和（ヤワラ）

明治二十年八月二十八日、千葉縣小見川町大利根の沿岸に生る。早稻田大學文科出身。坪内博士を會長とする舊文藝協會演劇研究所第一回卒業。後ち守田勘彌、市川猿之助等と文藝座を創立し舞台監督並びに主事となつて新劇運動に力を致す。大正十三年帝國劇場に招聘され專ら劇化及び演出監督等に當り、文藝顧問として帝劇より更に松竹に移り今日に至る。東京朝日新聞揭載の小說「遊俠男一代」を最も最近の著作とす。（東京市外和田堀町和田五八）

葉山嘉樹

明治二十七年三月十二日、福岡縣豐津村に生る。鄕里にて中學卒業後、マドロス其他多くの勞働者としての生活を送り、治警に二度觸れた。「文藝戰線」同人。「海に生くる人々」「誰が殺したか」「稚き闘士」等の著作集がある。（東京市外高圓寺三九）

原久一郎（號。白光）

明治二十三年四月十日、新潟縣水原町に生る。大正三年早稻田大學英文科卒業。大正六年三月東京外國語學校露語專修科卒業。最近著書に、トルストーイの「懺悔」同「兒童の爲めに說かれた基督の教」同「惡に抗しないといふ事について」同「妻に與へた全書簡集、附初戀の手紙」「大トルストーイ傳第四卷」「結婚の悲劇」あり。（東京府下長崎町三八八五）

春山行夫

明治三十五年七月一日、名古屋市に生る。正規の學校敎育を受けず。陶器工(四年)株式取引所員(四年)出版社編輯部員(三年)たりしことあり。「詩と詩論」(季刊)現代の藝術と批評叢書「世界文學評論」(月刊)を創刊し、引つゞきその編輯に從ふ。最近著書に「楡のパイプを口にして」(詩論集)「植物の斷面」(詩集)あり。(東京市外中野町上ノ原七七一、篠原方)

番匠谷英一

明治二十八年八月十四日、大阪府佐野町に生る。京都大學獨文科卒業。立敎大學敎授。戯曲集「楊貴妃」他に戯曲數篇同飜譯數篇あり。(東京市外目白上り屋敷一一一九)

半田良平

明治二十年九月十日、栃木縣上都賀郡北犬飼村深津に生る。同四十五年東京帝大英文科卒業、爾來私立東京中學校語學敎師「國民文學」同人。歌集「野づかさ」の外數種の著あり。(東京市外上落合四二七)

日夏耿之介(本名。樋口國登)

明治二十三年二月二十二日、長野縣下伊那郡飯田町に生る。早稻田大學文學部英文學科卒業(大正三年)著書「假面の詩人」「パンテオン」「サバト」「游牧記」に關係す。大正十一年來早稻田大學文學部に敎鞭をとる。最近著書に「明治大正詩史」「日夏耿之介全詩集」あり。(東京市外阿佐ケ谷八七三)

久板榮二郎

明治三十一年七月三日、宮城縣岩沼町に生る。宮城縣立工業學校機械科、二高を經て東大文科卒業。現在は日本プロレタリア作家同盟員、同劇場同盟東京左翼劇場員。戯曲、小說、評論等あり。(東京市外上落合四八〇日本プロレタリア作家同盟事務所氣附)

日高只一

明治十二年三月廿三日、廣島縣山縣郡新庄に生る。早稻田大學英文科卒業。英米兩國に二ケ年留學。早大文學部敎授。(東京市外杉並町阿佐ケ谷一一)

平田禿木(本名。喜一)

明治六年二月十日、東京日本橋區伊勢町に生る。明治十七年十一月公立學校(現開成中學校)に入學、同二十三年第一高等學校に進み、途中退學、後オックスフォード大學に英文學、並に言語學を專攻す。歸朝後東京高等師範學校學習院明治大學等に敎鞭を執る。明治四十五年以後は、敎職をやめて全く著作に沒頭す。最近著書に「詩釋ハアディ小曲集」「グランド・バビロン・ホテル」等がある。(東京市本郷區駒込曙町一二)

平林たい子

明治三十八年十月三日、長野縣諏訪郡中洲村に生る。諏訪高等女學校卒業後上京、店員事務員等をなす。最近著書に、小說集「毆る」「敷設列車」「石崙工場の同志」「耕地」がある。(東京市外杉並町高圓寺六六七)

平林初之輔

明治二十五年十一月八日、京都府竹野郡深田村に生る。大正六年早大卒業。やまと新聞、國際通信記者をした後、大正十五年より昭和三年二月「太陽」休刊まで同誌の主幹。多くの文藝評論、飜譯及び探偵小說全集中の「平林初之輔集」及び「文學理論の諸問題」(評論集)等がある。現早大講師。(東京市小石川區水道端町一ノ一二)

平山蘆江(本名。壯太郎)

明治十五年十一月十五日、兵庫港川に生る。幼少長崎に送られそこに育つ。長崎商業學校と東京府立五四中學を各々二年づつ在學途中退校。滿洲に渡り放浪、二十五歲に歸り、都新聞社記者となり大震災後創作の筆を持ち始め、昭和五年九月、退社、作家として專念する傍ら昭和六年正月より讀

誌『大衆文藝』を創刊す。最近著書に「唐人船」二卷、「五月雨日記」「西南戰爭」等あり。(東京市牛込區富久町一一三)

廣瀨哲士

明治十六年九月二十二日、岡山縣津山市外に生る。東大佛文科出身。慶大文學部教授。最近著書「新フランス文學」(東京府井荻町上荻窪四二七)

廣津和郎

明治二十四年十二月、東京牛込矢來町に生る。故柳浪氏の息。大正二年早大文科卒業。「二人の不幸者」の外、多くの小說集と、隨筆文藝評論、飜譯がある。最近著に、「新選廣津和郎集」「薄暮の都會」等がある。(東京府下小田急沿線豪德寺前)

深尾須磨子

明治三十一年丹波の山間に生る。高等女學校卒業。九年前官吏にして詩人たりし夫深尾贇之丞の歿後文筆生活に入る。曾て三年間歐洲に滯在。最近著書に「侯爵の服」(プチタブロオ集)「牝鷄の視野」(詩集)「犬猫の會話七つ」(飜譯小說)あり。(東京麹町區三番町七六)

福士幸次郎

明治二十二年十一月、弘前市に生る。青森中學、開成中學何れも中途退學、國民英學會に學ぶ。明治四十二年初めて詩を發表し今日に至る。詩集「太陽の子」その他あり。(東京市外野方町上高田三三六)

福田正夫

明治二十六年三月二十六日、神奈川縣小田原町に生る。東京高等師範中途退學。六年間小學校教員以後文筆生活を續く。最近著書に「自由詩講座」「歎の門」(東京市外世田ヶ谷下北澤八〇九)

福永恭助

明治二十二年三月十七日、東京市牛込區矢來町に生る。明治四十一年江田島海軍兵學校を卒業。大正三年秋青島攻城戰に參加し、大正六七年地中海に出征した。大正十三年國際平和のため海軍少佐で現役を退いてからは洋書修業の傍、隨筆文藝に從ふ。最近著書に「軍艦物語」「海軍物語」「ほまれの十字章」あり。(神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三三九)

藤井眞澄

明治二十二年二月五日、岡山縣御津郡馬屋下村芳賀に生る。關西中學、早大政經科を出て、中央公論社──雜誌『黑煙』「演劇及映畫講義錄」編輯──日本映畫俳優學校理事講師、大衆日本社組織──等を經て、現在雜誌「祖國」編輯。最近著書に「日本民族主義の宣言」「常住の日本民族總動員」あり。(東京府北多摩郡狛江村九三〇)

藤澤清造

明治二十二年十月二十八日、能登の七尾に生る。尋常小學校卒業。足袋屋の小僧や新聞配達になる。其の中、脚に骨髓炎を患つて、ずつと病床の人となる。上京後、活版屋の職人、辯護士の書生、自由勞働者、雜誌記者等になり、後ち賣文業を始む。(東京市下谷區谷中初音町四ノ五四天野方)

藤澤桓夫

明治三十七年七月十二日、大阪市に生る。今宮中學、大阪高校、東大文學部卒業。最近著書に「生活の旗」「傷だらけの歌」「辻馬車時代」あり。(東京市外澁谷町神泉八、小野勇氏氣付)

藤澤衞彥

明治十八年八月二十日、埼玉縣浦和町に生る。明治四十二年明治大學文學科卒業。明治四十二年一月國學院大學出版部に入り「兄弟姉妹」を主宰し、明治大學「學叢」編輯主任を兼ね、傍ら「閑老安藤對馬守」

傳を執筆し、大正三年傳説研究に志して日本傳説學會を設立、爾來多くの傳説叢書を編む。大正十二年震災後、臨時震災救護事務局に招聘せられ、大震火災志修史の業に從事す。同十五年復興局に轉じ、復興局修史編纂囑託として今に至る。最近著に、「世界神話傳説大系」「日本神話傳説集」「明治流行歌史」「明治風俗史」「俗謠末摘花」「妖怪叢談全集」「孝子黄嘴」（東京市小石川區小日向臺町一ノ二八）

藤森成吉

明治二十五年八月二十五日、長野縣上諏訪町に生る。一高を經て東大獨文科卒業。一年間六高の講師をした。「若き日の惱み」發表後小説戯曲の作多し。新著に「川懸記」「新選藤森成吉集」「光と闇」等がある。「戰旗」同人。目下伯林滯在中。

舟橋聖一

明治三十七年十二月二十五日、東京本所區横網町に生る。高千穂中學校・水戸高等學校・東京帝國大學國文科を經て、現在、明治大學在勤。大學時代、雜誌「朱門」の編輯同人、「心座」同人、「文藝都市」同人等を經て、現在、劇團「蝙蝠座」同人及新興藝術派俱樂部員である。最新著に・新興藝術派叢書「愛慾の一匙」・蝙蝠座同人と共著「ルル子」あり。（東京市外下落合四三五）

逸見廣

明治三十三年一月十九日、山形縣に生る。早稲田大學獨逸文學科卒業。最近著書に、創作集「村の倫理」がある。（東京市牛込區若松町五八）

保篠龍緒（本名。星野辰男）

明治二十五年十一月六日、長野縣に生る。東京外國語學校佛語科卒業。文部省商事會社、東京高等學校等を經て東京朝日新聞社に入社、グラフ部長。近著に、「ルパン全集」十四卷「保篠龍緒集」一册「七妖星」一册あり（東京市小石川區大塚窪町二七）

細田源吉

明治二十四年六月一日、川越市に生る。川越市（當時は町）立小學校卒業後上京、商店員、下宿屋の下男、外人牧師のボーイ、苦學生等々。後早大英文科へ入學、大正四年卒業、春陽堂書店に入り「新小説」及び「中央文學」の編輯に從ふ。大正九年、初めて創作を發表。大正十五年「文藝行動」を發刊。八月廢刊。昭和二年十月、勞農藝術家聯盟に加入。最近著書に、長篇「罪に立つ」「ことふろさけぶ」「大都」「信濃市場」存生」短篇集「死を恃む女」「はたち前」「未亡人」「本心」「非路過程」あり。（東京市外西荻窪六五五）

細田民樹

明治二十五年一月二十七日、東京府下南葛飾郡瑞江村今井に生る。廣島中學を經て大正四年早大英文科卒業。同年十二月より滿三ヶ年廣島騎兵第五聯隊に一兵卒として服役。現在「文藝戰線」同人。最近著書に、『赤い曙』『黄色い窓』『黒の死刑女囚』『眞理の春』『地獄』がある。（東京市外吉祥寺旭小路二六五八）

堀木克三

明治二十五年七月、三重縣飯南郡肘和村に生る。早大英文科卒業。中學教師をしたことあり。小説、文藝評論、隨筆などあり。

堀口大學

明治二十五年一月八日、東京市に生る。慶應義塾文學部を中途退學。外遊十餘年。大正十四年春歸朝。最近著書に、譯詩集「青白赤」アンドレ・ジイド作小説「パリユウド」ポオル・ヴアレリイ詩論「文學」あり。（東京市小石川區小日向水道町一〇八）

堀辰雄

明治三十七年十二月、東京に生る。第一高

等學校を經て東京帝國大學國文科卒業。最近著作に「不器用な天使」「コクトオ抄」「聖家族」がある。（東京本所區新小梅町二ノ一）

本間久雄

明治十九年十月十一日、山形縣米澤市に生る。山形縣立米澤中學校卒業後早稻田大學文學部に入り明治四十二年卒業。大正七年同大學文學部講師となり兼ねて雜誌「早稻田文學」を主宰す。昭和二年十二月同雜誌主幹を辭し、早稻田大學文學部留學生として昭和三年三月渡歐、同四年三月歸朝。現に早大文學部並びに女子英學塾高等科講師。最近著書に「文學概論」「歐洲近代文藝思潮概論」「生活の藝術化」「婦人問題十講」「滯歐印象記」あり。（東京市小石川區雜司ケ谷町一四四）

前田河廣一郎

明治二十一年十一月十三日、仙臺市に生る。宮城縣立第一中學校五ケ年迄にて學校らしいものには關係なし。德富蘆花に師事せることあり。十九歲の時渡米す、體驗——ボーイ、西洋人の下僕、荷馬車馭者、船員、廚司長、菓子製造職工、書記など種々あり。大正九年歸朝。最近著書「新選前田河廣一郎集」及びその續篇。「支那」「十年間」「セムガ」戲曲集「野獸」その他數冊等あり。（東京市外高圓寺六二〇）

前田夕暮（本名。洋造）

明治十六年七月、神奈川縣中郡大根村南矢名に生る。明治三十九年白日社創立、雜誌「向日葵」發行、次いで明治四十四年四月雜誌「詩歌」を發行して今日に到る。最近自由律短歌を提唱す。歌集「收穫」「陰影」「生くる日に」「深林」「前田夕暮集」「原生林」「虹」改造社現代短歌全集第十一篇「前田夕暮集」「詩文集」「綠草心理」「烟れる田園」「雲と野菜」（東京市外西大久保一二八）

牧野信一

明治二十九年十一月十二日相州小田原町に生る。大正八年早稻田大學英文科卒業同年より約一年餘り時事新報社に務めたり。著書に「西部劇通信」あり。（東京市外大森新井宿山王二六八五）

正木不如丘。（本名。俊二）

明治二十年二月二十六日、長野市に生る。大正三年東大醫學部卒業大正九年より大正十一年迄歐米留學、同十三年醫學博士。大正十一年夏東朝紙に隨筆「診療簿餘白」を發表、爾來診療の餘暇文筆をとる。現在、富士見高原日光療養所長、慶應大學講師最近著書、譯「洒落の精神分析」隨筆「女ごゝろ」創作「診療室隨筆」（長野縣富士見村富士見高原日光療養所）

正富汪洋（本名。由太郎）

明治十四年四月十五日、岡山縣邑久郡本庄村大字本庄に生る。東洋大學國漢文科卒業尾上柴舟、前田夕暮、三木露風、若山牧水等と歌の團體「車前草社」を結んだ頃から漸く世に出た。東洋大學講師、名教中學校教諭、久しく詩誌「新進詩人」を刊行し若き詩人養成に努めた。著書「詩人スウインバーン」（東京市外代々木富ケ谷一四五五）

正宗白鳥（本名。忠夫）

明治十二年三月三日、岡山縣和氣郡伊里村穗浪に生る。早稻田專門學校文學科卒業後讀賣新聞に七年間記者生活を送る。昭和三年十一月外遊、歐米を巡遊して同四年十月歸朝す。初期には專ら小說、近時は戲曲、評論多く、文藝時評を斷えず發表しつゝあり。最近著書に「正宗白鳥集」（現代日本文學全集）評論集「現代文藝評論」等あり。（神奈川縣大磯町東町）

松居松翁（本名。眞玄）

明治五年二月十八日仙臺市に生る。國民英學會出身。報知新聞、萬朝報記者をした後

帝國劇場、三越、等に關係せしことあり。外遊二回、「高野長英」その他多くの戲曲がある。松竹合名會社顧問。（東京市外長崎町荒井一九〇二）

松岡　讓

明治廿四年九月廿八日、新潟縣古志郡上組村大字村松に生る。長岡中學第一高等學校を經て大正六年東京帝大哲學科卒業。著書に「法城を護る人々」三卷「憂鬱な愛人」「日中出現」「漱石の思ひ出」等。（東京市外大井町元芝八一三）

松瀨青々（本名。彌三郎）

明治二年四月大阪市に生る。明治三十二年東京に出で『ホトヽギス』の編輯を手傳ふ。後年大阪に歸り、「大阪朝日新聞」の俳欄選者をなすかたはら、雜誌『倦鳥』の發行を續け今日に至る。

松田解子

明治三十八年七月十八日、秋田縣仙北郡荒川村に生る。秋田女子師範學校本科二部卒業。教員、女工、事務員等轉々。『戰旗』『女人藝術』等に小説を發表す。（東京市本所區柳島元町アパート一ノ一八）

松根東洋城（本名。豐次郎）

明治十一年二月二十五日東京築地に生る。松山中學、一高、東京帝大法科大學を卒業。前十年吏、後十年野人、毎月俳誌「澁柿」を刊行す。（東京市牛込區余丁町四一）

松村英一

明治二十二年十二月三十一日、東京芝愛宕下に生る。學歷といふ程のものなし。十七歲頃より窪田空穗に師事して和歌を學ぶ。新聞記者雜誌記者たりし事あり。短歌雜誌を主宰し「國民文學」同人たり。「松の葉」新釋「田安宗武歌集」新譯あり。（東京市小石川區大塚坂下町一〇〇）

松村みね子（本名。片山廣子）

明治十一年東京麻布に生る。故日本銀行理事片山貞次郎氏夫人、東京英和女學校出身、多くの和歌と愛蘭土文學の飜譯紹介あり。（東京市外大森新井宿一、三五二）

松本　泰（本名。泰三）

明治二十二年二月二十二日、東京に生る。慶應義塾文學部卒業英國留學六ケ年米國漫遊三ケ月。最近書に、世界犯罪叢書第一篇「情痴殺人篇」「結婚魔ランドル」「探偵小説通」あり。（東京市外東中野二四〇五）

間宮茂輔

明治卅二年二月廿日、東京市牛込區市ケ谷仲の町に生る。慶應義塾文科中途退學、株式店員、鑛山事務員、燈臺守、出版社員その他自由勞働數種の經歷あり。最近「文藝戰線」社同人となる。（東京市外碑衾町衾五九）

眞山青果（本名。彬）

明治十一年九月、仙臺市に生る。第二高等學校中途退學。小説「南小泉村」戲曲集「平將門」の外、近著に、「桃中軒雲右衛門」「鼠小僧次郎吉」（戲曲集）「乃木將軍」（戲曲）「盲魚」（小説集）「江藤新平」（戲曲）等あり。（東京市小石川區第六天町四八）

三上於菟吉

明治二十四年三月、埼玉縣北葛飾郡櫻井村に生れる。粕壁中學校卒業、早大英文科に學んだ。小説の作頗る多く、長篇小説「愛慾の扉」「空しき靑春」「暗い情熱」「妙齡」「靑春の罪」「激流」「日輪」「炎の空」「春は甦れり」「情熱時代」「惡魔の戀」「落花劍光錄」「火刑」「淀君」「淸川八郎」その他の著がある。ほかに短篇、戲曲、隨筆及び飜譯「獸人」「歡樂」「美しき寡婦」「森の魔女」「モンテクリスト伯」「三銃士」「シャロックホームズの歸還」などあり、目下長編「日淸戰爭」執筆中。（東京市牛込區市ケ谷左内町三一）

三木露風（本名。操）

明治二十二年六月二十三日、兵庫縣龍野に生る。早稻田、慶應兩大學卒業。十七歲詩集「夏姬」を出して以來多くの詩集及び童謠集がある。曾てトラピスト修道院に講師たりしことあり。（東京市外吉祥寺五八二）

水木京太（本名。七尾嘉太郎）
明治二十七年六月十三日、秋田縣橫手町に生る。縣立橫手中學校、慶應義塾大學文科卒業後、資生堂化粧品部囑託、「三田文學」編輯等をなし、現に慶應義塾大學文學部講師、丸善株式會社囑託。最近著に「新劇通」あり。（東京赤坂區氷川町二七）

水野廣德
明治十年十月廿四日、愛媛縣松山市に生る。愛媛縣立中學校より明治廿九年二月海軍兵學校入校、明治三十一年十一月同校卒業、明治三十三年一月海軍少尉、海軍大尉にて日露戰役に從軍（水雷艇長）。歐洲戰爭中及同戰後軍事研究の爲め歐米外遊二回大正七年海軍大佐大正十年八月筆禍に原因して現役を退く。最近著書に「戰影」あり。（東京市外駒澤町上馬一四三）

水守龜之助
明治十九年六月二十二日兵庫縣赤穗郡若狹野村に生る。學歷なし。新潮社その他一二三の出版書肆に勤む。曾つて文化學會出版部を經營せり。「歸れる父」その他の小說の外に隨筆集「候鳥時節」等あり。（東京市牛込區辨天町六〇）

水上（ミナカミ）瀧太郎（本名。阿部章藏）
明治二十年十二月六日、東京市麻布區飯倉三丁目に生る。慶應義塾卒業。明治生命保險會社使用人となり今日に及ぶ。最近著書「果樹」「貝殼追放」「月光集」あり。（東京市麴町區下六番町二九）

南正胤
明治二十九年一月一日、奈良縣宇陀郡榛原町上井足の農家に生る。奈良縣立畝傍中學を卒業。雜誌記者、酒商、農種販賣、等轉々の生活を送る。現在文筆生活「おいらはプロレタリア」其他プロレタリア歌人同盟員と共著の「プロレタリア歌論集」二冊あり。（東京市外上落合五）

三宅幾三郎
明治三十年十月十五日、兵庫縣加古川町に生る。三高を經て東京帝大英文科卒業。後浦和中學、高知高等學校等に勤め、現に文化學院敎師。多くの短篇小說がある。（東京市牛込區富久町八三）

三宅周太郎
明治廿九年七月廿二日、兵庫縣古川町に生る。同志社普通部卒業後慶應文科大學卒業。目下、「東京日日新聞」社學藝課勤務。「演劇往來」「演劇評話」「文樂の研究」の近著あり。（東京市外杉並町馬橋二四四）

三宅やす子
明治廿三年三月十五日、京都に生る。お茶の水高女出身。曾て、月刊雜誌「ウーマンカレント」を五ケ年刊行す。最近著書、「金」「燃ゆる花から」「新選三宅やす子集」等。（東京府下砧村）

宮島新三郎
明治二十五年一月八日、東京神田和泉町に生る。私立東京中學校を經て、大正四年早大英文科卒業。東京中學敎師、文明協會編輯員、早稻田文學同人たりしことあり。大正十年早稻田大學同高等學院に奉職。大正十四年五月早大文學部より歐洲に留學、昭和二年五月歸朝、文明協會編輯長、早大文學部助敎授、最近著書「文藝批評史」「現代英國印象記」等。（東京市外高井戶町松庵一四三）

宮嶋資夫（法號。蓬洲）
明治十九年八月一日、東京市四谷に生る。

小學校卒業後職業轉々三十種。最近得道して禪門に入る。最近著書、小說「金」及「新興文學全集」「佛門に入りて」（京都市外嵯峨天龍寺內）

宮地嘉六

明治十七年六月十一日、佐賀市唐人町に生る。尋常小學校中途退學、仕立屋小僧、造船鐵工、造機旋盤工砲兵雜誌記者等の經歷あり。最近著書「愛の十字街」（東京市外落合町葛ケ谷一五）

宮森麻太郎

明治二年一月十五日、廣島縣豐田郡東生口村に生る。明治二十二年四月慶應義塾別科卒業、同三十四年より今日まで慶應大學、東洋大學中央大學、明治大學等に於て英文學を教授す。大正四年より五年にかけて歐米諸國の教育事情及劇壇の視察に赴く。大正六年四月交詢社々員五十名の需に應じて文話會を起し文藝に關する講演をなし現時に及ぶ。英文福澤諭吉傳の著作を振出しに今日に至るまで日本文學及日本事情の英文著述を時々公にせり。最近著書「英譯古今俳句一千吟」（東京市外上大崎三八〇）

三好十郎

明治三十五年四月、佐賀市に生る。早稻田英文科出身。「戰旗」同人。詩の發表多し。（東京市外千歲村五二三）

三好達治

明治三十三年八月、大阪市に生る。東大佛文科卒業。詩集「測量船」あり。（長野縣白骨溫泉齋藤方）

武者小路實篤

明治十八年五月十二日、東京麴町元園町三八に至る。學習院卒業後、帝大文科に一年學ぶ。大正七年頃から新しき村の仕事を始める。雜誌『白樺』『大調和』等を主宰し、最近個人雜誌『獨立人』を出せり。今日まで發表せる小說、戲曲、感想、隨筆等極めて多く、「武者小路實篤全集」十二卷あり。外に最近著書に、「日蓮」「劇五篇」あり。（東京府下北多摩郡千歲村下祖師ケ谷四四一）

村上鬼城（本名。莊太郎）

慶應元年五月十七日高崎鞘町に生る。寺小屋式の中學を卒へて後、漢學、法學を學び、裁判所書記を勤む。俳句を『ホトトギス』に投じ、乙字選「鬼城句集」あり。（高崎市並榎町）

村松梢風

明治二十二年九月靜岡縣周知郡飯田村に生る。慶應義塾文學部中途退學。小說、隨筆大衆文學等の著作多し。「談話賣買業者」「村松梢風集」等の最近著あり。雜誌『騷人』を出せしが、最近廢刊す。（東京市神田區村木町二）

村松正俊

明治二十八年四月、東京に生る。東京帝國大學文學部卒業、大學院。慶應義塾大學講師となる。大正九年より詩及び評論、數百篇を發表、ギリシヤ文學研究、飜譯數篇。最近著書に、「西洋の沒落」「西洋哲學物語」「佛蘭西大革命史」あり。（東京麻布區富士見町四三）

村山知義

明治卅四年一月十八日、東京神田に生る。開成中學、第一高等學校。東大宗敎哲學科半途退學。後獨乙に遊學す。美術家團體「マヴォ」「三科」等を組織せることあり。現在「戰旗」同人。最近著書に、「プロレタリア美術のために」「日本プロレタリア演劇論」「新選村山知義集」あり。（東京府下上落合一八六）

室生犀星（本名。照道）

又魚眠洞と號す。明治二十二年八月一日金澤市裏千日町に生る。最近著書に、抒情詩集「鳥雀集」自叙傳「生ひ立ちの記」「時樂

集「天馬の脚」「薔薇の襞」發句集「魚眠洞發句集」あり。（東京市外大森馬込町谷中一〇七七）

望月百合子

明治三十三年九月五日、甲府市に生る。成女高等女學校卒業、早稻田大學文科聽講生ソルボンヌ大學聽講生、讀賣新聞記者、婦人書報記者をなす。かつて「タイース」（飜譯）を出した。（東京府下千歳村八幡山）

百田宗治

明治二十六年一月二十五日大阪市に生る。小學卒業後、個人教師に就てフランス語を學びたる外に學歷なし。大正八年雜誌「解放」創刊に從ひ、後、雜誌『日本詩人』の最初の編輯者となる。現在アンデパンダン組織『今日の詩』を主宰。詩集「何もない庭」「詩集」「冬花帖」「百田宗治集」（現代詩人全集）「現代詩講座」全十卷編纂（東京府下中野桃園三三四二）

森岩雄

明治三十二年二月廿七日、横濱市に生る。成蹊學園專門部中途退學、活動寫眞業に身を投じ今日に至る。最近著として、飜譯「ハリウッドガアル」「トオキイ・サイレント映畫脚本二十講」あり。（東京市外千駄ケ谷町原宿二二〇）

森下雨村（本名。岩太郎）

明治二十三年、二月十七日高知縣佐川町に生る。明治四十四年早大英文科出身。大正六年までやまと新聞記者。爾來博文館編輯部。探偵小說、飜譯等の著作多し。（東京小石川區小日向臺町三ノ一〇五）

森田草平（本名。米松）

明治十四年三月十九日、岐阜縣稻葉郡鷺山村に生る。東京帝國大學文科文學部（英文學科）卒業（明治三十九年三月）。明治四十年三月より翌年二月迄天台宗中學及京華中學に奉職。明治四十三年東京朝日新聞文藝欄擔當一年間位にて廢止となる。大正九年法政大學教授となり今日に及ぶ。最近著書に「吉良家の人々四十八人目」飜譯「デカメロン」（神奈川縣鎌倉町由比ケ濱一の鳥居）

森山啓

明治卅七年三月、新潟縣にて生る。東京帝大文科を半途退學。舊新人會、舊プロ藝文學部等を經て現在日本プロレタリア作家同盟の一員。多くの詩と詩論と少數の小說がある。（福井市清川中町八森松方）

矢代東村（本名。龜廣）

明治二十二年三月十一日、千葉縣夷隅郡東村に生る。日本大學專門部法律科卒業。現在東京地方裁判所々屬辯護士。初め前田夕暮の『詩歌』に入り、後雜誌『日光』の四年頃から口語に依る短歌の制作をはじめる。（東京市麹町區仲町五）

保高德藏

明治二十三年十二月十日、大阪に生る。早大英文科出身。讀賣新聞記者博文館の記者等をしたことがある。創作「泥濘」「孤獨結婚」「陽子」その他數篇ある。（東京市淺草區茅町二ノ一二）

安成二郎

明治二十一年一月十五日、秋田縣阿仁合町に生る。秋田縣立大館中學半途退學、上京して雜誌、新聞の記者となり、昭和四年八月、大阪每日學藝部囑託を辭して、目下浪人。（東京府下阿佐ケ谷二七七）

矢田挿雲（本名。義勝）

明治十五年二月九日、金澤市に生る。早大出身。正岡子規に俳句を、福本日南に歷史を學び、十六年前報知新聞社に入り現に社員たり。中途で一年洋行す。六年前、報知夕刊に昔出せし「太閤記」を今猶續け、執筆。每月俳誌『千鳥』を主宰。（東京市外大森不入斗四七一千鳥編輯所内）

柳澤　健

明治二十二年一月、若松市に生る。大正四年東京帝大法科卒業。遞信省官吏、朝日新聞記者、外遊一年半。外務省に入り佛國大使館書記として大正十三年渡佛、昭和四年歸朝。詩集、評論集、隨筆等がある。（現在墨西哥公使館勤務）

柳田國男

明治六年播磨國北條に生る。東京帝大政治科出身。貴族院書記官長たりしことあり。又歐米を漫遊す。年少より詩を作る。今は傳說の研究に努め、多くの著述がある。雜誌「鄕土研究」主宰。東京朝日新聞編輯顧問。（東京府下砧村成城學園前）

柳原燁子（號。白蓮）

明治十八年十月十五日、東京麻布櫻田町に生る。麻布南山小學校、竹早町師範附屬小學校、華族女學校、英和女學校出身。柳原前光次女北小路隨光養女。「幻の華」「几帳のかげ」等の歌集のほか、小說、戲曲、隨筆など多し。（東京市外高田町三六三〇）

山崎　斌（アキラ）

明治二十五年十一月九日、長野縣東筑摩郡麻績村に生る。二十歲上京國民英學會に學ぶ。二十三歲より放浪。二十七歲朝鮮より歸り雜誌「靑年改造」を創刊。三十歲處女作「二年間」を脫稿。三十五歲選集「靜かなる情熱」成る。「日本文學」主宰。最近著書に、長篇「犧牲」短篇集「夕陽」小品集「早春」がある。（東京府澁谷町大和田六一）

山田淸三郎

明治二十九年六月十三日、京都市に生る。小學以外に學歷はない。幼時より實社會に投じ丁稚、給仕、新聞配達、職工、自由勞働等をやる。一九二三年「種蒔く人」同人以來文藝運動に參加し今日に至つてゐる。現在ナップ日本プロレタリア作家同盟員、プロレタリア科學研究所員。最近著書に「日本プロレタリア文藝運動史」（一九三〇年）「プロレタリア文藝辭典」（川口浩共編一九三〇年）「日本におけるプロレタリア文藝理論の發展」あり。（東京市外落合町上落合七九一）

山田珠樹

明治二十六年二月廿五日、東京市芝に生る。慶應義塾幼稚舍、東京高師附屬中學、一高、東京帝大（心理學專攻）を經て東京帝大助教授兼司書官となり現に文學部及圖書館に勤務。最近著書に、新潮社世界文學講座佛蘭西篇中世十六、七世紀小說物語[illegible]ある。（東京市芝區三田臺町二丁目七）

山內義雄

明治二十七年三月廿二日、東京に生る。曉星小學校、同中學校を經て東京外國語學校佛語科卒業、京都帝國大學法學部、經濟學部に暫らく在籍。東京外語講師となり、目下早大文學部講師。最近著書に、ポール・ブールジェ「弟子」の飜譯。（神奈川縣鎌倉長谷二八七）

山本修二

明治廿七年一月廿九日、京都に生る、三高を經て京大英文科卒業、現三高教授。（京都市左京區北白川平井町二三）

山本有三（本名。勇造）

明治廿年九月一日、栃木縣栃木町に生る。小學卒業後小僧にやられしも、その後不規則なる學歷を經て兎に角大正四年東京帝國大學獨逸文科卒業。大正六年より同十二年迄早稻田大學講師、同十三年『演劇新潮』の編輯をなす。その後は專ら制作に從ふ。最近の著書は長篇小說「波」戲曲「女人哀詞」小說「風」（連載中）（東京府下北多摩郡武藏野町吉祥寺一八二〇）

横瀨夜雨（本名。虎壽）

明治十一年一月一日、茨城縣眞壁郡大寶村

大字横根に生る。大寶尋常小學校四學年修業の外、經歴無し。最近著書に「横瀬夜雨詩集」がある。（茨城縣眞壁郡大寶村横根）

横溝正史

明治卅五年五月廿四日、神戸市に生る。大阪藥學専門學校を卒業。暫く自宅にてくすり屋を營業の後、博文館に入社、雜誌の編輯に當り、現在に至る。探偵小説の作多く、近著に「日本探偵小説全集」中の「横溝正史集」あり。（東京市小石川區小日向臺町三ノ六四）

横光利一

明治三十一月三月十七日、大分縣宇佐郡長峰村に生る。早稻田文科に學ぶ。「春は馬車に乘つて」の小説集の外、小説多く最近著に「新選横光利一集」「横光利一集」「高架線」がある。（東京市外世田ケ谷下北澤一四五）

與謝野晶子

明治十一年十二月七日、堺市に生る。堺女學校卒業。三十四年上京同年秋與謝野寛氏と結婚す。歌集「みだれ髪」を出して歌壇に一新機運を作る。多くの歌集と評論集がある。現在文化學院教師。雜誌『冬柏』同人、近著に「霧嶋の歌」（寛氏と共著）等あり。（東京市神田區駿河臺袋町十二文化學院内）

與謝野寛

明治六年二月廿六日、京都市岡崎町に生る。多く落合直文、森鷗外二家に師事す。學校の經歴なく獨學に由り、國語、國文、漢籍、佛文學等を修む。三十年來日本語原の研究と詩歌の創作に從事す。慶應義塾大學文學部教員。東京市神田區駿河臺袋町十二番地に住む。郊外下荻窪三七一與謝野光方を讀書室として滯在す。著書あれども刊行するに至らず。友人と雜誌『冬柏』を發行しつゝあり。

吉井勇

明治十九年十月八日、東京芝高輪南町に生る。早大中途退學。中學時代より歌、俳句を作り新詩社に加盟す。歌集は「酒ほがひ」以下十數種、その他に戲曲、小説もある。「スバル」を主宰。（東京市外澁谷町金王三五）

吉植庄亮

明治十七年四月三日、千葉縣印旛郡本埜村下井三四番地に生る。東京帝國大學法科を卒業。郷里に籠居、後大正十年二月中央新聞入社、文藝部長とし、詩歌中心文藝欄を作る。後政治部に轉じ、十三年歸郷、十五年より五十町歩開墾着手。現に水田三十六町歩畑四丁歩完成自作、農業革新に志す、昭和五年一萬七百二十九石の記錄的水稻を生む「白菊會」「日光」同人たりき。今『橄欖』主幹。最近著に、歌集「寂光」歌集「くさはら」歌集「煙霞集」あり。（千葉縣印旛郡本埜村下井三四）

吉江喬松（號。孤雁）

明治十三年九月五日、長野縣東筑摩郡鹽尻町に生る。明治卅八年早稻田大學文學部卒業同四十年より大正五年まで同英文科講師大正五年九月より同大學留學生として巴里大學へ大正九年まで留學、同年九月歸朝、佛蘭西文學科創設、同科主任教授大正十三年より早大文學部文學科主任、昭和五年十月文學部長「佛國滯在中」「浦島」「役の行者」の佛文譯。歸朝後、「近代文明と藝術」「佛蘭西印象記」「佛蘭西文藝印象記」「自然讀本」（三冊）「南歐の空」「吉江喬松詩集」飜譯「佛蘭西古典ラスィヌ悲劇」其他多し（神奈川縣鎌倉町長谷二三八）

吉川英治

明治廿五年八月、横濱市尾上町に生る。學歴なく職歴二十種に近し、「鳴門秘帖」「江戸三國志」のほか、大衆小説多く、最近著書に「貝殼一平」「飢ゑたる彰義隊」がある。（東京市外上落合五五三）

吉田絃二郎（本名。源次郎）

明治十九年十一月廿四日、佐賀に生まる。明治四十四年早稻田大學英文科卒業。久しく早稻田大學文學部講師を勤めたり。多くの小說、戲曲を著し、最近著に、「霧船紀行」「白雲飛ぶ」「新選吉田絃二郎集」「新選吉田絃二郎集續編」等あり。（東京市本鄕區駒込林町二一六）

吉屋信子

明治二十九年一月十一日、新潟市に生る。栃木縣立高等女學校卒業、處女作「地の果まで」大阪朝日新聞懸賞小說に當選。約一ケ年佛蘭西に遊び歐米を旅して歸朝。最近著書に、「異國點景」「失樂の人々」あり。（東京市外下落合二一〇八）

吉行エイスケ（本名。榮助）

明治三十九年三月、岡山市に生る。岡山縣立一中中途退學後轉々雜誌『ダダイズム』を大正十一年に『虛無思想』を大正十四年に發行せしことあり。最近小說集「女百貨店」「新種族ノラ」の二著あり。（東京市麴町區土手三番町一九）

吉村冬彥（本名。寺田寅彥）

明治十一年十一月廿八日、東京麴町區平河町に生る。高知縣立中學、熊本第五高等學校、東京帝國大學理學部卒業。專修學科、實驗物理學。現在東京帝國大學教授、同大學地震研究所、及航空研究所勤務、其外理化學研究所員等。最近著書「冬彥集」「萬華鏡」あり。（東京市本鄕區曙町二四）

米川正夫

明治二十四年十一月二十五日、岡山縣上房郡高梁町に生る。高梁中學校卒業後、東京外國語學校露語科に入る。大正元年同校卒業後、旭川第七師團に語學教師として四年間勤務す。大正六年大藏省より派遣せられて、革命直後の露西亞に赴きし事あり。大正九年陸軍大學教授となる。昭和二年革命十年記念祭に招待せられてモスクワに遊ぶ。最近著書に、ゴリキイ「アルタモーノフ一家」アルツイバーセフ「最後の一線」「露西亞詩集」トルストイ「幼年、少年、青年時代」同「われら何をなすべきか」同「少年物語」あり。（東京市外高井戶町中高井戶三五）

結城哀草果（本名。光三郎）

明治二十六年十月、山形市下條町に生る。原姓黑沼。結城家に養はれ、農耕の傍ら獨學に勵む。大正三年二月雜誌『アララギ』の會員となり、齋藤茂吉に師事、十五年以後『アララギ』選歌の一部を擔當す。現に雜誌『若草』歌壇の選者たり。アララギ同人。歌集「山麓」の近著あり。（山形縣南村山郡本澤村菅澤百目鬼）

行友李風（本名。直次郎）

明治十一年三月四日、廣島縣尾道市に生る。學歷なし、商業に從事し失敗し大阪新報に入り後松竹合名社文藝部に轉じ、新國劇附作者となり震災後專ら大衆小說執筆。最近著書に、「獄門首土藏」「文政辻占付我」「少年冒險小說全集」等あり。（大阪市西成區玉出本通一ノ五八）

龍膽寺雄（リヨウタンジユウ）

明治三十五年四月二十七日、茨城縣下妻町に生る。慶應義塾醫學部に數年學ぶ。生理學、電氣化學、機械工學、天文學、音樂、給畫、これらの間を學究的に、技術家的に、職業的に放浪す。最近著書に、小說集「アパートの女たちと僕と」作品集「街のナンセンス」作品集「放浪時代」小說集「かげろふの建築師」作品集「十九の夏」がある（東京市外杉並町高圓寺四三）

若山喜志子

明治二十二年五月廿八日、長野縣東筑摩郡廣丘村に生る。明治四十五年五月若山牧水に嫁し男女四人の子有り。最近の歌集に

「筑摩野」あり。（沼津市市道町）

和氣律次郎

明治廿二年一月廿九日、松山市に生る。慶應義塾を半途退學。新聞記者生活十數年。新聞事業研究のため英國に約一年間留學せしことあり。最近著書に、「黒星」「幽靈」（いづれも飜譯）あり。（大阪市上汐町一ノ二三）

渡邊順三

明治二十七年九月十日、富山市に生る。小學校を終へたるのみ。福田正夫、井上康文等と雜誌『民衆』發行。『熱風』同人、雜誌『藝術と自由』編輯。現在日本プロレタリア作家同盟員プロレタリア歌人同盟常任委員。最近著書に、評論集「階級戰の一隅から」あり。（東京市外池袋一一二五）

和辻哲郎

明治二十二年三月一日、兵庫縣神崎郡仁豐野に生れ、明治四十二年一高卒業、同四十五年東大哲學科卒業。大正八年頃より東洋大學、やゝ後に法政大學慶應大學等に關係し、大正十四年より京都帝大文學部助教授昭和二、三年頃外遊。最近著書に「日本精神史」「原始佛教の實踐哲學」あり。（京都市左京區若王子町二）



東倶知安行

この一篇を『北海道血戰記』の筆者に捧げる

小林多喜二

一

夜の十一時になつて、やうやく皆はストーヴの側に寄つてきた。外は吹雪いてゐるらしく、がたびしする事務所の二階の何處かの角に風が當つてうなると、ユキ〳〵搖れた。間を置いて、サラ〳〵と雪の羽目板にあたる音がした。ストーヴは、何時もは石ツころのやうな石炭で、ブス〳〵室の中をけむたくしてゐたが、選擧が初まつてからは每日グウン、グウンうなつて勢よく燃え上つてゐた。今迄あつた事のないカリ〳〵した眞黑な光澤のいゝ石炭が箱に一杯入つてあつた。

板壁や破れた襖に、

一、金壹圓也　　一勞働者より

一、二錢切手十枚　某

一、鶏卵七個　××工場有志
一、参十圓也　東京××××子
一、拾五圓也　××××
一、壹千圓也　本部
一、三錢切手三十枚　濱の勞働者
一、鶏卵十三個　某
一、五十錢　某
一、二十錢　某
…………　…………
…………　…………

その側には各地から來た激勵の電報が畫ピンで兩端をとめて、貼られてゐた。病床から無理に起つた候補者のために、身體のことを心配した電報が多かつた。

「カテ、カテ、アクマデカテ」
「タマゴヲノンデ、タタカヘ」
「カラダ、ナニヨリカラダ」
「エンゼツハ、ミヂカク、スルドク、カラダヲタイセツニ」
「タマゴヲノメ、シンデモカテ」

室の中は、私達の書損じたビラや墨皿や、それに使つた太い筆などで、足の置き處もない程散らばつてゐた。壁一面、演説會の豫定圖や新聞紙に赤で太々と書かれた煽動的なスローガンや、太い腕や齒車などを描いた地獄極樂の畫のやうなビラ、ポスターが所嫌はず貼られてゐる。

仕事に一區切りの出來た皆は、ストーヴの廻はりで遠慮のないブツキラ棒に大きな聲でしやべり合つてゐた。

社會科學研究會の學生が二、三人制服に鳥打で來てゐた。會社につとめてゐる吉川や、新聞記者の大島なども、膝をかゝへながら、墨で眞黒にした手でバットを喫んでゐた。選擧が始まるやうになつてから、私達は會社の勤務が終ると、毎晩組合の二階へ手傳ひにやつてきてゐた。勤めの關係上、表に立つて仕事が出來なかつたので、裏のことは出來るだけ自分達だけでやり、組合員はなるべく全部第一線に立てるやうにしようと思つてゐた。

話題は當然選擧のことだつた。島田正策が東京からの「輪入」候補者であるために、他の候補者達は「投票するなら、地元候補へ」さう大きく印刷したビラを撒いて、民衆の單純な愛郷心を歪めようとした。それに初めての「プロレタリア」候補であるために、滑稽な程おぢけついて、彼等は「島正」を共産黨員であり、ロシアの手先になつてゐる「國賊」であると云ひふらしてゐた。ことに、こんな考へ方は日本のやうな國では、一般民衆が×××××××考であり、しかも一旦××たら最後染職の掌のやうに、棺桶の中までも持つて行かなければならない程しみこんでしまふものだつた。——それに對して、どういふ對策をとるか、それが皆の問題になつた。議論がストーヴの色々な側から出た。

暗い階段をガタ〳〵いはせて、ゴムの深靴をはいたまゝ、ボロ外套をきて、片手に糊のバケツをさげた勞働者が二、三人上つてきた。「ひでえ寒氣だ。」顏が寒さで酒をのんだやうに眞赤になつてゐる。

「あんまりの寒さで、糊が効かねえで弱つた。」

「ご苦勞さん。」私は席を空けた。

ストーヴの側に立つと、勞働者の眉や鬚から雫が幾つもスウ、スウと線をひいた。

ビラ、ポスター係が、大きなあぐらの上に五、六冊雜誌をひろげて、漫畫を摸寫してゐた。

下でガタ〳〵となつた。皆一緒に「誰だア！」と吐鳴つた。スパイが來るので一々嚴重にした。

「ブルの方の野郎達はなア、途中々々バアーに寄つて、一杯ひツかけながら貼つて歩いてるんだ。寒いからな。處が、こつちは……」

「こつちはか、」一人がいたづらゝしく引きとつて、「こつちは、内にプロレタリア解放の酒ツ氣を帶びて、ホク〳〵で歩いてるのさ。」

「ふツ！」

皆笑つた。

まだ三十位なのに、すつかり頭の禿げてゐる癇の強い事務長は、少し離れた机で、太い無骨な指で考へ、考へ算盤をおいてゐた。その横で、若い組合員が「無産者新聞」の帶封をしながら、名簿を繰つて、一々宛名を書いてゐる。うつむいてゐる鼻

ツ先に、水滴が下つてきてゐた。時々ストーヴの方の話にも口を入れた。

「勝ツウ――ぞオ――ツ！　畜生！」

両腕を勞農黨のポスターのやうに、二本平行に天井に突きのばして、あくびをしながら、誰かゞ、とてつもなく大きな聲で云つた。それで、あくびがストーヴを取り巻いてゐる二、三人に染つて行つた。

十一時過ぎて「島正」から電報が入つた。

「ネツキヨウテキマンキン、マスマス、フントウスル。」

「島正」の一行は黒松内――倶知安方面へ演説に出てゐた。ところが、日程の都合で、この遊説隊が二つに分れなければならなくなり、早速その人員の埋合せとして、誰か明日出發しなければならなかつた。それに私と吉川が應じたのだつた。

私は何時でも自分がにえきらない「裏」の仕事しか出來ない事をはがゆく思つてゐた。それは現在の勤めを考慮に置いてゐる限り、どうにも出來ない事だつた。然し、私はつきつめて云つて、それは我々の運動への大きな「卑怯」であるとさへ考へてゐた。殊に、さういふ階級的良心の絶對的な「純粹さ」といふ事が時代病的に（？）要求されてゐたゞけ、堪へられない厳しさで、私は責めつけられた。が、私は結局ズルズルになつてゆくより仕方なかつた。勤めを離れて、次の日からすぐ食つて行ける自信はまるでなかつた。私は勝手に飛び廻はれる次男坊でもなかつた。私の月給には六人の親子がブラ下つてゐた。勿論そんな事を云へば「お前だけに養はなければならない親や子があるんぢやない。」一言のもとにさう云はれる。昔の先覺者は「××を蹴れ」とさへ云つてゐる。それは分つてゐた。個人の利益は何時でも、一分の隙もなく階級の利益を前提しなければならない。それだのに、自分達だけの幸福を孤り守る！　私は何よりもそれが悲しかつた。――恐ろしかつた。

然し悲しがつてばかりゐても、舟は出來上らない。選擧が初まつて、組合の人手が足りなくなつてから、たとひ表面に出ないとしても、私は自分の「首」を賭けて毎日組合に出入した。それが會社に分れば、それだけの理由ですぐ「首」だつたのだ。私は出來るだけの事はした。毎晩一時過ぎ、夜更けのジリ、ジリと底からくる寒氣の中を、郊外の自分の家迄一里以上も歩いて歸つた。吹雪の夜、思ひがけない處に出來た吹溜にのめつた

り、雪籔の中に身體を半分もうづめた。過度に身體が疲れてゐるので、歩きながら眠り、思ひッきり塵芥箱に打ち當つてギョッと目を覺ましたりすることさへあつた。

市内では、毎晩同時に三ケ所位づゝ、島田正策の政見發表演說會を開いた。それには組合や黨の幹部が皆出た。今迄ブルジョワやその鼻息をうかゞふ陣笠連の上品な、型通りの演說ばかりに慣れ切つてゐた一般民衆は、この粗野な、図太い、グンと迫る――すべてが正反對の絶叫をきいて、吃驚した。それが、不思議にどの他の演說會よりも人氣を呼んで、殆んど滿員ばかりだつた。

私は市内のそれには、然しいくらどうしても出ることは出來なかつた。ところが、倶知安の欠員ではないか！　私は身體がワク／＼する程喜んだ。然し、それだとしても、勞農黨は嚴重な警察の監視のもとにあり、中止、檢束で頭ごなしにやッつけてくる。土地はＯ市からは離れてゐても「首」はやつぱり前よりもモット確實に賭けられなければならなかつた。月給取の「運動」なんて窮屈な、にえきらない、面倒臭いものだ。私は然し出征軍人のやうに興奮してゐた……。

私達は歸り仕度をした。ストーヴで温たまつた身體は外へ出ると寒氣が急にきた。乾いた細かい雪が、暗い空からしきりなしに降つてゐた。店先を通ると、明るくそこだけ區切られて、入り亂れて降つてゐる雪が奇麗に見えた。私はオーヴァの襟をたてゝ鼻を抑へた。鼻穴がキーンと痛むほど、夜の空氣が凍え切つてゐた。

私達は街路燈が雪にまばゆく反射してゐる廣い通りを横切つて、小路に入つた。少し斜めの狹い、薄暗い小路だつた。「即席御料理」ののれんのかゝつた淫賣家が二、三十軒ものきを並べてゐた。雪の遠慮もなく吹きこむ土間に、女が無雜作にショオールを首にまきつけて、袖に手をひッこめたまゝ、表を見て立つてゐた。醉つた二重廻はしの男や船員が選擧の戸別訪問のやうに一軒々々覺束ない足取りで、ひやかしに寄つて歩いてゐた。

「ちよつと、ちよつと、兄さん！」

初め、二、三軒から女が呼んだ。然し何時も通るものだと分ると、やめた。

「組合の人。」低くさう云つてゐる。

「ぢや、明日の朝五時二十分だね。」
別れる處にきてゐた。二人立ち止つた。
「五時二十分。ねむいぞ。」
吉川は暗い通を「××の歌」の一節を口笛で吹きながら、上つて行つた。少し行つて、ショウ・ウインドウの光が道に投げられてゐる處をクッきり後姿を見せて、すぐその圏外に出ると、見えなくなつた。
獨りになると、私は興奮してきた。それは不思議な程靜かな、然し身體全部を底からユキ〳〵とゆすぶつてくるやうな興奮だつた。
曲り角にくると、私の右手の側の家が、芝居のスポット・ライトにあてられたやうに一部分クッキリ光づた。その光の輪がすぐ自分の方へグル〳〵と移動して、順次に色々な家や石垣や塀の部分が光つて消えた。と、ヘッド・ライトを光らした自動車が曲がつてきた。私の横を通るとき、ちらつと見た薄暗い車室に、藝者とお客の二、三人が折り重つて見えた。女の甲高い聲の一句が、ちぎれて自分の耳を刺して行つた。

二

二月十五日、朝五時。濡れた着物を直接に肌につけるやうな寒氣がブルン、ブルンとくる。外はまだ暗かつた。土間で、爪先きを鍵に縮めながら、歯をみがいてゐると、ひつそりした表をサク、サクと歩いてゆく足音が聞えた。築港の沈下ケーソンのコンクリート工事に行く人夫だつた。この工事が始まると、キットその工事中に何人かの犠牲者を出した。丁度「人柱」ででもあるやうに。殆んど一日置き位に家の前を擔架がギシ〳〵きしみながら通つて行つた。
私は前日の寢不足で心が疲れてゐた。
郊外の、小さい築港停車場は、置き捨られた棺桶のやうに寒さに縮まつて、ぢいとしてゐた。厚い戸を開けると、硝子板に礫でも入れるやうな意外に鋭い響をたてゝ開いた。黒ラシヤの外套を着たまゝ、椅子に腰をかけてゐた驛員が、小荷物スタンドの硝子戸越に、ギヨットしたやうに、明かに今迄居睡してゐた眼をこつちに向けた。それから、そして物憂くあくびをした。待合室の中央の高いところに一つだけ動きもせずに下つて

ゐる電燈が、妙に白ずんだ淡い光線を投げてゐた。隅々が寒さうな陰を作つてゐる。木のベンチには、土工部屋から追ひ出されてきた（一見してさうと分る）垢だらけの乞食のやうな男が、口を仰向けに大きく開いて寝てゐた。

驛員は寝不足の、はればつたい、ぼんやりした顔をして、不愛想に口のなかで何か分らない事を云つて、切符を硝子張りのスタンドを辷べらしてよこした。その停車場からは私一人だつた。夜中寒氣にさらされてゐたプラットフォームは、そこの砂利を踏むとバリ、バリと霜が裂れた。白い呼氣が煙草の煙でゞもあるやうに、何時までも消えなかつた。靴が鰹節のやうにこはゞつてゐる。少し離れた入替線に機關車が一臺休んでゐた。シン、シン、シーンと絶え間なしに蒸氣の音をさしてゐた。東の空が寒さうに明るんできた。天氣が良くなりさうな澄んだ空だつた。

列車がプラットフォームに地響をたてゝ入つてきた。列車に煽られて、粉のやうな雪がプラットフォームに舞ひ上つた。列車の窓硝子は皆スティムが花模樣にギラ／＼と凍えて、内は見えなかつた。乘客は寝てゐるのが多かつた。入つて行くと、仕切りの背板の上に毛布をかけて足が出てゐたり、窮屈さうに頰杖をついて寝てゐるものなどがゐた。私の足音に一人が薄眼をあけて、視線のきまらない眼差で見てゐたが、すぐそのまゝ眼を閉ぢた。端の方で空氣枕をしぼつて空氣を出してゐる音がしてゐた。はき出すやうな短い生あくびが處々に起つた。ボソボソ誰か、何か話してゐる。――笛が鳴つた。遠くで、バタン、バタンとドアーを閉めてゐる音がすると、前部の方から順にゴトン、ゴトンと箱が動き出した。

二つ目の小樽驛で吉川と組合の執行委員長の鈴木と一緒になる事になつてゐた。汽車がプラットフォームに入ると、吉川が一人列車の窓に注意を拂つて、立つてゐるのを私はすぐ見付けた。

「鈴木さんは？」

「まだ來ないんだ。」

「來ない？　ぢや、どうしよう。」鈴木が行かなかつたら、こんな事には初めての二人ではどうしたつて「お話」にさへならなかつた。

「昨日迄夕張炭坑の方を連日やつてきたんだ。それに昨夜は遲

かつたから、どうかと思つてるんだ。」
　二人はプラットフォームに續いてゐる階段の方ばかり見て、立つてゐた。汽車は五分停車だつた。私達は變に出鼻をくぢかれた形で、イラ〳〵してゐた。吉川は落着きなく、何度も時計を出す。乘る人は乘り、降りた人は橋を渡つて向側に行つてしまひ、プラットフォームには人が段々少なくなつた。物賣りだけが大きな聲で叫んでゐる。
「貴方方は？」
　大きな時計を掌にのせた驛員が吉川に言葉をかけた。
「待つてるんです。」
「もう時間ですが。」さう云つて、すぐ側の柱のボタンを押した。鈴が鳴り出した。
　その間私達は「居ても、立つても」ゐられなかつた。鈴の連續が止つた。――汽笛がなつた。その時だつた、折カバンと新聞を持つた鈴木が階段をかけ下りてきた。私達は急いで飛び乘ると、そのドアーを開けて待つた。
「早く、早く。」驛員が呼んでゐる。
　鈴木はやうやく間に合つた。

　私は鈴木をよくは知らなかつた。組合の二階でひよい、ひよい顏を合はせる事はあつたが、然しそれだけだつた。關羽そつくりの長鬚をたくはへてゐて、アイヌ系の輪劃のはつきりした鋭い赤ら顏をしてゐた。一寸近づけない凄い顏だつた。然しそれよりも、私は毎年のメイデイで、鈴木が街頭の小高い所に上つて、その前を通り過ぎる行列に、火のやうな演説をするのを見知つてゐた。それは聞いてゐて、どうしても身體が震えて止まらない興奮を感じさした。その時の鈴木の「鬼」のやうな風貌が、貧弱な自分を威壓して駄目だつた。その事が、他の組合員など〻同じやうに、お互に話しかけたり、相手になつたりするのを拒んでゐた。O市の資本家が鈴木の一擧一動にビクビクもの〻注意を拂つて、こわがつてゐるといふ事、そして昨年のゼネ・ストを爆發させてから、それが殊にひどくなつたといふ事を、私は色々な人を通して聞いてゐた。
　然し、これが同じ人だらふか！私は、自分の前に坐つたその「恐ろしい」人を見て、其處にはそのどの一つの條件さへもないのを知り、意外に思つた。――人の好さがすぐ分る「ひげのおぢさん」だつた。頭領株の人によくある清濁併せのむ、大き

な「和やかさ」がある。私はだん〳〵ずッと前からの友達のやうに――そんな調子で話し合へた。
鈴木は折鞄をあけると、中から無雜作に赤い林檎を二つ三つ手づかみに出して、私達に分けてくれた。
「本當はねえ、吉川君、今來るときさ、嬶をブンなぐつてしまつたんだよ。」國なまりのアクセントでさう云ふと、お人好しのやうに唇でムフ、フ、フと笑つた。「然し勝手なもんだなあ、三週間も家を放つておいてな。」
斜め向ひで、母親の膝に乘つて、乳房をなぐさみにしながら、無心にあー、あー、あーと云つてゐた赤子が、こつちを見ると、今迄のそれをやめて、口を半開きにしたまゝぢいと鈴木の顏を見始めた。私はそれに氣付くと、この片言も云へないやうな子供にさへ、この顏が不思議に映るのかと思ふと、獨りでをかしくなつた。
「嬶がな、何も無くなつたから、飯を炊く炭や石炭を貯炭場から盜んでくるッて云ふんだ。俺ア困つちまつたよ」
後で、私はこの事から吉川と話したとき、鈴木には四人も子供がゐて、それが彼が運動の方へ入り切つてゐるために、食ふや、食はずで痩せ衰へてゐる事をきいた。學齡になつても、一人も學校へは通へず、電燈は三ケ月も前からとめられて、夜中眞暗な家の中に住んでゐた。飯は長屋の人達が少しづゝ集めて、持つて行つてやることもあつた。細君は時々港の濱町へ荷擔人夫に行く……。そんな事を私に知らせてくれた。――「お前だけに」養つて行かなければならない妻や子がゐるんぢやないのだ。私にはドキリと來た。ものを食つて生きてゆかなければならない嬶と子供をもつて、この運動をしようとするのは、冗談や流行や道樂で出來るものぢやない。
「炭坑の方はどうだつた。」吉川がきいた。
「夕張ではねえ。」鈴木が根元の皮膚がツリ出る程髮を引ツ張り乍ら話した。「夕張はねえ、それア非道いんだ。あすこはねえ、何處も炭山はさうだらうが、暴力團のやうなゴロツキをちやんと傭つて置くんだ。そして平常でも變な奴が夕張あたりをウロウロしてゐるのでもたゝき出す。まして、組合を作るとか、なんとか、そんな氣の一厘でも見えたら最後、その當人なんて半殺にされてしまふんだ。資本家――ゴロツキ團――それに××、と、かう三拍子がちやんと揃つてゐるから、とても大變

さ。」

「まア、命がけだな。」

「勞農黨の演說會だと云ふと、始まる一時間も前から、入口から道路へ一町も——本當に一町も巡査とゴロツキと會社員が平行線に、向ひ合つて並ぶんだ。だから、どうしても入場者はその平行線の眞中を通らなけアならない。勿論入場を妨害する、會社のブラツク・リストにのせる、惡く行けば『首チヨン』とくるわけさ。一度演說會で、俺と一緒に行つた山下が——知つてるだらふ——あれが炭坑のバク露をやつたんだ。山下は前に炭坑で働いてゐたことがあつたから、グツと急所へ行つたわけさ。聽衆は皆坑夫だ。カアツ！と殺氣だつてしまつたんだ。あの時だつたな、俺でも誰でもいゝ、たツた一言『×××××××××。』とでも怒鳴らうものなら、そのまゝドツと行きさうだつたよ。さういふ炭坑夫等は凄いもんだ。」

車掌が時々うさん臭さうに私達の方を見て行つた。

「それから、三度目かの演說會かな、出る奴、出る奴皆中止、中止を食らつて、聽衆もどえらく憤慨してワツ、ワツと騷ぎ出したとき、會場の電燈が全部停電してしまつたんだ。俺ア正直に最初さうと思つたんだが、何アにゴロツキ達の仕業さ。しまつた、と思つた。所が案の定、その暗闇に乘じて、コン棒をもつて暴れ込んできたんだ。××は知らぬ顏さ。これには『××』をかけないんだから妙さ。——非道えもんだ。」

「餘程氣勢は上つてるんだから、五、六百票は大丈夫だらふ。それに、あそこは、これからの俺達の大切な地盤なんだからな。」

「いや、あすこは失敗するよ。何んだつて未組織だ。これが重大だ。まだ發端といふ處にさへも行つてゐないんだ。いくら氣勢ばかり上げたつて駄目さ。みんな買收されてしまふさ。それに野郎達の方がよツ程賢いらしな。——投票所を三十分も汽車で行かなければならない處へ移してしまつたんだ。どうだ。坑夫のうちの何人がそこへ行けるツて。今、あつちでは、それへの抗議運動を起してゐるが、ねえ。」

鈴木は手の指を熊手のやうにして、頭の毛につツこんで、逆にゴシゴシやつた。顏をまぶしさうにしかめながら、「ねえ、吉川君、本當のところ何も坑山ばかりでない、俺達の運動は皆今始められたばかりさ。何代がかりの運動だなア。」

何代がかりの運動！

「ヤッ！！　あそこの電信柱に島正のビラが貼らさつてるぞ。こんな山ん中に誰が貼つたんだらふ。」吉川が聲をあげた。

私達は急いで窓をあけると、頭をつき出した。汽車の速度で起されてゐる寒風が、いきなり横ッ面をなぐりつけた。

「目につく、目につく！　いゝ處に貼つたもんだ。」

私達は子供のやうに喜んだ。

三

汽車の中ではスポンヂ・バックを持つて、洗面所を出入りする者が多くなつた。歯を磨きながら、洗面所の順番を待つてゐる人や、腰掛の背板を一つ、一つつかまへながら、汽車の動搖に中心をとつて歸つてくる人。――夜がすつかり明けてゐた。凍えついて外の見えない東側の窓硝子だけが、水色に明るくなつた。

私達の乘つてゐる同じ箱の、丁度反對の端しの方に、二十人ばかりの朝鮮人が乘つてゐた。北海道の奥地の炭坑か土工部屋(監獄部屋)からの歸りらしかつた。薄汚くのびた「天神髭」をはやした、薄い眉と眉の間の遠い朝鮮人が、しきりに分らない早口で話してゐた。私が便所に立つたとき、その側を通つた。支那ドンスの白が汚れて、何か分らない臭氣がステイムにむれて、それがもつと非道い臭氣になつて、ムンときた。

春と秋――冬、北海道の大抵のどの汽車の中でも、私達は十人、二十人の朝鮮人の群を見ることができる。プロレタリヤは故郷を持たない、その標本が朝鮮人だつた。そして更にそこに×××な××的關係が入りこんで、文字通り彼等は「故郷」の代りに「風呂敷包」一つを何時でもブラ下げて移り歩いてゐる。しかも、勞賃が日本の勞働者よりも安いところから、日本のプロレタリアは朝鮮人に團結の手を差出す代りに「×」だとさへ感ずる。アメリカの勞働者と日本の移民のやうに。

Ｏ市の合同勞働組合には、朝鮮人の團體と日本人の團體を持てあまして、それに對する正しい指導を持ち得ずに、根ッから失敗した苦い經驗があつた。それは私もきいてゐた。――こゝにも、我々が必ず手を觸れなければならない、然し最大の困難を伴ふ未墾地があつた。

汚い手拭で鉢卷きをした小柄な朝鮮女が、身體を紙挾みのや

うに二つに折つて、うなつてゐる。その側に三人の背の大きい男が立つて、お互に何か激しく云ひ合つてゐるらしかつた。そのうちに、顔をすつかり伏せて泣いてゐた女が、突拍子に高く二言ばかり云ふと、背がギクツ、ギクツと波打つた。そして黄色いものを前一杯に吐いてしまつた。吐いてしまつて、女は弱弱しくあー、あー、あー、と云ひながら、半開きになつてゐる唇からビロ〳〵した汁をたらしてゐた。

車掌が通りすがりに、男の朝鮮人を一人、一人見廻はしてゐたが、一寸立ち止つたゞけで、次の停車場のことをお客に口上しながら、後の箱に移つて行つた。側に坐つてゐた人達が鼻を押へながら、席を移した。

私は席に歸つてくると、鈴本に朝鮮人のことを話した。鈴本はこの前の失敗した經驗を詳しく私に云ふと、

「いや、とても面倒で、いゝシヤツポを脱いだよ。」と、頭をゴシゴシやつた。

便所から吉川も歸つてきた。

「あすこに監督らしい日本人がゐるんだね。何處かへ賣渡すに引張つて行く處らしいよ。朝鮮人が何んでも、女が死にさうだから、なんとかしてくれ、と云つてるらしいんだ。處が、監督の云ひ草がかうだ。手前え達に、そんな×××ことがしてやれるかつて。自惚れやがるなつて。——可哀相に、女はまるで握り拳みたいに縮こまつてしまつてるんだよ。」

吉川は朝鮮の問題には可なり、鋭い、深い考へを持つてゐた。レーニンの××問題と×××の相關々係などを、朝鮮の具體的な事實について鈴本に一々話してやつた。鈴本は後の窓枠に頭をのせて、眼を閉ぢながら、ウム、ウムときいてゐた。吉川に從へば、それだから「鈴本には頭領の風格がある」んださうである。理論鬪爭だといふので、他人の話には必ず喧嘩腰に理窟をこぢつける組合の若い連中とは、鈴本ははつきり異つてゐた。それは私から見ても確かだつた。

時計を見ると、八時を少し過ぎてゐた。「八時」といふ事は、私をして本能的に「會社」を思ひ出さした。それは私達會社員について離れない一つの脅迫觀念だつた。後備の軍人が子供の吹くラツパの音をきいて、思はず直立不動の姿勢をとつてみたり、昔、給仕をしたことのある人が、鈴の音をきいて、ギヨツト跳ね上つたりする、それとこの觀念はよく似てゐた。

私は會社には親類の不幸のために欠席するといふ風にしてあつた。そして何時もながら、會社に出る時間を、かうして「謀叛を起して」汽車に乗つてゐる自分が、妙に面白く思はれた。かういふ位置になると、コセ／＼會社に縛りつけられてゐる會社員の恰好が一目に見渡せる氣がした。

私は、彼等が「犬」といふ名前で呼ばれゐないことを不思議にさへ思ふ。露骨に上役の鼻毛を覗ひ、露骨にこせつく。私は彼等の中にゐる、それに對しては、丁度肥汲みが糞の臭氣が膚にまでしみこんで一生とれなくなると同じやうな恐ろしさを感ずる。會社には「意識々々」といふ言葉が特別の意味を持つて流行つてゐた。それは、人にコキ使はれる下役から早く立身、出世をして、自分達も「人を使へるやうな」支店長にならふとする「意識」のことだつた。仕事が終る。然しすぐには歸らずに、支店長の前へ行つて無駄話をする。榮達の一つの道だつた。きまつて一ケ月に何度か支店長の家を訪問する。それも必要な道だつた。支店長には――少なくとも自分の利益になると思はれるどの上役にも――自分の額で土を杵のやうに叩くほど、丁寧に、何度も頭を下げなければならない事をも知つてゐた。資本家のカバン持ちを、腰をかゞめてつとめる。何しろ、鼻の先には「支店長」がブラ下つてゐる。「おあずけ」に釣られて、何時までもついて行く「犬」だつた。

だから、彼等は資本主義の發展、維持に全部の望みをかけてゐる。滑稽にも！　然し、その彼等自身こそ、供給過多からくる俸給水準の低下と、營業規模の進化のために女事務員、子供の代用からくる失業に苦しめられ、結局「支店長」への榮達の夢は「夢」でしかなくならふとしてゐる事を「知らない！」それどころか、「洋服を着て、靴をはいてゐる」手前、プロレタリアに落ち込む事を「死」よりも恐れてゐる。彼等は、だからプロレタリアが自分の後生大事な資本家にとツかゝつてくる事を「やつきになつて」――「本能的に」憎む！

彼等は藝者の支持者であり、カフエの常連であり、ゴルフ・フアンである。月々高の知れた金しか貰へない癖に、大資本家のする模型のやうなことを一通りしたがる。

彼等は、同僚が「首を切られ」ようが、話にならない月給で働いてゐようが（彼等のうちでは往々に勞働者よりもモツトひどい條件で働いてゐるものがある。）「知らない」ことにしてゐ

る。そんな「他人の」どうでもいゝ事に「おせつかい」して「支店長」がフイになつたりしたら、死んでも死に切れないからだつた。「個人主義」「勿事主義」がこゝでは典型的に美事な實を結んで反動的なことを「平氣」でする。しかも彼等が一つぱし學問、教養があるといふので、その云ふことが四圍に案外な力で傳染してゆく「恐ろしさ」を持つてゐる。

彼等は自分の階級的な本質をちつとも意識してゐない。又さうする事を拒まふともしてゐる。現に、底のないぬかるみに片足をつツこんでゐながら、頭の先だけで（これは彼等の十八番である。）「さうではない」と考へてゐる。空に浮かんでゐる「支店長」の幻影ばかりに見とれて、足もとを知らないのだ。

その中間性の故に、内股膏藥の、困つた寄生虫である……

然しそんな事はどうでもいゝ。汽車は山と山の股のやうな——峽を、のろ〱とくねつてゐた。兩側には、雪の山が幾つも、幾つも折重つて、汽車の窓とすれ〱になる程にせまつてゐた。所々にある防雪林が片側にだけ雪を受けて、たわんでゐた。奥が暗く、深く、それが底氣味惡い程續いてゐる原始林の切り通しを進む時には、機關車のバッシュ、バッシュといふ音が際立つて聞え、何んとも云へなくその原始林にこだまをかへした。

ステイムで曇つた窓硝子を拭つて、私は外を時々見た。飛んでもなく人里を離れた山際に、置き忘れたチョコレートのやうに、茅ぶきの百姓家が一面の雪の中にポツンとあつたりした。」

四

汽車から下りると、すぐ眼の前にぶツつかるやうにマツカリヌプリが晴れた冬空に浮かんでゐるのが見えた。そのだゝツ廣い裾野にある倶知安の町並は、雪の中から屋根だけを出してうづまつてゐた。

停車場通りのやゝ廣い道を歩いてゆくと、荒物屋や呉服屋の硝子戸に、他の候補者のと一緒に、

勞働農民黨公認候補者島田正策
政見發表大演說會

そのビラが貼らさつてゐるのが眼についた。かういふ異つた

土地で自分達のビラを見るのは、不思議な懐かしい氣持を覺えさせる。自分達は、又あつた、又あつた……と、一枚々々見つけると、めづらしいものゝやうに、口に出して云つた。通りの雪道は、山の峰と峰の連續のやうになつて、歩いてゐると、兩側の屋根より私達の方が高いところさへあつた。そして薄暗い家の中の爐が、窓から眞直ぐ見下ろされた。前の日かに吹雪いたらしく、どの家も一樣に北に向いた側だけ雪をあびてゐた。屋根に上つて雪を降ろしてゐた人が、私達がくるのを見て、上から言葉をかけた。

「今日勞農黨の演說會があるから賴むど。」

若い組合の人が立ち止つて、雪の反射にまぶしさうに手をかざして、屋根の上の人を見上げて云つた。

私達は組合の人から俱知安の方の事情を、道々、きいた。それは直接こゝでやる自分達の演說の材料になるからだつた。私達の話す演說が相手の氣持をはつきりつかみ得るためには、相手が現實に何を感じ、何を要求してゐるかといふ事を、その人達が實際日常に經驗してゐることから取りあげて示してやらなければならない。本で覺えた偉さうなマルクス、レーニンの理窟の暗誦は「あくび」を起さすことでしかない。——殊に地方ではさうだつた。

街外れ近くになると、道はそのまゝ雪の廣い野に出てゐた。汚れた、でこぼこの道が、ギラギラ光つてゐる雪の原を、二、三本しか線の架つてゐない電柱に沿つて、ずウと、マツカリヌプリの裾に續いてゐた。電柱は遠くでマツチの棒を間隔をちぢめて竝べたやうに見えてゐる。鴉が雪にかげを落して點々と飛んでゐた。鴉の啼き聲が空の何處からか時々不吉に聞こえる。

私は一寸立ち止つた。

「田舍でせう。」後で、兵隊上りだといふ人が言葉をかけた。

私達は事務所へ行つた。事務所はその兵隊上りの人の家で、駄菓子屋だつた。駄菓子の折が三つゞつ、二段に竝んでゐた。それに店先には、森永ミルク・キヤラメルや煙草小賣所などの看板や、鞋やつまご（ワラで作つた一種の雪靴）が束になつて掛けてあつた。兵隊上りの人が戸をあけると、薄暗い家の中から襷をかけた細君が出てきた。その後からは犬のやうな大きな猫が、尻の方を擧げて、のそり出てきた。一寸土間にたつてゐる處にある粗末な長い椅子に、すんぐりした赭ら顏の百姓が冷

や酒をコップで飮んでゐた。猫がその百姓の鰯のそばをウロウロした。

店にはビラの包みや、ロー引きの大鍋一杯に入れられた糊などが置いてあつた。土間に火鉢を下してもらつて、皆でそれを圍んだ。私は靴をぬいで、火鉢のふちに足をのせて、感覺のなくなつてゐる爪先きを兩手でもんだりした。

私達の豫定が急に變つた。電報が來て、本隊がこゝでやり、私達はこゝから四里程支線に入つた（所謂山麓）東倶知安でやることになつた。然しもう汽車がなかつた。私達は大忙ぎに忙いで馬橇を一臺用意して貰つた。

支部の人が屋並から突き出てゐるマッカリヌプリを見上げて、

「どうだらふ。」と云つてゐる。

「今日はいゝやうだが——。」

「大丈夫だらふ。」

そして私に「これがねえ、こゝの氣象臺つてわけですよ。」と云つて、笑つた。

ピシリと、馭の尻で鞭がなつた。

「出すど。」百姓の馭者が後を向いた。

馬の首につけてある鈴が、晴れた冬の空に「朗かに」鳴つた。

雪道の溝に馬橇の足がはまる度に、私達の身體はハズミを食らつて投げ出されさうになつた。鈴は調子よく鳴つた。足を雪藪につッこんで馬橇を除けながら立つてゐる町の人が、私達を見ると、「今日は。」と挨拶した。初め、私達は慣れてゐなかつたので、周章てゝ挨拶をかへした。

馬橇はすぐ町の外へ出てしまつた。右手は廣漠とした裾野でマッカリヌプリがペンキ繪の富士山のやうに聳えてゐる。左手には茅ぶきの百姓家が所々にあるだけで、一面の雪の平原が大海原のやうに、ゆるくうねつて廣がつてゐた。私達はマッカリヌプリの裾を一直線に奥に入つて行つた。だん〳〵雪の量が多くなつてきた。兩側が積み重ねた雪で高くなり、塹壕の底を走つてゐるやうな感じだつた。ある處では空しか見えなかつた。それも高い兩側で限られた巾廣の帶のやうな空しか見えなかつた。途中、近所の村から買物か、用達に倶知安の町に出てくる、風呂敷を三角に疊んだのをかぶつた百姓の女や、荷物を背

負つた日焼けした眞黒い顔の男が、めづらしさうに私達を見送つてゐた。私達は一々さういふ人に「島正」の演説會を宣傳した。

そこが過ぎると、急に吹きツさらしの高い所に出た。「駱駝の背」そのまゝの道を走つた。風當りの關係でさうなつてゐるらしかつた。馭者が煙草をのんでゐた。その煙が後向きになつてゐる百姓の頭に一度からみついて千切れると、色々な角度でなびき乍ら、自分達の間をすべつて、脂くさい匂ひを殘して後へ消えて行つた。

「おや〳〵、山がおかしくなつてきたど。」

馭者が煙管をかざして、マツカリヌプリを指さした。何時の間にか、山とそのあたりの空が、フン霧器で一面霧をふいたやうになつてゐる。それが、そして見る間に濃くなつて行くのが分つた。風が出てきた。今迄はいくら橇を早くしてもさうでなかつたが、風が私達の頬を横たぐりになぐつて、耳朶をならして飛んで行つた。

「外の方がなんでもねえのに、この山麓だけ時々雨や風があつてね。雨雲や氣がこの山さぶツつかつて、さうなるんだへしね。——んで、よく荒れますよ。荒れ出したら、又大荒れでね。」

「どうだらふ、今日は。」

「それがねえ、どうも荒れさうだね。」さう云ひながら、片手で鞭を空に二、三度大きく輪に振つて馬の尻をピシリと打つた。急に私達の身體が一緒に後へよろけた。馬は、厚い巾の廣い尻をはね上げ、はね上げ鈴をしきりなしにりん〳〵と響かして走つた。私達はだん〳〵膚へ直接にくる寒さを感じ出した。まるで蚊帳でも着てゐるやうに寒い風がすいて吹きこんでくる。私達は縮まるにいゝだけ縮こまつた。足は棒木のやうに感覺がなくなつてゐた。

「おい、むしろを着やう。」

「うん。」

頭からむしろをかぶつた恰好は乞食だつた。ワラの匂ひが鼻に來た。私達は話が途切れると思ひ出したやうに、歌をうたつた。私や吉川も歌つた。歌は然し廣い野ツ原では何んの反響も起さないで、そのまゝ風のために口から出もしないうちにもぎ取られるやうに、後へ吹き飛ばされて行つた。鈴木はバン聲を

張りあげて「××の歌」をうたつた。

「こゝなら誰も検束もしまい。」

私達は笑つた。

鈴木はそれから、夕張炭坑の方へ演説に行つて覚えてきたといふ「夜でも、晝でも牢屋は暗い」の歌をうたつた。炭坑の地下何千尺といふ眞暗な地獄から、坑夫の歌ふこの唄が響いてくるのは、そこより他の處では決して起ることのない、身體がゾウッとする凄さがあると鈴木が云つた。

いつでも鬼めが窓からのぞく。
のぞことまゝよ
自由はとらはれ、鎖が切れず。

鈴木は何度も最後の「鎖がきれず」を繰りかへして歌つた。關羽そつくりの「ひげ」の鈴木が一向きな顏をして、肩をそびやかし、聲を張りあげて歌をうたうのが、然し何んとも云へなくユイーヴで、ユーモラスだつた。私は今迄にもまして鈴木に親しみを感じた。私達は思ひ思ひ、遠慮のない大聲でうたつた。風が強く、すぐ聲はさらはれる。然し私達はそれに負けずに、だん／＼聲を大きくし、終ひには身體をゆすり／＼無理に聲をしぼつて出した。突然聲がキーンとなつて、咽喉が裂けたやうになり、ゲエ、ゲエとはばけた。

『誰か、この、今の俺達の、……××への進軍をうたふプロレタリア詩人がゐないかな。』吉川が云つた。

「殘念だ、殘念だ！」——それが、その時の間違ひない私達の實感だつた。

空が暗くなつて、粉のやうな雪が地面と平行線に、矢のやうに鋭く吹き飛んできた。何時の間にか魔法でも使はれたやうに、マツカリヌプリのあの大きな胴體が、フッと吹いて、カキ消されたやうに見えなくなつてゐた。私達は風上に背を向けると、吹き飛ばされないやうに、むしろをしつかり押へた。然し、むしろの裾がバタ／＼とはためいて、遠慮なく雪が喰ひこんで來た。

「山が鳴つてるよ。」馭者が風に逆らつて叫んでゐる。

馬の鈴も風の工合で、ちつとも聞えなくなつたり、と思ふと、耳もとではつきり、りん／＼と聞えたりした。——たゞ[illegible]

だ。その眞白が沸えくつてゐるやうに、狂ひ廻つてゐるだけ！そして不思議な底氣味の惡い「響き」が——「うなり」が、大荒れ時の物凄い海なりのやうに聞えてゐた。それがこの地面を搖つてゞもゐるやうだつた。私達の橇にさへ風が鋭くうち當つて、ヒユウ〱と悲鳴をあげて、折れてゆく。馬も、橇も、私達もたつた一色に——眞白になつてしまつた。私達の眉も睫毛も一本々々、それに鈴木の關羽鬚は勿論、皆眞白い針のやうになつてしまひ、頬や額は雪のために赤くほてゝ、まるつきり別な人相になつた。

突然橇が傾いた、そして止つてしまつた。私達は雪藪の中に乳のあたりまでうづまつた。

「野郎、迷ひやがつて、とんでもねえ處さブチ入りやがつた。」

馭者は身體を後に倒すやうに手綱をしごきながら、何か口汚くのゝしつて、力一杯馬をなぐりつけた。

「このまゝ、行ける見込みがある？」私がきいた。

「これでも荒れはいゝ方だ。どうにも行けるべよ。」

その附近を何度も行つたり、戻つたりした。五、六分もかゝり、やうやく本道路らしいのを見付けた。かうなれば道などは、波際の砂文字のやうに消えてしまふ。馬が、たゞ下の固いところを、動物の本能で迷はないで進んで行つてくれることに全部の望みをかけるより仕方がなくなるのだつた。

鈴が又吹雪の中で調子よく鳴り出した。風の向きは一分置き位に變る。前から吹いてゐると思つてゐると、それが馬橇の左側に移つてきて居り、と、すぐ逆な側になり、私達はその度にそれに從つて坐り直さなければならなかつた。

空間の全部が麥粉のやうな雪の吹雪だつた。そしてそれ自身一つの大きな眞白い旗でゞもあるやうに、風の工合で出來る吹雪の濃淡が丁度旗がなびくやうに見えた。時々、さういふ只中に、數十丈もある大理石の大圓柱がつッ立つことがあつた。そして、それがグル〱廻はりながら、私の上を横切つて消えて行つた。その時私達は身體を伏せ、むしろや帽子をすつかり押へた。「ゴールド・ラッシユ」のテントのやうに、私達の身體さへ浮くやうな氣がした。むしろや外套はまるで飛び上る時の鳥の翼のやうに、せわしくバタ〱とはね上つた。

初め、私達はそれでも元氣だつた。天地を撼かすこの大吹雪を向かして、マツカリヌプリの平原を馬橇で突ッ切る！——

さう考へて興奮した。煽動的な(所謂××な)火のやうな文句を絶叫したりした、勝手氣儘に。然し誰からといふ事なく、だんだん言葉少なになつてきてゐた。

「全く、伊達や道樂で、この運動なんか出來ないや。」鈴本がポツンと云つたきりだつた。——誰も、もう何も云はなかつた。

顔の表面が打撲傷でも受けたやうに、しびれてしまつて、本當の顔は奥へ引ツこんで——顔に粘土でも塗られた感覺だつた。手もさうだつた。足はずつと前からさうなつてしまつてゐた。私達は互に身體をつかんで、號令をかけながら、ゆすり合つた。然し、それもすぐヘナヘナになつた。もう堪えられなくなつて、歩いたら、と思つた。然し馬でさへ、時々腹までうづまつて、足掻く位だつた。橇の鼻には雪が排雪車の溝のやうにうづ高くもり上つて居り、馭者の身體は肩近く、それにうづまつてゐた。橇の通つた後は堀れて、その跡が何んにもない大海原のやうな雪の原に、たつた一つの溝を長く、長くひいた。それを見てゐると、不思議な淋しさが胸をうつてくる。

谷か、地か——いや、どつちも、ゴウ、ゴウ、ウ、ウと鳴りわめいてゐる。

馬橇の前を斜めに横切つて、何か飛んだ。雪煙が上つた。と、飛魚が跳ね上るやうに、二つの白いものが、又パッと飛んだ。兎だ。

「兎だ！」三人が一緒に云はさつた。それがさつきからも、を云つた初めだつた。が、それより何も云へず、たゞ眼だけで、兎のあとを見送つた。兎は迷つたのか、稲妻形に雪を飛んで行つた。そして丘のやうに吹き溜つた雪かげに、見えなくなつた。

それから二分もしなかつた。——私達は、橇の左側の足が浮いたな、と感つた瞬間、前のめりにのめつて、雪の中へ頭を下にして竹の子のやうに突きさゝつてしまつた、私達の上へ、腹を見せて引ツくりかへつた馬橇は鐵槌の作用をした。私達は馭者から一人々々引きづり出された。——馬は口から石鹸水のやうなあぶくを出しながら、梶棒で後足を横に締めつけられて、足をガクガク跳ねらしてゐた。

「オヤ、オヤ！」

馭者が叫ぶと、雪杭のやうに立ち止つてしまつた。

私は「どうした？」ときいた。が、聲が鋭く風にさらはれて、

馭者の耳に入らないらしい。馭者がこつちを向いて、何か怒鳴つてゐるらしい。口が色々に動くのは分るが、聲が聞こえなかつた。私は雪をこいで走つた。一足前へ出すと、腰までうづまつた。そして足を拔かふとすれば、靴がぬげさうだつた。それに足を拔くのに、手をつくわけには行かなかつた。勢ひ、高飛びでもするやうに、跳ね上るよりなかつた。然し身體だけ前へ出て、足が拔けないと、そのまゝ思ひッ切り前へのめつて、雪を「食つた。」

馭者は川を見て立つてゐた。

「こゝに川があるべし。俺等の橇この川ば左さ見て行かなばならないのに、こんなだと右ば見て歩いてたんだから――今迄戻つてゐたことになるんだし。」

私は耳に掌をあてゝ聞いてゐたが、へえ！　と立ち止つてしまつた。氣も心も、グツたり、一時にきた。戻つてゐたつて？　何んといふことだ！

私は時計をかぢかんだ手で出してみた。時計は體温で温かになつてゐた。――二時五分。四時迄には時間はあつたが、然し今何處まで來てゐるのだらふ。

私達は橇を引きかへした。然し今度は皆は、氣持の上からも、惨めになつてゐた。追風になると、馬のたて髪と尻尾の毛が跳ね廣がつた。私達は前よりもつと縮こまり、前よりもつと不氣嫌にムッシリした。この大あらしのやうに、私達の心も暗澹としてゐた。

見えた　私はアメリカを發見したコロンブスよりも大聲で叫んだ。家だ！　黑繪のやうに、うすぼけてはゐたが、確かにそれを私は前方に見た。

「どれ、どれ！」

「見えないんでないか。――眼の嘘だ。」吉川がゝつかりして、のび上げた身體を下した。

空中は風の工合で、吹雪の波の濃い所へくると、向ふのものはみんな搔き消すやうに消えてしまふ。私達は、舟を待つてゐる俊寛のやうに心を躍らせて待つた。――が、見えない。「眼の嘘」だらふか。私もグッシヤリした。何の音か知らない布を裂くやうな音がする。「雷」のやうな音がそれに交る。私は何時か映畫で「默示錄の四騎士」を見た。その時、人と人が殺し合ふ陰慘な戰場の空中を「蒼ざめたる馬」に跨つて横切る「死」を

見、それと同じ不吉さを、今この「天地が鳴動」してゐる吹雪に感じた。何かさういふもの丶翼のはためきと影が空一杯にある氣がした。

「見えた！」今度叫んだのは吉川だつた。

　望遠鏡のピントが合はさつて行くやうに、だん〳〵それらしく現はれてきた。そして更にその少し遠くを走つてゐる電信柱が、最初はかすかに、だん〳〵はつきり一本、一本、々々……と見えてゆく。

「分つたんし、分つたんし。「△の荒物屋だ。もう迷ひッこなしだし。半分は來てゐたんだし。」馭者にも見當がついたのだ。

　私達は「ブッキラ棒」に元氣になつた。そこで酒を一杯飲んで身體を暖める。あとは山峽になつてゐて、一本道だつた。それに電信柱に沿つてさへ行けば眼をつぶつても迷ひッこない。

(馭者がさう云つた。)

「いくら大荒だつて、眞ッ晝間道ば間違えるなんて馬鹿ねえけどなし、こゝだけはこの大けえ山の眞下で、ガアーーッと、かう風され丶ばかなはないんだし。」

　馭者は元氣のい丶歌を馬にあてた。馬の後足で蹴ね上げる雪が、私達の頭に落ちてきた。馬が一度ゆるくなつて、それから又速くなつた。と、橇の下から後へ、湯氣の立つてゐる馬糞が二つ、三つ順次に出てきた。それが見てゐる間に、雪の原の遠くへ押し殘された。そして見えなくなつた。

五

　電話があつたので、關係の人が國道の入口まで迎ひに來てくれてゐた。その頃は「ケロリ」と吹雪がやんでゐた。

「大きな山があるんで、天氣が氣まぐれでねえ。」

　見て、すぐ百姓と分る朴訥な、ズングりした人が、子供の着るやうなタコのついたマントを着てゐた。黃色く赤黑い顏だつた。

「ひどかつたでせう。」何度も私達に云つた。

　すぐ後に山の裾がせまつてゐる。停車場が雪の中から玩具のツミキ細工のやうにポツンと見える。その前に十二、三軒の家がデコ、ボコに集つてゐるだけで、そこから羊の腸のやうな道がくねつて雪丘を越してゐる。

「村はあの後になつてるんです。」

吹雪の去つてしまつたすぐ後の、陰殘な低い雲空のもとで、その一帶が妙にひつそりして見えた。山鴉の啼聲が何處かでしてゐる。

私達は停車場前の小さい待合に入つて、腹ごしらへをした。

「島正さんは六時の汽車でゞすね。」

「さうです。僕等が丁度終る頃に着くわけです。――上りは七時半ですねえ。」

待合のおかみさんが「さうです、七時半に出るのがあります。」と口を入れた。

「倶知安へ行くと八時十分。――あつちの方の演說會にもきつちり島正さんは間に合ふわけですね。」

「その豫定です。」

「こつちは島正さんだけ？」

「さうです。」

「この邊の農夫の狀態はどうです。」私はその方へ話を引いた。

「お話になりませんよ。」中學を出たといふマントの人が云つた。「何處も同でせうけれども、慘めたもんです。それに、こつちでは小作人より一ッぱし少しでも土地を持つてるものが困つてゐるんです。皆××銀行の抵當に入つてゐて、その借金で首が廻はらないんです。――出來上るものは安くて、諸入りが高いと來てるんだから、たまりませんよ。」

「××銀行？」吉川と私は一度に口に出た。吉川が、そして「ひやアーッ。」と頭をせわしく掻いた。

「この人、吉川ッて云ふんです。――この人がその××銀行へ出てゐるんですよ。」

さう私が云ふと、マントの人が、

「へえ――ちや內情がよく分つてるわけですから、一つ驀路をやつて下さい。百姓は必ずワッと來ますよ。」

「それはやります。處がねえ、今度立候補するブルジョワ候補の△△は、この銀行の株主なんだよ。これアいゝ事をつかんだぞ。」

吉川は肥つた身體で椅子をギイ〳〵いはせた。彼は一杯飲まないと演說度胸が出ないといふので、おかみさんに「熱カン」をつけさせた。

「この邊の自作農はそんなに困つてるのに、自分ではそれでも土地を持つてゐるといふので、一つぱし地主のやうな氣でゐる

し、小作人は小作人で組織もされずに散らばつてゐるから、カラ駄目です。だから、この選擧を機會に組織の方に入つて行かなければならないと思つてるんです。」

そばを食つてゐた鈴本は何時ものやうに、皆の話すのを時々うなづきながら、きいてゐた。

其處を出て、丘の頂きまで來ると、凹凸のある斜面に出來た、ゆがんだ菱形のやうな村が、眼の下に廣がつてゐた。

前を行く人が所々近所の家へ寄りながら、「演說さ行かないか。」と聲をかけてゐた。會場のお寺の近くになると、二人、三人と並んで出掛けてゆくのと私達は一緒になつた。その人達は古ぼけた裾のよれ〳〵になつた二重廻はしや、タコのダルマや、色のさめた兵隊の外套や、ラシヤの筒砲の外套をきてゐた。

彼等は如何にもノロ〳〵だつた。O市の演說會のそんな時とはつきり異つてゐたので、私ばかりでなしに、皆にすぐ氣付いた。中には取つて置きの、新らしいといふことがすぐ分る着物をきてゐる農夫や首に絹のハンカチを卷いたのが、隨分あつた。私は、まだその習慣が拔けてゐないのだ、と思つた。

會場へ行くと、まだ始まらないのに、もう八分の入りだつた。お寺の住職が「こんなに入つた演說會は殆んどありませんよ。──貴方方の力のは、何か毛色でも變つたもんなんですか。」と云つた。

私は廣間一杯に集つた群集を見た。私は興奮してきた。──私は叫ぶ。と、あの無數の群集がそれと一緒につり上つてくるのだ。それは本當だらふか。私はかう云ふ。と、彼等はさうしやうと手をさしのべてくる。彼は「求めてゐる。」私はそれが「何」であるか、そしてそれは「どうすれば」獲得出來るかを云ふ。そこで、彼等は「さうだ」「さうだつた」と云つて立ち上るのだ！　だが、それは本當に出來るだらふか！──私は初舞臺をふむ獨奏家のやうな胸さわぎを感じた。咽喉が乾いてたまらない。土地の「老人」が壇に上つて叫んでゐる。然し私は何も聞いてゐなかつた。次が自分の順番だといふことが、私の心を「のれん」のやうにバタ〳〵とはためかせる。私はぢいとしてゐることが出來ず、後の廊下に出ると、步き出した。

外は寒かつた。それでも途切れることなしに、寒さうに肩を圓めた百姓がやつてきた。ガタビシしてゐる板の隙間から風が

吹き上つてきた。
支部の若い人が廊下の端の曲り角で私を見ると、小走りに寄つてきた。
「老人をもうやめさせなければならないですね。」時計を出してみせた。ところが老人は默つてやらせて置くと、明日の朝までもあの調子でやつてるんですよ。何時もです。」
「……紙片に書いて……。」
「いや、處が眼が見えないんです。眼鏡でも駄目で、字を見ろときは一字々々蟲眼鏡を使ふんです。それにつんぼと來てるんですよ。本當のかなつんぼです。」
「いくつです。」
「七十に近いでせう。」
「………!」
「熱心で、それア元氣なもんですよ。」
私は無條件に、この「我々の運動」から七十才の「老人」は除外して考へてゐた。云はなくても、これは若いものゝ運動に決つてゐる、七十才と「この」運動——凡そ、それはちぐはぐなものだ、實際としても亦さうではないか、私はさう思つてゐたのだ。私は意外に思つた。——年寄の聲は聲だが、張りのあるさびた聲が聞えてくる。
「後から袖か羽織の裾を引ツ張ると一番いゝだらふ。さうしますから、貴方は用意して下さい。」
若い人が走つて行つた。私は「愈々」胸がドキ打つてきた。
私は演壇に上つた。初めてのものがよくやるやうに、突拍子もない大聲で叫び出した。自分でさへどういふ筋道を辿つてゐるのか、どういふ抑揚でしやべつてゐるのか分らない。私は今こそこの事を云つてやらなければならないぞ、と思つて、夢中でしやべつた。
私はかつて、何十年もの間あらゆる苦しみを生活してきた勞働者が、初めて(!)演壇に上つたとき、
「諸君、俺は………。」
と云つたきり、悶絶してしまつた、さういふ悲痛な事實を描いた作品を讀んだことがあつた。その時、私達こそかういふもの達の云はふとして云ひ得ず悶絶したその事實を、彼等に代り叫び知らせてやらなければならないのだ。——私はさう興奮して考へた。

私は百姓や勞働者が、自分達が投票出來るやうになつても、その「大部分」がまだ選擧といふものを「角力の勝負」と同じ勝負事のやうに思ひ、そして又何んと云つても選擧には「やつぱり偉い人」を選ばなければならない――さういふやうに、政治といふものを自分の生活からまるツ切り離して考へてゐることを、實際に知つてゐた。(彼等は偉い人といふことは、金のある人といふのと同じに使つてゐたし、又同じものだつた。)そして、この考はとても「豫想以上」深く百姓の肚の中に食ひ入つてゐる。だから、彼等は燕尾服をきた金持には、小便にでも行くやうな手輕さで「買收」されてしまふ。彼等には金のかゝらない遊び事でしかないのだから。私は何よりその事を云はなければならなかつた。

選擧はお前達の「台所」の問題だ。私は「臺所と政治」この關係がブルジョワ達によつて、如何に誤魔化されやうが、(さう思はせて――誤魔化して、まんまと一票をせしめやうと彼等はしてゐる。)まぎれもなく、たつた一本の糸でつながつてゐることを分り易く知らせてやらなければならない、と思つた。一本の醬油――醬油店――問屋――醬油株式會社――株主――重役――三井、三菱等――ブル政黨(政友會、民政黨)等。――そして此等が逆に搾取關係にとんぼがへりする。一本の醬油に過ぎないとでも云ふのか。然しそれにはあらゆる搾取關係、政治關係が含まれてゐる。

「……諸君等が誰を選ばなければならないかは、然し諸君等よりもモツトはつきり、そして適確にその事を知つてゐるものこそ誰、あらふ、あの薄暗い慘めな台所で、雜巾切れのやうに働きつかれ、永年の貧苦に打ちのめされてゐる諸君等の細君であり、諸君等の年老いた母親なのである!」私はどなつた。

手がなつた!

「これア嬶ば連れてくるんだつたな!」誰かそんな事を云つた。後の方でドツと笑つた。

私は又、永い間虐げられ、しかも「どうして」又「誰に」さうされてゐるかさへ分らずにゐる百姓に、「金を持つてゐる」偉い人がどんなものであるか、その正體を云はなければならない。彼等偉い金持は、例へば××銀行の株をもつてゐる。その銀行が百姓の土地を抵當にとつて金を百姓に貸付ける。勿論銀行と百姓の間には色々な寄生虫が入りこんで、二重にも三重に

も頭をハネてゐる。「百姓がその殘酷な血税を拂はなければならない爲めに如何に慘めな生活をしてゐるか、娘を賣り飛ばし、子供を工場へやり、自分の作つた米も食へず、芋と南瓜ばかりを食つてゐる。その生血のやうな金が銀行の手に入る、そしてそこから株主――その偉い金持の懷にたんまり入つて行く。彼等は城のやうな塀をめぐらした「邸宅」に住んで、自動車を乘りとばし、藝者のあとを追ひかけてゐる。では、「誰が」そんな事に使ふ金を彼等に捧げてやるために、娘を賣り、息子を工場にやり、芋と南瓜で眞ツ黄色になつてゐるのか！

もう誤魔化されてはならない。

口の血をぬぐつた牝猫のやうに、上はべは正義、人道を稱へゐやうが、絶對に、もうだまされてはならないのだ！

「どうぞ、清き一票を」と云はふが――フロツクコートを着て「白い手をした彼奴等は、この野郎と、鍬や鎌で（二十九字削除）……」私は、だがひやりとして、思はず臨監の巡査の方を見た。が、田舍の巡査は火鉢の端に、指先の分れた靴下に草履をひツかけた兩足をのせ、背を圓るくしてお茶を飲んでゐた………。

吉川が終り、鈴木がその勞働者らしい朴訥さと一本調子でやり出してから十五分程した頃、五時四十分の汽車で「島正」が來た。

私が控室に入つてゆくと、土地の人から何か話をきいてゐたが、振りかへつて、

「や、ご苦勞。」と云つた。その拍子に、のどで痰がゴロ〱いつた。

「どうでした。」

「いや、何處もかしこも大變さ。滿員木戸止めばかりだつたよ。」

「聲がすつかりつぶれてしまひましたね。」

「參つた。聲ばかりぢやないんだ、僕の横ツ腹は戸板のやうに堅くなつてゐて、少し力を入れてしやべると、ジーンと響くんだ。」島正は話しながら、藥瓶を出して何度もうがひをした。「それにねえ、今停車場から此處までどうしても歩けないんだ。息はきれる、足がフラツクで……。愈々もつて、これア討死らしいよ。」

人をひきつける黒瞳の大きな眼が、兩方のかん竹の出張つてゐる奥で、時々鋭く光つた。吉川に從へば、その「島正の眼は千兩」だつた。何時もなら、どんな事を話しても、すぐそれに熱をもつて話し込んできて、相手をつかんでしまふのだが、（私はこの事では島正を不思議な人だとさへ思つてゐる。）その魅力が無く、何か云ふと肩で息をした。すつかり瘦せこけてゐた。

「これはねえ、君、改革に送る僕の北海道血戰記だよ。」

〝……雪の野、北海道の天地と、馬橇は、トロイカは走る。——勇を鼓して、雪の北海道に進んだが、一月二十日までねて居た病後の身體だ——俺はからだが、可なり無理だ。歩行困難だ。馬橇が實に身にこたえる。

だが、勞働者として生れ、勞働者として育つた我れは、病氣や疊の上で死にたくない。——勞働者、農民、無産階級の要望の下に吹雪と氷の中で戰つて死ぬこそ、我れ等の本望である。——俺は、からだの續く限り戰ふ。

雪の戰は——だが、實に愉快だ。

……吹雪だ。大雪だ。汽車は止る。だが無産階級の要求は止らない。馬橇で、トロイカで、敵の本陣に進むのだ。

私は所々拾つて讀んだ。

島正が壇に上つた頃には、遲く來た人が澤山後に立つてゐた。——聲がすつかり潰れてゐる。それを、身體をくねらしながら、無理に出さうとする。今にも眞赤な肉片がのどのあたりから千切れ飛んでくる、さう思はれる「悲痛」な叫び聲だつた。

私は小樽で幾度も「島正」の演說をきいた。市内では、市の中央と兩端の三箇所でやる。——處が、きまつて、不思議に中央は出來が惡かつた。「どうしてだらふ。」私達は初めさう云つた。中央はインテリゲンチヤ、銀行員、會社員、一般市民が大部分だつた。兩端は工場町であり、勞働者街だつた。そこでは、然し會場は文字通りうなつた。農民を相手の今の島正は、手はれず、斷然冴えてゐた。——

「勞働者として生れ、勞働者として育ち……」そこに凡ての原因がある、然しから明ら樣にそのことが出るのが「私」には恐ろしくさへ感ぜられた。

本部から來た東といふ闘士が、何かの時におどけた調子で「俺は陰謀家で、島正は煽動家で、××は組織者さ。かう三つ揃つたら天下無敵さ。」と云つた。私は、壇上で拳を振りあげ、何かに咬みつく闘犬のやうに叫んでゐる彼を見、數年前の×××のとき、「×××、×××！」と叫んで群集の先頭に立ち、×××××××××××××歩いた若い時の彼の、謀叛そのものである左上りの突つ張つた肩をハッキリ想像することが出來た。

私や鈴本の側に老人が坐つて、きいてゐた。横から見ると馬鹿に小さく、紙細工のやうにあやふやに思はれた。顏は煮た魚の眼のやうに眞白になつてゐた。何んか、かう、風の音でもきいてゐるといふ風の恰好だつた。頬の何處かに、人の好い笑みがかすかに浮かんでゐた。

六

夜空が高く、青く澄んでゐた。マッカリヌプリ裾野の空氣は硝子張りのやうに凍えてゐた。空一杯の星が氷粒のやうな鋭い光を放つてゐた。晴れ渡つた野天の夜空が如何にも大きく、廣かつた。その感じは小樽などでは決して無かつた。――底から冷たかつた。

演説會が終つて、雪の狭い一本道を皆が一列に蹈つて行つた。道に掘らさつてゐる馬の蹄や馬橇の凹みに足を落さないやうに、私達も汽車に乘るために、その列に入つてゐた。雪の寒氣れた夜道は皆の足駄や下駄の歯の下でギュン／＼と鳴つた。

「こんな元氣のえゝ演説會初めてだ。」私の後で誰か云つてゐる。

私はすぐ前をゆく島正をつッついた。

「うん、うん。」それが彼にも聞えてるらしく、うなづいた。

一本道を折れると、やゝ廣い、荒物屋や小間物屋などのある少し明るい通りへ出た。私と島正は肩をならべて歩き出した。

「農民を相手に演説をすると、どうもアチがかゝりづらくて困るんだ。――今度の經驗で分つたんだが。何處までグッとつり上つてきてゐるのか、無口な、どつしりした農民では實際見當がつかないんだ。工場勞働者や坑夫などゝ異ふ重大な點だね。」

さう云ひながら、一句切れ、一句切れに切れて、重病人のやうに息をはいた。

屋並みが切れて、停車場へ出る丘の、足もとの暗い道になつた。途中人家もなかつた。たゞ道に沿つて、處々、電信柱に裸の五燭燈がついてゐて、その下少しの周圍だけが物淋しく明るかつた。それだけだつた。そのだら／＼坂を私達四、五人が上つて行つた。鈴木は島正に夕張や小樽の情勢を細かに報告してゐた。

提灯をつけた人と途中行き會つた。

「お晩です。」その人が挨拶をして行つた。

風もないのに、裾の方からヂリ／＼寒さがくる。唇をゆがめると、そのまゝ型になつてしまふほど空氣が冷え切つてゐた。島正はどうしても遅れ勝だつた。丘の上までくると、ゆるやかな斜面の端に、停車場やその構内の電燈、停車場前の家の灯などが、廣々とした雪の原、青黒く衝ツ立つて見えるマツカリヌプリ、それから裾をひいてゐる連山——その大きな自然の中に、いかにも惨めに、おぢけたものに見えた。支線の終點驛らしい物淋しさがあつた。

「この邊は熊が出ないかね。」鈴木が土地の人にきいてゐる。

「君の方が熊に間違ひられるよ。」島正が云つて笑つた。

「いや、あるんですよ。昨年の暮れに畑に出てゐた百姓を、丁度俺等が袋でも脊負ふやうな恰好にかづいて、山へ逃げて行つたことがあるんです。」

「山つて？」吉川がきいた。

「羊蹄山です。」

「やつぱり居るんですか。」

私は思ひついて、「あ、吉川君、昨年羊蹄山に登山したんだものな。」

それで皆笑つた。然し、ちつとも響きかへらず、笑ひ聲さへギユツとそのまゝ凍えてしまつた。

停車場の待合室にはそれでも割合に人が多かつた。汽車で演説會を聞きに來た人らしかつた。聲高に選擧のことや、候補者の品定めをやつてゐた。私達が入つてゆくと皆顔を向けた。——袖口と裾の切れた、ゴワ／＼な、それに色のさめたオーバーを着て、烏とんびのやうに黒いマスクを口にあてた候補者を見て、ヒソ／＼話し出した。自分達とちつとも異らない、こんな「ご立派な」衆議員候補者なんてある筈があるもんか！ そんな顔付だつた。

支部の人が島正に老人のことを色々に話した。
「ご苦勞だつたね、おぢいさん。」島正が老人に挨拶した。
老人はあやふやな顔をしてゐる。支部の人が大きな聲で「島正さんが、ご苦勞さんだと云つてるんだ。」と、耳のそばで云つてやつた。——分つたらしく、周章てゝ、
「あ、あ、あ、いや……！」と云つて、人の好い笑ひを顔一杯に表はして、頭を何度も下げた。
汽車は北海道の支線によくあるマッチ箱のやうな小さい、入口が兩側に幾つも取付けてある型で、眞中に圓るい西瓜のやうなストーヴ一つきりだつた。それに電燈が煤けたやうに薄暗く時々消えさうになつたりした。向ひあつてゐる人とでも、耳の傍に掌をかざさないと聞えない程、汽車がガタ／＼音がし、思はず身體をすくめる程揺れることがあつた。
私と一緒に腰をかけた支部の人が、しばらくしてから、ボツボツ老人のことを私に話してきかせた。
——老人には醉ふと、何處でゞも直ぐ持ち出す「話」が一つあつた。
「俺は幸徳秋水を知つてるんだ。——幸徳はねえ、何時でも煙草をこんな風にくわえて、なア水澤、お前寒くないかツて云つたもんだよ。俺が何時でも貧相で、カサ／＼してゐたもんだからさ。」と云つた。(さう云へば、私は倶知安に幸徳時代からの社會運動家がゐるといふ話を誰からか聞き知つてゐた。)水澤といふのが老人の名だつた。それが幸徳とどういふ關係にあつたか、然し誰も知らなかつた。醉ふと、きまつてそれだけを何度も、何度も繰りかへすだけで、誰がきいても、それ以上云はなかつた。
彼は十八の時から、かういふ運動をやつてきてゐた。そして七十にならふとする今でも「その事だけ」は變らなかつた。倶知安で初めて農民組合を作つた時、その發起人を老人は率先してやつた。この地方はもとの××農場とか××子爵や有名な××侯爵の農場とか、東京方面の有力なブルジョワの土地が澤山あつたゝめ、農民組合の結成といふことが大きな脅威をさういふブルジョワや地主に與へた。處が、それを極めて微温的な救濟組合的なものにしようとする他の「若い發起人」の間に、斷然O市の左翼勞働組合と連絡をとつて「戰鬪的」な組合に作りあげやうとしたのが、この七十才に近い「老人」だつた。

老人には息子と娘がゐた。然し老人の家では「父と子」の爭ひではなしに、何時でも、曾つて誰も小說に描いたことのない、その逆の爭ひを惹き起した。模範靑年（一）である實直な老人の息子は「ロシアかぶれした過激思想をもつてゐる親父」と、どうしても合はず、家を出て別に暮しを持つた。こんな不肖の父を持つては世間に申譯がないと云つて、老人と一切の關係を絕つてしまつた。函館の日魯漁業會社に女工として出てゐた事のある娘だけは父の側にゐた。これには、後でそれとうなづける理由がある事が分つた。

「處が悲劇があるんですよ。」と支部の人が云つた。

――老人は駄菓子屋を開いてゐた。が、小さい町で、とにかくそんな噂さでも立つと、お客さんなどは殆んど來なくなると云つてよかつた。老人の側にゐた娘が汽車で十五分程かゝる隣り村の小さい工場に働きに出るやうになつた。

娘が函館の日魯をやめてきた理由は、漠然と、たゞ待遇が苛酷なために我慢が出來なくなつたのだ、と云つてゐた。然し、後で分つた事だつたけれども、彼女が工場に務めてゐるうちに、そこの工場長のために罐詰の倉庫で、無理矢理に身體を冒されたのだつた。彼女は函館の靑函連絡棧橋へ、眞夜中に三度も行つた。然し、どうしてか死ねなかつた。が、そのまゝでゐることも出來なくて、日魯をやつてしまつた。そして日魯とは姉妹會社になつてゐる××××會社に入つた。處が、しばらくしてゐるうちに、其處に大きなストライキが起つた。彼女は今こそ、といふ氣で、そのストライキの女工の先頭に立つて、働いた。彼女と境遇が同じであるやうな女工が澤山ゐて、それ等が皆一緒になつた。が、ストライキは散々に負けて、彼女は女の方では一番先きに首を切られてしまつた。そして戻つてきたのだつた。それが然し彼女に大きな變化を與へた事は確かだつた。

色は淺黑いけれども、その栗色が如何にも健康さうで、無口な、物腰の靜かな女だつた。そんな事があつたとは思へない女だつた。然し、その女がS――村の工場で、色々な男に身體を賣つて金をとつてゐたとは、もつと考へられない事だつた

老人はその娘の金で食つて行けたし、組合の運動も專心にやつてゆけてゐた。然しこの「大きな事」が小さい村で評判にならずには措かなかつた。これが、そして隣り村からだん〳〵倶

知安まで伴はつてきた。皆は彼女を「爪はぢき」し始めた。彼女は然しそんな事にはちつとも關はりなく、前通りに物靜かで、無口だつた。それは例へば、とてつもない白痴か、底の知れない程しつかりした自分を持つてゐるもの〻態度かも知れなかつた。が、娘のさういふことが老人の耳に入つてゐるか、どうか、それは分らなかつた。老人は然しこの頃では、もうモウロクをしかけてきてゐた。

「娘さんは時々組合の仕事を手傳ひにくるんです。眞面目な、おとなしい、冗談一つ云へない人ですからねえ。」

その人がさう云つて、つけ加へた。「さつきの老人が倶知安迄の切符を買つてたでせう。あれだつて、あのうかつには使へない金だと思ひながら見てゐましたよ。」

私は老人がストーヴの前の椅子に小さくなつて腰掛けてゐるのを見た。前と同じやうに、風の音でもきいてゐるやうに頭を少し持ちあげて、やつぱり顔の何處かに人の好い笑みを浮かべてゐた。形のなくなつた油だらけの帽子をかぶつて、枯木のやうな首筋が古くさいハンケチを卷いた所から見えた。小學校の生徒が着るやうなタコのついてゐるだるまを着てゐた。

窓を開けさへすれば、マッカリヌプリが魔物のやうに眼をさえぎつて聳えてゐるこの置き忘られた――雪にうづもれてゐる蝦夷の一寒村に、我々の運動が、こんなにも大きな眞劍さで行はれてゐるのかと思ふと、私はじッくりと眼に淚がにじみ出てくる感激を覺えた。

「つんぼ」で「めくら」の老人が、だまつて置けばいくらでも演説をやめないで、やつてゐる――だが、私はそのユーモラスのうちに、人の魂を直接に打つものを感じた。

「私のやうな」小利口な人間は(私はかくさず云はふ、實際この老人の前で何んの嘘が云へやう。)この何時目鼻がつくか分らない「何代がかり」の運動を、恐らくさう効目も見えず、又恐らく誰もさう高く「認め」てもくれないこんな所で――しかも、こんなに大きな犠牲を拂つてやつて行ける本當の氣持をもつてゐるだらふか。

――お前はレーニンのやうに「あがめられたい」と思つてゐるのだ。

――お前はたゞ無産階級運動の「大立物」になりたいためばかりに一生ケン命なのだ。

――お前は一生の間からして一生ケン命になつて、自分がそのまゝ埋もれ、しかもこの運動が一寸目鼻もわからないとしたら、とつくの昔に裏切つてしまつてゐたのだ。
――お前は中央に出て行つて「認め」られたい爲にしてゐる。この運動が東京だけで出來るとでも思つてゐるやうに。さうでないとは云はせない。お前の心の何處かゞそればかり望んでゐたのだ。
私は白狀しよう。――私は、さうだつた！
客車の中は煙草の煙がこめて、それが街燈の周圍にからまつて、曇つてゐた。百姓達はそれ〳〵に、汽車の音に消されないやうに、大聲でしやべり合つてゐた。途中の驛でとまると、寒さで鼻の先きを赤くした、たくましい身體の百姓が霜まみれの身體で二、三人入つてきた。汽車は又ガタン〳〵と跛の音をさして動き出した。
私は島正と老人をぼんやり見てゐた。島正はそれでも全國的な人氣鬪士だつた。(語弊はあるが、云つてみればさうだつた。)「我等の島正」――普段そんな風に、それも全國的に云はれてさへゐた。私はその側に老人のゐることを不思議に深い氣持で眺めた。理由が分らずに憂鬱になつてきた。
北國の一寒村に於ける「島正と老人」――私はそれが歴史的に何か重大な意味をもつた、しかもキツト何時までも心に殘る一つのシーンであるやうな幻想に捉へられた。
倶知安に汽車がついた。
改札口には島正と一緒に地方に出てゐる演説隊の同志が迎へてゐた。私達は「やア」「やア」と云つた。
「君達が來たのか、ホオ――。」吃驚した顏をしてゐる。
「進出さ。」吉川がさう云つて笑つた。
「今渡君が盛んにやつてました。千五、六百人から入つて、滿員木戸止めです。五里も離れた處から馬橇二臺に乘つてきた三十人程の人がゐたんですけれども、どうしても入れられずに歸つて貰つたのは氣の毒でした。」
私と吉川は三十分程して出る小樽行きの汽車で、すぐ歸ることになつた。鈴木は島正と一緒に倶知安で演説するために殘り、私達は停車場前で別れた。巡査が二人も來て、ウロ〳〵してゐた。
老人は、と思つた。老人は足がおそく、私達から遲れて、田

チ〳〵出てきた。すると、その側の少し薄暗くなつてゐる便所へ行く角のところから、二十四、五の割合にきちんとした身なりの女が出てきた。こつちからは顔は分らなかつた。老人と何か云ふと、肩をならべて歩き出した。老人はあたりを見廻はしてゐた。島正達は演説會を控へての急がしさに、もう角を曲つて見えなくなつてゐた。

皆は、老人のゐた事を忘れてしまつたのだつた。

×

「東倶知安行」をしてから一週間程した二月二十一日、選擧開票當日に、選擧事務所の二階で、私は小樽に出てきた老人と會つた。郡部の開票が問題にならないのにぢいとしておれず、出掛けてきたのだと云つた。然し、小樽でも大勢は決つてゐた。

その晩「えゝッ、飲め、飲め！」私と吉川は老人を誘つて、事務所近所の場末のバアーで飲んで、べろ〳〵に醉拂つてしまつた。私達は終列車で歸る老人を停車場に送つて行つた。老人は歩きながら「幸徳秋水」のことを何度も繰りかへした。

「煙草をかういふ風にのむんだ。」それを三度も四度も繰りかへして眞似をして見せた。「水澤、水澤、貴樣寒くないかツてな。」――老人は兩方から肩をとつてやらないと、歩けない程醉つてゐた。

老人を列車の座席を一つ見付けて坐らせてやつたとき、私はフト、小樽へ出てきた金が、腹に赤い縞のある毛虫を××××××氣持で、老人の娘が身體を賣つて得た金であることに氣付いた。――私は急いで自分の財布から殘つてゐた五圓紙幣をとり出すと、老人の、メリヤスについてゐるポケットに入れてやつた。私はそして、だまつて力一杯老人の枯枝のやうな手を握りしめた。見てゐるうちに、私の眼から涙があふれるやうに出てきた。

「せつかく待つてゐる娘さんに……」

「娘？」老人は酒臭い顏をその時あげた。

「いや、せつかく待つてゐる娘さんに、停車場のお土産でも買つて行つて下さい。」――私は耳に、口をあてゝ大きく云つた。老人は頭をガクッ、ガクッと動かして、首をひねられたあとの鷄のやうに、ガクリッと首を前に落してしまつた。

發車の汽笛が鳴り出してから、私達は急いでプラットフォームへ飛び降りた。

（一九二八、九、五、）



二千六百八十二哩

中河與一

一

街にはネブラスカ大學の遠征軍が來てゐた。

久里は大陸を横斷して、西部海岸に出る爲めに、バスを利用しようとしてゐた。

腕の内側を見つめてゐた。時計の面から、ふと動脈の方へ眼が移ると、彼は生きてゐる事を強く感じた。

カレッヂ・タウンである此の街の兩側には、ネブラスカ大學の白と赤、キヤンサス大學の青と朱の旗が交互に屹立して、一日後の華々しい試合を豫告してゐた。

肩を摩り合はせて歩く學生と、學生を乘せた自動車と、それらが掻きたてる笑ひ聲のやうな雜音が、休暇前の暑さの中で空に立ちながら響いてゐた。

「もう幾分位ありませうか。貴方」

白いステージ・デイポーの中で、何處か此の邊の遠くの田舍から出て來たらしい娘が、久里の方へ向いて突然尋ねた。
　彼女の服裝は手觸りの荒い麻で、鼠色をしてゐた。顏付きは表情の少ない無愛想さを示してゐた。胸に結んでゐるネクタイだけが都會風であつたが、模樣には爭へぬ家畜の繪が這入つてゐた。
「あと十五分です。それでどちらまでいらつしやるんです」
「ハリウッド。自動車で四晝夜半ださうですね」
「あゝ、ぢや僕と一緒です」
　久里はさう答へてから、更らに丹念にこの娘を眺めた。すると心の中で其の風俗とハリウッドとが最も適切に結びついた。なぜならば、ハリウッドには側役としての傴僂や、絨氈をためる男や、一本足や、マッチのやうにすぐ怒れる男や、彼女のやうな田舍まるだしを何よりも要求してゐるから。
「女優志願ですか」
「えゝ、まあ、さうなんですの」
　彼女はおどけたやうな細い、然し勇敢な聲をだした。トーキイをもねらつてゐるのに違ひない。

と、十八の窓を持つた黄色く塗られた大型の乘合自動車が、埃をかぶつて突進して來た。
　そこには二十九人の乘客が、動搖しながら坐つてゐた。彼等は窓から首を突きだして、兩側の旗を見ると、眠い好奇心を動かした。
　藍色のシャツを着た黑ん坊のポーターが、新らしい客の荷物を屋根の上へかついであがつた。荷物の上へひろげるキャンバスの音が、天井から雨のやうに聞えて來た。
　シャツ一枚の運轉手は、クラッチを放すと、アクセレーターを勢よく噴出させた。すると自動車は除々に動きだして、速力をセカンドからトップに高潮した。
　街の旗が一本のダンダラ模樣になつて兩側を流れた。
　街を出ると、一人のインデヤン大學の學生が後の窓から遠ざかる街にお辭儀をした。
「グッド・バイ・ローレンス」
　そして彼は眼たたきしながら、學生生活に最後の帽子を振るらしかつた。
　ローレンスは一瞬にして遠く小さい街になつて消えた。

と、限りない緩斜面の大草原が現はれた。自動車は益々スピードをあげながら、人々を無限の低地に向つて運びだした。

何時、どつちを見ても、同じ草原の地平線である。たゞこの草原は傾いた一枚の線である。そして漠々としたこの草原の中の一直線、アスファルトを敷いた漆黑の州道第八十號は、光りながら遠く地の底に沒してゐた。

無限の斜面、それはこの道を遂ひに深い海底に辷り込ますやうな錯覺を起させる。乘客は身體の狀態を傾けながら、執拗なこの長い間の錯覺に堪へてゐる。兩側の草がつぎつぎに強く吹き倒されては起きあがる。

と車が上へ向いた。水平に返つたのである。頭の中を洗ふ快活な疾走が初まつた。

「ラジオを入れないか。コカコラ會社の。面白さうだぜ」

一人の男がラジオ・ニユースをひろげながら云つた。すると一番前に坐つてゐる青年になりかけの少年が、すぐスキツチをひねつた。

「わがアメリカに於ける戀愛が、如何なる思想によつて支配せられてゐるか。男は益々社會生活に於て、強く努力的にならなければ生きてゆけない狀態になつてゐます。ところが斯くの如き修養を積むためには、彼等は最もいやしい女達と接近しなければならない。青年が純粹な戀愛をするといふ事は、彼を弱くするばかりである。彼は純情の爲めに實に感じやすく、弱々しくなる。然しいやらし女を對照とする戀愛は、それがいやしければいやらしほど、彼は次第に強くなり、人を物體のやうに取扱ふ修練を積むのであります。これは一つには生存に對する經濟關係にもよるものでありますが、わがアメリカに於ける青年の風儀が、かかる努力的な戀愛への方向によつて齎されつつある事を吾々は憂ふるものであります…………」

「つまらないな。もう止めろよ」

少年が正直にスキツチを廻はした。然し彼は暫くスキツチを弄んでゐた。とスキツチが再びもとに這入ると、今度は新らしい飲料水コカコラに就いての廣告の放送に變つてゐた。

彼は苦が笑ひをしながらラジオに觸れるのを中止した。

自動車は依然として際限のない草原の中を走りつづけてゐ

る。それはアメリカ以外では見られない圖放のない際限なさである。

と、この遍平な大地の上に、突如として、灰色の瘤のやうな巨大な鐵の山が現はれた。十個、二十個、この寂莫とした地層の中にそれは壓力的な鬼氣を含みながら大きく接近して來た。博齒のやうなトロッコが、小さい粉のやうな煙を吹きあげながら靜かに動いてゐる。

「あれ、何んでせうか。恐ろしいやうな」

女優志願が眼を大きく見張りながら隣席の男に尋ねた。

「タンクです。重油の」

六時間の疾走の後に、窓外の風色は漸く闇の匂ひをつけだしてゐた。

二

遠くの方が次第に明るくなつてくると、自動車は眩しい光、新興油田都市タルサの中に抱擁せられた。

タルサは辛辣な資本家と幸運な成金の一夜づくりの都會である。川は油のためにおどみ、林の根は黒く、流れるやうな土で湧きあがつて、街は發狂した活氣で動いてゐた。

自動車が止つた。乘客は一寸反動を感じてから次ぎ次ぎに立ちあがつた。別のバスに乘りかへなければならないからである。

久里は夕方の雜踏に卷き込まれると、食事を取る爲めにカフエーに這入つた。ニューヨークから引き拔いて來た此處のカフエーには、タキシードのバンドが南方の猥雜な歌を首をふりながらわめき散らしてゐた。そしてタンバリンを持つた踊子がスパニッシュダンスを淫らに踊りながら、客席の方へ廻つて來た。すると、一人の迷ひ込んでゐた勞働者は、腹が減つてゐる癖に、料理の食べ方がわからないで、マゴツキながら、そのまゝ外へ出てしまつた。そしてカールス・バードのサナトリウムへ行く筈のブルジョアが、一夜の放蕩息子のやうに食ぼりながら雞の足を握つてゐた。

久里も勿論、空腹を補つてゐた。然し女が接近してくると、フォークに突きさした鮭を、彼女の口の近くへ差しだしてやつた。するとこの小さい口は、それを巧みに食べてしまつた。

「貴方、支那のお方」
「ノウ」
「では朝鮮」
「ノウ」
「さあ、どこかしら」
女が口を綺麗に動かしながら云つた。久里は口に氣をとられさうになりながら答へた。
「何處つて。君は日本つて國を忘れてゐるんだね」
「お丶日本。わたしの好きな國だわ。櫻のお國。まあ櫻のお國を忘れるなんて」
「どうかしてゐるね、君は。カルフォルニヤでは排日で騒いでゐるぢやないか」
久里はふと何か思ひ出すと、不快になりながら鼻であしらふやうに云つた。
「まあ、排日なんて。けどあれは政治家だけの事だわ」
久里は外へ出た。成りあがり石油都市の明るいナンセンスと、出まかせのお愛想が彼を不快にした。
彼は今、世界の市場權をねらつて、アメリカとイギリスとが、石油の販路に就いて、もの凄い戰ひをしてゐる事を知つてゐる。それは、如何にマクドナルドの髯が、ラピタン山莊でフーバーの豐頰を撫でてみたところで、又ていのい丶英米海軍協定を結んでみたところで、この實質的衝突に就いてはどうする事も出來ない。そこで吾々の排日は、當然これ等の間に微妙に離反を計畫しなければならない……
彼は歩きながら發着所の方へ行つた。すると彼と出あひ頭に大陸を横斷する乘合自動車が、新らしく這入つて來た。
――ニューヨークからロスアンゼルスへ
この自動車だなと久里は考へた。
乘客共がガヤガヤと食事に下りだした。
「馬鹿に暑いね。此處でまた一時間か。やりきれやしない」
猛烈な顏をした大男がステップに足をおろさうとしてゐた。彼は腕の上へ上衣をひつかけ、ネクタイをはづしてゐた。顏が油じみて口の中が黒く、ごろつきのやうに思はれた。
つづいて二人の若々しい姉妹がおりて來た。それが生き生きした同種類の二つの花のやうに久里の眼に寫つた。
子供を連れた母親がおりて來た。老人がおりて來た。

久里は新らしい同行者に就いて、物珍らしさうな解釋をくだしながら、誰れもゐない自動車に一人で乘り込んでゐた。油さしが潤滑油裝置をはづして、潤滑油を車軸に、それからニンジンの軸承に、ピストン環に、氣筒の內壁に、丹念に注入してゐる。

渴きさうになつてゐた金屬面が急に蘇生しながら、千萬分の三ミリメートルの厚さを以つて圓滑な油膜を張りだしてゐた。すると車は今にも滑りだしたい欲望に濡れて、新らしい出發を衝動してゐた。

同乘者は次第に歸つて來た。

自動車は新らしい客を加へると、すぐ街を出た。闇の中へ這入つた。暗い疾走が初まつた。眞夜中にオクラハマ市に着いて、暫く灯の中を走つたが、又闇の中へ這入つた。兩側の電柱燈が大きく近づいて來ては消えた。

乘客はガラス窓をおろして、皆深い眠りに落ちてゐる。彼等の夢の中をオクラハマ州の白い境界標が走りすぎた。疲れが彼等を氣持よくゆすつてゐた。そして眠りころげながら。ひとかたまりになつて 何處かへ運ばれてゐる人間の姿が、今は可憐な存在に變つてゐた。

人は明るくなつてしまはなければ眼を醒まさない。久里が二日目の眼を醒した時、自動車は一望千里のテキサス州の北部を走つてゐた。土地は赤く燒けて、何も植つてゐなかつた。

恐らく綿の栽培が週期的に今年は別の地劃に移動してゐるのに違ひない。綿花は長く同一の地面で成長出來ないからである。

久里は運轉手の後へ行くと、氣持のいゝ朝の動搖に堪へながらポンプを押した。水が沸騰しながらもりあがつて來た。彼はいそいでアメリカ風に左手をポケットに入れたまゝ、右手で顏を洗つた。

と彼の肩に柔らかい手が觸つた。

「グッド・モーニング」

「お早う。いゝお天氣ですのね、今日も」

昨夜乘つた二つの花のやうに思はれた姉妹達が其處に立つてゐた。

彼は自分の坐席に歸ると、キャツキャツ騷ぎながら、彼女達が顏を洗つてゐるのを樂しく眺めてゐた。水が白く河に叩きつ

けられてゐた。彼女達は海岸にゐる女達のやうに簡單な服をつけてゐた。そして乳の下へすぐ赤いバンドをしめてゐた。それが遠い旅行をしてゐる此の女達によく似あつてゐた。

「グッド・モーニング。氣をつけ給へ」

隣りの男が突然、背中を叩いて注告した。「氣をつけ給へ」に重點があつた。昨日の猛烈な顏をした大男である。

「あゝいふ女は危險だよ」

やがて二人の女は坐席へ歸ると、陰險な月給取りのやうな顏をした細い男に急いで接吻した。

陰險な男は女達に「ダッディ、ダッディ」と呼ばれてゐる。然し彼が彼女達の父親でない事は誰れが見たつてわかる。彼等はせいぜい五六歳しか違つてゐなかつた。

「見てゐたまへ。あの男は今にひどい目に逢ふから」

寶石商である例の大男が、又さう云つた。彼は嫉妬てゐるのかも知れない。彼の歯は喫煙の爲めに眞つ黒によごれてゐた。

ラヂオが這入つてゐた。ジャヅの名手、ポール・ホワイトマソ氏の指揮する「朧月の下で」であつた。姉妹達が時々指を鳴らしながら上體を動かした。彼女達は今にも立ちあがつて、彼女達のダッディと踊りだしたいやうな氣配を示してゐた。そして時々ムシャブリ付くやうに男の首に交る交る兩方から手を卷きつけた。自動車の動搖までが、次第にジャヅの上へ乘つて來た。ダッディと呼ばれてゐる男は何かのスパイのやうにも思はれた。久里は警戒が何よりも大切だと考へた。

自動車のタイヤは、吸ひつくやうに燒けたアスファルトの上を、相變らず滑らかに辷りつづけてゐる。

三

開け放された窓から顏を燒くやうな風が吹き込んで來た。

久里は頭をひつ込めると、ゴムを嚙みながら、自然に娘達の方を見てゐた。

「何しろアメリカ第一の州ですからね、テキサスは。この州だけでも日本より廣いといふんですから」

後の男が耳のそばで云つてくれた。

「なるほど。だが暑いですね。全く」

「さうですとも。だが暑くて雨が少ないのが、反つていゝんでさ。此頃になつてやつと開けたんですが、その爲めに遂に綿花の産出では世界第一にのぼりましたよ。それにこの綿がアメリカの輸出品の中で一等多額にのぼるんですからね」

この邊の男に違ひない。久里は說明を聞きながら怪物のやうなアメリカを感じてゐた。今アスフアルトの道は、この怪物の中を熱心に突きつてゐる。そしてそれは人間の征服欲を無限に延長して、世界の問題である太平洋を目がけてゐる。

姉の方が突然、ダツディの膝に手を置いた。細い爪の先きが綺麗に鋭くしてあつた。彼女は男を尻の下に敷くかと思ひの外、反つて男の方が忙いで彼女の手を握ると、自分の腰の下へしひた。女は痛さうにして我慢してゐた。

女優志願が見ぬふりをして此れをつぶさに觀察し、だが他の者は誰れも振り返らうともしなかつた。

久里は喉が乾いて時々、ポンプを押しに行つた。すると妹の方がきまつてついでにコツプをさしだした。

「よう。水がかりしつかりたのむぞ」誰れかがひやかした。

自動車は時々アクセレーターを吹かしながら、相變らず元氣である。家は無くなると、一軒も無くなつて、それが一日も續いた。長い長い路を走りつゞけて、自動車は州境に近く汽車と平行線になつた。

アンムレラ飛行場から一臺の飛行機が後を追つかけて飛んで來た。飛行機はまだ飛ぶために飛んでゐる。だから彼の行動は時々不可解な神秘に見えてくる。爆音が頭の上へ近づいた。

と、ローレンスに於ける兩大學の野球の放送が初まつた。アナウンサーの聲がせはしく走者の位置と球の位置とを交錯させた。喚聲があがつた。白い球が彼等の乘りあはしたバスの天井を飛び廻つた。

黒人の大學生がしきりにスコア・ブックに記入してゐる。

空を裂く朗らかな打擊の音が聞えた。飛んだと思つた。と自動車は一寸停車してガソリンを補給した。

風景が少しづつ平原から高原へのぼりだしてゐた。自動車は崖下をくゞつたり、谷の中途を廻つたりしながら、次第に高くへ出た。そして平坦な風景に出ると、糸蘭の花が眞赤な注目を

引いた。

「いゝ景色ですのね」

「まだ、まだ、これからです」

そして姉妹達の父親に對する情痴の風景も、次第に逞くましく進行してゐた。彼等の側は陽があたるので、暗くブラインドがおろされてゐた。その上ベスコ河を越えようとして、次第に彼等の周圍は、夕暮れが濃い色をつけだしてゐた。

「おい、電燈をつけないか」

誰れかが皮肉に氣をきかして叫んだ。

四

三日目の朝、ロスウエルに着いた。

吾々は又運轉手と自動車とを變へた。

口紅を惡どく塗つた田舍じみた一人のモダン・ガールが乘つて來た。彼女は車内を見廻はすと、しよんぼりしてゐる女優志願の傍らへ行つて坐つた。二人の對照が奇矯な諷刺畫を作つた。彼女はタイピストらしく指が頑丈に發達してゐた。然も二人は一日で親しくなれる豫感を感じあつてゐた。

ダツデイが姉の方と一緒に何時の間にか下車してゐなくなつてゐた。

然し妹は一人になつても、平然として騷ぎ廻つてゐた。彼女は何時の間にか白い象牙の扇をだすと、それを胸にあてるやうにして使つてゐた。

そこで久里は新らしく坐席を取る時に、今度は彼女の傍らへ行つて坐つた。彼女は右の頰に小さい點のやうな痣があつた。

「どちらへいらつしやいますの」

「日本へ歸るんです」

「まあ、そんなに遠いところへお歸りになるの」

「だが、いゝところですよ」

「一緒に行つてみたいわ」

すると、大きい寶石商が思ひがけず叫んだ。

「おい、こつちへ來ないか、君。チヨコレート進呈するから」

そこで久里は女達との會話を、彼の爲めに中斷された事をプツプツ云ひながら、彼の傍らへ行つて坐つた。チヨコレートが柔らかくなつてゐた。

「君はわからないのかい。乘つた時から注意してゐるぢやない

か」

「うん、よくわかつてるよ」

「どうだか」

だが久里は、厄介げにチョコレートを食べてしまふと、又妹の側へ行つて坐つた。

「貴方方のお父さんはどうしてお下りになつたんですか」

「彼は軍人です。この邊へ觀察に來たんです。私達はただ遊ぶ爲めに……」

「おい」

又、男が叫んだ。彼はプンプン怒るやうに、黑い齒をむいで云つた。

「おいハンカチをかしてくれないか」

今度はさう云つて、久里を彼のそばへ呼びつけようとした。そして久里が女達と接近する事を極端に邪魔しようとした。この男は新婚早々かも知れない。久里はさう考へた。それにしても不思議な心理だと思つた。

久里は彼のオセツカイに半分ほど不快を感じながら、彼の心理は研究するのに價値があると考へた。彼は中腰になりながら彼に接近すると、

「親切全くありがたう。ハンカチは君に進呈するよ」

そして胸のポケットから一枚のハンカチを取つた。

「ま、かけ給へ。君は僕のそばにゐるのが嫌なやうだね」

「でも、ないがね」

「チョコレートならまだあるよ」

「ありがたう。だが一寸話しかけてゐるんでね」

そして立たうとした。と大きい男は、いそいで彼の手を握つた。親切の積りか、嫉妬てゐるのか、全く見當がつかない。だが、兎に角、人種的な隔りを少しも感ぜしめない彼の國際的態度が彼に親しい友達の感情を起さしかけてゐた。

「貴方、いらつしやらない。こつちの窓へ。そつちの窓は陽があたつて暑いでせう。それにヤツカの花がとても綺麗に見えてよ」

今度は女の方から云つた。決して性質の惡い女とは思はれなかつた。たゞの無邪氣な娘に違ひない。

「こら！　どうしてさう動きたがるんだ。少しぢつとしてゐろよ」

猛烈な顔をした國際主義者が唸つた
然し久里が立ちあがると彼は泣く前のやうな強い顔をした。
「日本人なんて、しようがないな」
暫くすると、彼が又叫びだした。
「ハンカチ返すよ。君。君のやうな男からもらつたもんは返脚するよ」
女優志願とタイピストとが彼等の力を見て笑つた。久里はしぶしぶ立ちあがると、女の手を離して、怒つてゐる彼の傍らへ歸つて、今度は少し長い間心棒して坐つてやつた。
「君。どうしてあんな女と話しするんだい」
「話すのがどうしていけないんだい」
「話すのがいけないんだよ。僕がさつきから云つてゐるのが、まだ君にはわかつてないんだね」
久里は少しうるさくなると怒つた。
「おせつかいだね、君は。僕が何をしようと勝手ちやないか。あまり馬鹿にしないでくれ給へ」
「君はあの連中の事を知らないからさ」
「君だつて知つてるわけちやあるまい」

久里は急に不機嫌になると、怒つたまゝ妹の方へ歩いて行つて坐つた。寶石商の嫉妬は、彼の餘りに現實的な肉體の過剩から反撥して來るものに違ひない。さう考へさせるほど彼の肉體は坐席にあふれてゐた。
「あつちの窓は實際暑いんでね」
向ふから同じやうに客を乘せた長いバスが走つて來た。運轉手がなつかしげに兩方から太いクラリソンを鳴らして挨拶した。乘客が白いハンカチを振りあつた。たしか胸にさしてゐる小さい赤い花が久里の眼にとまつて走りすぎた。人は瞬間に不思議なものを見るものである。
「いゝもんですね。かういふ山の中で逢ふのは」
自動車は次第に南下して古風なエルパソの都をねらつてゐた。
L・S自動車會社の宣傳放送が初まつた。
「アメリカに於ける乘合自動車の發達は、漸く汽車と電車とに明らかな對立を示しだして來ました。自動車は贅澤品どころか、汽車の實用を遙かに凌駕してゐます。わがアメリカに於け

る乘合自動車は約九萬七千臺に及びますが、內四萬五千臺が市中を走り、あとが市間・州間を連絡し、わが會社の自動車數はこれらの中の約五割を占めてゐます。今日までに全國的に發展して行つたバス經營に費された金額は約十二億に及びます。

且つ何故に自動車が進步的であるか。皆さんも經驗してゐられるやうに、既に賃金にしましても、アメリカ中部から西部に出る爲めに、鐵道では約百二十五ドルを要します。然るにわが乘合自動車に於ては五十五ドルで事足りるのであります。現代の抱負ある事業家が、各國とも漸く乘合自動車の問題に注目しだした事は當然と云はなければなりません」

自動車は爽快に乘客をゆすつてゐた。風が清麗な嵐氣を吹き込んで來て乘客をねむたくした。

「あゝ眠むたくなつて來た。いゝ時に放送しやがる。こんないゝ景色のところで」

商人風の男はさう呟くと、然しいゝ景色を眺めやうともしないで、深い眠りに陷ちてしまつた。久里は後部の展望臺に出ると淋しい煙草を吹かしだした。薄い埃が煙の尾になつて、卷きあがりながらついて來た。

寶石商は、怒つたまゝ、あれ以來、彼に見向きもしなくなつてゐた。

五

四日目が明けた。

久里は彼女の傍らで眠つてゐた。ふと眼をあけると、寶石商が彼の方をじつと見据えてゐた。だが久里が彼の方を見ると、彼はいそいでむづかしい顏をしながら向ふを向いた。然し暫くして女が彼の肩に手をかけようとすると、とうとう我慢が出來なくなつたらしく彼の方から口をきいた。

「おい。よく眠たれかい」

まだ苦がい顏をしてゐた。

「うん、君はどうだつた」

久里は急に明るくなつて久しぶりで答へた。千年の知己が歸つて來たやうな氣がした。

「又こつちへ遊びに來ないか。涼しいよ」

そこで久里は素直に立ちあがつた。今度は餘りひどい事は言



東倶知安行

この一篇を『北海道血戰記』の筆者に捧げる

小林多喜二

一

夜の十一時になつて、やうやく皆はストーヴの側に寄つてきた。外は吹雪いてゐるらしく、がたぴしする事務所の二階の何處かの角に風が當つてゝなると、ユキ〳〵搖れた。間を置いて、サラ〳〵と雪の羽目板にあたる音がした。ストーヴは、何時もは石ツころのやうな石炭で、プス〳〵室の中をけむたくしてゐたが、選擧が初まつてからは每日グウン、グウンうなつて勢よく燃え上つてゐた。今迄あつた事のないカリ〳〵した眞黑な光澤のいゝ石炭が箱に一杯入つてあつた。

板壁や破れた襖に、

一、金壹圓也　　一勞働者より

一、二錢切手十枚　　某

一、鷄卵七個　××工場有志
一、參十圓也　東京×××子
一、拾五圓也　××××
一、壹千圓也　本部
一、三錢切手三十枚　瀧の勞働者
一、鷄卵十三個　某
一、五十錢　某
一、二十錢　某
…………　…………
…………　…………

その側には各地から來た激勵の電報が畫ピンで兩端をとめて、貼られてゐた。病床から無理に起つた候補者のために、身體のことを心配した電報が多かつた。

「カテ、カテ、アクマデカテ」
「タマゴヲノンデ、タタカヘ」
「カラダ、ナニヨリカラダ」
「エンゼツハ、ミヂカク、スルドク、カラダヲタイセツニ」
「タマゴヲノメ、シンデモカテ」

室の中は、私達の書損じたビラや墨皿や、それに使つた太い筆などで、足の置き處もない程散らばつてゐた。壁一面、演説會の豫定圖や新聞紙に赤で太々と書かれた煽動的なスローガンや、太い腕や齒車などを描いた地獄極樂の畫のやうなビラ、ポスターが所嫌はず貼られてゐる。

仕事に一區切りの出來た皆は、ストーヴの廻はりで遠慮のないブツキラ棒に大きな聲でしやべり合つてゐた。

社會科學研究會の學生が二、三人制服に烏打で來てゐた。會社につとめてゐる吉川や、新聞記者の大島なども、膝をかゝへながら、墨で眞黑にした手でバットを喫んでゐた。選擧が始まるやうになつてから、私達は會社の勤務が終ると、毎晩組合の二階へ手傳ひにやつてきてゐた。勤めの關係上、表に立つて仕事が出來なかつたので、裏のことは出來るだけ自分達だけでやり、組合員はなるべく全部第一線に立てるやうにしようと思つてゐた。

話題は當然選擧のことだつた。島田正策が東京からの「輸入」候補者であるために、他の候補者達は「投票するなら、地元候補へ」さう大きく印刷したビラを撒いて、民衆の單純な愛郷心を歪めようとした。それに初めての「プロレタリア」候補であるために、滑稽な程おぢけついて、彼等は「島正」を共産黨員であり、ロシアの手先になつてゐる「國賊」であると云ひふらしてゐた。ことに、こんな考へ方は日本のやうな國では、一般民衆が××××××考であり、しかも一旦××たら最後染職の掌のやうに、棺桶の中までも持つて行かなければならない程しみこんでしまふものだつた。――それに對して、どういふ對策をとるか、それが皆の問題になつた。議論がストーヴの色々な側から出た。

暗い階段をガタ／＼いはせて、ゴムの深靴をはいたまゝ、ボロ外套をきて、片手に糊のバケツをさげた勞働者が二、三人上つてきた。「ひでえ寒氣だ。」顏が寒さで酒をのんだやうに眞赤になつてゐる。

「あんまりの寒さで、糊が効かねえで弱つた。」

「ご苦勞さん。」私は席を空けた。

ストーヴの側に立つと、勞働者の眉や鬚から雫が幾つもスウ、スウと線をひいた。

ビラ、ポスター係が、大きなあぐらの上に五、六冊雜誌をひろげて、漫畫を摸寫してゐた。

下でガタ／＼となつた。皆一緒に「誰だア！」と吐鳴つた。スパイが來るので一々嚴重にした。

「ブルの方の野郎達はなア、途中々々バアーに寄つて、一杯ひッかけながら貼つて歩いてるんだ。寒いからな。處が、こつちは……」

「こつちはか、」一人がいたづらゝしく引きとつて、「こつちは、内にプロレタリア解放の酒ッ氣を帶びて、ホク／＼で歩いてるのさ。」

「ふッ！」

皆笑つた。

まだ三十位なのに、すつかり頭の禿げてゐる癇の強い事務長は、少し離れた机で、太い無骨な指で考へ、考へ算盤をおいてゐた。その横で、若い組合員が「無産者新聞」の帶封をしながら、名簿を繰つて、一々宛名を書いてゐる。うつむいてゐる鼻

ツ先に、水滴が下つてきてゐた。時々ストーヴの方の話にも口を入れた。

「勝ツウ――ぞオ――ツ！　畜生！」

両腕を勞農黨のポスターのやうに、二本平行に天井に突きのばして、あくびをしながら、誰かゞ、とてつもなく大きな聲で云つた。それで、あくびがストーヴを取り巻いてゐる二、三人に染つて行つた。

十一時過ぎて「島正」から電報が入つた。

「ネツキヨウテキマンキン、マスマス、フントウスル。」

「島正」の一行は黒松内――倶知安方面へ演説に出てゐた。ところが、日程の都合で、この遊説隊が二つに分れなければならなくなり、早速その人員の埋合せとして、誰か明日出發しなければならなかつた。それに私と吉川が應じたのだつた。

私は何時でも自分がにえきらない「裏」の仕事しか出來ない事をはがゆく思つてゐた。それは現在の勤めを考慮に置いてゐる限り、どうにも出來ない事だつた。然し、私はつきつめて云つて、それは我々の運動への大きな「卑怯」であるとさへ考へてゐた。殊に、さういふ階級的良心の絶對的な「純粹さ」といふ事が時代病的に（？）要求されてゐただけ、堪へられない厳しさで、私は責めつけられた。が、私は結局ズルズルになつてゆくより仕方なかつた。勤めを離れて、次の日からすぐ食つて行ける自信はまるでなかつた。私は勝手に飛び廻はれる次男坊でもなかつた。私の月給には六人の親子がブラ下つてゐた。勿論そんな事を云へば「お前だけに養はなければならない親や子があるんぢやない。」一言のもとにさう云はれる。昔の先覺者は「××を蹴れ」とさへ云つてゐる。それは分つてゐた。個人の利益は何時でも、一分の隙もなく階級の利益を前提しなければならない。それだのに、自分達だけの幸福を孤り守る！　私は何よりもそれが悲しかつた。――恐ろしかつた。

然し悲しがつてばかりゐても、舟は出來上らない。選擧が初まつて、組合の人手が足りなくなつてから、たとひ表面に出ないとしても、私は自分の「首」を賭けて毎日組合に出入した。それが會社に分れば、それだけの理由ですぐ「首」だつたのだ。私は出來るだけの事はした。毎晩一時過ぎ、夜更けのシリ、シリと底からくる寒氣の中を、郊外の自分の家迄一里以上も歩いて歸つた。吹雪の夜、思ひがけない處に出來た吹溜にのめつた

り、雪藪の中に身體を半分もうづめた。過度に身體が疲れてゐるので、歩きながら眠り、思ひッきり塵芥箱に打ち當つてギョッと目を覺ましたりすることさへあつた。

市内では、毎晩同時に三ケ所位づゝ、島田正策の政見發表演說會を開いた。それには組合や黨の幹部が皆出た。今迄ブルジヨワやその鼻息をうかゞふ陣笠連の上品な、型通りの演說ばかりに慣れ切つてゐた一般民衆は、この粗野な、圖太い、グンと迫る――すべてが正反對の絶叫をきいて、吃驚した。それが、不思議にどの他の演說會よりも人氣を呼んで、殆んど滿員ばかりだつた。

私は市内のそれには、然しいくらどうしても出ることは出來なかつた。ところが、倶知安の欠員ではないか！ 私は身體がワク〳〵する程喜んだ。然し、それだとしても、勞農黨は嚴重な警察の監視のもとにあり、中止、檢束で頭ごなしにやッつけてくる。土地はＯ市からは離れてゐても「首」はやつぱり前よりもモット確實に賭けられなければならなかつた。月給取の「運動」なんて窮屈な、にえきらない、面倒臭いものだ。私は然し出征軍人のやうに興奮してゐた……。

私達は歸り仕度をした。ストーヴで溫たまつた身體は外へ出ると寒氣が急にきた。乾いた細かい雪が、暗い空からしきりなしに降つてゐた。店先を通ると、明るくそこだけ區切られて、入り亂れて降つてゐる雪が奇麗に見えた。私はオーヴアの襟をたてゝ鼻を抑へた。鼻穴がキーンと痛むほど、夜の空氣が凍え切つてゐた。

私達は街路燈が雪にまばゆく反射してゐる廣い通りを横切つて、小路に入つた。少し斜めの狹い、薄暗い小路だつた。「即席御料理」ののれんのかゝつた淫賣家が二、三十軒ものきを並べてゐた。雪の遠慮もなく吹きこむ土間に、女が無雜作にショオールを首にまきつけて、袖に手をひッこめたまゝ、表を見て立つてゐた。醉つた二重廻はしの男や船員が選擧の戸別訪問のやうに一軒々々覺束ない足取りで、ひやかしに寄つて歩いてゐた。

「ちよつと、ちよつと、兄さん！」

初め、二、三軒から女が呼んだ。然し何時も通るものだと分ると、やめた。

「組合の人。」低くさう云つてゐる。

「ぢや、明日の朝五時二十分だね。」
別れる處にきてゐた。二人立ち止つた。
「五時二十分。ねむいぞ。」
吉川は暗い通を「××の歌」の一節を口笛で吹きながら、上つて行つた。少し行つて、ショウ・ウインドウの光が道に投げられてゐる處をクッきり後姿を見せて、すぐその圏外に出ると、見えなくなつた。
獨りになると、私は興奮してきた。それは不思議な程靜かな、然し身體全部を底からユキ／＼とゆすぶつてくるやうな興奮だつた。
曲り角にくると、私の右手の側の家が、芝居のスポット・ライトにあてられたやうに一部分クッキリ光づた。その光の輪がすぐ自分の方へグル／＼と移動して、順次に色々な家や石垣や塀の部分が光つて消えた。と、ヘッド・ライトを光らした自動車が曲がつてきた。私の横を通るとき、ちらつと見た薄暗い車室に、藝者とお客の二、三人が折り重つて見えた。女の甲高い聲の一句が、ちぎれて自分の耳を刺して行つた。

二

二月十五日、朝五時。濡れた着物を直接に肌につけるやうな寒氣がブルン、ブルンとくる。外はまだ暗かつた。土間で、爪先きを鍵に縮めながら、齒をみがいてゐると、ひつそりした表をサク、サクと歩いてゆく足音が聞えた。築港の沈下ケーソンのコンクリート工事に行く人夫だつた。この工事が始まると、キットその工事中に何人かの犧牲者を出した。丁度「人柱」でもあるやうに。殆んど一日置き位に家の前を擔架がギシ／＼きしみながら通つて行つた。
私は何日の寢不足で心が疲れてゐた。
郊外の、小さい築港停車場は、置き捨られた棺桶のやうに寒さに縮まつて、ぢいとしてゐた。厚い戸を開けると、硝子板に疵でも入れるやうな意外に鋭い響をたてゝ開いた。黒ラシャの外套を着たまゝ、椅子に腰をかけてゐた驛員が、小荷物スタンドの硝子戸越に、ギョットしたやうに、明かに今迄居睡してゐた眼をこつちに向けた。それから、そして物憂くあくびをした。待合室の中央の高いところに一つだけ動きもせずに下つて

ゐる電燈が、妙に白ずんだ淡い光線を投げてゐた。隅々が寒さうな陰を作つてゐる。木のベンチには、土工部屋から追ひ出されてきた（一見してさうと分る）垢だらけの乞食のやうな男が、口を仰向けに大きく開いて寝てゐた。

驛員は寝不足の、はれぼつたい、ぼんやりした顔をして、不愛想に口のなかで何か分らない事を云つて、切符を硝子張りのスタンドを辷べらしてよこした。その停車場からは私一人だつた。夜中寒氣にさらされてゐたプラットフオームは、そこの砂利を踏むとバリ、バリと霜が裂れた。白い呼氣が煙草の煙でゝもあるやうに、何時までも消えなかつた。靴が鰹節のやうにこはゞつてゐる。少し離れた入替線に機關車が一臺休んでゐた。シン、シン、シーンと絶え間なしに蒸氣の音をさしてゐた。東の空が寒さうに明るんできた。天氣が良くなりさうな澄んだ空だつた。

列車がプラットフオームに地響をたてゝ入つてきた。列車に煽られて、粉のやうな雪がプラットフオームに舞ひ上つた。列車の窓硝子は皆スティムが花模樣にギラ〳〵と凍えて、内は見えなかつた。乘客は寝てゐるのが多かつた。入つて行くと、仕切りの背板の上に毛布をかけて足が出てゐたり、窮屈さうに肱枕をついて寝てゐるものなどがゐた。私の足音に一人が薄眼をあけて、視線のきまらない眼差で見てゐたが、すぐそのまゝ眼を閉ぢた。端の方で空氣枕をしぼつて空氣を出してゐる音がしてゐた。はき出すやうな短い生あくびが處々に起つた。ボソボソ誰か、何か話してゐる。――笛が鳴つた。遠くで、バタン、バタンとドアーを閉めてゐる音がすると、前部の方から順にゴトン、ゴトンと箱が動き出した。

二つ目の小樽驛で吉川と組合の執行委員長の鈴木と一緒になる事になつてゐた。汽車がプラットフオームに入ると、吉川が一人列車の窓に注意を拂つて、立つてゐるのを私はすぐ見付けた。

「鈴木さんは？」

「まだ來ないんだ。」

「來ない？　ぢや、どうしよう。」鈴木が行かなかつたら、こんな事には初めての二人ではどうしたつて「お話」にさへならなかつた。

「昨日迄夕張炭坑の方を連日やつてきたんだ。それに昨夜は遅

かつたから、どうかと思つてるんだ。」

二人はプラットフォームに續いてゐる階段の方ばかり見て、立つてゐた。汽車は五分停車だつた。私達は變に出鼻をくぢかれた形で、イラ／＼してゐた。吉川は落着きなく、何度も時計を出す。乘る人は乘り、降りた人は橋を渡つて向側に行つてしまひ、プラットフォームには人が段々少なくなつた。物賣りだけが大きな聲で叫んでゐる。

「貴方方は？」

大きな時計を掌にのせた驛員が吉川に言葉をかけた。

「待つてるんです。」

「もう時間ですが。」さう云つて、すぐ側の柱のボタンを押した。鈴が鳴り出した。

その間私達は「居ても、立つても」ゐられなかつた。鈴の連續が止つた。――汽笛がなつた。その時だつた、折カバンと新聞を持つた鈴木が階段をかけ下りてきた。私達は急いで飛び乘ると、そのドアーを開けて待つた。

「早く、早く。」驛員が呼んでゐる。

鈴木はやうやく間に合つた。

私は鈴木をよくは知らなかつた。組合の二階でひよい、ひよい顔を合はせる事はあつたが、然しそれだけだつた。關羽そつくりの長髭をたくはへてゐて、アイヌ系の輪劃のはつきりした鋭い赤ら顔をしてゐた。一寸近づけない凄い顔だつた。然しそれよりも、私は毎年のメイデイで、鈴木が街頭の小高い所に上つて、その前を通り過ぎる行列に、火のやうな演説をするのを見知つてゐた。それは聞いてゐて、どうしても身體が震えて止まらない興奮を感じさした。その時の鈴木の「鬼」のやうな風貌が、貧弱な自分を威壓して駄目だつた。その事が、他の組合員など〻同じやうに、お互に話しかけたり、相手になつたりするのを拒んでゐた。O市の資本家が鈴木の一擧一動にビクビクもの〻注意を拂つて、こわがつてゐるといふ事、そして昨年のゼネ・ストを爆發させてから、それが殊にひどくなつたといふ事を、私は色々な人を通して聞いてゐた。

然し、これが同じ人だらふか！私は、自分の前に坐つたその「恐ろしい」人を見て、其處にはそのどの一つの條件さへもないのを知り、意外に思つた。――人の好さがすぐ分る「ひげのおぢさん」だつた。頭領株の人によくある清濁併せのむ、大き

な「和やかさ」がある。私はだん〳〵ずツと前からの友達のやうに——そんな調子で話し合へた。

鈴木は折鞄をあけると、中から無雜作に赤い林檎を二つ三つ手づかみに出して、私達に分けてくれた。

「本當はねえ、吉川君、今來るときさ、嬶をブンなぐつてしまつたんだよ。」國なまりのアクセントでさう云ふと、お人好しのやうに唇でムフ、フ、フと笑つた。「然し勝手なもんだなあ、三週間も家を放つておいてな。」

斜め向ひで、母親の膝に乘つて、乳房をなぐさみにしながら、無心にあー、あー、あーと云つてゐた赤子が、こつちを見ると、今迄のそれをやめて、口を半開きにしたまゝぢいと鈴木の顔を見始めた。私はそれに氣付くと、この片言も云へないやうな子供にさへ、この顔が不思議に映るのかと思ふと、獨りでをかしくなつた。

「嬶がな、何も無くなつたから、飯を炊く炭や石炭を貯炭場から盗んでくるツて云ふんだ。俺ア困つちまつたよ」

後で、私はこの事から吉川と話したとき、鈴木には四人も子供がゐて、それが彼が運動の方へ入り切つてゐるために、食ふや、食はずで痩せ衰へてゐる事をきいた。學齢になつても、一人も學校へは通へず、電燈は三ケ月も前からとめられて、夜中眞暗な家の中に住んでゐた。飯は長屋の人達が少しづゝ集めて、持つて行つてやることもあつた。細君は時々港の濱町へ荷擔人夫に行く……。そんな事を私に知らせてくれた。——「お前だけに」養つて行かなければならない妻や子がゐるんぢやないのだ。私にはドキリと來た。ものを食つて生きてゆかなければならない嬶と子供をもつて、この運動をしようとするのは、冗談や流行や道樂で出來るものぢやない。

「炭坑の方はどうだつた。」吉川がきいた。

「夕張ではねえ。」鈴木が根元の皮膚がツリ出る程顎を引ツ張り乍ら話した。「夕張はねえ、それア非道いんだ。あすこはねえ、何處も炭山はさうだらうが、暴力團のやうなゴロツキをちやんと傭つて置くんだ。そして平常でも變な奴が夕張あたりをウロウロしてゐるのでもたゝき出す。まして、組合を作るとか、なんとか、そんな氣の一厘でも見えたら最後、その當人なんて半殺にされてしまふんだ。資本家——ゴロツキ團——それに××、と、から三拍子がちやんと揃つてゐるから、とても大變

さ。」

「まア、命がけだな。」

「勞農黨の演說會だと云ふと、始まる一時間も前から、入口から道路へ一町も——本當に一町も巡査とゴロツキと會社員が平行線に、向ひ合つて竝ぶんだ。だから、どうしても入場者はその平行線の眞中を通らなけアならない。勿論入場を妨害する、會社のブラック・リストにのせる、惡く行けば『首チョン』とくるわけさ。一度演說會で、俺と一緖に行つた山下が——知つてるだらふ——あれが炭坑のバク露をやつたんだ。山下は前に炭坑で働いてゐたことがあつたから、グッと急所へ行つたわけさ。聽衆は皆坑夫だ。カアッ！と殺氣だつてしまつたんだ。あの時だつたな、俺でも誰でもいゝ、たツた一言『××××××××。』とでも怒鳴らうものなら、そのまゝドッと行きさうだつたよ。さういふ炭坑夫等は凄いもんだ。」

車掌が時々うさん臭さうに私達の方を見て行つた。

「それから、三度目かの演說會かな、出る奴、出る奴皆中止、中止を食らつて、聽衆もどえらく憤慨してワツ、ワッと騷ぎ出したとき、解散の電燈が全部停電してしまつたんだ。俺ア正直に最初さうと思つたんだが、何アにゴロツキ達の仕業さ。しまつた、と思つた。所が案の定、その暗闇に乘じて、コン棒をもつて暴れ込んできたんだ。××は知らぬ顏さ。これには『××』をかけないんだから妙さ。——非道えもんだ。」

「餘程氣勢は上つてるんだから、五、六百票は大丈夫だらふ。それに、あそこは、これからの俺達の大切な地盤なんだからな。」

「いや、あすこは失敗するよ。何んだつて未組織だ。これが重大だ。まだ發端といふ處にさへも行つてゐないんだ。いくら氣勢ばかり上げたつて駄目さ。みんな買收されてしまふさ。それに野郎達の方がよツ程賢いらしな。——投票所を三十分も汽車で行かなければならない處へ移してしまつたんだ。どうだ。坑夫のうちの何人がそこへ行けるツて。今、あつちでは、それへの抗議運動を起してゐるが、ねえ。」

鈴木は手の指を熊手のやうにして、頭の毛につツこんで、逆にゴシ〳〵やつた。顏をまぶしさうにしかめながら「ねえ、吉川君、本當のところ何も坑山ばかりでない、俺達の運動は皆今始められたばかりさ。何代がかりの運動だなア。」

何代がかりの運動！

「ヤッ！！　あそこの電信柱に島正のビラが貼らさつてるぞ。こんな山ん中に誰が貼つたんだらふ。」吉川が聲をあげた。

私達は急いで窓をあけると、頭をつき出した。汽車の速度で起されてゐる寒風が、いきなり横ツ面をなぐりつけた。

「目につく、目につく！　いゝ處に貼つたもんだ。」

私達は子供のやうに喜んだ。

三

汽車の中ではスポンヂ・バックを持つて、洗面所を出入りする者が多くなつた。歯を磨きながら、洗面所の順番を待つてゐる人や、腰掛の背板を一つ、一つつかまへながら、汽車の動搖に中心をとつて歸つてくる人。――夜がすつかり明けてゐた。凍えついて外の見えない東側の窓硝子だけが、水色に明るくなつた。

私達の乘つてゐる同じ箱の、丁度反對の端しの方に、二十人ばかりの朝鮮人が乘つてゐた。北海道の奥地の炭坑か土工部屋（監獄部屋）からの歸りらしかつた。薄汚くのびた「天神髭」をはやした、薄い眉と眉の間の遠い朝鮮人が、しきりに分らない早口で話してゐた。私が便所に立つたとき、その側を通つた。支那ドンスの白が汚れて、何か分らない臭氣がステイムにむれて、それがもつと非道い臭氣になつて、ムンときた。

春と秋――冬、北海道の大抵のどの汽車の中でも、私達は十人、二十人の朝鮮人の群を見ることができる。プロレタリヤは故郷を持たない、その標本が朝鮮人だつた。そして更にそこに×××な××的關係が入りこんで、文字通り彼等は「故郷」の代りに「風呂敷包」一つを何時でもブラ下げて移り歩いてゐる。しかも、勞賃が日本の勞働者よりも安いところから、日本のプロレタリアは朝鮮人に團結の手を差出す代りに「×」だとさへ感ずる。アメリカの勞働者と日本の移民のやうに。

O市の合同勞働組合には、朝鮮人の團體と日本人の團體を持てあまして、それに對する正しい指導を持ち得ずに、根ツから失敗した苦い經驗があつた。それは私もきいてゐた。――こゝにも、我々が必ず手を觸れなければならない、然し最大の困難を伴ふ未墾地があつた。

汚い手拭で鉢卷きをした小柄な朝鮮女が、身體を紙挾みのや

うに二つに折つて、うなつてゐる。その側に三人の背の大きい男が立つて、お互に何か激しく云ひ合つてゐるらしかつた。そのうちに、顔をすつかり伏せて泣いてゐた女が、突拍子に高く二言ばかり云ふと、背がギクツ、ギクツと波打つた。そして黄色いものを前一杯に吐いてしまつた。吐いてしまつて、女は弱弱しくあー、あー、あー、と云ひながら、半開きになつてゐる唇からピロ〱した汁をたらしてゐた。

車掌が通りすがりに、男の朝鮮人を一人、一人見廻はしてゐたが、一寸立ち止つたゞけで、次の停車場のことをお客に口上しながら、後の箱に移つて行つた。側に坐つてゐた人達が鼻を押へながら、席を移した。

私は席に歸つてくると、鈴木に朝鮮人のことを話した。鈴木はこの前の失敗した經驗を詳しく私に云ふと、

「いや、とても面倒で、いゝシヤツポを脱いだよ。」と、頭をゴシゴシやつた。

便所から吉川も歸つてきた。

「あすこに監督らしい日本人がゐるんだね。何處かへ賣渡すに引張つて行く處らしいよ。朝鮮人が何んでも、女が死にさうだから、なんとかしてくれ、と云つてるらしいんだ。處が、監督の云ひ草がかうだ。手前え達に、そんな××××ことがしてやれるかつて。自惚れやがるなつて。――可哀相に、女はまるで握り拳みたいに縮こまつてしまつてるんだよ。」

吉川は朝鮮の問題には可なり、鋭い、深い考へを持つてゐた。レーニンの××問題と×××の相關々係などを、朝鮮の具體的な事實について鈴木に一々話してやつた。鈴木は後の窓枠に頭をのせて、眼を閉ぢながら、ウム、ウムときいてゐた。吉川に從へば、それだから「鈴木には頭領の風格がある」んださうである。理論鬪爭だといふので、他人の話には必ず喧嘩腰に理窟をこぢつける組合の若い連中とは、鈴木ははつきり異つてゐた。それは私から見ても確かだつた。

時計を見ると、八時を少し過ぎてゐた。「八時」といふ事は、私をして本能的に「會社」を思ひ出さした。それは私達會社員について離れない一つの強迫觀念だつた。後備の軍人が子供の吹くラツパの音をきいて、思はず直立不動の姿勢をとつてみたり、昔、給仕をしたことのある人が、鈴の音をきいて、ギヨツと跳ね上つたりする、それとこの觀念はよく似てゐた。

私は會社には親類の不幸のために欠席するといふ風にしてあつた。そして何時もながら、會社に出る時間を、かうして「謀叛を起して」汽車に乗つてゐる自分が、妙に面白く思はれた。かういふ位置になると、コセ／＼會社に縛りつけられてゐる會社員の恰好が一目に見渡せる氣がした。

私は、彼等が「犬」といふ名前で呼ばれゐないことを不思議にさへ思ふ。露骨に上役の鼻毛を覗ひ、露骨にこせつく。私は彼等の中にゐる、それに對しては、丁度肥汲みが糞の臭氣が膚にまでしみこんで一生とれなくなると同じやうな恐ろしさを感ずる。會社には「意識々々」といふ言葉が特別の意味を持つて流行つてゐた。それは、人にコキ使はれる下役から早く立身、出世をして、自分達も「人を使へるやうな」支店長にならふとする「意識」のことだつた。仕事が終る。然しすぐには歸らずに、支店長の前へ行つて無駄話をする。榮達の一つの道だつた。きまつて一ケ月に何度か支店長の家を訪問する。それも必要な道だつた。支店長には――少なくとも自分の利益になると思はれるどの上役にも――自分の額で土を杵のやうに叩くほど、丁寧に、何度も頭を下げなければならない事をも知つてゐた。資本家のカバン持ちを、腰をかゞめてつとめる。何しろ、鼻の先には「支店長」がブラ下つてゐる。「おあずけ」に釣られて、何時までもついて行く「犬」だつた。

だから、彼等は資本主義の發展、維持に全部の望みをかけてゐる。滑稽にも！　然し、その彼等自身こそ、供給過多からくる俸給水準の低下と、營業規模の進化のために女事務員、子供の代用からくる失業に苦しめられ、結局「支店長」への榮達の夢は「夢」でしかなくならふとしてゐる事を「知らない！」それどころか、「洋服を着て、靴をはいてゐる」手前、プロレタリアに落ち込む事を「死」よりも恐れてゐる。彼等は、だからプロレタリアが自分の後生大事な資本家にとツかゝつてくる事を「やつきになつて」――「本能的に」憎む！

彼等は藝者の支持者であり、カフエの常連であり、ゴルフ・フアンである。月々高の知れた金しか貰へない癖に、大資本家のする模型のやうなことを一通りしたがる。

彼等は、同僚が「首を切られ」ようが、話にならない月給で働いてゐようが（彼等のうちでは往々に勞働者よりもモットひどい條件で働いてゐるものがある。）「知らない」ことにしてゐ

る。そんな「他人の」どうでもいゝ事に「おせつかい」して「支店長」がフイになつたりしたら、死んでも死に切れないからだつた。「個人主義」「勿事主義」がこゝでは典型的に美事な實を結んで反動的なことを「平氣」でする。しかも彼等が一つぱし學問、教養があるといふので、その云ふことが四圍に案外な力で傳染してゆく「恐ろしさ」を持つてゐる。

彼等は自分の階級的な本質をちつとも意識してゐない。又さうする事を拒まふともしてゐる。現に、底のないぬかるみに片足をつツこんでゐながら、頭の先だけで（これは彼等の十八番である。）「さうではない」と考へてゐる。空に浮かんでゐる「支店長」の幻影ばかりに見とれて、足もとを知らないのだ。

その中間性の故に、內股膏藥の、困つた寄生虫である……

然しそんな事はどうでもいゝ。汽車は山と山の股のやうな――峽を、のろ〳〵とくねつてゐた。兩側には、雪の山が幾つも、幾つも折重つて、汽車の窓とすれ〳〵になる程にせまつてゐた。所々にある防雪林が片側にだけ雪を受けて、たわんでゐた。奥が暗く、深く、それが底氣味惡い程續いてゐる原始林の切り通しを進む時には、機關車のバッシュ、バッシュといふ音が際立つて聞え、何んとも云へなくその原始林にこだまをかへした。

ステイムで曇つた窓硝子を拭つて、私は外を時々見た。飛んでもなく人里を離れた山際に、置き忘れたチヨコレートのやうに、茅ぶきの百姓家が一面の雪の中にポツンとあつたりした。

四

汽車から下りると、すぐ眼の前にぶツつかるやうにマツカリヌプリが晴れた冬空に浮かんでゐるのが見えた。そのだゝツ廣い裾野にある倶知安の町並は、雪の中から屋根だけを出してうづまつてゐた。

停車場通りのやゝ廣い道を歩いてゆくと、荒物屋や呉服屋の硝子戸に、他の候補者のと一緒に、

勞働農民黨公認候補者島田正策
政見發表大演說會

そのビラが貼らさつてゐるのが眼についた。かういふ異つた

土地で自分達のビラを見るのは、不思議な懐かしい氣持を覺えさせる。自分達は、又あつた、又あつた……と、一枚々々見つけると、めづらしいもの〻やうに、口に出して云つた。通りの雪道は、山の峰と峰の連續のやうになつて、歩いてゐると、兩側の屋根より私達の方が高いところさへあつた。そして薄暗い家の中の爐が、窓から眞直ぐ見下ろされた。前の日かに吹雪いたらしく、どの家も一樣に北に向いた側だけ雪をあびてゐた。屋根に上つて雪を降ろしてゐた人が、私達がくるのを見て、上から言葉をかけた。

「今日勞農黨の演説會があるから賴むど。」

若い組合の人が立ち止つて、雪の反射にまぶしさうに手をかざして、屋根の上の人を見上げて云つた。

私達は組合の人から倶知安の方の事情を、道々、きいた。それは直接こ〻でやる自分達の演説の材料になるからだつた。私達の話す演説が相手の氣持をはつきりつかみ得るためには、相手が現實に何を感じ、何を要求してゐるかといふ事を、その人達が實際日常に經驗してゐることから取りあげて示してやらなければならない。本で覺えた偉さうなマルクス、レーニンの理窟の暗誦は「あくび」を起さすことでしかない。——殊に地方ではさうだつた。

街外れ近くになると、道はそのま〻雪の廣い野に出てゐた。汚れた、でこぼこの道が、ギラ〱光つてゐる雪の原を、二、三本しか線の架つてゐない電柱に沿つて、ずウと、マッカリヌプリの裾に續いてゐた。電柱は遠くでマッチの棒を間隔をちゞめて竝べたやうに見えてゐる。鴉が雪にかげを落して點々と飛んでゐた。鴉の啼き聲が空の何處からか時々不吉に聞こえる。

私は一寸立ち止つた。

「田舍でせう。」後で、兵隊上りだといふ人が言葉をかけた。

私達は事務所へ行つた。事務所はその兵隊上りの人の家で、駄菓子屋だつた。駄菓子の折が三つゞつ、二段に竝んでゐた。それに店先には、森永ミルク・キヤラメルや煙草小賣所などの看板や、鞋やつまご（ワラで作つた一種の雪靴）が束になつて掛けてあつた。兵隊上りの人が戸をあけると、薄暗い家の中から襷をかけた細君が出てきた。その後からは犬のやうな大きな猫が、尻の方を擧げて、のそり出てきた。一寸土間になつてゐる處にある粗末な長い椅子に、ずんぐりした赫ら顏の百姓が冷

や酒をコップで飲んでゐた。猫がその百姓の鰯のそばをウロウロした。

店にはビラの包みや、ロー引きの臺鍋一杯に入れられた糊などが置いてあつた。土間に火鉢を下してもらつて、皆でそれを圍んだ。私は靴をぬいで、火鉢のふちに足をのせて、感覺のなくなつてゐる爪先きを兩手でもんだりした。

私達の豫定が急に變つた。電報が來て、本隊がこゝでやり、私達はこゝから四里程支線に入つた(所謂山籠)東倶知安でやることになつた。然しもう汽車がなかつた。私達は大忙ぎに忙いで馬橇を一臺用意して貰つた。

支部の人が屋並から突き出てゐるマツカリヌプリを見上げて、

「どうだらふ。」と云つてゐる。

「今日はいゝやうだが――。」

「大丈夫だらふ。」

そして私に「いゝ、これがねえ、こゝの氣象臺つてわけですよ。」と云つて一寸笑つた。

ピシリと、馬の尻で鞭がなつた。

「出すど。」百姓の馭者が後を向いた。

馬の首につけてある鈴が、晴れた冬の空に「朗かに」鳴つた。

雪道の溝に馬橇の足がはまる度に、私達の身體はハズミを食らつて投げ出されさうになつた。鈴は調子よく鳴つた。足を雪藪につツこんで馬橇を除けながら立つてゐる町の人が、私達を見ると、「今日は。」と挨拶した。初め、私達は慣れてゐなかつたので、周章てゝ挨拶をかへした。

馬橇はすぐ町の外へ出てしまつた。右手は廣漠とした裾野でマツカリヌプリがペンキ繪の富士山のやうに聳えてゐる。左手には茅ぶきの百姓家が所々にあるだけで、一面の雪の平原が大海原のやうに、ゆるくうねつて廣がつてゐた。私達はマツカリヌプリの裾を一直線に奥に入つて行つた。だん〳〵雪の量が多くなつてきた。兩側が積み重ねた雪で高くなり、塹壕の底を走つてゐるやうな感じだつた。ある處では空しか見えなかつた。それも高い兩側で限られた巾廣の帶のやうな空しか見えなかつた。途中、近所の村から買物か、用達に倶知安の町に出てくる、風呂敷を三角に疊んだのをかぶつた百姓の女や、荷物を背

負つた日焼けした眞黒い顔の男が、めづらしさうに私達を見送つてゐた。私達は一々さういふ人に「島正」の演説會を宣傳した。

そこが過ぎると、急に吹きツさらしの高い所に出た。「駱駝の背」そのまゝの道を走つた。風當りの關係でさうなつてゐるらしかつた。馭者が煙草をのんでゐた。その煙が後向きになつてゐる百姓の頭に一度からみついて千切れると、色々な角度でなびき乍ら、自分達の間をすべつて、脂くさい匂ひを殘して後へ消えて行つた。

「おや〳〵、山がおかしくなつてきたど。」

馭者が煙管をかざして、マツカリヌプリを指さした。何時の間にか、山とそのあたりの空がフン霧霧で一面霧をふいたやうになつてゐる。それが、そして見る間に濃くなつて行くのが分つた。風が出てきた。今迄はいくら橇を早くしてもさうでなかつたが、風が私達の頬を横なぐりになぐつて、耳朶をならして飛んで行つた。

「外の方がなんでもねえのに、この山麓だけ時々雨や嵐があつてね。雨雲や氣がこの山さぶツつかつて、さうなるんだへしね。――んで、よく荒れますよ。荒れ出したら、又大荒れでね。」

「どうだらふ、今日は。」

「それがねえ、どうも荒れさうだね。」さう云ひながら、片手で鞭を空に二、三度大きく輪に振つて馬の尻をピシリと打つた。急に私達の身體が一緒に後へよろけた。馬は、厚い巾の廣い尻をはね上げ、はね上げ鈴をしきりなしにりん〳〵と響かして走つた。私達はだん〳〵膚へ直接にくる寒さを感じ出した。まるで蚊帳でも着てゐるやうに寒い風がすいて吹きこんでくる。私達は縮まるにいゝだけ縮こまつた。足は棒木のやうに感覺がなくなつてゐた。

「おい、むしろを着やう。」

「うん。」

頭からむしろをかぶつた恰好は乞食だつた。ワラの匂ひが鼻に來た。私達は話が途切れると思ひ出したやうに、歌をうたつた。私や吉川も歌つた。歌は然し廣い野ツ原では何んの反響も起さないで、そのまゝ風のために口から出もしないうちにもぎ取られるやうに、後へ吹き飛ばされて行つた。鈴木はバン聲を

張りあげて「××の歌」をうたつた。

「こゝなら誰も検束もしまい。」

私達は笑つた。

鈴本はそれから、夕張炭坑の方へ演説に行つて憶えてきたといふ「夜でも、晝でも牢屋は暗い」の歌をうたつた。炭坑の地下何千尺といふ眞暗な地獄から、坑夫の歌ふこの唄が響いてくるのは、そこより他の處では決して起ることのない、身體がゾウッとする凄さがあると鈴本が云つた。

いつでも鬼めが窓からのぞく。
のぞことまゝよ
自由はとらはれ、鎖が切れず。

鈴本は何度も最後の「鎖がきれず」を繰りかへして歌つた。

關羽そつくりの「ひげ」の鈴本が一向きな顔をして、肩をそびやかし、聲を張りあげて歌をうたうのが、然し何んとも云へなくユーイーヴで、ユーモラスだつた。私は今迄にもまして鈴本に親しみを感じた。私達は思ひ思ひ、遠慮のない大聲でうたつた。風が強く、すぐ聲はさらはれる。然し私達はそれに負けずに、だん／＼聲を大きくし、終ひには身體をゆすり／＼無理に聲をしぼつて出した。突然聲がキーンとなつて、咽喉が裂けたやうになり、ゲエ、ゲエとはばけた。

『誰か、この、今の俺達の、××への進軍をうたふプロレタリア詩人がゐないかな。』吉川が云つた。

「残念だ、残念だ！」──それが、その時の間違ひない私達の實感だつた。

空が暗くなつて、粉のやうな雪が地面と平行線に、矢のやうに鋭く吹き飛んできた。何時の間にか魔法でも使はれたやうに、マツカリヌプリのあの大きな胴體が、フツと吹いて、カキ消されたやうに見えなくなつてゐた。私達は風上に脊を向けると、吹き飛ばされないやうに、むしろをしつかり押へた。然し、むしろの端がバタ／＼とはためいて、遠慮なく雪が喰ひこんで來た。

「山が鳴つてるよ。」馭者が風に逆らつて叫んでゐる。

馬の鈴も風の工合で、ちつとも聞えなかつたり、と思ふと、耳もとではつきり、りん／＼と聞えたりした。──たゞ落ちて

だ。その眞白が沸えくつてゐるやうに、狂ひ廻つてゐるだけ！そして不思議な底氣味の惡い「響き」が――「うなり」が、大荒れ時の物凄い海なりのやうに聞えてゐた。それがこの地面を揺つてゞもゐるやうだつた。私達の橇にさへ風が鋭くうち當つて、ヒユウ〳〵と悲鳴をあげて、折れてゆく。馬も、橇も、私達もたつた一色に――眞白になつてしまつた。私達の眉も睫毛も一本々々、それに鈴木の關羽鬚は勿論、皆眞白い針のやうになつてしまひ、頰や額は雪のために赤くほてゝ、まるつきり別な人相になつた。

突然橇が傾いた、そして止つてしまつた。私達は雪藪の中に乳のあたりまでうづまつた。

「野郎、迷ひやがつて、とんでもねえ處さブチ入りやがつた。」

馭者は身體を後に倒すやうに手綱をしごきながら、何か口汚くのゝしつて、力一杯馬をなぐりつけた。

「このまゝ、行ける見込みがある？」私がきいた。

「これでも荒れはいゝ方だ。どうにも行けるべよ。」

その附近を何度も行つたり、戻つたりした。五、六分もかゝり、やうやく本道路らしいのを見付けた。かうなれば道などは、波際の砂文字のやうに消えてしまふ。馬が、たゞ下の固いところを、動物の本能で迷はないで進んで行つてくれることに全部の望みをかけるより仕方がなくなるのだつた。

鈴が又吹雪の中で調子よく鳴り出した。風の向きは一分置き位に變る。前から吹いてゐると思つてゐると、それが馬橇の左側に移つてきて居り、と、すぐ逆な側になり、私達はその度にそれに從つて坐り直さなければならなかつた。

空間の全部が麥粉のやうな雪の吹雪だつた。そしてそれ自身一つの大きな眞白い旗でゞもあるやうに、風の工合で出來る吹雪の濃淡が丁度旗がなびくやうに見えた。時々、さういふ只中に、數十丈もある大理石の大圓柱がつッ立つことがあつた。そして、それがグル〳〵廻はりながら、私の上を横切つて消えて行つた。その時私達は身體を伏せ、むしろや帽子をすつかり押へた。「ゴールド・ラッシユ」のテントのやうに、私達の身體さへ浮くやうな氣がした。むしろや外套はまるで飛び上る時の鳥の翼のやうに、せわしくバタ〳〵とはね上つた。

初め、私達はそれでも元氣だつた。天地を搖かすこの大吹雪を冒して、マッカリヌプリの平原を馬橇で突ッ切る！――

さう考へて興奮した。原始的な（所謂、、、、）火のやうな文句を絶叫したりした、勝手氣儘に。然し誰からといふ事なく、だんだん言葉少なになつてきてゐた。

「全く、伊達や道樂で、この運動なんか出來ないや。」鈴木がポツンと云つたきりだつた。――誰も、もう何も云はなかつた。

顏の表面が打撲傷でも受けたやうに、しびれてしまつて、本當の顏は奥へ引ツこんで――顏に粘土でも塗られた感覺だつた。手もさうだつた。足はずつと前からさうなつてしまつてゐた。私達は互に身體をつかんで、號令をかけながら、ゆすり合つた。然し、それもすぐヘナヘナになつた。もう堪えられなくなつて、歩いたら、と思つた。然し馬でさへ、時々腹までうづまつて、足掻く位だつた。橇の跡には雪が排雪車の跡のやうにうづ高くもり上つて居り、馭者の身體は肩近く、それにうづまつてゐた。橇の通つた後は埋れて、その跡が何んにもない大海原のやうな雪の原に、たつた一つの溝を長く、長くひいた。それを見てゐると、不思議な淋しさが胸をうつてくる。

空か、地か――いや、どつちも、ゴウ、ゴウ、ウ、ウと鳴りうめいてゐる。

馬橇の前を斜めに横切つて、何か飛んだ。雪煙が上つた。と、飛魚が跳ね上るやうに、二つの白いものが、又パツと飛んだ。兎だ。

「兎だ！」三人が一緒に云はさつた。それがさつきから、、、を云つた初めだつた。が、それより何も云へず、たゞ眼だけで、兎のあとを見送つた。兎は迷つたのか、稲妻形に雪を飛んで行つた。そして丘のやうに吹き溜つた雪かげに、見えなくなつた。

それから二分もしなかつた。――私達は、橇の左側の足が浮いたな、と思つた瞬間、前のめりにのめつて、雪の中へ頭を下にして竹の子のやうに突きさゝつてしまつた。私達の上へ、腹を見せて引ツくりかへつた馬橇は鐵槌の作用をした。私達は馭者から一人々々引きづり出された。馬は口から石鹸水のやうな
、、、
あぶくを出しながら、棍棒で後足を横に締めつけられて、足をガクガク跳ねらしてゐた。

「オヤ、オヤ！」

馭者が叫ぶと、棒杭のやうに立ち止つてしまつた。

私は「どうした？」ときいた。が、顏が鋭く風にさらはれて、

馭者の耳に入らないらしい。馭者がこつちを向いて、何か怒鳴つてゐるらしい。口が色々に動くのは分るが、聲が聞こえなかつた。私は雪をこいで走つた。一足前へ出すと、腰までうづまつた。そして足を拔かふとすれば、靴がぬげさうだつた。それに足を拔くのに、手をつくわけには行かなかつた。勢ひ、高飛びでもするやうに、跳ね上るよりなかつた。然し身體だけ前へ出て、足が拔けないと、そのまゝ思ひツ切り前へのめつて、雪を「食つた。」

馭者は川を見て立つてゐた。

「こゝに川があるべし。俺等の橇この川ば左さ見て行かなばならないのに、こんなだと右ば見て歩いてたんだから――今迄戻つてゐたことになるんだし。」

私は耳に掌をあてゝ聞いてゐたが、へえ！と立ち止つてしまつた。氣も心も、グッたり、一時にきた。戻つてゐたつて？何んといふことだ！

私は時計をかぢかんだ手で出してみた。時計は體溫で温かになつてゐた。――二時五分。四時迄には時間はあつたが、然し今何處まで來てゐるのだらふ。

私達は橇を引きかへした。然し今度は皆は、氣持の上からも、慘めになつてゐた。追風になると、馬のたて髮と尻尾の毛が跳ね返がつた。私達は前よりもつと縮こまり、前よりもつと不氣嫌にムッツリした。この大あらしのやうに、私達の心も暗澹としてゐた。

見えた　私はアメリカを發見したコロンブスよりも大聲で叫んだ。家だ！　墨繪のやうに、うすぼけてはゐたが、確かにそれを私は前方に見た。

「どれ、どれ！」

「見えないんでないか。――眼の嘘だ。」吉川がゝつかりして、のび上げた身體を下した。

空中は風の工合で、吹雪の波の濃い所へくると、向ふのものはみんな搔き消すやうに消えてしまふ。私達は、舟を待つてゐる俊寬のやうに心を躍らせて待つた。――が、見えない。「眼の嘘」だらふか。私もグッシャリした。何の音か知らない布を裂くやうな音がする。雷のやうな音がそれに交る。私は何時か映畫で「默示錄の四騎士」を見た。その時、人と人が殺し合ふ陰殘な戰場の空中を、「蒼ざめたる馬」に跨つて橫切る「死」を

見、それと同じ不吉さを、今この「天地が鳴動」してゐる吹雪に感じた。何かさういふものゝ翼のはためきと影が空一杯にある氣がした。

「見えた！」今度叫んだのは吉川だつた。

望遠鏡のピントが合はさつて行くやうに、だん／＼それらしく現はれてきた。そして更にその少し遠くを走つてゐる電信柱が、最初はかすかに、だん／＼はつきり一本、一本、々々……と見えてゆく。

「分つたんし、分つたんし。[ム]の荒物屋だ。もう迷ひッこなしだし。半分は來てゐたんだし。」馭者にも見當がついたのだ。

私達は「ブッキラ棒」に元氣になつた。そこで酒を一杯飲んで身體を暖める。あとは山峽になつてゐて、一本道だつた。それに電信柱に沿つてさへ行けば眼をつぶつても迷ひッこない。

(馭者がさう云つた。)

「いくら大荒だつて、眞ッ晝間道は間違えるなんて馬鹿ねえけどなし、こゝだけはこの大けえ山の眞下で、ガアー――ッと、から颪されゝばかなはないんだし。」

馭者は元氣のいゝ聲で馬にあてた。馬の後足で跳ね上げる雪が、私達の頭に落ちてきた。馬が一度ゆるくなつて、それから又速くなつた。と、橇の下から後へ、湯氣の立つてゐる馬糞が二つ、三つ順次に出てきた。それが見てゐる間に、雪の原の遠くへ押し殘された。そして見えなくなつた。

五

電話があつたので、關係の人が國道の入口まで迎ひに來てくれてゐた。その頃は「ケロリ」と吹雪がやんでゐた。

「大きな山があるんで、天氣が氣まぐれでねえ。」

見て、すぐ百姓と分る朴訥な、ズングリした人が、子供の着るやうなタコのついたマントを着てゐた。黄色く赤黒い顏だつた。

「ひどかつたでせう。」何度も私達に云つた。

すぐ後に山の裾がせまつてゐる。停車場が雪の中から玩具のツミキ細工のやうにポツンと見える。その前に十二、三軒の家がデコ、ボコに集つてゐるだけで、そこから羊の腸のやうな道がくねつて雪丘を越してゐる。

「村はあの後になつてるんです。」

吹雪の去つてしまつたすぐ後の、陰鬱な低い雪空のもとで、その一帶が妙にひつそりして見えた。山鴉の啼聲が何處かでしてゐる。

私達は停車場前の小さい待合に入つて、腹ごしらへをした。

「島正さんは六時の汽車でとすね。」

「さうです。僕等が丁度終る頃に着くわけです。――上りは七時半ですねえ。」

待合のおかみさんが「さうです、七時半に出るのがあります。」と口を入れた。

「倶知安へ行くと八時十分。――あつちの方の演說會にもきつちり島正さんは間に合ふわけですね。」

「その豫定です。」

「こつちは島正さんだけ？」

「さうです。」

「この邊の農夫の狀態はどうです。」私はその方へ話を引いた。

「お話になりませんよ。」中學を出たといふマントの人が云つた。「何處も同でせうけれども、慘めたもんです。それに、こつちでは小作人より一ッぱし少しでも土地を持つてるものが困つてゐるんです。皆××銀行の抵當に入つてゐて、その借金で首が廻はらないんです。――出來上るものは安くて、諸入りが高いと來てるんだから、たまりませんよ。」

「××銀行?!」吉川と私は一度に口に出た。吉川が、そして

「ひやアーッ。」と頭をせわしく掻いた。

「この人、吉川ッて云ふんです。――この人がその××銀行へ出てゐるんですよ。」

さう私が云ふと、マントの人が、

「へえ―　ちや內情がよく分つてるわけですから、一つ暴露をやつて下さい。百姓は必ずワッと來ますよ。」

「それはやります。處がねえ、今度立候補するブルジョワ候補の△△は、この銀行の株主なんだよ。これアいゝ事をつかんだぞ。」

吉川は肥つた身體で椅子をギイ〳〵いはせた。彼は一杯飲まないと演說度胸が出ないといふので、おかみさんに「熱カン」をつけさせた。

「この邊の自作農はそんなに困つてるのに、自分ではそれでも土地を持つてゐるといふので、一つぱし地主のやうな氣でゐる

し、小作人は小作人で組織もされずに散らばつてゐるから、カラ駄目です。だから、この選擧を機會に組織の方に入つて行かなければならないと思つてるんです。」

、、」

そばを食つてゐた鈴本は何時ものやうに、皆の話すのを時々うなづきながら、きいてゐた。

其處を出て、丘の頂きまで來ると、凹凸のある斜面に出來た、ゆがんだ菱形のやうな村が、眼の下に展がつてゐた。

前を行く人が所々近所の家へ寄りながら、「演說さ行かないか。」と聲をかけてゐた。會場のお寺の近くになると、二人、三人と並んで出掛けてゆくのと私達は一緒になつた。その人達は古ぼけた裾のよれ〳〵になつた二重廻はしや、タコのダルマや、色のさめた兵隊の外套や、ラシヤの筒砲の外套をきてゐた。

彼等は如何にもノロ〳〵だつた。O市の演說會のそんな時とはつきり異つてゐたので、私ばかりでなしに、皆にすぐ氣付いた。中には取つて置きの、新らしいといふことがすぐ分る着物をきてゐる農夫や首に絹のハンカチを卷いたのが、隨分あつた。私は、まだその習慣が抜けてゐないのだ、と思つた。

會場へ行くと、まだ始まらないのに、もう八分の入りだつた。お寺の住職が「こんなに入つた演說會は殆んどありませんよ。——貴方方の方のは、何か毛色でも變つたもんなんですか。」と云つた。

私は廣間一杯に集つた群集を見た。私は興奮してきた。——私は叫ぶ。と、あの無數の群集がそれと一緒につり上つてくるのだ。それは本當だらふか。私はかう云ふ。と、彼等はさうしやうと手をさしのべてくる。彼は「求めてゐる。」私はそれが「何」であるか、そしてそれは「どうすれば」獲得出來るかを云ふ。そこで、彼等は「さうだ」「さうだつた」と云つて立ち上るのだ！ だが、それば本當に出來るだらふか！ ——私は初舞臺をふむ獨奏家のやうな胸さわぎを感じた。咽喉が乾いてたまらない。土地の「老人」が壇に上つて叫んでゐる。然し私は何も聞いてゐなかつた。次が自分の順番だといふことが、私の心を「のれん」のやうにバタ〳〵とはためかせる。私はぢいとしてゐることが出來ず、後の廊下に出ると、歩き出した。

外は寒かつた。それでも途切れることなしに、寒さうに肩を圓めた百姓がやつてきた。ガタピシしてゐる板の隙間から風が

吹き上つてきた。
支部の若い人が廊下の端の曲り角で私を見ると、小走りに寄つてきた。
「老人をもうやめさせなければならないですね。」時計を出してみせた。ところが老人は默つてやらせて置くと、明日の朝までもあの調子でやつてるんですよ。何時もです。」
「……紙片に書いて……。」
「いや、處が眼が見えないんです。眼鏡でも駄目で、字を見るときは一字々々蟲眼鏡を使ふんです。それにつんぼと來てるんですよ。本當のかなつんぼです。」
「いくつです。」
「七十に近いでせう。」
「…………！」
「熱心で、それア元氣なもんですよ。」
私は無條件に、この「我々の運動」から七十才の「老人」は除外して考へてゐた。云はなくても、これは若いものゝ運動に決つてゐる、七十才と「この」運動——凡そ、それはちぐはぐなものだ、實際としても亦さうではないか、私はさう思つてゐたのだ。私は意外に思つた。——年寄の聲は聲だが、張りのあるさびた聲が聞えてくる。
「後から袖か羽織の裾を引ッ張ると一番いゝだらふ。さうしますから、貴方は用意して下さい。」
若い人が走つて行つた。私は「愈々」胸がドキ打つてきた。
私は演壇に上つた。初めてのものがよくやるやうに、突拍子もない大聲で叫び出した。自分でさへどういふ筋道を辿つてゐるのか、どういふ抑揚でしやべつてゐるのか分らない。私は今こそこの事を云つてやらなければならないぞ、と思つて、夢中でしやべつた。
私はかつて、何十年もの間あらゆる苦しみを生活してきた勞働者が、初めて（！）演壇に上つたとき、
「諸君、俺は……。」
と云つたきり、悶絶してしまつた、さういふ悲痛な事實を描いた作品を讀んだことがあつた。その時、私達こそかういふもの達の云はふとして云ひ得ず悶絶したその事實を、彼等に代り叫び知らせてやらなければならないのだ。——私はさう興奮して考へた。

私は百姓や勞働者が、自分達が投票出來るやうになつても、その「大部分」がまだ選擧といふものを「角力の勝負」と同じ賭事のやうに思ひ、そして又何んと云つても選擧には「やつぱり偉い人」を選ばなければならない――さういふやうに、政治といふものを自分の生活からまるツ切り離して考へてゐることを、實際に知つてゐた。(彼等は偉い人といふことは、金のある人といふのと同じに使つてゐたし、又同じものだつた。)そして、この考はとても「豫想以上」深く百姓の肚の中に食ひ入つてゐる。だから、彼等は燕尾服をきた金持には、小便にでも行くやうな手輕さで「買收」されてしまふ。彼等には金のかゝらない遊び事でしかないのだから。私は何よりその事を云はなければならなかつた。

選擧はお前達の「台所」の問題だ。私は「臺所と政治」この關係がブルジョワ達によつて、如何に誤魔化されやうが、(さう思はせて――誤魔化して、まんまと一票をせしめやうと彼等はしてゐる。)まぎれもなく、たつた一本の糸でつながつてゐることを分り易く知らせてやらなければならない、と思つた。

一本の醤油――醤油店――問屋――醤油株式會社――株主――重役――三井、三菱等――ブル政黨(政友會、民政黨)等――そして此等が逆に搾取關係にとんぼがへりする。一本の醤油に過ぎないとでも云ふのか。然しそれにはあらゆる搾取關係、政治關係が含まれてゐる。

「……諸君等が誰を選ばなければならないかは、然し諸君等よりもモツトはつきり、そして適確にその事を知つてゐるものこそ誰、あらふ、あの薄暗い惨めな台所で、雑巾切れのやうに働きつかれ、永年の貧苦に打ちのめされてゐる諸君等の細君であり、諸君等の年老いた母親なのである!」私はどなつた。

手がなつた!

「これア嬶ば連れてくるんだつたな!」誰かそんな事を云つた。後の方でドツと笑つた。

私は又、永い間虐げられ、しかも「どうして」又「誰に」さうされてゐるかさへ分らずにゐる百姓に、「金を持つてゐる」偉い人がどんなものであるか、その正體を云はなければならない。彼等偉い金持は、例へば××銀行の株をもつてゐる。その銀行が百姓の土地を抵當にとつて金を百姓に貸付ける。勿論銀行と百姓の間には色々な寄生虫が入りこんで、二重にも三重に

も頭をハネてゐる。「百姓がその殘酷な血稅を拂はなければならない爲めに如何に慘めな生活をしてゐるか。娘を賣り飛ばし、子供を工場へやり、自分の作つた米も食へず、芋と南瓜ばかりを食つてゐる。その生血のやうな金が銀行の手に入る、そしてそこから株主——その偉い金持の懷にたんまり入つて行く。彼等は城のやうな塀をめぐらした「邸宅」に住んで、自動車を乘りとばし、藝者のあとを追ひかけてゐる。では、「誰が」そんな事に使ふ金を彼等に捧げてやるために、娘を賣り、息子を工場にやり、芋と南瓜で眞ツ黄色になつてゐるのか！

もう誤魔化されてはならない。

口の血をぬぐつた牝猫のやうに、上はべは正義、人道を稱へゐやうが、絕對に、もうだまされてはならないのだ！

「どうぞ、淸き一票を」と云はふが——フロツクコートを着て「白い手をした彼奴等は、この野郎と、鍬や鎌で（二十九字削除）……」私は、だがひやりとして、思はず臨監の巡査の方を見た。が、田舍の巡査は火鉢の端に、指先の分れた靴下に草履をひツかけた兩足をのせ、背を圓るくしてお茶を飲んでゐた………。

吉川が終り、鈴本がその勞働者らしい朴訥さと一本調子でやり出してから十五分程した頃、五時四十分の汽車で「島正」が來た。

私が控室に入つてゆくと、土地の人から何か話をきいてゐたが、振りかへつて、

「や、ご苦勞。」と云つた。その拍子にのどで痰がゴロ〳〵いつた。

「どうでした。」

「いや、何處もかしこも大變さ。滿員木戶止めばかりだつたよ。」

「聲がすつかりつぶれてしまひましたね。」

「參つた。聲ばかりぢやないんだ、僕の横ツ腹は戶板のやうに堅くなつてゐて、少し力を入れてしやべると、ジーンと響くんだ。」島正は話しながら、藥瓶を出して何度もうがひをした。「それにねえ、今停車場から此處までどうしても步けないんだ。息はきれる、足がフラツクで……。愈々もつて、これア討死らしいよ。」

人をひきつける黒瞳の大きな眼が、兩方のかん骨の出張つてゐる奥で、時々鋭く光つた。吉川に從へば、その「島正の眼は千兩」だつた。何時もなら、どんな事を話しても、すぐそれに熱をもつて話し込んできて、相手をつかんでしまふのだが、(私はこの事では島正を不思議な人だとさへ思つてゐる。)その魅力が無く、何か云ふと肩で息をした。すつかり痩せこけてゐた。

「これはねえ、君。改革に送る僕の北海道血戰記だよ。」

「……雪の野。北海道の天地と、馬橇は、トロイカは走る。——勇を鼓して、雪の北海道に進んだが、一月二十日までねて居た病後の身體だ——俺はからだが、可なり無理だ。歩行困難だ。馬橇が實に身にこたえる。

だが、勞働者として生れ、勞働者として育つた我れは、病氣や畳の上で死にたくない。——勞働者、農民、無産階級の要望の下に吹雪と氷の中で戰つて死ぬこそ、我れ等の本望である。——俺は、からだの續く限り戰ふ。

雪の戰　は——だが、實に愉快だ。

……吹雪だ。大雪だ。汽車は止る。だが無産階級の要求は止らない。馬橇で、トロイカで、敵の本陣に進むのだ。

私は所々拾つて讀んだ。

島正が壇に上つた頃には、遲く來た人が澤山後に立つてゐた。——聲がすつかり潰れてゐる。それを、身體をくねらしながら、無理に出さうとする。今にも眞赤な肉片がのどのあたりから千切れ飛んでくる、さう思はれる「悲痛」な叫び聲だつた。

私は小樽で幾度も「島正」の演説をきいた。市内では、市の中央と兩端の三箇所でやる。——處が、きまつて、不思議に中央は出來が惡かつた。「どうしてだらふ。」私達は初めさう云つた。中央はインテリゲンチヤ、銀行員、會社員、一般市民が大部分だつた。兩端は工場町であり、勞働者街だつた。そこでは、然し會場は文字通りうなつた。農民を相手の今の島正は、手はれず、斷然冴えてゐた。——

「勞働者として生れ、勞働者として育ち……」そこに凡ての原因がある、然しから明ら樣にそのことが出るのが「私」には恐ろしくさへ感ぜられた。

本部から來た東といふ闘士が、何かの時におどけた調子で「俺は隠謀家で、島正は煽動家で、××は組織者さ。から三つ揃つたら天下無敵さ。」と云つた。私は、壇上で拳を振りあげ、何かに咬みつく闘犬のやうに叫んでゐる彼を見、數年前の×××のとき「×××、×××！」と叫んで群集の先頭に立ち、×××××××××××歩いた若い時の彼の、謀叛そのものである左上りの突つ張つた肩をハツキリ想像することが出來た。

私や鈴本の側に老人が坐つて、きいてゐた。横から見ると馬鹿に小さく、紙細工のやうにあやふやに思はれた。瞳は煮た魚の眼のやうに眞白になつてゐた。何んか、かう、風の音でもきいてゐるといふ風の恰好だつた。頬の何處かに、人の好い笑みがかすかに浮かんでゐた。

六

夜空が高く、青く澄んでゐた。マツカリヌプリ裾野の空氣は硝子張りのやうに凍えてゐた。空一杯の星が氷粒のやうな鋭い光を放つてゐた。晴れ渡つた野天の夜空が如何にも大きく、廣かつた。その感じは小樽などでは決して無かつた。——底から冷たかつた。

演説會が終つて、雪の狹い一本道を皆が一列に蹤つて行つた。道に掘らさつてゐる馬の蹄や馬橇の窪みに足を落さないやうに、私達も汽車に乘るために、その列に入つてゐた。雪の凍氣れた夜道は皆の足駄や下駄の歯の下でギユン〳〵と鳴つた。

「こんな元氣のえゝ演說會初めてだ。」私の後で誰か云つてゐる。

私はすぐ前をゆく島正をつツついた。

「うん、うん。」それが彼にも聞えてるらしく、うなづいた。

一本道を折れると、やゝ廣い、荒物屋や小間物屋などのある少し明るい通りへ出た。私と島正は肩をならべて步き出した。

「農民を相手に演說をすると、どうもアチがかゝりづらくて困るんだ。——今度の經驗で分つたんだが。何處までグツとつり上つてきてゐるのか、無口な、どつしりした農民では實際見當がつかないんだ。工場勞働者や坑夫などゝ異ふ重大な點だね。」

さう云ひながら、一句切れ、一句切れに切れて、重病人のやうに息をはいた。

屋並みが切れて、停車場へ出る丘の、足もとの暗い道になつた。途中人家もなかつた。たゞ道に沿つて、處々、電信柱に裸の五燭燈がついてゐて、その下少しの周圍だけが物淋しく明るかつた。それだけだつた。そのだら〱坂を私達四、五人が上つて行つた。鈴木は島正に夕張や小樽の情勢を細かに報告してゐた。

提灯をつけた人と途中行き會つた。

「お晩です。」その人が挨拶をして行つた。

風もないのに、裾の方からヂリ〱寒さがくる。唇をゆがめると、そのまゝ型になつてしまふほど空氣が冷え切つてゐた。島正はどうしても遅れ勝だつた。丘の上までくると、ゆるやかな斜面の端に、停車場やその構内の電燈、停車場前の家の灯などが、廣々とした雪の原、青黒く衝ッ立つて見えるマツカリヌプリ、それから裾をひいてゐる連山――その大きな自然の中に、いかにも慘めに、おぢけたものに見えた。支線の終點驛らしい物淋しさがあつた。

「この邊は熊が出ないかね。」鈴本が土地の人にきいてゐる。

「君の方が熊に間違ひられるよ。」島正が云つて笑つた。

「いや、あるんですよ。昨年の暮れに畑に出てゐた百姓を、丁度俺等が袋でも脊負ふやうな恰好にかづいて、山へ逃げて行つたことがあるんです。」

「山つて?」吉川がきいた。

「羊蹄山です。」

「やつぱり居るんですか。」

私は思ひついて、「あ、吉川君、昨年羊蹄山に登山したんだものな。」

それで皆笑つた。然し、ちつとも響きかへらず、笑ひ聲さへギユッとそのまゝ凍えてしまつた。

停車場の待合室にはそれでも割合に人が多かつた。汽車で演說會を聞きに來た人らしかつた。聲高に選擧のことや、候補者の品定めをやつてゐた。私達が入つてゆくと皆顔を向けた。――袖口と裾の切れた、ゴワ〱な、それに色のさめたオーバーを着て、烏とんびのやうに黒いマスクを口にあてた候補者を見て、ヒソ〱話し出した。自分達とちつとも異らない、こんな「ご立派な」衆議員候補者なんてある筈があるもんか!そんな顔付だつた。

支部の人が島正に老人のことを色々に話した。

「ご苦勞だつたね、おぢいさん。」島正が老人に挨拶した。

老人はあやふやな顔をしてゐる。支部の人が大きな聲で、「島正さんが、ご苦勞さんだと云つてるんだ。」と、耳のそばで云つてやつた。――分つたらしく、周章てゝ、

「あ、あ、あ、いや……!」と云つて、人の好い笑ひを顔一杯に表はして、頭を何度も下げた。

客車は北海道の支線によくあるマッチ箱のやうな小さい、入口が兩側に幾つも取付けてある型で、眞中に圓るい西瓜のやうなストーヴ一つきりだつた。それに電燈が煤けたやうに薄暗く時々消えさうになつたりした。向ひあつてゐる人とでも、耳の後に掌をかざさないと聞えない程、汽車がガタ〱音がし、思はず身體をすくめる程揺れることがあつた。

私と一緒に腰をかけた支部の人が、しばらくしてから、ボツボツ老人のことを私に話してきかせた。

――老人には醉ふと、何處でゞも直ぐ持ち出す「癖」が一つあつた。

「俺は幸徳秋水を知つてるんだ。――幸徳はねえ、何時でも卷煙草をこんな風にくわえて、なア水澤、お前寒くないかッて云つたもんだよ。俺が何時でも貧相で、カサ〱してゐたもんだからさ。」と云つた(さう云へば、私は倶知安に幸徳時代からの社會運動家がゐるといふ話を誰からか聞き知つてゐた。)水澤といふのが老人の名だつた。それが幸徳とどういふ關係にあつたか、然し誰も知らなかつた。醉ふと、きまつてそれだけを何度も、何度も繰りかへすだけで、誰がきいても、それ以上云はなかつた。

彼は十八の時から、かういふ運動をやつてきてゐた。そして七十にならふとする今でも「その事だけ」は變らなかつた。倶知安で初めて農民組合を作つた時、その發起人を老人は率先してやつた。この地方はもとの××農場とか××子爵や有名な××侯爵の農場とか、東京方面の有力なブルジョワの土地が澤山あつたゝめ、農民組合の結成といふことが大きな脅威をさういふブルジョワや地主に與へた。處が、それを極めて微温的な救濟組合的なものにしようとする他の「若い發起人」の間に、斷然O市の左翼勞働組合と連絡をとつて、「戰鬪的」な組合に作りあげやうとしたのが、この七十才に近い「老人」だつた。

老人には息子と娘がゐた。然し老人の家では「父と子」の爭ひではなしに、何時でも、曾つて誰も小説に描いたことのない、その逆の爭ひを惹き起した。模範青年（！）である實直な老人の息子は「ロシアかぶれした過激思想をもつてゐる親父」と、どうしても合はず、家を出て別に暮を持つた。こんな不肖の父を持つては世間に申譯がないと云つて、老人と一切の關係を絶つてしまつた。函館の日魯漁業會社に女工として出てゐた事のある娘だけは父の側にゐた。これには、後でそれとうなづける理由がある事が分つた。

「處が悲劇があるんですよ。」と支部の人が云つた。

――老人は駄菓子屋を開いてゐた。が、小さい町で、とにかくそんな噂さでも立つと、お客さんなどは殆んど來なくなると云つてよかつた。老人の側にゐた娘が汽車で十五分程かゝる隣り村の小さい工場に働きに出るやうになつた。

娘が函館の日魯をやめてきた理由は、漠然と、たゞ待遇が苛酷なために我慢が出來なくなつたのだ、と云つてゐた。然し、後で分つた事だつたけれども、彼女が工場に務めてゐるうちに、そこの工場長のために[illegible]の創痍で、無理矢理に貞操を冒されたのだつた。彼女は函館の若函連絡桟橋へ、眞夜中に三度も行つた。然し、どうしてか死ねなかつた。が、そのまゝでゐることも出來なくて、日魯をやつてしまつた。そして日魯とは姉妹會社になつてゐる×××會社に入つた。處が、しばらくしてゐるうちに、其處に大きなストライキが起つた。彼女は今こそ、といふ氣で、そのストライキの女工の先頭に立つて、働いた。彼女と境遇が同じであるやうな女工が澤山ゐて、それ等が皆一緒になつた。が、ストライキは散々に負けて、彼女は女の方では一番先きに首を切られてしまつた。そして戻つてきたのだつた。それが然し彼女に大きな變化を與へた事は確かだつた。

色は淺黒いけれども、その顏色が如何にも健康さうで、無口な、物腰の靜かな女だつた。そんな事があつたとは思へない女だつた。然し、その女がS――村の工場で、色々な男に身體を賣つて金をとつてゐたとは、もつと考へられない事だつた

老人はその娘の金で食つて行けたし、組合の運動も專心にやつてゆけてゐた。然しこの「大きな事」が小さい村で評判にならずにはゐなかつた。これが、そして隣り村からだん／＼廣

知安まで傳はつてきた。皆は彼女を「爪はぢき」し始めた。彼女は然しそんな事にはちつとも關はりなく、前通りに物靜かで、無口だつた。それは例へば、とてつもない白痴か、底の知れない程しつかりした自分を持つてゐるものゝ態度かも知れなかつた。が、娘のさういふことが老人の耳に入つてゐるか、どうか、それは分らなかつた。老人は然しこの頃では、もうモウロタをしかけてきてゐた。

「娘さんは時々組合の仕事を手傳ひにくるんです。眞面目な、おとなしい、冗談一つ云へない人ですからねえ。」

その人がさう云つて、つけ加へた。「さつきの老人が倶知安迄の切符を買つてたでせう。あれだつて、あのうかつには使へない金だと思ひながら見てゐましたよ。」

私は老人がストーヴの前の椅子に小さくなつて腰掛けてゐるのを見た。前と同じやうに、風の音でもきいてゐるやうに頭を少し持ちあげて、やつぱり顔の何處かに人の好い笑みを浮かべてゐた。形のなくなつた油だらけの帽子をかぶつて、枯木のやうな首筋が古くさいハンケチを卷いた所から見えた。小學校の生徒が着るやうなタコのついてゐるだるまを着てゐた。

窓を開けさへすれば、マッカリヌプリが置物のやうに眼をさえぎつて聳えてゐるこの置き忘られた――雪にうづもれてゐる蝦夷の一寒村に、我々の運動が、こんなにも大きな眞劍さで行はれてゐるのかと思ふと、私はじッくりと眼に涙がにぢみ出てくる感激を覺えた。

「つんぼ」で「めくら」の老人が、だまつて置けばいくらでも演説をやめないで、やつてゐる――だが、私はそのユーモラスのうちに、人の魂を直接に打つものを感じた。

「私のやうな」小利口な人間は（私はかくさず云はふ、實際この老人の前で何んの嘘が云へやう。）この何時目鼻がつくか分らない「何代がかり」の運動を、恐らくさう効目も見えず、又恐らく誰もさう高く「認め」てもくれないこんな所で――しかも、こんなに大きな犧牲を拂つてやつて行ける本當の氣持をもつてゐるだらふか。

――お前はレーニンのやうに「あがめられたい」と思つてゐるのだ。

――お前はたゞ無産階級運動の「大立物」になりたいためばかりに一生ケン命なのだ。

――お前は一生の間からして一生ケン命になつて、自分がそのまゝ埋もれ、しかもこの運動が一寸目鼻もわからないとしたら、とつくの昔に裏切つてしまつてゐたのだ。

――お前は中央に出て行つて「認め」られたい爲にしてゐる。この運動が東京だけで出來るとでも思つてゐるやうに。さうでないとは云はせない。お前の心の何處かゞそればかり望んでゐたのだ。

私は白狀しよう。――私は、さうだつた！

客車の中は煙草の煙がこめて、それが電燈の周圍にからまつて、曇つてゐた。百姓達はそれ〲に、汽車の音に消されないやうに、大聲でしやべり合つてゐた。途中の驛でとまると、寒さで鼻の先きを赤くした、たくましい身體の百姓が霜まみれの身體で二、三人入つてきた。汽車は又ガタン〱と跛の音をさして動き出した。

私は島正と老人をぼんやり見てゐた。島正はそれでも全國的な人氣鬪士だつた。（語弊はあるが、云つてみればさうだつた。）「我等の島正」――普段そんな風に、それも全國的に云はれてさへゐた。私はその側に老人のゐることを不思議に深い氣持で眺めた。理由が分らず昂奮にたつてきた。

北國の一寒村に於ける「島正と老人」――私はそれが歴史的に何か重大な意味をもつた、しかもキット何時までも心に殘る一つのシーンであるやうな幻想に捉へられた。

倶知安に汽車がついた。

改札口には島正と一緒に地方に出てゐる演說隊の同志が迎へてゐた。私達は「ヤア」「ヤア」と云つた。

「君達が來たのか、ホオ――。」吃驚した顏をしてゐる。

「進出さ。」吉川がさう云つて笑つた。

「今渡君が盛んにやつてました。千五、六百人から入つて、滿員木戸止めです。五里も離れた處から馬橇二臺に乘つてきた三十人程の人がゐたんですけれども、どうしても入れられずに歸つて貰つたのは氣の毒でした。」

私と吉川は三十分程して出る小樽行きの汽車で、すぐ歸ることになつた。鈴木は島正と一緒に倶知安で演說するために殘り、私達は停車場前で別れた。巡査が二人も來て、ウロ〱してゐた。

老人は、と思つた。老人は足がおそく、私達から遲れて、

ずく出てきた。すると、その側の少し薄暗くなつてゐる便所へ行く角のところから、二十四、五の割合にきちんとした身なりの女が出てきた。こつちからは顔は分らなかつた。老人と何か云ふと、肩をならべて歩き出した。老人はあたりを見廻はしてゐた。島正達は演說會を控へての急がしさに、もう角を曲つて見えなくなつてゐた。

皆は、老人のゐた事を忘れてしまつたのだつた。

×

「東倶知安行」をしてから一週間程した二月二十一日、選擧開票當日に、選擧事務所の二階で、私は小樽に出てきた老人と會つた。郡部の開票が問題にならないのにぢいとしておれず、出掛けてきたのだと云つた。然し、小樽でも大勢は決つてゐた。

その晩「えゝッ、飲め、飲め！」私と吉川は老人を誘つて、事務所近所の場末のバアーで飲んで、ぺろ〱に醉拂つてしまつた。私達は終列車で歸る老人を停車場に送つて行つた。老人は歩きながら「幸德秋水」のことを何度も繰りかへした。

「煙草をかういふ風にのむんだ。」それを三度も四度も繰りかへして眞似をして見せた。「水澤、水澤、貴樣寒くないかッてな。」――老人は兩方から肩をとつてやらないと、歩けない程醉つてゐた。

老人を列車の座席を一つ見付けて坐らせてやつたとき、私はフト、小樽へ出てきた金が、腹に赤い縞のある毛虫を××××××氣持で、老人の娘が身體を賣つて得た金であることに氣付いた。――私は急いで自分の財布から殘つてゐた五圓紙幣をとり出すと、老人の、メリヤスについてゐるポケットに入れてやつた。私はそして、だまつて力一杯老人の枯枝のやうな手を握りしめた。見てゐるうちに、私の眼から淚があふれるやうに出てきた。

「せつかく待つてゐる娘さんに……」

「娘？」老人は酒臭い顏をその時あげた。

「いや、せつかく待つてゐる娘さんに、停車場のお土産でも買つて行つて下さい。」――私は耳に、口をあてゝ大きく云つた。老人は頭をガクツ、ガクツと動かして、首をひねられたあとの鷄のやうに、ガクリッと首を前に落してしまつた。

發車の汽笛が鳴り出してから、私達は急いでプラットフォームへ飛び降りた。

（一九二八、九、五、）



二千六百八十二哩

中河與一

一

街にはネブラスカ大學の遠征軍が來てゐた。

久里は大陸を横斷して、西部海岸に出る爲めに、バスを利用しようとしてゐた。

腕の内側を見つめてゐた。時計の面から、ふと動脈の方へ眼が移ると、彼は生きてゐる事を強く感じた。

カレッヂ・タウンである此の街の兩側には、ネブラスカ大學の白と赤、キャンサス大學の青と朱の旗が交互に屹立して、一日後の華々しい試合を豫告してゐた。

肩を摩り合はせて歩く學生と、學生を乘せた自動車と、それらが掻きたてる笑ひ聲のやうな雜音が、休暇前の暑さの中で空に立ちながら響いてゐた。

「もう幾分位ありませうか。貴方」

白いステージ・デイポーの中で、何處か此の邊の遠くの田舍から出て來たらしい娘が、久里の方へ向いて突然尋ねた。

彼女の服裝は手觸りの荒い麻で、飴色をしてゐた。顏付きは表情の少ない無愛想さを示してゐた。胸に結んでゐるネクタイだけが都會風であつたが、模樣には爭へぬ家畜の繪が這入つてゐた。

「あと十五分です。それでどちらまでいらつしやるんです」

「ハリウッド。自動車で四晝夜半ださうですね」

「あゝ、ぢや僕と一緒です」

久里はさう答へてから、更らに丹念にこの娘を眺めた。すると心の中で其の風俗とハリウッドとが最も適切に結びついた。なぜならば、ハリウッドには側役としての傴僂や、絨氈をためる男や、一本足や、マッチのやうにすぐ怒れる男や、彼女のやうな田舍まるだしを何よりも要求してゐるから。

「女優志願ですか」

「えゝ、まあ、さうなんですの」

彼女はおどけたやうな細い、然し勇敢な聲をだした。トーキイをもねらつてゐるのに違ひない。

と、十八の窓を持つた黄色く塗られた大型の乘合自動車が、埃をかぶつて突進して來た。

そこには二十九人の乘客が、動搖しながら坐つてゐた。彼等は窓から首を突きだして、兩側の旗を見ると、眠い好奇心を動かした。

藍色のシャツを着た黑ん坊のポーターが、新らしい客の荷物を屋根の上へかついであがつた。荷物の上へひろげるキャンバスの音が、天井から雨のやうに聞えて來た。

シャツ一枚の運轉手は、クラッチを放すと、アクセレーターを勢よく噴出させた。すると自動車は徐々に動きだして、速力をセカンドからトップに高潮した。

街の旗が一本のダンダラ模樣になつて兩側を流れた。

街を出ると、一人のインデヤン大學の學生が後の窓から遠ざかる街にお辭儀をした。

「グッド・バイ・ローレンス」

そして彼は眼たたきしながら、學生生活に最後の帽子を振るらしかつた。

ローレンスは一瞬にして遠く小さい街になつて消えた。

と、限りない緩斜面の大草原が現はれた。自動車は益々スピードをあげながら、人々を無限の低地に向つて運びだした。

何時、どつちを見ても、同じ草原の地平線である。たゞこの草原は傾いた一枚の綠である。そして漠々としたこの草原の中の一直線、アスファルトを敷いた漆黑の州道第八十號は、光りながら遠く地の底に沒してゐた。

無限の斜面、それはこの道を遂ひに深い海底に辷り込ますやうな錯覺を起させる。乘客は身體の狀態を傾けながら、執拗なこの長い間の錯覺に堪へてゐる。兩側の草がつぎつぎに強く吹き倒されては起きあがる。

と車が上へ向いた。水平に返つたのである。頭の中を洗ふ快活な疾走が初まつた。

「ラジオを入れないか。コカコラ會社の。面白さうだぜ」

一人の男がラジオ・ニュースをひろげながら云つた。すると一番前に坐つてゐる青年になりかけの少年が、すぐスキツチをひねつた。

「わがアメリカに於ける戀愛が、如何なる思想によつて支配せられてゐるか。男は益々社會生活に於て、強く努力的にならなければ生きてゆけない狀態になつてゐます。ところが斯くの如き修養を積むためには、彼等は最もいやしい女達と接近したければならない。青年が純粹な戀愛をするといふ事は、彼を弱くするばかりである。彼は純情の爲めに實に感じやすく、弱々しくなる。然しいやらしい女を對照とする戀愛は、それがいやしければついやらしほど、彼は次第に強くなり、人を物體のやうに取扱ふ修練を積むのであります。これは一つには生存に對する經濟關係にもよるものでありますが、わがアメリカに於ける青年の風儀が、かかる努力的な戀愛への方向によつて齎されつつある事を吾々は憂ふるものであります……」

「つまらないな。もう止めろよ」

少年が正直にスキツチを廻はした。然し彼は暫くスキツチを弄んでゐた。とスキツチが再びもとに這入ると、今度は新らしい飮料水コカコラに就いての廣告の放送に變つてゐた。

彼は苦が笑ひをしながらラジオに觸れるのを中止した。

自動車は依然として際限のない草原の中を走りつゞけてゐ

る。それはアメリカ以外では見られない圖放のない際限なさである。

と、この扁平な大地の上に、突如として、灰色の瘤のやうな巨大な鐵の山が現はれた。十個、二十個、この寂莫とした地割の中にそれは壓力的な鬼氣を含みながら大きく接近して來た。博齒のやうなトロッコが、小さい粉のやうな煙を吹きあげながら靜かに動いてゐる。

「あれ、何んでせうか。恐ろしいやうな」

女優志願が眼を大きく見張りながら隣席の男に尋ねた。

「タンクです。重油の」

六時間の疾走の後に、窓外の風色は漸く闇の匂ひをつけだしてゐた。

二

遠くの方が次第に明るくなつてくると、自動車は眩しい光、新興油田都市タルサの中に抱擁せられた。

タルサは辛辣な資本家と幸運な成金の一夜づくりの都會である。川は油のためにおどみ、林の根は黒く、流れるやうな土で湧きあがつて、街は發狂した活氣で動いてゐた。

自動車が止つた。乘客は一寸反動を感じてから次ぎ次ぎに立ちあがつた。別のバスに乘りかへなければならないからである。

久里は夕方の雜踏に卷き込まれると、食事を取る爲めにカフエーに這入つた。ニューヨークから引き拔いて來た此處のカフエーには、タキシードのバンドが南方の猥雜な歌を首をふりながらわめき散らしてゐた。そしてタンバリンを持つた踊子がスパニッシュダンスを淫らに踊りながら、客席の方へ廻つて來た。すると、一人の迷ひ込んでゐた勞働者は、腹が減つてゐる癖に、料理の食べ方がわからないで、マゴツキながら、そのまゝ外へ出てしまつた。そしてカールス・バードのサナトリウムへ行く筈のブルジョアが、一夜の放蕩息子のやうに貪ぼりながら鷄の足を握つてゐた。

久里も勿論、空腹を補つてゐた。然し女が接近してくると、フォークに突きさした鱸を、彼女の口の近くへ差しだしてやつた。するとこの小さい口は、それを巧みに食べてしまつた。

「貴方、支那のお方」
「ノウ」
「では朝鮮」
「ノウ」
「さあ、どこかしら」
女が口を綺麗に動かしながら云つた。久里は口に氣をとられさうになりながら答へた。
「何處つて。君は日本つて國を忘れてゐるんだね」
「お〻日本。わたしの好きな國だわ。櫻のお國。まあ櫻のお國を忘れるなんて」
「どうかしてゐるね、君は。カルフオルニヤでは排日で騒いでゐるぢやないか」
久里はふと何か思ひ出すと、不快になりながら鼻であしらふやうに云つた。
「まあ、排日なんて。けどあれは政治家だけの事だわ」
久里は外へ出た。成りあがり石油都市の明るいナンセンスと、出まかせのお愛想が彼を不快にした。
彼は今、世界の市場權をねらつて、アメリカとイギリスとが、石油の販路に就いて、もの凄い戰ひをしてゐる事を知つてゐる。それは、如何にマクドナルドの髯が、ラピタン山莊でフーバーの豐頰を撫でてみたところで、又ていのい〻英米海軍協定を結んでみたところで、この實質的衝突に就いてはどうする事も出來ない。そこで吾々の排日は、當然これ等の間に微妙に離反を計畫しなければならない……
彼は歩きながら發着所の方へ行つた。すると彼と出あひ頭に大陸を横斷する乘合自動車が、新らしく這入つて來た。
――ニユーヨークからロスアンゼルスへ
この自動車だなと久里は考へた。
乘客共がガヤガヤと食事に下りだした。
「馬鹿に暑いね。此處でまた一時間か。やりきれやしない」
猛烈な顏をした大男がステップに足をおろさうとしてゐた。彼は腕の上へ上衣をひつかけ、ネクタイをはづしてゐた。顏が油じみて口の中が黒く、ごろつきのやうに思はれた。
つづいて二人の若々しい姉妹がおりて來た。それが生き生きした同種類の二つの花のやうに久里の眼に寫つた。
子供を連れた母親がおりて來た。老人がおりて來た。

久里は新らしい同行者に就いて、物珍らしさうな解釋をくだしながら、誰れもゐない自動車に一人で乘り込んでゐた。

油さしが潤滑油裝置をはづして、潤滑油を車軸に、それからニンジンの軸承に、ピストン環に、氣筒の内壁に、丹念に注入してゐる。

渇きさうになつてゐた金屬面が急に蘇生しながら、千萬分の三ミリメートルの厚さを以つて圓滑な油膜を張りだしてゐた。すると車は今にも滑りだしたい欲望に濡れて、新らしい出發を衝動してゐた。

同乘者は次第に歸つて來た。

自動車は新らしい客を加へると、すぐ街を出た。闇の中へ這入つた。暗い疾走が初まつた。眞夜中にオクラハマ市に着いて、暫く灯の中を走つたが、又闇の中へ這入つた。兩側の電柱燈が大きく近づいて來ては消えた。

乘客はガラス窓をおろして、皆深い眠りに落ちてゐる。彼等の夢の中をオクラハマ州の白い境界標が走りすぎた。疲れが彼等を氣持よくゆすつてゐた。そして眠りころげながら。ひとかたまりになつて 何處かへ運ばれてゐる人間の姿が、今は可憐な存在に變つてゐた。

人は明るくなつてしまはなければ眼を醒まさない。久里が二日目の眼を醒した時、自動車は一望千里のテキサス州の北部を走つてゐた。土地は赤く燒けて、何にも植つてゐなかつた。

恐らく綿の栽培が週期的に今年は別の地割に移動してゐるのに違ひない。綿花は長く同一の地面で成長出來ないからである。

久里は運轉手の後へ行くと、氣持のいゝ朝の動搖に堪へながらポンプを押した。水が沸騰しながらもりあがつて來た。彼はいそいでアメリカ風に左手をポケットに入れたまゝ、右手で顏を洗つた。

と彼の肩に柔らかい手が觸つた。

「グッド・モーニング」

「お早う。いゝお天氣ですのね、今日も」

昨夜乘つた二つの花のやうに思はれた姉妹達が其處に立つてゐた。

彼は自分の坐席に歸ると、キャッキャッ騷ぎたがら、彼女達が顏を洗つてゐるのを樂しく眺めてゐた。水が白く顏に叩きつ

けられてゐた。彼女達は海岸にゐる女達のやうに簡單な服をつけてゐた。そして乳の下へすぐ赤いバンドをしめてゐた。それが遠い旅行をしてゐる此の女達によく似あつてゐた。

「グッド・モーニング。氣をつけ給へ」

隣りの男が突然、背中を叩いて注告した。「氣をつけ給へ」に重點があつた。昨日の猛烈な顔をした大男である。

「あゝいふ女は危險だよ」

やがて二人の女は坐席へ歸ると、陰險な月給取りのやうな顔をした細い男に急いで接吻した。

陰險な男は女達に「ダッディ、ダッディ」と呼ばれてゐる。然し彼が彼女達の父親でない事は誰れが見たつてわかる。彼等はせいぜい五六歳しか違つてゐなかつた。

「見てゐたまへ。あの男は今にひどい目に逢ふから」

寶石商である例の大男が、又さう云つた。彼は嫉妬てゐるのかも知れない。彼の齒は喫煙の爲めに眞つ黑によごれてゐた。

ラジオが這入つてゐた。ジャヅの名手、ポール・ホワイトマン氏の指揮する「滿月の下で」であつた。姉妹達が時々指を鳴らしながら上體を動かした。彼女達は今にも立ちあがつて、彼女達のダッディと踊りだしたいやうな氣配を示してゐた。そして時々ムシャブリ付くやうに男の首に交る交る兩方から手を卷きつけた。自動車の動搖までが、次第にジャヅの上へ乘つて來た。ダッディと呼ばれてゐる男は何かのスパイのやうにも思はれた。久里は警戒が何よりも大切だと考へた。

自動車のタイヤは、吸ひつくやうに燒けたアスファルトの上を、相變らず滑らかに辷りつづけてゐる。

三

開け放された窓から顔を燒くやうな風が吹き込んで來た。

久里は頭をひつ込めると、ゴムを嚙みながら、自然に娘達の方を見てゐた。

「何しろアメリカ第一の州ですからね、テキサスは。この州だけでも日本より廣いといふんですから」

後ろの男が耳のそばで云つてくれた。

「なるほど。だが暑いですね。全く」

「さうですとも。だが暑くて雨が少ないのが、反つていゝんでさ。此頃になつてやつと開けたんですが、その爲めに遂に綿花の産出では世界第一にのぼりましたよ。それにこの綿がアメリカの輸出品の中で一等多額にのぼるんですからね」

この邊の男に違ひない。久里は説明を聞きながら怪物のやうなアメリカを感じてゐた。今アスフアルトの道は、この怪物の中を熱心に突ききつてゐる。そしてそれは人間の征服欲を無限に延長して、世界の問題である太平洋を目がけてゐる。

姉の方が突然、ダッディの膝に手を置いた。細い爪の先きが綺麗に鋭くしてあつた。彼女は男を尻の下に敷くかと思ひの外、反つて男の方が忙いで彼女の手を握ると、自分の腰の下へしひた。女は痛さうにして我慢してゐた。

女優志願が見ぬふりをして此れをつぶさに觀察し、だが他の者は誰れも振り返らうともしなかつた。

久里は喉が乾いて時々、ポンプを押しに行つた。すると妹の方がきまつてついでにコップをさしだした。

「よう。水がかりしつかりたのむぞ」誰れかがひやかした。

自動車は時々アクセレーターを吹かしながら、相變らず元氣である。家は無くなると、一軒も無くなつて、それが一日も續いた。長い長い路を走りつゞけて、自動車は州境に近く汽車と平行線になつた。

アンムレラ飛行場から一臺の飛行機が後を追つかけて飛んで來た。飛行機はまだ飛ぶために飛んでゐる。だから彼の行動は時々不可解な神秘に見えてくる。爆音が頭の上へ近づいた。

と、ローレンスに於ける兩大學の野球の放送が初まつた。アナウンサーの聲がせはしく走者の位置と球の位置とを交錯させた。喚聲があがつた。白い球が彼等の乘りあはしたバスの天井を飛び廻つた。

黒人の大學生がしきりにスコア・ブックに記入してゐる。空を裂く朗らかな打撃の音が聞えた。飛んだと思つた。と自動車は一寸停車してガソリンを補給した。

風景が少しづつ平原から高原へのぼりだしてゐた。自動車は崖下をくゞつたり、谷の中途を廻つたりしながら、次第に高くへ出た。そして平坦な風景に出ると、絲蘭の花が眞赤な注目を

引いた。

「いゝ景色ですのね」

「まだ、まだ、これからです」

そして姉妹達の父親に對する情緒の風景も、次第に昏くまして進行してゐた。彼等の側は陽があたるので、暗くブラインドがおろされてゐた。その上ベスコ河を越えようとして、次第に彼等の周圍は、夕暮れが濃い色をつけだしてゐた。

「おい、電燈をつけないか」

誰れかが皮肉に氣をきかして叫んだ。

四

三日目の朝、ロスウエルに着いた。

吾々は又運轉手と自動車とを變へた。

口紅を惡どく塗つた田舍じみた一人のモダン・ガールが乘つて來た。彼女は車内を見廻はすと、しよんぼりしてゐる女優志願の傍らへ行つて坐つた。二人の對照が奇嬌な諷刺畫を作つた。彼女はタイピストらしく指が頑丈に發達してゐた。然も二人は一目で親しくなれる靈感を感じあつてゐた。

ダツデイが姉の力と一緒に何時の間にか下車してゐなくなつてゐた。

然し妹は一人になつても、平然として騷ぎ廻つてゐた。彼女は何時の間にか白い象牙の扇をだすと、それを胸にあてるやうにして使つてゐた。

そこで久里は新らしく坐席を取る時に、今度は彼女の傍らへ行つて坐つた。彼女は右の頰に小さい點のやうな黶があつた。

「どちらへいらつしやいますの」

「日本へ歸るんです」

「まあ、そんなに遠いところへお歸りになるの」

「だが、いゝところですよ」

「一緒に行つてみたいわ」

すると、大きい寶石商が思ひがけず叫んだ。

「おい、こつちへ來ないか、君。チョコレート進呈するから」

そこで久里は女達との會話を、彼の爲めに中斷された事をブツブツ云ひながら、彼の傍らへ行つて坐つた。チョコレートが柔らかくなつてゐた。

「君はわからないのかい。乘つた時から注意してゐるぢやない

か」

「うん、よくわかつてるよ」

「どうだか」

　だが久里は、厄介げにチョコレートを食べてしまふと、又妹の側へ行つて坐つた。

「貴方方のお父さんはどうしてお下りになつたんですか」

「彼は軍人です。この邊へ視察に來たんです。私達はただ遊ぶ爲めに……」

「おい」

　又、男が叫んだ。彼はプンプン怒るやうに、黑い齒をむいで云つた。

「おいハンカチをかしてくれないか」

　今度はさう云つて、久里を彼のそばへ呼びつけようとした。そして久里が女達と接近する事を極端に邪魔しようとした。この男は新婚早々かも知れない。久里はさう考へた。それにしても不思議な心理だと思つた。

　久里は彼のオセツカイに半分ほど不快を感じながら、彼の心理は研究するのに價値があると考へた。彼は中腰になりながら彼に接近すると、

「親切全くありがたう。ハンカチは君に進呈するよ」

　そして胸のポケットから一枚のハンカチを取つた。

「ま、かけ給へ。君は僕のそばにゐるのが嫌なやうだね」

「でも、ないがね」

「チョコレートならまだあるよ」

「ありがたう。だが一寸話しかけてゐるんでね」

　そして立たうとした。と大きい男は、いそいで彼の手を握つた。親切の積りか、嫉妬してゐるのか、全く見當がつかない。だが、兎に角、人種的な隔りを少しも感ぜしめない彼の國際的態度が彼に親しい女達の感情を起さしかけてゐた。

「貴方、いらつしやらない。こつちの窓へ。そつちの窓は陽があたつて暑いでせう。それにヤツカの花がとても綺麗に見えてよ」

　今度は女の方から云つた。決して性質の惡い女とは思はれなかつた。たゞの無邪氣な娘に違ひない。

「こら！　どうしてさう動きたがるんだ。少しぢつとしてゐろよ」

猛烈な顔をした國際主義者が唸つた
然し久里が立ちあがると彼は泣く前のやうな強い顔をした。
「日本人なんて、しようがないな」
暫くすると、彼が又叫びだした。
「ハンカチ返すよ。君。君のやうな男からもらつたちやんは返脚するよ」
女優志願とタイピストとが彼等の方を見て笑つた。久里はしぶしぶ立ちあがると、女の手を離して、怒つてゐる彼の傍らへ歸つて、今度は少し長い間心棒して坐つてやつた。
「君。どうしてあんな女と話しするんだい」
「話すのかどうしていけないんだい」
「話すのがいけないんだよ。僕がさつきから云つてゐるのが、まだ君にはわかつてないんだね」
久里は少しうるさくなると怒つた。
「おせつかいだね、君は。僕が何をしようと勝手ぢやないか。あまり馬鹿にしないでくれ給へ」
「君はあの連中の事を知らないからさ」
「君だつて知つてるわけぢやあるまい」

久里は急に不機嫌になると、怒つたまゝ妹の方へ歩いて行つて坐つた。寶石商の嫉妬は、彼の餘りに現實的な肉體の過剰から反撥して來るものに違ひない。さう考へさせるほど彼の肉體は坐席にあふれてゐた。
「あつちの窓は實際暑いんでね」
向ふから同じやうに客を乘せた長いバスが走つて來た。運轉手がなつかしげに兩方から太いクラリソンを鳴らして挨拶した。乘客が白いハンカチを振りあつた。たしか胸にさしてゐる小さい赤い花が久里の眼にとまつて走りすぎた。人は瞬間に不思議なものを見るものである。
「いゝもんですね。かういふ山の中で逢ふのは」
自動車は次第に南下して古風なエルパソの都をねらつてゐた。
L・S自動車會社の宣傳放送が初まつた。
「アメリカに於ける乘合自動車の發達は、漸く汽車と電車とに明らかな對立を示しだして來ました。自動車は贅澤品どころか、汽車の實用を遙かに凌駕してゐます。わがアメリカに於け

る乘合自動車は約九萬七千臺に及びますが、内四萬五千臺が市中を走り、あとが市間・州間を連絡し、わが會社の自動車數はこれらの中の約五割を占めてゐます。今日までに全國的に發展して行つたバス經營に費された金額は約十二億に及びます。

且つ何故に自動車が進歩的であるか。皆さんも經驗してゐられるやうに、既に賃金にしましても、アメリカ中部から西部に出る爲めに、鐵道では約百二十五ドルを要します。然るにわが乘合自動車に於ては五十五ドルで事足りるのであります。現代の抱負ある事業家が、各國とも漸く乘合自動車の問題に注目しだした事は當然と云はなければなりません」

自動車は爽快に乘客をゆすつてゐた。風が清麗な嵐氣を吹き込んで來て乘客をねむたくした。

「あゝ眠むたくなつて來た。いゝ時に放送しやがる。こんないゝ景色のところで」

商人風の男はさう呟くと、然しいゝ景色を眺めやうともしないで、深い眠りに陷ちてしまつた。久里は後部の展望臺に出ると淋しい煙草を吹かしだした。薄い埃が煙の尾になつて、巻きあがりながらついて來た。

寶石商は、怒つたまゝ、あれ以來、彼に見向きもしなくなつてゐた。

五

四日目が明けた。

久里は彼女の傍らで眠つてゐた。ふと眼をあけると、寶石商が彼の方をじつと見据えてゐた。だが久里が彼の方を見ると、彼はいそいでむづかしい顏をしながら向ふを向いた。然し暫くして女が彼の肩に手をかけようとすると、とうとう我慢が出來なくなつたらしく彼の方から口をきいた。

「おい、よく眠たれかい」

まだ苦がい顏をしてゐた。

「うん、君はどうだつた」

久里は急に明るくなつて久しぶりで答へた。千年の知己が歸つて來たやうな氣がした。

「又こつちへ遊びに來ないか。凉しいよ」

そこで久里は素直に立ちあがつた。今度は餘りひどい事は言

はないだらうと思つた。

「怒つてゐるのかい」

「うんにや、たゞ君と一日口をきかなかつただけさ。はつは」

「はつはつはつはつ……」

彼も又うれしげに笑ひだした。然し表情にはまだ變なものがひつかゝつてゐた。笑ひが妙に止まらなかつた。親しい感情がこみあげて來た。

と、自動車がエルパソに到着した。其處は砂漠のためにアメリカの文化から完全に遮られてゐた。スペイン風の教會が方々に立つてゐる。そしてフレームの無いアドーベ家屋が遠い昔を夢みてゐた。人の氣風が纖細で、靜かな情緒が流れてゐた。スカートの長い女達が、優しげに道の上を木靴を鳴らしながらカラカラと通つてゐる。

女優志願がタイピストと一緒に下りて行つた。久里は仲なほりした親友、寶石商と一緒におりて、朝の食事をしようとした。と背の高いアメリカの巡査が來て、久里を呼びとめた。

「君、君は何處から來たんですか。一寸しらべさしてもらひたいんだが」

「僕、ロレンスから乘つて來ました。目的は旅行です」

「旅券を見せてくれ給へ。日本人だらうね」

久里は不愉快さうにトランクを割つて一枚の紙を示した。巡査は暫く眺めてから

「此處にはメキシコの方から這入つてくる密入國者がよくあるんでね」

そして橋の向ふのメキシコの町フアレスの方を指さした。國境の川には湯のやう溢れる水の中に鰐が泳いでゐた。

「特に日本人を警戒せられるのはどういふのですか」

久里は紳士らしい態度で云つた。

「お氣の毒ですが、カルフオルニヤに於ける排日思想は吾々にも嚴重さを要求してゐるのです」

猛烈な顔をした寶石商が後から言葉をかけた。

「彼は僕の友達でしてね。ロレンスから乘つて來ました。日本の小說にあるさうですが、まるで彌次喜太のやうな旅行者でしてね。特に彼はアメリカ人に對しては親切な男です。とりわけアメリカの婦人に對しては」

彼は公平な國際主義者らしく云つた。

「ちやよろしい。行き給へ」

巡査は擧手の禮をすると、ウサン臭さうにこの古風な街を通りすぎた。

彼等はおかげで、食事の時間を失つた。二人はプリプリしながら、サンドウツチを買ふと、あはてて自動車に馳けつけた。

アスフアルトの道は白い砂漠の中へ這入つた。

廣い砂地の中には時々、草がパツパツと現はれては消えた。野兎が驚いて自動車の前を無數に横ぎつた。水仙のやうなヤツカの花が異樣な情緒を荒れた砂地の中に咲かせてゐる。道が次第に險惡になつて、自動車の動搖がはげしくなつてゐた。土埃が吹きつけられて、乘客の顔を次第に黒く塗りだしてゐた。

久里は寶石商の隣席に坐つて、ガタガタ男同志の身體を無趣味にうちつけながら、排日の事を憂欝に考へてゐた。それは樂しい旅行に突如として割り込んで來る陰欝な強迫だと思つた。

「怒るために丁度いゝ道だ」

自動車の動搖は久里を益々不氣嫌にした。

「ミスター・クリ遊びにいらつしやらない。私はする事が無いのよ」女の方から叫んだ。

「自動車が馬鹿に搖れるね」

「何を氣取つてゐるの」

するとその事が寶石商の氣に入つたらしく、彼はすぐ久里に低い聲で囁いた。

「偉い。行くんぢやないよ。もうあんな奴のそばへは」

自動車は最も顯著な資本家的横暴の歴史を有する南太平洋鐵道に沿つて走りつづけてゐた。そして其等の資本家の一人、スタンフオドを攻撃しながら有名になつて、然も何時の間にか、排日の指揮者に變つてゐたハイラム・ジヨンソンの事を久里は思ひ浮べてゐた。

資本家も、又横暴だつた資本家を攻撃する男も、それ以上に國際的であるべき勞働組合I・W・Wまでが、等しく西部アメリカに於ては排日によつてのみ自己の立場を強固にしようとしてゐる。

彼はカルフオルニヤに於ける日本人の耕作面積が、最高の四十三萬エーカーから、排日土地法によつて今は次第に僅か二萬エーカーにしか過ぎなくなつてゐる事實を知つてゐた。日本人の形をした藁人形が首に綱をつけられて引きずり廻はられた事

を知つてゐた。

マクラッチイ。ショートリッヂ。フヰンラン。インマン。ウエッブ。そして排日を刺戟し、日本人に漫罵をあびせるウイリアム・ランドルフ・ハーストの系統に屬する新聞の緻密な散布を知つてゐた。

「久里、外を見ないか。風景が變つたよ。とてもすばらしく」

「僕はさつきから娘達の方を見てゐたのさ。彼女達は眠りだしたよ」

「駄目だな、君は。どうしてあんなものばかり見るんだらう」

「眠つてゐる女位かあいゝものはないよ」

「馬鹿な」

女の手から、たたみかけの扇が落ちさうになつてゐた。

その時、南太平洋鐵道會社の汽車が、轟然たる響きをたてながら傍らを通りすぎた。

響きが通りすぎると、ローレンスに於ける野球の決勝戰の日の放送が再びつながつた。

「今日の戰ひが、輝しい人氣を呼び起して、例へば「天誠の好きなサロメ孃」とか。「切手の裏に書かれた秘密の手紙」とか。——あらゆる不思議な合言葉をこの都會に流行させたのはさすがはカレッヂ・タウンらしく愉快にたへません。吾々は勝敗の如何に拘はらず、「強い天使の羽根」が世界を包むといふ合言葉を何時までも忘れたくないものです」

ロレンスの市長か何かの、誠にもつて可愛いゝ閉會の辭が這入つて來た。

六

デミングに着いた。

砂漠の中の明るい近代的都會である。

三十分の停車時間があつた。寶石商が白い散髪屋へ這入つて行つた。

久里は彼がゐなくなると、何となく氣樂さを感じた。だが彼が遲くなりだすと、敵を見失つたやうにその事が心配になつて來た。

「君の相棒はどうしたかね」

と一人の男が尋ねた。と彼は其處へ俄にチツパリした男になつ

て歸つて來た。

發車時間が來た。すると忘れてゐた女優志願と、けばけばしいタイピストが、未だに歸つてゐないのに氣付いた。

「困るな。グズグズしちや」

無遠慮な今度の運轉手は、帽子を幾度もかぶりなほしながら不平を云つた。

「ぢや、俺が見に行つてやらう」

おせつかいの寶石商がユモラスな恰好をしながら下りて行つた。

と、二人は洗面所の鏡の中で懸命に化粧をしてゐた。そして二人共見違へるほど綺麗になつてゐた。

「君、君達、自動車が出るんだよ」

然し二人はなかなか鏡の中から眼を離さなかつた。

「チョツ！ ゐたよ。砂漠の中でおめかしをしてどうすると云ふんだろ、盛んに塗つてゐるのさ」

寶石商が大きい聲で皆に報告した。

「はつはつはつはつ……」

「はつはつはつはつ……」

怒つてゐた運轉手が突然笑ひだしながらハンドルを動かした。二人が狼狽しながら飛び乘つた。

二人は坐席に落ちつくと、更に紅棒を出して化粧をつづけだした。タイピストの短く刈りすぎた斷髮と、發達した指とが、どうしても久里に特殊な感覺を呼び起さした。

それにしても、あの田舍まるだしの女優志願が、何時の間にか友達から化粧法を見ならつて、次第に美しくなりだしてゐるのが面白く思はれた。

アリゾナに這入つた。

向ふの隅で親しい一團の連中が、ポーカーを初めだした。時々大膽なリミツトがつけられてゐる。どうやら其處では靜かな愛情の風が、カルタを裏がへしながら、吹き初めてゐるらしかつた。

と火成岩のそぎたてたやうな峯が、おり重なりながら頭の上に聳えだした。岩が赤く燒けて、何か地獄の底のやうな怪傑さを示してゐる。光がところどころにあたつて、それが反射しながら、此の世の外のやうな奇妙な景觀をひろげてゐる。

形の不思議な岩臺がある。平頂山がある。一望の中に擴がる

これらの雄大な眺望が、自動車の速力を兒戲のやうに輕蔑した。

身慄ひするやうた大峽谷の上に自動車が出た。と遥かに谷を眼いでゐる天然橋が眼についた。然もこれらの壯大な風景は、遲々としてしか窓の外を動かなかつた。自動車は全く自然の剛壯さに壓倒され、蟻のやうになつて這ひながら動いた。

と、遥か谷の下の方に白い烏帽子のやうに立つたインディヤンのテントが三つ竝んで見えた。テントの傍らに小さい無蓋自動車が置いてある。インディヤンが使用してゐる自動車に違ひない。槍のやうな長いものがテントの横を廻りながら動いた。

又時によると、高い岩臺の上に、彼等が住んでゐる「天上の街」が現はれたりする。彼等は岩石の頂上に住みながら、綱梯子によつて下界におりて來るらしい。それは白い孤城になつて聳えながら、高く太陽の強い照明の中で靜まつてゐた。

自動車が輝く湖水の上のコンクリートに辷りでた。止つた。湖水の反對側を見おろすと、石を積みあげて灣曲した壁が、眼がくらみさうに深く沈んでゐた。

「ターリッチ・ダムです」

久里は人工の驚異に恐れながら、見物する爲めに皆と一緒におりた。腰が痛くなつてゐた。

妹だけはどうしたのかおりて來なかつた。彼はトランクの中には、ガラクタ許りが這入つてゐる事を知つてゐる。勿論秘密に屬するものなどは、何も這入つてゐなかつた。

「アイスクリームを買つて來てくださらない」

「オーライ」

久里はステイチ・ディポーで四つだけ買ふと、車内に歸つて行つた。

すると寶石商が早速不氣嫌に云つた。

「買つてやつたりしちやいけないぢやないか。君は金をもらつたのかい」

「金はもらつた」

「そんならいゝが、決してただで買つてやつたりしちやいけないぜ」

久里は彼の親切が相變らずうるさいのにあきらめを感じだしてゐた。

自動車が動きだした。湖水の岸を暫く走りつづけた。（續く）

ふきが時に自動車の腹をぬらした。
空氣が次第に乾燥して何か砂漠でもありさうな豫感がした。

七

銅と石炭の産地であるグローブに止つた。
夕方が深いこの谷底の街に落ちて、街は暗い色をしてゐた。
「やすい店に這入らうぢやないか。キタナイ女のゐる」
寶石商が云つた。
二人はレストランを一軒一軒、物色しながら廻つた。本當に二人が世界を股にかける野次喜太のやうに思はれて來た。
一軒のみすぼらしい家に這入つた。すると朝鮮人の工夫がゐて、懐しげに久里の方を見てゐた。
「君は此處で働いてゐるのか」
「さうだよ」
「一人ぎりかい」
「澤山來たんだがね、皆死んだよ。銅の毒にあてられてね」
彼は獸類のやうな風をして毛の着いた豚の足を噛つてゐた。暗い電燈の下でそれが暗い運命のやうに見えた。
「さようなら。丈夫でゐたまへ」
「ありがたう」
朝鮮人の工夫は、もの憂さうに頭をさげた。
又夜の疾走が初まつた。黒い山のやうな製銅所が明るい月の下で方々に靜まつてゐた。
と、道は白いヒラの沙漠に這入つた。周圍は夢の中のやうな銀色の世界に變つた。白くなつた。眼が總ての判斷力を失つて、恐ろしい幻覺を起しさうになつた。久里は冷たい興奮を感じながら、何時までも眠れないでゐた。
五日目の朝。眼がさめると、智慧の輪のやうに組みあつたサボテンが乘客を再び驚かした。風景は常に極端から極端に往復した。赤い花が切り口のやうに裂けて枝の間に開いてゐた。
砂漠の中の朝ほど朝らしいものはない。砂漠には影がない。だから影が最も鮮かに映る。白い砂の波の中を、自動車の長い影が通り魔のやうに走りつづけた。
「僕はどうしても、あの女と一晩すごしたいと思ふんだが」
どうしたのか、久里の口調は砂漠のやうに影を失つてゐた。狂氣じみた正直さがむきだしになつてゐた。

「しつこいね。ロスアンゼルスに下りたら、僕が案内してやるよ。とても素晴らしい所があるんだぜ。下手にまごつくと卷きあげられるからね」

「いよいよ、あしただからね」

「だが、君は馴れてゐるんだらう。女にかけては」

「ちつとも。だが、もうそんな事は云つてゐられないからな」

彼の興奮には昨夜の不眠と砂漠の氣壓が源因してゐた。

「ぢや、あの女をねらふなんて間違ひぢやないか。獨逸の兵學の大家ラセウィッツ將軍は云つてゐるさうだよ。攻勢軍は常に防禦軍より五十パーセントの優勢が必要だつて」

沙漠の蠍が黒い櫛のやうな條をつくつて流れすぎた。

「えらい事を知つてゐるね、君は。だが、あの女が果して防禦軍か、どうかはわからないからな」

女がこちらを見て笑つた。すると久里は急に平靜さを取りもどさうとして、今度は極端に、色情ぬきの返事をした。

「君は日本とアメリカの海軍の比率みたいな事を云ふね」

「いや、米日戰爭の講演會で聞いたんだがね」

「變な斷用をするね」

「だが僕は公平な世界主義者だよ。人種的偏見は大嫌ひでね」

「なるほど」

だが、久里は幸福な時のやうな警戒を感じた。そして自分の心の狀態を危ないと思つた。そこで唐突に窓の外を見た。山の間に一臺の遠乘りらしいロードスターが止つてゐた。一人の女が傍らに立つて髮をといてゐた。恐らく彼等は今、谷陰で眼をやつと醒ましたのに違ひない。

ユマに着いた。一時間の停車時間があつた。此處からカルフオルニヤ州である。

乘客は用意のために風呂に行つたり、散髮屋に出かけて行つた。タイピストが女優志願と哀切な別れを惜んだ。

自動車も丹念に水をかけられて、黄色い肌を鮮明に光らした。ガソリンポンプの影が短く赤い手毬のやうに寫り、窓ガラスが磨かれてキラキラしだしてゐた。

タイヤの中の石がピンセットで取りだされた。キユーブレーターの埃が針金で掻き出された。潤滑油が注入せられて、車は又新らしい活氣を感じだしてゐた。

運轉手も白いシャツにぬぎかへて、長靴の埃を拭ひとつた。

ラジオだけが一人車内で鳴つてゐた。ロスアンゼルスからの放送であるらしい。

「ナンシー・キャロル嬢に新らしい情人が出來たといふ噂さです。彼女の靴は二百七十足で、彼女の足に關する女中が……」

わがアメリカに輸入せられる燐寸は、日本の製造高六十萬個の六割でありますが、從來一個十七ドルでありました。ところがロシアは製造高十五萬個（昨年より八萬個增加）を日本よりも二ドル方下値で輸入しようとしてゐます。そこで日本も漸く値さげを斷行しようとしてゐますが、わがアメリカを市場とするロシアのダンピングは注目するに價します。ロシアは各國に對してかういふダンピングを試みてゐますが、これは反つてロシアの輸出入を困難にし、勿論日本その他の國の不景氣を激成するものと考へられます……。

一昨年秋、わが國に於ける株式恐慌は、世界的不況となつて影響しましたが、秋季に入るに際して株式市場漸く好況を呈し、鐵道株見直し、金融は休日用通貨需要を示して居ります。經濟生活も又新らしいリズムを發見して、音樂的に進行してゆかなければなりません……」

放送が終らないうちに自動車が動きだした。この州道には兩側に白い柵が續いてゐた。そしてアスファルトの道の中央に、左右をわける白い線が一本長く引かれてゐた。

田舍じみた女優志願は、今はたつた四日間の旅行の間に、素敵もない美人になつてしまつてゐた。彼女の熱心は、遂ひにタイピストの化粧法を完全に會得したのに違ひない。

久里は赤いバンドをしめた妹の方と、女優志願とに交る交る眼をやりながら、今度は一人になつて淋しげな女優志願の傍らへ行つて坐つてみようと考へてゐた。

彼女は最早や喜劇俳優ではなくて、ドロレス・デル・リオのやうな一人の立派なスターになつてゐた。彼は女といふものの驚くべき變化に感心しながら云つた。

「貴方は隨分美しくなりましたね。僕と一緒に乘つたんですよ、ロレンスから。あれから一度も話さないでゐて、今になつて話すなんて、僕達も隨分心棒強い方ですね」

「まあ、恐れ入るわ。貴方には」

「もう今晩はいよいよお別れですね。もう一日位乘つてゐてもいゝとは思はないですか」
「だけど、私はお友達が待つてゐるかも知れませんの」
すると、寶石商が又叫んだ。
「おい早く來たまへ。水が見えだしたよ」
「嫌な男だね、君は。僕はもう君の云ふ事なんか聞かないよ。今後」
久里は女と身體を接したまゝでゐた。
と、暑い風が吹いて來た。右側の窓を見ると、其處には青い海が遠く輝きながらひろがつてゐた。
「太平洋かしら、だが右側に見えるなんて」
彼は不思議さうに、低い聲で女に尋ねた。
「いゝえ、湖水なのよ。たしかカルトン・シーと思ふわ」
黑い漆で塗つたヨットが、風をよぎりながら現はれた。このヨットはきはやかな光線の中を古典的な優雅さで暫く氣取つたヨットはきはやかな光線の中を古典的な優雅さで暫く自動車と一緒に帆走し續けた。
「乘りたいな」
「だつて自動車に乘つてこゐるぢやないの」
「だが舟を見ると、つひ僕は乘りたくなつてしまふんです」
然し今の彼はすつかり冷靜になつてゐた。
「勝手な事を云ふのね、貴方は。まるで赤ん坊みたい」
「僕は貴方を好きになつてゐるのかも知れない」
すると、彼女は久里の足を痛いほど踏みつけた。どうやら彼女は姉妹達のしてゐた愛の技術までも飲み込んでしまつてゐるらしい。
「貴方はきつとすばらしいスターになりますよ。素敵もない」
「お上手ね」
「僕はそれを信じてゐます」
久里は彼女の大きい手を見つめてゐた。
「水が欲しいわ」突然彼女が云つた。
そこで彼は立つて行つて彼女の爲めに水を押してやつた。水が白く湧きながら紙のコップの中へ溢れあがつて來た。
「まあ、ごらんなさい。メロンが一杯だわ！」
彼女が飛びあがりながら彼の耳の近くで叫んだ。其處には日本人が開拓した習の農園が黃色くメロンの玉をみのらしてゐた。自動車は匂ひのいゝ果樹園の間を走りつゞけながら、人を

蘇生さす甘い香料の風を窓から吹き入れた。
　妹の方がしきりに小さいバニチー・ミラーを覗きながらパフを動かしてゐた。

　と、ロスアンゼルス市廳の建物が、バビロンの塔のやうに白い大きい城になつて現はれた。
　百二十萬人の都會は、四晝夜中の絶えざる疾走の後に、最も文明的な輝きを以つて、自動車を包んだ。大きい乘合自動車が今は田舍者に見えた。夕方近い街は光りを入れながら、さつき眼を醒ましたばかりのやうに生き生きと廻轉してゐた。
と自動車が止つた。
「お丶私の夫よ」
　鷄の鳴くやうな聲がした。と、わが猛烈な顏をした國際主義者は、一人のギリシヤ人種らしい女優のやうな女と抱きあつてゐた。それは接吻でも、抱擁でもなかつた。もつと烈しい爭鬪の一種であつた。それを見てゐると、自動車の中でした彼の嫉妬心が、今となつては、久里に理解出來るやうに思はれた。
　久里はあつけにとられながら、わが親友の行ひをぢつと眺めてゐた。と、どうかしてものにしようと考へてゐた妹が何時の間にかゐなくなつてゐた。それどころか、彼が狼狽しながら振りかへると、女優志願も又反對の方へそそくさといそぎ去つてゐた。
　久里はアメリカ女の旅行中だけの實利主義に吃驚しながら、ボンヤリ立つたまゝ旅の終りを感じてゐた。然し今、彼にとつて最も愉快な事は、彼が總ての女に懸念しながら、實は忍耐強いカムフラージによつて、今ロレンスの街を脱出して日本への新らしい報告を齎すべき半ばの成功を收めたといふ事であつた
　彼は三ケ月前、パナマ運河の近くにゐた。パナマには各國の大膽で周到な國事探偵が一杯してゐた。勿論、彼も其の一人であつた。然し彼はパナマを出て、各地を遊覽しながら、今は純然たる遊覽客に變裝してゐた。
　彼はホテルに着くと、更らに新らしい服裝に着かへて、西海岸鐵道とＮＹＫラインの時間表をいそがしさうに繰りだした。彼の指の間からは、燒いたラッキー・ストライキの煙が亂れながら、不安さうにのぼつてゐた。

——をはり——



兵匪

黒島傳治

1

支那、山東省の農民――と云へば、すぐ、打ちつゞく軍閥戰爭にすつかり荒らされて、疲弊しきつた農民のことを思ひ出すだらう。實際、彼等は、土匪や、飢饉や、軍閥の苛斂誅求に弱らされ通しである。だから、やつて來る軍隊を見つけると、井戸の釣瓶までかくしてしまふ。

掠奪、破壞、放火、殺傷など、平氣の皮でやつてのける荒くれた土匪あがりの兵タイも飢渇に一滴の水さえ得られないのには閉口した。

農民達は、誰れか一人が合圖をすると、まるで、電氣仕掛の機械のやうに、掠奪隊同然の軍隊の眼から、なんでも、金目のものは、かくしてしまつた。いきもの、豚や、牛もかくした。かくすのはうまかつた。村々を片つぱしからなめつくす蟻の群のやうな軍隊が、通つて行く。どこへ行つても、鷄卵一ツも、猫の仔一匹も見つからない。癪に障つて豚小屋を叩き毀す。が、鼠のやうな戰

財が溜りすぎてしまふと、やがて、どこからか、纏足の女房が驢馬の背にまたがり、その脇にくゝりつけられた籠の中では、子供が、うまさうに烤餅の破片をかぢりながら、土圍子をめぐらした村をさして歸つて來る。男は、驢馬と並んで歩いてくる。驢馬は、耳が長く、せいが低かつた。鞍の後方では、兩脚をくゝりつけられた鷄が、苦るしげに、羽翼をばたばた、はばたいて、うめいた。

そのあとからは、豚や、山羊の群れが棒を握つた青年に追はれ、アカシヤの葉や、雜草で、口をもぐもぐさしながら歸つてきた。

×××鐵道株式會社移民募集所。

募集所員は、七割の增俸だ。三原は、その募集所に勤務してゐた。

麻袋と肪じみた蒲團を肩にひつかけ、(これが、旅行道具だ)西瓜の種をかぢりながら、やつて來る若ものは、不潔な股ぐさりと、くんくん鼻をつく、大蒜の臭ひを發散してゐた。それは村を荒らされた農民だつた。掠奪に馴らされて而もそれを辛抱するのは、出來ない柔だ。

產米が運ばれて來る。產米檢査員は、俵の腹に、さしを突つこんで、合格不合格を決定する。賄賂を持つて來る者の米は、等外品をも合格と印を捺してしまふ、三原は、その檢査員のやうに、土と、垢と、韮くさい、鼻持ちのならぬ口臭のある支那人を二三のメンタルテストと身體檢査の後悉く合格と決定してしまつた。

「個。」一人のおづおづした、ためらひ勝ちの支那人が三原を見た。善良な意志の弱げな男だ。「わしは、これだけしかゼニを持つてゐねえんだが、これで撫順まで大丈夫でがすかな?」

三原は、その善良さに釣りこまれさうだつた。

「どれ、いくら持つてゐるんだい。見せて見ろ。」

「これだけでがす。」

支那人は、蝨のやうな臭ひがする汚れた麻袋を肩からはづして、その中からずつしりした銅子兒包みをひつぱり出した。一方の布片のはしでかたく、きりきりつとくゝつてある。さくさくした銅ばかりの音が、ひゞの切れた大きな手に觸れて、布片の

中でした。

「これでがす。」

「それ、みんなでいくらあるんだい？」

「はじめ一圓八十錢あつた。途中で、少々使つたから、も一度数えてみやせう。」

支那人は、募集所の板の間に、銅子兒包みを開きかけた。太い、ぶがんな指が、引ッくゝつた布片のはしを解かないうちに、三原は頸を振つた。

「いや、いゝ、いゝ、澤山だ。」そして彼は、傍のも一人の老人を見て、何事か薄笑ひを浮べて相談をした。支那人は、その間、一層無心な表情をして、麻袋を置いたまゝ土間に突ッ立つてゐた。「よし／＼、足らないところは、出して貰へるやうに取計らつてやる。」

「へい。」

「お前は撫順へ行きたいんだね？　撫順炭坑へ行つて稼ぎ度いんだね？」

募集所の老人は、彼の引つかゝる點で念を押した。

「へい。」

兵）——

李景平は、旅費を只で儲けたやうな氣がした。無性に嬉しかつた。さきに鞍山へ出稼に行つた同村の男からこの手をきいてゐたのだ。それが、うまく／＼と圖星にあたつた。日本の資本家は、金を出した者も、出さない者も、同じやうに目的地まで運んで行く。そして仕事に就かせる。

粟の饅頭とお茶が無料で渡される移民休憩所へ這入る前に、百姓達は、身體檢査と、所持品の檢査を受けた。彼等の麻袋の底に、過激なビラが這入つてやしないか？……そこには、ビラの代りに、家からついてきた南京虫がごそ／＼這つてゐた。

「よろしい、這入つてよろしい！」

苦力達は、休憩所のアンペラの上に集つた。さきに出發した者達が食ひ殘した西瓜の種殻がさら／＼してゐた。そこで休んだ。ところが、そこで、旅費を只儲けしたのは、李景平一人だけでないことが分つた。鞍山の男が知らしてきた手は、ほかの者達も、殆んどみんなが、殘らずそれを知つてゐた。

「なんで、あのこすい日本人が俺らに旅費まで呉れてよこすんだね？」小柄な、眼の細い一人はいぶかしがつた。

「總領館からくれるんだ。」

——（四

―「阿呆云ふな！」と、身體檢査のとき、一番ひまを喰つて、いろ〳〵なことを根掘り、葉堀り訊きたゞされた顏の歪んだ蒼い男が不意にむく〳〵と起きあがつて口を出した。「南滿鐵道が年々太つてるなあ、俺たち出稼人が年々押しかけて行つて稼いでやつてるからだぞ。誰れが只で路銀なんさ吳れてよこしたりするもんか！」

棒切れで腦天を毆りつけるやうな調子だつた。そして、その男は默りこんだ。

「でも、理たまを出すなあ、慈善協會だらう。」

「うむ、その慈善協會は、滿鐵の×××なんだ。××××、支那へ來て支那人を助け××××××××、俺らを働かして、自分はなんにもせず、××××××取つてかへつてゐるんだ。」

「ふむむ。」眼の紅い男は、感心して鼻から息を吐いた。

これは×××××。

これは、產米檢査員の賄賂の比ぢやなかつた。默つてすべてを通すのは理由があつた。

出稼ぎの移民達は、到るところで四等の待遇を受けた。貨物と一緒に豚も、毛布もない船室に追ひこまれる。船室が滿員で這入れない者は、甲板で、ぢかに潮風に吹きさらされて夜を明す。彼等は、大連に上陸して、それから貨車で滿州の奧地の仕事場へ這入つて行く。

2

泰山からのびてきた枯色の山は、所々、黑い案山子のやうな綠葉樹をのせて、のろ〳〵と、廣漠たる濕氣を含まない黃土の平原に腹ばつてゐた。その山に近く、彎曲した山並に、半ばは包まれたやうな位置に、顏山莊は、土で築き上げた土圍子をめぐらしてゐた。土圍子は、城壁の如く外敵を防ぐためである。

山と反對側の平原には、アカシヤや白楊の裸木が五六本づゝとび〳〵に並んでゐた。そこは耕作されず、荒れるがまゝに放任されてゐた。何回となく往復する馬車の車輪に深く掘りかへされた一本道が、その平原の眞中を三里溝に向つて突ツ走つてゐた。道は、風にあほられる土埃に煙つてゐる。

そこの村の者は、高粱も粟もなくなると、稗と稗殼を粉に碾き、それを、煎餅のやうに燒いて食つてゐた。稗がない者は、

楡樹の皮や落花生の皮を粉にして團子にしたり、粥に煮たりした。纔かに饑を忍んだ。高粱一分に野草九分をまぜ、それを食料としてゐる者は、いゝ方である。ひどい奴は、石を粉にして、高粱の粉をまぜ、烤餅に燒いて食つた。その石は、硬くもなければ、軟かくもなかつた。それは食土であるかもしれなかつた。——食へる石、それは不思議な石だつた。烤餅に燒かれた石は、ゴムの臭ひと、撒曹の甘味と、醋酸の酢味とを持つてゐた。恐らく、それは、滿腹の時に於ては、胸がむかついて、突き戻して來るものに相違ない。しかし、幾日も幾日も、水ばかりしか與へられない胃腑は、さういふゴムの臭ひや、撒曹の甘味にも雀躍した。彼等は、それを食つた。石は、連續的に消化器管を通過するうち、日を經るに從つて、その中で、糞のやうな結石となつた。腸管は、結石にその孔を塞がれた。

食土を食つた者は、苦惱の末、もがき死んだ。

樹皮や、野草を食つた者は、便秘に襲はれた。十五日間も、二十日間も、一同も便秘がない人間。さういふ人間も病氣にかかつた。何ものにも食慾がなくなつてしまつた。そして、それも死んだ。

むしろ、不軟不硬の石や、樹皮を食ふよりも、雲のやうに押しかけて來る蝗虫を捕つて、燒いて食つた人間の方がましだつた。蝗虫を食つた人間は、生命だけは助かつた。

支那服を着け、踵のない布製の支那靴をはき、テッペンに臍のある支那帽子を被つた三原は、さういふ村に出入をした。乾き切つた道で、彼は、はげしい土埃をあびた。支那服は、いくらひどい土埃でも、拂へばすぐ落ちてしまふやうに出來てゐた。日本服や洋服は、一度吸收した土埃を、きれいに、はたき出してしまふことがなか／＼困難だつた。殊に洋服の羅紗地は、吸收した土埃の色に生地が染つて、その織目は、飽滿するまでに貪慾に塵埃を食ひしめてゐた。——やはり、支那では、支那服が一番いゝように出來てゐるんだ！ 村々を歩きながら、三原は、自分の經驗でさういふことを考へた。たしかに、支那では、支那服が一番よかつた。それは、ホコリに對する防禦としてのみならず、同じ黄色の皮膚と、鼻のひくい、平べつたい、黑い瞳の顔を持つてゐる人種として、服裝さへ同一で、言葉がうまければ、××××××××××であることを見破られない、そのためにも都合がよかつた。それは、濰縣の

××××××、安價な勞働力を掻き集めに奔走してゐることを蔽ひかくすためにも都合がよかつた。

三原が這入つて行く村々には、平たい石の大きな臼の上に、地ならしのやうなロール樣の丸い石を置き、それを驢馬に引かして、廻し、製粉作業をやつてゐた。鞭を持つて驢馬を追ふ寒むげな子供は、白い甘根をかぢつてゐた。

「なんだい、うまさうにしがんでゐるんは？」

「甘根だよ。」

まだいくらか甘味が殘つてゐる甘根を吐き棄てるのは惜しいものゝやうに、その五歳か六歳の子供は歯で嚙みくだいた硬い根を、なほ嚙みしめながら、平たい鼻を、なほ平べつたくし、下顎を突き出して顔を歪めた。

「そんなものは毒だぞ。」

「甘くて、うまいよ。お前さんも取つといで。——日本人、銅子兒をくんろよ！」

子供は、大人よりも人を見ぬく眼が鋭かつた。支那人に化けることにかけては、自信がある三原は、ギクツとした。

「なんだ、日本人ぢやねえ。——俺れや、中國人。」

「嘘云つてら、日本×！」

「馬鹿！　中國人だ。默つてろい！」

三原は、一文の銅子兒を、五六間も向うの塵埃の道に放り投げた。子供たちは、三人が投げられたその一文の銅子兒をめがけて、競つて突進した。

彼が歩いた村、彼の宣傳を又聞きした村、傳單だけを送り屆けられ、それを見た村、それらの村の若者が、大連埠頭の碧山莊や、撫順や、鞍山へ出かけて行つた。

若者は饅頭を食ひ、生の大根や葱をかぢり、力が強く、どんな苦役にも堪へた。怪我をした傷には、泥をなすくつて置けば癒る強さがあつた。

——砂糖がなめられる生活。

——石油ランプをともすことの出來る生活。

——軽るい綿服が着られる生活。

——安心して稼ぎ、稼げば金がとれる生活。

これが、會社から命じられた彼の宣傳だつた。

支那人は、漁夫の釣針のさきの、蝦にまがへられた人造の餌を見て集る魚群のやうにこの宣傳の下に集つてきた。

だが、そこには、食つても、食つても、肉のついた食へる蝦はなかつた。

3

顔山庄の孫鳳珍の息子、孫景雲も出稼に出た若者のうちの一人だつた。

撫順炭坑の石炭掘りをやつてゐた。稼いだ金は、送つてよこす約束だつた。しかし、稼ぐだけで、金は、一文も送つてよこさなかつた。

そして、それから年が經つた。

軍閥戰爭は、毎年はげしく、頻ぱんに、繰りかへされてゐた。劉黒七の繩張り内にある土匪は、山寨のかげから、始終、こちらの村をうかゞつてゐた。一村を悉く燒打ちされたり、鏖殺されたりしないために、見す〳〵土匪に云ふがまゝの賦課金を納めてゐる村があつた。女房が綁票にかつさらつて行かれ、その代價に要求する金を、あらゆる手段をつくして借りられるだけ借り集め、それで、山寨から金と引換へに妻を貰ひ受けて來る首事があつた。地主や、金のある奴等は、こんな、物騷な村は棄てゝしまつた。そして、あぶなつけのない、賑やかな青島や、濟南に住んだ。

劉志隆の軍隊は、雪崩のやうに移動して行つた。村の土圍子は、その軍隊の行ゆかけの駄賃に砲坐も、附近の土壁も、突き崩されてしまつた。山羊はイーイー唸りながら、蹄で土塊を蹴つてそこから出入をした。そしてそこは、壊されたまゝ、いつまでも修繕されず、風雨に晒されてゐた。

又、年が經つた。十八歳になつたばかりの少年が新兵に招募せられた。招募係は、旗を持ち、ゲートルを卷いてゐた。少年は悄然として、身のまわりのものを麻袋になでこみ、招募係に連れられ、村を出て行つた。孫鳳珍の二番目の息子も、十七歳で、有無を云はせず引つぱつて行かれた。濟南の兵營に入れられた。張宗昌が、帝國主義の尻押しにいゝ氣になつて、どんどん部隊をふやしてゐたのだ。そして戰爭は繰りかへされた。はげしくなつた。二十五萬の大兵を養ふための農民からの苛斂誅求は、ます〳〵ひどくなつた。納税は、一年一回から、一年三回乃至、四回となつた。三年分の税金をさき取りした。兵餉錢や、軍糧馬糧を強制徴收した。

村の者は、困憊し疲弊した。

彼等の困憊、疲弊がはげしくなるに從つて、その困憊疲弊の原因をなしてゐる××××。——滿鐵の移民募集員は、もう訪れてきなくなつた。

支那人に化けた日本人が這入つてきた時、けげんな眼なざしで、何か損害を與へにやつて來た奴に對するやうな態度を取つて相手にしなかつた老爺が、却つて、旅費をよこし、道案内までしてくれる滿鐵社員の再度の來訪を待ちだした。

「こつちから、申込むちゆうことは出來ねえもんかな?」

孫鳳珍は、考へるともなく、そんなことを考へた。

「申込めば、あん畜生、弱味につけこんで、路銀をよこすめえ。」

滿鐵は、移民募集員をわざ〱よこす必要がなくなつたのだ。勿論、旅費の援助は中止された。それでも人々は、無償で軍隊に招募せられるよりは、出稼に行く方がいゝと考へた。旅費が取れなくてもいゝ、稼いて金を送つてよこす、それだけの賃銀はとれなくてもいゝ、それでも、滿洲へ渡つてしまふ方がましだと考へた。親は、一人前に育てた息子を無償で軍隊に取られるよりは、むしろ、幼いうちに、五元でも、八元でもいゝ、賣買人に賣り渡してしまふ方が、得だと考へた。

移民と出稼ぎは、今度は、大掛兒を着て、支那人らしく化けた男からすゝめられずして自發的に決行されるやうになつた。

そして、その結果、一九二二年には、二十萬四千三百九十九人だつた移民と出稼の人數が、五年後の一九二七年には、五十九萬六千五百四十五人となつた。

奉天軍閥を手のうちに握りこんで、××××××××××××××××、軍閥のばつこと、戰亂の連續によつて、自己の勢力範圍を廣く××××××××、避難民の滿洲への流入によつて、安價な勞働賃銀を底なしに引きさげる一石二鳥の利益を占めた。

4

金米糖草が枯れ、棘のある金米糖の實が道一面に乾燥して散つてゐた。山では甘栗が毬からはぢけて落ちた。枯葉が枝と一緒に風に吹きとばされた。十一月のはじめ、山東軍の敗殘兵が、自轉車にまたがつて蘇山莊へ流入つてきた。錢も飯も持つ

てゐない。軍服だけは着てゐる。金米糖の箱は、自轉車のタイヤーに鈴なりに突きさゝつた。丸腰の軍人は、時々、自轉車からひらりと飛びおりては、林切れを拾つて、その金米糖をかき落した。

「また徴發が來やがつたか!」

「いやいや、今度は、高粱も、粟も、只で徴發して行くんぢやないちゆうぞ。」庄長はふれてまわつた。「札を引換によこすちゆうだ。高粱五斗で紙幣三元。」

「うそぢやあるめえな?」

「いや、いや、今度は金をよこすんだ。」庄長は内所ごとのやうに聲をおとした。

丸腰の兵タイの腰のバンドには、劍の代りに赤い革の四角の鞄がぶらさがつてゐた。紙幣はその中につまつてゐた。まだ一度も使つたことがない手の切れるやうな紙幣である。これは珍しいことだ。

五斗で三元。それなら賣つてもよかつた。

以前の掠奪には實彈のつまつてゐる銃と劍を携へた荒くれた兵士をつれて、糧秣員は、家々へ踏みこんで來たものだ。鍵をかけた扉をこぜあけた。物置きの床板をひきめくつた。兵士は、あるものを、あるだけすつかりかつさらつて持つて行つた。今度は、賣りたい者だけが、勝手に北門外の車づけに穀物を持參しろといふ布令だ。一本の劍の暴力をも用ひなかつた。しかし、穀物は、掠奪の時の二倍にも集つてきた。徴發や、掠奪の經驗がある糧秣員は、村の者が、こんなに澤山の穀物を平生どこへはぜこんでかくしてゐるのか不思議に思つた。彼等は掠奪の時は、いつだつて遠慮會釋なく隅から隅までひつくりかへして眼につくものすべてをかつぱらふのだ。それでも、金をやる時ほど穀物は集らなかつた。百姓達は、亂暴な軍隊や、土匪の掠奪に對して、直ちに持つて逃げる譯に行かない穀物を貯へて苦勞するよりは、どこへでもかくせる金の方がどれだけ有難いか知れないのだ。

枯れた金米糖草に埋まつた北門外の荒地は、草は踏みつけられ、いろ〳〵さまざまな呼聲や、わめきや、罵聲が小盜市場の雜閙のやうに賑はつた。指に唾をつけて紙幣を數へる糧秣員は、鼻のさきに汗をかいた。

「一寸待つて!一寸待つて!」

百姓達は文字通り、穀物と引換へに紙幣を受取らうとあせつた。糧秣員はあぶなつかしげな聲を出した。

「一寸待つて！」

厚みのない、おづ〱した、恐怖に滿ちた聲だつた。紙幣を數へながら、彼は、この新しい紙幣の性質を思つて、ヒヤ〱した。また、馬鹿眞面目に、喧嘩腰になつて、それを受取ることを急ぐ百姓達の顏を見て、にや〱と薄笑ひを浮べたりした。

「この稗、八升あるんだが、こいつも買つて呉れるべ。」

ごた〱に寄り集つた人垣の間から、孫鳳珍は、一人の糧秣員の袖を引つぱつた。糧秣員は、紙幣を數へるのに夢中になつてゐた。

「八升だつて買つて呉れてよかんべ！」

「やかましい！ そこでごた〱やつてゐて、紙幣が足りなくなつてゐた日にや毆り殺すぞ！」

顏をあげると、丸腰の兵タイは、四角の赤い鞄を珍らしがつてゐる子供を呶鳴りちらした。その見幕がひどかつた。百姓達は、一時、默りこんで靜まつた。

「稗八升、買つて呉れてもよかんべい！」

「うるさい！」

「でも、買つて呉れるべいよ！」

せいの低い支那馬の尻をぴし〱しぶきあげて村に乘りつけてきた五臺の空車は、大きいのや、小さいのや、さまざまのふくらんだ麻袋を積んで山のやうになつた。穀物はあとからやつてきた。綿入れの木綿服の山東兵に守られた。兵士は銃を持つてゐた。馭者は、チョッ〱と舌を鳴らした。馬は、頭を振つて三里溝に向ふ一本道を蹄鐵で砂塵を蹴散らしながら引つかへした。五臺の荷車は、一列に列をなして、やがて行くと、黄色の乾燥しきつた曠野を馳せた。麻袋の山に腰をかけ、銃を片手にひん握つた兵士は、はねとばされさうに搖れながら、西の遠い山際に落ちる夕日のなかに次第に小さくなつて行つた。

村の者達は、その荷車と兵士を見送り、自分の掌に這入つた紙幣を數へ直して、一度も摑まれたことのないきれいな紙幣をパチ〱爪ではぢいてみたりした。

三日後、孫鳳珍は、驢馬の背にまたがつて三里溝に出た。驢馬には、兩脇に大きな條の籠がく〻りつけられてゐた。金を持

つて物を買ひに出たのである。糸や、油や、鹽など、必要品を買つて行くつもりだつた。彼は「開始吉日」と書かれた朱の紙を貼りつけた糸屋の前に立つた。聲の嗄れた、口から唾をとばす癖のある番頭は、彼のさし出した紙幣を見て、無遠慮に何事か呶鳴つた。

「お前さん、どうしたんだね？」

孫鳳珍は、どうして呶鳴るのか譯が分らなかつた。彼は、相手の機嫌をそこねないために、ニコ〳〵してゐた。

「どうしたも、かうしたもあるか！　おめえ、一體、こんな紙幣で物を買はうといふ了見だな！」

「あゝ、さうでがす。」

「馬鹿野郎！　こんな紙幣は、どこへ行つたつて通用しねえんだぜ！」

「どうしてゞがすか？」

「どうしてちゆうことがあるか！　こんな贋造の不換紙幣に物を渡してゐた日にや、こつちが、いくら品物があつたつて干上がつてしまふんだ。」

孫鳳珍は、まだ、糧秣委員から受取つた紙幣が贋造であると

は信じられなかつた。さういふことにある筈がなかつた。彼は、政府の糧秣官に穀物を賣つて、村中の者が、代價にそれを受取つたのだと話した。すると、一人の番頭ばかりでなく、店舗の奥から珍らしげにとび出してきた意地悪るげな少年と、三十からみの運搬係までが、げら〳〵をかしさうに笑ひ倒れだした。

「お前さんが、村の百姓は、大馬鹿揃ひだよ。お前さんたちをだまくらかしては、張大人が、濟南で妻を二十何人もかくまつて豪奢な生活をしてゐるんだ。お前さん達は、あのでぶ〳〵の大男に骨まですつかりしやぶられて居るんだぞ。それを知らねえんか！」

孫鳳珍は、ひどく打ちひしがれた氣持になつた。最後の八分の金まで渡して紙幣を取つた。それが全然通用しない贋造だ。彼は、自分たちの生存を呪ひたくなつた。どこへ訴へ出るところもなかつた。あのびく〳〵した、かたりの糧秣官は、どこへ行きやがつたんだらう。追つかけて行く譯にも行かない。彼等

は、十枚あまりの持つてゐるだけの紙幣を路上に叩きつけた。そして紙幣そのものが憎いかのやうに、泥足で踏みつけ、その上から小便をひつかけた。

そして彼は驢馬に乗つた。何も持たず、手ぶらだつた。紙幣は驢の脚もとで、泥にまみれ、小便にぬれて、そこへ太陽がチラツと反射してゐた。

驢馬は、短い脚で、危ッかしげに、ひよく／＼と歩きだした。やけくそだ！ 災厄がやつてくる時には、幸福であるべきことまでが禍となるものだ！ いま／＼しいのは、あの穀物を賣つてしまつたことだ。驢馬は、石のある道を半町ばかり進んだ。その時、ふと、彼は、自分の捨てた紙幣を誰れかが拾ふやうな氣がした。拾つて使用するやうな氣がした。と、捨てた紙幣が惜しくなつた。あとをふりかへると、一人の若者が、ぬれた札の方へ近づかうとしてゐた。

孫鳳珍は、何事か大聲に叫んで、慌てゝ驢馬の頭を廻わし、うしろへひつかへした。

紙幣はなほ、小便にぬれたまゝ落ちてゐた。太陽は、チラチラと小便に反射してゐた。

彼は、身輕るく驢馬からとびおりた。自分の小便に汚れた紙幣を指のさきで、そツと籐籠の中へつまみあげた。

十日ばかり經つた時分である。

招募でつれて行かれた次男は、行軍の途中から、陽にやけ、やつれて家へ歸つて來た。兵タイらしく荒つぽく變り、眼がぎよろりと光つてゐた。贋造紙幣を掴まされたことが話された。息子は、その紙幣を見せろと云つた。札は、小便が乾いて、皺がよつてゐた。息子はそれをいぢつた。おれは、給料が渡らなくつてキウ／＼してゐるから、こいつを買つておくと云ひだした。

「お前、それが使へるんかい？」親爺の言葉は、いくらかせきこんでゐた。

「うむ、俺れが使へば使へるんだ。」

「本當にそいつが使へるんかい？」

「うむ。」息子は頷いた。

「ぢや、半分でもいゝ、現大洋に換へて來て來れんか。」

「そいつは、出來ねえや。」息子は、卑屈げに笑つた。「俺れや兵タイだから、無理やりこいつを押しつけて物をかつぱらふんだ、それよれやほかに、こんな札、使ひ道はねえんだ。」

「チエッ！ くそッ！」

5

一度、味をしめた糧秣員は、麥の收穫が終つた頃、再び自轉車に乘り、四角の赤鞄をさげて北門へ現れてきた。砲坐の櫓に坐りこんだ保衞團の若者に、遠くの平原を三つの自轉車で走せてくる丸腰の兵士の姿が見えた。何だらうと思つた。すぐあの見覺えのある四角の鞄で、糧秣員であることが分つた。

「來た、來た！」

彼等は、待ちもうけてゐたものゝやうに嬉しげな自信に滿ちた色を見せた。

開け放たれた門前へは、二人の首事が迎へに出て、うや〱しげに頭を下げた。三人は、土囲子内へ導き入れられた。自轉車は、砲坐から這入つたすぐのところに立てかけた。首事は、三人を庄長の家へ案内して行く。

しばらくすると、砲坐の下の開き門は、何者かによつて、ぴしりと閉されてしまつた。そして、石を築きあげた塀と塀との細あひから、保衞團の若者がすり出てくると、三輛の立てかけられた自轉車をどこかへ押して行つてしまつた。

少時の後、土囲子の内部に、ウーンといふ地響きのやうなうめき聲がひゞき渡つた。

そして、なほ、それから少時の後、まだ生きてゐるまゝの顏色の三つの頸が、頸籠に入れられ、二人の若者が、それを棒に通してかつぎ、北門外へ運び出されてきた。籠の格子からは、血が、ポトリ〱と埃つぽい路面に落ちてゐた。それは、今さつき、首事に導かれて庄長の家へやつて行つた、あの三人の首だつた。

門外に出ると、若者は、無氣味げに髮を摑んで頸を頸籠から出し、頸枷の上に並べた。三つとも齒を喰ひしばり、恨むやうに顏面はヒン曲つてゐた。一つは、大きな眼を見開いて南方を睨めつけてゐた。

「やあ、見事な斬れッぷりだ。ひと太刀でぴしやりとやつちや

つたた！」

見物に集る人々は、かういふことを呟いた。

掠秣員を打ち首にしたのは、この顏山莊だけではなかつた。一度、贋せ札でだまされた清水衞でも、小店子でも、農民たちは、悉く、絞殺して、その首を門前に晒してゐた。蠅は、曠野のどこからか臭氣を嗅ぎつけて集つてきた。柵に流れた黑い血は、凝結して、顏は次第にへすばつて行つた。軍帽の型は、頭髮の上に環になつて、乾いて、かち〳〵になるまで、そのあとは殘つてゐた。

6

張大人は、自分の部下が農民に殺されて、それを默つて放つて置くやうな男ではなかつた。彼は、報復的に軍兵をさしむけて來た。

農民から穀物をだまし取り、而もそのだまし取られることに反抗した農民は、反抗した程度の何十倍かにやツつけられるのだ。支配者は、自分がさきにだまし取つたことは棚にあげて問題としなかつた。そして、たゞ、二三人が殺されたことばかりを問題とした。これは、どこの國に於ても行はれてゐる。壓迫せられる者たちは、ナサケナイくらゐちつぽけな反逆の企てが、もう、そのことのために、脚も腰も立たないやうに打ちのめされるのだ。

二千五百の軍兵がさしむけられてきた。まるきり匪徒の集りにすぎない、やくざな軍兵は、公然と村落の掠奪を許されたもののやうに、愉快な、面白半分の氣持になつて村へ這入りこんできた。

これは、軍隊と軍隊との戰爭とはちがつてゐる。武器を持つてゐるとは云へ、保衞團は、訓練がなつちやゐなかつた。二千五百の軍兵が、勝利を得るのは、さきからきまりきつた事實だつた。それだけに、兵隊は、本當の戰場で經驗する不愉快な恐怖心に襲はれることがいらなかつた。のび〳〵と勝手放題な掠奪や、破壞や、凌辱をほしいまゝにすることが出來た。——給料をやらない代償として、張宗昌は、時々かういふ特典を部下に與へるのを常套手段としてゐるのだ。

眞先に、清水衞と、小店子がめちや〳〵に荒されてしまつた。そして、それから軍兵は、顏山莊へ押しかけて來た。夕方

だつた。

閘上城の紅槍會へ這入つてゐたずんぐりした、腕に瘤のある梁志均は、軍兵に立ちむかふために、十三人の若者と一緒に、頭に「オタマ杓子」をグル／＼卷きつけ、兩肌をぬぎ、柄の長い朱房づきの槍をひつ提げて門外に出た。彼等は、赤いはゞ廣の帶をしめ、赤いよだれかけのやうな胸あてをかけてゐた。梁が大地に跪いて呪文を唱へ始めると、ほかの者もそれにならつてぺたりと地に手をつき、頭をさげた。そして懐中から取り出した黄紙を焼き、それを口に入れて呑み下した。そのまじなひによつて彼等は、銃彈も肉體を避けると信じてゐた。青龍刀も、劍も彼等を斬ることが出來ないと信じてゐた。——支那では、こんな紅槍會がはやつてゐる。

保衞團の若者は、土壁內の掩護物のかげや、砲座の柵の中から銃をかまへ、近づいてくる軍兵を射撃しようと用意してゐた。

「梁志均！　そんな阿呆くさいことよせやい！」

若者の一人は、砲座の窓から嗄れ聲で叫んだ。

軍兵は、にこ／＼笑ひながら、冗談のやうに砲塞に近づいて來た。相かはらず、大地に跪いて微動だもせず、呪文を唱へつづけてゐる梁志均は、默しこんで返事をしなかつた。

「おい、やめろ！　だての黄紙や、紅い布ツきれが何で彈丸よけになるかい！」

破れ服の、ごろつきの集りのやうな軍兵は、ます／＼近づいてきた。梁志均は急に立ちあがつた。

「かゝれツ！」と、彼は、一聲叫んだ。

十三人は、朱の房がついた槍を手に取りなほして立ち上つた。

「吽！　吭！」

彼等は、一歩一歩、土を踏みしめ、口の中で唸りながら前進した。

軍兵と、土壁內の保衞團の若者との射撃は、もうはげしく交はされてゐた。軍兵の攻撃は、砲塞に向つて集中してきた。彈丸は、若者が砲塞內に居たたまらないくらゐ密集して降り注ぎだした。

二十分の後、三人の若者が壁の上に倒されてゐた。北門は既に陷落してゐた。軍兵は、われさきに村落へ押し入らうとあせつ

て、悉く門をめがけて殺到した。村落内の財寶や、女や、酒が、彼等の蠻勇を鼓舞するのは明かだつた。

朱房の槍を携へた十三人は、見る見るのうちに、半数は、銃彈のために撃ち倒されてしまつた。ほかの者は、それでも、鐵砲も劍も彼等の肉體を傷つけることが出來ない確信に滿ちた態度で、悠然と、熊のやうに軍兵に立ちむかつてゐた。まもなく、又、三人が倒された。銃彈は、あのお呪の赤いよだれかけを無雜作に突き通して、胸を貫いた。

一番最後まで砲坐の槍に踏みとゞまつてゐた保衛團の若者は、引つかへせといふ命令もきかず、しまひには、梁志均が一人きりになつて、まだ悠然と劍を持つてかまへてゐるのを見た。

梁は軍兵に取りかこまれた。そして背後から、袈裟がけに青龍刀で斬りおろされた。血潮が高く二三間も軍兵の頭上へ吹きあがつた。

「馬鹿な奴だ！　あんなオタマ杓子がなんになるか！」若者は砲坐からおりた。

梁志均は、斬られても、なほ、少時、棒立ちになつてゐた。が、やがて、ばたりと倒れた。その彈丸も通さず、劍も斬れないと信じてゐた肉體は、兵士の泥靴に踏にじられた。

谷には、波形の雲がかゝつてゐた。暗くなつた。石を敷いた道は見えなくなつた。しかし、どのあたりで石が突出し、どのあたりには、淺い溝があるか、村の者は足ごゝろで知つてゐた。

彼等は、南門から背後の山へ這ひあがつた。小屋から出された豚と山羊は、尻を鞭で根限りひつぱたかれた。纏足の女房は、石の多い山の道を、殆んど四ツ這ひに這ふやうにして、よぢ登つた。孫鳳珍は、持てるだけの金目のものを二ツの袋に入れ、一ツは肩にかつぎ、一ツは手に提げて息を切らした。晩だつた。行くさきはたゞ突出した岩や、によき〳〵一本づゝ立ちあがつてゐる松が曲つた谷にすかして見えるばかりだ。山の下をふりかへると、村に這入りこんだ軍兵の陽氣に騒ぐ聲が手に取るやうに聞えてきた。

「早く行け！　おい早く行け！」

あとの者は、さきの者をせきたてた。

しかし、さきの者は、掠奪せられ、破壊せられる自分の村を、暗くて見えないにもかゝはらず、ぢいつと見入つてゐた。

時に、一方で火花が光つたかと思ふと、鐵砲の音がした。と、山羊と豚は、その鐵砲の響きにびくツとして山の中をむやみにはねまわつた。又、人々は這ひ上りだした。暫らく行つた。その時、

「おや、火をつけやがつた！」

誰れかの驚愕した聲に思はず人々は、ギヨツとして立ち止り、うしろを振りかへつた。土壁内の一角から火柱が立ちあがつてゐた。眞暗で、匪兵の騷ぎのみが聞えてゐた村は急に明るくなつてゐた。パチ〳〵燃え、板が焦げ、物が破裂する音響がやつてきた。火の粉が飛び散る。土壁や、火事場の周圍の家は紅くなつて見えた。匪兵は、燃える家の傍でさわ〳〵うごめいてゐた。それが山から見えた。誰れも消しとめてゐる者はなかつた。火は、ます〳〵大きくなつてきた。そして、そのあかるみで村中の家が、端の方まで見分けられた。火柱は、彼等が立つてゐる山と同じ高さにまで立ちあがつた。灰と、紙の燃えた火の粉と、藁やゴムの焦げる臭ひが、風に運ばれてやつてきた。

自分の家が燃えてゐることを認めた女は、肩の臓袋を投げ出して、あたりかまはず聲をあげて泣きだした。二人も三人も泣きだした。

「泣くでない、泣くでない！ いくら泣いたつて燃えだしたものが消えはせん。」

孫鳳珍は潤み聲でたしなめた。彼自身も、闇の中に燃える家を見ると、何故か恐怖に襲はれて身慄ひした。

火は、一時、弱まつたかと思ふと、その隣の家へ燃え移つてゐた。そして更に、寸時の後、一層はげしい勢ひで炎々と燃え上りだした。

「くそツ！ これぢや、俺れンちも燒けずにやゐねえぞ！」

山の上から、ドカ〳〵と多くの足音がして、何者かゞこちらへ近づいてきた。人々は豫期しなかつた。兩方から軍兵が挾みうちに來たやうな氣がして、ドキリと振りかへつた。火事のあかるみで、山にゐる人間まで、ほんのりと顏が見えた。清水衞の者だつた。彼等も、軍兵を避けて山へ逃げあがつてゐたのだ。

「呀！　お主等の村は焼討ちされてゐるな！——これぢや、だいぶ澤山、糧秣員をしめちやつたんだらう。」
「澤山どころか、たつた三人だ。」
「俺れの方は、五人、いはしちやつた。」
「あの畜生め！　どんなにして呉れたつて、やりかへし足りることたねえ。今に見ろ！」

7

孫鳳珍は、たうとう、郷土に見切りをつけてしまつた。
舊暦の三月になつて彼は村を出た。一族、八人の者が彼のあとについてきた。撫順に出稼ぎして、一文の金も送つてはよこさない長男が、今は、唯一の頼りだつた。彼等は、馬車にも、驢馬にも乗らず、（そんなものは賣つてしまつた。）平原のほこりつぽい一本道を三里溝まで歩行した。
連日の軍隊の移動が始まつてゐた。鍋や、釜や、ランプや、雨傘などを携へた行軍部隊が通過した。軍隊の移動は、時化の前に雲が飛ぶのと同じである。蔣介石の北伐軍が北上しつゝあつた。奉天派は、それに備へて軍兵の配置をした。
三里溝に向ふ途中、孫鳳珍は、銃を持たない兵士のまじつた山東軍の二個大隊が、泰安への道を強行軍してゐるのに遭遇した。銃を持たずにどうして戰爭をするのだらう。いづれの兵士も肩からはすかひに、辨當風呂敷のやうな土嚢を脊負ひ、土のやうに黒い、沈んだ顔色をしてゐた。眼だけは、不穏に光つてゐた。兵士は、一人一人が、その眼で孫鳳珍の一行を鋭く睨んで、次の瞬間には、二歩か三歩行きすぎてゐた。一人が過ぎると、又、次の列の兵士が光つた眼で接近してくる。土匪が荒れ狂ふ時のやうな眼をしてゐた。孫鳳珍は、思はず、懐にかさばつてゐる金を手で押へた。兵士は、彼に何となく恐怖と不安を與へるのだつた。
二つの部隊が行きすぎると、又、五町ばかり向うに別の部隊が見え、まもなく、馳けだすやうに迫つてきた。先頭の部隊長の馬は、頭を高く立て、細長い脚をはねあげてゐた。纏足の女房は、なか〳〵歩くのに手まどつた。
「おーい、馬車屋！　乗つけて呉れねえか。」
孫鳳珍は、ます〳〵不安と焦々しさを感じながら、あとから追ひついて通りかゝつた空の荷馬車を呼んだ。

「金を呉れれば乗せてやるよ。」馬車屋は、につこりともせず、冷淡に答へた。

「いくらだい？」

「五十錢。」

「二十錢で澤山だ。」

「お前さん、八人も乗せちや、驢馬だつて腹がへるんだぞ。それツぽちぢや駄目だ。」

「ちえい！　ぢや、もう十錢、はりこんでやらう。」

馬車に乗ると、彼は鞭を振つて馬を馳らせた。軍兵は、こんな時でも、何をしでかすかしれやしないのだ。彼の注意は、しよつちう屋敷と畑を賣つて作つた懐中の路銀にからみついてゐた。軍隊の移動と戰爭。それで一番困らされるのは住民だ。今度は、米國から金を貰つた蔣介石が、南方から山東軍を追ひつめてゐた。張宗昌の軍兵は、最後の掠奪をやりつゝ逃げてゐるといふ話だ。三里溝へ着くと、孫鳳珍は山東軍が、あまりに負けるので××××××噂をきいた。すると、戰爭は、前と北の戰爭でなく、××××××戰爭ぢやないか！　そして、彼等を匪賊の隊へ抛りこむのも、支那の軍閥でなく、外國の奴等と奴等だ。

彼は、一時間も早く、こんなところから逃げ出してしまひたいと思つた。馬車からおりた。彼は、財布を出して馬車賃を拂つた。發行銀行によつて色や模様まで違ふ様々の紙幣を、新しいきれいなやつは殘し、皺くちやになり、ボロ〳〵になつた十錢札を選つて馬車屋に與へようと、あらためてみた。

「そいつが路銀だな。そいつを持つて滿洲へ行くんだな。」馬車屋は財布をのぞきこんだ。

「あゝ、畑も屋敷もまるで賣り拂つて、たつた五十八元。旅費が、かつ〳〵だ。」

「ふむ。――だが、その札ぢや、お前さん、滿洲へ行つちや紙屑同然で通らねえぞ。」馬車屋は若干冷笑氣味に笑つた。

「何だつて――！」孫鳳珍は愕然とした。「こいつが通らねえ？　貴樣！　そんなことがあつてたまるかい！　こいつが通らねえ？　そんなことがあつてたまるかい！」

馬車屋は、その紙幣は、山東地方では通るが、滿洲へ行くと通らない。その證據には、どの紙幣にも、その下の端に一寸

「南」と書いてある。それは、濟南附近だけで通るのだと繰りかへした。

「ええ！　畜生！　又、又、摑まされちやつた！」孫鳳珍は口惜しがつて、ばたばた足踏みをした。今度こそ、以前の糧秣員の手を喰はないやうに、饅頭子の老人に十分ダメを押して金を受取つたのだ。それが又、通らないとは！　彼は、いくら大地を踏みつけても足らなかつた。

「お主は知らねえんだ。くそッ！　俺れや停車場へ行つて、もつとよく事の分る人間に訊ねてみる。この紙幣が通らなくッてどうするんだい！　やい！」

孫鳳珍は、腹立ちまぎれに、馬車屋に唾を吐きかけるやうに呶鳴つて、街を歩きだした。

どこへ行つて訊ねても、駄目なものはやはり駄目だつた。

彼は、仕方なく、三男の孫芳烈に大洋票を持たして顏山庄へかへり、銀に換へ、あとから急いで追つかけて來るやうに云ひつけた。ほかの老婆や、娘や、子供達七人は、青島までの切符を買つた。汽車は輕便鐵路だつた。石炭ばかりを積んでゐた。人間は、その眞黑の貨車の上にアンペラを敷いて坐つた。博山へ行くと客車がある。博山から膠濟鐵路の本線に出て、そこから青島へ行くのだ。いろいろさまざまな避難民が停車場ごとに這入つてきた。腐つたやうな色の袋に、張り裂けるくらゐ、何かを詰めこみ、人間の力で持ち得る最大限度に持つてゐた。

日暮れ方、青島に着いた。露天に柵だけがめぐらされた移民休憩所。廣い、廣い。膠州灣の潮風がそこへ吹きつける。移民達は、その鐵條網をめぐらした柵の中に、まるで俘虜のやうに、いつぱい押しこめられてゐた。何人ゐるだらう。千二百人。

孫鳳珍は、その收容所の入口で、茫然と立ちつくしてゐた。

——一體これだけの人間が、滿洲へ渡つて行く場所があるだらうか？　こんなに押しかけては、賃銀は只のやうにさがつてしまふだらう！

8

大洋票を銀に換へるのは、案外すらすらと運んでしまつた。

孫芳烈は馬車を雇つて三里溝へ乘りつけた。戰爭のため、汽車は出なくなつてゐた。博山まで馬車をフンパツした。ところが汽車は、博山からも、もう出なくなつてゐた。昨日やつてきたカーキ服が汽車を悉く占領してしまつたのだ。カーキ服はいきなり炭坑を占領して、自分だけ汽車に乘つて沿線を警戒してゐた。

孫芳烈は、親爺が青島で待ちかねてゐることと思つていらいらした。

彼は、又、馬車を雇つた。行けるところまで、馬車ででも行かなければならなかつた。ばねの無い、肥料運搬の荷馬車だつた。馭者は三頭の驢馬を結びつけた。毎日尻をひつぱたかれる驢馬は、鞭のあたるところだけ毛が拔け落ちて禿になつてゐた。晴天つゞきに、道は土ほこりのぬかるみだつた。黄色のメリケン粉のやうな土ほこりは、道路一面に一尺五寸も二尺もの厚さで滿ちてゐた。驢馬は、その土ほこりを蹴つて行く。轍は、土ほこりに沒した。そして荷馬車は、道の凹凸に從つて孫芳烈をはね落すばかりに激しく動搖した。

二時間ばかり行くと博山の街は、遠くの平原の中に沒して、たゞ炭坑のケージの櫓だけがアカシヤの並木の間から見えた。遠く右の方に土圍子をめぐらした村落が見え、山羊の群がのんきげに徘徊してゐた。人かげは見えなかつた。そして四方は、六七本づゝ並んでゐるアカシヤや、白楊や、高低のある黄土の畠ばかりだつた。馬車は、人間が歩行する程にしか進まなかつた。一時間ほどすると松のある丘に近づいてきた。左手の後方から四五人の軍兵らしい者が畠ごしに馳せてゐた。孫芳烈は、不安げに、その軍兵を注視してゐた。馬車が黄土のもれあがつた斷層をすれかはると、四五人のほかに、なほ、百五十人ばかりが目についた。飛び立つ鳥のやうに、こちらをめがけて馳せてゐた。

「おやツ！」孫芳烈は驚愕の叫びを發した。

「早くやつて呉れ！ おい、早く馬を走らしてくれよ！」彼は馭者に云つた。「全速力を出して呉れ！」

それは、何をやるか分らない敗兵にちがひなかつた。馭者は、驢馬の尻がちぎれる程、鞭を振りあげつゞけた。馬車は搖れた。驢馬は、土ほこりを蹴つた。敗兵は、こちらを目がけて次第に近づいてきた。

「早くやれよ！」

「なに、かまふことはねえ。やつて來たら、こいつで撃ち殺しなせえ。」馭介は、ポケットから拳銃を出して孫芳烈によこした。

驢馬は、汗が出る程追ひまくられた。しかし、敗兵と馬車との距離は次第に近くなつた。兵匪に特有な顔つきや、鬚のある眼が、もう見分けられだした。泥棒のやうな、その顔と眼を緊張さして、眞先の四五人が、馬車をめがけて追つてきた。

孫芳烈は、拳銃を取り上げた。追つて來る敗兵をめがけて引鐵をひいた。引鐵は、がちッと音がした。が、それきりで彈丸は發射しなかつた。も一度引鐵を引いた。又、がちッと音がしたきりだつた。

敗兵は、猛獸のやうになつて、たうとう荷馬車にとびついてきた。一人が、とび乘ると、つゞいて四五人がとび乘つてきた。

「兄やん！」

孫芳烈は、ふと、兄が兵タイに取られてゐることを思ひ出して、兄を呼んだ。しかし敗兵は、そんなことにはかまはず、この青年を裸にひきむいてしまつた。大洋銀とピストルが奪はれた。

「兄やアン！」

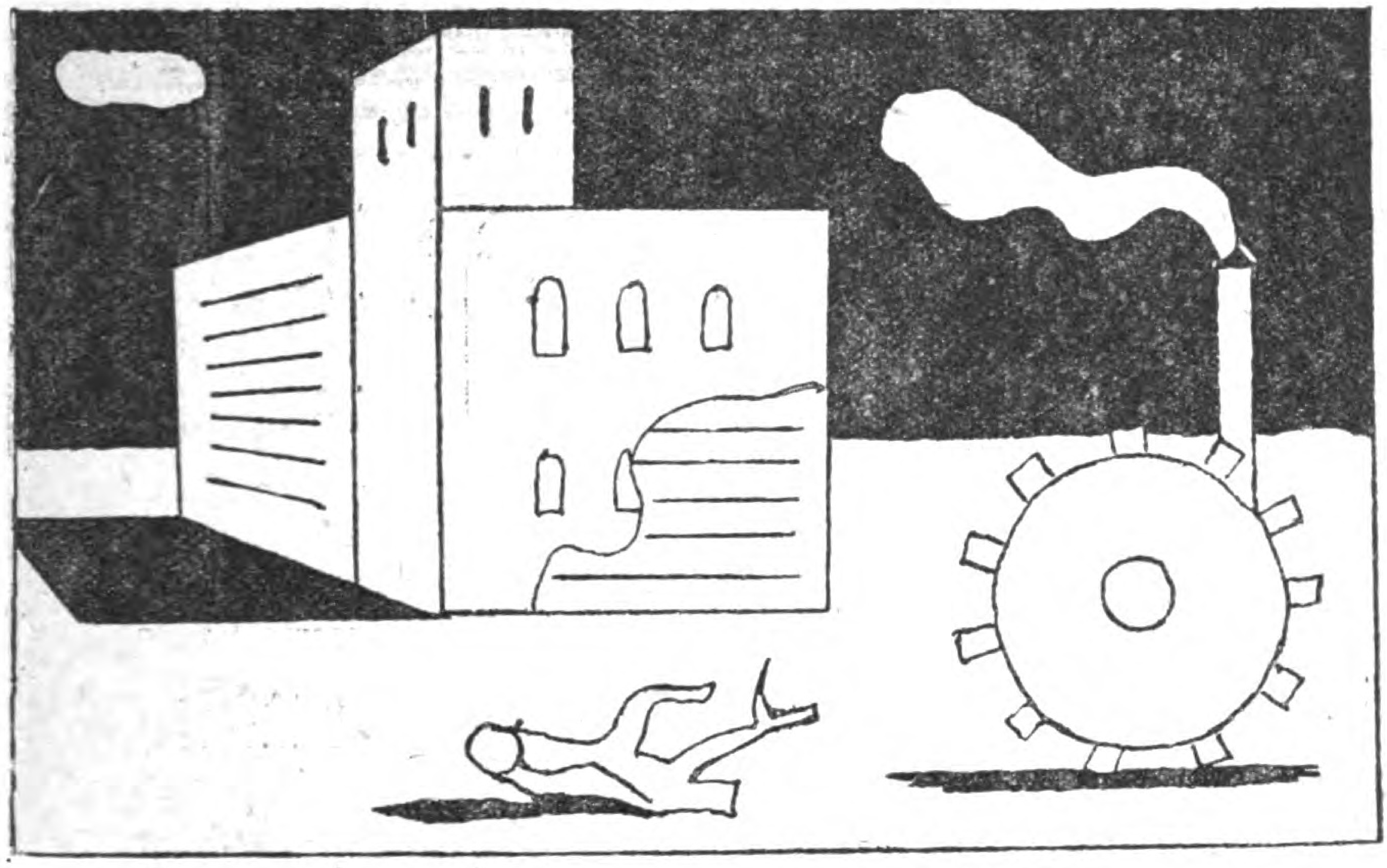
孫芳烈は、なほも、救助を求めるやうに兄を呼んでゐた。……

……

「俺れら、もう五ケ月も給料を貰つちやゐねえのに、こいつはいゝ、給料の代りだ！　うめえ！　うめえ！」

大洋銀は、集つてきた兵匪どもに奪ひ取りがちをされて、瞬くひまになくなつてしまつた。

（十一月八日）



花嫁の憂鬱

落合三郎

一

同僚の者から、

「おい、結婚式はまだなのかい？」

といはれるたびに、法學士都曲平太郎君は、てれた苦笑で返事をごまかした。

「署長になつたら嫁にやる。」といふのが、夏子の親爺の口癖であつた。

「署長になつたら結婚する。」といふのが、都曲平太郎君の口癖であつた。

内閣の更迭は、夏子の父親である代議士灰野椋十氏を××省の參與官にした。

警視總監の首がすげかへられた。警察官の大異動が行なはれた。

警視廳の〇〇課に勤務してゐた警部都曲平太郎君は、廳内の先輩を飛び越し

で、警視に昇進し、S署の署長に任命された。

　だから、

「結婚式はまだなのかい？」

と訊く同僚達のひやかし半分岡焼き半分の言葉の中には、都曲君の破格な昇進に對する、ねたみ、そねみも含まれてゐたのである。

　しかし、高等文官試驗を十五年も前にパスし、上の子供が、ぼつ／＼中學を卒業しようといふ程だのに、いまだに、警視にもなれず、奏任七級かなんかで、職員錄の端つこへ辛うじて六號活字の名前を淋しく載せて貰つてゐるやうな「先輩」達の口惜しさがどうであらうと、新築のS署の官舍に移轉して來た都曲君は、はなはだ幸福だつたのである。學生時代から「狙ひ」をつけてゐた同郷の先輩次野氏の令孃夏子を、愈々、妻として貰ひ受ける時期が到來したからだ。

　署長に就任してから、二ケ月ばかりさきの方に、「黄道吉日」があるのを、夏子の母親が、伊勢大神宮の暦をたんねんに調べて發見した。

「日が吉いの凶いのつて、そんなこと迷信だわ。兩方の準備さへ出來れば、いつだつていゝぢやないの。」

　東京の女學校を出て、ピアノと琴と兩方を習はされてゐる夏子は、母親の前に、「新時代」であることを誇らうとして、却つて母親から一喝された。

「馬鹿おつしやい！　一生の大事ですよ。」

　或る夕方、ぺた金の肩章新しい警視の制服を着たまゝ、都曲君は次野家を訪れた

「あら、いゝところへ來て下すつたのね。」

　夏子がにこやかに、彼を迎へて呉れた。

「今晩、御ひまですの？」

「えゝ今晩はひまです。」

　そこで夏子は、都曲君を、その晩開かれることになつてゐた同窓會主催の音樂會へ誘つた。都曲君は、これまでにも、夏子の「藝術的趣味」に歩調を合はせようとして、かなり苦心を拂つて來てゐたのである。警察官などゝいふものは、高尚な趣味を解せぬ朴念人だ——といふ風に、夏子から思はれることが怖かつたし、都曲君自ら、警察界の「新人」を以つて自任してゐ

たのであつたから。

「でも、その服のまゝではをかしくありませんか？」

夏子は都曲君の服裝とサーベルを見ながらいつた。尤もだ、と都曲君もさう思つた。警察署長の制服を着たまゝ、戀人を連れて音樂會へ出掛ける奴もゐなからう……で、彼は一旦官舍へ歸つて和服と着替へて來ることにした。

署のすぐ裏にある官舍へ歸ると、署長代理の警部と高等主任とが彼を待つてゐた。

「署長、T・Y紡績が愈々やりますよ。」

「爭議かね？」

「明朝から一齊に罷業にはいるらしいんです。××××××を、今夜のうちに引つこぬいて了ふ手配はして置きましたが……」

「さうか、どし／＼引つ張つて吳れ給へ！」

都曲君は、陰鬱な、ひどく不機嫌な顏で命令した。折角久し振りで、一晩ゆつくり夏子と樂しむ積りでゐたのを――といつて、就任匆々「君達でいゝやうにやつて吳れ給へ、僕は今夜は、許嫁者との約束があるから」ともいへなかつた。

都曲君は夏子に電話をかけた。

「折角御約束しましたのに、急に、手を離すことの出來ない突發事件が起きたものですから……」

「あら！　突發事件つてなあに？　強盜？　人殺し？……」

電話機の前で、興味深相に眼をくる／＼させてゐるらしい夏子の顏を、都曲君は思ひ浮べた。

「いや、さうぢやないんですが、もつと大事なことです。こゝ四五日、殘念ですが、お會ひすることが出來ないかも知れません。」

爭議は四五日で解決する――とさう都曲君は思つたのである。

「さう……で、今夜はどうしても駄目なんですの？」

「殘念ですが、どうにもならないんです。」

「つまんないわね……」

「これも職務です！」

都曲君は、最後の言葉を、上官の前で、獻身を誓ふ時のやうな、殆んど悲壯な氣持ちできつぱり云ひ切つた。

都曲君が就任して來るほんの暫く前にも、T・Y紡績には爭議があつた。が、その爭議は、×××の幹部と、重役と、警察との間で樂に「解決」がついて了つたのだ。

いきさつは斯うだ。

Y・T紡績S工場には、七百人の女工と、三百人の男工とが働いてゐた。そしてこの工場には、×××に加盟してゐる組合が一つあるきりだつた。おまけに、その組合に加入してゐる職工は、たつた二十五人――それも、殆んど役付き職工ばかりであつた。一九二八年四月十日以後、本當に××××左翼の勞働組合は「表面から」姿を消してゐた。

資本家の爲めの、世界的な産業合理化が初まつた。T・Y紡績S工場でもそれをやり出した。百三十人の男工と、二十人の女工と、合計百五十人の職工が、一度に首を切られた。

一般に、馴れた資本家は、職工の騷ぎを抑へる爲に、一度に引つくるめて、大量馘首をやるやうなことをしない。三人――五人――四人――十人――といふ風に、それも、職場と時間とを變へて、目立たぬやうに、ぽつり／＼と首を切つてゆく。

だが、S工場では、百五十人を一度に馘首した。資本家が「馴れて」ゐなかつたのか？　否、T・Y紡績の重役共は、馴れ切つてゐたのだ。さういふことには馴れ切つてゐて、職工達を馬鹿にしてゐたのだ。なぜなら、T・Y紡績S工場には、自分達の代理店である×××の組合だけしか出來てゐなかつたし、おまけにその組合に加入してゐる者も僅か二十五人に過ぎなかつたから、どんなに職工を踏みつけにしても、騷ぐ氣遣ひはなかつたのだ。それに、萬一騷いだにした所で、その結果は、必ず、×××の幹部達が、自分達資本家に有利なやうに「取引き」して吳れるに極つてゐたのだ。

果して、百五十人の大量馘首は、資本家側の目算通りな結末になつた。

最初、馘首のことが分ると、×××の幹部達は、この際に、S工場へ左翼の勢力が伸びて來やしないかをひどく怖れて、何よりも先づ、馘首された連中を自分達で丸め込んで了ふことを企んだ。爭議ブローカーの引率する一隊が、S工場の通用門と裏門を固めた。そして、首を切られて出て來た百五十人の勞働者を、豫め借りて置いた附近の寄席へ連れ込んで、いんちきな「爭議團」を編成した。

百五十人の被馘首者をも含めて、T・Y紡績S工場全從業員の名による数ケ條の「要求書」が、×××幹部の手から重役の手へ渡された。それから、協調會館會議室と、S警察の署長室で。×××幹部とT・Y紡績重役との「會議」が數回行なはれた。平和な協商が遂げられた。買はふ、賣らうの、双方の胸算用が一致した時、彼等は手を打つた。そしてこの爭議は、見事に「解決」した。

が、馘首された百五十人とその家族が、明日から失業と饑餓の袋小路に追ひつめられること、及び、殘つた七百人の女工と百五十人の男工が、前以上に劣惡な勞働條件で働かせられ、いつ何時、首を切られるかも分らぬといふ不安は、微塵も解決されてゐなかつた。

職工達は、×××幹部のやり方に不平であつた。×××といふものが、自分達勞働者の爲の組合ではないといふことが、誰からも云はれないではつきり分つた。不平は憤激に變つていつた。自分達の手で、もう一度「解決」のやり直しをやらうといふ聲が高まり、S工場全體に漲り渡つた。

「組合同盟」のビラや、「全協」のビラが、どこからか舞ひ込まれた。兩方のビラは、一寸見ると似てゐるやうで、よく讀むと違つてゐた。が、職工達は、そんな違ひなど別に問題にしたかつた。何だつていゝ、兎に角、×××幹部のやつたやうな、あんなべら棒な「解決」つてあるものか!……

管内に、多くの工場と私娼窟とを持つてゐるS署の署長に拔擢されて來た法學士都曲平太郎君は、爭議や私娼窟の取締りに對して、絶大な抱負を抱いてゐた。

「徒らに勞働者側を壓迫するのはよくない。資本家にも隨分ひどいのがゐる。だから、勞働者側の要求が正常である場合には、寧ろ資本家側を説いて、その正常な要求を容れさせるやうに盡力してやるのが當然だ。それでこそ、嚴格公平な警察官としての職責を全うすることが出來るのだ。」

と、これが彼の抱負であり「信念」であつた。そして、かういふ「信念」を以て臨む以上、S署管内の工場當局側からは嫌はれることがあつても、勞働者側からは、寧ろ反對に、「理解のある」「話の分つた」署長だといふので、歡迎され、讃美されるやうになるであらう……

都曲平太郎君は、署長室の、紺の羅紗を張つた大テーブルを前にして、ぼんやり窓の外を眺めながら、自分の抱負が、遂次實現されて行く時の快感を空想し續けた。

その空想の中には、必ず、花嫁夏子の笑顔があつた。

「僕が署長になつてから、まだ半年にもならないのに、管内の勞働者の氣風が一變して了つたよ。」

かういつて、愛女房の前に、自分の「新人ぶり」を誇る得意な姿が浮んで來るのであつた。で彼は、夏子の母親が、伊勢大神宮の暦の中から選び出した「黄道吉日」をしきりに待ち遠しがつてゐたのだ。

その「黄道吉日」が、後一週間餘のところへ迫つて來た時、T・Y紡績S工場の爭議が再發したのだ。

「勞働者側の要求が正當である場合は……」といふ前提の下に、爭議取締りに關する新方針を胸に秘めてゐた都曲署長は、高等主任の報告を聞くと、「××××××××××！」と命令したのである。そして、勞働者側の×××、「××」であるか「××」であるかを、敢て××しようとはしなかつたのである。

「新人」都曲署長も、やはり他××××と同じく、一般勞働爭議などゝいふものは、二三の「不良分子」が煽動するから起ることで、そいつらを引つ張つて了つたら、一般の勞働者は、大抵、をとなしくなるものであると思つてゐた。だから、S工場に罷業の形勢があるといはれた時、××××××××××××××××××、さてそれから、ゆつくり、勞働者側の×××「××」であるかどうかを××しようと思つたのである。

ところが、都曲署長を面喰はせたことに、夜中、自分達の仲間の重立つたものが、數名檢束されたことを知つたT・Y紡績S工場の職工達は、をとなしくなるどころか、逆に、ひどくいきり立つて、一齊に罷業に入つたばかりか、寄宿舍を脫出した女工の大部分と男工とが隊伍を組んで、示威行列をやり出したのである。

「××へ押しかけろ！」

「××××××！」

女工の方が、男工よりも元氣がよかつた。

主任の命を受けて、工場の内外を監視してゐた私服の高等係

は手の下しやうがなかつた。こんなに、いきなりデモになるとは豫測してゐなかつたので、僅かばかり警戒に派遣されてゐた×××××、それでも、制服の顎紐の手前、大いに職務忠實振りを發揮しようとして、却つて女工達から胴上げされ、×××××××××××。

若い都曲署長は、物も云へない程、眞赤になつて憤つた。隣接のK署、H署へ應援依賴の電話をかけさして置いて、顎紐をかけながら、デモを蹴散らしに出掛けていつた。

その日、S署の演武場は、髮を亂し、泥だらけになり、めちやくちやに×××××××、そこらぢゆう××だらけになつた男女の職工達で、ぎつしり一杯になつた。

デモと亂鬪の異常な昂奮から出發したS工場の爭議は、都曲署長の目算にも拘らず、四五日どころか、一週間經つても十日經つてもをさまりがつき相になかつた。

工場主側は頑として一歩も引かなかつた。

爭議團の方も腰が強かつた。

都曲署長は、連日、部下の報告を聽いたり、本廳の特高課や勞働課と打ち合はせをするだけで時間が一杯であつた。夜になると爭議團の演說會へ臨監に行かねばならなかつた。

夏子との結婚は、延び〲になつて了つた。

本廳の廊下などで、爭議とは直接關係のない文書課や保安課あたりに勤めてゐる以前の同僚から、

「おい、結婚披露はまだなのかい？」

などゝのんきな調子でからかはれると、彼は、ほんとに苛々として腹が立つた。

「高が千かそこらの勞働者の爭議を、一月以上もかゝつて鎭めることが出來んやうでどうする！　しつかりせえ！」

未來の舅である灰野參與官から斯ういはれた時には、都曲平太郎君、ぺしやんこにへたばつて了つた。

「夏子との件も延び〲になつてゐるが、君もそんな調子では、目下の所結婚どころの騷ぎではあるまいから、まあ、その爭議でも解決して、少し落ち着いてからにしよう。」

「はあ、仰言る通りに致します。」と、いつもの都曲平太郎君なら、この先輩の前に畏まつて頭を下げるのであるが、この時彼の考へは少しばかり違つて來てゐた。といふのは、爭議の解決がつくまで夏子孃を妻に貰ふことが出來ないといふのなら、結

察署長の任にある限り、この結婚は、いつまで經つても實現しさうに思へなかつたからである。S署の管內には工場が多い。高等主任の報告によれば、どの工場も大抵「動搖」してゐる。T・Y紡績S工場の爭議が鎭まつたとしたところで、K自動車工場が、Fガラス工場が、Wモスリン工場が、どうして爭議を起さないといへよう！

都曲平太郎君は、多少、顏を赤らめながら思ひきつていひ出して見た。

「御尤もですが……S署の管內には非常に工場が澤山ありまして、どうも、爭議の絕え間がありませんので……」

「だから、それを未然に防ぐのが君の役目ぢやらう。」

「は。」

一言もなかつた。

「だが……」と參與官は調子を變へた。

「君はいつまでも一警察署長位で止まつてゐる男ぢやない。だからこそ我輩の娘を進上しようといふのぢやが、君の方さへ、爭議最中でも何でもかまはんといふのなら、わしの方はいつだつて良いのぢやから、無理に結婚を引きのばすにもあたらんよ。」

いはれて見ると、「では早速明日にでも」といひたい所だが、流石にそこまでもいひ出しかねて、「いづれ親戚とも相談致しまして」と引き下つた。

S工場の爭議は持久戰にはいつてゐた。

都曲署長は、連日、本縣の官房主事から呼びつけられた。「無產黨」の代議士や市會議員が、頻りに總監を訪問した。早く爭議の解決をつけて呉れといふのであつた。

「強制調停」の話がもち上つてゐた。

工場の寄宿舍では、女工達が、終日、喉を渴らして、鬪爭歌を歌ひ拔いてゐたのだが。

二

秋晴れの一日、都曲平太郎君は、和服の上から合着の外套を輕く羽織つて、太い籐の杖を振りながら、花嫁夏子と一緒に、鴻の臺附近を散步してゐた。

「新婚旅行」といふやうなことをやつてゐるひまのなかつた彼等は、たまの時間をぬすんで、二人で散步に出掛けることを、

新婚の悦樂の一つにしてゐたのだ。

夏子は、いかにも屈托のなさ相な、幸福相な顔をして、子供じみたことをぺちやくちや喋つたり、加藤武雄や三上於兎吉の小説の中で覺えたらしい甘つたるい言葉を、そつと囁いて見たりした。さうかと思ふと、ラン、ラン、ラン、ラ、ラ、ラ……と鼻にかゝる聲で、何かのメロディーを口吟んだ。

都曲平太郎君は、くすぐつた相な笑を口元に漂はせながら、默つて、時々花嫁の横顔を偸視た。

およそ幸福な二人であり、およそ幸福な一日であつた――筈なのだが、不幸は意外なところに待ち伏せしてゐた。

郊外のどこにでもあるやうな、或る粗末な新築の二階屋の前を通つた時、ふとその家の門を見た夏子が、

「あら！」と小さな驚きの聲を立てたのである。

「中村義一さんて、こんな所にゐるんだわ。」

「中村義一？……」

「えゝ、藝術家の中村義一さんよ乾度。若しかすると同名異人かも知れないけれど……でも、この方の顔だつてことは何かの雑誌で見たことがあるんだもの……繪も書くし、小説も書くし、芝居もなさるし、現代のダヴィンチだつていはれてゐる大才よ。」

法學士都曲平太郎君は、本物のダヴィンチがどんな人間であつたか知らなかつたし、だから勿論、現代のダヴィンチがどんなに偉い人間であるのかは見當がつかなかつた。だが、都曲平太郎君は細君の言葉を聞いて非常に愉快であつた。常日頃、「藝術」の話になると、自分をまるで子供扱ひにする彼女に對して、この際、優越を誇ることの出來る一事があるのだ。それは、彼都曲平太郎君が、高等學校時代に、中村義一と同じ寮にゐた經驗をもつてゐるといふ事實だ。その後十數年、互に、顔を合はせる機會はなかつたが、中村が、大學を途中で止して、ドイツだかフランスだかへ行き、歸つて來てから、藝術上の新しい一派を開いて、素晴しく名聲を擧げてゐるといふことに聞き及んでゐた。彼は無論、中村義一の書いた繪一枚、小説一頁、芝居一幕も見たことはなかつた。だが少くとも、中村義一は、彼にとつて、高等學校時代からの舊友である。中村の藝術を崇拜してゐないまでも愛好してゐるらしい妻を連れて、たし[illegible]に中村を訪問する……

「よう、これは珍らしい！」

「どうしたい、その後は？」

有名な藝術家と、こんな風に話し合ふ自分を見て、新妻はあどけなく眼をくる〳〵さして驚くであらう。そして、この藝術家とちかづきになることを、どんなに嬉しがるかしれない。さうだ、中村を訪問することは、今日のこの幸福なピクニックを、さらに一層幸福な結末で終らせる爲にも、ひどく効果的である！

「あんたは、中村義一を崇拜してゐるのかね？」

「崇拜つて程でもないけれど、尊敬してゐるわ。」

「中村義一の藝術のどういふ所がいゝのかな？」

「どういふ所つて……そりやあ……だつて、中村さんは天才なんですもの。」

實の所、夏子も、中村義一の「名聲」を承知してゐるだけで、その藝術に就ては、良人都曲君同様、皆目知つてゐなかつたのだ。

「中村を訪ねて見ようか？」

「訪ねるつて、知らない人を？……」

「なに、僕が行けば歡迎して呉れるよ。」

「あんなこと！」

「まあ、僕と一緒に來てごらん。」

ともすると、細君の驚いた顔を得意に想像の中へ描き出して、顔全體がにや〳〵とほころびかゝつてくるのをぐつと制へつけながら、都曲君は、さつさと元來た道を引きかへし出した。夏子も、半信半疑な、怪訝な顔をしながら、しかしその後に續いた。

生籬の眞中に、申しわけばかりに立つてゐる小さな門の枝戸を開けると、すぐ玄關の傍に寢そべつてゐた雜種の大きな犬が半身を起して、ウーと唸つた。

玄關を開けて、二三回聲をかけると、二階から「おゝい」といふやうな返事が聞えて、ぐる〳〵坊主に頭を刈つた小柄な青年が階段を駈け下りて來た。

夏子は「あ、書生さんだな」と思つた。が、それが、當の中村義一、現代のダヴインチだつたのである。

「やあ、中村君だつたね。」

都曲君は、顔一杯に笑を押し擴げて、愉快相に聲をかけた。

「僕、中村だが……」
中村は突つ立つた儘、ちらと夏子の方へ向けた眼を、都曲君の方へ戻して、不思議相に首をかしげた。
「ははは、思ひ出せないのも無理はない……十年以上になるからな。僕、都曲だよ。」
「都曲？……」
「一高の西寮で君と一緒に暴れたことのある都曲平太郎さ。」
「あゝさうか！　あの都曲君か……あんまり思ひがけないんで一寸思ひ出せなかつた。」
中村も懐し相に顔中で笑つた。
「こつちの方をぶらぶら散歩してゐたら、こいつが……」と都曲君はちよつと照れた顔で細君を顧みながら、「君のとこの表札を見付けて、それに、こいつひどく君を崇拝してゐるんでね…………」
「あら、あんな！……」
夏子は真赤になつて御辞儀をした。中村も赤くなつて頭を下げた。
都曲君夫妻は、二階の書斎へ通された。夏子は、少しばかり、幻滅と云ふものを感じた。「芸術家」といふものに対して抱いてゐたイメージがぶち壊されたのである。何といふ平凡な風采の男であらう！　それに何といふ殺風景な、無装飾な書斎であらう！　たゞ、八畳間の壁一杯に、ねだがたわむ程、ぎつしりと書籍が積み重ねられてゐるだけだ。
「お互に、方面が違ふものだから、その後会ふ機会もなかつたが、君の噂だけは、しよつちやう新聞や何かで拝見して陰ながら羨ましく思つてゐた次第さ。」
都曲君は、敷島に火をつけながらいつた。中村は、挨拶に困つたやうな顔をして苦笑したが、
「君は今、どういふ仕事をしてゐるんだい？」と訊いた。
「野暮な仕事さ。あははは！」と笑つて、都曲平太郎君は紙入れの中から名刺を一枚抜き取つて差し出した。そいつを受取つて、一目見た中村義一の顔色が、瞬間に、さつと変つた。
「君、済まないが、すぐ帰つて呉れないか！」
中村義一のこの思ひがけない言葉は、都曲君を怒らせる前に、細君を啞然たらしめた。

外へ出た二人は、一言も口を利かなかつた。細君は、泣き出し相になるのをやつと制へてゐるといふやうな、甚だ天候險惡な顔をしてゐた。都曲君は、眉の間に二本、深い竪皺を刻んで、どうしてこの侮辱に酬いてやらうかといふ風に、ぎつと唇を噛んでゐた。

「馬鹿にしてやがる！　あいつ氣違ひだ。」

都曲君は、やつとこれだけのことを口に出したが、細君は何とも云はなかつた。

二人は暫く、ぎごちない沈默を續けたまゝで、あてのない田舍道を步いて行つた。

ところが、何としたことだ！　その野つ原の中に、も一つの不幸が、都曲君夫妻を待ち受けてゐやうとは！

三四十人の若い娘達(その中に十人ばかりの男も混つて)が、とある草つ原の中で、輪形に坐りながら、大聲に何か歌つてゐるのだ。

「何處かの女工のピクニックだな。」

都曲君は、職掌がら、すぐとそれに氣がついたのである。と彼は、今しがた、中村義一に侮辱されたことは忘れて、その女工達がどんなことをするか見てやらうといふ、職業的興味で一杯になつた。幸ひなことに、彼は和服を着て、おまけに派出な粧ひをした若い細君をつれてゐる。誰だつて、彼が警察署長であることに氣付くものはあるまい。それに、猶ほ好都合なことは、彼等夫妻と同じやうに、このあたりへ散步に來たらしい人間が、數人立ち止まつて、笑ひながら女工達のやることを見てゐるのである。で、細君が、

「あなた、歸りませうよ。」

といふのを、

「まあ待ちなさい。あいつ等どんなことをするんだか見てやらう。」

さういつて、無理に、畦道を越しながら、その草原の方へ寄つて行つたのであつた。

一人の青年が立つて、歌の音頭をとり、それに合はせて女工達が歌つてゐた。

　プロレタリアの國に
　ソヴエートロシヤ
　×××××××××××

朝風にはためく
解放の旗
萬國のプロレタリア

××××

「いけない、とんでもない歌を歌つてゐる！」

都曲君は、思はず「中止！　解散！」と怒鳴りたくなつたのだが、右手に、ぎゆつと力こぶを入れて握つてゐるのは、サーベルのつかではなくて、ステツキの先についた銀の玉であり、肩に懸つてゐるのは、ぺた金の肩章ではなくて、しようしやな霜降りの外套であつた。それに第一「管轄違ひ」であり、「女房携帶」であつた。

歌が濟むと、即興芝居が初まつた。

「さて、これから芝居だ。題して「阿呆の療治」、喜劇一幕、作者は諸君おなじみの中村義一君。」

歌を教へてゐた男が、ひようきんな調子でから前口上を述べ立てると、女工達が一齊に、

「待つてましたあ！」

と賑かな聲をいれて盛んに拍手した。

「中村義一君」といふ聲を聞いて、都曲君は思はず細君夏子の顔を見ないではゐられなかつた。夏子は蒼い顔をして、ヒステリーのやうな眼付きで、口上云ひの顔を睨みつけてゐた。二人の姿に氣付いた女工達が「ちよつと／＼！」といふ風に袖を引き合つて、敵意を含んだ眼でこつちを見ながら、ヒソ／＼と何か囁き合つてゐた。その樣子が、一層都曲君の癪にさはつた。だが彼は、我慢して、芝居を見てゐた。芝居は、ダラ幹と、裏切者と、××とをさん／＼にやつつけたものであつた。

「怪しからん！……こいつ等一體何處の工場の奴だらう？」

都曲君は、明日になつたら本廳へこの實情を報告して、所轄署の怠慢を責めてやらうと、眞劍にさう思つた……

昨夜一晩中、細君が不機嫌に沈み込んでゐたことを思ひ出して、むしやくしやしながら「未決」と朱書した箱の中の書類に一通り眼を通して都曲君は、給仕に云ひつけて高等主任を呼んだ。

「君、中村義一つて男を知つてるかね？」

本廳にも長くゐたことがあり、各署の高等係を勤めあげて來

た高等主任の警部補は、

「中村義一つて、文士のですか？」

と速座に訊きかへした。

「うむ、それだ。どんな奴なんだ？」

「どんな奴つて、無論、×××の奴ですよ。」

主任は、この「學校出」の若い署長をさげすむやうな調子で、事もなげに云つてのけた。

その時、本廳の特高課から電話がかゝつて來た。

——昨日、S署管内のWモスリン工場の不良女工數十名が、ピクニツクと稱して河の薬力郎へ出掛け、非合法的に中村義一の芝居をやるなど種々不穏の擧に出たやうであるが、それに關して、貴署高等係りから未だ何の報告にも接してゐない。至急調査ありたし。といふ詰問的命令であつた。

「中村の奴、畜生！……君、Wモスの方はどうしたんだ!?」

署長曲木は（九字別除）怒鳴りつけた。主任は、Wモス工場とプロ文士中村義一とどう連りがあるのか、速座には判斷しかねて、

「は？」

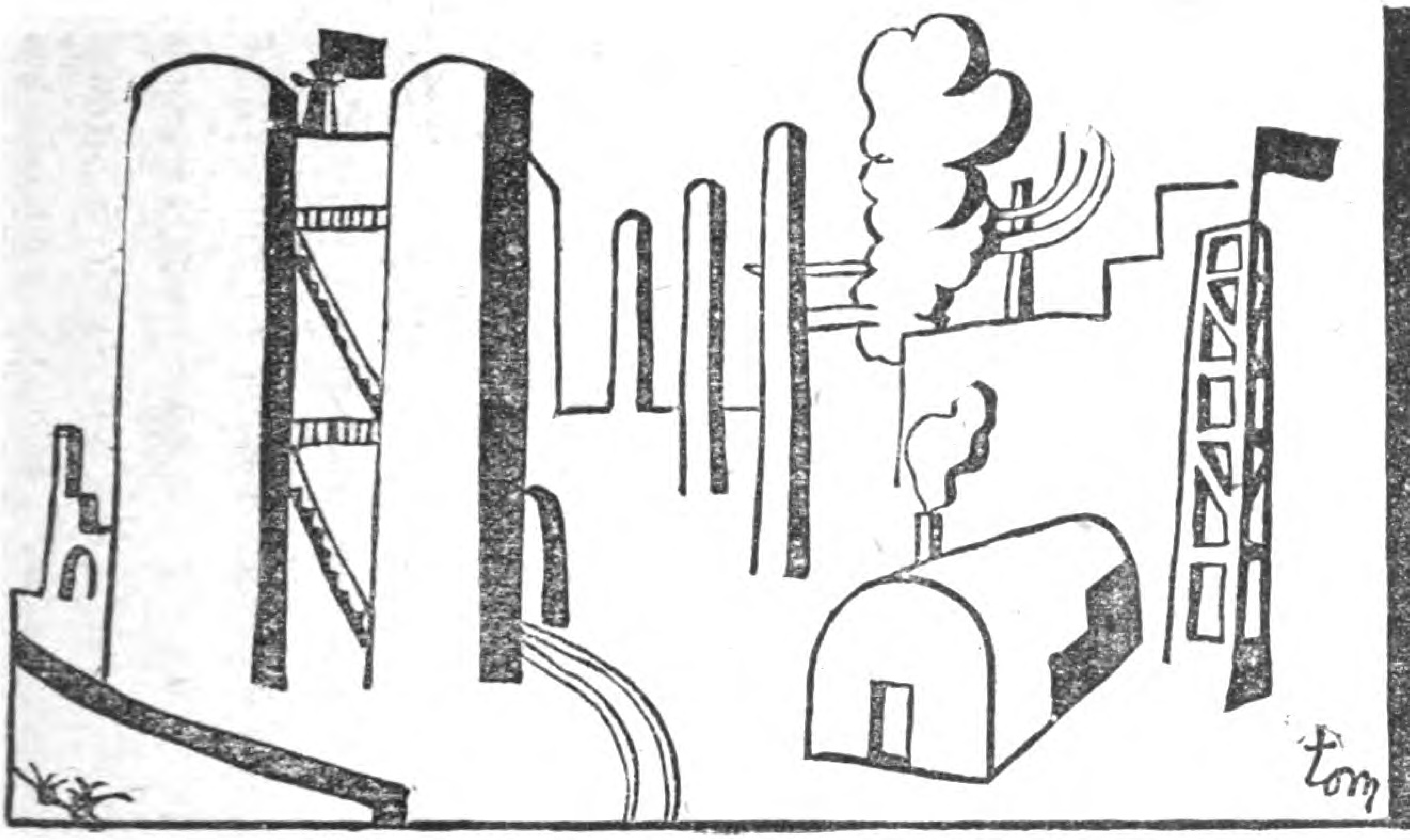
と署長の顔を見戍つた。

——一九三〇・一一——

小林多喜二氏の「東倶知安行」に就いて

（日本プロレタリヤ作家同盟書記局）

附記　この作品は同志小林多喜二が一九二八年の記念すべき國會選擧の直後に執筆したものである。今日之を發表するに當つて、恐らく彼は補筆訂正を加へたいと思ふであらう。周圍の事情がそれを許さぬ。敢て附記する所以である。



けだものの尻尾

葉山嘉樹

明日の晝頃にはシンガポールに着く豫定なのだ。今は夜中の十二時だ。これから一時間丈け見張りをして、一時に寢床へ入る。四時までに三時間は眠れる。

だが、おもての大部屋は何て暑いんだ。ここはこんなにも涼しいのに。

私はそんな風なことを思ひながら、フオアマストの見張臺へ、タラップを昇つてゐた。舊式なおんぼろ船なので、見張りはフオアマストの中途に作りつけられてあつた。

暴化る時や、雨の降る晩は、私はそこから小便をするのを樂しみにしてゐた。それは百の一滴となつて、ブリッヂの方へ飛んで行くか、又は果てしも無い海の水の中へと飛沫いて行くのであつた。

晴れた、凪の日は私はやらない事にしてゐた。一度危く感づかれかけたからであつた。そんな日には「嘔吐をはきました」とも返答をしかねたからであ

る。

時化の夜のルックアウトは辛い。マストは、蜻蛉取りの小供たちの振り廻す竿の先程も、振り廻されるのだ。嘔吐と涙と鼻汁とが、と云ふよりも體中のありとあらゆる穴から、體中の汁氣が振り出される感じである。

私たちはかつきり一時間丈け、このルックアウトの苦難を終へて、デッキへ下りて來るのだ。デッキへ下りると同時に、私たちは腹の底の方でニヤリと笑ふのを感じる。

「鹿爪らしい顔をしたワッチ中のメイトに、俺の嘔吐が飛沫いて行つたんだ。どうだ、分つてるかい。」

秘かな、悲しい、それは喜びだ。

船は、その重さと鈍い速さとで、印度洋の暗い海面に割目をつけて進んだ。割れ目は殼になつて船の周圍に燐光を放つて、後へ後へと殘つて消えた。

私は近視眼を胡魔化して乘つてゐたので、マストの中途に「引つかゝる」と眼鏡をかけた。時々、そいつをあべこべに、兩手を筒形にして持つて、メイトが望遠鏡を覗くやうな恰好にして威張つて見た。そして直ぐ舌打ちをしたものだ。

早いものだ。もうこれで二航海目である。前航では、機關部のボーイ長(見習)が、「赤道を見張つてろ。赤い線が見えたら直ぐチーフエンヂニアーに報告するんだぞ。見落したりなんかしたら採り上りが遲くなるぞ!」とナムバンに云ひ附けられて、トップに朝から晩まで立つてゐた。飯も食はないで、切り立ての鉛の切口見たいな、重い青さの海に見入つてゐたのだつた。

東北の山間の小作農の子供として育つて來た彼は、赤道にはほんとに赤い線が引かれてゐるものだと信じ込んだのであつた。

だが、青い重苦しい海面には赤い線の代りに、飛魚が燕見たいに飛び立つた。ハッと胸を打つた赤い線は、鞭のやうにしなひながら急いで逃げて行く海蛇であつた。だが、可哀想な山の子は海蛇を知らなかつた。

彼は慌てゝチーフエンヂニアーのドアを叩いた。

『チーフエンヂニアーさん。今、赤道を通りました。』

『誰が見付けた。』

『ハイ、私が見付けました。』

『どの方向に走つてゐたか。』
『ハイ、六尺位の長さで、右舷の方へ泳いで行きました。』
『御苦労、御苦労、その通りナンバンに報告しとくんだぞ。』
『ハイ。』
彼は艫前までの長いタラップを下りて、ナンバンにその通りに報告した。
ナンバンは尻の撥ね上つた鬚を指で引つ張りながら、セコンドヱンヂニーアと眼を見合はせて聞いた。
『赤道の頭はどつちを向いてゐたか？』
『南を向いて居りました。』
『南を向いてる赤道なんか無いぞ。色は真つ赤だつたか、それとも茶褐色だつたか。』
『へえ。』
とボーイ長は一寸詰まつた。
『それは浮いてゐたか、沈んでゐたか、真つ直だつたか歪んでゐたか、頭と尻尾と同じ太さだつたか、尻尾が小さかつたか。どうだつたボーイ長！』
と、セコンドヱンヂニーアが、ニヤニヤ笑ひながら聞いた。
ボーイ長は、セコンドが笑つたので一緒に、人の良い笑ひを頬に浮べた。
『へえ、うねつてゐました。浮いて泳いで行くやうな恰好に見えました。やつぱり頭の方が大きくて尻尾の方が小さいやうでありました。』
『そして尻尾から先は切れてゐたか？』
『はい、尻尾から先は有りませんでした。』
『そいつあ大変だ！ 赤道が切れちまつたぞ。本船が突つ切つたんでは無かつたか。どうだつた。本船のトップで突つ切つたとは思はなかつたか？』
『へえ。』
『へえでは無い。ボーイ長大変だぞ。赤道を突つ切ると大変な罰金を取られるんだ。この船が百杯も買へる程の罰金だぞ。それが怖いから、ワザ〱お前を見張らせといたんだぞ。ナンバン！ ボーイ長は大変な事をやらかしちやつたぞ！』
こんな風で、機関部のボーイ長は船中の人の處を、「慰さめ」のために走り廻らされた。
明けても暮れても海の上のマドロスは、退屈と倦怠から、こ

う云つた風な遊びを思ひ付くのであつた。

それ等の「遊び」は、暑熱と、過勞と、睡眠不足と、頭痛と、感冒と、脚氣と、マラリヤとに惱まされてゐるか、又は惱まされるだらうと云ふ豫感と恐怖から、マドロスを暫く解き放して吳れるのだ。

前航には私も此役目をやつたものだ。それは赤道を見付けるのでは無く、燈臺を禮讃して暗礁の厄を拂ふと云ふ、ブロンデツキダンスであつた。

『ボーイ長。十日陸を見ないで、その後に陸を見た時は、ブロンデツキダンスをやるんだぞ。いいか。』

と、ボースンは、金時見たいな赤い顔をつるゝと撫でゝ私に云つた。

『へえ。私はそのダンスと云ふものを知りませんですが。』

『うん。そのダンスには型は無いんだ。只だ文句丈けがあるんだ。その文句について、お前はブローンを抱いて、バケツを腰に下げて、上手に躍ればいいのだ。』

『それはいつ頃やればいいのですか。』

『香港を出てからだ。ボルネオ沖の、島の燈臺が見えてからだ。』

『その文句は誰に聞いて置けばよろしいでせうか。』

『カムネ(大工)に聞いとけ。あいつあいい聲だからな。』

私は、おもての部屋からタラップを降りて大工の仕事部屋へ入つた。そこで私は歌を聞く代りに釘拔きを借りて、痛み續けてゐた奧齒を引つこ拔いた。心配した事もなく、齒はすつかり根まで拔けた。

拔けた齒は言ひやうも無い程臭かつた。血がドクドクと湧き出た。最初のは口一杯吐き出して、後のは皆飲み込んだ。

『どうしたんだ。』

と、カムネは私の頸へ血が一杯ついてゐるので訊いた。『人間を食つたつてな顏をしてるぢや無いか。小僧奴、何にかぶりついたんだ。』

『ム、ム、ム。』

私は口を開けると血が垂れるので、指で拔いた齒の邊を差した。

『うん! 齒が拔けた? 口が利けないのか。早くドクターの處へ行けよ。』

私は、血をゴクッと喉で音を立てゝ飲み込んでから、顎を突き出して、血の垂れないやうに上を向いて云つた。

『歯を、ぬ、い、た、のです。』

『歯を抜いた？　釘抜きでか。馬鹿だなあ、歯を抜くのならヤットコを貸してやるんだつたのに。』

私はそのまゝタラップを昇つた。ブランデッキダンスの唄は未だ四五日間があらうから、その時でいいと思つたからであつた。

南支那海で、滅茶苦茶な暴化を食つた。それは暑さのために海が狂ひ出したやうであつた。

ブリッヂまでも怒濤が打ち上げた。

メインデッキには飛魚が何匹も打ち上げられた。

暴化の四日目に、トップに止つてゐる鳩を私は捕まへた。

ホンコンからシンガポールまでいつもは一週間で行く本船が十三日かゝつて、やうやく辿り着いたその航海だつた。

ボートは片サイド全部持つて行かれてしまつた。

私の捕まへた鳩はボースンに食はれた。その次の日に、私はブロンデッキダンスをやらされた。

左舷に、海の色と同じやうに蒼い島が、熱帯植物の厚着で着膨れたやうに、むく毛立つて浮いてゐた。

その蒼さの中から純白な燈台が、海岸に抜き出て立つてゐた。

マドロスになり立ての私は、サイドから飛び下りてその島へ「歩いて」行き度い衝動に駆られた。

「あれがユートピアだ。」

と、私には思はれた。

『足を出來る丈け、振り上げて踊るんだぜ。いいか。』

と、ストキが云つた。

『脚氣の氣味なんで、上るかどうだかね。』

と私は答へた。

『何でも上げるんだ。そして腹一杯怒鳴るんだぞ。大暴化の後だ。向うの燈台に聞える程、汽笛よりも大聲でやるんだぞ。いいか、そら始めるぞ。』

それから大工が喚いた。

――あゝ――れか、父つつあん、なあ――んと云ふ――

私は、それに答へて、腹一杯喚き乍ら、覚いてゐるブローン

を振り廻し、足を滅茶苦茶に振り上げて踊つた。バケツは腰と足に打つ衝つてガンガン鳴つた。

――あらあぞうと、申しますー。――

――わあーれが、母つつあん、なあーんと云ふ――

――おとみと――申しますー。――

それを私は見る力の、合唱に負けないやうに怒鳴り、踊り、ブローンを振り廻した。

私は皆の玩具になつてゐることを知つてゐた。が、それは私を焦躁にはしなかつた。それ處か、私自身、踊る機會が與へられたのに有頂點になつたのであつた。

暴風雨の難航の後の、青い島と白い燈臺。

船全體が焦躁に蝕まれようとする、單調と暑熱。神經衰弱と病氣と、はけ口の無い精力と。そして過勞。それは矛盾そのものであり、不自然そのものであつた。

私は、心臓が體の外へ飛び出しても未だ踊り續けたかつた。

セーラー達は腹を抱へたり、轉がつたり、又は不機嫌に默り込んだりして、私の狂態を見てゐた。

私の足の下では、デッキのコールターが汗をかいて流れ出してゐた。それは狂人が雨上りの泥濘の上で踊つてるのに似てゐた。

頭や顔からの汗は、私の眼や口に流れ込んだ。私は亂舞に私自身を委せてゐた。そしてその亂舞の體の蕊にある、私の秘密の心は、私は泣いてゐたのだつた。それは喜びとも悲しみともつかない涙であつた。

セーラーたちの心にも、その大口を開いて笑ふ口の奥に、涙が光つて見えるやうであつた。

「われが父つつあん何と云ふ。」

「われが母つつあん何と云ふ。」

それは、私たちマドロスが陸に持つてゐた、唯一の懐しい巣では無かつたか。そこで私たちは育つたのだ。そこは無數の思ひ出の大地では無いか。そこで私たちは乳房を銜み、父の大きな手で投り上げられたり、受け止められたりしたのでは無かつたか。私たちの見えない臍の緒は、あの白い燈臺と、それを載せて蹈る、あのこんもりした島の大地に繋がつてゐるのだ。

私の亂舞、彼等の絶叫は、無意識の間に、父母の居る、又は居た故郷の大地へ私たちを全部を引つ張つて行つた。

やる瀬ない淋しさと人懐しさとが、夕闇と共に心に忍び込んだ。

怒號と亂舞とは申し合はせたやうに、一瞬の時間に、全く、それは拍子木でも叩いたやうに合致して止んだ。

私も、彼等も、心をうなだれて、それ〲の船室へと引つ込んで行つた。

それから一樣に、長い夜をマドロスたちは「物思ひ」に沈まねばならなかつた。歡樂の後の哀愁どころの騷ぎでは無かつた。皆が皆自分で自分の痛い處を、いやと云ふ程打つつけたのだつた。

「物思ひ」に陷ると、マドロス達を一樣に苦しめたのは、今の苦しさに較べて、それでは陸では樂であつたか、父母の下に充分に幸福であつたか、滿腹であつたか、と云ふ事實であつた。それは實際、飢餓の點から丈けならば、故郷では船でよりも粗惡で貧弱であつたのだ。

「だが、どうすることが出來よう。何もかもやつて見たんだ。ところが何もかも惡かつたんだ。これからだつて良くなると云ふ事はあるまい。段々年を老つて、體力が弱つて病氣が出ると云ふ丈けの事だ。どこもここもそうだ。一つの例外も例は見はしなかつた。一つの航路が、いつも決り切つた港に着くやうに、俺たち下に沈んでゐる者には、穴が決つてゐるのだ。」

私は前航からのいろいろな事を思ひ出しながら、マストの中途でルックアウトに立つてゐた。

海は純粹に眞つ暗であつた。それは眼を瞑つてゐるのよりも、もつと眞つ暗闇であつた。追ひ越して行く船も、行き交ふ船も無かつた。押し割られた海が、兩サイドの一番ハッチ邊から、鈍く燐光を放つて流れ去つた。

私は自分の身の上を思はないやうに努めてゐた。それに爲し來つた事は、悉く恥づべき愚劣な行跡許りであつた。これからの事は？　それは私の勇敢な友人たちのやうに、正義に燃え盡さうとするやうに、階級戰上に闘ひ續けてゐるのとは、餘りにも遠くかけ離れてゐた。私は、私の眼が近視眼であるやうに、私自身の屬する階級を見る目にも、近視がついて廻つてゐるのだつた。

私はもう隨分前から私に對して、すつかり愛想を盡してゐた。私は「やり度い」ことを些もやらない中に、「やつてはい

けない」と詐りをやつてゐた。それが自分に對して癪に障る事であつた。

『なつちやいねえぞ！　手前は。』

と、失策をやつた後で、きつと私は自分をとつちめたものだ。友人と知らない中に同じ商妓を買つた翌日などは、ひどく私は憂鬱になつて、ペツ、と唾を吐いた。そして、その唾を吐いた口を、いつまでも帆布製の仕事着の袖で拭いた。血の出るまでも。

私はルックアウトが嫌ひだ。いやに、沁んみりした隙が腹の中に出來るからだ。マドロスは批評家でも道學者でも無いのだ。だのに、フオアマストのルックアウトには、理窟だの感傷だのが待ち構へてゐるのだ。

二點鐘が鳴つた。

私は、マドロスの私に歸つて、マストのタラップを虫のやうに這つて降りた。

大部屋へ歸つて、次ワッチのセーラーを起した。一等セーラーで鼻の落ちた男だつた。

『代つてくれ。』

と、そいつは私に云つた。

『たのむ。俺も眠くて持たん。』

かゝり合つてるのがうるさいので、そのまゝ、私は巣箱の方へ行つて「寝てしまつた」ふりをして様子を見てると、朝鮮の道祖神見たいな一等セーラーは、水を一杯グッとあほつといて出かけて行つた。

セーラー部屋は監獄の雜居房に似てゐた。だが、それよりも倒藏で二段ベッドになつてゐた。その上怖ろしく蒸し暑かつた。空氣は臭くて腐つてゐた。

その中に於ける眠りも「腐つた」やうな眠りであつた。それは翌日更に劇しい勞働に備へる爲めの、自分の爲にだか會社の爲にだか、はつきりしない眠りであつた。それも、八時間打つ續けでは與へられてゐないのだつた。

十一時頃までは八釜しくて眠れはしない。十一時かつきりに夜食を食つて、一時まで眠つて、一時から二時までルックアットに上つて、二時から四時まで眠る。そんな風な睡眠が、私たちの眠りこけ得る處のものだつた。

それは重病の寄港に似た睡眠だつた。今、忙しい、慌たゞし

い符號に似てゐたものだ。

總て欠けてゐるものに對しては、人は一層それを切望するものであるが、睡眠の場合は飢や寒さと同じやうに、死が背後に迫つてゐるのである。負傷だの疾病だのが眠りの不足から起つて來る。中にも皮肉な病氣は「睡眠不足」と云ふ原因から、「不眠症」と云ふ病氣さへも引き起すのであつた。

不眠症は致命症であつた。それは巣箱に横になると眠れなくなつて、起き上つて働き始めると同時に「眠る」のであつた。それは一口に言へば、いつでも眠つてるのだし、いつでも起きてゐるのだつた。そんなべら棒な狀態で、いくら勞働者の頑丈な體だつて、持ち應へて行ける筈が無かつた。

いつでも結果は極り切つてゐた。一ケ月も不眠症の續く間に、どこかへ入港するとか、何かの變化があるかしないと、その患者はきつと變な事を仕出かすのであつた。

口論の揚句に毆り合ふので無く、毆る爲に喧嘩を吹つかけたり、全く口を利かなくなつたり、恨みも無い仲間を「人間違ひ」で斬りつけたり、上陸したまゝ歸つて來なかつたり、外國の監獄へ入つて終つたり、そんな風な形でその病氣のけりがつくのだつた。

シンガポールに着いた。

そこでは、私はマレステレス（マレー・ストリート）へ行つて、餘り癇癪の起らないやうにするため、オールナイト遊んで來ようと考へてゐた。

それはよく道學者たちや、會社の上役達から非難される一つの事實であつた。だが、どんな鞭でも持つて來るがいい。それは私たちの體の中にあるんだ。それは百噸を支へるスプリングよりも強いのだ。それは抑へる丈け余計に抵抗を起すのだ。

さうだ。くどくどと愚痴を並べ立てるよりも、一つのエピソードを聞いて貰はう。

ある炭山で獨身のある坑夫が、妻のあるある小頭を殺してしまつた。それが法廷で云つたのには「あいつには女房がありました。だがわしには有りませんでした。あいつはその自分の女房の外に、捲鑛場の娘を手籠めにしようとしたんです。ところが、その娘は、えゝ、その娘は、詰りそのわしが、その、詰り惚れてゐた娘なんでがす。これでわしはやつつけたんです。へ

る。」

「で、その方とその娘との間には、何か口約束でもあつたのか」

「へえ、何にも有りませんでがす。ええつと、その口を利いたこともありませんでした。へえ。」

「では、いきなり殺して終ふと云ふのは亂暴では無いか。無茶では無いか。」

「どうしてでございますか。旦那。一人の奴は二人も持たうとして居るのでがす。よござんすか旦那。一人の奴は何にも持つては居りませんでがす。」

それでその殺人囚が一人、立派に出來上つて終つたのであつた。

私はその眞理の遵奉者である坑夫のやうにはやらなかつた。私は、悠々でショートタイムを利用したのだつた。

ゴーショウは、早いとこやらないと取り殘される。ボーイ長の私は、誰か金の有りさうなセーラーにぶら下る必要があつた。

棧橋の向うには、シベリアまでも陸續きであるやうに、熱帶の若い森がブラシでもかけたやうに、スコールで洗はれて塵一つ無く續いて見えた。

おもてのライスコックも上陸したい氣持は同じだつた。その結果は晝飯の時に同時に夕食も出來上つて終つたのだ。

私が晝食のお菜を取りに行くと、蠟燭のやうに青くてスペスペしたライスコックが言つた。

「ボーイ長。このストーヴん中に夕飯のお菜が入つてるからな。三時までは出しちやいけねえぞ。三時になつたら出してやれ。ゴーショウだからな。明日の朝は手前と機關部のボーイ長と二人で味噌汁を拵へて飯を炊いて食はせろよ。いいか。俺は九時頃で無いと歸れねえんだ。仕入れに行かなくつちやあならねえからな。その代り、すつかりうまくやつとけやあ、いいお土産を買つて來てやらあな。お女郎の罐詰をな。いいか！分つたな。」

ライスコックの野郎は、金でシチョージでもあるやうな口振りで私に云ひ付けて置いて、船が棧橋に着くと同時に、飛び上つて行つて終つた。

このライスコックは三十年も船に乘つてゐるのだつた。女房

には七人の子供があつたが、それは托兒所の光景に似てゐた。フランテンの英國のカーゴボートに乘つて、五年目に日本に歸つて見ると女房は子供を「新らしく」二人産んで置いて呉れた。

そのお禮に女房の尻を、釜の蓋で百程も毆つて、ケロリとして二三日、ドック中丈け家庭氣分を味はつて、又、カルカッタ航路にライスコックで乘り込んで來たのだつた。

可哀想な老マドロスであつた。仕方の無い事だ。

私は、一通りセーラーたちにおべつかを使つて見た。殊にボースンには最も力を盡してやつて見た。

私は雷の事について、もう一航海の間と云ふもの口喧嘩をし續けてゐたのだ。

『ボーイ長！ 貴樣はどうしても雷は電氣だつて云ふんだな。』

『ボースン。それやそうですよ。どうしたつて雷あ電氣ですよ。』

『貴樣は俺よりも船に永く乘つて居た、とでも云ひ度いんだな。ぢやあ、貴樣は雷を拾つた事があるかい？ え、どうだボーイ長。拾つた事があるかつてんだ。でなけや證據を見せろ！ 雷が電氣だなんて、チェッ！ なあんて貴樣あ、飛んでもねえ馬鹿な事を云ひ出したんだ。え、そもそもだ。いいか、ボーイ長、そもそもだよ。雷と云ふものは雷獸と云つてな、けだものなんだ。俺はそいつを三度捕らへたんだぞ。一度は餘りひどく落つこつたんで、氣を失つてゐやがつた。尻尾があるんだぞ。だが、毛は生へてゐないんだ。え、聞いてるか、分るか、豚の尻尾ほども毛は生へてゐないんだぞ。貴樣見たいな子供に分るかあ、どうも困つたもんだ。少しコーターマスターにでもいろいろ教へて貰へ。雷が電氣だなんて、手前は全く馬鹿だぞ。まあ、いくらお前が子供だつたにしても、考へても見ろよ。雷が電氣なら大變ぢや無いか。本船は雷を捕らへてることになるんだぞ。ぢれつてえボーイ長だなあ手前は。エンジン場へ行つて見て來い。外の處は兎に角として、一體尻尾どうして作らうつてんだ。ボケナス奴！ 尻尾のついた獸を作る機械があつて堪るかい。』

背の低い、肩巾の廣い、赤いつや〳〵した顏を、もつと赤く光らせながら、ボースンは私を說き伏せにかゝるのであつた。

『だつてボースン。雷は電氣ですよ。尻尾なんかありませんさ。先生がさう云つたんだもの。』

と、私は答へる。

『尻尾が無い！　尻尾が無いんだつて！』

ボースンは、自分の尻尾でも踏んづけられたやうに、眞つ赤になつて怒鳴り出すのである。

『この野郎！　尻つ尾のない雷なんて、そいつあ僞物だ。いいか、分らない野郎だなあ。雷に尻尾が無ければ、落つこつて來る筈が無いぢやないか。ボケナス奴！　よく考へても見ろ。尻つ尾があるからこそ落つこちるんだぞ。何故雷が落ちるかよく考へて見ろ。雷の尻尾にダニが食ひ込むんだ。尻つ尾の根元の方にな。そいつを取らうとして、雷は尻尾を追つかけるんだ。それを追つかけて雲を踏んづけてるから、雷は音がするんだ。そのうちに目が廻つて、踏み外して落つこつて來るんだ。ボケナス奴！　落つこつた雷の尻尾のつけ根に、ダニの食ひ込んでゐなかつたためしがあるか！　貴樣あ見たとでも云ふのか！　風呂の水を汲み込め！』

『だつて、雷はボースン。』

『風呂の水を汲むんだ！　ボケナスボーイ奴。』

そんな調子で、ボースンと私との雷問答は終りを告げるのだつた。

で、一つ雷問答でボースンの御機嫌を取り結んでやらう、と私は考へた。

『ボースン。雷には矢つ張り尻尾があるやうに、私にも思はれ出しました。』

『さうれ見ろ。』

と、入れ代り立ち代り、月二割の利子のつく金を借りに來るセーラーに、「頭」の有る無しに拘らず、十圓札一枚づゝ渡したから、ボースンは云つた。

『今は忙しいから、出帆したら委しく敎へてやる。ボーイ長。手紙が來てる。』

私は金の代りに手紙を受け取つた。

だが、船では、金と手紙とは同じほどの慰さめをマドロスに與へるものだ。

『隱したつて駄目だ。』

と云ふ書き出しで、その手紙は始まつてゐる。私のN市の女

人からのものだつた。私はフオツクスルのオーニンの下で、眼を見張つて、暗中で力みながら、不思議な事には舌なめずりして、字義通りに食ふやうに讀んだのである。

隱したつて駄目だ。君は云ひ譯をし度く無かつたのだらう。云ひ譯や宣言やよりも、先づ結果を君は同志に見せよう、と云ふ膽なんだ。分つてる。それは君の性分なんだ。

だが君は先づ、君の生れた本國が現在どう云ふ狀態であるか、を書かう。これは君にとつては喜びであり又悲しみでもあるのだ。

その前に一言、君が浪の上に浮ぶ船の一室に、社會と隔離されて淋しく生活してるやうに、僕も八ケ月間、大地の上に浮ぶ煉瓦製の船、永久に入港することのない船、牢獄に棲つてゐた事を書き送らう。

だが、正直な處、僕は何處から先に書いていゝのか、途方に暮れて終ふ。すつかり君に知らせようとするには、百種類の新聞を通り、あらゆる新聞雜誌を讀んでも、未だ決して充分では無いのだ。

兎に角、どんなに米が豐作でも大衆は飢ゑてゐるのだ。どんなに秋の空が晴れ渡つてゐても、大衆の心は暗いのだ。どんな風の日にでも暴風が吹いてゐるのだ。

君は、馬が組合旗を尻尾と一緒に振り廻しながら疾風の如く駈けた。と云ふ事實を想像する事が出來るか。

僕たちは、示威行列を作つて、出し抜けに工場から操り出したのだ。五千の女工と七百の男工と、各地からの應援者。

先づ應援の者たちが先頭に立つた。僕も一度刑務所へ行つて來てから、大分落ちついて來たので、先頭の旗手から三列目に加はつた。工場の門を出て應援團に續いて來る鼓手の太鼓と、女工たちの物凄く湧き上る、勞働歌につれて、僕たちは醉つたやうな鼓舞された氣持で、小路から大通りへ出た。

大通りへ出ると、ワツシヨイ、ワツシヨイに移つた。その時分までは警戒が手薄だつた。××たちは、×××××××××××××、眠りも營養も足りなかつたし、その上大分××××にも合つた揚句だつた。だから積極的に「××を上げよう一と戰ふ氣にもなつてゐなかつた檻褸遊ひの×××××××たちは、歎された地圖を見たなら、路次の奥に引つ込んで終つた

デモが通り過ぎると、鰻のやうに這ひ出して來た。

××が文句を云ふと「地理が解りませんので、地圖を見ながら警戒してゐました。何しろ生れて初めて來た處であります。」てなことですり拔けるのだつた。

僕がやられた時、スパイたちがこぼしてゐた。

「君たちは、わざ〳〵遠方から俺たちを毆るためや、蹴飛ばす爲に來たんぢやないか。それだのに署に連れて來ると、暴行だ、暴行だと云ふんだが、おとなしく引つ張つて來られる君たちぢやないぢやないか。見ろ、俺の足を。」さう云つて巡査は瘦せた足を出した。それは青く膨れ上つて、てつぺんに細長い切り口が赤く滲んでゐた。そして溜息を吐きながら云ふのだ。

「どつちがひどい目に會ふのか、分つたものぢや無い。俺たちは誰に訴へればいゝんだか。」

それで僕は云つてやつたんだ。

「それや君たちが、そんな××××××はうなんて思ふのが、大體の間違ひぢやないか。俺たちは、冤罪にかかつた死刑囚見たいなものだ。だから、最后まで鬪ふより方法があるまいぢやないか。第一、子供でもあつて見ろ！　君たちの子供は親の××な泣いられるぜ。」

「おい！　默れ。」とスパイたちは云ふのだ。內心の恐怖は痛い處に觸れると、沈默を強要するんだ。

僕たちのデモが三町位、無風狀態の中を進んだ時、騎馬巡査の一隊が現はれて、行列の先頭へ二列に、道一杯塞がつちやつた。

騎馬巡査の馬は、全くよく訓練されてゐるものだ。それは巡査自身と同じ程、訓練が屆いてゐるのだ。尻を引つぱたいた位では、全で感じないんだ。又はその乘手見たいに、感じないふりをしてゐるんだ。そして、小刻みに足踏みしながら、デモの先頭へ尻を押しつけて來やがるんだ。

「畜奴！　手前は犬になつたのか！」

と二列目の小柄な鬪士が怒鳴つたのには、緊張した仲間たちも一度に笑ひだした。

「犬よりなほ惡いや、大馬鹿奴！」

なんだかんだと、皆は怒鳴り出した。

その中に、××をつけた××の乘つた、立派な馬が尻を突き

出して、デモの頭を押し初めた。乘つてる奴は、股を捻ぢ向けながら、何か大口を開いて喚いてゐたが、そんなものの聞える筈が無かつた。

と、その××の乘つてゐる馬が、何かまるで電氣に打たれたか、人間のするやうに、後足だけで急に眞つ直に突つ立つた。警部は、デモの頭の足の下に、グタツと落つこつた。

それと同時に、馬は全速力で驅け出した。馬の尻には組合旗が××××××××××、尻尾と共に風に飜へつてゐるのだ。

どんな名馬だつてあれ程は速く走れないに決つてるよ。その路は三哩も一直線に走つてゐる、舗裝道路だつたが、尻に旗を飜した馬は見る間に小さくなつた。そして直ぐ見えなくなつてしまつた。

落つこつた××は、全で×××やうだつた。××も××てゐたし、××も止まつたやうに見えた。

二三人の××××が、××××に踏つた××を抱いて歩道へ消えた。外の騎馬巡査の二騎は、決死の覺悟で文字通りに驀進して行く警部殿の馬の後を追つかけた。

その他の騎馬巡査たちは、自分の乘つてゐる馬にも、尻の穴のある事に氣がついた。その上組合旗も、馬の尻の穴よりも數が多かつた。

で、馬の尻をデモの先頭へ押しつけると云ふ冒險は止めて、行列の兩側に並んで一緒に行進を始めた。

この狀景を僕はどうして君に報告すればいいだらう。たとへ僕が、デモの三列目で無くて、デモの道筋の屋根の上から見てゐたとしても、その全部を一目に見渡すことは出來ないことたのだ。これは君が船の上から一度に海一杯を、見渡すことが出來ないのと同じ事だ。その點では人間の眼は、蠅の目よりも拙に不便に出來てゐる。

若し僕が竿の先に眼玉をつけて、振り廻すことが出來たとしたならば、その瞬間、どんなに多くの事が一度に起つてゐたかを、君に委しく知らせる事が出來るんだがなあ。

兎に角、そこで××××噴き出し始めたのだ。そこでは×××××人間たちの間に、××××始めたのだ。何と云ふ事だ。(五十七字削除)そいつが、自分はどんな場所にゐるか、どんな階級に屬するか、と云ふ事を知らないなんてのは、

人間だけの爲し得る馬鹿さ加減なのだ。

　考へても見るがいい。一方は月給五十圓足らずで、女房と子供の三人もと一緒に食つて行かねばならない、×××××だ。も一つは掛札順に留置場に入つて、内外の聯絡を取つてゐる、たまに冷酒にありつく、たゞの×××だ。そいつ等は自分が何だつてことを、たゞの一度でも考へて見たか。若し考へる能力があるならば、僕たちの前へ顔の出せる××があるか！　××××だ！

　その上、×見たいに×××ひ度がるのだ。

　よし、それならば、僕たちはそいつ等を×並みに扱つてやらう。

　一匹の××は摘んで捨てた。

　僕等が三丁許り行くと、今度は金屬製の尻尾をブラ下げた、鍵のついた帽子――何たる事だ。赤ん坊ではあるまいし――を冠つた、プレツシングの機械が蚊柱のやうに、デモの中へと躍り込んで來た。

　晩秋の日はもうすつかり暮れてゐた。

　大通りから枝のやうに出た、どの小路の家々も、せち辛さに電燈を消した。

　（六十五字削除）

頭と頭との部分では、（十五字削除）合羽と、上着と、帽と、×と、×と、旗と、竿とが、龍卷きのやうに渦卷き昇つた。

　市街の一方の大きな部分が喚き出した。その中から小さな悲鳴が叫んだ。

『合羽をかつぱらつてつちやいけない。』

『帽子を、この野郎、帽子を。』

『そいつ、引つ張るない。ど、ど、ど、どこへやりやがつた×をかつぱらつちや。』

『痛えつ、眼、眼、眼。』

　××間は風さへも抑へて、益々劇しく、尻尾と云はず頭と云はず降り灑いだ。

　それは眞實の暴風雨と全く同じであつた。バラ、バラ、バラ、ゴーツと、我武者らに襲つて來ると、ちよつと息をするのだ。

　トラックは×と現場とを、時計の振子の様に往復した。（三十四字削除）

　だが、余り戦闘的でないロボットは、抵抗の弱い方面に押せ

求めた。（百十三字削除）

何と、變な「××」も世の中にはあつたものだ。

そんなごつたがへしの×××の最中にも、大笑ひのエピソードもあるものだ。

×から檢束用×××××××××××トラックが、ブルルッと呻つて五六間も飛び出すと、いきなり「俺はいやだ！」とでも云ふやうに、トラックは仰向きに引つくりかへつてしまつた。

尻尾と一緒に猛者達は、すつかりそこら中へばら撒かれ、撥ね飛ばされた。

トラックの左の後輪が抜け出てしまつたのだつた。抜ける筈であつた。カップが除つてあつたからだ。

「爭議團の奴等がやりやがつたんだ」

と、×××で無くとも考へる處であつた。だが、それにしても、機微な處へ目をつけたものだ。そしてうまくやつたものであつた。いつ？ どこで？ それと云ふのは、もうそのトラックは半月も前から、爭議團員を檢束してゐたのだつた。

そして檢束して歸りで無くて、その行く道で引つくりかへろ？

その筈であつた。××××××××たちはその前の日、檢束者を投り込む時に、そのトラックの助手までも一緒に投り込んでしまつたのだつた。

ジャッキでシャフトを押し上げながら、助手は嬉しさうな微笑を浮べたものだ。

「知らない間は、誰をどこへ運ぶのも平氣だが、自分で一度行つて見ると、誰だつて連れて行き度くは無くなるさ」

と、十九才の助手は運轉手に云つて、頬つ邊を毆られた。

「馬鹿野郎！ シャフトでも折つて見ろ。大損害だぞ。飯の食ひ上りだぞ！ だが、××××××××××、あゝやつて大勢でやつてゐるんだと分ると、野菜や荷物を運ぶのたあ違ふて。いい氣持のもんぢや無いや。」

だが、もう警察の方で、そんな物騷なトラックは使はない事に決めたのだつた。

大分、長い手紙になつた。が、僕は未だ云ひ度い事は一口も云つてない氣持ちである。

云へないのだ。此處丈けでは無いのだ。何處でもなのだ。都

會でも農村でもだ。昨日もだ、明日もだ。

だが、いいか。これ丈けは云つて置かう。俺たちの力が××××のだ。これを腹に入れて置いて、君は君の職場で闘つてくれ。

そして、カルカッタ中が、水牛で一杯になつてしまつたと云ふ、印度の民衆の蜂起の詳細を知らせてくれ。

僕が社會にゐる時分に、君が日本へ歸つて來たら、下手な字では無く、僕の口から委しい話をしようと思ふ。

前に雜誌を一部送つて置いた。こいつの力が僕よりも上手に君に語るだらう。

健康に氣をつけてくれ。

手紙はそれで終つてゐた。

私は、その手紙の終りに來ると、手紙の始まりに續いてゐるやうに、續け樣に四五回讀み返した。

『さうだ！ ××××には尻尾がついてゐる。そして毛は生へてゐないんだ。』

と呟いた。



休みの日

正宗白鳥

おすみの三度目の夫であり、たつ子の義理の叔父である石塚彌平は、近年、どうかすると、かう云つてゐた。

「たつ公。おれが腦溢血を起してぶつ倒れたら、醫者を呼ぶ必要はない。直ぐに猫入らずを飮ませて呉れ。腦溢血で完全に死ねたらその上の事はないが、中途半端でよい〳〵にでもなつて生恥を曝らすやうなことは、眞平御免蒙むりたいんだ。おれがお前に賴むことはそれだけだよ」

それは、座興でもなく、一時の思ひ附でもなく、眞面目にさう思詰めてゐたのだが、おすみやたつ子は、無論笑つて聞流してゐた。腦溢血に罹るか、肺病に取附かれるか、自働車に轢かれるか、人間は何で生命を取られるか、先きのことは皆目分らないのに、自分で勝手に極めて取越苦勞をするのは馬鹿だと、傍から冷かしてゐた。しかし、彌平自身は、他の死病については何とも思つてゐないで、たゞ腦溢血のみを恐れてゐた。彼れの父親が半身不隨で數年間寢床に就きつきりだつたみじめな有樣が、歲の經つたこの頃になつて、却つて彼れ

の頭に鮮明に浮んで來るのであつた。若い時分ほど酒量は多くないにしても、晩酌を缺かすことのない彼れであつた。たとへ醫者に忠告されても、たつた一つの樂みである酒を絶つ氣にはなれなかつたが、妻のおすみも、夫に節酒を勸めようとはしなかつた。

「今年は紅葉を見に行かう」と、役所からの歸りに、停車場で目についた遊覽地の宣傳ビラに刺戟されて、晩餐の折にたびたび云つてゐたが、例年さう思ふばかりで決行したことのなかつた彼れも、ある日曜の朝、流し元で顏を洗ひながら、冴えた日を仰見るとゝもに、急に思立つて「おれはこれから箱根へ行つて來る」と、足許から鳥が立つたやうに騷いだ。旅仕度と云つても、平生の出勤仕度と異つたところはなかつたが、たゞ温い飯や味噌汁が間に合はなかつたので、冷飯の茶漬を掻込んだ。そして、有合せの金をみんなさらつて、旅費に當てることにして、氣輕に出掛けた。

「都合によつたら、歸りに大磯の西山の家へちよつと寄るかも知れないよ」

「氣をつけて行つてらつしやい」

おすみもたつ子も、土間へ下りて格子戸から顏を出して見送つた。

「いゝでせうね。こんないゝお天氣に箱根なんかへ遊びに行つたら」と、たつ子は羨ましさうに云つて、臺所へ戻つて、味噌汁の出來加減を見ながら「叔母さんは、箱根とか日光とか、有名な名所へ紅葉見にいらしつたことがあつて?」

「さうね。……紅葉の時分ぢやなかつたけれど、一度箱根から熱海の方へ湯治に行つたことはあつたよ」

おすみは、殆んど二十年も經つた昔のことを、珍らしく思出した。

「叔父さんと一しよ?」

「うゝん」おすみは口をねぢて云つて顰めた顏を振つた。

「あたしがこちらへ來てから、叔母さんは一度も旅行なすつたことないわね」

「叔父さんだつて、近年、旅行に出てたことないぢやないの。……今日はあの人、よつぽどどうかしてゐるんだよ」

「叔母さんだつて、たまには景色のいゝ土地へ遊びに行きたいと思ふでせう」

「行きたかないよ」
「でも、大抵の家ぢや、日曜や旗日には、阿さんや子供を連れて、何處か空氣のいゝ所へ遊びに行くんですつてね」
「世間ぢやそんなことが流行つてるんだらうけれど、あたしの家ぢや、そんな眞似はしてられやしないさ」
　おすみは、若いたつ子が、近所の噂を聞くにつけても、新聞を讀むにつけても、どうかすると物見遊山に行きたいやうな口を利くのを不快に思つてゐた。相當な服裝をさせて、食ふ物もちやんと食はせてゐるのに、それ以上を望むのは贅澤な沙汰だと思つてゐた。たつ子に取つては、おすみは血筋のつながつた本當の叔母さんで、へそくりの餘程溜つてゐるらしいこの叔母さんを手頼つて御機嫌を取つて、忠實に家事の手助けもしたなら、實子のやうに可愛がつて貰へて、兄弟の多い貧しい自分の家にゐるよりは勝つてゐると、兩親に言聞かされて、養女といつた格で寄寓してゐるのであつたが、豫想したほどいゝことはなかつた。そろ〳〵は無給金のおさんどんと思はれるやうな不快に思つた。
平日には、朝飯を手早に済まして、主人を送りだしてから、掃除に取掛るのだが、今日は、掃除の方を片付けて、家の中を奇麗にさせてから、落付いて女二人だけで朝の食卓に向つた。豆腐の味噌汁と佃煮との、極り切つた御馳走なのだが、箒と雜巾とで運動したお蔭で、不斷よりは食がすゝんだ。
「叔父さんは箱根へ行つたつて面白かないだらうよ。いつもの日曜のやうに家で午睡した方が、結局氣樂で身體の保養にもなつてよかつたと後悔してるかも知れないよ。一人で山坂を上つたり下りたりして何が面白いことがあるものかね」おすみは箸を擱いて、小楊枝で蟲つ喰ひの黄ろい齒をほじくりながら、ふと感じたことを云つた。
「一人ぢや詰らないでせうね」と、たつ子はおとなしく受答へはしたものゝ、腹の中では、箱根行が羨ましくつてならなかつた。一人だつて二人だつて、三人連れだつて、何だつていゝ。山一面に紅葉がしてゐて鹿が鳴いてゐて、それに温泉が地の底から湧出てゐる土地へ旅行することが、面白くない筈はないと思はれてゐた。
「一人だつて二人だつて、あたし達二人連れて出掛けたつて、叔父さんは面白いと思やしないのさ」

「どうして？……叔母さんも箱根なんかへ行くよりは家で午睡した方がいゝと思つて？」
「あたし午睡は好きぢやないよ」
「あたしも。……」
「あんたは午睡は好きぢやなくつても、朝寝は嫌ひぢやなさゝうね」
　さう云ふおすみだつて、朝は敏活に目を醒ます方ぢやなくつて、夫に呼起されて、不承々々に寝床離れをする日が稀れではなかつた。成らうことなら、たつ子に朝の雑用をまかせて、自分はお膳立の出來たところへ、寝室からゆつくり、奥様然たる姿を現はしたいと、時々は大それた空想を描くこともあつた。
「あんたも若いうちに無性な癖をつけない方がいゝんだよ。あたしにも一ころ、箸より重い物は持たないで日を暮らした時代もあつたのだけど、そのむくいで、いゝ氣をして、おさんどん無しの貧乏世帯で、手足を擂古木にしなきやならない目に會つた譯なのさ」
「でも、あたしのお母さんは、叔母さんのことをしよつちゆう羨んでゐたわ」
「お小使錢に不自由しないだけが羨ましいつて云ふんだらう。儉約してればこそ、今日に不自由しないのだけど、腰辨のお役人さんにいくらお金が殘るものかね」
「でも、少しづゝでも銀行に預けとくと、利息といふものがついて、知らん間に殖えるんでせう。いゝわねえ」
　たつ子は、二三日前に、叔母の不在中に、用箪笥にしまつてある預金帳を出して見たのであつた。「叔母さんは、もう歳を取つてるし、四度目の結婚をする望みはないんだから、今度は御亭主に死なれても困らないやうに、せつせとお金を溜込んでるらしい。いくら溜つてるか知ら」と、兩親がかねて話してゐたのを耳に留めてゐたので、叔母がをり〱預金帳を持つて銀行へ出掛けるのを見るたびに、好奇心をそゝられてゐた。しかし、叔母は用箪笥の鍵は、外出のたびに持つて出るので、たつ子は秘密で開けて見たくつても見られなかつたのだが、二三日前には、叔母の懇意な家の奇麗な娘さんが自働車に轢かれたといふ知らせに驚いて、用心の行届いてゐる叔母も、その時ばかりは、鍵のことを忘れて見舞に出掛けた。で、たつ子は、この機會を外してはと、かねて知つてゐる引出しを開けて、恐る恐

るいくつも預金帳を出して、全心をそれに注いだ。郵便貯金、月掛貯金帳、當座預金帳、定期預金證など、彼女がかつて見たことのない印刷物であつた。何十圓、何百圓。千といふ文字も一つ二つは記されてゐて、たつ子の眼前にさんらんたる光を放つた。彼女は、泥棒じみた自分の態度を氣が咎めたので、慌てて帳面を元の所へ收めて引出に鍵を掛けたが、それからは、この小さな家が大變な金持の家であるやうに思はれだした。

たつ子が柄になく銀行預金の利息のことを訊くのを、おすみは變に思ひながらも、蓄財の話には興味を有つてゐる彼女のことだから、相手の質問に惹かされて、知つてゐる限りの利殖の方法などを喋り立てた。却つて聞く方で次第に欠伸を噛殺して辛抱しなければならなかつた。その話が一區切りついてから、たつ子は、叔母の命令で、夜具を物干臺へ運んだが、其處に立つてあたりを見てゐると、冴えた秋の日光が、騷々しい街上の物音にくだけてゐるやうだつた。紅葉の照つてゐる箱根の山はどちらの方角であらうかと、左右の空の果てを遠く見やつてゐたが、暫くして、ふと「たつちやん」と階下から呼掛けられた。不斷の叔母の聲とは思はれないほどに嶮々してゐるのを、たつ子は不思議に思ひながら、活潑に階下りて、叔母の前に立つたが、ちよつとの間にどんな變つた事が起つたのかと驚かれるほどに、叔母の顏色は土色をしてゐる。

「まあ、ここへお坐りよ。聞きたいことがあるんだから」と、震へ聲で云はれて、たつ子は譯の分らない恐怖を覺えて、さつきちやぶ臺の置かれてゐた所に叔母と向合つてちよこなんと坐つた。

「妙なこと聞くやうだけど、あの川端簞笥に入れてあつた銀行の帳面を、あんたはどうもしないだらうね」

「いゝえ、あたしそんなもの知らないわ」

たつ子は突返すやうなつよい返事をしたが、心の動搖を押かくし得なかつた。おすみの鋭い目は、相手の身體の戰きを見のがさなかつた。

「帳面はみんな一しよに仕舞つといたのに、そのうちの一つだけがどうしても見つからないの。他所から泥棒が入つたのなら、皆んな持つて行くにちがひないよ」

「おや、家の中に泥棒がゐると、叔母さんは思つてるのかい」

「こんなこと思つてやしないよ。……だけど變だからね」

「叔父さんが持つて行きやしない？」
「何のために叔父さんが預金帳を旅行に持つて行くものですか。それに、今日は日曜で、銀行はお休みだから、お金を引出す譯に行かないぢやないか」
おすみは、さう云ひながら、ふと夫に對して疑ひを起した。たつ子がそんな大それたことをして平氣で家に落着いてゐる筈はないと、一時心が顛倒したために、無我無中でたつ子に疑ひを掛けたことを後悔した。
「他に相談相手がないからあんたに聞いて見たんだよ。氣を惡くしないでね」
「でも、あたし吃驚してよ。どうしても見つからないの？ 外へまぎれ込んでるんぢやなくつて？ よく、捜して御覽なさいよ」
一時後見たい思ひをしたたつ子も、叔母の疑ひの晴れたのに安心するにつれて、叔母の慌て方を輕蔑するやうになつた。
「叔父さんが歸つてから聞いたら、在所が分るかも知れないよ」
「お金を有つてゐても心配ね」
何の氣なしのたつ子の言葉もおすみには皮肉に聞えた。
「僅かなものでも、生やさしい思ひして殘したんぢやないからね」
おすみは氣がふさいだ。預金高の最も多い通帳が見當らないのだが、それを、夫の彌平が、無斷で持つて出たのだとすると、この頃にない不安と憤りに胸が掻きむしられるやうだつた。そして、夫の歸りを夕方まで安閑と待つてゐられなかつたが、どうする譯にも行かなかつたので、苦しい心を紛らすために、たつ子に向つて、過去經歴の自分の身の上を、秩序もなく話しつゞけた。
「この叔父さんは、あたしが來るまでは、垢まみれの夜具に寢て、家の中は裝飾つけのないあばら屋のやうだつたのさ、何に使ふのか、贅澤もしないくせに、一圓の貯金もなかつたのだよ。十年もの間、あたしは物見遊山は一度もしないで、叔父さんの世話をして來たんだから、叔父さんの身内の人に家の財産を目をつけられちや、あたし、承知出來ないよ。叔父さんは今年一杯お役所に勤めたら恩給がつくんだから、それから先きは樂隱居をするつもりなんだらうけど、あたしは、まだ身體が丈

夫だから、この先き何年生きてるか分りやしない。あたしが生きてる間不自由しないだけのことは、ちやんと用意して貰つとかなきや、今まで辛抱した埋合せがつかないだらう。叔父さんが大磯の西山を訪ねると云つたのは、何か譯があるんぢやないかと思はれるよ。たゞ箱根へ紅葉見物に行つたのぢやなくつて、親類の西山へ、自分の死んだあとの始末を相談に行つたのかも知れないよ。この頃腦溢血で死ぬることをいやに氣にしたから、萬一の用意に西山に後始末を頼みに行つたのかも知れないよ。あたしにだけ任せるのを不安心に思つたのかも知れないが、あたしは西山なんて人に差闘がましいことを云はれたかないの。たつちやんにはまだ分らないだらうけれど、夫の親類なんてものの些とも手頼りにならないつてことは、あたしは飽きるほど經驗してるんだからね。匹偶の生きてる間は兎に角、夫が亡くなつたが最後、親類からどんなに無慈悲に扱はれるかつてことを、あたしは、骨身に染みて覺えてるんだからね。その場になつて泣いたつて怒つたつて、後の祭でどうにもなるもんぢやない。だから、あたしは、今の叔父さんと一しよになつた時から、今度こそ馬鹿を見ないやうにと、獨りで魂を引締めてかゝつたのさ。あんたも、お嫁に行くか、お婿さんを取るかどちらにしても、身が極つた時に、あたしの云つたことを思出して、平生そのつもりで身内の人と突合ふやうになさいよ。匹偶に死なれた後では、匹偶の兄弟でも叔父叔母でも、一夜の宿も氣持よく貸して呉れやしないよ。だから、昨日まで匹偶のお陰で贅澤に暮らしたものも、今日は宿無しのみじめな境涯に落つちまふんさ」

かういふ話は、話す方では熱心を籠めても聞く方では、さして面白く思はれなかつた。

「でも、男でも女でも、結婚する時に、相手の人に死なれたあとのことを、第一に考へなきやならないの？」

たつ子は、叔母の忠告を輕蔑したい氣持になつてゐた。

「そんな馬鹿なことをと、あんたは思つてるんだらうね。……あたしのやうに、二度も匹偶に死別れると、結婚するたんびに、相手の男は、自分よりさきに死ぬるに極つてると思はれるのさ」

「でも、ここの叔父さんは未だなか〱死にさうぢやないわ。口さきで心細さうなことを云つてるけれど」

たつ子は、正午近くなつてゐる置時計を見て、

「叔父さんは、今時分箱根へ着いてるでせう。不斷心細さうなことを云つてる叔父さんだつて、山の景色を見たら急に元氣がつくに極つてるわ。あたし、叔父さんのニコ〳〵してる顔付が目に見えるやうだわ」

「あんたは叔父さん贔屓ね」

「贔屓つてことないけど、……………叔父さんはいゝ人ぢやないの？」

「そりや、人はいゝさ。人がいゝから、浮つかりすると、傍の者に騙されるわね。それで、叔父さんが身内に騙されると、馬鹿を見るのはあたしたんだから、詰らないつたらありやしない」

「叔父さんはこれまで人に騙されたことあつて？　見た所、人に騙されさうな人とは思はれないわね」

「顔は頑固でも、お腹の中のタワイのない人もあるもんだよ。叔父さんは、あれで、あたしに秘密で自分の兄弟なんかに、有りもしないお金を貢いだりしてるのよ。……あんたはここへ來てから叔父さんにお金を貰つたことないだらうね」

「えゝ。……叔父さんからお金貰つたことは、滅多にないわね」

「滅多にと云つて、一度や二度秘密で貰つたことあるだらう」

「さうねえ」

「叔母さんには秘密にしろと云つてお金を呉れたんだらう」おすみはふといきり立つて、「何時貰つたの？　いくらばかり貰つたの？　隱立てしないで云つて御覽な」

たつ子は、叔母の權幕に呆氣に取られて、その險しい顔を凝つて見てゐた。そして、叔母がにじり寄つて問詰めると、なほ更白狀する氣になれなくなつた。叔父さんが自分のお金を私にやらうと云つて、私がそれを有難く頂戴しただけのことぢやないか。それがどうしていけないことなんだらうと、たつ子は合點が行かなかつた。預金帳が紛失したゝめに叔母は氣が變になつたのぢやないかとさへ疑はれだした。

「いやに強情だね、あんたは、どうしても云はないのかい。あんたは叔父さんの身内ぢやないぢやないか。あたしが連れて來て、都合によつたら養女にでもしようと思つてるのに、あたしの親切を有難いと思つてもゐないんだね。そんな人に、あたし家にゐて貰ひたかないよ」

さう云つたおすみは、力づくでゝもたつ子に白狀させようとするらしく、「さあお云ひよ」と、彼女の肩に手を掛けたが、すると、たつ子は邪慳にその手を拂退けて次の室へ立つて行つた。

「誰れがこんな家の養女になるものか」

たつ子は、憤然として心の中で叫んで、今日のうちに兩親の家へ歸つて行く決心をして、自分の所有品の整理に取掛つたが、叔母に後を追つて部屋を覗きに來もしなかつた。暫くして叔母の話聲が隣の家の庭先から聞えて來た。

「わたくしどもでも、若い者が夫婦づれで、昨日日光の方へ紅葉見物にまゐりました」と、隣りの老主婦が云つて、「老人はいつも留守番で詰りませんよ」と、言葉を足した。

「あたしども、年を取りますと、旅行もおつくうで御座いましてね。人に誘はれましても、いつも後退しますのですわ」

「奥さんは、お若いくせに、どうしてそんなことを仰有るんです？ わたくしどもでさへ、これから一生の見じまひに、日本中の名所古蹟を見物したいと思つてるんで御座いますわ。奥さんは、他に氣兼をなさる方がゐらつしやらないんですから、旅行でもお出來になれるぢやありませんか」

「わたくしも、若い時分には、隨分、名所古蹟の見物もいたしましたよ。年を取つてから旅行したくなつたのもそのせゐかも知れません。若い時分に上の空で旅行した時のことが思出されて、いやな氣持がするだらうと思はれますわ」

おすみは、ふと調子に乘つて、最初の夫に連れられて、見たことのある、京大阪の春景色の美しさを話しだした。すると、隣りの老主婦も、何年か前に身内の者と上方見物に行つた時の話をしだした。

たつ子は、無斷で兩親の家へ歸つて行くか行かぬかは未定がまゝにして、叔母が家の中にゐないのをいゝ機會に、音のしないやうに表へ出て行つた。風のない、埃の立たない、温かい、明るい街上へ出ると、どの方向へ足を運んでも、道は極樂の境地を差して續いてゐるやうだつた。

その時分に、叔父の彌平は、羅馬の公園を歩いてゐた。坂路を登ると心臟が苦しくなるのが氣になつたが、休息して、山上の秋景色を眺めてゐると、日頃鬱屈し勝ちであつた頭腦もすがすがしくなつた。其處の西洋旅館で入浴して食事をしたが、我

慢して酒は飲まなかつた。食堂で一しよになつた一組の遊覽客は、そこから湖水の方を廻るらしかつたので、彌平も、次手に、大地獄、姥子、權現樣、關所の跡など、名前だけは聞いてゐる名所を見たくないではなかつたが、大磯の西山へ寄る必要があつたので、ゆつくりしてゐられなかつた。

で、午食後、早速電車で山を下つた。山上の眺めばかりでなく、東京出立後、車窓から見る沿道の秋景色は、何處もみな美しかつたので、こんな美しい天地を他所にして、都會の風塵の中に老いたことを、彼れは遺憾に思つた。大磯で下車して西山の病氣保養所を訪ねて行く間にも、あたりの閑寂な別莊に羨ましさうな目を注いだ。

淋しい田舍生活をしてゐる西山夫妻は、突然の訪問客を喜んで迎へた。

「お一人で箱根へ? あなたにしてはお珍らしいですね」

「ちよつと山を覗いて來たゞけさ。今朝ゆつくり東京を立つて、箱根では飯を食つたゞけでお暇した次第なんだからね」

「どうしてさうお急ぎになるんです? たまには叔母さんをお連れになつて、ゆつくり湯治でもしてゐらつしやればいゝぢやありませんか」

「ところが、家の奴は湯治なんかに出掛けるやうな洒落つ氣は、微塵も持つてゐないんだ」

彌平は、病氣があつてもまだ若さが目顏に現はれてゐる西山を羨んで、自分の老衰を歎じた。そして、例の口癖の腦溢血談じを話して、

「私はね、腦溢血でぶつ倒れたら、醫者を呼ぶ必要はない、直ぐに猫入らずを飲ませてくれと、不斷、妻にさう云つてるんだよ」

「さういふ御覺悟には私も同感です」と、西山は笑ひ〳〵云つて、「しかし、猫入らずはいけませんよ」

「そりや、猫入らずに限つたことはないんだ。カルモチンでもたんでもいゝ。苦痛なしに死ねる藥があるとそれに越したことはないね」

「私もたび〳〵さういふ事は考へてゐたんで、醫者に相談したこともあるんですが、自殺用の藥は醫者も調合して呉れませんよ」

「僕なぞは、厭世自殺をしようとは思はない。丈夫で生きてら

れるものなら、百までゝも生きてゐたいと思つてるんが、半身不隨だの何だのと、不具になつて生きてゐたかないね」

「私も同感です。私は、この頃、獨逸のカイゼルの傳記を讀んできますが、あの世界大戰争の張本人のカイゼルのお祖父さんが、大變なやり手だつたのです。ビスマークやモルトケなんかを使つて、戰争を盛んにやつた人ですが、この人は、モルヒネか何か、自殺用の藥を肌身離さず、何時も持つてたさうですよ。捕虜になつたりなんか、生恥さらす氣遣ひのあつた時に、その藥を飲むつもりだつたのですね」

「西洋人でも、英雄はそんな覺悟を有つてるんだね。感心だ」

「ところが、その祖父さんは運がよくつて九十以上までも生のびて、そのために、息子は六十になつても王位に即けなくつて、鬱々として一生を送つたさうですよ」

「世間によくあることだ。親爺があんまり長生をするために、子供の事業の邪魔になることがあるものだ。だが、早死しても長生しても、子供があると心強いけれどね。僕なぞは死ねばそれつきりだ」

「子供があらうとなからうと、誰れだつて死ねばそれつきりですよ」

「それはさうだけどね。……どうも、僕のやうな人間でも、これつきりで死んじまふのかと思ふと、何だか殘念なんだよ。この頃をり／＼獨りで考へてゐたのだが、自分といふものゝ破片でも後世へ遺しとかなきや安心して死切れないやうに思はれだしたのさ」

「故郷の墓地に大きな石碑でもお建てになつちやどうです？この頃は田舍でゝも、立派な石碑を競争的に建てることが流行してるさうですよ。不景氣だの農村疲弊だのと云つても、葬式や結婚式にはなか／＼見榮を張るさうですね」

「いや、僕は虚榮心で云ふんぢやないよ。石碑のやうな者はどんなに小さくつてもいゝ。……僕はもつと有意味の物を後世に殘したいのだ」彌平は柄にない嚴かな口調で云つて、「實はそれについて今日君をお訪ねした譯なのさ」

「へえゝ。それは意外ですね」

「僕も多少の蓄財はして來たんだが、これを後へ殘したつて詰らないと思ふ。極く僅なものだが、それだつて、僕が長い間苦勞した結果だ。僕が死んだあとで、親類の誰れ彼れに勝手に消

費されることを思ふといゝ氣持はしないよ」
「ぢや、これから御自分で氣儘なことをたすつておつかひになつちやどうです？　どんなに澤山お溜めになつたか分りませんが、消費するとなると、いくらでも方法があると思はれますか……」
「そりや若い時分だつたらいくらでも使用法があるだらうが、この頃の僕のやうに肉體が衰へちや駄目さ。それで、僕は今のうちに、財産の一部を君にでも預けといて、僕の死後には、社會的に有益な事業に寄附して貰ひたいと思つてるんだ。これは一時の座興でないつていふ證據に、預金帳をここに持つて來てゐる」
彌平は、特別製のカクシから、帳面を出して、西山の前に置いた。が、西山はそれを手に取らうとはしなかつた。
「私にそんな者をお預けになつちや危險ですよ」
「いや、君に預けとけば、何處に置いとくよりも危險でないと思はれるよ」
「公共事業に寄附する意志を有つてらつしやるのなら、死後でなくつても、今御實行になつちやどうです？　その方が愉快ぢやありませんか」
西山は、彌平の精神狀態が訝しく思はれだして、笑ひ事と見做してはゐられたくなつた。手には取らなかつたが、目を留めると、預金帳には有名な大銀行の名が明らかに記されてあつた。
「僕もいろ〳〵考へたのだが、生きてるうちぢや差障りがあつていけない。君に委任狀を書いとくから、僕の死後によろしく取計らつて貰ひたいね。さうすれば、僕も安心していつでも死なれる」
「だつて、あなたと私と、どつちが早く死ぬるか分らないぢやありませんか」
「そこまで氣遣つてちや果てしがない」
「公共事業と云つて、何に寄附なさるおつもりなんです？」
「それは君に相談したいと思つて」
「第一、御家族の方は御同意なんですか」
西山は、彌平の妻を叔母さんとも、奧さんとも呼びたくなかつた。
「僕の御家族は、僕の他には家内だけぢやないか。僕の計畫を

打明ければ、無論贊成しないに極つてるよ」

　そんな話をしてゐる間に、西山の妻は、饗應の用意をした。有合せの手料理に過ぎなかつたが、彌平のために一本のお銚子を添へることを忘れなかつた。

「お口に合ふやうなもの、何にも御座いませんが」と、ちやぶ臺を二人の間に運ぶと、

「箱根で鱈腹食つて來たので、まだお腹は空きませんよ。それに、今日は酒は控へることにしませう。登山電車で山を下りる時分に、どうも脉が變だつた」と云つて、彌平は、自脉を取りながら、氣遣はしさうな表情をした。

「でも、お一つだけでも」と、妻君がお酌をしたので、彌平も、無下に辭退は出來なかつた。二三杯快く猪口を干して、

「私は、家内の姪によく云つてるんですよ。おれが腦溢血を起してぶつ倒れたら、醫者なんか呼ばなくつてもいゝ、直ぐに猫入らずを飲ませて呉れつてね」と、笑ひ〳〵、その覺悟話をした。

「猫入らずなら、私の家にもありますよ。この家は古いから、鼠が大變なんで、時々猫入らずの御厄介になるんです。自分の家の鼠だけはみんな取盡したつもりでも、隣近所の奴が續々やつて來るので、鼠の全滅はとても望めませんね。蠅もこの土地には年中ゐるんで、冬の間にでも蠅取紙の必要がありますよ」と、西山は、料理の臭氣に惹かれてちやぶ臺の上へ寄つて來た二三の蠅を拂ひながら、この頃或友人から寄贈された書物の中にあつた蠅の話をしだした。「考古學研究の青年が、伊太利を廻つて、やうやくポンペイの宿屋に落着くと、直ぐに蠅に苦しめられたのですが、その時から思つたさうです。自然界のうちで最も下劣な生物は蠅だ。サソリや蛇や、虎や獅子の害なんかは單純なもので、それは只人の身體に害を及ぼすだけで、これに對して防禦の法を講ずることも出來るが、蠅に對しては防禦の道がない。こやつは人間の精神的生活を攪亂して粉碎する。思索だの想像だのといふ高尚な力も、美しい感情もみんな打碎かれてしまふ、絶對惡が形態を取つて現はれたのは蠅だ。ギリシアの昔にも一種の蠅叩きのやうなものがあつたところから見ると、蠅の奴、エスキュラスの高尚な詩の思ひつきを亡ぼし、フイディアスの鑿を誤らせ、オリムピアの神々の頭の先から足の先までを徘徊つてたことが察せられる。さう考へて來ると、

人類のために奉仕した人々の功績は、一生の間に打殺した蠅の數によつて定めらるべきだ。……その青年がかう思つたと、西洋の小説に書いてあるんですが、私も、蠅についてはこの青年と同感です」

　西山の話を身を入れて聞きもしなかつた彌平は「蠅はどの國の蠅も煩いものだらうよ。支那でも、蒼蠅を憎むの賦といふ有名な文章が、八家文のなかに入つてゐる。……そりや、蠅や鼠は煩いものだが、かういふ空氣のいゝ土地で靜かに暮してゐられゝば仕合せだね」

「ぢや、此處へ小さい家でも新築して御隱退になつちやどうです？ 死んだ後で公共事業に寄附たんかするよりや、その預金額のお金で別莊を造つた方がいゝぢやありませんか」

「さういふことも思つて見たんだが、もう遲いよ。それに、家の奴が、田舍住ひに賛成するこつちやない」

「そりや、田舍住ひは健康にいゝと云つたところが、飽き〱しますからね」

「僕も今年一杯で閑散な身體になれるんだが、……」と、彌平は、かういふ閑靜な住所で讀書三昧で日を送してゐる西山を羨ましく思ひながら、うか〱と猪口を重ねた。

　西山は、聞き役の出來たのを幸ひにして、日頃讀耽つてゐる叢書の中にあつた話を頼りに持出して、得々と喋舌つた。

「ところで、その公共事業だが、僕は、孤兒院や養育院なんかへ寄附するよりは、故郷に、小くても圖書館といつたやうなものを建てた方がいゝと思ふね。小學校に附屬した小さな物でもいゝ。僕の名前を頭につけた記念物を殘したいと思つてゐる。僕の遺産を基本金として、縣の出身者から多少の寄附を求めることにしたらどうだらう？ 無論、君なぞは故郷の小學校の卒業生だから、應分の力を盡して呉れるだらうし」

「圖書館とは事が大きいですね。いくら小さいものにしても、千や二千ぢや出來ないでせう」

「出來る範圍でやつたらいゝぢやないか。それに有益な事業だから、村の有力者が心掛けてゐたら、年々擴張することも出來るだらう」

「この頃は田舍も疲弊してるさうですから、圖書館どころぢやないでせうね。……それに、田舍の者がヤクザな本を讀んだつて何の足しにもたりやしませんよ。私がさつきからお聞きした

の話だの何だの、あんなことをいくら知つたつて詰らないと同樣ですよ」

「いや、さうでない。僕なぞ、東京へ出てこれだけの人間になれたのも、子供の時分に本が好きで本を讀んでたお陰だ。……しかし、圖書館は不適當だとして、自分の死後の記念になる公益事業は、君は何がいゝと思ふ？」

彌平は、さつきから膝の側に置いてゐた預金帳をちやぶ臺の上に置いて、醉眼で見下した。それが何かの形を取つて、自分を後世に傳へるやうになるのだと思つてゐると、これだけは、おすみの手に任されないやうに思はれた。自分の名を冠する公益事業には何を選んだらよからうかと、教育事業、慈善事業、自傳の出版、……あるひは、失業者救濟會など、西山を相談相手に評議してゐると、彼れにも希望の光が前にきらめいてゐるやうだつた。

「何でもお好きなことをおやりなさい。だが、その預金帳は、大切にして持つてお歸りにならなきやいけませんよ」

「どうしても君に預つて貰へないかね。僕の家に置いとくと却つて不安なのさ。僕の死んだあとで、家内の身内に勝手にされちや殘念だ。僕の希望が貫徹されない譯だから」

「遺言狀にでもお書きになつといたらいゝでせう」

「そんなことも、遺族がどうするか分つたものぢやない。……、今からお願ひしとくが、君が僕の生前の意志を遺族に實行させるやうに勸告してくれたまへ」

「承知しました。しかし、あなたと私とどちらが先きに死ぬるか分りませんね」

「いや、僕の壽命が消えかゝつてることは確かだ。どうも、この脈が變だ。ひどく不揃ひなんだよ」

彌平は、自脈を診るとともに、時計を見て、歸宅を急ぐ氣になつた。西山夫妻の注意で、預金帳を元のカクシにしまつて、同じ事を繰返しながら暇を告げた。

西山は停車場まで見送つたが、當人が案じてゐるやうに、汽車の中で、卒倒しないだらうかと氣遣はれた。

「少し耄碌してるやうだが、あの家庭の事情から云つて、あゝいふ氣にもなるだらうね」と、家へ歸つてから妻に云つた。西山は、三度目の結婚をしたおすみに對して、何となく嫌惡を覺えて、平生あまり近寄らなかつたのであつた。

「あなたは大變なことをお頼まれなすつたわね」と、妻が冷かすやうに云つた。
「氣休めにあゝ云つたゞけさ。誰れが遺言なんかにかゝり合つて餘計な憎まれ役を買つて出るものか」
「第一あの預金帳にいくらお金が書込んであるのか知ら。あなたは御覽になればいゝのに」
「あんなもの見たかないよ。あの人が月給をみんな溜めたつて高が知れてらあ。それで圖書館を建てるなんて、少し意見が凄いね。好きなことをして費つちまつたらいゝだらうのに」
西山はさうは云つたものゝ、彌平老人の心根を一概に嗤へないやうな氣がした。
彌平は汽車の中では居眠りをした。東京に着くと、圓タクをおごつて家へ急いだ。彼れの家では、神經の疲勞しきつてゐたおすみが、晩餐も食はないで長火鉢の前に坐つてゐた。たつ子は、兩親の家へ行つたのか、映畫でも見に行つたのか、まだ歸つて來てゐなかつた。
「あゝ草臥れた」と云つて、彌平は格子戸を開けて入つたが、おすみは出迎へもしなかつた。

編輯だより

◇秋深く今年の豫算も去る十一日深更成立した。井上君の粘りの强いのは眼に立つたが、軍部の一騎打ちは敗戰だつた、敗戰であつたから濱口内閣の壽命が一年延びたことになる。

◇歳も暮れる。雜誌『改造』もここ僅かの日子で創刊十三の春を迎へることになる。來春からはウンと一奮發して、一層意義ある道程に立ちたいと思ふ。

◇十月號の『改造』は賓切の盛況。十一月號は河上肇氏の名著『第二貧乏物語』を附錄としたため、雜誌界、出版界は異常の驚異であつた。『第二貧乏物語』一冊でさへ壹圓の實價あるものを附錄まで併せての八拾錢は慥かに超犧牲的であつた。十二月號も創作倍大號として依然五十錢で發賣することにした。

◇本誌に執筆を依賴された或名士が、その執筆する主題の役所へ金を强請に行つたことを聞いた。實に何とも申樣のない不屆千萬な行爲である。以後重ねてこんなことがあつたら其結末を公開して本社の立場を明にしたいと思ふ。

◇「現代日本文學全集」を完璧となす爲め賀川豐彥集（死線を越えて三卷及その他）大佛次郞（赤穗浪士三卷全部、その他）新興藝術派文學集として池谷信三郞（望鄕）川端康成（伊豆の踊子）十一谷義三郞（唐人お吉）龍膽寺雄（放浪時代）氏等を加へ、更にプロレタリア文學集に林房雄、小林多喜二、武田麟太郞、藤澤桓夫、村山知義、中野重治、德永直、貴司山治、落谷三郞氏等を參加せしめ、隨筆文學集として新村出、柳田國男、吉村冬彥、齋藤茂吉氏を加ふることにした。とにかく今からこれだけの大全集を企てることは困難だらふ。

◇中條百合子女史が三年振りにモスコーから歸朝した。そしてその觀察談に「靑年の元氣があるのはロシアが一等だ」と。正月號には面白い隨想が發載される。

◇『新銳文學叢書』は今回第二次刊行をやつた。小林多喜二、片岡鐵兵、德永直、貴司山治、中野重治、橋本英吉、鹿地亘、林房雄、藤澤桓夫、林芙美子、龍膽寺雄、明石鉄也の十二人。

◇大佛次郞君快心の作「由比正雪」はこのごろの出版界で一ばん面白く讀まれた。數日前「中卷」も發賣されたが、正雪、智慧伊豆、武士と町奴、戀愛その他を觀察するに新たな時代觀が銳く見られる。何といつても大衆小說としての壓卷である。

◇全國經濟調査機關聯合會に依つて編纂され大藏、農林、鐵道、三菱、三井、古河、住友帝大、その他有力な二十余機關によつて、正確細緻に執筆された一最近日本經濟の十年一が我が社より發行される。本書は、過去十年間に於ける產業、金融、貿易經濟等に關する總而議の集積だ。刻下、經濟策を樹てる唯一の基礎であり、從つて將來の世界に處する無二の羅針盤でもある。

改造定價

冊數	壹冊	半ヶ年	壹ヶ年
定價	五拾錢	參圓	六圓
郵稅	參錢	郵稅不要	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和五年十一月十八日 印刷納本
昭和五年十二月一日 發行

（定價五拾錢）
（送料四錢）

編輯兼發行人兼印刷人 東京市芝區愛宕下町四ノ四〇 山本三生
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ四〇 改造社
振替東京 八四〇二一
電話芝(43)一一二一、一一二二、一一二三、一一二四

大衆要望の成果・現代社會の一大寶典

社會科學大辭典

暗迷の摸索より光明の科學へ!!

研究への最良の手引

社會科學辭典中で絶對的の價値を有し、その關係事項の範圍の廣汎、解說の詳細は現代の總ての事相を手に取るが如く指示す。本辭典なくして現代を正解するは至難であり、併せて現代に處する唯一無二の羅針盤である。宜なり各學校、會社、銀行、法曹家は云ふに及ばす、現代の社會學、政治、經濟、社會運動、社會思想に通曉せんと欲するものは擧つて本辭典を購求す。現代の趨勢に鑑み社會科學の百科辭典を座右に置くことの如何に依つてその成功の如何をトすべし。敢へて本辭典を江湖に推賞する所以也。

定價金拾五圓（送料四十五錢）

特價提供 **12圓**

特色

本辭典は凡百の社會諸科學の書に匹敵す、▽文章平明誰にも了解し易い。▽各項目には一々英、獨、佛等の原語を添へ必要に應じて希臘、羅典の原語を引用して淵源を剔抉し底理を剖析す。▽各項目毎に內外の參考書目を擧示し、讀者の便益を備ふ。▽各項目は、それ〴〵專門學者又は實際執掌者之に當り、且つ責任を明らかにして署名す。▽辭典の生命たる『索引』は、親切周到を極め、實際使用上の便益を圖る。

先づ實物で見て下さい

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

東京 秀英舍印刷

やる瀬ない淋しさと人懐しさとが、夕闇と共に心に忍び込んだ。

怒號と亂舞とは申し合はせたやうに、一瞬の時間に、全く、これは拍子木でも叩いたやうに合致して止んだ。

私も、彼等も、心をうなだれて、それ〴〵の臥所へと引つ込んで行つた。

それから一様に、長い夜をマドロスたちは「物思ひ」に沈まねばならなかつた。歡樂の後の哀愁どころの騒ぎでは無かつた。皆が皆自分で自分の痛い處を、いやと云ふ程打つつけたのだつた。

「物思ひ」に陷ると、マドロス達を一様に苦しめたのは、今の苦しさに較べて、それでは陸では樂であつたか、父母の下に充分に幸福であつたか、滿腹であつたか、と云ふ事實であつた。それは實際、飢餓の點から丈けならば、故郷では船でよりも粗惡で貧弱であつたのだ。

「だが、どうすることが出來よう。何もかもやつて見たんだ。ところが何もかも惡かつたんだ。これからだつて良くなると云ふ事はあるまい。段々年を老つて、體力が弱つて病氣が出ると云ふ丈けの事だ。どこもここもさうだ。一つの例外も俺は見はしなかつた。一つの航路が、いつも決り切つた港に行くやうに、俺たち下に沈んでゐる者には、穴が決つてゐるのだ。」

私は前航からのいろいろな事を思ひ出しながら、マストの中途でルックアウトに立つてゐた。

海は純粹に眞つ暗であつた。それは眼を瞑つてゐるのよりも、もつと眞つ暗闇であつた。追ひ越して行く船も、行き交ふ船も無かつた。押し割られた海が、兩サイドの二番ハッチ邊から、鈍く燐光を放つて流れ去つた。

私は自分の身の上を思はないやうに努めてゐた。それは爲し來つた事は、悉く恥づべき愚劣な行跡許りであつた。これからの事は？それは私の勇敢な友人たちのやうに、正義に燃え盡さうとするやうに、階級戰上に闘ひ續けてゐるのとは、餘りにも遠くかけ離れてゐた。私は、私の眼が近視眼であるやうに、私自身の屬する階級を見る目にも、近視がついて來つてゐるのだつた。

私はもう隨分前から私に對して、すつかり愛想を盡してゐた。私は「やり度い」ことを些しもやらない中に、「やつてはい

けない」と評判をやつてゐた。それが自分に對して癪に障る事であつた。

『なつちやいねえぞ！　手前は。』

と、失敗をやつた後で、きつと私は自分をとつちめたものだ。友人と知らない中に同じ敵娼を買つた翌日などは、ひどく私は憂鬱になつて、ペツ、と唾を吐いた。そして、その唾を吐いた口を、いつまでも帆布製の仕事着の袖で拭いた。血の出るまでも。

私はルツクアウトが嫌ひだ。いやに、沁んみりした隙が腹の中に出來るからだ。マドロスは批評家でも道學者でも無いのだ。だのに、フオアマストのルツクアウトには、理窟だの感傷だのが待ち構へてゐるのだ。

二點鐘が鳴つた。

私は、マドロスの私に歸つて、マストのタラツプを虫のやうに這つて降りた。

大部屋へ歸つて、次ワッチのセーラーを起した。一等セーラーで鼻の落ちた男だつた。

『代つてくれ。』

と、そいつは私に云つた。

『たのむ。俺も眠くて持たん。』

かゝり合つてるのがうるさいので、そのまゝ、私は巣箱の方へ行つて「寝てしまつた」ふりをして様子を見てると、朝鮮の道祖神見たいな一等セーラーは、水を一杯グッとあほつといて出かけて行つた。

セーラー部屋は監獄の雜居房に似てゐた。だが、それよりも側箱で二段ベツドになつてゐた。その上恐ろしく蒸し暑かつた。空氣は臭くて腐つてゐた。

その中に於ける眠りも「腐つた」やうな眠りであつた。それは翌日更に劇しい勞働に備へる爲の、自分の爲にだか何者の爲にだか、はつきりしない眠りであつた。それも、八時間打つ續けでは與へられてゐないのだつた。

十一時頃までは八釜しくて眠れはしない。十一時かつきりに夜食を食つて、一時まで眠つて、一時から二時までルツクアウトに上つて、二時から四時まで眠る。そんな風な睡眠が、私たちの眠りこけ得る處のものだつた。

それは假死の狀態に似た睡眠だつた。今、慌しい、慌たゞし

い符號に似てゐたものだ。

總て欠けてゐるものに對しては、人は一層それを切望するものであるが、睡眠の場合は飢や寒さと同じやうに、死が背後に迫つてゐるのである。負傷だの疾病だのが眠りの不足から起つて來る。中にも皮肉な病氣は「睡眠不足」と云ふ原因から、「不眠症」と云ふ病氣さへも引き起すのであつた。

不眠症は致命症であつた。それは巣箱に横になると眠れなくなつて、起き上つて働き始めると同時に「眠る」のであつた。それは一口に言へば、いつでも眠つてるのだし、いつでも起きてゐるのだつた。そんなべら棒な狀態で、いくら勞働者の頑丈な體だつて、持ち應へて行ける筈が無かつた。

いつでも結果は極り切つてゐた。一ケ月も不眠症の續く間に、どこかへ入港するとか、何かの變化があるかしないと、その患者はきつと變な事を仕出かすのであつた。

口論の揚句に毆り合ふので無く、毆る爲に喧嘩を吹つかけたり、全く口を利かなくなつたり、恨みも無い仲間を「人間違ひ」で斬りつけたり、上陸したまゝ歸つて來なかつたり、外國の監獄へ入つて終つたり、そんな風な形でこの病氣のけりがつくのだつた。

シンガポールに着いた。

そこでは、私はマレステレス（マレー・ストリート）へ行つて、餘り癇癪の起らないやうにするため、オールナイト遊んで來ようと考へてゐた。

それはよく道學者たちや、會社の上役達から非難される一つの事實であつた。だが、どんな鞭でも持つて來るがいい。それは私たちの體の中にあるんだ。それは百噸を支へるスプリングよりも強いのだ。それは抑へる丈け余計に抵抗を起すのだ。

さうだ。くどくどと愚痴を並べ立てるよりも、一つのエピソードを聞いて貰はう。

ある炭山で獨身のある坑夫が、妻のあるある小頭を殺してしまつた。それが法廷で云つたのには「あいつには女房がありました。だがわしには有りませんでした。あいつはその自分の女房の外に、撰鑛場の娘を手籠めにしようとしたんです。ところが、その娘は、えゝ、その娘は、詰りそのわしが、その、詰り惚れてゐた娘なんでがす。それでわしにやつつけたんです。へ

ろう」

「で、その方とその娘との間には、何か口約束でもあつたのか」

「へえ、何にも有りませんでがす。ええつと、その口を利いたこともありませんでした。へえ。」

「では、いきなり殺して終ふと云ふのは亂暴では無いか。無茶では無いか。」

「どうしてでございますか。旦那。一人の奴は二人も持たうとして居るのでがす。よござんすか旦那。一人の奴は何にも持つては居りませんでがす。」

それでその殺人囚が一人、立派に出來上つて終つたのであつた。

私はその眞理の遵奉者である坑夫のやうにはやらなかつた。

私は、港々でショートタイムを利用したのだつた。

ゴーシヨウは、早いとこやらないと取り殘される。ボーイ長の私は、誰か金の有りさうなセーラーにぶら下る必要があつた。

棧橋の向うには、シベリアまでも陸續きであるやうに、熱帶の蒼い森がブラシでもかけたやうに、スコールで洗はれて塵一つ無く續いて見えた。

おもてのライスコツクも上陸したい氣持は同じだつた。その結果は晝飯の時に同時に夕食も出來上つて終つたのだ。

私が晝食のお菜を取りに行くと、蠟燭のやうに青くてスベスベしたライスコツクが言つた。

『ボーイ長。このストーヴん中に夕飯のお菜が入つてるからな。三時までは出しちやいけねえぞ。三時になつたら出してやれ。ゴシヨウだからな。明日の朝は手前と機關部のボーイ長と二人で味噌汁を拵へて飯を炊いて食はせろよ。いいか。俺は九時頃で無いと歸れねえんだ。仕入れに行かなくつちやあならねえからな。その代り、すつかりうまくやつとけやあ、いいお土産を買つて來てやらあな。お女郎の鑵詰をな。いいか！ 分つたな。』

ライスコツクの野郎は、丸でシチョージでもあるやうな口振りで私に云ひ付けて置いて、船が棧橋に着くと同時に、飛び上つて行つて終つた。

このライスコツクは三十年も船に乘つてゐるのだつた。女房

には七人の子供があつたが、それは托兒所の光景に似てゐた。フランテンの英國のカーゴボートに乘つて、五年目に日本に歸つて見ると女房は子供を「新らしく」二人産んで置いて呉れた。

そのお禮に女房の尻を、釜の蓋で百程も毆つて、ケロリとして二三日、ドツク中丈け家庭氣分を味はつて、又、カルカツタ航路にライスコツクで乘り込んで來たのだつた。

可哀想な老マドロスであつた。仕方の無い事だ。

私は、一通りセーラーたちにおべつかを使つて見た。殊にボースンには最も力を盡してやつて見た。

私は雷の事について、もう一航海の間と云ふもの口喧嘩をし續けてゐたのだ。

『ボーイ長！　貴樣はどうしても雷は電氣だつて云ふんだな。』

『ボースン。それやそうですよ。どうしたつて雷あ電氣ですよ。』

『貴樣は俺よりも船に永く乘つて居た、とでも云ひ度いんだな。ぢやあ、貴樣は雷を拾つた事があるかい？　え、どうだボーイ長。拾つた事があるかつてんだ。でなけや證據を見せろ！　雷が電氣だなんて、チエツ！　なあんて貴樣あ、飛んでもねえ馬鹿な事を云ひ出したんだ。え、そもそもだ。いいか、ボーイ長、そもそもだよ。雷と云ふものは雷獸と云つてな、けだものなんだ。俺はそいつを三度捕らへたんだぞ。一度は餘りひどく落つこつたんで、氣を失つてゐやがつた。尻尾があるんだぞ。だが、毛は生へてゐないんだ。え、聞いてるか、分るか、豚の尻尾ほども毛は生へてゐないんだぞ。貴樣見たいな子供に分るかあ、どうも困つたもんだ。少しコーターマスターにでもいろいろ教へて貰へ。雷が電氣だなんて、手前は全く馬鹿だぞ。まあ、いくらお前が子供だつたにしても、考へても見ろよ。雷が電氣なら大變ぢや無いか。本船は雷を捕らへてることになるんだぞ。ぢれつてえボーイ長だなあ手前は。エンジン場へ行つて見て來い。外の處は兎に角として、一體尻尾どうして作らうつてんだ。ボケナス奴！　尻尾のついた獸を作る機械があつて堪るかい。』

背の低い、肩巾の廣い、赤いつや〳〵した顏を、もつと赤く光らせながら、ボースンは私を說き伏せにかゝるのであつた

『だつてボースン。雷は電氣ですよ。尻尾なんかありませんさ。先生がさう云つたんだもの。』

と、私は答へる。

『尻尾が無い！　尻尾が無いんだつて！』

ボースンは、自分の尻尾でも踏んづけられたやうに、眞つ赤になつて怒鳴り出すのである。

『この野郎！　尻つ尾のない雷なんて、そいつあ僞物だ。いいか、分らない野郎だなあ。雷に尻尾が無ければ、落つこつて來る筈が無いぢやないか。ボケナス奴！　よく考へても見ろ。尻つ尾があるからこそ落つこちるんだぞ。何故雷が落ちるかよく考へて見ろ。雷の尻尾にダニが食ひ込むんだ。尻つ尾の根元の方にな。そいつを取らうとして、雷は尻尾を追つかけるんだ。それを追つかけて雲を踏んづけてるから、雷は音がするんだ。そのうちに目が廻つて、踏み外して落つこつて來るんだ。ボケナス奴！　落つこつた雷の尻尾のつけ根に、ダニの食ひ込んでゐなかつたためしがあるか！　貴樣あ見たとでも云ふのか！　風呂の水を汲み込め！』

『だつて、雷はボースン。』

『風呂の水を汲むんだ！　ボケナスボーイ長奴。』

そんな調子で、ボースンと私との雷問答は終りを告げるのだつた。

で、一つ雷問答でボースンの御機嫌を取り結んでやらう、と私は考へた。

『ボースン。雷には矢つ張り尻尾があるやうに、私にも思はれ出しました。』

『さうれ見ろ。』

と、入れ代り立ち代り、月二割の利子のつく金を借りに來るセーラーに「頭」の有る無しに拘らず、十圓札一枚づゝ渡しながら、ボースンは云つた。

『今は忙しいから、出帆したら委しく教へてやる。ボーイ長。手紙が來てる。』

私は金の代りに手紙を受け取つた。

だが、船では、金と手紙とは同じほどの慰さめをマドロスに與へるものだ。

『隱したつて駄目だ。』

と云ふ書き出しで、その手紙は始まつてゐる。私のN市の好

人からのものだつた。私はフォックスルのオーニンの下で、眼を見張つて、體中で力みながら、不思議な事には舌なめずりして、字義通りに食ふやうに讀んだのである。

「隱したつて駄目だ。君は云ひ譯をし度く無かつたのだらう。云ひ譯や宣言やよりも、先づ結果を君は同志に見せよう、と云ふ膽なんだ。分つてる。それは君の性分なんだ。

だが君は先づ、君の生れた本國が現在どう云ふ狀態であるか、を書かう。これは君にとつては喜びであり又悲しみでもあるのだ。

その前に一言、君が浪の上に浮ぶ船の一室に、社會と隔離されて淋しく生活してるやうに、僕も八ケ月間、大地の上に浮ぶ煉瓦製の船、永久に入港することのない船、牢獄に棲つてゐた事を書き送らう。

だが、正直な處、僕は何處から先に書いていゝのか、途方に暮れて終ふ。すつかり君に知らせようとするには、百種類の新聞を送り、あらゆる新刊書を送つても、未だ決して充分では無いのだ。

兎に角、どんなに米が豐作でも大衆は飢ゑてゐるのだ。どんなに秋の空が晴れ渡つてゐても、大衆の心は暗いのだ。どんな風の日にでも暴風が吹いてゐるのだ。

君は、馬が組合旗を尻尾と一緒に振り廻しながら疾風の如く驅けた。と云ふ事實を想像する事が出來るか。

僕たちは、示威行列を作つて、出し拔けに工場から繰り出したのだ。五千の女工と七百の男工と、各地からの應援者。

先づ應援の者たちが先頭に立つた。僕も一度刑務所へ行つて來てから、大分落ちついて來たので、先頭の旗手から三列目に加はつた。工場の門を出て應援團に續いて來る鼓手の太鼓と、女工たちの物凄く湧き上る、勞働歌につれて、僕たちは醉つたやうな鼓舞された氣持で、小路から大通りへ出た。

大通りへ出ると、ワッショイ、ワッショイに移つた。その時分までは警戒が手薄だつた。××たちは、××××××××××××、眠りも營養も足りなかつたし、その上大分××××にも會つた揚句だつた。だから積極的に「××を上げよう」と云ふ氣にもなつてゐなかつた。幹部遣ひの××××××たちは、渡された地圖を見ながら、路次の奧に引つ込んで終つた。

デモが通り過ぎると、蟹のやうに這ひ出して來た。

××が文句を云ふと、「地理が解りませんので、地圖を見ながら警戒してゐました。何しろ生れて初めて來た處であります。」てなことですり拔けるのだつた。

僕がやられた時、スパイたちがこぼしてゐた。

「君たちは、わざ〳〵遠方から俺たちを毆るためや、蹴飛ばす爲に來たんぢやないか。それだのに署に連れて來ると、暴行だ、暴行だと云ふんだが、おとなしく引つ張つて來られる君たちぢやないぢやないか。見ろ、俺の足を。」さう云つて巡査は瘦せた足を出した。それは青く膨れ上つて、てつぺんに細長い切り口が赤く滲んでゐた。そして溜息を吐きながら云ふのだ。

「どつちがひどい目に會ふのか、分つたものぢや無い。俺たちは誰に訴へればいゝんだか。」

それで僕は云つてやつたんだ。

「それや君たちが、そんな××××××はうなんて思ふのが、大體の間違ひぢやないか。俺たちは、冤罪にかかつた死刑囚見たいなものだ。だから、最后まで鬪ふより方法があるまいぢやないか。第一、子供でもあつて見ろ！　君たちの子供は親の××を殺いられるぜ。」

「おい！　默れ。」とスパイたちは云ふのだ。内心の恐怖は痛い處に觸れると、沈默を强要するんだ。

僕たちのデモが三町位、無風狀態の中を進んだ時、騎馬巡査の一隊が現はれて、行列の先頭へ二列に、道一杯塞がつちやつた。

騎馬巡査の馬は、全くよく訓練されてゐるものだ。それは巡査自身と同じ程、訓練が屆いてゐるのだ。尻を引つぱたいた位では、全で感じないんだ。又はその乘手見たいに、感じないふりをしてゐるんだ。そして、小刻みに足踏みしながら、デモの先頭へ尻を押しつけて來やがるんだ。

「畜奴！　手前は犬になつたのか！」

と二列目の小柄な闘士が怒鳴つたのには、緊張した仲間たちも一度に笑ひだした。

「犬よりなほ惡いや、大馬鹿奴！」

なんだかんだと、皆は怒鳴り出した。

その中に、××をつけた××の乘つた、立派な馬が尻を突き

出して、デモの頭を押し初めた。乗つてる奴は、此を捻ぢ向けながら、何か大口を開いて喚いてゐたが、そんなものの聞える筈が無かつた。

と、その××の乗つてゐる馬が、何かまるで電氣に打たれたか、人間のするやうに、後足だけで急に眞つ直に突つ立つた。

警部は、デモの頭の足の下に、グタッと落つこつた。

それと同時に、馬は全速力で驅け出した。馬の尻には組合旗が××××××××××、尻尾と共に風に飜へつてゐるのだ。

どんな名馬だつてあれ程は速く走れないに決つてるよ。その路は三哩も一直線に走つてゐる、舗裝道路だつたが、尻に旗を飜した馬は見る間に小さくなつた。そして直ぐ見えなくなつてしまつた。

落つこつた××は、丸で×××やうだつた。××も××てゐたし、××も止まつたやうに見えた。

二三人の×××××が、××××に陥つた××を抱いて歩道へ消えた。外の騎馬巡査の二騎は、決死の勢で文字通りに驀進して行く組合旗の馬の後を追つかけた。

その他の騎馬巡査たちは、自分の乗つてゐる馬にも、尻の穴のある事に氣がついた。その上組合旗も、馬の尻の穴よりも数が多かつた。

で、馬の尻をデモの先頭へ押しつけるといふ冒險は止めて、行列の兩側に並んで一緒に行進を始めた。

この狀景を僕はどうして君に報告すればいいだらう。たとへ僕が、デモの三列目で無くて、デモの道筋の屋根の上から見てゐたとしても、その全部を一目に見渡すことは出來ないことなのだ。それは君が船の上から一度に海一杯を、見渡すことが出來ないのと同じ事だ。その點では人間の眼は、鮭の目よりも遙に不便に出來てゐる。

若し僕が竿の先に眼玉をつけて、振り廻すことが出來たとしたならば、その瞬間、どんなに多くの事が一度に起つてゐたかを、君に委しく知らせる事が出來るんだがなあ。

兎に角、そこで×××噴き出し始めたのだ。そこでは×××××××人間たちの間に、××××始めたのだ。何と云ふ事だ。（五十七字削除）そいつが、自分はどんな場所にゐるか、どんな階級に屬するか、と云ふ事を知らないなんて——のは、

人間だけの爲し得る馬鹿さ加減なのだ。

考へても見るがいい。一方は月給五十圓足らずで、女房と子供の三人もと一緒に食つて行かねばならない、×××××だ。も一つは掛札順に留置場に入つて、内外の聯絡を取つてゐる、たまに冷酒にありつく、たゞの×××だ。そいつ等は自分が何だつてことを、ただの一度でも考へて見たか。若し考へる能力があるならば、僕たちの前へ顔の出せる××があるか！ ××××だ！

その上、×見たいに×××ひ度がるのだ。

よし、それならば、僕たちはそいつ等を×並みに扱つてやらう。

一匹の××は摘んで捨てた。

僕等が三丁許り行くと、今度は金屬製の尻尾をブラ下げた、鍔のついた帽子！――何たる事だ。赤ん坊ではあるまいし――を被つた、プレッシングの機械が蚊柱のやうに、デモの中へと躍り込んで來た。

晩秋の日はもうすつかり暮れてゐた。

大通りから枝のやうに出た、どの小路の家々も、せち辛さに出窓を消した。

（六十五字削除）

頭と頭との部分では、（十五字削除）合羽と、上着と、鍔と、×と、×と、旗と、竿とが、龍巻きのやうに渦巻き昇つた。

市街の一方の大きな部分が喚き出した。その中から小さな悲鳴が叫んだ。

『合羽をかつぱらつてつちやいけない。』

『帽子を、この野郎、帽子を。』

『いたいつ、引つ張るない。ど、ど、ど、どこへやりやがつた。×をかつぱらつちや。』

『痛えつ、眼、眼、眼。』

××雨は風さへも交へて、益々劇しく、尻尾と云はず頭と云はず降り灑いだ。

それは眞實の暴風雨と全く同じであつた。バラ、バラ、バラ、ゴーッと、我武者らに襲つて來ると、ちよつと息をするのだ。

トラックは×と現場とを、時計の振子の樣に往復した。（三十四字削除）

だが、係り戰鬪的でないロボットは、抵抗の弱い方面に押せ

求めた。（百十三字削除）

何と、變な「××」も世の中にはあつたものだ。

そんなごつたがへしの×××の最中にも、大笑ひのエピソードもあるものだ。

×から檢束川×××××××××××トラックが、ブルルッと呻つて五六間も飛び出すと、いきなり「俺はいやだ！」とでも云ふやうに、トラックは仰向きに引つくりかへつてしまつた。

尻尾と一緒に猛者達は、すつかりそこら中へばら撒かれ、撥ね飛ばされた。

トラックの左の後輪が拔け出てしまつたのだつた。拔ける筈であつた。カップが除つてあつたからだ。

「爭議團の奴等がやりやがつたんだ」

と、×××で無くとも考へる處であつた。だが、それにしても、機微な處へ目をつけたものだ。そしてうまくやつたものであつた。いつ？　どこで？　それと云ふのは、もうそのトラックは半月も前から、爭議團員を檢束してゐたのだつた。

そして檢束して歸りで無くて、その行く道で引つくりかへろ？

その筈であつた。×××××××たちはその前の日、檢束者を投り込む時に、そのトラックの助手までも一緒に投り込んでしまつたのだつた。

ジャッキでシャフトを押し上げながら、助手は嬉しさうな微笑を浮べたものだ。

「知らない間は、誰をどこへ運ぶのも平氣だが、自分で一度行つて見ると、誰だつて連れて行き度くは無くなるさ」

と、十九才の助手は運轉手に云つて、頰つ邊を毆られた。

「馬鹿野郎！　シャフトでも折つて見ろ。大損害だぞ。飯の食ひ上りだぞ！　だが、×××××××××、あゝやつて大勢でやつてゐるんだと分ると、野菜や荷物を運ぶのたあ違ふて。いい氣持のもんぢや無いや。」

だが、もう警察の方で、そんな物騷なトラックは使はない事に決めたのだつた。

大分、長い手紙になつた。が、僕は未だ云ひ度い事は一口も云つてない氣持ちである。

云へないのだ。此處丈けでは無いのだ。何處でもなのだ。都

會でも農村でもだ。昨日もだ、明日もだ。

だが、いいか。これ丈けは云つて置かう。俺たちの力が××××のだ。これを腹に入れて置いて、君は君の職場で闘つてくれ。

そして、カルカツタ中が、水牛で一杯になつてしまつたと云ふ、印度の民衆の蜂起の詳細を知らせてくれ。

僕が社會にゐる時分に、君が日本へ歸つて來たら、下手な字では無く、僕の口から委しい話をしようと思ふ。

前に雜誌を一部送つて置いた。こいつの方が僕よりも上手に君に語るだらう。

健康に氣をつけてくれ。

手紙はそれで終つてゐた。

私は、その手紙の終りに來ると、手紙の始まりに續いてゐるやうに、續け様に四五回讀み返した。

『さうだ！　××××には尻尾がついてゐる。そして毛は生へてゐないんだ。』

と呟いた。



休みの日

正宗白鳥

おすみの三度目の夫であり、たつ子の義理の叔父である石塚彌平は、近年、どうかすると、かう云つてゐた。

「たつ公。おれが腦溢血を起してぶつ倒れたら、醫者を呼ぶ必要はない。直ぐに猫入らずを飲ませて呉れ。腦溢血で完全に死ねたらその上の事はないが、中途半端でよい〳〵にでもなつて生恥を曝らすやうなことは、眞平御免蒙むりたいんだ。おれがお前に頼むことはそれだけだよ」

それは、座興でもなく、一時の思ひ附でもなく、眞面目にさう思詰めてゐたのだが、おすみやたつ子は、無論笑つて聞流してゐた。腦溢血に罹るか、肺病に取附かれるか、自働車に轢かれるか、人間は何で生命を取られるか、先きのことは皆目分らないのに、自分で勝手に極めて取越苦勞をするのは馬鹿だと、傍から冷かしてゐた。しかし、彌平自身は、他の死病については何とも思つてゐないで、たゞ腦溢血のみを恐れてゐた。彼れの父親が半身不隨で數年間寢床に就きつきりだつたみじめな有樣が、歳の經つたこの頃になつて、却つて彼れ

の頭に鮮明に浮んで來るのであつた。若い時分ほど酒量は多くないにしても、晩酌を缺かすことのない彼れであつた。たとへ醫者に忠告されても、たつた一つの樂みである酒を絶つ氣にはなれなかつたが、妻のおすみも、夫に節酒を勸めようとはしなかつた。

「今年は紅葉を見に行かう」と、役所からの歸りに、停車場で目についた遊覽地の宣傳ビラに刺戟されて、晩餐の折にたびたび云つてゐたが、例年さう思ふばかりで決行したことのなかつた彼れも、ある日曜の朝、流し元で顔を洗ひながら、冴えた日を仰見るとゝもに、急に思立つて「おれはこれから箱根へ行つて來る」と、足許から鳥が立つたやうに騷いだ。旅仕度と云つても、平生の出勤仕度と異つたところはなかつたが、たゞ温い飯や味噌汁が間に合はなかつたので、冷飯の茶漬を搔込んだ。そして、有合せの金をみんなさらつて、旅費に當てることにして、氣輕に出掛けた。

「都合によつたら、歸りに大磯の西山の家へちよつと寄るかも知れないよ」

「氣をつけて行つてらつしやい」

おすみもたつ子も、土間へ下りて格子戸から顔を出して見送つた。

「いゝでせうね。こんないゝお天氣に箱根なんかへ遊びに行つたら」と、たつ子は羨ましさうに云つて、臺所へ戾つて、味噌汁の出來加減を見ながら「叔母さんは、箱根とか日光とか、有名な名所へ紅葉見にいらしつたことがあつて？」

「さうね。……紅葉の時分ぢやなかつたけれど、一度箱根から熱海の方へ湯治に行つたことはあつたよ」

おすみは、殆んど二十年も經つた昔のことを、珍らしく思出した。

「叔父さんと一しよ？」

「うゝん」おすみは口をねぢて云つて顰めた顔を振つた。

「あたしがこちらへ來てから、叔母さんは一度も旅行なすつたことないわね」

「叔父さんだつて、近年、旅行に出てたことないぢやないの。……今日はあの人、よつぽどどうかしてるんだよ」

「叔母さんだつて、たまには景色のいゝ土地へ遊びに行きたいと思ふでせう」

「行きたかないよ」
「でも、大抵の家ぢや、日曜や旗日には、奥さんや子供を連れて、何處か空氣のいゝ所へ遊びに行くんですつてね」
「世間ぢやそんなことが流行つてるんだらうけれど、あたしの家ぢや、そんな眞似はしてられやしないさ」
おすみは、若いたつ子が、近所の噂を聞くにつけても、新聞を讀むにつけても、どうかすると物見遊山に行きたいやうな口を利くのを不快に思つてゐた。相當な服裝をさせて、食ふ物もちやんと食はせてゐるのに、それ以上を望むのは贅澤な沙汰だと思つてゐた。たつ子に取つては、おすみは血筋のつながつた本當の叔母さんで、へそくりの餘程溜つてゐるらしいこの叔母さんを手頼つて御機嫌を取つて、忠實に家事の手助けもしたなら、實子のやうに可愛がつて貰へて、兄弟の多い貧しい自分の家にゐるよりは勝つてゐると、兩親に言聞かされて、養女といつた格で寄寓してゐるのであつたが、豫想したほどいゝことはなかつた。をり／＼は無給金のおさんどんと思はれるやうな不平も起つた。
平日には、朝飯を先きに濟まして、主人を送りだしてから、拭掃除に取掛るのだが、今日は、拭掃除の方を片付けて、家の中を奇麗にさせてから、落着いて女二人だけで朝の食卓に向つた。豆腐の味噌汁と佃煮との、極り切つた御馳走なのだが、箸と雜巾とで運動したお陰で、不斷よりは食がすゝんだ。
「叔父さんは箱根へ行つたつて面白かないだらうよ。いつもの日曜のやうに家で午睡した方が、結局氣樂で身體の保養にもなつてよかつたと後悔してるかも知れないよ。一人で山坂を上つたり下りたりして何が面白いことがあるものかね」おすみは箸を擱いて、小楊枝で蟲つ喰ひの揃ろい齒をほじくりながら、ふと感じたことを云つた。
「一人ぢや詰らないでせうね」と、たつ子はおとなしく受答へはしたものゝ、腹の中では、箱根行が羨ましくつてならなかつた。一人だつて二人だつて、三人連れだつて、何だつていゝ。山一面に紅葉がしてゐて鹿が鳴いてゐて、それに温泉が地の底から湧出てゐる土地へ旅行することが、面白くない筈はないと思はれてゐた。
「一人だつて二人だつて、あたし達三人連れで出掛けたつて、叔父さんは面白いと思やしないのさ」

「どうして？……叔母さんも箱根なんかへ行くよりは家で午睡した方がいゝと思つて？」

「あたし午睡は好きぢやないよ」

「あたしも。……」

「あんたは午睡は好きぢやなくつても、朝寢は嫌ひぢやなさゝうね」

　さう云ふおすみだつて、朝は敏活に目を醒ます方ぢやなくつて、夫に呼起されて、不承々々に寢床離れをする日が稀れではなかつた。成らうことなら、たつ子に朝の雜用をまかせて、自分はお膳立の出來たところへ、寢室からゆつくり、奥様然たる姿を現はしたいと、時々は大それた空想を描くこともあつた。

「あんたも若いうちに無性な癖をつけない方がいゝんだよ。あたしにも一ころ、箸より重い物は持たないで日を暮らした時代もあつたのだけど、そのむくいで、いゝ恥をして、おさんどん無しの貧乏世帶で、手足を擂古木にしなきやならない目に會つた譯なのさ」

「でも、あたしのお母さんは、叔母さんのことをしよつちゆう羨んでゝわ」

「お小使錢に不自由しないだけが羨ましいつて云ふんだらう。儉約してればこそ、今日に不自由しないのだけど、腰辨のお役人さんにいくらお金が殘るものかね」

「でも、少しづゝでも銀行に預けとくと、利息といふものがついて、知らん間に殖えるんでせう。いゝわねえ」

　たつ子は、二三日前に、叔母の不在中に、用箪笥にしまつてある預金帳を出して見たのであつた。叔母さんは、もう歳を取つてるし、四度目の結婚をする望みはないんだから、今度は御亭主に死なれても困らないやうに、せつせとお金を溜込んでるらしい。いくら溜つてるか知ら」と、兩親がかねて話してゐたのを耳に留めてゐたので、叔母がをり／＼預金帳を持つて銀行へ出掛けるのを見るたびに、好奇心をそゝられてゐた。しかし、叔母は用箪笥の鍵は、外出のたびに持つて出るので、たつ子は秘密で開けて見たくつても見られなかつたのだが、二三日前には、叔母の懇意な家の奇麗な娘さんが自働車に轢かれたといふ知らせに驚いて、用心の行屆いてゐる叔母も、その時ばかりは、鍵のことを忘れて見舞に出掛けた。で、たつ子は、この機會を外してはと、かねて知つてゐる引出しを開けて、恐る恐る

るいくつも預金帳を出して、全心をそれに注いだ。郵便貯金、月掛貯金帳、當座預金帳、定期預金證書など、彼女がかつて見たことのない印刷物であつた。何十圓、何百圓。千といふ文字も一つ二つは記されてゐて、たつ子の眼前にさんらんたる光を放つた。彼女は、泥棒じみた自分の態度を氣が咎めたので、慌てて帳面を元の所へ收めて引出に鍵を掛けたが、それからは、この小さな家が大變な金持の家であるやうに思はれだした。

たつ子が柄になく銀行預金の利息のことを訊くのを、おすみは變に思ひながらも、蓄財の話には興味を有つてゐる彼女のことだから、相手の質問に惑かされて、知つてゐる限りの利殖の方法などを喋り立てた。却つて聞く方で次第に欠伸を噛殺して辛抱しなければならなかつた。その話が一區切りついてから、たつ子は、叔母の命令で、夜具を物干臺へ運んだが、其處に立つてあたりを見てゐると、冴えた秋の日光が、騒々しい街上の物音にくだけてゐるやうだつた。紅葉の照つてゐる箱根の山はどちらの方角であらうかと、左右の空の果てを遠く見やつてゐたが、暫くして、ふと「たつちやん」と階下から呼掛けられた。不斷の叔母の聲とは思はれないほどに鋭々してゐるのを、たつ子は不思議に思ひながら、梯子段に驅下りて、叔母の前に立つたが、ちよつとの間にどんな變つた事が起つたのかと驚かれるほどに、叔母の顏色は土色をしてゐる。

「まあ、ここへお坐りよ。聞きたいことがあるんだから」と、震へ聲で云はれて、たつ子は譯の分らない恐怖を覺えて、さつきちやぶ臺の置かれてゐた所に叔母と向合つてちよこなんと坐つた。

「妙なこと聞くやうだけど、あの用箪笥に入れてあつた銀行の帳面を、あんたはどうもしないだらうね」

「いゝえ、あたしそんなもの知らないわ」

たつ子は從返すやうなつよい返事をしたが、心の動搖を押かくし得なかつた。おすみの鋭い目は、相手の身體の戰きを見のがさなかつた。

「帳面はみんな一しよに仕舞つといたのに、そのうちの一つだけがどうしても見つからないの。他所から泥棒が入つたのなら、皆んな持つて行くにちがひないよ」

「おや、家の中に泥棒がゐると、叔母さんは思つてるのかい」

「そんなこと思つてやしないよ。……だけど變だからね」

「叔父さんが持つて行きやしない？」

「何のために叔父さんが預金帳を旅行に持つて行くものですか。それに、今日は日曜で、銀行はお休みだから、お金を引出す譯に行かないぢやないか」

おすみは、さう云ひながら、ふと夫に對して疑ひを起した。たつ子がそんな大それたことをして平氣で家に落着いてゐる筈はないと、一時心が顚倒したために、無我無中でたつ子に疑ひを掛けたことを後悔した。

「他に相談相手がないからあんたに聞いて見たんだよ。氣を惡くしたいでね」

「でも、あたし吃驚してよ。どうしても見つからないの？ 外へまぎれ込んでるんぢやなくつて？ よく、搜して御覽なさいよ」

一時後見たい思ひをしたたつ子も、叔母の疑ひの晴れたのに安心するにつれて、叔母の慌て方を輕蔑するやうになつた。

「叔父さんが歸つてから聞いたら、在所が分るかも知れないよ」

「お金を有つてゐても心配ね」

何の氣なしのたつ子の言葉もおすみには皮肉に聞えた。

「僅かなものでも、生やさしい思ひして殘したんぢやないからね」

おすみは氣がふさいだ。預金高の最も多い通帳が見當らないのだが、それを、夫の彌平が、無斷で持つて出たのだとすると、この頃にない不安と憤りに臓腑が掻きむしられるやうだつた。そして、夫の歸りを夕方まで安閑と待つてゐられたかつたが、どうする譯にも行かなかつたので、苦しい心を紛らすために、たつ子に向つて、過去四十年の自分の身の上を、秩序もなく話しつゞけた。

「この叔父さんは、あたしが來るまでは、垢まみれの夜具に寢て、家の中は裝飾つけのないあばら屋のやうだつたのさ、何に使ふのか、贅澤もしないくせに、一厘の預金もなかつたのだよ。十年もの間、あたしは物見遊山は一度もしないで、叔父さんの世話をして來たんだから、叔父さんの身内の人に家の財産を目をつけられちや、あたし、承知出來ないよ。叔父さんは今年一杯お役所に勤めたら恩給がつくんだから、それから先きは樂隱居をするつもりなんだらうけど、あたしは、まだ身體が丈

夫だから、この先き何年生きてるか分りやしない。あたしが生きてる間不自由しないだけのことは、ちやんと用意して貰つとかなきや、今まで辛抱した埋合せがつかないだらう。叔父さんが大磯の西山を訪ねると云つたのは、何か譯があるんぢやないかと思はれるよ。たゞ箱根へ紅葉見物に行つたのぢやなくつて、親類の西山へ、自分の死んだあとの始末を相談に行つたのかも知れないよ。この頃腦溢血で死ぬることをいやに氣にしたから、萬一の用意に西山に後始末を賴みに行つたのかも知れないよ。あたしにだけ任せるのを不安心に思つたのかも知れないが、あたしは西山なんて人に差圖がましいことを云はれたかないの。たつちやんにはまだ分らないだらうけれど、夫の親類なんてものの些とも手賴りにならないつてことは、あたしは飽きるほど經驗してるんだからね。匹偶の生きてる間は兎に角、夫が亡くなつたが最後、親類からどんなに無慈悲に扱はれるかつてことを、あたしは、骨身に染みて覺えてるんだからね。その場になつて泣いたつて怒つたつて、後の祭でどうにもなるもんぢやない。だから、あたしは、今の叔父さんと一しよになつた時から、今度こそ馬鹿を見ないやうにと、獨りで魂を引緊めてかゝつたのさ。あんたも、お嫁に行くか、お婿さんを取るかどちらにしても、身が極つた時に、あたしの云つたことを思出して、平生そのつもりで身内の人と突合ふやうになさいよ。匹偶に死なれた後では、匹偶の兄弟でも叔父叔母でも、一夜の宿も氣持よく貸して呉れやしないよ。だから、昨日まで匹偶のお蔭で贅澤に暮らしたものも、今日は宿無しのみじめな境涯に落つちまふんさ」

かういふ話は、話す方では熱心を籠めても聞く方では、さして面白く思はれなかつた。

「でも、男でも女でも、結婚する時に、相手の人に死なれたあとのことを、第一に考へなきやならないの？」

たつ子は、叔母の忠告を輕蔑したい氣持になつてゐた。

「そんな馬鹿なことをと、あんたは思つてるんだらうね。……あたしのやうに、二度も匹偶に死別れると、結婚するたんびに、相手の男は、自分よりさきに死ぬるに極つてると思はれるのさ」

「でも、ここの叔父さんは未だなか〳〵死にさうぢやないわ。口さきで心細さうなことを云つてるけれど」

たつ子は、正午近くなつてゐる置時計を見て、

「叔父さんは、今時分箱根へ着いてるでせう。不斷心細さうなことを云つてる叔父さんだつて、山の景色を見たら急に元氣がつくに極つてるわ。あたし、叔父さんのニコ〳〵してる顔付が目に見えるやうだわ」

「あんたは叔父さん贔屓ね」

「贔屓つてことないけど、………叔父さんはいゝ人ぢやないの？」

「そりや、人はいゝさ。人がいゝから、浮つかりすると、傍の者に騙されるわね。それで、叔父さんが身内に騙されると、馬鹿を見るのはあたしたんだから、詰らないつたらありやしない」

「叔父さんはこれまで人に騙されたことあつて？　見た所、人に騙されさうな人とは思はれないわね」

「顔は頑固でも、お腹の中のタワイのない人もあるもんだよ。叔父さんは、あれで、あたしに秘密で自分の兄弟なんかに、有りもしないお金を貢いだりしてるのよ。……あんたはこゝへ來てから叔父さんにお金を貰つたことないだらうね」

「えゝ。………叔父さんからお金貰つたことは、滅多にないわね」

「滅多にと云つて、一度や二度秘密で貰つたことあるだらう」

「さうねえ」

「叔母さんには秘密にしろと云つてお金を呉れたんだらう」おすみはふといきり立つて、「何時貰つたの？　いくらばかり貰つたの？　隠立てしないで云つて御覧な」

たつ子は、叔母の權幕に呆氣に取られて、その險しい顔を默つて見てゐた。そして、叔母がにじり寄つて問詰めると、なほ更白状する氣になれなくなつた。叔父さんが自分のお金を私にやらうと云つて、私がそれを有難く頂戴しただけのことぢやないか。それがどうしていけないことなんだらうと、たつ子は合點が行かなかつた。預金帳が紛失したゝめに叔母は氣が變になつたのぢやないかとさへ疑はれだした。

「いやに剛情だね、あんたは、どうしても云はないのかい。あんたは叔父さんの身内ぢやないぢやないか。あたしが連れて來て、都合によつたら養女にでもしようと思つてるのに、あたしの親切を有難いと思つてもゐないんだね。そんな人に、あたし家にゐて貰ひたかないよ」

さう云つたおすみは、力づくでゝもたつ子に白狀させようとするらしく、「さあお云ひよ」と、彼女の肩に手を掛けたが、すると、たつ子は邪慳にその手を拂退けて次の室へ立つて行つた。

「誰れがこんな家の養女になるものか」

たつ子は、憤然として心の中で叫んで、今日のうちに兩親の家へ歸つて行く決心をして、自分の所有品の整理に取掛つたが、叔母は後を追つて部屋を覗きに來もしなかつた。暫くして叔母の話聲が隣りの家の庭先から聞えて來た。

「わたくしどもでも、若い者が夫婦づれで、昨日日光の方へ紅葉見物にまゐりました」と、隣りの老主婦が云つて、「老人はいつも留守番で詰りませんよ」と、言葉を足した。

「あたしども、年を取りますと、旅行もおつくうで御座いましてね。人に誘はれましても、いつも後退しますのですわ」

「奥さんは、お若いくせに、どうしてそんなことを仰有るんです？ わたくしどもでさへ、これから一生の見じまひに、日本中の名所古蹟を見物したいと思つてるんで御座いますわ。奥さんは、他に氣兼をなさる方がゐらつしやらないんですから、旅行でもお出來になれるぢやありませんか」

「わたくしも、若い時分には、隨分、名所古蹟の見物もいたしましたよ。年を取つてから旅行したくなつたのもそのせゐかも知れません。若い時分に上の空で旅行した時のことが思出されて、いやな氣持がするだらうと思はれますわ」

おすみは、ふと調子に乘つて、最初の夫に連れられて、見たことのある、京大阪の春景色の美しさを話しだした。すると、隣りの老主婦も、何年か前に身内の者と上方見物に行つた時の話をしだした。

たつ子は、無斷で兩親の家へ歸つて行くか行かぬかは未定がまゝにして、叔母が家の中にゐないのをいゝ機會に、音のしないやうに表へ出て行つた。風のない、埃の立たない、溫かい、明るい街上へ出ると、どの方向へ足を運んでも、道は極樂の境地を差して續いてゐるやうだつた。

その時分に、叔父の彌平は、强羅の公園を歩いてゐた。坂路を登ると心臟が苦しくなるのが氣になつたが、休息して、山上の秋景色を眺めてゐると、日頃鬱屈し勝ちであつた頭腦もすがすがしくなつた。其處の西洋旅館で入浴して食事をしたが、我

慢して酒は飲まなかつた。食堂で一しよになつた一組の遊覧客は、そこから湖水の方を廻るらしかつたので、彌平も、次手に、大地獄、姥子、權現様、關所の跡など、名前だけは聞いてゐる名所を見たくないではなかつたが、大磯の西山へ寄る必要があつたので、ゆつくりしてゐられなかつた。

で、午食後、早速電車で山を下つた。山上の眺めばかりでなく、東京出立後、車窓から見る沿道の秋景色は、何處もみな美しかつたので、こんな美しい天地を他所にして、都會の風塵の中に老いたことを、彼れは遺憾に思つた。大磯で下車して西山の病氣保養所を訪ねて行く間にも、あたりの閑寂な別莊に羨ましさうな目を注いだ。

淋しい田舍生活をしてゐる西山夫妻は、突然の訪問客を喜んで迎へた。

「お一人で箱根へ？　あなたにしてはお珍らしいですね」

「ちよつと山を覗いて來たゞけさ。今朝ゆつくり東京を立つて、箱根では飯を食つたゞけでお暇した次第なんだからね」

「どうしてさうお急ぎになるんです？　たまには叔母さんをお連れになつて、ゆつくり湯治でもしてゐらつしやればいゝおやありませんか」

「ところが、家の奴は湯治なんかに出掛けるやうな洒落つ氣は、微塵も持つてゐないんだ」

彌平は、病氣があつてもまだ若さが目顔に現はれてゐる西山を羨んで、自分の老衰を歎じた。そして、例の口癖の腦溢血談じを話して、

「私はね、腦溢血でぶつ倒れたら、醫者を呼ぶ必要はない、直ぐに猫入らずを飲ませてくれと、不斷、姪にさう云つてるんだよ」

「さういふ御覺悟には私も同感です」と、西山は笑ひ〳〵云つて、「しかし、猫入らずはいけませんよ」

「そりや、猫入らずに限つたことはないんだ。カルモチンでもなんでもいゝ。苦痛なしに死ねる藥があるとそれに越したことはないね」

「私もたび〳〵さういふ事は考へてゐたんで、醫者に相談したこともあるんですが、自殺用の藥は醫者も調合して呉れませんよ」

「僕なぞは、厭世自殺をしようとは思はない。丈夫で生きてら

れるものなら、百までゝも生きてゐたいと思つてるんが、半身不随だの何だのと、不具になつて生きてゐたかないね」

「私も同感です。私は、この頃、獨逸のカイゼルの傳記を讀んでますが、あの世界大戰爭の張本人のカイゼルのお祖父さんが、大變なやり手だつたのです。ビスマークやモルトケなんかを使つて、戰爭を盛んにやつた人ですが、この人は、モルヒネか何か、自殺用の藥を肌身離さず、何時も持つてたさうですよ。捕虜になつたりなんか、生恥さらす氣遣ひのあつた時に、その藥を飲むつもりだつたのですね」

「西洋人でも、英雄はそんな覺悟を有つてるんだね。感心だ」

「ところが、その御祖父さんは運がよくつて九十以上までも生のびて、そのために、息子は六十になつても王位に即けなくつて、鬱々として一生を送つたさうですよ」

「世間によくあることだ。親爺があんまり長生をするために、子供の事業の邪魔になることがあるものだ。だが、早死しても長生しても、子供があると心強いけれどね。僕なぞは死ねばそれつきりだ」

「子供があらうとなからうと、誰れだつて死ねばそれつきりですよ」

「それはさうだけどね。……どうも、僕のやうな人間でも、これつきりで死んじまふのかと思ふと、何だか殘念なんだよ。この頃をり〱獨りで考へてゐたのだが、自分といふものゝ破片でも後世へ遺しとかなきや安心して死切れないやうに思はれだしたのさ」

「故郷の墓地に大きな石碑でもお建てになつちやどうです？この頃は田舎でゝも、立派な石碑を競爭的に建てることが流行してるさうですよ。不景氣だの農村疲弊だのと云つても、葬式や結婚式にはなか〱見榮を張るさうですね」

「いや、僕は虚榮心で云ふんぢやないよ。石碑のやうな者はどんなに小さくつてもいゝ。……僕はもつと有意味の物を後世に殘したいのだ」彌平は柄にない嚴かな口調で云つて、「實はそれについて今日君をお訪ねした譯なのさ」

「へえゝ。それは意外ですね」

「僕も多少の蓄財はして來たんだが、これを後へ殘したつて詰らないと思ふ。極く僅なものだが、それだつて、僕が長い間苦勞した結果だ。僕が死んだあとで、親類の誰れ彼れに勝手に消

費されることを思ふといゝ氣持はしないよ」
「ぢや、これから御自分で氣儘なことをたすつておつかひになつちやどうです？　どんなに澤山お溜めになつたか分りませんが、消費するとなると、いくらでも方法があると思はれますが……」
「そりや若い時分だつたらいくらでも使用法があるだらうが、この頃の僕のやうに肉體が衰へちや駄目さ。それで、僕は今のうちに、財産の一部を君にでも預けといて、僕の死後には、社會的に有益な事業に寄附して貰ひたいと思つてるんだ。これは一時の座興でないつていふ證據に、預金帳をここに持つて來てゐる」
彌平は、特別製のカクシから、帳面を出して、西山の前に置いた。が、西山はそれを手に取らうとはしなかつた。
「私にそんな者をお預けになつちや危險ですよ」
「いや、君に預けとけば、何處に置いとくよりも危險でないと思はれるよ」
「公共事業に寄附する意志を有つてらつしやるのなら、死後でたくつても、今御實行になつちやどうです？　その方が愉快ぢやありませんか」
西山は、彌平の精神狀態が訝しく思はれだして、笑ひ事と見做してはゐられなくなつた。手には取らなかつたが、目を留めると、預金帳には有名な大銀行の名が明らかに記されてあつた。
「僕もいろ〳〵考へたのだが、生きてるうちぢや差障りがあつていけない。君に委任狀を書いとくから、僕の死後によろしく取計らつて貰ひたいね。さうすれば、僕も安心していつでも死なれる」
「だつて、あなたと私と、どつちが早く死ぬるか分らないぢやありませんか」
「そこまで氣遣つてちや果てしがない」
「公共事業と云つて、何に寄附なさるおつもりなんです？」
「それは君に相談したいと思つて」
「第一、御家族の方は御同意なんですか」
西山は、彌平の妻を叔母さんとも、奧さんとも呼びたくなかつた。
「僕の御家族は、僕の他には家内だけぢやないか。僕の計畫を

打明ければ、無論賛成しないに極つてるよ」

そんな話をしてゐる間に、西山の妻は、饗應の用意をした。有合せの手料理に過ぎなかつたが、彌平のために一本のお銚子を添へることを忘れなかつた。

「お口に合ふやうなもの、何にも御座いませんが」と、ちやぶ臺を二人の間に運ぶと、

「箱根で鱈腹食つて來たので、まだお腹は空きませんよ。それに、今日は酒は控えることにしませう。登山電車で山を下りる時分に、どうも脉が變だつた」と云つて、彌平は、自脉を取りながら、氣遣はしさうな表情をした。

「でも、お一つだけでも」と、妻君がお酌をしたので、彌平も、無下に辭退は出來なかつた。二三杯快く猪口を干して、

「私は、家内の姪によく云つてるんですよ。おれが腦溢血を起してぶつ倒れたら、醫者なんか呼ばなくつてもいゝ、直ぐに猫入らずを飲ませて與れつてね」と、笑ひ〱、その覺悟話をした。

「猫入らずなら、私の家にもありますよ。この家は古いから、鼠が大變なんで、時々猫入らずの御厄介になるんです。自分の家の鼠だけはみんな取盡したつもりでも、隣近所の奴が續々やつて來るので、鼠の全滅はとても望めませんね。蠅もこの土地には年中ゐるんで、冬の間にでも蠅取紙の必要がありますよ」と、西山は、料理の臭氣に惹かれてちやぶ臺の上へ寄つて來た二三の蠅を拂ひながら、この頃友人から寄贈されたる書物の中にあつた蠅の話をしだした。「考古學研究の青年が、伊太利を遍つて、やうやくポンペイの宿屋に落着くと、直ぐに蠅に苦しめられたのですが、その時から思つたさうです。自然界のうちで最も下劣な生物は蠅だ。サソリや蛇や、虎や獅子の害なんかは單純なもので、それは只人の身體に害を及ぼすだけで、これに對して防禦の法を講ずることも出來るが、蠅に對しては防禦の道がない。こやつは人間の精神的生活を攪亂して粉碎する。思索だの想像だのといふ高尚な力も、美しい感情もみんな打碎かれてしまふ。絶對惡が形態を取つて現はれたのは蠅だ。ギリシアの昔にも一種の蠅叩きのやうなものがあつたところから見ると、蠅の奴、エスキユラスの高尚な詩の思ひつきを亡ぼし、フイデイアスの鑿を暴らせ、オリムピアの神々の頭の先から足の先までを穢つたことが察せられる。さう考へて來ると、

人類のために奉仕した人々の功績は、一生の間に打殺した蠅の數によつて定めらるべきだ。……その青年がかう思つたと、西洋の小説に書いてあるんですが、私も、蠅についてはこの青年と同感です」

西山の話を身を入れて聞きもしなかつた彌平は「蠅はどの國の蠅も煩いものだらうよ。支那でも、蒼蠅を憎むの賦といふ有名な文章が、八家文のなかに入つてゐる。……そりや、蠅や鼠は煩いものだが、かういふ空氣のいゝ土地で靜かに暮してゐられゝば仕合せだね」

「ぢや、此處へ小さい家でも新築して御隱退になつちやどうです？ 死んだ後で公共事業に寄附たんかするよりや、その預金帳のお金で別莊を造つた方がいゝぢやありませんか」

「さういふことも思つて見たんだが、もう遲いよ。それに、家の奴が、田舍住ひに賛成するこつちやない」

「そりや、田舍住ひは健康にいゝと云つたところが、飽き／＼しますからね」

「僕も八年一杯で閑散な身體になれるんだが、……」と、彌平は、かういふ閑靜な住所で讀書三昧で日を過してゐる西山を羨ましく思ひながら、うか／＼と猪口を重ねた。

西山は、聞き役の出來たのを幸ひにして、日頃讀耽つてゐる雜書の中にあつた話を頼りに持出して、得々と喋舌つた。

「ところで、その公共事業だが、僕は、孤兒院や養育院なんかへ寄附するよりは、故鄕に、小くても圖書館といつたやうなものを建てた方がいゝと思ふね。小學校に附屬した小さな物でもいゝ。僕の名前を頭につけた記念物を殘したいと思つてる。僕の遺産を基本金として、鄕里の出身者から多少の寄附を求めることにしたらどうだらう？ 無論、君なぞは故鄕の小學校の卒業生だから、應分の力を盡して呉れるだらうし」

「圖書館とは事が大きいですね。いくら小さいものにしても、千や二千ぢや出來ないでせう」

「出來る範圍でやつたらいゝぢやないか。それに有益な事業だから、村の有力者が心掛けてゐたら、追々擴張することも出來るだらう」

「この頃は田舍も疲弊してるさうですから、圖書館どころぢやないでせうね。……それに、田舍の者がヤクザな本を讀んだつて何の足しにもなりやしませんよ。私がさつきからお話した蠅

の話だの何だの、あんなことをいくら知つたつて詰らないと同様ですよ」

「いや、さうでない。僕なぞ、東京へ出てこれだけの人間になれたのも、子供の時分に本が好きで本を讀んでたお蔭だ。……しかし、圖書館は不適當だとして、自分の死後の記念になる公益事業は、君は何がいゝと思ふ?」

彌平は、さつきから膝の側に置いてゐた預金帳をちやぶ臺の上に置いて、醉眼で見下した。それが何かの形を取つて、自分を後世に傳へるやうになるのだと思つてゐると、これだけは、おすみの手に任されないやうに思はれた。自分の名を冠する公益事業には何を選んだらよからうかと、教育事業、慈善事業、自傳の出版、……あるひは、失業者救濟會など、西山を相談相手に評議してゐると、彼れにも希望の光が前にきらめいてゐるやうだつた。

「何でもお好きなことをおやりなさい。だが、その預金帳は、大切にして持つてお歸りにならなきやいけませんよ」

「どうしても君に預つて貰へないかね。僕の家に置いとくと却つて不安なのさ。僕の死んだあとで、家内の身内に勝手にされちや殘念だ。僕の希望が貫徹されない譯だから」

「遺言狀にでもお書きになつといたらいゝでせう」

「そんなことも、遺族がどうするか分つたものぢやない。……、今からお願ひしとくが、君が僕の生前の意志を遺族に實行させるやうに勸告してくれたまへ」

「承知しました。しかし、あなたと私とどちらが先きに死ぬるか分りませんね」

「いや、僕の壽命が消えかゝつてることは確かだ。どうも、この脈が變だ。ひどく不揃ひなんだよ」

彌平は、自脈を診るとともに、時計を見て、歸宅を急ぐ氣になつた。西山夫妻の注意で、預金帳を元のカクシにしまつて、同じ事を繰返しながら暇を告げた。

西山は停車場まで見送つたが、當人が案じてゐるやうに、汽車の中で、卒倒しないだらうかと氣遣はれた。

「少し老耄してるやうだが、あの家庭の事情から云つて、あゝいふ氣にもなるだらうね」と、家へ歸つてから妻に云つた。西山は、三度目の結婚をしたおすみに對して、何となく嫌惡を覺えて、平生あまり近寄らなかつたのであつた。

「あなたは大變なことをお頼まれなすつたわねー」と、妻が冷かすやうに云つた。

「氣休めにあゝ云つたゞけさ。誰れが遺言なんかにかゝり合つて餘計な憎まれ役を買つて出るものか」

「第一あの預金帳にいくらお金が書込んであるのか知ら。あなたは御覧になればいゝのに」

「あんなもの見たかないよ。あの人が月給をみんな溜めたつて高が知れてらあ。それで圖書館を建てるなんて、少し量見が淒いね。好きなことをして費つちまつたらいゝだらうのに」

西山はさうは云つたものゝ、彌平老人の心根を一概に嗤へないやうな氣がした。

彌平は汽車の中では居眠りをした。東京に着くと、圓タクをおごつて家へ急いだ。彼れの家では、神經の疲勞しきつてゐたおすみが、晩餐も食はないで長火鉢の前に坐つてゐた。たつ子は、兩親の家へ行つたのか、映畫でも見に行つたのか、まだ歸つて來てゐなかつた。

「あゝ草臥れた」と云つて、彌平は格子戸を開けて入つたが、おすみは出迎へもしなかつた。

編輯だより

◇秋淸く今年の豫算も去る十一日深更成立した。井上君の粘りの强いのは眼に立つたが、軍部の一騎打ちは敗戰だつた、敗戰であつたから濱口內閣の壽命が一年延びたことになる。

◇歲も暮れる。雜誌『改造』もここ僅かの日子で創刊十三の春を迎へることになる。來春からはウンと一奮發して、一層意義ある道程に立ちたいと思ふ。

◇十月號の『改造』は寶切の盛況。十一月號は河上肇氏の名著『第二貧乏物語』を附錄としたため、雜誌界、出版界は異常の驚異であつた。『第二貧乏物語』一册でさへ壹圓の實價あるものを附錄まで併せての八拾錢は慥かに超犧牲的であつた。十二月號も創作倍大號として依然五十錢で發賣することにした。

◇本誌に執筆を依賴された或名士が、その執筆する主題の役所へ金を强請に行つたことを聞いた。實に何とも申樣のない不屆千萬な行爲である。以後重ねてこんなことがあつたら其結末を公開して本社の立場を明にしたいと思ふ。

◇「現代日本文學全集」を完璧となす爲め賀川豐彥集（死線を越えて三卷及その他）大佛次郞（赤穗浪士三卷全部、その他）新興藝術派文學集として池谷信三郞（望鄕）川端康成（伊豆の踊子）十一谷義三郞（唐人お吉）龍膽寺雄（放浪時代）氏等を加へ、更にプロレタリア文學集に林房雄、小林多喜二、武田麟太郞、藤澤桓夫、村山知義、中野重治、德永直、貴司山治、落谷三郞氏等を參加せしめ、隨筆文學集として新村出、柳田國男、吉村冬彥、齋藤茂吉氏を加ふることにした。とにかく今からこれだけの大全集を企てることは困難だらふ。

◇中條百合子女史が三年振りにモスコーから歸朝した。そしてその觀察談に「靑年の元氣があるのはロシアが一等だ」と。正月號には面白い隨想が登載される。

◇『新銳文學叢書』は今回第二次刊行をやつた。小林多喜二、片岡鐵兵、德永直、貴司山治、中野重治、橋本英吉、鹿地亘、林房雄、藤澤桓夫、林芙美子、龍膽寺雄、明石鉄也の十二人。

◇大佛次郞君快心の作「由比正雪」はこのごろの出版界で一ばん面白く讀まれた。數日前「中卷」も發賣されたが、正雪、智慧伊豆、武士と町奴、戀愛その他を觀察するに新たな時代觀が銳く見られる。何といつても大衆小說としての壓卷である。

◇全國經濟調査機關聯合會に依つて編纂され大藏、農林、鐵道、三菱、三井、古河、住友帝大、その他有力な二十余機關によつて、正確細緻に執筆された「最近日本經濟の十年」が我が社より發行される。本書は、過去十年間に於ける産業、金融、貿易經濟等に關する總知識の集積だ。刻下の經濟策を樹てる唯一の基礎であり、從つて將來の世界に處する無二の羅針盤でもある。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲爲替大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和五年十一月十八日　印刷納本
昭和五年十二月一日　發行

定價（五拾錢）
送料（四錢）

東京市芝區愛宕下町四ノ四〇
編輯兼發行人　山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷人

印刷所　秀英舍

發行所
東京芝區愛宕下町四ノ四〇
改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一二二一、一二二二、一二二三、一二二四

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

東京秀英舍印刷